儚き想い、されど永遠の想い

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僞き想い、されど永遠の想い

【Ｎコード】
Ｎ９８６０Ｒ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
ある人から話された大正のある恋の話。その結末は。大正を舞台にした若い二人の純愛を書いた作品です。

前奏曲その一

儚き想い、されど永遠の想い

前奏曲

その時僕は。ただ招かれただけだった。

招かれた場所は洋館だった。その街の海辺にはよくある、古い洋館だった。

その洋館は白い壁に黒い屋根、それに煙突がある。かなり古いらしく壁は今にもヒビが入りそうな感じだった。

窓も欧風でそこから見える海はどれだけ美しいだろうと思った。

柵には薔薇が絡まりそれが尚更欧風の雰囲気を醸し出していた。

その玄関くぐると左右対称の庭があった。緑の木々は奇麗に切り揃えられそこには黄色い、僕の知らない種類の花々があった。その黄色と緑の対比もまた僕の目と心にやけに印象に残った。

そうしたものを見ながら濃茶色のその扉を開けるとだ。若い紳士が出て来た。

ダークブルーのスーツにスカーレッドのネクタイ、この人も対比だった。黒髪を端整に後ろに撫で付けており彫刻を思わせる整った顔立ちをしている。

姿勢が立派だ。背筋が立っている。それが長身をさらに際立たせている。

その紳士はだ。僕の顔を見るとまず笑顔になった。モデルのそれを思わせる端整な笑顔だ。

その笑顔でだ。僕にこう言ってくれた。

「ようこそ」

「はい、遅れて申し訳ありません」

実はここに来るまでにいささか道に迷っていた。僕は方向音痴だ。車でここまで来たのだがそれでも迷ってしまったのだ。

それで謝罪した。だが紳士はその笑顔で僕にこう言ってくれた。
「いえ、時間通りです」
「そうであればいいのですが」
「はい。ですからご心配なく」
こう僕に言ってくれた。そしてだ。
僕を洋館の中に入れてくれた。その洋館の中は。
吹き抜けになっていて二階までよく見える。中に入るとすぐに螺旋状になっている茶色の木造の階段が見える。その階段もかなりの年季が感じられた。
床には絨毯がある。ビロードの、カーディナルレッドとパープル、それにマリンブルーの三色の絨毯だ。アラベスク模様になっている。
壁はダークブラウンで樫の木のそれだ。部屋の扉もだ。落ち着いた、イギリスというよりはドイツのそれに近いのではと思わせる内装だった。
その内装の屋敷の中を通りながら。僕はある部屋に案内された。
そこは応接間だった。ロココ調の見事なソファーが二つ、そしてその間には黒檀のテーブルが一つ。それが置かれていた。
その部屋に入るとだ。紳士は僕に話してくれた。
「それではです」
「はい、ここでですね」
「御茶でも飲みながら」
紳士は微笑んで僕にこう言ってきた。
「御話をしましょう」
「あのお話をですね」
「そうです。前に私がお話した」
「その一つの恋のお話ですが」
僕は紳士に対して言った。言いながらその勧められた席に座る。
紳士も僕に合わせて向かい側の席に座る。程なくして白いエプロンにカチューシャ、黒い服とスカートの若いメイドの人が来てだ。僕達に尋ねてきた。

「何にされますか？」
まずは僕に尋ねてきた。お客を立ててらしい。
「そうですね。それでは」
「はい」
「紅茶を御願いします」
僕はそれだと答えた。
「葉はお任せします。ロイヤルミルクティーを」
「ロイヤルですね」
「はい、それを御願いします」
ドイツ調の洋館でイギリスは少しないかな、と思った。だがそれでもだ。今はそのロイヤルミルクティーを飲みたい気持ちだった。だからそれにした。
メイドの娘はそれを聞いてだ。僕に笑顔で述べてくれた。
「畏まりました、それでは」
「はい、それでは」
僕の話はこれで終わった。そしてだった。
彼女はだ。次は紳士に顔を向けてだ。まずはこう呼んだのだった。
「では旦那様」
「はい」
紳士は使用人であろう彼女にもだ。礼儀正しく返していた。それが僕にはこの紳士は本当の意味で礼儀を知る人物だと思わせるのだった。
「僕も同じものを」
「ロイヤルミルクティーをですね」
「御願いします」
「畏まりました」
彼女は紳士にも笑顔で応えてだ。そうしてだった。
一礼してから退室して。すぐにそのロイヤルミルクティーを持って来てくれた。僕達はそれを飲みながらだ。あらためて話に入った。
「そのお話ですが」

「何時頃のお話ですか？」

その話のことは僕はまだ何も聞いていなかった。僕があるパーティーの場で今の恋人のことをいささか自慢げに話しているとだ。この紳士が来てだ。僕に挨拶してきたのだ。

前奏曲その二

聞いてみるとかなりの資産家らしい。この洋館に今は使用人達と共に住んでいるという。マンションを経営していて生活には困っていないという。その彼がだ。僕をこの洋館に案内してくれたのだ。

そしてその時にだ。僕に話してきたのだ。

「恋でしたら一つ知っています」

「どんなお話ですか？」

僕はだ。その時酒の力でだ。紳士の言葉に乗った。

「それで」

「御聞きになりたいですね」

「はい」

その通りだとだ。紳士に答えた。

「今僕は恋をしています」

「だからこそですか」

「恋そのものに興味を持っていますので」

いささか気取って言った。この時僕はフランスか何処かの詩人になったつもりだった。恋は人を詩人にするという言葉通りと言うべきか。

その気取りのままだ。紳士の話に乗った。そういうことだった。

「ですから」

「わかりました。それではです」

「はい、それでは」

「今度。私の家にいらして下さい」

こう僕に言ってきたのだった。

「その恋のことをお話させてもらいます」

「僕にですね」

「恋に興味がおありでしたら」

紳士はまた僕に言ってきた。

「知ってもらいたいお話ですので」
「だからですか」
「はい、だからです」
それでだというのだった。端整なその顔で。そこには邪なものは見られなかった。それで僕も頷いたのだった。
「では。今度の。日は」
「何時ですか、それは」
「日曜はどうでしょうか」
休みの日にだ。ゆっくりというのだった。
「その日で」
「わかりました」
僕は紳士の申し出にだ。素直に答えた。
そしてそのうえでだ。微笑んでこうも述べた。
「それではその時をです」
「その時をですか」
「楽しみにさせてもらいますので」
「はい。是非共」
紳士もだ。微笑で僕に応えてくれた。
そうしてだった。僕はその日曜日に紳士の屋敷に行くことになった。
そのことに素直に喜んでいるとだった。一人の淑女が僕のところに来てこう話してきた。
「これは凄いことになりましたね」
「凄いこととは？」
「あの方のお屋敷はです」
「この街にあるのですよね」
「はい、この街の。海の近くに」
そこにだというのだった。
「あるのですけれどそのお屋敷、洋館でして」
「洋館ですか」

「大正時代からある古いお屋敷なのです」
「大正からですか」
それを聞いてだ。僕はそこにある歴史に驚いた。大正といえば僕の祖父、もう亡くなったその人の生まれた頃だ。もうかなり昔のことだ。
昔どころではない。歴史になっている話だ。その頃の家だというのだ。僕はその歴史を感じながら淑女のその話を聞くのだった。
「それはまた」
「その頃から。立派な家でして」
「洋館だけではなくですね」
「はい、あの方の家、八条家ですが」
「ああ、あの」
八条家といえば僕も知っていた。かつての財閥であり今も世界的にその名を知られている一大グループだ。その家だったのだ。
「あの家の方だったのですね」
「そうです。マンションを経営しておられますが」
「そのマンションもですか」
「八条不動産という意味でして」
八条グループの中の一企業だ。八条グループはとにかく様々な企業の集合体なのだ。その規模はあの三菱にも勝るとさえ言われている。
「あの会社の重役なのです」
「そうだったのですか」
「はい、そういう方ですので」
「わかりました。そうした方でしたか」
「はい、よくお話をされるといいと思います」
「わかりました」
相手が誰かと言っても特に意識するつもりはないがそれでもだ。あの八条家、世界的なコンツェルンの経営一族の一人ということは意識せざるを得なかった。それでいささか緊張しながら洋館に入る

とだ。その紳士、八条氏は穏やかに笑って気さくに僕に話してきたのだった。

前奏曲その三

「それでなのですが」
「その恋のお話ですか」
「はい、そうです」
まずはこうだ。穏やかに笑って僕に話してきた。
「長くなりますが宜しいでしょうか」
「はい、是非共」
僕もだ。その穏やかな笑みに気持ちをほぐされてだ。明るく返した。
「御話下さい」
「わかりました。ですがその前に」
「その前に？」
「まずは紅茶を一杯飲みましょう」
こうだ。最初に紅茶だというのだ。
「そうしてから。お話を」
「紅茶をですか」
「ゆっくりと。落ち着いてとのことなので」
先程の僕の言葉を受けてのことだった。
「ですから」
「そうですね。それでは」
そしてだった。僕も笑顔で八条氏の言葉を受けた。そうしてだった。
僕達はまず紅茶を飲んだ。その時にだ。また八条氏が僕に言ってきた。
紅茶を飲みながらだ。こう僕に言うのだった。
「私の名前ですが」
「八条さんですね」
「そうです。下の名前ですが」

その名前はだ。何というかとだ。自分から話してきたのだった。
「義長といいます」
「義長さんですか」
「はい、そういいます」
下の名前をだ。僕に話したのだった。
「御存知頂ければです」
「わかりました。八条義長さんですね」
「はい」
あらためてだ。僕に対して言ってくれた。
「それで貴方のお名前は」
「はい、僕の名前ですね」
「宜しければ教えて頂けますか」
「わかりました。それでは」
僕もだ。八条氏に自分の名前を話した。当然下の名前もだ。そしてその仕事のことも話した。少なくとも人に話せない仕事ではないつもりだ。
そこまで話してからだ。僕達はお茶を楽しみながらまずは世間話等をした。話してみるとだ。八条氏の穏やかで気さくな人柄と深い教養、それに確かな洞察がわかった。立派な人であることは間違いない。
そうしたことがわかってきた頃にだ。お互い一杯目のお茶が終わったのだった。
それを見てだ。八条氏がテーブルの上にあった鈴を鳴らした。するとだ。
あのメイドさんが来てだ。僕達に尋ねてきた。
「御茶ですね」
「はい、御願いします」
八条氏がその笑顔でメイドさんに告げた。
「私は同じものを」
「わかりました。ではお客様は」

「僕もです」
こうメイドさんに答えた。
「同じロイヤルミルクティーを」
「わかりました。それでは」
「それとです」
ここで八条氏はメイドさんにさらに言った。
「お菓子はありますか」
「何が宜しいでしょうか」
「そうですね。今は」
八条氏は少し考えてからだ。このお菓子を言葉に出した。
「ケーキを」
「ケーキですか」
「チーズケーキがいいですね」
ケーキとしてはオーソドックスなものの一つだ。あの狐色の外側もいい。
「それを御願いします」
「わかりました」
「貴方はどうされますか？」
八条氏はメイドさんにチーズケーキも頼んでから。僕に顔を向けて尋ねてきた。
「お菓子はいりますか？いるとしたら何を」
「そうですね。僕は」
少し考えてからだ。これにした。
「さくらんぼのケーキを」
「それをですか」
「はい、それを御願いします」
僕はそれを頼んだ。そうしてだった。
そのうえでだ。僕達はそれぞれのケーキを食べながらだ。本題に入った。
八条氏はだ。こう僕に言ってきた。

「さて、それではです」
「そのお話ですね」
「大正時代の頃です」
時代はその時だというのだ。
「その頃の日本は」
「大正デモクラシーでしたね」
「第一次世界大戦に勝ち経済も上向いてきていました」
日露戦争と日韓併合による経済的、財政的な危機が何とか収まってだ。そうなってきたのだ。
「そのことは御存知ですね」
「そうした時代のことですね」
「そうです。あれは」
ここから話がはじまった。その恋の話のことが。

前奏曲　　完

２０１１・２・１２

第一話　舞踏会にてその一

第一話　舞踏会にて

華やかな、鹿鳴館を思わせる場所だった。
舞踏の場はシャングリラで眩く照らされそこに華やかに着飾った紳士と淑女達が集っている。その中でだ。
タキシードの紳士達がだ。赤や白の絹のドレスの淑女達に話している。丸いそれぞれのテーブルには白いテーブルかけがかけられている。
そしてそのテーブルの上にだ。ワインや欧州のご馳走が並べられている。その中でだ。彼等は話をしていた。
「ようやく戦争も終わりましたし」
「欧州は大変だったそうですね」
「独逸はもう立ち直れないかと」
敗戦国の話がまず為されていた。
「そして墺太利は解体されるとか」
「あの帝国がですか」
「解体されるというのですか」
「まず洪牙利がです」
まずはこの国だった。
「完全に独立するとか」
「ううむ、まずはあの国がですか」
「墺太利と分かれますか」
「そして他の国もですね」
「墺太利から分かれる」
「そうなっていきますか」
「あの国の皇室もどうなるのか」
ハプスブルク家だ。言わずとしれた欧州きっての名門である。
その名門もだ。どうなるかというのである。

「存続できるでしょうか」
「先帝が崩御して間もないですが」
「まさかロマノフの様になるとか」
「いや、それはないでしょう」
「流石に」
多くの者がだ。それは何とか否定した。否定したかったと言うべきか。
「何でも廃され皇室は殺されたとか」
「あの革命を言う者達にですか」
「赤軍に」
次第にだ。話し合うその声が不穏なものになってきていた。
「あの者達は革命の為には手段を選ばないとか」
「誰であろうと粛清するとか」
「とんでもない奴等だそうですね」
「そんな連中がロシアを牛耳れば」
どうなるか。彼等は危惧を覚えながら話していく。
「革命が我が国にも来る」
「共産主義者ですか」
「あの者達が我が国にも来て」
「多くの者を粛清し」
「そして」
ここからはだった。彼等が最も恐れることだった。
「陛下をも」
「いや、まさかそれは」
「それはないでしょう」
「幾ら何でも」
多くの者がそれは何とか否定しようとした。しかしだ。
一人がだ。現実を話すのだった。
「しかしロマノフ家はです」
「殺された」

「だからですか」
「我が国でも」
まだロマノフ家のことが話される。
「それは起こり得ると」
「そうなりますか」
「まさかとは思いますが」
「警戒が必要ですな」
誰かが言った。
「共産主義には」
「確かに。我が国に入れてはなりません」
「あの思想はです」
「絶対に」
こんな話が為されていた。華やかな舞踏の場にもだ。そうした政治の話が為されていた。かと思えばであった。
「今日も来られてますね」
「はい、あの方が」
「今日も」
少女達がだ。憧れの目で一点を見ていた。
「まことにお麗しい」
「何とお綺麗なのでしょう」
「声をかけたいですけれど」
「それは」
躊躇われるという彼女達だった。
「はしたないですよね」
「ええ、そうですわね」
「それは」
恥じらいであった。この頃はまだそれが強かった頃なのだ。

第一話　舞踏会にてその二

それで彼女達はだ。躊躇っていた。その視線に先にいるのだ。一人の青年だった。黒い髪を流麗に分けている。その髪は眩く輝いている。

黒いタキシードに包んだその身体は高くすらりとしている。まるで乗馬選手の様にだ。足も長く端整な姿である。

顔は睫が長く眉は黒く細い。そして二重の切れ長の目は黒く明るい光を放っている。白い顔をしており鼻は高く細い。唇は小さく赤い。

その彼を見てだ。少女達は話していたのだ。

その彼女達を見てだ。彼の周りにいる青年達が面白そうに彼に言った。

「見給え、また君を見ているぞ」

「そして君の話をしている」

「今日もな」

「そうなのか」

だが彼はだ。素っ気無い調子で彼等に言葉を返した。やはり背が高くだ。彼等から頭半分程高い。だからこそ余計に目立つものがあった。

「僕を見て何になるのだろう」

「いや、その姿なら見るだろう」

「誰もがな」

「少女ならばね」

彼等は楽しげに笑って彼にこう言った。

「何故なら少女は夢見るものだからね」

「その夢を君に見ているのさ」

「そうしているんだよ」

「夢か」

夢と聞いてだ。彼はまた言った。
「夢とはいっても」
「とはいっても？」
「どうだというんだい？」
「いや、それは誰にもあるものじゃないかな」
微笑んでだ。こう周囲に話すのだった。
「誰にもね」
「というと君もか」
「君もかい」
「うん、僕もね」
他ならぬ彼もだ。そうだというのである。
「あるものだと思うよ」
「じゃあ君の夢は何かな」
一人がだ。笑顔で彼に問うてきた。
「一体何だというんだい？」
「そうだね。その夢は何か」
「それが問題だね」
「八条財閥の三男」
彼自身についても話される。
「八条義正君の夢は何か」
「それは何かな」
「そうだね。夢と言われるとね」
その彼、八条義正はだ。友人達の言葉にまずは微笑みになってだ。
そしてそのうえでだ。こう彼等に述べた。
「この前小説を読んだけれどね」
「小説？」
「小説をかい」
「そう。恋愛小説をね」
こう話すのだった。
「物凄く。純粋で熱い恋愛の小説を読んだんだ」

「じゃあ君もそういう愛をしたい」
「そうしたんだ」
「それが君の夢なんだね」
「強いて言うならそうかな」
義正は微笑んで話した。
「僕もそんな恋愛をしたいね」
「浪漫だね」
友人の一人がまた言った。
「つまり君の夢は。浪漫だね」
「そうなるかな」
笑顔でだ。彼もその友人の言葉に応えた。
「結局ね。僕はそれを夢見ているんだろうね」
「浪漫ねえ」
「純愛をかい」
「それが望みなんだ」
「こんなことを言うとキザかな」
義正は苦笑いになってだ。こんなことも言った。

第一話　舞踏会にてその三

「それとも。世間知らずかな」
「ううん、どうかな」
「誰でも恋愛には憧れがあるしね」
「それを考えたらね」
「別にいいんじゃないかい？」
友人達はだ。彼のその言葉を受け入れてだ。よしとして話すのだった。
「ここで階級だの庶民の生活だのという人間が最近いるけれどね」
「共産主義だったか？」
「そうそう、プロレタリアがどうとかね」
「そういう人間が最近増えているね」
周囲のロシア革命への話がだ。ここでも出た。
現に日本でもだ。その共産主義について話されだしていた。それは徐々にであるが不穏な空気をだ。日本に形作っていたのである。
彼等はそれを冗談めかして話す。そうしてだった。
「どうもそれを福音みたいに言う人間がいるけれど」
「けれど恋愛もいいじゃないか」
「そうだよ。誰かを愛するというのはね」
「いいことだよ」
こう言って彼の考えを認め受け入れた。そしてだ。
そのうえでだ。義正を見てだった。また話した。
「ただ君はこれまではどうだったんだい？」
「恋愛をしたことはあるかい？」
「それはあるかい？」
「どうなんだい？」
「それがないんだよ」
ここではだった。義正は苦笑いになってだ。こう友人達に話した。

「そういうのはね」
「ないのかい」
「そういうことはないのかい」
「恋愛の経験はまだだったんだね」
「じゃあ初恋も」
「勿論ないよ」
また苦笑いで述べた彼だった。
「恋とはどんなものなのか」
「どうかこの僕に教えて欲しい」
また別の友人がだ。こんなことを言った。
「それだね」
「ああ、モーツァルトか」
「あの音楽家の歌だね」
「そうだね。モーツァルトだね」
義正もくすりと笑ってだ。彼等のそのジョークに応えた。
「フィガロの結婚だったかな」
「確かそれだったね」
「あのオペラだったね」
「あの」
こうだ。話していくのだった。
「いいオペラだって・j評判だね」
「まだ聴いたことはないけれど」
「レコードであったと思うよ」
「けれど舞台はまだなんだな」
オペラは舞台である。日本に入りはじめていた頃だ。だがその本場のオペラはだ。まだ殆どの者が観たことのない時代であった。
それで今一つはっきりとしない話になっていた。だがその中でだ。
義正はだ。またこう言うのであった。
「誰か。いい人がいれば」
「君はその恋に入られる」

「恋愛小説にあるような恋愛に」
「その君の夢に入られるんだね」
「そうだね。ただ僕は光源氏じゃないから」
日本の古典である。あまりにも有名な。
「あんな風にはね」
「美女をとっかえひっかえはかい」
「それはないんだね」
「どうも。ああいうのはね」
また苦笑いになってだ。光源氏について述べるのだった。
「なれそうもないね」
「まあお妾さんを大勢持っている人はいるけれどね」
「それも結構ね」
「あの伊藤公爵なんて」
伊藤博文のことである。

第一話　舞踏会にてその四

「凄かったらしいからね」
「ああ、あの人はね」
「まさに英雄色を好むで」
「派手だったからね」
「よく聞いてるよ」
彼等は笑いながら話していく。実際に伊藤博文は艶福家としても有名であった。
「常に女性をはべらしていたとか」
「夜になるとだったね」
「一度に二人を愛手にすることもざらだったとか」
「いやいや、男はそうなりたいかな？」
「ははは、そうだね」
「確かにね」
彼等は冗談めかして話していく。そしてだ。
その中でだ。義正はこう話すのだった。
「伊藤公爵のその話には」
「興味がないかい？」
「そうだっていうのかい？」
「うん、人の女性関係にはね」
そのこと自体がだというのだ。
「興味がないんだよね」
「そうなのか」
「まあ公爵は確かに女好きだったけれど節度はあったしね」
「それはね」
有力者の愛妾と思われる相手には手を出さない、そして芸者を相手にするのが常だった。女性関係は派手でも女性問題は避けていたのだ。

「その辺りはしっかりしていたからね」
「そうしたところは凄いけれどね」
「流石というべきか」
「けれど君はそうしたことにも」
「うん、興味がないんだ」
また言う彼だった。
「恋愛は節度があればいいと思うしね」
「節度のある恋愛だね」
「道ならぬ恋ではなく」
「あくまで純粋な、っていうのかい」
「君の望む恋愛は」
「そうなんだ。そうした相手が欲しいんだ」
言葉がだ。切実なものになっていた。
「僕はそうなんだ」
「真面目だね」
友人の一人が笑いながらこう述べた。
「君らしいよ」
「僕らしいかい」
「恋愛にも真面目なところがね。君らしいね」
「ううん、そうなのかな」
「そうだよ。けれどそれがいいよ」
「いいんだね、それで」
「何ごとにも節度があるのはいいことだよ」
だからだというのである。
「君らしくもあり。いいことだよ」
「じゃあ僕はこのまま」
「間違ってもおかしな相手には惚れないでくれよ」
このことが釘を刺されるのだった。
「世の中そうした相手もいるからね」
「だからだね」

「そう。道ならぬ恋も」
それも駄目だというのだ。
「それも駄目だからね」
「それもわかっているよ」
義正はそのことにだ。真面目な顔で答えた。それは友人達だけでなく自分自身にもだ。そのことを言い聞かせているのであった。
そうしてだ。彼は言っていく。
「ではね」
「うん、それではだね」
「いい恋愛をしてくれよ」
「君の夢を適えるんだ」
「そうしてくれよ」
「わかってるよ」
笑顔で応える。彼は今はそうしていた。その日はそれで終わりであった。
そして数日後またパーティーが開かれた。場所は同じであった。その場に入る時にだ。彼はこう執事に言われた。若い、代々彼の家に仕えている家の者だ。幼い頃からの知り合いであり彼より一つ年少の執事である。

第一話　舞踏会にてその五

その彼がだ。こう義正に言ってきたのだ。
「今日は少し御気をつけ下さい」
「気をつけるとは？」
「白杜家の方々も来ていますので」
こう彼に言うのであった。
「ですから」
「白杜家もかい」
「はい、そうです」
執事は端整な声でまた彼に話した。見れば彼も黒髪で長身である。顔は主よりもいささか年長に見える。その黒髪を丁寧に後ろに撫でつけ流麗な切れのある細い目をしている。
「あの方々がです」
「そうなのか」
それを聞いてだ。義正は顔を曇らせた。そのうえでの言葉だった。
「あの家とはまた対立したからね」
「台湾の工場の件で」
「砂糖工場だったね、確か」
「はい、そうです」
この時代台湾は日本領であった。日本は台湾に対してかなりの投資をしていた。産業も育成しており砂糖工場もその一環であったのだ。
「それの受注競争で我が家が勝ちました」
「それに対して白杜家は敗れた」
「その遺恨がありますので」
「わかったよ」
義正もだ。困った顔になっている。
「それではね」

「我が家かあちらが主宰の宴なら呼ばれなかったのですが」
「今回は知事閣下が主催だから」
「ですから。私達もあちらもです」
「呼ばれたということだね」
「そういうこともあります」
仕方がないといった口調であった。
「ですが。なってしまったからにはです」
「わかっているよ。じゃあ」
「御互いに触れ合わないようにということで」
これが執事の提案だった。
「向こうもそう思っているでしょうし」
「それが処世術だね」
「その通りです」
まさにそうだというのであった。
「ですから。そういうことで」
「わかっているよ。ただ朝鮮半島ではね」
義正は自分の家の話をここでもした。
「我が家はあちらに負けたね」
「鉄道ですね」
「あちらでは負けたね」
日本は当時日韓併合をして間もない。当時はまだその併合と統治が成功すると思っていた者も多かった。それも時代故のことであろうか。
この統治がどれだけの赤字経営になるか、そしてどれだけの失政になるかは予測する者はいた。しかし肝心の伊藤博文が暗殺されてだ。併合してしまったのである。
だが義正達はそのことをまだ知らない。それでこう残念そうに話をするのであった。
「鉄道は。非常に素晴しいものだけれどね」
「はい、半島の同胞達を大いに助けます」

「そして我が財閥に大きな利益をもたらしてくれる」
「それで狙っていましたが」
「あちらでは負けてしまったね」
義正は残念そうな声をまた出した。
「残念ではあるけれどね」
「しかしこれで、です」
「一勝一敗だけれど」
「引き分けにはなりません」
執事はシビアなこの現実も述べた。
「御互いに負けたのです」
「引き分けではなくだね」
「はい、互いに遺恨を残す結果になりました」
「どっちかが全敗すればよかったのかな、それじゃあ」
「それはそれで遺恨を残します」
そうすれば敗れた方が一方的に恨み勝利した方もそれに応じざるを得ない。結局一勝一敗と結果は変わらないというのである。
「ですからそれはです」
「同じなんだね、勝っても引き分けでも負けても」
「どれも。まさにそうです」
「そういう間柄ってことだね」
「はい」
執事はこう義正に答えた。

第一話　舞踏会にてその六

「我が八条家と白杜家はです」
「何が悲しくてそうなったのかな」
義正はここでは苦笑いになっていた。そのうえでの言葉だった。
「御互いにね。喧嘩する理由もないのに」
「因縁でしょうか」
「因縁なんだね」
「八条家と白杜家の仲は古来よりです」
歴史が遡った。さらにであった。
「御互いに公卿出身で平安の頃より争ってきました」
「そうだね。その頃からね」
それは義正もよく知っていた。己の家のことだからだ。八条家の歴史は古いのだ。それこそ平安にまで遡る程なのである。
「そして御維新からは」
「御互いにそれぞれ企業を起こして成功して」
「今の関係に至ります」
「本当に因縁だね」
義正はまた苦笑いになって述べた。
「その両家がここで顔を合わせる」
「くれぐれも御注意を」
執事は真剣な面持ちで主に囁いた。
「衝突だけは避けなければ」
「無意味な衝突はだね」
「あちらも避ける筈です」
その白杜家の面々もだというのである。
「ですから。御互いに避けてです」
「難を避けようか」
「それで御願いします」

こんな話をしてだった。義正は執事を連れて舞踏の場に入った。そこは前に来た時と然程変わらない内装であり置かれている酒も料理もであった。前と大して変わらないようなものであった。

来ている面々もだ。すぐにあの友人達が彼のところに来てて。こう言うのであった。

「やあ、今日も来たね」

「連続で来るのは珍しいんじゃないかな」

「そうかな」

気さくな笑みを浮かべてだ。義正はその彼等に返した。そのうえで場に入った。

そうしてだ。彼等と今日はこんな話をするのであった。

「最近白樺派がよくないかい？」

「ああ、小説だね」

「その話かい」

「うん、僕は特に武者小路実篤がいいね」

白樺派を話に出したその彼が言うのだった。

「ああした。恋愛ものがね」

「ああ、前の話だね」

「恋愛の話になるのかい？今日も」

「君も好きだね」

「いや、今日は文学だよ」

彼はだ。にこりと笑ってこう述べるのだった。

「そっちだよ」

「文学かい、その白樺派のだね」

「そっちだね」

「そうだよ。白樺派は文章が読みやすい人が多いからね」

それでいいというのだ。

「その武者小路実篤にしても志賀直哉にしても」

「ああ、志賀直哉かい」

「確か仙台藩出身だったな」

「そうそう、家老の家の出だったね」
皆志賀直哉についてはある程度知っていた。実際に志賀直哉は仙台藩の家老の家の出であった。武家としてはかなりの格式の家の者なのだ。
その彼の話に入る。その作品のことだ。
「あの作家の文章だね」
「確かに、あれはいいね」
「読みやすいね、とても」
「描写も上手だしね」
「最近芥川龍之介が流行だけれどね」
彼もこの頃から名前が売れだしていた。そうして瞬く間に日本で知らぬ者はないまでの作家になってゆくのである。それが大正の芥川だった。
「あの作家も凄くなるよ」
「じゃあ漱石や鴎外みたいになるかな」
一人が彼等の名前を出した。明治の文豪達だ。
「志賀直哉もね」
「そこまでなるかな」
「間違いなくなるね」
彼は太鼓判さえ押した。
「あの作家はね」
「ほほう、そこまでの作家なら僕ももっと読むか」
「そうだね、僕もそうしようか」
「僕は最近海外文学の訳本に凝ってるけれど」
他の面々もだ。楽しげに笑って話すのだった。

第一話　舞踏会にてその七

「志賀直哉、注目しておこう」
「そうしようか」
「そうだね」
文学の話だった。それが為されるのだった。
そしてそれが次第にだ。他の話になっていくのだった。
友人の一人がだ。義正にこんなことを言ってきた。
「最近君は乗馬はしているのかい？」
「乗馬かい？」
「うん、一時凝っていたけれどね。どうだい？」
「してるよ」
笑顔で応えた彼だった。しているというのである。
「今もね」
「そうなのかい、相変わらずかい」
「それにテニスもね」
それもしているというのだ。
「どちらもしているよ」
「いいねえ、西洋だね」
「全くだね」
友人達は笑顔で話す。この時代西洋のものはやはり流行の最先端であるとされていた。スポーツでもそれは同じだったのである。
そしてそれをしていることはだ。即ちだった。
「格好いいものだ」
「本当にね」
「君に似合うよ」
「似合うのかい？」
そう言われるとだ。違和感を見せる彼だった。そうしてこう言うのだった。

「馬に乗ることは我が国でも昔からあるじゃないか」
「まあそうだけれどね」
「それはね」
「テニスはともかくとして」
それについてはだ。義正も否定しなかった。
「それでも。乗馬は」
「いやいや、僕達が言っているのは西洋のあれだから」
「あの帽子を被ってズボンをはいた乗馬だよ」
「そっちだよ」
こう話すのである。
「そちらだよ」
「そっちの乗馬なんだよ」
「ああ、そちらの乗馬なんだね」
それを聞いてだ。義正も納得して答えた。
そしてそのうえでだ。彼はまた話すのだった。
「だからそれは今もね」
「楽しんでいるんだ」
「そうなんだね」
「そうだよ。そうしているよ」
こう話してだった。彼等はこの日の宴も楽しみだしていた。そうしてだ。
舞踏がはじめられた。それにだ。
友人達は次々と入る。しかし義正はだ。
入ろうとしない。グラスを片手にしてだ。一人留まるのだった。
そんな彼にだ。友人達が尋ねた。
「君は踊らないのかい？」
「入らないのかい？」
「そうしないのかい」
「うん、気分じゃないんだ」
こうだ。今一つはっきりしない顔で答えるのだった。

「どうしてもね」
「意中の相手がいないからかな」
「それでかな」
「そういう訳じゃないけれど」
それは否定する彼だった。しかしであった。
その顔でだ。彼はこう言うのだった。
「こうしたことはね」
「やっぱりあれだね。恋をする相手と踊りたい」
「そういうことなんだね」
「そういうところかな。それでなんだよ」
実際にそうだと述べる彼だった。
「だからいいよ」
「そういうことだね。じゃあ僕達は何も言わないよ」
「ただ。相手がいればね」
「踊るといいよ」
「そうしたらね」
こうしてであった。彼は一人で舞踏を見るのだった。だが暫くしてだ。
彼にだ。宴の参加者、壮年の男が来てだ。こう声をかけたのだ。
「あのですね」
「はい？」
「少し庭に出ませんか？」
こう彼に誘いをかけたのである。
「どうも。暑くて」
「そうですね。確かにね」
それについてはだ。彼も言うのだった。

第一話　舞踏会にてその八

「では涼みに」
「はい、行きましょう」
「酔ったせいでしょうか」
義正はだ。その暑さの理由をそこに求めた。酔いにだ。そして他のものにも理由を求めた。そのもう一つの理由はこれであった。
「それに人も多いですし」
「そうですね。今日は特に」
「だからですね」
こうその紳士に話すのだった。
「そのせいですね」
「では余計にですね」
「はい、人気の少ないその庭に」
「出ましょう」
こうしてであった。二人で庭に向かう。そこは左右対称になっていて緑の中にだ。黄色い花々が咲いている。西洋、それもフランスのロココを思わせる庭であった。
その庭でだ。二人はまた話した。
「この庭もいいものですね」
「そうですね。落ち着いていて」
義正はこう紳士に述べる。
「こうして歩いているだけで」
「いいものですね」
「本当にそうですね」
こう紳士に話す彼だった。
「それにです」
「それに？」
「バルコニーがありますし」

そのバルコニーの話もするのだった。見ればだ。
館にだ。それがあった。二階のところに白いバルコニーがある。
窓とカーテンから出るそこもまた西洋風のものであり見栄えのいい
ものだった。
義正はそれを見上げてだ。そうして紳士にこんなことを言った。
「あのバルコニーを見ているとです」
「何を思われますか？」
「シェークスピアです」
それをだというのである。
「あの英吉利の戯曲家の作品をです」
「ああ、あの有名な」
「ロミオとジュリエットでしたね」
彼はそれを話すのだった。
「それを思い出します」
「ロミオとジュリエットですか」
「はい、ありきたりでしょうか」
「ありきたりとは思いませんよ」
紳士は穏やかな笑みを浮かべて義正に述べた。
「そうですか。ロミオとジュエリエットですか」
「ええ、それを思い出します」
また述べる彼だった。
「どうもです」
「文学的ですね」
「文学的ですか」
「はい、いいものです」
その英吉利文学の傑作についての話に入っていく。
「最近よく哲学を読む人がいますが」
「特に独逸だね」
「ニーチェやショーペンハウアー、それにカントにヘーゲル」
「哲学者が増えたね」

「僕は哲学はどうも苦手で」
少し苦笑いになっての言葉だった。
「どうしても。あちらは」
「それはまたどうしてかな」
「自分でもどうしてなのかわかりません」
それはだというのである。
「ですが。それでもです」
「苦手なのかい」
「哲学書はしっかりと読んだことがありません」
そうだとだ。紳士に対して話す。
「やはり。それよりもです」
「文学なんだね」
「文学もまたいいものです」
明らかにだ。文学に寄った言葉であった。
「決して馬鹿にはできないと思います」
「そうだね。それはその通りだね」
「はい。文学は哲学に劣りません」
ここでも文学に寄った言葉を出す義正だった。
「同格であります」
「学問に位はないか」
「そう思います。それは我が国と海外のものについても同じです」
「我が国の文学も海外の文学もかい」
「はい、位の違いはありません」
文学の間でもだ。それはないというのである。

第一話　舞踏会にてその九

「確かに英吉利の文学は素晴しいです」
「そのシェークスピアがだね」
「そうです。仏蘭西もです」
「仏蘭西というと」
「ユゴーやビィヨンになりますね」
文豪だけでなく詩人も話に出した。彼は詩も読んでいるのだ。
「そういった作家や詩人です」
「そちらもいいが」
「日本のものもまたいいものです」
微笑んでだ。歩きつつ紳士に話す。
「それは読んで頂ければわかります」
「読めばだね」
「夏目漱石もそうですし」
まず名前を挙げたのはこの人物だった。言わずと知れた当代随一の小説家である。後世においては文豪に数えられる小説家である。
「他には二葉低四迷も」
「あの作家もかい」
「もう古くなってしまったでしょうか」
二葉の名前を出してだ。義正は苦笑いになった。
「もう」
「そうだね。あの文章はもうね」
「あの頃は斬新だったのですね」
「うん。とてもね」
文語から口語に換えた。それが彼の功績であった。しかしその口語も急激に大きく変わりだ。大正のこの時代においてはなのだった。
「もう古くなってしまったね」
「より読みやすくなりましたね」

「そうだね。どの作家の文体もね」
「その読みやすい文体では」
義正は話を戻した。そちらにだ。
「やはり白樺派が最近いいですね」
「彼等も日本を代表する作家達だというんだね」
「そう思います。ただ僕は」
微笑んで深い考えの目になってだ。彼はここでこんなことを言った。
「彼等や漱石よりも名が知られる作家は」
「誰だというのかな、その作家は」
「谷崎でしょうか」
この名前を出すのだった。
「谷崎潤一郎でしょうか」
「ああ、あの」
紳士はその名前を聞いてだ。すぐに声をあげた。あれか、といった感じでだ。
「何かと話題になる」
「少し話題にするのははばかれる作家ですが」
「いや、それは気にしなくていいよ」
紳士は笑ってそれはいいとした。
「ここにいるのは僕達二人だけだ。それなら」
「気にしなくてもいいですか」
「そうだよ。実は僕も谷崎はね」
「読まれますか」
「好きだね」
笑ってだ。こう義正に話した。
「あの独特の作風がね」
「そうでしたか」
「うん。そうか君も谷崎は読むのか」
「耽美ということを抜きにしてもです」

それ故に問題となる作家なのである。この時代でもそうであったし後世の昭和になってもだ。彼はそのことで問題になり続ける作家であった。

「芸術か猥褻かとなると」

「どちらかな、彼は」

「芸術だと思います」

それだというのである。

「あくまで僕個人の意見ですが」

「そうか。芸術か」

「はい、そしてその芸術故にです」

「彼の作品は輝くんだね」

「おそらく漱石や白樺派を超えます」

そこまでだとだ。義正は谷崎を高く評価して述べる。

「そうなります」

「谷崎か」

「他には芥川も好きですが」

「広く読んでいるんだね」

「そうかも知れませんね。文学は好きなので」

微笑みでだ。紳士に話した。

「ですから」

「そういえばだけれど」

バルコニーの下に来た。紳士はそのバルコニーを見上げて話した。

第一話　舞踏会にてその十

「ロミオとジュリエットでは」
「バルコニーにですね」
「うん。ジュリエットが出て来たね」
その話になった。そのシェークスピアのだ。
「あの場面はいいね」
「そうですね。浪漫ですね」
義正もそのバルコニーを見上げて言う。
「あの場面は」
「若しもだよ」
「若しも？」
「バルコニーに美女が出たら」
紳士はこう義正に話す。
「ジュリエットが出て来たら」
「その場合はですか」
「君はどうするかな」
「そうですね」
そう言われるとだ。義正はロミオに一瞬だが感情移入してからだ。
そのうえでこう話すのだった。
「その場合は。おそらくは」
「恋に落ちるんだね」
「そうなります」
これが彼の言葉だった。
「このバルコニーを見ているとそうした気持ちになります」
「やはりそうか」
「はい、若しかして」
ここでだ。彼はこんなことを言った。
「下から見上げることに何かあるのでしょうか」

「君主は上から部下を睥睨するけれどね」
「それの逆ですか」
「逆になる。それでかな」
「では美女は君主ですか」
義正はふとだ。こんな考えを頭の中に思い浮かべた。そしてそれを言葉にしてだ。紳士に対して言ったのである。そうしたのだ。
「男は臣下であり」
「いや、美女は君主ではないね」
「それは違いますか」
「君主は恋愛だよ」
それだというのである。
「つまりバルコニーに見るものは」
「君主ではなく恋愛ですか」
「恋愛を抱いているからこそ」
「バルコニーに美女を見るのですか」
「恋愛をね」
「そういうことですか」
ここまで話してだ。妙に納得する彼だった。
そしてだ。その納得する顔でだ。また紳士に述べた。
「では僕は」
「君は？」
「あのバルコニーに恋愛を見ましょう」
こう言うのであった。
「そうするとしましょう」
「ロミオの様にだね」
「恋愛の臣民になりますか。それもいいですね」
今度は微笑んだ顔になってだ。そのうえでの言葉だった。
「陛下の臣民であると共に」
「二君には仕えずというけれどね」
「ですが恋愛は別です」

「陛下はこの世の君主であられ」
「そして恋愛は心の世界の君主です」
そうした意味でだ。別々のものだというのだった。二人は話をしていてそのことがわかった。恋愛とはどういった君主であるかをだ。
「では、今はですね」
「舞踏会に戻るかい？」
「そうさせてもらいます。少し酔いたくなりました」
「葡萄の美酒にだね」
「いいものですね。あれは」
ワインのことだ。義正はその酒が好きになっていた。伊太利亜からの客に勧められ飲んでいるうちにだ。好きになったのである。
そしてだ。紳士にもだ。顔を向けて言うのであった。
「それでは貴方も」
「そうだね。では僕もね」
「ワインを飲まれますか？」
「生憎だが踊るにはいささか歳を取ってしまってね」
気さくな笑顔でだ。義正に対して述べる紳士だった。
「ここに来ている楽しみは談義と」
「美酒ですか」
「そう。この二つなんだよ」
こう義正に話すのだった。

第一話　舞踏会にてその十一

「だからそうさせてもらうか」
「はい、それでは」
「酒はまさに百薬の長だよ」
古来からよく言われている言葉がここでも出た。
「それを飲んでそうしてね」
「心を楽しくされますね」
「美酒があっての人生だよ」
紳士の人生に対する哲学でもある言葉だ。
「ではね」
「はい、それでは」
こうしてだった。義正は二人で宴の場に戻りだ。そのうえで葡萄の美酒を味わった。しかし多少飲んだところでだ。あることに気付いたのだった。
「しまったな」
「どうしたんだい？」
「何かあったのかい？」
「ハンカチを落としてしまったんだ」
こう友人達に話すのだった。今は舞踏は休止中で彼等は休憩して酒と馳走を楽しんでいる。その時で彼は気付いて話したのだ。
うっかりしていたよ」
「ああ、ハンカチかい」
「何処に落としたんだい、それで」
「庭にね」
そこだと答える彼だった。
「あの場所を散策中にね」
「じゃあ庭に戻るのかい？今から」
「そうするのかい？」

「うん、そうさせてもらうよ」
その通りだと答える義正だった。
「今からね」
「わかったよ。それじゃあ」
「僕達はここにいるから」
「行って来るといいよ」
友人達は微笑んで彼に話した。
「そういうことでね」
「じゃあ。暫しの間のお別れとしよう」
少し芝居がかった言葉でだ。彼等は義正を送り出した。そうしてであった。
義正は庭に出た。そしてそこでハンカチを探す。しかし。
ハンカチは見つからない。どうしてもだ。幾ら見回してもそのハンカチらしきものはない。
彼はそれで困りだした。まずはこう考えた。
「風に飛ばされたか」
最初はそれであった。この日はいささかの風もある。今も額の、酔って赤くなってしまっているそこにだ。涼しい風を感じている。
「それとも誰かに拾われたか」
それならいいのだが、といささか希望を込めた考えであった。
「まだここにあって見つけていないか」
三番目はこれだった。
「どれなのかな」
「あの」
ここでだ。声がした。
「宜しいでしょうか」
「はい？」
「若しかしてですけれど」
声はだ。上の方からだった。
義正は丁度バルコニーの真下からだった。そこからの声だった。

そこを見上げるとだ。そこには。
白いドレス、絹のそれを着ていた。長い黒髪を上で束ねている。
顔は細長く頬が少しふっくらとしているが顔も身体も全体的にすらりとしている。
唇は薄くそして広い。微笑んでいる顔だ。
睫毛は長くだ。目は黒く星の如き輝きを見せている。歳は義正と同じ程だ。
その美女がだ。彼に対して言ってきたのだ。
「ハンカチをお探しでしょうか」
「はい、そうですが」
義正は上を見上げて美女に答えた。

第一話　舞踏会にてその十二

「貴女は若しかして」
「先程庭にいまして」
「そこで拾われた」
「そうです」
その通りだと話す美女だった。
「その通りです」
「貴女がでしたか」
「今からそちらに向かいます」
美女からの言葉だ。
「庭の方に」
「いえ、それには及びません」
しかしだった。義正は自分からこう言ってだ。美女を止めた。
「私の方からそちらにお伺いします」
「貴方がですか？」
「はい、そうさせてもらいます」
こう美女に話すのだった。
「そうして宜しいでしょうか」
「いえ、殿方にその様な」
「何、構いません」
美女の礼節はだ。鷹揚な笑顔でいいとした。
「私のハンカチですから。だからですか」
「はい、だからです」
それでだと話してだ。彼はだ。
自分からバルコニーに向かった。そうしてなのだった。
バルコニーに出てだ。彼はだ。
美女の前に出た。そのハンカチを受け取ったのだった。
「有り難うございます」

「はい」
彼は美女の手から直接受け取った。話はそれで終わりではなかった。
美女はだ。微笑んでこう彼に言った。
「あの」
「何でしょうか」
「貴方のお名前は」
こうだ。彼に尋ねたのだった。
「何というのでしょうか」
「私の名前はですか」
「そうです。貴方の名前は何というのでしょうか」
また彼に尋ねた。
「宜しければお答えして頂けますか」
「はい、八条といいます」
義正はだ。まずは姓から話した。
「八条義正といいます」
「八条!?」
「はい、八条です」
また話す彼だった。
「それが私の名前です」
「そうですか」
その名前を聞いてだった。美女はだ。
暗い顔になってだ。そうして彼に話したのだった。
「御名前を言って頂けました」
「はい」
「では私も名乗らなくてはなりませんね」
こうだ。その暗い顔で話すのだった。
「私の名前はです」
「何というのですか?」
「白杜といいます」

こう話す彼だった。
「私の名前は。白杜理恵といいます」
「白杜、ですか」
「はい。因果なものですね」
また彼に暗い顔で述べた。
「二つの家がこうしてここで会うとは」
「全くですね」
自然とだ。義正も俯いてしまっていた。そうなってしまっていた。
これが二人の出会いであった。全てはここからはじまった。だがそれで終わりではなかった。むしろだ。これがはじまりであったのだ。

第一話　　完

２０１１・２・２０

第二話　離れない想いその一

第二話　離れない想い

義正は理恵とはじめて会った。そのはじめて会った日はだ。
彼はそれからすぐに宴の場を後にした。宴が終わったからだ。
その日はそれで終わった。しかしだ。
次の日。彼は街の百貨店に出掛けた。八条百貨店、彼の家が経営する百貨店だ。そこに出掛けたのだ。
あの執事も一緒だ。彼が後ろから義正に言ってきた。
「昨日ですが」
「何かな」
二人は既に百貨店の中にいる。周りは人でごった返している。背広の者もいれば和服の者もいる。そこには老若男女が揃っている。
その中でだ。執事は彼に対してこう言ってきたのだ。
「何かあったのですか？」
「いや、別に」
すぐに否定する義正だった。
「何もないよ」
「そうでしょうか」
「うん、何もないよ」
彼はまた言った。
「気にしなくていいよ」
「どうもハンカチを拾われた時から」
「いや、あの時から別に何もね」
「ないですか」
「そう、何もないから」
暗い顔でだ。否定する彼だった。
「本当にね」
「だといいのですが」

「ただ。それにしても」
ここでだ。彼はこう言ったのだった。
「どうもでね。我が家とあの家は」
「白杜家ですね」
「あまり顔を会わせるべきでないのかもね」
こう話すのだった。
「好意が。純粋に好意とならない間柄だとしたら」
「？どういうことですか？」
執事は主の今の言葉にいぶかしむ顔になった。
「それは」
「いや、何でもないよ」
またこう言う義正だった。
「本当にね」
「左様ですか」
「何でもない。けれど」
「けれどとは」
「残念だよ。好意を受けてもそれを喜べないのは」
執事にだ。またこう話したのだった。
「その気持ちは。わかるかな」
「わかります」
執事はだ。静かに答えたのだった。
「それは」
「そうか、有り難う」
「世の中は。おそらく非常に複雑なのでしょう」
執事はだ。断定はしなかった。そうするには彼はまだ若かった。
主である義正よりもまだ若いのだ。それならば断言はできないのだった。
「好意が。純粋に好意となるとは限らないのです」
「それが受け入れられないこともか」
「あります。時にはです」

「さらにだね」
「はい、悪意と取られることもあるでしょう」
こう話すのだった。
「残念なことに」
「好意でも悪意になってしまう」
「正反対になってしまうのです」
「嫌なものだね」
首を横に振ってだ。いたたまれない顔での言葉だった。
「それは」
「それもまた世間なのでしょう」
「そうなのだろうね。本当に」
溜息をついてだ。彼はまた述べた。
「実際にね」
「そうだと思います。ただ」
「ただ？」
「そうしたことをいちいち気にしていても駄目なのでしょう」
執事はだ。ここでこんなことも話すのだった。

第二話　離れない想いその二

「それもです」
「駄目なんだね」
「何時までも悩んでも苦しんでも。何にもなりませんから」
「そうだね。それはね」
「憂いは取り払うに限ります」
執事は言った。
「楽しみを見出して」
「楽しみをだね」
「今はです」
執事はここで主にあることを勧めた。その勧めるものとは。
「百貨店にいますから」
「買い物でも楽しもうか」
「そうされるべきかと」
これが主への勧めだった。
「気分転換に」
「そうだね。それがいいね」
義正もだ。彼のその言葉に述べた。そしてであった。
百貨店の中で買い物をはじめた。彼の顔を見てだ。
店員達は態度を畏まらさせてだ。恭しく話すのだった。
「若旦那様、それではです」
「このスーツはどうでしょうか」
「いえ、このコートをです」
「これはどうでしょうか」
「何を買われますか？」
「いや、そんなに気を使わなくていいから」
今度はだ。苦笑いでこう話す彼だった。その周囲の恭しさにだ。
苦笑いを浮かべるしかなくてだ。そのうえで彼等に応対するのだっ

た。
「そんなね」
「宜しいですか？」
「あの、しかし」
「やはりここは」
「そうです。若旦那様ですから」
「だからいいよ」
こう言うのであった。やはり八条家の子息、三男であってもそれとなればだ。百貨店の店員達も態度を正しくするしかなかったのだ。
だがその彼等にだ。八条は笑顔で話すのだった。
「今日は仕事で来ているのじゃないからね」
「それはわかっていますが」
「それでもです」
「若旦那様が来られると」
「礼節というものがありますから」
「礼節は素晴しいものだよ」
ここでだ。八条はまだ言う彼等にこう述べた。
「ただ。それはね」
「それはといいますと」
「礼節ですか」
「それのことですね」
「うん。それを僕にだけ向けるのじゃなくて」
それでだではない。彼が言うことはそこにあった。
「他のお客様にも向けるべきだな」
「あっ、確かに」
「他のお客様をおろそかにしては」
「どうにもなりません」
「うん、それは気をつけてね」
このことだった。彼は店員達に言うのであった。
「くれぐれもね」

「わかりました。では」
「それはです」
「肝に命じます」
「しかしです」
それでもなのだった。やはりここでもだった。
「若旦那様にはです」
「礼節があります」
「ですから」
「困ったね。これか」
結果としてだ。苦笑いのままでいるしかない彼だった。
だがここでだ。執事がこう彼に話すのだった。
「旦那様、ここはです」
「どうすればいいのかな、一体」
「受けられるべきです」
これが執事の彼への提案だった。

第二話　離れない想いその三

「彼等もそれを望んでいますし」
「こうした対応をなんだね」
「はい、望んでいます」
彼等の態度を見ればだ。すぐにわかることだった。
「だからです」
「それを受けないということは」
「それは失礼にあたります」
義正にこうも話すのだった。
「彼等に対してです」
「礼節を受けないというのはね」
「そうです。それにです」
「それに？」
「この際百貨店の中を見回りましょう」
要するにだ。視察というわけである。
「それも兼ねてです」
「受けるんだね、ここは」
「それがいいです」
また言う執事だった。
「八条家の者として。見回るのもです」
「大事だね」
「それを忘れてはなりませんから」
「わかったよ。どうやら僕は」
少し苦笑いをしてだ。述べる義正だった。
「気軽に遊びながら。そのうえで真面目に仕事もしなくてはいけないんだね」
「それが今になりますね」
「そういうことだね。じゃあ」

「はい、見回りましょう」
こうしてだった。彼は百貨店の中を案内されてそのうえで買い物をすることになった。だがここでだ。彼は店員達にこう話した。
「普段通りで御願いします」
「普段通りですか」
「普通に仕事をですか」
「するといいのですね」
「はい、御願いします」
まさにそれだというのである。
「それで」
「ですがそれでは」
「案内する者がいませんが」
「そうです。それがです」
「困ると思いますが」
「確かに」
言われてだ。義正もそのことを考えた。
「その通りですね。それは」
「そのことは御心配なく」
だがここでだ。一人の恰幅のいい人物が出て来た。
くすんだ黄色のスーツにベストという格好をしている。口髭を生やしそれがワックスで丁寧に固められている。その彼が出て来て言うのであった。
「私が案内させてもらいます」
「店長さんがですか」
「はい、そうです」
その紳士こそがこの百貨店の店長である。背は義正より低い。だがそれでもだ。その威風は堂々としていて彼と並んでも遜色ない。
その彼が出て来てこう彼に言ったのであった。
「責任者が案内すればいいかと思いまして」
「そうですね。確かに」

その言葉にだ。義正も頷く。
「それでは。店長さんが案内してくれるということで」
「それを御願いします」
「わかりました。それでは」
こうしてであった。義正は執事を連れ店長の案内を受けてだ。百貨店のあちこちを見回り買い物を楽しんだ。買ったものは様々で多くに渡った。
それが終わり店を出てからだ。義正はこう執事に述べた。
「いいお店だったね」
「そう思われますか」
「品揃えがいいね」
まず指摘したのはそのことだった。
「それに」
「それにですか」
「細かい部分まで、店の端々まで」
そうしたところまでだ。見ているというのである。
「掃除もされているし」
「むっ、そこまで御覧になられていましたか」
「金属も錆は一つもなかったよ」
このこともだ。見ているのだった。
「奇麗に磨かれているね」
「私はそこまでは見ていませんでした」
「実は。この前海軍の将校の人達とお話した時に」
「海軍ですか」
「うん、海軍では船の掃除は徹底してやるそうでね」
とにかく全てにおいて清潔にするのが日本軍だったのだ。それも徹底してなのであった。

第二話　離れない想いその四

「将校さん達のお話だとね」
「それで船のお話を聞いてですか」
「海軍の船は実際に中までは見ていないけれど」
それでもだというのである。彼もだ。
「けれど。それでもね」
「細部まで清掃が行き届いていた」
「いい店だね」
そこまで見てだ。話すのだった。
「あのお店が流行るのは当然だね」
「あの店長さんはやり手なのですね」
「父さんだったね。あの人を店長に選んだのは」
「はい、そうです」
「成程ね。細かい部分まで見られる人だから店長さんにしたんだね」
義正はそのことにだ。深いものを見出していた。
「人を見る目は。本当に大事だね」
「それはその通りですね。では旦那様」
「うん、僕もだね」
「はい、人を見る目を養って下さい」
「難しいことだろうけれど。それでもだね」
「まず第一はです」
執事はすかさずだ。主にこう話したのだった。
「御相手を」
「相手。結婚だね」
「御見合いの話が間も無く来るかと」
このことを話すのだった。
「ですから。よく御覧になられてです」
「結婚か」

それを聞くとだ。義正の顔が微妙なものになった。
「それだね」
「考えておられますね」
「ううん、実はまだあまり」
「考えておられませんか」
「実感が湧かないね」
こう述べるのであった。
「どうにもね」
「結婚はですか」
「どうしてもね。現実のものには」
「左様ですか」
それを言われてだ。執事も微妙な顔になった。そうしてだ。
彼もだ。ここで己のことを話したのだった。
「実は私にしてもです」」
「君もそれはだったね」
「はい、まだです」
つまりだ。彼も独身だというのである。実際にそうなのだ。
「結婚は。それは」
「交際している相手は?」
「それはいます」
こう主に述べた。
「幼い頃から。決められた相手ですが」
「許婚だね」
「そうなります。実際に」
まさにその通りだと答える彼だった。
「その相手と。やがては」
「結婚するんだね」
「ですが。やはりです」
「君も実感はできないんだね」
「はい、残念ですが」

「実際に経験できないものを実感することは難しいからね」
義正はだ。そのことから述べた。経験は何よりも勝る学問である。
「それは仕方ないね」
「申し訳ありません」
「謝る必要はないよ。けれど」
「けれど？」
「それも仕方ないね」
こうも述べた彼であった。
「僕にしても。知らないから」
「どうしていいかわかりませんか」
「恋愛もまだなんだよ。一体どんなものか」
知らないと。言葉となって出ていた。

第二話　離れない想いその五

「よく。甘いと言われているけれどね」
「甘く。そして切ないですね」
「そう言われているね。けれどそれは本当のことなのか」
「経験していないと。わかりませんね」
「全くだね」
「私はです」
執事はだ。その許婚のことを頭の中に入れて述べた。
「既に相手は決まっていますが」
「恋をしているという実感はないんだね」
「幼い頃から共にいた。言うならば」
どうした存在かとだ。彼は自分の口で話すのだった。
「兄妹の様なものです」
「兄妹なのかい」
「はい、そうです」
そうしたものだとだ。彼は話すのだった。
「それがそのまま夫婦になる。そうしたものですね」
「恋は。それじゃあ」
「妹に対する様な愛情はありますがそれでもです」
「恋ではないんだね」
「これからはわかりませんが今はそうです」
執事は話していく。その彼自身のことをだ。
そのことを聞いてだ。執事はさらに話すのだった。
「それでもいいでしょうか」
「悪いとは思わないけれどね」
義正は考える顔でだ。静かに述べた。
「そう、悪くはないね」
「そうですね。このまま夫婦になり愛情を育んでいけば」

「それも恋になるね」
「そういうことですね」
「それなら」
義正は考える顔になっていた。そうしてだ。
その顔でだ。彼はだ。また執事に述べた。
「僕が恋を知るには」
「恋をですか」
「自分で経験するしかないのかな」
こう話すのだった。執事に対してだ。
「そうして知るしかないんだろうか」
「そうなるでしょうか。ただ」
「ただ？」
「いえ、小説でよくある話ですが」
執事も小説を読む。そしてその小説から得た知識でだ。彼は今義正に対して話すのだった。その話すことはだ。こうしたものだった。
「例えそれが悲しい結末に終わってもです」
「後悔をしてはいけないね」
「はい、そう言われていますね」
「そうだね。それはね」
「旦那様も。是非後悔はです」
「したくないね。後悔はね」
それについては彼も知っていた。生きていれば必ず後悔することがあるしそうした時がある。それは彼にしても同じことなのだ。
「そして。逃げることもね」
「恋愛からは逃げるなとも書かれていますね」
「よくね。それじゃあ」
「はい、ですから」
「うん、後悔もしないし逃げないよ」
また話す義正だった。
「絶対にね。そうしないようにするよ」

「そうです。そして」
「そして？」
「今はこのまま帰られますね」
執事は話を変えてきた。今度の話はそれであった。
「お屋敷に」
「いや、その前に」
「その前にですか」
「珈琲を飲みたくなったよ」
静かに微笑んでだ。こう述べたのだった。
「それはいいかな」
「珈琲ですか」
「百貨店で飲めばよかったけれど」
それでもだと話すのだった。

第二話　離れない想いその六

「急に飲みたくなったんだ。いいかな」
「わかりました」
執事は穏やかな声で彼に答えた。
「では何処かのお店に入りましょう」
「何処がいいかな」
「どうした珈琲が飲みたいでしょうか」
執事は律儀にそのことも彼に尋ねた。
「どういったものが」
「ミルクが入ったものがいいかな」
八条は少し考えてからこう述べた。
「それがいいかな」
「ミルクがですか」
「うん。この辺りにそうした珈琲が美味しいお店はあるかな」
「はい、それでしたら」
「あるんだね」
「はい、あります」
その通りだというのであった。
「ここから少し行った場所にあります」
「ああ、近いんだ」
「私の知っているお店でして」
「じゃあそこに行こうかな」
「わかりました。では案内させてもらいます」
「うん、頼むよ」
こうしてだった。彼はそのお店に執事と共に向かった。するとそこは。
欧風のだ。ダークブラウンの洒落た店だった。そこに二人で入るとだ。

「あっ、佐藤君じゃないか」
「ああ、文明ちゃん暫くぶりだね」
「久し振りだね」
執事にだ。店員達が気さくに声をかけてきたのである。
「元気そうだね」
「忙しかったみたいだね」
「どうだい？調子は」
「はい、いいですよ」
彼等に対してもだ。丁寧に返す彼だった。
「とても」
「そうかい。それじゃあね」
「今日は珈琲かい？」
「それとも紅茶かい？」
「珈琲を御願いします」
それをだというのである。
「そしてです」
「ああ、そっちの背の高い方にもだね」
「何か凄い男前の方だけれど」
「その人って一体？」
「ひょっとして佐藤君の」
「はい、旦那様です」
そうだとだ。丁寧な口調で答える彼だった。
「私がお仕えしている旦那様です」
「ああ、じゃあ八条家の」
「あの若旦那様かい」
「三男さんだね」
「その方なんだ」
「はい、そうです」
また述べる佐藤だった。まさにそうだというのだ。
「それでなのですが」

「ああ、そうだね」
カウンターにいるだ。口髭を生やした若い男が言ってきた。白いブラウスに黒いズボン、それに青いベストという姿である。髪はポマードで後ろに撫でつけている。
その彼がだ。佐藤に対して述べるのだった。
「そちらの方にもだね」
「御願いできますか？」
「勿論だよ。お客さんなら誰でもね」
「歓迎してくれますか」
「勿論だよ。それじゃあ」
ここでだ。そのカウンターの男はだ。こう言うのであった。
「珈琲は何がいいかな」
「旦那様は何がいいですか？」
佐藤はここで義正に顔を向けて尋ねた。二人はまだ店の中で立っている。そのうえでだ。二人で話をしているのである。
「珈琲は」
「そうだね。ブラックがいいかな」
それだというのだ。

第二話　離れない想いその七

「ミルクを入れなくてね」
「そうですか。ブラックですね」
「君は何をするのかな」
「ミルクを入れます」
彼はそれだというのである。
「それを」
「わかったよ。じゃあね」
「はい、では」
何を飲むのかを尋ねながらだ。彼はあらためて話すのだった。
「カウンターに座りましょう」
「そうだね。それでね」
珈琲を飲むのであった。二人でだ。
珈琲が来た。それからだった。佐藤がカウンターにいるその彼に声をかけた。
「あの、マスター」
「何かな」
「珈琲もう一杯もらえますか？」
こうマスターに言うのだった。
「御願いできますか？」
「いいよ、もう一杯だね」
「はい」
「じゃあ。またね」
こうしてだった。彼はその珈琲をもう一杯飲む。そしてだ。
牧村もだ。マスターに対してだ。あらためて話すのだった。
「では私も」
「若旦那さんもだね」
「ブラック。いや今度はミルクを入れてね」

「それをだね」
「うん。もらえるかな」
こう話すのだった。
「それでね。もう一杯」
「わかったよ。それじゃあね」
彼もまた、だった。珈琲をもう一杯飲んだのだった。それが終わってからだ。
義正はあらためてだ。佐藤に対して話すのだった。
「珈琲はいいね」
「美味しいですか」
「うん、とてもね」
また話す彼だった。
「美味しいだけでなくて目も醒めるしね」
「そうだね。珈琲もね」
「ええ。紅茶もいいですが」
「珈琲の方が目が醒める気がするから」
「その場合は珈琲ですね」
「うん。さてと、珈琲を飲むと」
それだけでは留まらないというのだ。彼はだ。
「他にはね」
「甘いものが欲しくなりますか」
「最初はそこまで食べるつもりはなかったけれど」
それでもだとだ。言葉に出ていた。
「今はね」
「わかりました。それなら」
「うん、何を頼もうかな」
「ケーキはどうですか？」
佐藤が主に勧めるのはそれだった。
「それは」
「ケーキ。いいね」

「それも珈琲ならです」
「チョコレートかな」
連鎖的にだ。義正は話した。
「それを貰おうかな」
「では私もそれを」
「君もそれをかい」
「私も。珈琲にはチョコレートだと思いますから」
それでだというのである。
「ですから」
「うん、じゃあ二人でね」
「同じものを頼みましょう。このお店は珈琲だけでなくです」
「ケーキもいいんだね」
「はい、そうです」
まさにだ。そうだというのである。
「ですから。今から食べましょう」
「うん。それじゃあね」
二人はケーキも楽しんだ。それが終わってからだ。
店を出る。そのうえでだ。義正は佐藤に対して言うのだった。
「いいお店だったね」
「そう言って頂けますか」
「とてもね」
笑顔での言葉だった。

第二話　離れない想いその八

「満足したよ」
「それは何よりです」
「うん。そういえば」
ここでだ。義正はこんなことも言った。
「珈琲だけれど」
「その珈琲のことですか」
「絶望の様に黒く地獄の様に熱く」
こうした言葉をだ。思い出す顔で出していくのであった。
「天使の様に純粋で」
「そして恋の様に甘い、ですね」
「そう、そうした言葉だったね」
こう話すのだった。
「確かこの言葉は」
「タレーランだったでしょうか」
佐藤がこの名前を述べた。
「フランスの政治家だった」
「そうだったと思うよ、彼だったかな」
「人間としては非常に問題のある人物だったようですが」
佐藤は首を捻りながらだ。こうしたことも述べた。
そのうえでだ。彼はこうも言った。頭の位置は義正とあまり変わりがない。だから義正もだ。彼のその頭の動きを見られたのだ。
「ナポレオン以上に厄介な人物だったようです」
「能力だけではなくだね」
「はい、その人間性も」
それもだというのである。
「あのナポレオン以上にです」
「英雄以上の人間というのかな、じゃあ」

「少なくとも英雄以上に厄介な人間だったようです」
それがタレーランだというのだ。
「それは間違いないようです」
「確か賄賂を取り」
「女性問題も派手でした」
「姦淫やそれどころではなかったようだな」
「はい、口に出すのもはばかれる程だったようです」
佐藤は今度は顔を顰めさせている。その引き締まった端整と言っていい顔をだ。その顔から少なくとも彼はタレーランを好きではないことがわかる。
「僧侶階級出身だったそうですが」
「あちらの僧侶は我が国の僧侶よりも酷いと聞いているけれど」
「その中でもタレーランは特にです」
別格だったというのである。
「女性問題もあり賄賂も取り。しかも陰謀家でした」
「とんでもない人間性だったんだね」
「最悪と言ってもいいでしょう」
「その彼がナポレオンの下にいたんだったね」
「当然あの英雄に対しても忠誠心はありませんでした」
実は本人は違うとは言っている。しかしその実際の行動を見ると怪しいとしか言い様がない。タレーランはそういう人物なのだ。
「裏切っています」
「ナポレオンを破滅させた男の一人だね」
「私は思うにです」
佐藤はここでさらにだ。こんなことを言うのであった。
「フランス革命はまず多くの革命家がいました」
「ラ＝ファイエットなりミラボーなりだね」
「そうです。そして一人の独裁者がいました」
革命家だけではないというのだ。
「ロベスピエールです」

「それに一人の英雄だね」
彼についてはだ。もう言うまでもなかった。
「ナポレオンだね」
「そうです、そしてです」
ここからがだ。佐藤が今言いたいことであった。
「二人の怪物も生み出しました」
「その一人がタレーランだね」
「もう一人はフーシェですが」
これまたナポレオンに仕えた男の一人だ。だがこの人物もだ。お世辞にも信頼できる人物ではなかった。それも全く、である。

第二話　離れない想いその九

「この二人のうちの二人です」
「上司にも友人にも同僚にも部下にも持ちたくない二人だね」
「どの位置にいても何時足元をすくわれたうえで全てを奪われるかわかりません」
そうした意味で実に悪魔的な者達であったのだ。
「ですがその言葉はです」
「確かだね」
「はい、それが珈琲です」
まさにそれだというのである。
「それが珈琲なのです」
「そうだね、本当にね」
「では。またあのお店に行かれますか」
「そうさせてもらうよ。またね」
「はい、ではまた」
「さて、それじゃあ」
珈琲の話からだ。さらにであった。
彼はだ。また言うのであった。
「屋敷に帰るけれど」
「電車に乗られますか」
「車を借りるのもいいけれど」
タクシーのことだ。この頃にはもう大きな街には普及していた。
「ここはね。電車でゆっくりとね」
「帰られますか」
「そうしよう。それじゃあね」
「はい、駅に」
こう話してだ。そのうえでだった。
二人は駅に向かう。そうして電車に乗る。その中でだ。

彼は見たのだ。彼女を。彼女がそこにいたのだ。
「あれは」
「まずいですね」
佐藤がだ。暗い顔で義正に述べた。
「これは」
「白杜家のお嬢様だね」
「はい、白杜理恵さんです」
佐藤がこの名前を出した。
「あの方がです」
「この車両に乗っているなんてね」
「予想していませんでした」
佐藤は話す。そしてだ。
義正は彼女のその顔を見ていた。彼女は彼等には気付いていない。見れば女子学生が着る様な服である。青い袴に黒い革靴、それにえんじ色と白の振袖である。髪を奇麗に結っている。その格好は。
「今流行の格好ですね」
佐藤が述べた。
「似合ってはいますね」
「そうだね」
その通りだった。その目の前にいる彼女はだ。
隣にいる女友達と何か話をしている。その女友達も彼女と同じ格好だ。色は違うがだ。
その真理の横顔を見ることになった。するとだ。
その顔を見てだ。また言うのであった。
「あの顔は」
「あの顔は？」
「いや、何でもないよ」
思わず見惚れてしまった。しかしそれは言わないのだった。
そのうえでだ。佐藤に対してだ。あらためてこう言うのだった。
「行こうか」

「他の車両にですね」
「うん、八条家と白杜家はね」
一瞬だが寂しげな顔になる。しかしそれはすぐに消してまた言うのだった。
「一緒にいてはならないね」
「御互いに。いがみ合う間柄ですのね」
「だからだね。それでだね」
「はい、ですから」
「うん、移ろう」
義正は言った。
「それじゃあね」
「それでは。前を通るのもあれですし」
それでは同じだった。姿を見られてしまう。そうなっては元も子もないことだった。それで佐藤もそれは最初から除外したのだった。
「あちらに移りますか」
「うん、あっちの車両にね」
彼等から見て右手の車両にだというのだ。真理達は彼等から見て左手にいる。だから左手に行くのはだ。避けるのであった。
そうして二人は右手に向かう。そのまま他の車両に向かった。そこでだ。
ふとだ。真理はだ。彼等の姿が目に入った。話をしているその間に横目の端にだ。たまたまだが目に入ったのである。
それを見てだ。真理は二人に顔を向ける。そのうえで見てだ。

第二話　離れない想いその十

「あれは」
「どうしたんですか？」
友人のその女学生が彼女に問うた。
「何かあったのですか？」
「いえ、あの方は」
「あれは」
女学生も彼等を見た。今は後ろ姿だ。
その後ろ姿を見てだ。彼女も気付いたのだった。
「あの八条家の」
「そうですね。あの方は」
「御会いしなくてよかったですね」
女学生はほっとした顔になってこう真理に話した。
「ここは」
「そうですね。ですが」
「ですが？」
真理は義正のその後ろ姿を見たのだ。その後ろ姿は。
端整であった。しかも気品がある。その後ろ姿を見てであった。
目を止めてしまったのだ。
しかしだ。友人の言葉に我に返った。慌ててその視線を外してだ。
そのうえで彼女に対してこう話したのであった。そうしたのだ。
「何でもありませんわ」
「そうなのですね」
「はい、何も」
何もないということにするのだった。
「ですから安心して下さい」
「そうですか」
「はい・・・・・うっ」

ここまで話してだった。不意にだ。
真理は咳をした。すぐにその口を右手で塞ぐ。
その姿勢で何度か咳をしてだ収まってから言うのだった。
「収まりました」
「風邪でして？」
「そうでしょうか。風邪でしょうか」
真理は自分ではわからないといった感じであった。それが言葉にも出ている。
「だとしたら少し困りましたね」
「最近時々咳をされていますが」
女学生はその真理を気遣いながら彼女に声をかけた。
「風邪なら御気をつけ下さい」
「そうですね。風邪は万病の元と言われていますね」
「だからです」
それでだと話す女学生だった。
「くれぐれも御気をつけ下さい」
「わかりました。それでは香川さん」
「はい」
女学生の名前を呼んだのであった。彼女のだ。
「では今から遊びに行くことは止めまして」
「どうされるのですか？」
「家に帰り休むことにします」
そうするとだ。穏やかに笑って話すのだった。
「そうします」
「はい、それがいいです」
その女学生、香川麻実子もそれがいいというのだった。見れば小柄であるが丸い顔で色が白い。黒く大きな目をしていてそれがきらきらと光っている。口は小さく鼻の高さは普通だ。黒髪を後ろで束ねている。
その香川がだ。笑顔で真理に話すのだった。

「では私は」
「どうされますか？香川さんは」
「これから本屋に行きます」
穏やかな笑みでだ。そうすると話すのだった。
「そうします」
「本屋にですか」
「そしてそこで」
どうするのかもだ。彼女は話す。
「小説を買うことにします」
「小説ですか」
「それか詩集を」
選択肢はだ。ここでもう一つ増えた。
「どちらかにします」
「詩集でしたら与謝野晶子は如何ですか？」
「あの方のですか」
「はい、何冊か読みましたがいいです」
こう話すのだった。
「ですから。香川さんも如何ですか？」
「わかりました。それではその詩集と」
さらにであった。香川はここでさらに話すのだった。
「赤い鳥を買います」
「赤い鳥ですか」
「はい、あの雑誌をです」
与謝野晶子が関わっているその雑誌をだ。買うというのである。
そしてそのうえでだ。また話すのであった。
「買いに行きます」
「赤い鳥もいいですね」
ふと言った真理だった。赤い鳥と聞いてだ。
「あの雑誌は。読んでいてです」
「心が奇麗になりますね」

「はい、なります」
そういう雑誌だというのだ。その赤い鳥は。
「素晴しい文学は。読む人の心を清らかにしますから」
「だから赤い鳥もですね」
「はい、奇麗になります」
そうした雑誌だというのだ。
「ですから。読まれるといいです」
「では。あの雑誌もまた」
「はい、それでは」
香川は笑顔で頷く。これで決まりだった。
真理は家に戻り香川は本を買いに向かった。電車を降りた時にだ。
真理は無意識のうちにだ。義正が去った方角を見た。そちらをだ。
そしてそのうえでだ。一人こう呟くのだった。
「あの後ろ姿は」
それを思い出してもしてだ。そのうえで一人呟いたのだった。そうしたのであった。

第二話　完

２０１１・２・２７

第三話　再会その一

第三話　再会

義正はだ。あの電車に乗った時からだ。
物思いに耽ることが多くなった。あの横顔を見ながらだ。
それは仕事の時も同じでだ。己の部屋でサインをしながらもだ。
ふと物思いに耽ることが多くなっていた。その彼を見てであった。
彼の直属の部下達がだ。気遣ってこう声をかけたのだった。
「あの、どうかされたのですか？」
「何かお悩みでも」
「あるのですか？」
「それは」
義正は彼等に対してだ。真実を言わなかった。言えるものではなかった。
それでだ。その真実を隠してだ。こう言うのであった。
「この前。映画を観まして」
「街、でですか」
「街の映画館ですね」
「八条家の映画館で」
「はい、そうです」
まさにそこでだというのだ。実際に彼は映画館にも入ったりしている。それでそのことを理由にすることができたのである。幸いなことに。
「映画というのもいいものですね」
「そうですね。何か別の世界の様です」
「ああして。写し絵が見られるとはです」
「世の中も進歩しました」
「恐ろしいまでに」
「人が空を飛び海の中に潜る時代ですしね」

飛行機と潜水艦のことだ。どちらも第一次世界大戦で出て来たものだ。

「ああしたものもです」

「出て来たのだと」

「そう仰いますか」

「はい、そして」

さらにだとだ。義正は真実を隠したまま話すのだった。

「映画になった物語がです」

「素晴しかったのですか」

「思い出すまでに」

「そうです。素晴しいものでした」

これも事実である。だがそれは別の事実を隠す事実になっていた。

「また観たいものですね」

「ではまた映画館に行かれますか」

「そうされますか」

「はい、そうしたいと思います」

実際にそうしたいとだ。彼は真実を隠す為に答えた。

「是非」

「では今度の休日にです」

「そうされるといいかと」

部下達は彼の憂いの理由がわかったと思ってだ。笑顔で頷いてみせた。しかしだ。その隠された真実はだ。彼を悩ませ続けていた。

食事の時もそれは同じだ。仕事が終わり屋敷でディナーを食べていてもだ。ふと手を止めていまう。それを見てであった。

傍らに控える佐藤がだ。こう彼に囁くのであった。

「まさか」

「まさか？」

「まさかとは思いますが」

見ればだ。佐藤は疑念の顔になっていた。その顔で義正に囁いてきたのだ。

「あの電車でのことを」
「いや、それは」
「その通りですね」
長い間傍にいるだけはあった。彼に誤魔化しは効かなかった。
その誤魔化しを打ち消してみせたうえでだ。さらに囁くのだった。
「あの方を御覧になられて」
「敵同士だね」
義正はフォークとナイフを再び動かしはじめた。そのうえで白い皿の上にある肉を切りながらだ。そのうえで話をするのであった。
「白杜家とは」
「はい」
佐藤は主から少し離れて姿勢を戻してから答えた。
「その通りです」
「敵同士でも。それでも」
「気にかけられていますか」
「奇麗な顔だったよ」
こうだ。ほう、とした声で話すのだった。
「あの顔はね。とてもね」
「そう思われますか」
「とてもね。ただ」
「ただ？」
「敵同士だね」
また、だ。こう話す彼だった。

第三話　再会その二

「それは変わらないね」
「はい、どうしても」
「では僕はあの時の光景を」
「忘れるしかありません」
他には選択肢はない。そうした言葉だった。
「それはおわかり頂けるよう」
「わかっているよ。それはね」
義正も答えはした。
「わかるしかないから」
「そうです。それではです」
「それでは？」
「木曜の夜ですが」
話はそちらに移った。四日後のことである。
「宜しいでしょうか」
「パーティーにだね」
「はい、高柳代議士が主催されるパーティーに出席されますね」
「出ないといけないね」
それは義務だとだ。それだというのだ。
「ここはね」
「そうですか。出席されますか」
「高柳さんは我が家とも懇意だし」
八条家とだ。縁の深い人物なのだ。その縁で義正も彼を知っているのだ。
「それに。今度の商談では」
「新しい工場についてのですね」
「あの人と話をしたい。だからこそ」
「そうした意味も踏まえてですね」

「お話したいから。だから」
「わかりました」
佐藤も主の言葉に納得した言葉で返す。
「それでは。その様に」
「手配を頼むよ」
「はい。そういえばです」
ここでだ。佐藤はだ。気付いた様に義正に言ってきた。
「高柳さんにはご息女がおられます」
「そうだったね。三人の娘さんがおられて」
義正もだ。彼に合わせて話していく。
「上の二人の娘さんはもう嫁がれたけれど」
「末の娘さんがです」
「まだだったね」
「はい、そうなのです」
こう二人で話していく。
「その方ですが」
「まさかと思うけれど僕にかな」
こう言ってだ。義正は苦笑いを見せてみせた。
「僕に。そのお嬢さんと会ってはというんだね」
「如何でしょうか、それは」
「ううん、それはね」
「宜しいのですか」
「御見合いはね。少しね」
「御見合いではありません」
佐藤はそれは否定した。それとは違うというのだ。
「ただ。御会いされればと」
「それだけなのかい？本当に」
「そうです。確かに本音はそうした相手として考えて欲しいのです」
そうだというのである。
「ですが。旦那様がそう思われないのならです」

「強制はしないんだね」
「それをしても仕方ないですから」
「成程ね。だからなんだね」
「左様です。それでは御会いされるということで」
「うん、頼むよ」
それはいいというのだった。義正もだ。
そしてそのうえでだ。彼はこんなことも言った。
「あとはね」
「あとは？」
「この前主になったその高柳さんだけれど」
「三人の娘さんの兄君のですね」
「あの人にも会っておきたいし」
こんなことも話すのだった。そうだ。

第三話　再会その三

「一度高柳家にも行ってみようかな」
「高柳家主催のそのパーティーにもね」
「出席させてもらうよ」
「それでは」
「うん。後は」
義正はさらにだ。言葉を進める。食事を食べながらだ。
見れば食事はあらかた終わっている。最後のパンを食べている。
だがそこからだ。彼は話すのだった。
「デザートだけれど」
「それですか」
「何があるかな」
今回のデザートが何かもだ。彼は尋ねるのだった。
「今日は」
「アイスがありますが」
それだとだ。佐藤はそれだと話した。
「アイスクリームが」
「アイスクリームがだね」
「それで宜しいでしょうか」
「アイスか。あれはいいものだね」
目を細めさせてだ。義正はアイスがあると聞いて喜ぶのだった。
そしてそのうえでだ。彼はまた言った。
「冷たいお菓子なんて。あるものかなと思っていたけれど」
「氷は昔からありますが」
「それとはまた違う。いいものだね」
またアイスを褒める言葉を述べる彼だった。
「冷たくて甘い。明治帝もお好きだったらしいけれど」
「はい、あの方は甘いものがお好きでした」

「他にお好きだったものは」
「あんパンです」
まずはそれだと話すのだった。実際に明治帝はあんパンがお好きだった。帝が好まれたから流行り定着したという一面があるのだ。
「それとカステラに羊羹、それにです」
「アイスクリームだね」
「甘いものが全般的にお好きでした」
そうだったのである。明治帝は甘党だったのだ。
「お酒もお好きでしたが」
「日本酒だったかな」
「はい、どちらもお好きでした」
甘いものがお好きだったが酒も好まれたのである。
「そのアイスです」
「いいものだね。そうしたものを考えても」
義正の顔は笑顔になっていた。そのうえでの言葉だった。
「アイスは。いい食べ物だよ」
「これから世に広まりますね」
「いや、これは」
「これは？」
「広めるべきかな」
こう言うのだった。義正はだ。
「商品として売り出せばこれはね」
「売れますか」
「絶対に人気が出るよ。いい食べ物だよ」
「では。それもまた」
「レストランで出して百貨店でもお店で出して」
義正も八条家の人間だ。その立場からだ。
アイスクリームに対してだ。あらためて話すのだった。
「そうしていったらどうかな」
「そうですね。どう冷やしたままにしておくのかが問題ですが」

「その問題は。氷で解決するしかないかな」
「はい、それは」
「その辺りも考えていって」
パンを食べながら考える顔になってだ。そのうえでの言葉だった。
「売り出していこうか」
「では。今度はそれも」
「話していこう」
こう話してだった。そのうえでだった。
義正はアイスを食べてその味を楽しんだ。そうしたのだった。
そして真理はだ。彼女の屋敷でだ。
庭先で白い席に座ってだ。庭にある緑を見ながらだ。
一人佇んでいた。そのうえで物思いに耽る顔になっていた。
その彼女にだ。ふとだった。
初老の白髪の、姿勢の正しい厳しい顔の和服の男が来てだ。彼女に声をかけてきた。

第三話　再会その四

「真理、そこだったか」
「お父様」
「今日もそこにいるのだな」
こうだ。娘に対して言うのだった。彼は何時の間にか庭に出ていた。
「そして緑を見ているか」
「はい、少し」
「緑はいいものだな」
父はだ。庭のそれについてはこう言った。
「見ていればそれだけで落ち着く」
「そうですね。ですから今も」
「何か悩んでいるのか？」
娘の表情からだ。それを察しての言葉だった。
「まさか」
「悩みですか？」
「そんな風に見える」
娘の顔を見てだ。こう話すのだった。
「違うか、それは」
「それは」
「言えぬか」
口ごもった娘を見てだ。また言う父だった。
「そうなのか」
「いえ、別に」
「言えぬのならいい」
ここではだ。寛大なものを見せるのだった。父親としてだ。
「それはな」
「ですから私は」

「悩みがないのならいいがな」
「はい」
「それでだ。今度だが」
父は娘を気遣いながら話を変えてきた。彼女が口ごもっているのを見てだ。そしてそのうえでだ。父はまた話すのであった。
「今度のパーティーだが」
「パーティーですか」
「高柳さんの主催のな」
その人物の開くものだと話すのだ。
「それだがな」
「私が出るかどうか」
「どうする？それは」
「そうですね。それは」
「出るか」
「はい」
そうするとだ。静かに答えた真理だった。
「そうさせてもらいます」
「宴はいいものだ」
父は微笑んでだ。こんなことも娘に対して話した。
「ただ楽しむものではない」
「楽しむものではないですか」
「人を知る場でもある」
そういうものだと話すのである。宴がどういったものかをだ。
「そうした場でもあるのだ」
「人をですか」
「そうだ、人をだ」
こう話すのだった。
「人と出会い。そしてだ」
「そのうえで、ですか」
「知る場だ。はじめて出会って知る者もいれば」

それに限らないというのである。
「知っている相手に対してもだ」
「そうした方にもですか」
「より深く確かに知る場でもあるのだ」
宴はだ。そうした場所だというのである。
「それが宴なのだ」
「だからこそ出るべきですか」
「そうだ。だから宴は出るべきだ」
彼は確かな声で娘に話した。
「わかったな」
「はい、それでは」
「行くぞ」
「わかりました」
こうしてだった。真理もその宴に出ることになった。宴はその代議士、高柳が用意したホテルにおいてであった。そこで行われていた。
そこに義正がだ。佐藤を連れて入った。既に正装に着替えている。その姿で白と黄金に輝く場に入った。するとだ。
早速、である。小柄で白いカイゼル髭の額の広い男が来てだ。彼に笑顔で声をかけるのだった。
「おお、来てくれたね」
「あっ、これは」
義正もだ。その男に笑顔で応えた。
「高柳先生、お久し振りです」
「いやいや、元気そうで何よりだよ」
その高柳もだ。義正に笑顔で返す。

第三話　再会その五

「今日は招きに応じてくれて有り難う」
「御招き頂き有り難うございます」
二人は握手をしてから御互いに礼を述べ合う。
「それで今宵は」
「うん、最近のパーティーはあれだね」
ここでだ。高柳はこんなことを言うのだった。
「どうも西洋の赴きばかりだね」
「そうですね。パーティー自体がそうですし」
「西洋の場で西洋の酒を飲み西洋のものを食べる」
「西洋の服を着て西洋の音楽を聴いてですね」
「そればかりでは飽きると思ってな」
それでだというのである。彼はここでだ。
「だからせめて飲むものや食べるものはと思ってだ」
「それをですか」
「変えたんだよ。まず食べるものは」
そこから話す。何を用意したのかをだ。
「寿司を用意したよ」
「寿司ですか」
「うん、それをね」
彼が用意したのはそれだった。寿司だった。
「そして飲むものは」
「日本酒ですね」
「まあ場所とかはいつも通りだけれどね」
ここでは苦笑いも入れた。場所や服装、音楽はだった。西洋のままだった。しかしだ。そこにあえてというのであった。
「日本も入れてみたよ」
「面白いですね。それは」

「いいと思うんだね」
「西洋のオードブルもいいですが。お寿司もいいものです」
こう答えるのだった。
「同じ位に」
「そして酒もね」
「寿司とくればやはりですね」
「そうだろう？日本の食べ物には日本の酒だよ」
「はい、やはりそれが一番ですね」
「だからと思ってね」
高柳の話は続く。
「いや、理解してくれて有り難いよ」
「では。そのお寿司もまた」
「あるよ。好きなだけ食べてくれ給え」
「そうさせてもらいます」
こう話してだった。彼は実際にだ。
いつもの友人達と合流してだ。そのうえでだ。
寿司を食べていく。そうしてここでも話に興じた。
その中でだ。また話す彼等だった。
「ところで八条君」
「何かな」
友人の一人の言葉にだ。ここで応えるのだった。
「一体何かあるのかな」
「うん、さっき高柳先生とお話していたね」
「そのことかい？」
「あれかい？娘さんのことかい？」
彼はだ。楽しげに笑ってこう義正に尋ねるのだった。
「それでなのかな」
「そんなのじゃないよ」
だが、だ。義正は笑ってそれは否定するのだった。
「ただ。普通にね」

「普通にかい」
「挨拶をしただけなんだね」
「そうだよ。何だよ思ったんだい」
笑顔でだ。友人達に問う彼だった。
「それじゃあ」
「まあね。結婚かって思ってね」
「僕もね。そう思ったよ」
「僕もだよ」
これはだ。友人達の誰もがであった。そう思ったのである。
「そう思ったけれど。違うんだね」
「そういうのではなかったんだね」
「僕はね」
そしてだ。義正もその彼等に対して話すのだった。

第三話　再会その六

「結婚とかそうしたことはまだ」
「考えられないんだね」
「そうだよ。ちょっとね」
微笑んでだ。そのうえで彼等に話す。
その口調は真面目であった。冗談めいたものは何処にもない。
そしてその口調でだ。彼はさらに話すのだった。
「それでだけれど」
「高柳さんのことじゃなくて」
「他のことだね」
「うん。最近ね」
彼はだ。穏やかな口調に戻って彼等に話す。
「映画で面白いのはあるかな」
「映画？」
「映画かい」
「何かあるかな。最近映画にも凝っててね」
話題を変えたのだ。そちらにだ。
「何か面白いものをね」
「そうだね。最近だとね」
「何かあるかな」
「日本のものも増えてきたけれど」
「洋画で何かあったかな」
「亜米利加の映画であったかな」
ここで出て来たのはだ。この国の映画だ。
「あの国は随分映画に力を入れているみたいだけれどね」
「じゃあ亜米利加の映画がいいかな」
「そうだね、どうだいそれじゃあ」
「亜米利加の映画で」

「それでどうかな」
「そうだね」
義正もだ。彼等の話を聞いてだ。そちらに傾いた。
そしてそのうえでだ。あらためて彼等に話した。
「じゃあ。亜米利加の映画を観ようかな」
「亜米利加は文学もいいしね」
「そうそう、マーク＝トゥエンなんかいいね」
「作品だと若草物語とかね」
「風と共に去りぬもいいね」
「そうした作品の映画があればいいね」
義正はここでまた言った。
「是非観たいね」
「そうだね。名作を映画で観るのはいいものだね」
「文章で読むのと目で観るのとはまた違うから」
「実にいいものだね」
こう話していくのだった。彼は今は文学やそうしたものの話に興じたのだった。
その時真理はだ。白いドレスを着て宴の場にいた。そしてだ。
電車で彼女と共にいたあの女学生とは別のだ。小柄でまだ幼い顔の少女がいた。黒髪を左右でまとめている。目が優しい感じで唇が厚い。淡い黄色のドレスに身を包んだ彼女と共にいてだ。そしてその彼女に対して話すのだった。
「お父上の宴ですが」
「お父様のですか」
「はい、素晴らしいものですね」
穏やかな笑顔で話す真理だった。
「西洋の場に。こうして」
「お寿司があることがですね」
「それが素晴らしいです」
こう話すのだった。

「それにお酒も日本のものですね」
「お父様はこうしたものがお好きでして」
「西洋の中に日本のものがあることがですか」
「いえ、東洋がです」
日本だけでなくだ。東洋自体がだというのだ。
「東洋があること自体がお好きなのです」
「そうなのですか」
「西洋だけに目を向けていてはならないと仰っていまして」
この考えは明治から戦前まで共通しているものだ。日本人は西洋文明を受け入れたがそれでもだ。東洋の中にいたのである。
それはだ。彼女の父も同じだというのである。
「ですから。こうして」
「お寿司もですね」
「他にもです」
さらにだと話すのだった。
「支那のものもです」
「あの国のものもですか」
「はい、どちらもです」
彼女は笑顔で真理に話していく。

第三話　再会その七

「忘れてはならないと」
「それで今もですか」
「ですからこうしてお寿司と日本のお酒を」
「では私もです」
「召し上がられますか」
「お寿司を」
そちらをだというのである。
「お寿司を頂きます」
「お酒はどうされますか？」
「今は遠慮させてもらいます」
穏やかに笑ってだ。それはいいというのである。
「お酒は。どうも飲めなくて」
「そうなのですか」
「はい、ですからお寿司を」
そちらをだというのである。
「頂きます」
「このお寿司は」
その寿司の話にもなった。見れば宴に参加している者の殆どがだ。その寿司を笑顔で食べている。それを見れば好評ということがわかる。
それを見ながら箸に取ってだ。そうしてだ。
食べてみる。その味は。
「これは」
「如何ですか？」
「いいですね。ジャリだけでなく」
米だけではないというのだ。
「鮪も」

「いいですか」
「はい、素晴らしい味ですね」
目を細めさせてだ。そのうえでの言葉だった。
「このお寿司は」
「鮪以外にもありますが」
「そうですね。他にも」
見ればその通りだった。寿司のネタは他にも多くあった。
ハマチがある。鯛もだ。そうしたものを見てだ。
真理はだ。あらためて笑顔になってだ。そのうえで彼女に言った。
「お父様は本当に」
「はい、こうしたことには凝りまして」
「そうですね。本当に」
「私も。どうやら」
彼女はだ。微笑んでこうも言ったのだった。
「そうしたところがありますし」
「喜久子さんもですか」
「はい、そうです」
こうだ。彼女、高柳喜久子もこう真理に答えた。
「凝り性ですし」
「そうですね。喜久子さんもそうしたところがありますね」
「油絵にも」
こうだ。喜久子は微笑んで真理に話す。
「そうですしね」
「そういえば今も描かれていますね」
「そうさせてもらっています」
実際にそうだと真理に話す。
「風景画ですが。今も描かせてもらっています」
「何処を描かれてますか？」
「この町を」
彼女達が今住んでいるだ。その町をだというのだ。

「描かせてもらっています」
「神戸をですか」
「いい町ですね」
喜久子は微笑みのままだ。神戸そのものについて話した。
「見ているだけでは勿体ない程です」
「勿体ないですか」
「はい、私は」
喜久子はだ。彼女自身はどうかと話すのだった。
「見ているだけでは物足りない人間ですから」
「だからですか」
「はい、描きたくなります」
これがだ。彼女の考えだというのだった。
「ですから」
「それでなのですね」
「そうです。ですから描きます」
また話す。そうしてだった。
真理もまた楽しい時間を過ごしていた。その中でだ。

第三話　再会その八

ふとだ。真理達のところにだ。香川麻実子が来た。そしてだ。喜久子に声をかけるのだった。

「あの、高柳さん」

「はい？」

「御会いしたい方がおられるそうです」

こう話すのだった。彼女に対してだ。

「そう仰っています」

「私にですか」

「そうです。どうされますか？」

「どなたですか？」

喜久子は怪訝な顔になってだ。麻実子に尋ねた。

「それでその方は」

「私はそこまでは」

首を傾げさせてだ。こう述べる麻実子だった。

「聞いていませんが」

「そうなのですか」

「高柳さんのお父様からの伝言です」

「お父様からですか」

「はい、あの方からです」

麻実子はここでは微笑んで話すことができた。

「そうです」

「わかりました。それでは」

父の話ではだ。喜久子も断ることはしなかった。彼女は父に対して従順な娘である。だからだ。断ることは決してないのである。

そうしてだ。麻実子に頷いてからだ。彼女にあらためて尋ねるのだった。

「それでどちらに」

「はい、一旦部屋から離れて」
そうしてだというのである。
「そのうえで。別室で御会いするとのことでして」
「わかりました。それでは」
「暫くはです」
ここでだ。麻実子はだ。
真理に顔を向けてだ。彼女にはこう話したのだった。
「白杜さんは」
「はい、私はここで、ですね」
「待っていて下さい」
こう話すのだった。
「宜しいでしょうか」
「わかりました。それでは」
真理は笑顔でだ。麻実子のその言葉に頷いた。そしてだった。
真理は一人になった。そこでその場に残り一人佇むのだった。
そしてだ。義正もだ。
彼のところに高柳が来てだ。そのうえで声をかけてきたのであった。
「いいかな」
「はい、何でしょうか」
「少し来てもらいたいところがあるけれど」
「何処にでしょうか」
「うん、ちょっと別室にね」
そこにだというのである。
「いいかな。少しね」
「はい、わかりました」
彼は何も疑うことなくだ。素直に述べた。
「それでは」
「では僕達はね」
「ここに残るよ」

「そうさせてもらうよ」
周囲の友人達はだ。こう義正に述べた。
「それじゃあここで待ってるからね」
「そうさせてもらうよ」
「こうしてお喋りをしてね」
「待たせてもらうよ」
「悪いね」
申し訳ない微笑を浮かべてだ。義正は彼等に述べた。
「それじゃあ。今はね」
「うん、じゃあね」
「待たせてもらうよ」
「さて、僕達はこれから」
「踊ろうか」
彼等は彼等でだ。楽しむというのであった。
「君もそちらでね」
「楽しんできたらいいよ」
こうしてだった。彼等の声を受けてだ。義正はその部屋に向かう。
そしてそこには。

第三話　再会その九

彼女がいた。喜久子がだ。義正は彼女の姿を見て言った。
「貴女は」
「八条義正さんですか」
「はい、そうです」
まずは彼女の言葉を受けたのだった。
「そして貴女はですね」
「高柳喜久子と申します」
一礼と共の言葉だった。それを受けてだ。
義正も返礼する。それからだった。
そのうえでだ。義正は高柳の言葉を受けたのだった。
「どうかな、八条君」
「どうかといいますと」
「いや、うちの娘とね」
穏やかで親しげな声でだ。彼に話すのだった。
「少し。この館の周りをね」
「散策をですか」
「それをしてはどうかな」
こう話すのだった。
「それはどうかな」
「そうですね。それでは」
義正もそれを受けようとした。しかしである。
ここでだ。喜久子がこう父に言うのだった。
「あの、お父様」
「駄目かな」
「駄目とか。あの」
「いいじゃないか。只の散策だよ」
そこにあるものはあえて言わずにだ。話すのだった。

「そうしたらいいよ」
「散策ですか」
「そう、散策だよ」
最初はそこからはじまる。だからこその今の彼の言葉だった。
「行って来たらどうかな」
「そうなのですか」
「勿論御前が嫌ならそれでいい」
無理強いはしない。娘に対して寛容なものも見せる。
「けれど。そうじゃなかったらね」
「行って来いというのですね」
「どうだい、それで」
また言う彼だった。そしてであった。
二人はだ。高柳の言葉を受けることにしたのだった。
二人で外に出てだ。散策をはじめた。その中でだ。
義正はだ。庭の花達を見ながらだ。傍らにいる喜久子に尋ねた。
「花は何がお好きでしょうか」
「花ですか」
「はい。色々な花がありますが」
この庭でもそれは同じだった。見れば庭にあるだけではない。池にもある。赤や白、そして青とだ。色も様々なものがそこにある。
そうした花達を見ながら。喜久子に尋ねたのである。
「どういったものが好きでしょうか」
「花は嫌いなものはありません」
こう穏やかに笑って答える喜久子だった。
「花はどれもです」
「お好きですか」
「菖蒲も。菫も」
まずはそういった花々からだった。
「それに椿や菊もです」
「薔薇はどうでしょうか」

「薔薇ですか」
「はい、西洋の趣のする花はどうでしょうか」
義正は今薔薇をみていた。庭の薔薇は白薔薇だった。緑の棘の先にあるその薔薇達をいとおしげに見ながら。喜久子に尋ねたのだ。
「そういったものは」
「それも好きです」
喜久子は微笑んで答えた。
「薔薇は。とりわけ」
「とりわけ？」
「黄色いものが好きです」
それがだというのである。
「黄色の薔薇が好きです」
「そうですか。黄色ですか」
「黄色い薔薇は幸せの象徴と利いていますが」
「その様ですね」
義正もそのことは聞いていた。それで頷くことができたのだ。

第三話　再会その十

「あちらでは」
「それもありますから」
「黄色い薔薇がお好きですか」
「はい、とても」
言葉がだ。いささか強いものになった。口調は同じだがその単語がだ。
「好きです」
「そうですね。花は美しいだけでなく」
「幸福ももたらしてくれますから」
「だからいいですね」
義正も微笑んで話す。
「だからこそ」
「そう思います。ところで」
「はい、ところで」
「八条さんはどのお花が一番お好きでしょうか」
今度はだ。喜久子が彼に尋ねたのである。
「どれが一番お好きでしょうか」
「そうですね。私は」
「はい、八条さんは」
「百合でしょうか」
考える顔になってだ。それかというのだった。
「百合が好きですね」
「あの花がですか」
「今も咲いていますね」
池のほとりを見る。確かにそれがあった。
白い百合がだ。静かに咲いている。彼はその一輪の百合を見ながらだ。喜久子に対して穏やかで優しい声で話すのだった。

「あの場所に」
「はい、確かに」
「百合は。清らかで優しい花です」
そうした花だというのである。
「ですから私は」
「お好きなのですか」
「どれだけ見ていても飽きません」
こうまで言うのであった。
「本当に」
「では八条さんにとっては」
ここでだ。喜久子は彼にこの言葉をかけた。
「百合は桜と同じなのですね」
「そうですね。桜はやはり」
「最も。よい花ですね」
「桜は別格です」
こう言ってだ。彼もそれを否定しなかった。
「この世で。やはり」
「最も美しい花ですね」
桜についての話はだ。二人は同じだった。
「春の。ほんの一時に咲く」
「その桜こそがですね」
「最も美しい」
「そう思います」
「それにです」
さらにだとだ。ここで義正は言った。
「花びらの一枚一枚までもが」
「実に美しいと」
「時々思うのです」
ここでだ。義正は遠くを見る目になって喜久子に述べた。
「桜がいつも咲いていれば」

「非常に素晴らしいと」
「そう思います。ただ」
「ただ？」
「それでは価値はありませんね」
桜が常に咲いていればだ。それで価値がなくなるというのだ。
こう話してだ。義正は遠くを見る目のままだ。喜久子にさらに話した。
「桜は春にあってこそですから」
「だから。価値がありますね」
「はい、あります」
まさにだ。その通りだというのだった。
「常に咲いていては価値はありません」
「それはどうしてだと思われますか？」
「言葉でははっきりと言えません」
こうも言う。それでもだった。
義正は遠くを見る目のままで。それで言葉を続けていく。
「けれどです。おそらくは」
「おそらくはですか」
「桜は。散る姿もまた美しいからでしょう」
「散る姿もですか」
「終わりがよければ全てが美しいと言われますね」
桜はない。だが桜をそこに見ながらの言葉だった。

第三話　再会その十一

「咲いていてそして」
「散る。その最後も美しいからこそ」
「常に咲いていては価値がないですか」
「八百比丘尼でしたね。死ねない苦しみ」
義正は話にそれも入れた。人魚の肉を食べて死ねなくなったというその女のことをだ。伝説の中にあるその女のことも話すのだった。
「散らない花、終わらないものは」
「よくはありませんか」
「そうではないでしょうか。ですから桜は」
「価値があるのですね」
「そういうことでしょうか。だからこそ桜は」
「美しく。価値のあるもの」
二人で話していく。そうしてであった。
二人はまた百合を見た。その池のところに咲いている百合を。
それを見てからその場を去った。そしてだ。
義正はだ。友人達の場所に戻った。するとだ。
そこに来た彼はだ。こう言うのだった。
「少しね」
「少し？」
「どうしたんだい、一体」
「また少し席を外していいかな」
こう彼等に言うのだった。
「そうしていいかな」
「何だい、何処かに行くのかい」
「さっきは何処かに行ったと思ったけれど」
「またなのかい」
「そうなんだ。いい花を見つけてね」

義正は正直にだ。友人達に話した。
「それでだけれどね」
「花かい」
「それは実際の花だね」
「君が言うとなると」
「何だと思ってるんだい？」
ここで言ったのはだ。義正だった。
彼は自分で言ってだ。そのうえで困った顔になってだ。友人達に対するのだった。
「まあそれはね」
「花はもう一つの意味があるじゃない」
「それだよ」
「美人のことだっていうのかい」
そのもう一つの意味は義正にもわかった。
それだとだ。察してそのうえで友人達に返した。
「そう言うのかい」
「まあ違うみたいだね」
「実際に花を見に行くんだね」
「この場合は」
「そうだよ。嘘は言わないよ」
それは確かだというのだった。義正の言葉はしっかりとしたものだった。
「本当にね」
「わかってるよ。じゃあね」
「行ったらいいよ」
「僕達はここにいるからね」
こう言ってだ。そうしてだった。
彼を行かせる。こうしてだった。
義正はまた舞踏の場を後にした。そうして向かったのは。
先程喜久子と共に来たあの庭だった。その池にである。

そこに来てだ。あの百合のところに向かうのだった。
かなり美しい百合だった。それでまた見たくなったのだ。
緑の絨毯を踏みながら百合のところに向かう。いよいよその百合が見えようとしていた。
だが、だ。そこには。
白百合だけではなかった。彼女もいたのだった。
彼女はその百合の傍にしゃがみ込んでだ。そのうえで百合を見ていた。
それを見てだ。義正は。
去ろうとした。だがそれはできなかった。
彼女の横顔を見た。あの横顔をだ。
それを見てしまって見惚れてしまった。足が止まった。
それは一瞬である。だがその一瞬がだ。彼の運命を決めてしまった。
動きを止めた彼はだ。足を踏み締めていた。それで靴と緑の絨毯との間で音が出てしまった。そしてその音によってであった。
彼女は顔をだ。彼に向けたのだった。それで彼を見てしまった。
「えっ・・・・・・」
「貴方は」
御互いに目を合わせてしまった。それはもう避けられなかった。
二人はだ。ここでまた出会いそのうえでだ。何かがはじまろうとしていたのだ。

第三話　　完

２０１１・３・５

第四話　はじまりその一

第四話　はじまり

真理はだ。義正に対してだ。
恐る様な声でだ。こう言ったのだった。
「貴方は」
「はい、前にも御会いしましたね」
「そうでしたね」
まずはだ。こうしたやり取りからはじめたのだった。
「あの時に」
「覚えています」
真理はだ。ここで立ち上がった。そのうえで彼と正対してからだ。
あらためて話したのだった。
「よく」
「そうですか。よくですか」
「中々。忘れられません」
こう義正に話した。
「あの時のことは」
「私はです」
そしてだ。義正もここで言うのであった。
「実はです」
「実は？」
「電車に乗った時のことですが」
彼が話すのはだ。その時のことだった。
その時と今のことを頭の中で重ね合わせながらだった。彼は真理に対してだ。静かだが確かな言葉で話していくのだった。
「貴女を見ました」
「私もです」
ここで真理は正直に言った。

「あの時貴方を見てしまいました」
「そうだったのですか。貴方も」
「はい、私もです」
こうだ。御互いに話すのだった。
「見て。そして」
「そのうえで、ですね」
「忘れられませんでした。今も」
「同じなのですね」
義正はだ。真理もだ。そうだとはっきりと認識した。
そしてそのうえでだ。また彼女に言った。
「何故かというと」
「それはおわかりなのですか？」
「いえ、わかりません」
顔は背けなかった。しかし言葉がだった。
逸らさせていた。どうしてもだった。
「ですが。心に残ってしまいました」
「そうだったのですか」
「貴女もなのですね」
「はい、どうしてかわかりませんが」
彼女もだ。どうだというのだった。
「心に残って。そして」
「忘れられないのですね」
「あの時から今もです」
また言う真理だった。
「忘れられないでいます」
「私もです」
義正はだ。ここでもそうだというのだった。
そのうえでだ。真理を見ていた。その黒く澄んだ目をだ。
星が瞬いているかの如きその目を見てだ。また言う彼であった。
「不思議ですね。私達は」

「はい。白杜家と八条家です」
「御互いに。嫌い合っているというのに」
「心に残るなんて」
「嫌い合っているからでしょうか」
義正はこうも考えた。
「そのせいでしょうか」
「だからこそ意識すると」
「はい、そうなのでしょうか」
こう真理に話すのだった。
「両家は。そうした関係なのですから」
「ですが。それでは」
「こうはならない」
「私は。憎しみを感じていません」
それはないとだ。義正に対して言った。
「嫌悪も。感じてはいません」
「左様ですか」
「貴方はどうでしょうか」
己のことを話してからだった。そのうえで義正に尋ねた。

第四話　はじまりその二

すると義正はだ。こう真理に答えたのだった。
「私はです」
「貴方は」
「憎しみを忘れてしまっています」
人間は誰でもそうした感情は持っている。それもまた人間だ。
しかし今はだ。その感情をだ。忘れてしまっているというのだ。
「嫌悪もです」
「そういったものをですか」
「はい、忘れてしまっています」
彼はだ。そうだというのである。
「完全にです」
「そうですか。忘れていますか」
「感じず。そして忘れてしまう」
「不思議なものですね」
「全くです」
二人の言葉はだ。ここでは戸惑いを感じているものだった。
その戸惑いを二人共見せながらだ。そうして話すのだった。
「こうしたことになるとは」
「おかしな話です」
「今こうしてお話していても」
「向かい合っていても」
どうかとだ。二人で話すのだった。
「そういった感情を忘れてしまっています」
「感じないままです」
「どうしても。何故かわかりませんが」
「そうなっていますね」
「そして」

そしてだとだ。義正から話した。
「憎しみを感じずにです」
「他の感情がですね」
「どうしてでしょうか。こうして御会いしていると」
「それだけで、ですね」
「はい、楽しい気持ちになります」
そうなっているとだ。彼は真理に話したのだった。
顔は思いつめたものになっている。だが本人はそれには気付いていない。
そして真理もだ。同じ表情になっていた。しかしだった。
彼女も同じだった。そうなっていたのだ。
それを話してだ。二人でだった。
見詰め合いながら。そうしてだった。
義正がだ、また先に口を開いて告げたのだった。
「何故。楽しいと思えるのでしょうか」
「私も。実は」
「楽しいと思われていますか」
「はい、そうです」
その通りだとだ。その顔で義正に話したのだった。
「そうなっています」
「同じなのですね。そのことを」
「これはどういうことでしょうか」
義正にはわからなかった。そのことはだ。
そしてそれはだ。彼女もだった。
「私もまた」
「わかりませんか。今は」
「はい、わかりません」
こう答えるしかなかった。
「これは一体」
「そうですね。私もです」

「貴方もですか」
「ただ。わかりませんが」
それでもだとも。義正は返すことはできた。
「悪い感情は感じません」
「そうですね。私もです」
「御互いに。そうなのですね」
「ですね。ただ」
今度はだ。真理から言ってきた。その言葉は。
「今はこれで」
「戻られますか」
「そうしたいと思います」
こう義正に述べるのだった。
「貴方は。どうされますか」
「私もです」
義正もだ。そうだと述べるのだった。

第四話　はじまりその三

「そうしたいと思います」
「舞踏の場にですね」
「どうも。舞踏は好きではないのですが」
ダンスはだ。それは好きではなかった。彼は音楽を聴くことは好きでもだ。ダンスをするということはだ。彼の好むものではないのである。
「それでもですね」
「戻らないとなりませんね」
「では。それでは」
「はい、それでは」
そしてだ。二人同時に言ったのだった。
「また」
「御会いしましょう」
二人同時に言ってしまった。するとだ。
彼等は驚いた顔になってだ。御互いを見やった。
そしてそのうえでだ。まずは義正が真理に言った。
「また、ですか」
「そうですね。再び」
真理もだ。そのことをここで話した。
「会いたい、ですか」
「おかしいですね。何か」
「そうですね。本当に」
「私達は御互いにそれはできないのに」
「そうなのに」
八条家と白杜家、そのそれぞれの家のことを考えてだ。
それをわかってだ。そのうえでの今の言葉だった。
そしてだ。御互いに見てだった。

「こうして。この言葉を出すのは」
「どうしてでしょうか」
「けれど。本当に」
「そうですね」
それでも御互いにだ。言い合うのだった。
「また。御会いしましょう」
「そうしましょう」
二人は微笑みさえ浮かべ合った。そうしてだった。
互いに別れた。だがそこには遺恨めいたものはなかった。
義正は微笑んだまま戻った。するとだ。
友人達がだ。その彼に対してこんなことを言ってきた。
「おや、また何かあったのかい？」
「いいことがあったのかい？」
「顔が笑ってるよ」
「笑ってるかな」
自分でもだ。ある程度自覚していた。だからこう返したのだった。
そうしながら彼等の中に戻るとだ。そうして話をした。
その彼にだ。友人達はこうも話した。
「まあ君もね」
「少しは女性と付き合うといいよ」
「そろそろ。考えないといけない歳だしね」
「それもあるしね」
「結婚だっていうんだね」
ここでだ。義正は自分から言った。
「それのことだね」
「そうそう、結婚ね」
「結婚もしないといけないしね」
「そろそろね」
「結婚、今でも」
それについてどう思うのかも話したのだった。

「実感できないけれどね」
「そうだよ。真面目に考える頃だよ」
「結婚だけじゃなくて異性のこともね」
「プラトニックとかそういう淡いものじゃなくて」
「本気に考えないとね」
「恋愛、そして結婚」
その二つがだ。彼の中に宿った。
それを実感しながら。彼はそこにいた。そしてだ。
真理も友人達のところに戻った。するとだ。
喜久子がだ。彼女に対して話してきた。その話すことは。
「あの、真理さん」
「何かあったのですか？」
「少し。面白いことを聞きましたが」
「面白いことですか」
「はい、何でも東京の方で」
東京の話はだ。彼女達にとっては遠い話だった。神戸にいてはだ。

第四話　はじまりその四

「歌舞伎が面白いことになっているとか」
「面白いですか」
「はい、役者で素晴らしい人が出られたとか」
それでだというのである。
「それでそうなっているようです」
「東京の歌舞伎ですか」
「御覧になられたことはありませんか？」
「歌舞伎は。上方のしか」
観たことがないというのである。
「ですから」
「そうですか。上方ですか」
「江戸歌舞伎ですね」
上方に対してだ。それだというのだ。
「江戸のものはまだ観たことがありません」
「では一度御覧になられたいと思われたことは」
「助六でしょうか」
十八番の一つだ。それが話に出た。
「あれはいいそうですね」
「らしいですね」
「助六と揚巻のどちらも」
主人公とヒロインだ。その二人の存在がまずある演目である。
「衣装も役も素晴らしいと」
「江戸紫ですね」
「その衣装が素晴らしいとか」
「そうらしいですね。江戸の歌舞伎も素晴らしいのですか」
「それを確かめる為にも」
「一度はですね」

こんな話をしていくのだった。だがその話をする中でもだ。
真理はだ。やはり義正のことを思い浮かべる。そうなっていたのだ。
義正は屋敷に帰りだ。彼のその青を基調とした部屋の中でだ。こう佐藤に述べた。
「不思議だな」
「不思議とは？」
「いや、ふと見ただけでだ」
そのことをだ。彼に話すのだった。
「頭の中に残るものはあるな」
「頭の中にですか」
「そうだ。ふと見たものでも」
それでもだというのである。
「そう思う。そして」
「そして？」
「それが離れない」
真理のことを思い浮かべながら。話していく。
「そうしたこともあるのだな」
「そうですね。それはありますね」
何故主がそんなことを言うのか把握しないまま。佐藤は答えた。
「確かにその通りですね」
「はい。ただ」
「ただ？」
「それが奇麗なものなら」
それならばと。佐藤は義正にさらに話す。
「心を清らかにします」
「心をですか」
「そう、その人の心をです」
清らかにする。そうだというのだ。
「そうしていきます」

「逆に言えばそれが醜いものなら」
「それは心を蝕みます」
そうなるというのだ。その場合はだ。
「心に残るものはそれだけ大事だと思います」
「そうなのだね。それでは」
「はい、それは旦那様にとって奇麗なものですね」
「とてもね。そうだよ」
「それならです」
どうかと話す。そしてだった。
佐藤はだ。義正に対してだ。あらためてこう話した。
「その清らかなものを昇華させることもです」
「昇華？」
「はい、昇華です」
話がそちらに向かう。

第四話　はじまりその五

「それもまたいいものです」
「清らかなものを昇華させて」
「現実にもそれを昇華させてはどうでしょうか」
「では。頭の中に思い浮かべた光景は」
例えだ。そうしての話だった。
「それを実際に描くこともだね」
「いいものです」
「そうなんだ」
それを聞いてだ。義正はまた言った。
「現実のものにするのも」
「それが芸術家だと思います。では」
「では僕は」
「旦那様は？」
「一つの芸術を作ろうとしているのかな」
「芸術？」
「それは芸術なのかな」
そしてだった。この言葉はだ。
彼は心の中で呟いたのだった。
「恋というものは」
「とにかくです。芸術なら」
「芸術なら？」
「いいと思います」
佐藤はその彼にこう話した。
「芸術は人間が生み出す中で最も素晴らしいものの一つですから」
「だからいいんだね」
「人間は。この世に生まれたのなら」
それならば。運命論的な話だった。

佐藤は今度はそれを話に入れてだ。主に話すのだった。
「素晴らしいものを形作るべきです」
「そうあるべきなんだね」
「人は美しくかつ醜いものでもあり」
それは佐藤も否定しなかった。できなかった。
人間は絶対的な存在ではなく揺れ動き染まるものだ。その染めるものが何かによってだ。美しくもなり醜くもなるというのだ。
それを話してなのだった。
「醜いこともしてしまいますが」
「美しいこともだね」
「人が醜いだけのものなら世界はより簡単にまとまっていました」
佐藤はここではあえて悪を話した。醜いものを悪としてだ。
「そして美しいだけでもです」
今度は善であった。
「世界はどれだけ単純でしょうか」
「しかしそうではないんだね」
「はい、世界は複雑です」
また言う佐藤だった。
「だからこそ。素晴らしいものを残すべきではないでしょうか」
「美醜が共にある世界だからこそ」
「そう思います。私は」
佐藤は微笑んで義正に話した。
「人は。その美醜の中で何かを残すべきです」
「わかったよ。それではね」
「はい、それでは」
こうしてだった。義正はだ。
一つの道を見たのだった。だがその道に進もうとはまだ決めていなかった。決められなかった。だが確かに見たのである。
そして真理もだ。今は麻実子と話していた。
彼女は静かにだ。紅茶を飲みながら。白い部屋の中で彼女に言っ

た。
「私は」
「どうかされたのですか？」
「一つ思うことができました」
こう麻実子に話す。
「頭の中から離れないことができたのです」
「頭の中からですか」
「そうです。そうなっています」
麻実子の顔を見て。さらに話す。
「どうしても」
「それは一体？」
「ある方のことです」
「あの方とは」
「いえ」
言ってしまってからだ。真理は気付いたのだ。
気付いてだ。それですぐにだった。
打ち消してからだ。そうしての言葉だった。
「何でもありません」
「そうですか」
「はい、何でもありません」
また言うのだった。

第四話　はじまりその六

「気にしないで下さい」
「わかりました。それにしても」
「何かありますか？」
「真理さんにお話したいことがあります」
麻実子はだ。こう彼女に話してきた。話題を変えてきたのだ。
「喜久子さんのことですけれど」
「喜久子さんですか」
「どう思われますか？そろそろだと思いますか？」
微笑んでだ。こう真理に話すのである。
「どう思われますか？」
「そろそろといいますと」
「ご結婚のことです」
麻実子は微笑んでだ。それだと話すのである。
「あの方もそろそろ。そうされてもいいですね」
「そうですね。お姉様達はもう結婚されていましたね」
「はい」
麻実子は笑顔になってだ。その通りだと頷くのだった。
「御二人共。幸せになられています」
「父に言われた言葉ですが」
ここでだ。真理はこう前置きしてだ。麻実子に対して話した。
「人は誰でも幸せになる権利があると」
「誰でもですか」
「はい、私もそう思います」
これが喜久子への言葉だ。そしてだ。
この言葉は喜久子に対するものだけではなかった。それは。
今目の前にいる麻実子にも。言うのであった。
「麻実子さんも」

「私もですか」
「誰でもですから」
にこりと微笑んでの言葉だった。
「如何ですか?それは」
「そうですね。私も」
そしてだ。麻実子も微笑んでだった。真理に対して述べた。
「近いうちに。どなたかと」
「ですね。考えられるといいと思います」
「それでしたら」
そしてだ。麻実子はだ。
自分から真理に対してだ。こう述べたのだった。
「それは真理さんもですね」
「私もですか」
「はい、真理さんもです」
穏やかな笑顔での言葉だった。
「幸せにならないといけませんね」
「そうですね。それは」
「ですから。考えられてはどうでしょうか」
善意による言葉だった。しかしだ。
真理は麻実子のその言葉にだ。顔を曇らせてしまった。
そしてそのうえでだ。こう言葉を返すのだった。
「ですがその相手が」
「相手が、ですか」
「許されない相手だとしたら」
こう言うのであった。
「仇の相手だとか」
「それですと」
麻実子はその話を受けてだ。あるものを思い出した。それは彼女がこの前読んだ英吉利の戯曲だった。それを思い出してである。
「シェークスピアですね」

「あの劇のですね」
「ロミオとジュリエットですね」
それだというのである。
「それになりますね」
「そうですね。言われてみれば」
「あの劇では。最後は」
麻実子もだ。その結末は知っていた。ロミオとジュリエットのその結末をだ。
「二人共。旅立ってしまいますね」
「そうですね」
暗い顔をしてだ。そのうえで述べた真理だった。
「悲しいことに」
「結末として。本当に」
「ただ」
「ただ？」
「私は。こう思いました」
麻実子はだ。考えていく顔になってだ。そのうえで真理に話した。

第四話　はじまりその七

「あの二人は。幸せになれる方法もあったのではないかと」
「幸せにですか」
「真理さんは先程仰いましたね」
真理自身の言葉をだ。彼女はここで出した。
「誰もが幸せになれる権利があると」
「はい」
「私は。それは義務だと思います」
「義務ですか」
「はい、誰もが幸せにならなくてはならない」
それはだ。絶対にだというのだ。
「ですから」
「誰もがですか」
「当然他の方に迷惑をかけない限りで、ですけれど」
麻実子もはこのことを話すのも忘れなかった。人間としてのモラルである。それを忘れてはならないというのである。そうしたことだった。
「ですから」
「だからですか」
「はい、だからです」
また話す麻実子だった。
「ロミオとジュリエットも」
「幸せにならなくてはならなかった」
「絶対にですね」
「後はどうして幸せになるべきか」
真理は考えながら話していく。
「そうなのですか」
「それが一番問題ですけれど」

「誰もが幸せにならなくてはならない」
「最近言われていますね」
麻実子はだ。今度は巷の話を出して来た。
「自由、そして民主主義」
「そうですね。自由主義ですね」
「そうした時代ですから。ですから」
「誰もがだと」
「そうならなくてはならないと思います」
また真理に話した。
「絶対に」
「これからはですか」
「はい、ですが」
「ですが？」
「考えてみればこれは」
どうかだと。麻実子はここで己の言葉を変えた。
そしてだ。こう言うのであった。
「何時でも当然のことですね」
「時間と関係なくですか」
「人間ですから」
だからだというのだ。
「そんな奴隷とかそういうのはありませんから」
「奴隷は。そもそも」
「それ自体が間違っていますよね」
「そうですね。絶対に」
この認識があってだ。前提となっていた。それで話す二人だった。
「ですから。何時の時代でもどの国でも誰でも」
「人はですね」
「幸せにならないと思います」
また話す麻実子だった。
「人間ですから」

「では私も」
「勿論です。ジュリエットにならずに」
「幸せにならないといけませんね」
「ロミオとジュリエットは悲劇です」
それは否定できなかった。この作品は言うまでもなく悲劇だった。
「悲しい話は。小説や舞台だけで充分です」
「現実は。幸せが」
「あるべきですから」
これは麻実子の言いたいことだった。それを真理に話すのだった。
そしてそれが終わってからだ。彼女は。
あらためて真理に話す。それは。
「では今は」
「今は？」
「紅茶をもう一杯飲みませんか」
話はこれだった。
「どうされますか」
「そうですね。それでは」
真理もだ。麻実子のその言葉に笑顔で頷いた。

第四話　はじまりその八

そしてだ。二人で紅茶を飲む。そうしたのである。
この日はそれで終わった。しかしだ。
義正も真理もだ。御互いのことを考えるようになっていた。それが次第に止まらないようになっていた。そうしてであった。
義正はだ。こう供にいる佐藤に話すのだった。
「思えば」
「何でしょうか」
「縁というものはわからないな」
こう言うのだった。
「人の出会いは」
「人のですか」
「どうして出会ってしまうのかわからない」
実際にこう言うのだった。それも一度や二度だけではなくだ。
仕事の合間の休憩の時にも町を歩いている時にもだ。言ってしまう。言う時のその目はだ。何処かだ。遠くを見る目になっていた。
その目で話してだ。いつもこうも言うのだった。
「そして」
「そして？」
「実際にあるのだな。許されない関係というのは」
話す言葉はこれだった。
「想えない相手というのは」
「悲劇ですか？」
「ロミオとジュリエットか」
彼は自分から話した。それをだ。
「あれは。本当にあるのか」
「そうですね。大なり小なりですが」
それでもだと。佐藤は話す。

「あるのでしょうね」
「そうなんだね。実際に」
「シェークスピアは舞台です」
現実ではない。それでもだというのだ。
「ですが。それでもです」
「現実も書いているんだね」
「人間の書くものは。全てが夢ではありません」
「現実も含まれているんだね」
「人間が現実の存在ですから」
だからだというのだ。舞台であってもだ。
そこにあるものは全て夢ではない。そうだというのだ。
「ですから。現実もまたです」
「そこにあるんだね」
「そう思います。ただ」
「ただ？」
「ロミオとジュリエットは絶望して死を選びましたが」
それでもだというのだ。ここで話したのは佐藤であった。
「しかし現実はです」
「絶望してもだね」
「はい、諦めてはいけません」
これが彼の言うことだった。
「ましてや自ら死を選ぶのは」
「駄目だね」
「決してです。あってはなりません」
佐藤はいつもその言葉を強くさせる。そしてだった。
彼はだ。主にだ。念を押す様にして述べるのだった。
「若しも旦那様がロミオだとしても」
「そうだとしても」
「ロミオにならないで下さい」
こう言うのだった。

「絶対にです。ならないで下さい」
「それは絶対にだね」
「はい、絶対にです」
強い言葉でだ。いつも話す。
「何があってもいけません。それは」
「じゃあどうするかだね」
「恋は成就させるものです」
「絶対にだね」
「悲恋ではなく幸せな恋です」
彼もだった。話すのだった。
「人が目指すべきはです」
「それなのだね」
「幸せを求めずして何なのか」
こう話していく。
「そう思います」
「強いね」
「そうした強さはあっていいと思います」
佐藤はいつもだ。己のその信念を話すのだった。

第四話　はじまりその九

「他人への思いやりと共に」
「同時にだね」
「そうです。ですから」
「その強さはいいんだね」
「持っていなければです」
佐藤の言葉が強いものになるのだった。
「駄目なのです」
「そうなんだね」
「強さは。何の為にあるのか」
佐藤はさらに話す。
「決して暴力ではありません」
「暴力の為ではない」
「はい、暴力は何にもなりません」
それは否定するのだった。全否定だった。
「それは他人を傷付け」
「その身体だけでなく心も」
「そしてやがては己を滅ぼします」
それこそがだ。暴力だというのである。
「それはあってはならない力です」
「強さではないね」
「暴力は弱さです」
強さとは対極にあるものだと。そう規定されていく。
「それは何にもならないものです」
「では。本当に強さは」
「成し遂げるものです」
そうしたものだというのだ。
「清らかなものをです」

「そういうことなんだね」
「旦那様には是非です」
「そうした強さを持ってもらいたいんだね」
「それが私の願いですが」
「わかったよ。清らかなものをだね」
いつも頷くのだった。彼のその言葉を受けてだ。
そしてだ。義正はだ。深く考える目になって述べるのだった。
「ロミオとジュリエットではなくて」
「あの二人であって二人ではなくです」
「幸せにだね」
「旦那様が若しロミオなら」
それならば。どうかとも話されるのだった。
「幸せを勝ち取るロミオになって下さい」
「幸せを」
「ロミオは幸せを勝ち取れませんでした」
様々な経緯でだ。だが佐藤はそうなれなかった原因をだ。強さがなかったからだというのだ。
「あの時彼はです」
「死を選んでしまった」
「ジュリエットを失ったと思いそれに耐えられなかった」
「それも弱さなんだね」
「私は思うのです」
ロミオに対しても。そして恋愛に対してもだ。
「想う相手が去ってしまっても」
「絶望に打ちひしがれてはいけない」
「そうです。その愛を心の中に留め」
そうしてだというのだ。
「生き続けるべきなのです」
「そうならないといけない」
「はい、若しあの時ロミオが生きていれば」

どうなったかというのだ。
「ジュリエットを手に入れられました」
「そうだね。ジュリエットは仮死でしかなかったから」
「やはり強さは必要なのです」
踏まえての言葉だった。
「愛にはです」
「一途な強さだね」
「そうですね。一途ですね」
真っ直ぐな。そうしたものだというのだ。
「そうでなければならないです」
「わかったよ。それじゃあ」
「はい、それでは」
「ロミオになっても僕は」
「死んではなりません」
「弱くては」
「そう思います」
佐藤の言葉は強い。しかしだ。
彼はよくここでだ。困った顔になって述べるのだった。

第四話　はじまりその十

「ですが私は」
「ロミオではないね」
「相手はもう決まっていますし」
その婚約者のことだ。
「波風はありませんし」
「あの様にだね」
「はい、ありません」
それはないというのだった。
「ですから。現実としては完全には話せませんが」
「いや、それでも」
「御役に立てていますか？」
「充分だよ。そうだね」
納得した顔で言う義正だった。それが常だった。
そうした話の中でだった。彼はだ。
決意しだしていた。それは。
「僕は。今の気持ちを大事にしたいね」
「大事にですか」
「そう。そして」
佐藤の顔を見てだ。言ったのである。
「応援してくれるんだね」
「無論です」
微笑んで答える佐藤だった。
「それは」
「そうしてくれるんだね」
「また言いますが」
こう前置きしてだ。佐藤は話すのだった。
「今の時代に。ロミオとジュリエットもありませんし」

「大正のこの時代に」
「家同士の対立や家柄なぞ」
そういったものをだ。昔のことと認識しているからこその言葉だった。
「それが恋愛の妨げになるなぞ」
「そう考えるんだね」
「あの舞台にしてもです」
そのロミオとジュリエットのことだ。
「あの二人が結ばれれば。対立は」
「消えたね」
「確かに血は流れました」
それは舞台で実際にありだ。二人の仲を余計に難しくしている。
しかし佐藤はここではそれは大したことではないと言うのだった。
「ですがそれでもです」
「あの二人が結ばれればだね」
「対立はなくなっていました」
「それこそがあの舞台の」
「結末であるべきでした」
こう話すのだった。
「本来はです」
「そう、本来はね」
「人は幸せにならなければならないのですかな」
「だからこそ」
「はい、だからこそ」
それでだというのである。
「本当にそう思います」
「じゃあいいかな」
義正はその佐藤の言葉についてだ。さらに問うのだった。
「若しもだよ」
「若しもですか」

「うん、若しも」
ここで自分のことを言いそうになった。しかしだ。
それではわかってしまうと思ってだ。彼はそれを隠してだ。
あらためてだ。こう彼に話した。
「若しそういう人がいたら」
「答えは一つです」
「幸せにならないと駄目だね」
「対立や因果なぞ」
そうしたものはだ。どうしたものかというのだ。
「そんなものは愛の前にはです」
「どうしたものでもないんだね」
「愛が最も尊いものです」
佐藤の言葉が熱いものになる。

第四話　はじまりその十一

「そう、最もです」
「だから。対立や因果は」
「そういったものは氷です」
「氷なのかい」
「はい、凍て付いた氷なのです」
そうしたものだというのだった。
「氷は。溶けるものですね」
「そう、暖かさの前に」
「簡単に溶けるものです」
氷、つまり対立や因果はそうしたものだというのである。
そう位置付けてだ。佐藤は義正にさらに話す。
「そしてその溶かすものは」
「それは」
「太陽です」
それだというのである。
「即ちそれは」
「愛だね」
「はい、愛は何もかも、この世の醜いものやしがらみをです」
「溶かしてしまう」
「そうして溶けたものは」
その対立や因果のことに他ならない。
「後には何も残しません」
「何一つとして」
「はい、残るのは暖かさだけです」
それこそがというのである。
「愛こそがです」
「この世に残るもの」

「この世に残るに値するものです」
「そうか。愛こそが」
「幸せこそがです」
こうも言い換えるがだ。指し示しているものは同じだった。
そしてその同じものを見ながら。彼は話すのだった。
「旦那様もです」
「僕も」
「愛を。手に入れられたら」
「そうしたら？」
「その時は下らないしがらみに負けないで下さい」
彼の事情は知らなかった。だがこう言うのだった。
「御１願いしますね」
「そうだね。それじゃあ」
「はい、それでは」
「そうするよ」
微笑んで答えた彼だった。
「是非ね。そうさせてもらうよ」
「そうして頂けるならば」
彼自身はどうするか。佐藤はそのことも話していく。
「私も。及ばずながら」
「力になってくれるんだね」
「そうさせてもらいます」
佐藤も微笑みになる。そのうえでの言葉だった。
「その時にはです」
「有り難う。それなら」
「しかし。あれですね」
佐藤はここまで話すと照れ笑いになった。そうしてだ。
その照れ笑いでだ。彼はこんなことも話した。
「私も随分と」
「随分と？」

「ロマンチストと言うのでしょうか」
その照れ笑いと共の言葉だった。
「それとも。感傷屋と言うのでしょうか」
「浪漫主義者かな」
「それなのですね」
「それじゃないかな」
義正はこう彼に話すのだった。
「それだと思うけれど」
「浪漫主義ですか」
「同じ意味だろうけれどね」
「ロマンチストとですね」
「いや、少し違うかな」
ロマン主義と浪漫主義、西洋と日本のその違いだというのだ。
「けれど。それでも」
「私はそれですか」
「浪漫主義かな」
また佐藤に話すのだった。
「それじゃないかな」
「そうですか。浪漫主義ですか」
「僕もそうなるべきなんだね」
自分自身もだと。義正はこんな風にも考えた。
「浪漫を最後の最後まで」
「追い求められますか」
「それが愛であり。幸せなら」
それならばだというのだ。
「僕も。そうしようか」
「決められましたか」
「おおよそは」
そうしたというのだ。
「なったかな」

「では。それを見つけられたら」
「愛を見つけたら」
「是非共」
また主に話した彼だった。
「そうしてくれますね」
「そうさせてもらうよ。そして今は」
「今は？」
「許婚とかだけれど」
そうしたことについて話す義正だった。
「今は。ちょっとね」
「御考えから外されますか」
「少し。そうしたい」
こう話すのだった。
「とりあえずはね」
「わかりました。それでは」
「うん、じゃあね」
そんな話をしたのだった。そしてだ。
そうした話の後でだ。彼は考える顔になって一旦沈黙した。
そしてその沈黙の赴くまま思考を巡らせていくのだった。その恋のことを。

第四話　完

２０１１・３・１４

第五話　決意その一

第五話　決意

義正はだ。決意した。そうしてだった。
ある日兄達と共にいた。仕事の合間に昼食を共に採っていたのだ。
そこでだ。彼は言うのだった。
「一つ決めました」
「一つ？」
「一つとは？」
「はい、決めました」
彼はだ。こう言うのだった。
「恋をするのならあくまで一途にと」
「言うものだな」
それに最初に応えたのは。彼から見て左手にいる兄だった。やはり背が高く均整の取れた身体つきをしている。優雅な細い顔をしている。何処か中性的だ。
その彼がだ。こう言うのである。
「義正も恋について話すようになったか」
「そうだな」
そして義正から見て右手にいるもう一人の兄も頷いた。こちらもやはり背が高い。ただ彼はわりかし恰幅のよい身体つきと顔立ちをしている。
その彼もだ。義正の言葉に頷くのだった。
「恋か」
「そうですね。義正も成長したと言うべきでしょうか」
「そう思う」
右手の兄が左手の兄の言葉に頷いた。そしてだ。
彼はだ。まずはその左手の兄の名前を言った。
「それで義智」

「何でしょうか、義愛兄さん」
「その御前だが」
「私ですか」
「御前はもうすぐだな」
こう話すのだった。
「そうだな。結婚は」
「はい、そうです」
その通りだとだ。義智は頷くのだった。
そのうえでだ。彼はこう長兄である義愛に述べた。
「あの方と。もうすぐ」
「そうだな。私もだ」
「兄さんはもう一年ですね」
「一年になる」
また言う彼だった。
「思えば短いものだった」
「そうですか。短いですか」
「結婚するまでは長い」
それまではと述べる義愛だった。
「ただ、結婚してからはだ」
「短いですか」
「そうだ、短い」
彼はまた言った。
「非常にな」
「私は今とても長く感じます」
義智は考える顔になって述べた。そしてだ。
肉、よく焼けた牛肉をナイフで切ってそのうえでフォークで口に運んでそうして食べながらだ。彼はまた長兄に対して話すのだった。
「どうも。果たして式の日まで辿り着けるのかと心配になる程に」
「しかし辿り着くことはできる」
「できますか」

「そうだ、辿り着くのだ」
義愛はこう最初の弟に話す。
「だから。安心していいのだ」
「頭ではわかっているのですが」
「それでもだな」
「はい、どうしても」
また言う義智であった。表情も不安げである。
その不安げな顔でだ。彼は今は兄の顔を見て話すのだった。
「そこまで辿り着けるとは」
「考えられないか」
「夢の様です」
今度の彼の言葉はこうしたものだった。
「本当に。それは」
「そうかもな。しかしだ」
「それでも辿り着けるのですね」
「安心していい」
義愛は微笑んで述べるのだった。

第五話　決意その二

「それはな」
「そこまで言われるのでしたら」
「時が止まることはない」
義愛の今度の言葉はこうしたものだった。
それを言ってだ。またただった。
義愛はだ。また弟に話した。
「だからだ。御前は今はだ」
「今は？」
「一歩ずつ歩んでいくことだ」
そうしろというのである。
「いいな、一歩ずつだ」
「確かにですか」
「そうすればいい。そうすれば必ず辿り着く」
こう話すのである。
「わかったな」
「わかりました。それなら」
「そしてだ」
義愛は今度は義正に顔を向ける。そのうえでだ。
彼に対しても微笑を向けてだ。こう話した。
「それでなのだが」
「それで？」
「御前も恋について言うのだな」
「はい」
義正も微笑んでだ。彼に答えた。
「そうです。その通りです」
「わかった。それではな」
義愛は一旦頷いた。そのうえでまた末弟に述べた。

「義正もな」
「はい」
「恋をするとだ」
優しい笑顔でだ。彼に話すのである。
「色々とわかる」
「それは聞いていますが」
「聞くのと実際に体験するのとではな」
「違いますか」
「この言葉も聞いているな」
「はい」
実際にそうだと述べもするのだった。
「それは」
「その通りだ。実際に経験すればだ」
「そうなのですか」
「とにかくだ。恋はすることだ」
それを是非というのだ。
「私は見合いだったがな」
「それでも恋は」
「した」
見合いでもだ。恋だというのである。
「見合いでも何でもだ。恋は生じるものなのだ」
「どうした場合でもですか」
「恋は場所を選ばない」
末弟に対してこうも告げる。
「そして相手もだ」
「相手もですね」
「いい相手なら幸せな恋になる」
微笑んで話すのであった。
「しかしそうでなければだ」
「不幸になりますか」

「だが不幸でも恋は恋だ」
それは変わらないというのである。
「道ならぬ恋は駄目だが」
「そうでなければ。その場合は」
「恋は楽しむものだ」
それが答えだというのだった。
「わかったか」
「わかりました」
「不幸な恋も実際にある」
このことはまた話すのだった。末弟に対して。
「だがそれを避けることもできる」
「幸せにすることがですか」
「それはできる」
このことをだ。末弟に確かな声で話すのである。

第五話　決意その三

「むしろそれを目指さなくてはならない」
「幸せな恋をですか」
「昔は色々な制約があった」
長兄もだ。大正の今から話をするのだった。
「だが今は違う」
「誰もが幸せになれますか」
「なるべきなのだ。そしてだ」
「そして？」
「身分やそういったものはだ」
「それも関係ありませんか」
「四民平等の時代だ」
明治のこの言葉がだ。今も生きているのである。
「それでどうしてだ。身分なぞはだ」
「否定されるのですね」
「華族もそういったものもだ」
「関係なくですか」
「そうだ、ない」
また言うのだった。
「関係ないのだ」
「それではです」
義正は長兄の言葉に元気付けられだ。彼にあらためて尋ねた。
「ロミオとジュリエットは御存知でしょうか」
「あの英吉利の舞台だな」
「はい、それです」
まさにだ。それだというのである。
「あれは対立する両家の話でしたが」
「そして悲恋だったな」

「あれはどう思われるでしょうか」
「ハプスブルク家とブルボン家は知っているか」
義愛はすぐに答えずにだ。こう言うのであった。
「知っているな」
「はい、欧州の名門ですね」
「どちらもな」
「墺太利と仏蘭西の」
それぞれ皇帝家、王家であった。そしてだ。
その墺太利と仏蘭西の関係がだ。ここで話されるのだった。
「対立しました」
「何かあればな」
「仏蘭西が対立していたのは英吉利だけではなかったのですね」
「あの国は敵が多い」
これもまた仏蘭西の特徴なのである。
「墺太利もまた然りだ」
「両国の対立はそのまま欧州の対立軸の一つになっていましたね」
「ロミオとジュリエットの話なぞ両家の対立に比べれば」
「些細ですか」
「そうだ、些細だ」
こう末弟に話すのだった。
「しかしその対立もだ」
「終わりましたね」
「婚姻によってな」
「ルイ十六世とマリー＝アントワネットですね」
「そうだ、それによって終わった」
これは歴史にある通りである。
「両家はその長い対立を婚姻によって終わらせたのだ」
「それでは」
「対立なぞ終わらせるに限る」
義愛は確かな声で述べた。

「婚姻によってそれが可能ならだ」
「そうするべきですか」
「もっといいのはだ」
ここでさらに言う長兄だった。
「その婚姻に愛があればだ」
「尚いいですか」
「そうだ、さらにいい」
こう言うのである。
「非常にな」
「では」
「では？」
「あっ、いえ」
言おうとしたところで己の言葉に気付いてである。義正はその言葉を止めた。
そのうえでだ。彼はこう言うのであった。
「何でもありません、今のは」
「そうか。何でもないのか」
「はい、そうです」
「ならいいがな」
その言葉を受けてだ。義愛はだ。

第五話　決意その四

優しい笑みになってだ。弟にこう話した。
「それでだが」
「それで？恋のことですね」
「それを見つけ。楽しみだ」
さらにだ。先のことも話す。
「実らせることだ」
「実らせるのですね」
「恋はそこまで辿り着いてこそ恋だ」
こう話すのだ。
「わかったな」
「わかるようになります」
「わからなくてもいいからな」
末弟の言葉を受けてだ。そうしてなのだった。
「わかるように努力していけばだ」
「それがわかるようになるのですね」
「今の時点でわからなくてもわかろうとすればわかる」
義愛は今だけを見て話していなかった。未来のこともだ。
その二つを見ながらだ。今は話すのだった。
「次第にな」
「では」
「それではな。今は」
「今は？」
「食べるとしよう」
微笑んでだ。話題をそちらにやったのだった。
「この食事をな」
「そうです。早く食べなければ」
義智も兄の言葉に応えて言う。

「折角の料理が冷めてしまいます」
「冷えてしまった肉は今一つよくないからな」
義愛は少しばかり困ってしまった様な笑みで述べた。
「だからな。熱いうちにな」
「はい、食べましょう」
こう話してだ。そうしてだった。
三人は話を止めてそのうえで昼食を再開したのだった。
それが終わってからそれぞれの仕事に戻った。それが終わってから。
義正はだ。佐藤に対してだ。あることを尋ねた。
「今度の宴だけれど」
「パーティーですか」
「それの予定はどうなっていたかな」
「一週間後ですね」
その時にだ。あるというのだ。
「その時になります」
「夕方だね」
「はい、夕方です」
その夕方にだというのだ。
「あります」
「今度の主催者は」
「首相の縁者の方です」
「そう、首相の」
「政府も気にかけているようです」
佐藤は話す。その首相のことをだ。
「その八条家と白杜家のことをです」
「我々のことをかい」
「何とか和解させたいとのことです」
「関西を代表する、いや我が国を代表する」
その二つの家の話になっていく。両家はだ。

まさに日本を代表する財閥になっているのだ。それだけにだった。
「その両家のいがみ合いは止めたいんだね」
「それが政府の考えの様です」
「政府も心配性だね」
ここでこう言った佐藤だった。
「そこまで考えを巡らせるなんて」
「政府も馬鹿ではありませんから」
少なくともだ。彼等も無能ではないというのだ。
「ですから。両家の対立をです」
「解消したいのだね」
「だからこそのパーティーです」
「宴の。楽しい場所で」
そうした場でだ。和解をというのだ。

第五話　決意その五

「和解を演出か」
「それでなのですが」
「乗るべきかな」
ここでまた言う義正だった。
「ここは」
「少なくとも開く方はそう思っています」
「首相の方はだね」
「はい、そうです。では」
「父さんや兄さん達はわからないけれど」
それでもだと。前置きしてからの今の言葉だった。
「僕は。出るよ」
「わかりました。それでは」
「出よう」
また話す。さらにだった。
「是非共ね」
「あの、くれぐれもですが」
佐藤はここでだ。忠告する顔になって主に述べた。
「それでもです」
「白杜家の人達とはだね」
「旦那様は大丈夫と思いますが」
「揉めごとは起こさない」
「そのことだけはです」
「わかっているよ」
義正も笑顔で答える。
「それはね」
「それならば」
「うん。ただ」

「ただ？」
「僕はいいとして」
心配な顔でだ。彼は言うのだった。
「あちらはどうかな」
「白杜家の方ですか」
「やはり。八条家に対して攻撃的な人もいるだろうね」
「はい、とりわけ当主の方が」
最も重要な、だ。彼がだというのだ。
「それと後継者の方も」
「そうなんだね」
「御二人はとりわけ八条家を目の敵にしています」
「参ったね。それじゃあ」
「それじゃあ？」
「ロミオとジュリエットだね」
この舞台のことをだ。ここでも話に出したのである。
「それならね」
「そこでロミオですか」
「あっ、ちょっとね」
失言に気付いてだ。すぐにだった。
己の言葉を引っ込めた。佐藤に対してだ。
「ちょっと思っただけでね」
「そうですか」
「うん。ただ」
「ただ？」
「対立するよりは」
それよりもだと。義正は遠くを見る目で話すのだった。
「もっといいものがあるね」
「そうですね。対立よりもです」
「融和だね」
「理想論かも知れませんがそれでもです」

「対立よりはいいね」
「対立もまたそこから多くのエネルギーを生じます」
決して無ではないというのだ。佐藤は対立を全否定してはいなかった。しかしである。それでもだ彼はこう義正に話すのだった。
「融和はそれ以上にです」
「多くのものを生み出すんだね」
「対立は衝突です」
これは言うまでもなかった。その通りである。
「御互いの力がぶつかり合いです」
「それでかなりの力が殺されてしまうね」
「力の無駄な消耗が大きいのです」
それが対立だというのだ。対立から生じるものはその消耗されなかった残りの力が生み出すものだというのである。それだとだ。

第五話　決意その六

「それよりもです」
「融和は」
「力は衝突しません」
それがないというのだ。融和はだ。
「御互いの力が一つになりそれだけでも多くのものを生み出しますが」
「さらにだね」
「はい、さらにです」
それだけではないというのだ。佐藤は微笑みと共に話すのだった。
「そこから生じたものが周囲に広がります」
「だから融和の方がいい」
「私はそう思います」
「なら」
「私個人の考えですが」
こう前置きしてから。佐藤は主に話した。今言いたい核心をだ。
「八条家と白杜家もです」
「融和すべきだね」
「和解すべきかと」
そうなった方がいいというのである。
「そう思います」
「それが君の考えなんだね」
「内密にして欲しい話ですが」
「わかってるよ、そのことはね」
「すいません」
「誰にも言わないよ」
そのことは保障した。義正は秘密を漏らすことはしない。そうした仁義というものもだ。彼はその中に備えているのである。

「けれど。御互いに」
「融和すべきです」
「そういうことなんだね。つまりは」
「はい、旦那様が若しです」
「白杜家との和解を選ぶのならだね」
「それはいいことだと思います」
微笑んで主に対して述べた。
「対立よりも多くの。そして素晴らしいことを生み出すから」
「不可能じゃないかな」
「不可能ですか」
「両家の対立は根深いから」
そのことは否定できなかった。日本において両家の対立がどれだけ強く深いものかは誰もが知っていることだった。
とりわけ関西においてはだ。実に知られていることなのだ。
だからだ。彼は言うのであった。
「無理ではないかな」
「こうした言葉があります」
主の言葉にだ。佐藤はまた話すのであった。
「不可能と思っていても実際には可能であることが多いのです」
「不可能と思っていても」
「理想、もっと悪く言えば妄想と思うこともです」
どうかというのである。
「行動に移せば実現できることがです」
「多いんだね」
「はい、世の中確かに不可能はことも多いです」
そのことを認めて。そのうえでの言葉だった。
「ですが何もかもを不可能と認めて何が動くでしょうか」
「動かないね、全く」
「人類の社会そのものがそうですね」
「そうだね、じゃあ」

「はい、まずは動くべきなのです」
佐藤の声が強くなっていた。自然にだ。
「そして実現するべきなのです」
「夢や理想があればそれを目指して動く」
「そうして実現することが大事なのです」
「じゃあ僕は」
「はい、そう思われそうされたいと思えば」
「動く」
義正は言った。一言だった。
「そうするんだね」
「如何でしょうか、それは」
「決めたよ」
考えさせてくれとは言わなかった。既に一ステップ先に進んでだ。
彼は言うのだった。そこには確かな決意があった。
「その時はね」
「はい、それでは」
こう話をした。そしてだ。

第五話　決意その七

真理もだ。今はだ。

海辺を歩いていた。白い砂浜の左手に青い海が淡い泡を立てながら波をその白浜に送っている。そこを三人で歩いていた。

共にいるのは麻実子と喜久子だ。二人が彼女に話していた。

「昨日の舞台はよかったですね」

「本当に」

笑顔でだ。真理に話すのである。三人は一列に並んでそのうえで話をしている。真理が中央にいてだ。麻実子が右、喜久子が左にいる。

真理を囲んでだ。二人は話すのだった。

「やはり。最後は幸せでなければ」

「なりませんね」

こう話すのである。

「ああして結末がよくなければ」

「悲しい気持ちになってしまいます」

「苦難はあっても結ばれる」

「祝福がなければ」

「そうですね」

二人のその話にだ。真理も頷く。

「私もそう思います」

「真理さんもですね」

「そう思われますね」

「はい、やはりです」

静かにだ。前置きしての言葉だった。

「最後に幸せがなければどうしても」

「喜べませんね」

「後に残るのは悲しみだけです」

「救いがなければ」
また言う真理だった。
「よくないと思います」
「舞台でもそうですし」
「それが現実ならばです」
どうなのか。喜久子と麻実子も話していく。
「余計に。幸せな結末でなければ」
「駄目でしょうね」
「そう思います。現実では」
どうなのか。真理は二人にまた話した。
「誰もが幸せになって欲しいですね」
「二人が御互いに純粋に愛し合うならですね」
「どんな苦難があったとしても」
「それは乗り越えられるべきものであり」
「祝福され、幸せになるべきですね」
「心からそう思います」
真理の顔が切実なものになっていた。その切実な顔で話すのである。
「誰であろうともです」
「今も身分や家柄を言う方がいますけれど」
麻実子が言った。その白と青の世界を歩きながら。
「それはもう、ですね」
「古いと思いますけれど」
喜久子がその麻実子に対して述べた。
「最早そうした考えは」
「そうですね。古いですね」
「四民平等です」
この場でもだ。この言葉が出るのである。実は彼女達は華族の家であるがそれでもだ。この言葉を強く意識しているのである。
「自分自身にとって相応しい方、尊敬できる方であれば」

「その方がどういった方であろうともですね」
「結ばれるべきだと思います」
喜久子は彼女にしては強い声で言った。
「是非共」
「そうですね。私もそう思います」
麻実子は喜久子に対してこう返した。
「やはり。身分などは」
「あとは。家同士の対立もありますね」
「そうした話もありますね」
「それも間違いです」
喜久子はここではだ。言い切ったのである。
「そんな。家同士がどうとかは」
「本人達には関係ありませんね」
「いざとなればです」
喜久子の言葉が熱を帯びて来ていた。自然と感情が篭もってきているのだ。彼女はそれを自覚しているがだ。止める気はなかった。
「駆け落ちでもしてです」
「過激ですね」
「今はそれをしてもいいと思います」
その熱をだ。麻実子に語るのだった。

第五話　決意その八

「今の時代はです」
「積極的になのですね」
「与謝野晶子さんみたいに」
女流詩人だ。与謝野鉄幹との愛はこの時代語り草になっていたのだ。
「あの様に。熱く一途にです」
「いかなければならないのですね」
「忍ぶ愛も美しいです」
その愛もまた、だ。喜久子は否定しなかった。
しかしだ。それでもだというのであった。彼女は。
「ですが熱い愛はです」
「忍ぶ愛よりもですね」
「素晴らしいものだと。私は思っています」
喜久子はここまで話して笑った。確信する笑みである。
「これからは。女性もそうあるべきです」
「駆け落ちをしてでも」
「愛は純粋であり高潔なものですから」
だからだという喜久子だった。
「ですから」
「ううん、確かにそうできたらです」
麻実子は顔を一旦正面に戻してだ。そのうえで話すのだった。
「素晴らしいですけれど」
「そう簡単にはできませんね」
「駆け落ちまでは流石に」
どうかというのである。
「過激過ぎて」
「ですが多少過激でいいと思いますよ」

「与謝野晶子さんの様にですね」
「愛は何なのか」
また熱く語る喜久子だった。
「それを考えますと」
「そうですか。道ならぬ恋や純粋でない愛ならともかく」
「道として正しく、純粋な愛ならです」
それならばだと。喜久子の言葉は変わらない。
「是非共です」
「貫くべきなのですか」
「家柄も。家同士の対立も」
そうした要因もだ。どうかというのだ。
「乗り越えてこそです」
「成程。そういうものですか」
「私はそう考えます」
喜久子はここまで話して結論を述べた。
「それが愛です」
「では私も」
ここまで聞いてだ。麻実子はだ。
少しだけ強い言葉になってだ。こう言うのだった。
「そうした方に出会えたら」
「そうされますね」
「そうしたいと思います」
こうだ。喜久子に顔を向けて答えたのである。
「そう願います」
「いいことだと思います」
「そうですね。そして」
「そうですね。そしてですね」
二人の言葉が合った。そうしてだ。
彼女達はそれぞれ笑顔になってだ。中央にいる真理に顔を向けた。
そうしてそのうえでだ。彼女に対して問うたのだ。今度はそうした

のである。
「真理さんはどう思われますか？」
「愛については」
「どの様にお考えなのでしょうか」
「一体」
「私ですか」
話を振られてだ。まずはだ。
真理はきょとんとした顔になった。そのうえで、であった。
「私は」
「はい、真理さんは」
「どういった風に御考えでしょうか」
「私はです」
こう前置きしてからだ。そのうえでの言葉だった。
「やはり。愛はです」
「はい、その愛は」
「どういったものだと」
「清らかで美しいものです」
そう考えているとだ。話すのである。
「それが愛だと思います」
「清らかで美しいもの」
「それが愛ですか」
「そうです。愛です」
また話すのだった。

第五話　決意その九

「それが愛だと思います」
「そうですか」
「そう思われるのですね」
「与謝野晶子さんですね」
真理もだ。この詩人の名前を出した。その出した言葉にはだ。これまで以上に澄んでそれでいてだ。憧れを抱いているものがあった。
「あの方の様にです」
「一途で強い愛ですか」
「そういう愛を抱けたら素晴らしいですね」
こう二人に話すのだった。微笑んでだ。
「私もそう思います」
「そうですね。愛はです」
「そうしたものです」
「恋もまた」
そしてだ。真理は恋についても話すのだった。
「そういうものだと思います」
「恋と愛ですね」
「その二つはですか」
「はい、似ているようで違うもの」
真理は話していく。今度はその恋と愛のことをだ。
「けれど。根は同じだと思います」
「恋と愛はですか」
「似ている様で違うもの」
「けれど根は同じもの」
「そういうものなのですね」
「そうではないでしょうか。だから恋愛という言葉があるのでしょう」

その恋愛という言葉だ。それも話に出た。
「私は。その恋愛をまだ舞台や文学でしか知りません」
「現実にはですか」
「知らないと仰るのですか」
「はい、残念ですが」
ここでだ。こうした言葉も出すのだった。
「どんなものか。それは」
「それがどうしてわかるかですね」
「それはわからないですね」
また話す喜久子と麻実子だった。そしてだ。
そう話してだ。二人はだった。
再び真理に尋ねる。その話をだ。
「では真理さんはこれからですか」
「その恋愛を知りたいと思われているのですね」
「はい、できれば」
できればと。そう話す真理だった。
考える顔で白い砂浜を歩いてだ。彼女は二人の友人に話していく。
「それがどういったものか知りたいです。ただ」
「ただ？」
「ただといいますと」
「もう既にそれを知っているかも知れません」
ここでだ。こう話すのだった。
「若しかしてです」
「知っておられるというのですか」
「その恋、そして愛を」
「そうではないでしょうか。まだそれに気付いていても気付いていないだけで」
「そうですか。その恋を」
「恋をですか」
二人に話していく。そうしてだ。

真理はだ。そこにいない彼の顔をだ。自然に思い出した。
その顔を見ながらだ。ふとした感じでまた言った。
「いえ、私は」
「真理さんは」
「どうなのですか？」
「私はもう知っているのですね」
それがだ。今わかったのだ。真理自身にもだ。
「既にです」
「ではそのお相手は」
「誰なのですか？」
「それは」
言おうとしたが言わなかった。しかしだ。
喜久子と麻実子にだ。また話した。
「いえ、それは」
「仰ることができない」
「そうなのですか」
「ロミオなのですね」
この舞台の話をするのだった。それをだ。
「ロミオが」
「ロミオですか」
「あの主人公に想いをですか」
「そうなりますね」
こう言うのだった。言い繕いだった。しかしそこには真実もあった。だがその真実はだ。隠してだ。そのうえで話をしていくのだった。
「私は」
「ロミオもジュリエットも。結ばれれば」
「家同士の対立なぞ乗り越えて」
「そうですね。そうしたしがらみを乗り越えて」
「幸せになれれば」

よかったのにとだ。二人も話す。
「今ならできるでしょうか」
「今の日本なら」
この大正の日本ならだ。どうかというのである。
「あの二人は幸せになれるでしょうか」
「舞台とは違って」
「ならないといけませんね」
真理の答えはだ。絶対を指し示すものだった。それをだ。
「そうならば」
「そうですか。絶対になのですね」
「幸せに」
「与謝野晶子さんの様に」
また彼女の名前が出たのだった。
「果たさなければ」
「ですね。今ならです」
「あの二人も幸せになれました」
二人は彼等のことを思い感情移入してだ。残念そうに話す。実際にはいなくともだ。二人は思われることで現実の存在になっていた。
「ですから。是非」
「今はです」
「そうですね。幸せにならなければ」
微笑んでだ。真理は話した。
「いけませんね」
「そう思いますよね、本当に」
「愛は必ずです」
「幸せになることが愛ですからね」
こんなことをだ。砂浜で話すのだった。そうして二人はだ。お互いを意識しだした。そうしてだ。そこに果たしたいものも見ていたのだ。

第五話　完

2011・3・20

第六話　幕開けその一

第六話　幕開け

義正はだ。この時だ。

己の執務室で仕事をしながらだ。佐藤に尋ねるのだった。

「この仕事が終われば」

「今日の予定でしょうか」

「何処か。楽しめる場所に行きたいけれど」

「楽しめる場所ですか」

「何処かあるかな」

こう彼に尋ねるのである。

「いい場所を知ってるから」

「そうですね。今日のお仕事の調子ですと」

佐藤はだ。それを見たうえで話すのだった。義正の今日の仕事をだ。

「夕方になりますから」

「夕方か。じゃあ舞台はどうかな」

「舞台ですか」

「うん、何かあるかな」

「舞台はありません」

それはだ。ないというのだ。

しかしだ。それと共にだった。佐藤はこれを話に出して来たのだった。

「音楽があります」

「音楽だね」

「はい、ピアノの演奏会です」

彼が話すのはこれだった。ピアノであった。

「それはどうでしょうか」

「ピアノだね」

「ショパンです」
波蘭の音楽家だ。ただしこの時代波蘭という国はない。墺太利と露西亜といった国々に分割されてだ。なくなってしまっているのだ。
だが、だ。その音楽家の名前は知られていた。この日本でもだ。
佐藤は主に対してである。この音楽家の話を出すのだった。
「その音楽家ですが」
「ショパンか。それはいいかもね」
「お聴きになられたことはないですか」
「実はね」
ないとだ。答える義正だった。
「奇麗な音楽とは聴いてるけれどね」
「それを実際に知る為にはです」
「聴くことだね」
「はい、そうされますか？」
「そうだね。そうしようか」
こうだ。決めた彼だった。
そしてそのうえでだ。また一枚だった。
書類にサインをした。そしてそれを佐藤に手渡した。
佐藤はそのサインを見てだ。静かに話すのだった。
「これでまた仕事が一つ決定しましたね」
「うん、その仕事もね」
「百貨店の大阪進出がですね」
「二号店。遂にだね」
「八条百貨店は今大変な賑わいを見せています」
この時代に百貨店が生まれたのだ。そしてそれはだ。新しい時代の商業としてだ。注目され華やかな賑わいを見せていたのだ。
「ですがそれに満足せずにです」
「それをさらに拡大させる」
「そうです。神戸の次は大阪です」
「そして京都だね」

「後は。名古屋にもです」
そこにもだ。出したいというのである。
「やがては。東京にも進出しようと」
「夢は果てしないね」
「商業もまた夢です」
現実にあるものもまた、だ。夢だというのである。
「それは実現してこそです」
「この大阪進出もそうだね」
「はい。サインをされたことによって」
それによって決まった。そうなったというのだ。
「決まりました」
「大阪。いい街だね」
「大阪には神戸とはまた違った魅力があります」
「天下の台所。町人の町だね」
江戸時代に言われた言葉だ。それは大正にも生きているのだ。
「活気があって。賑やかで」
「問題はその大阪人の心を捉えられるかです」
「それをできるには。工夫が必要だね」
「それはまた考えています」
「大阪での工夫は」
「神戸店は神戸店、大阪店は大阪店です」
それぞれだ。違うというのである。

第六話　幕開けその二

「まずは開店しますがその前にです」
「大阪のことを調べてだね」
「店の立地場所、そして規模もです」
そうした細かいことまでだ。調べてだというのである。
「それで決定したことです」
「それだけ用意周到だということだね」
「それは旦那様も御存知ですね」
「知ってるよ。これまでそれに関する書類にもサインをしてきたからね」
日々数多くのサインをしている彼だ。その中には大阪店に関するサインも数多くあったのだ。彼の担当には百貨店関係もあるのだ。
「だからね」
「そこにあった通りです。それもです」
「既に調べてだね」
「誰でしょうか。こう言ったと思いますが」
佐藤は考える顔になってだ。義正に述べた。
「商業もまた戦争だと」
「商業もだね」
「だからこそ。戦略や戦術が必要だと」
「それだね。そして情報もだね」
「そうなりますね。情報が何よりも大事になります」
「そして手に入れた情報を検証して」
義正も話す。彼は今は経営者の顔になっていた。若いがだ。彼もまた経営者としてだ。仕事をしているのである。
「そのうえで戦略を決定する」
「今回もまさにそうですね」
「そうなるね、本当に」

「今それが決定しました」
義正の今のサインによってだというのである。
「二号店がです」
「大阪への進出も」
「それが決まったのです」
「あれだったね。八条鉄道大阪駅と連結してだったね」
「はい、そうです」
場所についての話にもなった。
「そこにです」
「いいことだね。鉄道と連結するというのは」
「鉄道は大きな力になります」
明治からこのことが言われていた。そして実際にその通りだった。
「だからこそです。それと連動させてです」
「百貨店もだね」
「駅から出てそうして」
さらにだというのである。
「百貨店で買えばかなり楽ですね」
「お客さんにとってもね」
「だからです。それで鉄道の方ですが」
そちらの話にもなった。その八条鉄道のことだ。
「今は神戸と大阪、大阪と京都の二線ですが」
「それも増やすね」
「奈良、三重、和歌山、滋賀です」
その四つの県の名前が挙げられる。
「そして名古屋にまでです」
「関西と中部を一つにする」
「御父上はそう考えておられるのですね」
「そうだよ。それは聞いているよ」
実際にそういう話になっているとだ。義正は確かな顔で述べた。
「途方もない話だね」

「壮大ですね」
「関西の全ての府県に愛知も」
「私鉄がここまでいけるかどうかとなると」
「夢だね。けれどこの夢は」
「実現する為の夢です」
現実における話だからだ。それでだというのだ。
そうした話をしてからだった。義正は仕事を終えてだ。そのうえでだった。
ピアノの演奏会に向かう。そしてそれは。
真理もだった。彼女は今厳しい顔の痩せた初老の男と話をしていた。彼はだ。真理に対して重く低い声でこんなことを話していた。
「御前もそろそろだ」
「そろそろといいますと」
「相手を決めなければいかんな」
「相手をですか」
「生涯の伴侶をだ」
こう話すのだった。
「そろそろな」
「あの、それでしたら」
「何だ、相手はもういるのか？」
「いえ、それは」
言えなかった、そのことは。しかしだった。

第六話　幕開けその三

その男をだ。こう呼んだのである。
「お父様はどう思われますか？」
「何について思うというのだ？」
「恋愛のことをです」
それについてだ。どうかと問うのである。
「近頃。新しい恋愛の話が出ていますが」
「あれか。白樺派とかそうした話だな」
「はい、そうした話です」
「時代も変わったものだ」
男、真理に父と呼ばれた彼は厳しい顔のままで和服の袖の下で腕を組んでだ。カイゼル髭をぴくりと動かさせて述べるのだった。
「こうした話が出るとはな」
「変わったと仰いますか」
「そうだ、変わった」
また言う彼だった。
「わしが若い頃はまだそうした話はなかった」
「明治にはですか」
「大正になって変わったな」
その時代になってからだ。そうなったというのである。
「妙に進歩的な話が出て来た」
「与謝野晶子さんもですね」
「あのおなごは凄いおなごだ」
彼女についてはだ。父も認めるのだった。
そして何故認めるのかもだ。娘に話した。
「詩を読みそれで相手を定めたのだったな」
「そのうえで東京に出て」
「そこまでできれば見事だ」

こう言って認めるのだった。
「女傑だ」
「女傑ですか」
「そうだ、女傑だ」
与謝野晶子はまさしくそれだというのである。
「ああしたおなごでなければ駄目なのだろうな」
「あそこまででなければですか」
「北条政子もそうだ」
源頼朝の正室である。彼女もまた家を飛び出て頼朝の下に向かっている。かなり激しい想いの持ち主であったのである。
「そこまでするのならだ」
「宜しいのですね」
「できればだがな」
こうした条件をだ。話に加えるのだった。
「認めるしかあるまい」
「左様ですか」
「しかし御前の兄も姉達もだ」
真理の上に兄もいるのだ。彼が兄妹で一番の年長だ。
「誰もそこまでのものは見せなかったな」
「そういえば兄様や姉様は」
「皆わしの言った相手と結婚した」
そうなったのだ。所謂見合いで全て済んできたのだ。
「それで普通に暮らしているな」
「はい、そうです」
「それはそれでいい」
見合いというものもだ。認めてはいた。
「しかしどうもだ」
「どうもといいますと」
「いささか面白くない」
厳しい顔のままでの言葉だった。

「激しく。一途なものがない」
「一途ですか」
「相手にもよる。許せん相手ならだ」
「駄目ですか」
「このわしが切ってやる」
本気だった。すぐにそれがわかる言葉だった。
「だが。よい相手ならだ」
「宜しいのですね」
「そこまで激しさを見せる相手ならだ」
いいというのだ。父の言葉には嘘は含まれていなかった。
「よいとしよう」
「そう思われているのですね」
「わしも今の風潮は嫌いではない」
「御嫌いではないのですね」
「古いしきたりというのはな」
難しい顔でだ。娘に話すのである。

第六話　幕開けその四

「それが人を苦しめるものならばだ」
「いりませんか」
「うむ、いらん」
実際にそう考えているというのである。
「わしも若い頃は固い考えだったが」
「今は」
「時代のせいか。変わったわ」
今度は笑顔だった。父親の優しい笑顔である。
「どうもな」
「そうなのですか」
「相手がやくざ者やどうしようもない奴でない限りは」
「いいのですね」
「そう思うぞ」
今ではだ。こう考えているというのである。
「御前はどうじゃ。それは」
「私は」
「うむ。どうなのじゃ」
「先程も述べたと思いますが」
「与謝野晶子か」
「素晴らしいと思います」
彼女のその愛の貫き方にだ。感銘しているというのだ。
こう話してだ。そのうえでだった。
父はだ。あらためて話すのであった。
「真理が若しそうした相手を見つけたならばだ」
「その時は」
「わしの前に連れて来るのだ」
こう彼に言うのである。

「いいな、そうしろ」
「お父様の前にですか」
「どうした相手か見させてもらう。そしてだ」
「そして？」
「その相手が御前に相応しい人格ならばだ」
「それでいいのですね」
「そうだ、それでいい」
確かな顔と声でだ。娘に対して話すのであった。
そう話してだ。あらためてだった。父としてまた言うのである。
「御前に相応しい相手ならばだ」
「そうした方ならば」
「その時を待っている」
まさにだ。正面から待ち受けている言葉だった。
父親としてだ。そうするとだ。彼も覚悟を決めているのだ。
「わしはそうしているからな」
「わかりました」
「恐れるな」
娘への言葉であった。
「いいな、全てにおいてだ」
「恐れてはなりませんか」
「勇気という言葉があるな」
こうした時にはあまり使われない言葉だ。しかしだった。
父はここであえてだ。こう言ったのである。その言葉を娘に告げたのだ。
「その言葉が」
「勇気ですか」
「そうだ。与謝野晶子だが」
「その方もまた」
「勇気を持っているだから一途になれたのだ」
「勇気と一途は」

「関係があるのだ。無関係ではない」
その二つはそうだというのである。
「勇気が一途を作るのだ」
「その二つがですね」
「そうだ。勇気は愛についても必要ぞ」
「では私は」
「おなごだからといって勇気が不要ではない」
それは違うというのである。
「おなごでもだ。男と同じだけ勇気は必要なのだ」
「そして愛にとっても」
「必要なものだ」
和服の袖の中で腕を組んだ姿勢のまま。強い声で述べたのだった。
「わかるか、そのことが」
「それは」
「今はわからずともよい」
ここでは言葉が少し穏やかになった。しかし確かな口調なのはそのままだった。その声で己の娘に話をするのである。

第六話　幕開けその五

「覚えておくことだ」
「覚えていればそれが」
「何時かわかることにつながるからな」
それでだというのである。
「だから覚えておくことだ」
「はい、それでは」
「勇気を持て。何に対しても」
具体的には愛に対してもというのだ。
「そして誰に対してもだ」
「そうした方に対してもですね」
「そういうことだ。そして」
「そして？」
「わしに対して勇気を持つ時もあるだろう」
その場合もふと考えてだ。娘に述べるのである。
「その時も恐れるな」
「お父様に対しても」
「勇気を持て。そしてぶつかって来い」
娘を見据えて。そうしての言葉だった。
「いいな、そうするのだ」
「勇気を持ってですか」
「覚えておくことだ、この言葉を」
やはりわかれとは言わなかった。覚えていろというのだ。
「必ずだ。忘れるな」
「覚えていてそして」
「何時かわかるのだ。いいな」
「そうさせてもらいます」
「わしから今話すことはそれだけだ」

これで終わりだというのだ。話はだ。
「それではな。今夜は」
「喜久子さんと麻実子さんにお誘いを受けています」
ここでもだ。二人の友人が話に出た。
「ピアノの演奏会に」
「それにか」
「ショパンとのことです」
その音楽家の曲がだ。演奏されるというのだ。
「それを聴きに行きます」
「なら楽しんでくるといい」
「はい、それではそうさせてもらいます」
「ショパンか。わしはまだ聴いていないな」
「私もです」
「一度聴いてみるか」
そしてだ。こう話したのだった。
「わしも」
「そうされますか」
「うむ、一度な」
笑顔になってだ。娘に話すのである。
「そうしたい」
「では今夜は」
「いや、今夜はいい」
娘の申し出は断った。それはだった。
「今夜はもう予定が入った」
「左様ですか」
「料亭にな。行かねばならん」
そこだというのだ。料亭は幕末から会合によく使われてきた。個室を使えてじっくりと話ができるからだ。幕末の志士達からはじまるのだ。
「だからだ。今宵はだ」

「では。私達だけで」
「友達と一緒に行くといい」
娘に優しい笑顔で話したのだった。
「それもまたよしだ」
「喜久子さんや麻実子さんと一緒に楽しむのも」
「それもまたいいのだ」
また言う父だった。
「友は宝だ」
「それもよく言われますね」
「それはおいおいわかる。友達は大切にするようにな」
「はい、それでは」
こうした話をしてだった。真理もだった。

第六話　幕開けその六

ピアノの演奏会に出るのだった。ドレスを着てそのうえでだ。友人達と共にコンサートの会場に来た。そこは欧風のロビーのある場所だった。

シャングリラや絨毯、そうしたものを見てだ。麻実子が楽しそうに述べた。

「本格的ですね」

「何か。仏蘭西に来た様な」

喜久子もここで言う。二人もドレスである。

「そんな感じがしますね」

「そうですね。特に」

麻実子は足元を見た。その絨毯をだ。

絨毯はビロードで赤と紅、それに黒やダークブラウンでだ。複雑なアラベスク模様をそこに見せていた。その絨毯を見て話すのだった。

「この絨毯は」

「仏蘭西のものでしょうか」

「そうかも知れませんね、これは」

「波斯かも知れませんし」

この国の名前も出た。

「どちらにしろかなりのものですね」

「それは確かですね」

「かつてはこうした絨毯は」

麻実子はまだその絨毯を見ている。そのうえでの言葉だった。

「中々手に入らなかったのでしたね」

「そうらしいですね。あまりにも高価なものだったので」

「それが今ではこうして」

「広く大きく使われるものになりましたね」

「そしてです」
麻実子は今度は上を見上げた。そうしてガラスの、豪奢なデザインのヤングリラを見た。それは電灯のだ。新しいシャングリラだった。
そのシャングリラも見てだ。彼女は話すのだった。
「あのシャングリラも」
「あれもですね」
「見事ですね」
笑みを浮かべてだ。そのうえでの言葉だった。
「ただ。シャングリラというだけでなく」
「あそこまで立派なものはですね」
「ついこの前まではですね」
「夢の様な話だったと聞いています」
「時代は変わったのですね」
喜久子もだ。笑みを浮かべて言うのだった。
「こうしたものについても」
「はい。絨毯とシャングリラ」
その時代の変わったことのだ。ここでの象徴だった。
「そしてピアノですか」
「日本にいながら欧州にいる様ですね」
「波蘭の音楽家の音楽を聴いて」
「では。これからです」
「聴きましょう」
こう話してだ。二人はいそいそとした感じで会場の中に入ろうとする。しかしだ。
真理はだ。その歩みは遅かった。そうしてだ。
ロビーの中を見回していた。壁は黒くそれがシャングリラに照らされている。シャングリラの光は淡いオレンジでだ。それでロビーの中を見せていたのだ。
その光を見てだ。彼女はそこにいたのだ。

ロビーにはタキシードの紳士や彼女達と同じドレスの淑女もいる。
彼等の中にだ。無意識のうちに今脳裏にある相手を探していた。
だがその彼女にだ。二人が声をかけるのだった。
「あの、真理さん」
「どうかされたのですか？」
「はい？」
二人の言葉にだ。ふと気付いてだった。
二人に顔を向けてだ。こう言うのだった。
「あの、何か」
「いえ、何かとは」
「今からですけれど」
その彼女にだ。こう言う二人だった。
「演奏会がです」
「はじまりますが」
「そうでしたね」
言われてだ。そのことを思い出したように言う真理だった。
そのうえでだ。真理はこんなことも言った。
「それではですね」
「はい、それではです」
「今から行きましょう」
「わかりました」
静かに頷く真理だった。そうしてだ。
まだロビーの中を見回りながらだ。彼女はコンサート会場に入ったのだった。

第六話　幕開けその七

そして義正もだ。兄達や佐藤と共にだ。その場に来た。丁度真理が入った時にである。

まずはだ。兄達がだ。そのロビーを見回しながら話す。

「ここは前にも来たが」

「そうですね」

義智が義愛の言葉に頷くのだった。

「何時来ても見事な場所だ」

「ですね。絨毯もロビーも」

「ここは三菱が造ったものだったか」

「そうですね。ここはですね」

「三菱は凄い」

義愛は真剣な顔で述べた。

「こうしたものが造られるのだからな」

「そうですね。しかしです」

「我々もだな」

「はい、負けてはいられません」

こう話す二人だった。

「三菱以上にです」

「凄いものを造らないとな」

「それでなのですが」

義智はだ。あらためて兄に話した。

「一つ考えているのですが」

「こうしたコンサート会場をか」

「造ってみてはどうでしょうか」

こう兄に提案するのである。

「我が家も。どうでしょうか」

「そうだな。しかしだ」

「神戸にはもうありますから」
彼等が今いるこの場所だ。三菱のである。
「他の町で」
「私達の本拠地である神戸で造られないのは残念だがな」
義愛はそのことには残念なものを見せた。しかしそれが仕方がないこともわかっている。それを踏まえて彼も弟の話を聞いていた。
「だがそれならだ」
「他の町にです」
「何処がいいかだ」
「奈良や京都はどうでしょうか」
これが義智の提案だった。
「そのどちらかで」
「京都に奈良か」
「まずは京都に線を敷きますね」
このことは既に決定していた。大阪と神戸の間だけでなくだ。大阪と京都も結ぶ。そうして路線を拡大していく方針なのである。
「そしてさらにです」
「奈良もか」
「その計画もありますし」
「だからか」
「はい、どうでしょうか」
また言う義智だった。
「それで」
「そうだな」
義愛は考える顔になった。そうしてだ。
次弟に対してだ。こう述べるのだった。
「大阪から奈良に線路を敷き」
「それと共にです」
「そして京都と奈良もだ」
「その路線もですか」

「敷く計画があるからな」
これもだ。決まっているのだった。
そして二人でだ。話していってであった。
末弟の義正にはだ。二人で問うのだった。
「どうだろうか」
「義正はこのことについては」
「奈良にですね」
彼が言うのはまずはその場所からだった。
「奈良にコンサート会場を設けるのですね」
「そうだ、その話だが」
「どうかな」
「奈良よりもです」
彼はだ。静かにこう話した。
「むしろ大阪に置かれる方がいいのではないでしょうか」
「大阪！？」
「あの町に」
「確かに奈良も悪くはないです」
兄達のその話はいいとした。しかしなのだ。

第六話　幕開けその八

彼はだ。さらにこう言うのだった。
「大阪にコンサート会場を置けばです」
「何かあるのか」
「その町に置くと」
「まず神戸からコンサートに行けます」
最初に挙げたのはこの町だった。彼等が今いるその町だ。
「そして京都線からです」
「大阪に行けますね」
「奈良からも。そして」
さらにであった。彼等の路線計画はそれで終わりではなかった。
「和歌山からもです」
「そうだな。言われてみれば」
「それだとどの県からも」
「遠いですが三重や滋賀にも線路を敷きますし」
関西全府県に路線を設ける。八条鉄道の計画はかなり遠大なものだった。その計画の為にだ。政治家や官僚達とも話をしているのだ。
「そういった場所からもです」
「大阪のコンサートに行ける」
「だからなんだね」
「はい、どうでしょうか」
義正はあらためて兄達に尋ねた。
「こうしては」
「いいな、奈良よりもな」
「大阪の方が」
「多くの人がコンサート会場に入られます」
また言う彼だった。
「大阪に置けば最もです」

「ひいては大阪が八条鉄道の中心地になるか」
「最大のターミナルになる」
二人の兄はここでこのことにも気付いた。
「百貨店も置く」
「そしてその他のものも」
「鉄道はこれから日本の動脈になります」
義正は言う。鉄道のその重要さもだ。
「大阪はその心臓になります」
「八条鉄道の」
「我が財閥の重要企業の」
八条家は様々な事業に進出している。その中でだ。鉄道は彼等にとって最も重要な分野の一つにだ。既になっているのである。
その鉄道の心臓にだ。大阪はなるということにだ。彼等は気付いたのだ。
その話をしてだ。長兄の義愛はこう末弟に述べた。
「いい考えだ」
「ではそれで」
「いこう」
末弟の提案を認めたのだった。
「奈良の人達も見られるしな」
「そして他の町の人達もです」
それも踏まえての彼の提案だったのだ。
「ですから」
「いいことだ」
こうした話をした。そしてだ。
義智がだ。兄弟達に言ってきた。
「それでは今から」
「そうだな。コンサートだな」
「中に入りましょう」
「このままロビーにいるのも悪くはありませんが」

「ピアノを聴く為に来ているから」
それでだとだ。三人で話してだった。
彼等もまた会場に入った。そうしてであった。
その演奏を聴く。演奏者は今名を挙げている若手の演奏家だった。
その演奏を聴いてだ。
義正はだ。満足してだ。こう兄達に話した。
「見事ですね」
「そうだな。曲もいいが」
「演奏も見事だよ」
兄達も満足した顔で弟の言葉に頷く。
「来たかいがあった」
「本当に」
「ショパンですね」
義正は演奏されている音楽家の名前も話した。
「そうでしたね」
「そう、ショパンだったな」
「波蘭の」
「確か」
ここでだ。義正はふと言った。

第六話　幕開けその九

「欧州は英吉利や仏蘭西だけではないのですね」
「そうだな。波蘭だな」
「そうした国もあるのだな」
兄達もだ。そのことを知ったといった感じだった。
「私は独逸が好きだが」
「私は伊太利亜が」
義愛と義智でだ。それぞれの好みが出ていた。
「他の国もな」
「これからは学んでいくべきか」
「そうですね。私もそう思います」
演奏を聴きながらの言葉だった。
「音楽においても」
「音楽はいいものだ」
義愛はだ。微笑んで話すのであった。
「心を豊かにし清らかにするだけでなく」
「そうしたことも教えてくれますね」
「音楽にも力を入れたいものだな」
義智も言った。ここでだ。
「八条学園に芸術学部を設けるか」
「あの学園にですか」
「そうだ。そうしてはどうだろうか」
「そうですね」
義正は次兄の提案を受けてだ。考える顔になって述べた。
「いいことだと思います」
「そうだな。これからは芸術も広めなければな」
「私もそう思うな」
義愛も話した。その通りだとだ。

「元々八条学園は様々なことを学ぶ為の学園だからな」
「はい、だからこそ」
「芸術もまた」
そうした話にもなった。その間にもだ。
音楽は進んでいく。そのショパンの演奏がだ。
だが一時休憩となった。それを受けてだ。
義正はだ。席に座っている兄達に対してだ。こう言うのだった。
「少しです」
「ここを出るか」
「そうするのだな」
「はい、少し座り疲れてしまいました」
それでだとだ。微笑んで話すのだった。
「ですから。少しロビーに」
「わかった。それではな」
「休むといい」
兄達は弟に笑顔で告げてだ。彼が行くのを見届けた。そしてだ。
真理もだ。喜久子と麻実子に対してこう言っていた。
「少しです」
「休憩されますか」
「ロビーで」
「はい、そうさせてもらいます」
こうだ。笑顔で言うのだった。
「少し」
「そうですか。それでは」
「行ってらっしゃいませ」
「はい、それでは」
こうしてだ。彼女もだった。
ロビーに向かう。そしてそこでだった
二人はだ。会ってしまった。御互いに目が合ってしまった。
ロビーの中央でだ。二人は向かい合っていた。まずはだ。

真理がだ。咄嗟にだ。そこから去ろうとした。しかしだ。
義正はその彼女にだ。無意識のうちに言ってしまったのだ。
「あの」
「はい？」
「少し。宜しいでしょうか」
こうだ。声をかけたのである。
「御話がしたいのですが」
「御話ですか」
「こうして御会いしたのも。何かの縁です」
こうだ。彼女に言ったのである。
「ですから。宜しいでしょうか」
「ですが私は」
真理は彼に顔を向けている。しかしそれでも言うのだった。
「私達は」
「ですがそれでもです」
「それでもだというのですか」
「はい、それでもです」
強い声でだ。真理に告げる義正だった。

第六話　幕開けその十

「御話がしたいのですが」
「どうしてもでしょうか」
「貴女さえよければ」
真理のその黒い琥珀の目を見据えてだ。そのうえでの言葉だった。
「そうさせて下さい」
「私さえよければ」
「駄目でしょうか」
無意識のうちにだ。義正の目はだ。
切実なものになっていた。その目で見られるとだ。
真理は断れなかった。そうしてだった。
顔だけでなく身体も完全に彼に向けた。そうしてだった。
自分からだ。義正に対して言った。
「少しだけでしたら」
少しでは済まない、それがわかっていてもだ。言ったのだった。
「御願いします」
「はい、それでは」
義正も真理の言葉を受けた。二人は。
ロビーの一席に座った。幸いにして周りは二人に気付いてはいない。彼等それぞれの世界にいる。そして二人もだ。今二人の世界に入ったのだった。
向かい合って座ってだ。義正から話したのだった。
「今日の演奏ですが」
「ショパンですね」
「いいものですね」
こう真理に話す義正だった。
「実ははじめて聴いたのですが」
「私もです」

ここで真理は素直に真実を述べた。
「実は」
「ショパンを聴かれたのはですね」
「はい、はじめてです」
また答える真理だった。
「実はそうなのです」
「御互いにショパンははじめてだったのですね」
「そうですね。そうなりますね」
「そうですか」
それを聞いてわかってだ。
義正はまずは笑顔になった。そのうえで真理に話すのだった。
「御互いに。はじめてでしたか」
「しかし。素晴らしい音楽でしたね」
「確かに」
「あの音楽なら」
どうかとだ。真理は話す。
「また聴きたいと思います」
「私もです。是非です」
「はい、また機会があれば」
「聴きたいと思います」
「それではですが」
ここでだ。義正は提案した。これも自然に出た。
「一度レコードで聴かれてはどうでしょうか」
「レコードですか」
「レコードでは色々な音楽がかけられます」
これもこの時代になって出て来たものだ。レコードによりだ。音楽は大衆にさらに広まった。音楽が録音されるようになってである。
「その中にはです」
「ショパンもあるのですね」
「はい、クラシックに」

あるというのだ。ショパンもだ。
「あります。それでどうでしょうか」
「そうですね。それでは」
「それを聴かせてくれるお店もあります」
「お店で。音楽を聴けるのですか」
「そうです。そうしたお店もあるのです」
こう真理に話すのだ。
「そこはどうでしょうか」
「そうですね。それでは」
少し考えてからだ。真理は義正に答えた。
「今度。御願いします」
「その店に一緒に来てくれますね」
「それでどうしたお店でしょうか」
真理はそのことを尋ねた。その共に行くという店がどういった店なのかをだ。義正に対して静かな口調で尋ねたのである。

第六話　幕開けその十一

「そのお店は」
「はい、レコードや楽器を売っているお店でした」
「そういったお店ですか」
「そこで聴けます」
そうだと話す義正だった。
「クラシックのコーナーもありまして」
「そこでショパンも」
「その気になればショパン以外もです」
「それ以外もですか」
「はい、聴けます」
穏やかな言葉でだ。真理に話した。
「そのお店で」
「そうですか。そこは神戸にあるのですね」
「そうです、神戸です」
まさにだ。その神戸にだというのだ。彼等が今住んでいるこの街にだ。
「そのお店はあります」
「では。今度」
「行きましょう。こうしたコンサートもいいですが」
それだけではないというのだ。音楽を聴くことはだ。
「レコードもまたいいものです」
「レコードにはレコードのよさがあるのですね」
「だからこそ今広まっています」
ただそこに音楽家がいなくても音楽が聴けるだけではないというのだ。
レコードそのものにもよさがある。だからこそ広まっているというのだ。

「ですから」
「わかりました。それでは」
「一緒に来て頂けますね」
「はい」
また答える真理だった。こくりと頷いて答えたのである。
「そうさせて頂きます」
「それでは」
「楽しみにしています」
また言う真理だった。
「是非共」
「期待して頂き何よりです」
こう言葉を返す義正だった。
「ではそのご期待に添えさせてもらいます」
「そうして頂けるのですね」
「期待は添える為にありますから」
それでだというのだ。
「ですから」
「成程、だからですね」
「はい、だからです」
義正の返答は誠実なものだった。彼のその人柄を的確に見せているものだった。
「そうさせてもらいます」
「では」
「それでなのですが」
話が決まってからだ。義正はだ。
その話を変えてきた。今度はこう真理に話した。
「そろそろですね」
「そろそろ？」
「また。ピアノがはじまります」
音楽の話だがだ。それは今の話だった。

「ですから。戻りますか」
「そうですね。それではですね」
「はい、戻りましょう」
真理にだ。そのことを話した。
「そうしましょう」
「わかりました。そうですね」
真理もだ。義正に笑顔で応えたのだった。
「会場に戻りそうして」
「今の。ピアノを楽しみましょう」
「そうしましょう。二人で」
「はい、二人で」
こう話してだ。二人は今の話はそれで終わらせそれぞれ立ち上がりコンサート会場に戻った。義正が自分の席に戻るとである。
義愛がだ。彼に言ってきた。
「戻ったな」
「はい」
「丁度いい時に戻ってきた」
笑顔でだ。末弟にこう話すのだった。

第六話　幕開けその十二

「今からな。またはじまるぞ」
「そうですか。それなら」
「本当にいい時に戻ってきた」
またこう言う長兄だった。
「見計らった様だな」
「別にそれはないですが」
「見計らってはいないか」
「もう戻らないといけないと思いましたが」
何をしていたのかは話さずに答えた義正だった。
「それで」
「そうか。いい頃合いだったな」
「はい、そう思います」
「いいロビーだからな」
義愛は末弟がそこで何をしていたのかは考えずに述べた。
「くつろぐには最適だ」
「はい、本当にそうです」
「ロビーも大事か」
「欧州のオペラハウスですが」
義智がふとだ。長兄に対して言ってきた。二人の話に加わった形である。
「ロビーもまた重要とのことです」
「ただ。音楽を聴くだけではないか」
「ロビーの充実もまた優れたオペラハウスの条件の一つだとか」
「オペラハウスか」
欧州の華やかさの象徴の一つである。その話を聞いてだ。
義愛はだ。遠くを見る目になった。そのうえで弟達にこう話すのだった。

「我が国でオペラハウスができるのは何時になるだろうか」
「オペラハウスですか」
「それがですか」
「オペラの為だけの劇場」
そうした条件を付け加えたのである。
「それができるのは何時だろうか」
「それはどうも」
「わかりかねます」
弟達はいぶかる顔になって述べた。その間にだ。義正は己の席に戻っていた。そうしてそのうえで兄達と話を再開するのだった。
「芸術もまたその国の文化の成熟の一つですし」
「オペラはその中で最も重要なものでしょう」
総合芸術だからだ。
「ですが。今の我が国では」
「オペラハウスは」
「夢か」
義愛は少し残念そうに述べた。
「それはまだ夢か」
「残念ですが」
「そうではないでしょうか」
「夢ならばだ」
しかしだった。ここで義正はだ。
気を取り直した声になってだ。この言葉を出したのであった。
「現実になるな」
「夢はですか」
「現実になるというのですね」
「そうだ、夢と現実は別物ではない」
彼もだ。そう考えているのだ。だからこその言葉である。
「同じなのだ。つながっているのだ」
「夢は現実になり」

「現実は夢に現れる」
「だからですか」
「夢と現実は別ではありませんか」
「同じではないが別ではない」
こう夢と現実について話す。
「その通りだ。夢は現実になり現実は夢に現れるものだ」
「ではそのオペラハウスの夢もまた」
「現実のものにですね」
「そうしたいものだ。何時かな」
こう話しているうちにだ。はじまりを知らせるベルが鳴った。それを受けてだ。
義正は顔を前にしてだ。こう弟達に話した。
「はじまるな」
「はい、今からですね」
「はじまりますね」
「音楽に専念しよう」
弟達に告げた。

第六話　幕開けその十三

「ショパンにな」
「それでは」
「再び」
「聴くとしよう」
三人はショパンの世界に戻った。それはまさに現実にある歌の美であった。
そしてその美はだ。真理達も堪能していた。それが終わってからだ。
流麗かつ美麗な奏でを耳に残しながらだ。喜久子が言った。三人は丁度コンサートホールを後にしたところだ。そこで歩きながら話をするのだった。
「あれがですね」
「はい、ショパンですね」
その喜久子に麻実子が応える。
「何とも言われぬ」
「素晴らしさがありますね」
「はい」
麻実子は満ち足りた顔で喜久子に答えた。
「本当に。そう思います」
「ピアノが好きになりました」
喜久子はこうも言うのだった。
「お家にはピアノはありませんけれど」
「お入れにならられますか？」
「ただ。私はピアノを弾けません」
残念な顔になってだ。喜久子は話した。
「ですから。弾く誰かがいてくれなければ」
「あっても仕方ないというのですね」

「その通りです」
こう麻実子に述べるのだった。
「若しも。私がピアノが弾けたならば」
「芸術を自ら生み出すことができたのですね」
「悲しいながらそれはできないです」
「いえ」
喜久子が言った、そこでだった。
今は黙っていた真理がだ。ここでだった。喜久子に対して言ったのであった。
「芸術を生み出すことはできます」
「そうなのですか？」
「はい、できます」
喜久子だけでなく麻実子にも顔を向けて話す彼女だった。
「それは誰にもできると思います」
「では一体」
「どうやってでしょうか」
すぐに尋ねる二人だった。
「私達でも芸術を生み出せるなら」
「どうやってできるのでしょうか」
「恋愛です」
一言で答えた真理だった。
「それをすることです」
「恋愛がですか」
「それがですか」
「芸術だろ」
「そう仰るのですか」
「そう思います」
こう答えたのだった。今度はだ。
「恋愛はそれそのものがです」
「芸術なのですか」

「そこから生み出るものが芸術ではなく」
「恋愛もまた然りだと思います」
これが真理の二人への返答だった。
「私はそう思うのですが」
「左様ですか。恋愛それ自体が」
「芸術ですか」
二人は真理のその話にまずはいぶかしむ顔になった。しかしだ。
やがて少しだけ納得した顔になってだ。こうそれぞれ述べた。
「言われてみればそうかも知れませんね」
「絵画にしろ。音楽にしろ」
こう話していく二人だった。
「殆どの芸術は恋愛があってこそですから」
「そこからはじまりますから」
「はい、恋愛があってこそです」
真理もまた話すのだった。
「そうした芸術がはじまるのですから」
「成程、それでなのですか」
「人は誰でも芸術を生み出せる」
「恋愛を生み出せるからこそ」
「だからですね」
「恋愛は全ての芸術の父であり母です」
その話が続けられる。真理のその口からだ。
「私はそう考えるようになりました」
「どうしてそうなったのですか？」
麻実子が真理に尋ねた。

第六話　幕開けその十四

「それは何故」
「それは」
「それは？」
「ふとしたことから気付いたのです」
それでだと述べた真理だった。義正のことは隠しての話だった。
「それでなのです」
「ふとしたことですか」
「はい、恋愛があり」
義正とのことから。そう考えるようになったことは話しはしない。
だがそれでもだ。実感できたこととして話をしていくのであった。
「それからです」
「成程。ですが」
麻実子は真理の話を聞き終えて。自分の口から話した。
「そのお話ですと私も」
「私もですね」
喜久子もここで話す。
「芸術を生み出せますね」
「恋愛により」
「そうです。勿論私もです」
真理自身もだと。こうも話すのだった。
「人は誰でも芸術家なのです」
こんな話をしてだ。帰路につくのだった。そうしてだ。
自分の部屋に入る。その出迎えた婆やにだ。こんな話をした。
「御願いがあるのですが」
「御願いとは？」
「はい、レコードを買って宜しいでしょうか」
話したことはこのことだった。

「レコードをです」
「レコードをですか」
「蓄音機から。そのレコードをです」
「またどうしてでしょうか」
婆やは首を傾げさせて真理に問い返した。
「どうして。また急に」
「いけませんか？」
怪訝な顔になっている婆やに言った。
「それは」
「いけないということはありませんが」
「では宜しいのですね」
「はい。ですがレコードですか」
「音楽がそれでも聴けるのはいいことですね」
「私は音楽については。三味線位しか」
知らないというのである。音楽に疎い者はかなり疎くなってしまう、レコードのない時代ではそうなってしまうのだ。
「知らないのですが」
「三味線もレコードで聴けますよ」
「あれまあ、そうなのですか」
婆やは真理のその話に目を見開いて驚きの言葉を述べた。
「それは凄いですね」
「婆やも聴きますか？」
真理は婆やもどうするかと問うた。明らかに誘いである。
「どうしますか？それで」
「そうですね。何時でも聴けるのですよね」
「はい、そうです」
また答える真理だった。
「その通りです」
「左様ですか。それでは」
「では。蓄音機とレコードを」

真理は婆やが自分の話す方に傾いたのを見てさらに言った。好機と見てだ。

「買いましょう」

「はい。しかしこれまた随分とはいからですね」

「はいからですか」

「そうですよ。はいからですよ」

前から使われている言葉を出して述べる婆やだった。

「そんな。蓄音機とレコードなんて」

「はいからですか。そうかも知れませんね」

「けれど。音楽が何時でも聴けるというのは」

そのことについてはだ。婆やは次第に嬉しそうな顔になった。

そうしてだ。真理に対してだ。こう話したのだった。

「いいことですね」

「そうですね。それでレコードは」

何を買うのか。真理はそのことも話した。

「ショパンを」

「ショパン？」

「はい、ショパンを買います」

こんな話をしたのであった。そして実際に蓄音機とショパンのレコードを買ったのである。そうして音楽を常に聴くようになったのである。

第六話　　完

２０１１・３・２８

第七話　二人きりでその一

第七話　二人きりで

真理と話してから。それからだった。
義正は物思いに耽ることが多くなった。それでだ。
佐藤に対してだ。よくこんなことを話す様になった。
「若しもだ」
「若しも？」
「そうだ、若しもだ」
こう前置きしての話だった。
「愛を感じている相手がいる」
「いるならばですか」
「そうだ、いるならばだ」
どうかというのである。
「そしてその相手がだ」
「相手が？」
「会えない相手ならどうするべきか」
問うのはだ。このことだった。
「一体だ。どうするべきか」
「難しい話の様ですね」
「そうだな。難しい」
実際にそうだと話しもする。
「会うことが許されない相手なら君はどうするべきだと思うか」
「会うことが許されないというのはです」
佐藤は問うた。その問うたことは。
「公には、という意味ですね」
「公か」
「はい、人目につく場所ではですね」
「そういうことになるな」

話を聞いてだ。義正はそのことを認めた。
言われてみればそうなることだった。真理とのことはだ。人目についてはならないものだ。そうした意味で会うことを許されないということだった。
「それではどうするべきか」
「それなら決まっています」
佐藤はすぐに言った。
「その場合にすることはです」
「することは？」
「人目につかないようにしてです」
「会うべきだね」
「はい、そうすればいいのです」
こう主に話すのだった。
「その場合はです」
「人目につかなければいい」
「古い本ですが」
佐藤はこう前置きしてから話した。
「ツルゲーネフですが」
「露西亜のだね」
「はい、露西亜の文豪ですが」
「初恋だったかな」
義正はツルゲーネフの代表作を述べてみせた。
「呼んだことはないけれどいいとは聞いているよ」
「初恋ではなく」
「その作品ではないんだね」
「逢引です」
そちらだというのである。
「二葉亭四迷が訳したあの作品です」
「ああ、あれなんだ」
「はい、そのタイトルです」

「逢引をすればいいというんだね」
「そうです。逢引といえば聞こえが悪いですが」
それでもだというのだ。この場合はだ。
佐藤はそうしろというのだ。また話すのだった。
「二人きりで密かに合えばいいのです」
「成程ね。それがあったんだ」
「はい、公には許されていなくても他の何かが許していればいいのではないでしょうか」
「その何かとは」
「神でしょうか」
それではないかとだ。佐藤は話すのだった。
「この場合はそうなるでしょうか」
「神だね」
「神といっても色々な神がいますが」
「この場合は我が国の神ではないような気がするね」
「愛の女神になるでしょうか」
それではないかとだ。佐藤も話す。
「希臘の神話のあの」
「アフロディーテだったかな」
「その愛の女神が許せばとなるでしょうか」
こう主に話すのだった。

第七話　二人きりでその二

義正は佐藤の話に少し苦笑いになった。そのうえでの問いだった。
「希臘の女神は」
「我が国は多くの神がいますし」
八百万だ。その数は伊達ではない。
「他国の神も受け入れてきましたし」
「仏もだね」
「ですから。希臘の神もです」
「いるのかな」
「少なくともいないとは言えません」
いささか強引な主張だが佐藤は今はそれでいいとした。
「ですから」
「愛の女神は日本にもいる」
「はい、その愛の女神が許せばです」
「二人で密かに会うのも」
「いいと思います」
「そういうものなんだ」
「そう思います。ですが」
ここまで話してだ。佐藤はだ。
主のその整った顔を見てだ。こう問うのだった。
「旦那様、まさか」
「あっ、何でもないよ」
佐藤が何を問うのか察してだ。彼は隠した。
そしてそうしてからだ。言う言葉は。
「ただ。聞いただけだから」
「聞いてですか」

「シェークスピア以外にも読んでみたんだ」
文学をだ。その隠れ蓑にして話すのだった。
「色々とね」
「その中で、ですか」
「色々な理由で会えない二人が多くてね」
「恋愛小説には多いですね」
「舞台にもね」
これ自体はその通りだった。恋愛にはどうしても大なり小なり障壁がその前に立ちふさがってしまう。それもまた運命的なものがあるだろうか。
「それをするべきなのかな」
「特に淫靡な意味として考えずにです」
佐藤はこうも話した。
「二人で会うと考えればいいと思います」
「簡単にだね」
「はい、それでどうでしょうか」
「誰にも見つからずに」
「実際にそうして会う二人は多いですし」
これは現実からの話だった。この辺りは佐藤の人生経験である。
「それでなのですが」
「そうだね。わかったよ」
「わかった？」
佐藤は主の今の言葉に気付いた。それでだ。
怪訝な顔になってだ。彼に問い返した。
「旦那様、今何と」
「あっ、別に」
ここでまた失言に気付いてしまった。しかしだ。
何とか取り繕ってだ。こう話したのである。
「いや、舞台のことでね」
「舞台のですか」

「最近脚本を読んでいてね。舞台のね」
「それの話ですか」
「それだとやけに二人きりで密かに会うからね」
こう話したのである。実際に読んでいる為それを隠れ蓑にしたのである。
「だからね。思ったんだ」
「成程、そうなのですか」
「そうなんだ。実はね」
「そうですか。ではです」
「舞台を楽しもうか」
義正は言う。しかしである。
その舞台の主役については言わないのだった。それはだった。
その義正はだ。ある日だ。
仕事が終わってから手紙を書いた。ただしである。
宛先は書いたが差出人は書いていなかった。その手紙をだ。
ポストに入れた。それからであった。
何食わぬ顔でだ。こう佐藤に言うのだった。
「今度の土曜日だけれど」
「土曜ですか」
「一人である場所にいきたいんだ」
「御一人で、ですか」
「うん、一人でね」
真実を隠してだ。佐藤に対して話す。

第七話　二人きりでその三

「行きたいんだけれど」
「何処でしょうか」
怪訝な顔でだ。佐藤は義正に対して問い返した。
「その場所は」
「レコードの聴ける場所だよ」
そこだというのだ。
「そうしたお店があったね」
「マジックでしょうか」
ふとだ。佐藤は言った。
「あのお店でしょうか」
「ああ、わかるんだ」
「そうですか。あのお店にですか」
「うん、行きたいんだ」
こうだ。佐藤に対して話す。
「前に君が言ってくれたよね。あのお店がいいってね」
「はい、それは」
そのことはだ。佐藤はすぐに認めた。
そしてそのうえでだ。彼は義正に対してこう話した。
「それでは。土曜日にですね」
「行かせてもらうよ。それでいいね」
「わかりました。ただ」
「ただ？」
「くれぐれも御気をつけを」
心から心配する顔でだ。義正に対して話すのだった。
「近頃物騒でもありますし」
「あれだね。アナーキストやそういった面々が」
「近頃怪しい主張を言う者が多くなっています」

大正デモクラシーの光と影だ。民主主義が花開く中でだ。そうした鬼っ子が誕生してしまいだ。テロ活動を起こしてきていたのだ。

佐藤はそのことを危惧してだ。主に話すのである。

「ああした者達は財閥の人間を嫌っていますから」

「ブルジョワジーというんだね」

「はい、そうです」

共産主義から来る考えだ。この思想も広まってきていたのだ。

「だからです。くれぐれもです」

「この神戸にもいるんだね」

「東京程にはないにしても」

それでもだというのだ。７８

「やはり。いない訳ではありませんから」

「危険には気をつける」

「目立つ格好は避けて下さい」

それはだ。くれぐれもだというのだ。

「スーツ程度なら問題はありませんが」

「うん。それじゃあ」

「私も。近くにいますので」

佐藤がこう言うとだった。義正はだ。

少し戸惑った顔を見せてだ。こう彼に返した。

「いや、君は」

「私は？」

「できれば。安んでいてくれるかな」

「休んで、ですか」

「うん、やっぱりね。一人で来たいからね」」

だからだとだ。こう話すのだった。

「そうしてくれるかな」

「いえ、そういう訳にはいきません」

しかしだった。彼はだ。

その職務に忠実なところ、義正にとってこの場合はいささか困っ

たことにだ。それを見せてそのうえで主に対して話すのだった。
「私は御主人様を御護りしなければなりませんから」
「どうしてもっていうのかい？」
「いけませんか」
声が切実なものになっている。しかしだ。
彼はだ。あくまでこう言うのだった。
「それは」
「やっぱりね。今回はね」
「どうしてもですか」
「うん、御願いできるかな」
「宜しいでしょうか」
念を押す調子でだ。また言う佐藤だった。

第七話　二人きりでその四

「本当に。怪しい輩にはです」
「気をつけろだね」
「アナーキストだけではありません」
いささか保護者めいていた。だが本人はそれに気付くことなくさらに話す。
「やくざ者もいますから」
「彼等もだね」
「世の中は危険に満ちています」
いささか大袈裟なだ。佐藤の今の言葉だった。
「ですからくれぐれもです」
「用心は必要だというんだね」
「はい、ですから」
また言う彼だった。
「何かあればです。その時はです」
「戦うんだね。剣道や柔術で」
義正はそうしたものを身に着けているのだ。どちらも中々の腕前だ。
「そうしろというんだね」
「いえ、違います」
それは否定する彼だった。そうではないというのだ。
「そうではありません」
「違う？」
「はい、違います」
「じゃあどうしろというんだい？」
「走るのです」
そうしろとだ。佐藤が言うのはこのことだった。
「ここはです。そうするのが一番です」

「ここで走るということはつまりは」
「はい、逃げるのです」
そうしろというのである。これが佐藤が今義正に勧めることだった。
「君子危うきに近寄らずです」
「だからなんだ」
「確かに護身用のものも持っているべきですが」
それを言うのは忘れなかった。用心に用心を重ねている。
「ですがそれでもです」
「逃げるのが一番なんだ」
「御一人ではそうして下さい」
佐藤の言葉に限定が入った。
「ですが御一人でない場合は」
「その場合は？」
「必要な限り戦って下さい」
そうしろというのである。このことも話すのであった。
そうした話をしてだった。義正はその店に行くことにしたのだ。
義正はその土曜を待っていた。その手紙は。
真理は手紙を受け取った。しかしだ。
そこに差出人は書かれていなかった。その手紙の封を見てだ。
婆やはだ。怪訝な顔になってだ。彼女に言うのだった。
「あの」
「あの？」
「この手紙は危ういのでは」
こう言うのだった。真理に対してだ。
「差出人が書かれていません」
「そうですね。ただ」
「ただ？」
「この字を見ますと」
封の表に書かれているその字を見て話すのだった。それは他なら

ぬ真理の名前が書かれていた。無論この屋敷の住所もである。
それを書いている毛筆の黒い字を見てだ。彼女は婆やに話したのだ。
「奇麗ですね」
「そうですね。確かに」
「流麗で。整った字です」
「達筆ですね」
婆やもそれは否定しない。確かにであった。
その字は達筆と言っていいものだった。その字を見てだ。
真理はだ。こう言うのだった。
「字はその人が出るといいますね」
「はい、字にこそです」
それはその通りだとだ。婆やは答えた。
「そうしたものはです」
「出るのですね」
「それを見ますと」
婆やもだ。その字を慎重に見ながらだ。真理に話すのだった。
「この手紙を差し出した人は確かな人です」
「怪しい方ではありませんね」
「はい、間違いありません」
また真理に話す。

第七話　二人きりでその五

「卑しい方でもありません」
「なら。封を開けて」
「いいと思います」
それもいいというのだった。
「これは」
「わかりました。それでは」
こうしてだった。真理はだ。
自分の部屋に入って手紙の封を切った。そうして中を出してだ。
手紙を読んだ。そうしてだった。
手紙をだ。自分の机の中、それも一番奥に収めてから部屋を出てだ。婆やに尋ねたのである。
「あの、土曜日ですけれど」
「土曜日ですか」
「街に出ても宜しいでしょうか」
こう尋ねたのである。
「そうして宜しいでしょうか」
「街にですか」
「はい、喫茶店に行きたいのですが」
そこにだというのである。
「宜しいでしょうか」
「喫茶店ですか」
話を聞いてだ。婆やはだ。
少し怪訝な顔になってだ。こう真理に話した。
「あの、珈琲や紅茶でしたら」
「家でも飲めますね」
「はい、何時でも飲めますが」
真理に話す。その少しそうなった怪訝な顔でだ。

「それでも。行かれるのですか」
「いけませんか、それは」
「違う味を楽しまれたいのですか？」
婆やはそう考えた。真理の言葉にだ。
「それでなのでしょうか」
「はい、それでなのですけれど」
「成程。そうですか」
真理の言葉を聞いて言う。しかしだった。
彼女は気付いていなかった。真理の目がやや泳いでいることに。
そしてだ。
そのうえでだこう話すのだった。
「では」
「はい、それでは」
「楽しまれて下さい」
こう真理に話した。
「是非共」
「有り難うございます。それでは」
「ただ、です」
「ただ？」
「くれぐれもです」
彼女もだ。こう言うのだった。
「御気をつけ下さい」
「街にですね」
「御存知とは思いますが」
前置きもする。しかし言う言葉は同じだ。
「街には色々な人がいます」
「それはわかっているつもりですが」
「やくざ者に絡まれれば厄介です」
婆や心配しているのは彼等についてだった。
「ですから、そうした者にはです」

「避けるのですね」
「最初から怪しい場所には入らないで下さい」
心配そのものの顔で真理に話すのだった。
「本当にです」
「はい、それは」
「本当にですよ」
とにかく心配でだ。彼女に言い続けるのだった。顔にもそれが出ている。
「御気をつけ下さい」
「そうですね。本当に」
素直な真理はだ。婆やのその言葉に頷く。そうしてだ。
本当にだ。心に刻んで言うのだった。
「それだけは」
「何かあればです」
その心配は婆やの頭の中から消えない。言わずにはいられないのだった。

第七話　二人きりでその六

「誰もが心配しますので」
「ええ。それでは」
「何でしたら」
ここからはだ。婆やの先走りだった。だが言ってしまった。
「私もです」
「婆やも？」
「ご一緒しますから」
顔に出ている心配はさらに強いものになっていた。
「そうしますので」
「いえ、それは」
笑ってだ。真理はだ。
それはいいとした。そしてまた言うのであった。
「気にしないでいいですから」
「左様ですか」
「私も。もう学生ではありませんし」
もう充分な、街を一人で歩いていい年齢だというのだ。
「ですから。気をつけますが」
「大丈夫なのですね」
「はい、そうです」
こう話してであった。真理もまた、だ。
手紙が教えてくれた場所に向かう。そこにであった。
そこはダークブラウンの木造の店だった。
天井も何もかもがダークブラウンだった。無論テーブルや椅子もだ。カウンターもである。木造でありそれがさらに趣きを見せている。
窓ガラスの透明がそのダークブラウンを余計に引き出している。
内装はイギリスを思わせるものであり柱やその窓ガラスの造り、そ

してテーブルも椅子もだ。全てがイギリスのそれであった。
その店の中に入るとだ。すぐにだ。
音楽が聴こえてきた。それは彼女が一度だけ聴いた音楽だった。
それは。
「モーツァルト？」
「はい」
ここでだ。声がした。
カウンターからだ。そこにはだ。
赤いベストに白いシャツ、それと青いネクタイ、黒いズボンのだ。
義正がいた。彼が微笑んでだ。カウンターの傍まで来ていた真理に声をかけてきたのだ。
「そうです。フィガロです」
「フィガロ？」
「オペラでして。フィガロの結婚といいます」
「フィガロの結婚ですか」
「そのオペラの序曲です」
今聴こえているのはだ。その曲だというのだ。
「レコードから。かけられているのです」
「そうだったのですか」
「はい、如何でしょうか」
義正は席から立ち上がっていた。そしてだ。
真理のところに来てだ。そのうえで彼に声をかけてきていた。
「この音楽は」
「一度聴きましたが」
こう答えてからだ。それからだった。
真理はだ。あらためてこう義正に述べた。
「少し違うような気がします」
「音楽がですか」
「はい、前に聴いたのと」
違うのではないかというのである。

「レコードのせいでしょうか。けれど前もレコードでしたし」
「指揮者が違うのでしょう」
「指揮者が？」
「はい、それとです」
さらにだ。違う理由はあるというのだ。
「オーケストラも違うのでしょう」
「演奏する人達がですか」
「同じ曲でもそれを操る人が違えば変わります」
「同じ曲でもですか」
「歌と同じです」
微笑んでだ。こう真理に話した。
「同じ歌でも歌う人が違えば随分と変わりますね」
「はい、確かにそれは」
「それと同じなのです」
「だからですか。こうして」
「はい、それでだと思います」
義正の説明はこうしたものだった。
「そのせいでしょう」
「そうですか。私が前に聴いたのはもっとゆるやかでしたが」
「今は速いですね」
「少しですが」
そうだというのである。

第七話　二人きりでその七

「そう感じます」
「左様ですか。それにしても」
「それにしても？」
「前に一度聴かれただけですね」
義正が今度真理に言うのはこのことだった。確かめの言葉だった。
「そうですよね。一度だけですよね」
「はい」
その通りだと答える真理だった。
「そうなんです。一度だけです」
「それで違いがおわかりになられるとは」
そのことにだ。義正は驚くべきものを感じてだ。それで真理に話すのだった。
「凄いものですね」
「凄いでしょうか」
「そうとしか言えません」
真理に対して言う。
「一度で聴き分けられるとは」
「これが聴き分けなのですか」
「はい。ところで」
ここでだ。義正はこう真理に話した。
「座りませんか」
「あっ、そうですね」
言われてだ。真理もそのことに気付いたのだ。
二人は今立ったままで話している。義正は席から立ってだ。
「それでは」
「席を変えますか」
義正は自分の座っている席を見てから述べた。

「迂闊でした。カウンターに座っていました」
「カウンターではなのですか」
「はい、今一つよくありません」
これが義正の考えだった。
「ですから。二人用の席にです」
「そこになのですか」
「はい、そこにです」
また真理に話す義正だった。
「そこに座りましょう」
「では」
真理は店の中を見回した。するとだ。
彼女の丁度傍にである。その席があった。
二人用のだ。椅子が向かい合う形の席があった。そこにであった。
義正はそれを見てだ。あらためて真理に話した。
「そこにしますか」
「そうですね」
真理は微笑んで義正に応えた。
「そこにしますか」
「はい、それでは」
こうしてだ。二人はだ。
その席に向かい合って座った。そのうえでだ。
あらためてだ。義正は真理に話そうとする。しかしだ。
その彼にだ。ある者が来た。それは。
店のマスターだった。黒いシャツに蝶ネクタイのオールバックの男だ。年は三十代程だろうか。赤いチョッキに黒いズボンがこれまた端整だ。
その彼がだ。微笑んで義正に言ってきた。
「あの」
「何かあったかな」
「珈琲ですが」

見ればだ。彼のその手にはだ。
珈琲があった。それを持って義正に話してきているのだ。
「お忘れです」
「あっ、そうだったね」
「はい、まだ飲まれますね」
「勿論だよ。そうさせてもらうよ」
その通りだと答える彼だった。
「のみかけだしね」
「はい、それでは」
こうしたやり取りの後でだった。彼の前にその珈琲があらためて置かれた。
そしてその珈琲を見たところでだ。義正はだ。
真理に顔を戻してだ。音楽の話の前にこう尋ねたのだった。
「何を飲まれますか？」
「そうですね。それでは」
その珈琲を見てからだ。真理は答えた。
「珈琲を」
「この珈琲をですか」
「同じものを飲みたくなりました」
それでだというのだ。

第七話　二人きりでその八

「御願いします」
「わかりました。それでは」
「はい、それでは」
こうしてだ。彼女もその珈琲にするのだった。まだ二人の傍にいたマスターに注文する。すると程なくしてであった。
もう一つ珈琲が来た。それが自分の前に置かれ黒い珈琲から白い湯気が出ているのを見ながらだ。彼女は微笑んで義正に言った。
「あらためてですけれど」
「音楽ですね」
「ここは音楽を聴くお店なのですね」
「はい、珈琲や紅茶を飲みながら」
そうする店だとだ。義正も微笑んで話す。
「そうするお店です」
「そうですか。やっぱりそうなんですね」
「そうです。それでなのですが」
義正は少しずつ自分のリードに戻してだ。真理に話す。
「先程の曲ですが」
「フィガロの結婚のですね」
「はい、序曲です」
その曲の話に戻った。先程の話の仕切りなおしだった。
「その序曲ですが」
「こう言う表現は大袈裟でしょうが」
真理は前置きの後でだ。曲について話した。
「モーツァルトの曲はああした感じですよね」
「多くの曲がそうです」
その通りだと答える義正だった。
「ああした感じです」

「天使の調べでしょうか」
そんな感じだとだ。真理は話した。
「そうした曲ですね」
「そうですね。モーツァルトはそんな感じですね」
「聴いていると心が弾んで」
真理はだ。聴いていてそう感じたのである。
「明るくなります」
「私もです」
義正もそうだというのだった。
「そう感じます」
「モーツァルトはいいものですね」
「はい。墺太利の音楽家でして」
「あの古い国ですね」
真理は墺太利についてはそう聞いていた。欧州の中では古い国だとだ。
「音楽の国だとか」
「モーツァルトがその代表です」
「彼こそがなのですか」
「モーツァルトが墺太利をそうしたと言うべきでしょうか」
音楽の国にだ。したというのである。
「そうした音楽家です」
「あの音楽で」
「はい。大きく言えば独逸の音楽です」
墺太利と独逸、言葉が同じこの二国をおおまかに文化圏で分類してであった。彼は言った。
「独逸の音楽です」
「独逸のですか」
「独逸の音楽は他にもあります」
義正は微笑んで話す。
「シューベルトもありますが」

「シューベルト？」
「そうです、シューベルトです」
「その作曲家は」
「御存知ありませんか」
「名前だけは聞いたことがあります」
真理が知っているのはだ。それだけだというのだ。彼についてはだ。
「ですが聴いたことは」
「ありませんか」
「残念ですが」
そうだというのである。真理はだ。
「その音楽家の音楽は」
「独逸を代表する音楽家の一人でして」
「独逸ですか」
「はい、モーツァルトとはまた違う国です」
ここでは墺太利と独逸を分けて話す義正だった。

第七話　二人きりでその九

「言葉は同じですが」
「国が違うのですね」
「そうです。その音楽家の音楽はどうですか？」
義正はあらためてだ。真理に対して尋ねた。
「今度はです。それを如何でしょうか」
「はい、それでは」
真理は微笑んでだ。義正のその誘いに応じた。
そうしてだ。そのうえでだった。
義正はだ。マスターを呼んだ。そのうえで席の傍に来た彼に頼むだった。
「次の音楽は」
「何にされますか？」
マスターは丁寧に彼に尋ねた。立つ姿勢も背筋が立ち礼儀正しい。
「次は」
「シューベルトを頼めるかな」
「シューベルトですか」
「うん、野薔薇を」
その曲をだというのだ。
「あの曲が入っているレコードを頼むよ」
「はい、それでは」
マスターは端整に一礼してだ。そのうえでだった。
店のカウンターに戻りだ。その端のだ。
蓄音機にレコードをかける。するとそのヘチマに似た蓄音機からだ。
音楽が聴こえてきた。その曲は。
真理が聴いてだ。こう言うに足るものだった。
「この曲は」

「如何でしょうか」
「奇麗ですね」
微笑んでだ。義正に述べた。
「この音楽家の曲もいいですね」
「御気に召されたのですね」
「はい」
その通りだとだ。笑顔で答えた。
「とても。シューベルトもまた」
「今かけられているのが野薔薇です」
先程マスターと話していただ。その曲だというのだ。
「野薔薇です。どうでしょうか」
「そうですね。この野薔薇は」
「奇麗で。優しい曲ですね」
「誰かへの想いを歌っているのでしょうか」
「おわかりになられたのですか？」
「何となくですけれど」
歌っている言葉はわからない。それでもだというのだ。
彼女はだ。わかるというのである。
「そうした曲だと感じます」
「はい、実はです」
「そうした曲なのですね」
「シューベルトの恋の歌です」
まさにだ。そうだというのだ。
「私の好きな曲の一つです」
「モーツァルトだけでなくですか」
「はい、シューベルトも好きです」
微笑でだ。真理に話す。
「それにです」
「それに？」
「音楽はどれだけ好きになってもいいのです」

音楽自体の話もしたのだ。ここでだ。
「私はそう考えています」
「音楽は。どれだけでもですか」
「はい、何曲でもです」
具体的にはだ。数の話だというのだ。
「好きになってもいいのです」
「そうですか。何曲でも」
「これは浮気にはなりませんよね」
真理にだ。尋ねた。
「歌については」
「それはならないと思います」
そして真理もだ。彼のその問いに真面目に答えた。
「やはり。それとこれとはです」
「違いますね」
「そう思います」
はっきりと己の考えを義正に話した。
「例えになるかどうかはわかりませんが」
「わかりませんが？」
「色々な食べ物が好きなのと同じではないでしょうか」
「食べ物とですか」
「はい、それとです」
同じではないかというのである。これが真理の今の考えであり言葉だった。

第七話　二人きりでその十

「同じだと思います」
「では魚が好きであり野菜が好きなのと」
「同じだと思います。言い換えれば」
真理はだ。こうも話した。
「私達は今珈琲を飲んでいますけれど」
「珈琲ですか」
「珈琲も多くの種類がありますね」
豆によってだ。種類がある。そういうことだった。
「ですがそれぞれの珈琲を好むのと同じで」
「歌もまた」
「そうではないでしょうか」
こう義正に話す真理だった。
「例えが低俗かも知れませんけれど」
「いえ、そうだと思います」
「それで正しいですか。食べ物や珈琲と同じだと」
「音楽はそういうものだと思います」
彼はだ。音楽と食べ物を同じものだとして今はこうして話した。
「心の糧となるものですから」
「心の」
「食べるものは身体の糧になります」
心と身体をだ。共に話すのだった。義正はその二つを同格、同一のものとして真理に話す。
「ですから。同じですから」
「そうですか。では」
「貴女の言われたことはその通りだと思います」
それでだ。正しいというのである。
「多くの音楽を愛するのは多くの料理を愛するのと同じですね」

「そういうものなのですね」
「そう思います。ただ」
「ただ？」
「愛は別でしょう」
「愛はですか」
「はい、それはです」
義正の言葉が強いものになった。そのうえでの言葉だった。
「愛は一つでなければなりません」
「一つですね」
「それは絶対にして一路でなければならないと思います」
こうだ。彼は言うのである。
「愛とは即ち真実一路です」
「真実一路ですか」
「はい、それが愛だと思います」
己のその考えを真理に話すのだった。そうしていくのであった。
「私はそう思うのですが」
「料理は音楽を数多く愛せても」
「女性への愛は唯一です」
それはだ。一つしかないというのだ。
「その考えは間違っているでしょうか」
「いえ」
義正のその言葉にだった。真理だは。
首を小さく横に振ってからだ。こう答えた。
「その通りです」
「そう思われますか」
「はい」
静かに微笑んでの返答だった。
「そうでなければ。愛ではないと思います」
「与謝野晶子ですね」
彼もだ。この名前を出したのだった。

「あの人もまたそうですね」
「あの愛は素晴らしいものですね」
「理想です」
その愛のだ。理想だというのだ。
「素晴らしい理想です。そして」
「そして？」
「現実です」
それでもあるというのだ。理想であり現実であると。
義正はさらに話していく。その理想と現実についてだ。
「私は完全な理想、完全な現実はないと思います」
「といいますとどれもですか」
「そうです。どちらも離れてはいません」
彼の考えだった。離れてはいないというのだ。
「理想は現実になり現実が理想を生み出すのですから」
「ではどちらもですね」
「はい、人の中にあるものです」
「愛もまた」
真理は義正のその話を聞きながら述べていく。彼女の言葉をだ。

第七話　二人きりでその十一

「与謝野晶子さんの様に誰もなれるのです」
「私達もでしょうか」
「はい、そうです」
義正は断言した。はっきりとだ。
「その通りです」
「そうですか。私達もまた」
「そうなりますか？」
義正はシューベルトの歌を聴きながら真理に問うた。
「そうなりますか」
「なりたいです」
真理は自然にだ。この答えに行き着いた。
「是非共。夢を現実にしたいです」
「そうしたいですね」
この場合はだ。理想は夢になっていた。
そしてだ。その夢についてだ。真理はまた話した。
「完全な夢はなりませんね」
「現実になります」
「では。是非」
「私もそれを目指します」
義正の言葉は変わらない。決意もだ。
「貴女と共に」
「では。私も」
「それでなのですが。宜しいでしょうか」
義正はあらためて真理に言った。
「私達のことですが」
「私達の」
「これからもこうして御会いしたいのですが」

「このお店でなのでしょうか」
「いえ、他の場所でも」
ここだけではないというのだ。他の場所でもだというのである。
「御互いに望む場所で」
「二人でなのですね」
「そうです。そうしたいのですが」
「それでは」
義正の今の言葉にもだ。頷く真理だった。
そしてだ。こう話して応えたのである。
「私も。二人で」
「色々な場所を行きましょう」
「こういうことを何と言ったでしょうか」
真理はその顔を赤らめさせて義正に尋ねた。
「逢引ではないですか」
「確かデートだったかと」
「デートですか」
「欧州ではそう言っていた筈です」
それだとだ。真理に話した。
「そう記憶しています」
「デートですか。何か」
その単語を聞いてだ。真理は静かに言った。
「不思議な響きの言葉ですね」
「そうですね。洒落ていてそれで」
「甘い感じの。そうした不思議な言葉ですね」
「そう思います。それではですね」
「はい、これからも」
こんなことを話した。その話が終わるとだ。
音楽が終わった。野薔薇がだ。そしてまた次の曲がはじまった。
今度の曲は。
野薔薇よりも清らかな調べの曲だった。その曲を聴いてだ。真理

は義正に対してだ。その曲に耳をそばだたせながら尋ねた。
「今度の曲は何というのですか？」
「アヴェ＝マリアです」
「アヴェ＝マリアといいますと」
「聖母マリアは御存知ですね」
キリスト教の聖なる存在の一人である。
「彼女のことは」
「西洋のですね」
「はい、キリスト教の聖者の一人です」
牧村も実際にこう説明する。
「その彼女を讃える歌です」
「そうですか。聖なる人をですね」
真理はソプラノのその清らかな歌を聴きながら述べた。それは聴いているだけでだ。
心だけでなく全てが清らかになりそうだった。その中でだ。

第七話　二人きりでその十二

ふとだ。ほう、と溜息に似ているがより中身のあるだ。そうした息を出したのである。

そのうえでだ。彼女はこんなことを言った。

「その方を讃えて。ここまで清らかな歌が」

「御気に召されたのですね、この曲も」

「はい」

「そうですか。私もこの曲は」

「お好きですね」

「これ程清らかな曲は他にはないでしょう」

そこまでの曲だというのだ。

「ですから」

「これがシューベルトなのですね」

「そうです。シューベルトの曲はどれも清らかなものです」

「モーツァルトとはまた違った奇麗さがありますね」

「音楽も様々ですね」

義正は笑顔で話す。

「こうした曲もありそれに巡り会える」

「幸せなことですね」

「そう思います」

こうした話をしてだ。そうしてであった。

二人は暫く曲を聴いてからだ。その店を後にした。

そしてだ。暫く二人で歩いてからだ。

駅前でだ。別れるのであった。

「ではここで」

「はい、また」

義正も真理もお互いを見て話す。

「機会を見つけて」

「御会いしましょう」
「申し訳ありませんが」
しかしだ。ここでだ。
義正は顔を曇らせてだ。真理にこんなことを告げた。
「お家までエスコートすることはできませんので」
「そうですね。私達の家は」
真理もだ。顔を曇らせて義正の言葉に応える。
「それだけは」
「どうしてもできません」
「はい。ですが」
それでもだとだ。真理は気を取り直した顔になって述べた。
「何時かはです」
「ええ、必ず」
「御互いの家を訪問し会えるようになりたいですね」
「そう思います。難しいですが」
「ロミオとジュリエットにはなりたくありません」
真理の今の声は強いものだった。
「決して。そうはなりたくありません」
「私もです」
義正もだ。真理のその強い声に強く頷き返した。
「心からそう思います」
「ですから。何時かお父様達にお話したいと思います」
「そうですね。反発があるでしょうが」
「それでも。負けないで」
「御互いに訪問できるようになりましょう」
「それに」
それで終わらないとだ。真理は言葉を続けた。
「私はそれで終わりたくはありません」
「訪問ではですね」
「はい、さらにです」

義正の顔を見上げてだ。そのうえでの言葉だった。
「八条さんと共にいたいです」
「私もです」
「貴方もですか」
「止まらなくなりました」
真摯な顔であった。その顔での言葉だった。
「私も。白杜さんがです」
「私をなのですね」
「愛してしまいましたから」
それならばだ。最早止まらないというのである。
「ですから」
「そうですね。それではです」
「勝ち取ります」
義正も言った。
「最後の最後まで。幸せを」
「そうしましょう。何があろうとも」
「それを約束してくれますね」
「します」
即答だった。真理も己を止められなくなっていた。最早だ。

第七話　二人きりでその十三

だからこそだ。今は即答したのである。
「今ここで」
「わかりました。そのお言葉受けました」
「有り難うございます」
「その約束を胸にです。今は」
「御別れですね」
「暫しの別れですね」
微笑みになった。その笑みで言ったのである。
「また御会いするまでの」
「それまでのほんの」
「そうです。では」
「はい、では」
「さようなら」
「また。御会いしましょう」
二人で言い合いだ。今は別れたのだった。
真理はそのまま屋敷に帰った。そうして己の部屋に入った。するとすぐにだ。
扉をノックする音が聞こえてきた。その音に顔を向けて応えた。
「どうぞ」
「はい」
婆やだった。彼女が入って来たのだ。
そのうえでだ。こう彼女に言ってきたのである。
「服はどうされますか？」
「今から着替えるつもりですけれど」
「御手伝い致しましょうか」
彼女に気を配ってだ。そうしての言葉だった。
「そうしましょうか」

「いえ、一人でします」
「左様ですか」
「はい。ただ」
「ただ？」
「御茶を用意して欲しいのですけれど」
「御茶ですか」
婆やが尋ね返すとだ。それを受けてだ。
あらためてだ。こう訂正して言ったのであった。
「そうですね。珈琲にします」
「珈琲にされますか」
「はい、今はそれを御願いします」
こう婆やに告げたのである。
「宜しいでしょうか」
「少し時間がかかりますがいいですか？」
「はい、その間に着替えておきますので」
それでいいと返す真理だった。
「御願いします」
「では」
「それでは」
こうしてだ。婆やに珈琲を頼んでだ。真理は自分で服を着替えた。
外出用の赤と白の和服、淡いピンクのパラソルも持っていたそれからだ。白いゆったりとした洋服に着替えた。
そのうえで婆やが来るのを待つ。それはだ。
すぐだった。彼女はすぐに珈琲を持って来た。そうしてだった。
笑顔でだ。こう真理に言ってきた。
「どうぞ」
「有り難うございます。それでは」
「飲まれたらです」
その時の話もだ。真理にするのだった。
「また御呼び下さい」

「いえ、それは自分で」
「御自身で下げられますか」
「はい、そうします」
真理から婆やに話した。
「ですから」
「いえ、それは」
「いえ、婆やもそこまでしなくていいですか」
「左様ですか」
「はい、お気遣いなく」
笑顔でまた婆やに話したのだった。
「そうして下さい」
「そこまで仰るのでしたら」
「それで御願いしますね」
こんな話をしてだ。そうしてだった。
彼女は部屋の中の椅子に座ってそのうえで珈琲を飲む。その味は喫茶店のそれとは少し違うがそれでもだ。あの時の音楽を思い出させるものだった。
それを飲み思い出していた。しかしここで。
咳が出てしまった。六回程度。そうして言うのであった。
「最近どうも咳が」
多いように感じた。だがそれは今は忘れてだ。義正と共にいた時のことを思い出しその中に浸っていた。

第七話　完

２０１１・４・６

第八話　進むだけその一

第八話　進むだけ

義正はだ。また兄達と話していた。場所は屋敷のリビングだ。そこで紅茶を楽しみながら話をしているのだ。まず義智がこう言うのだった。

「式の日取りも決まったし」

「早いですね」

「うん、あちらからの御願いもあってね」

こう義正に話す彼だった。

「それで決まったんだよ」

「日取りもですか」

「そう、決まったんだ」

笑顔でだ。弟に話すのであった。

「いや、後は式の日を待つだけだけれど」

「ここからが一番長いぞ」

長兄の義愛は優しい笑顔でその義智に話した。

「ここからがな」

「日が決まってからですか」

「今楽しみで仕方ないな」

「はい」

その通りだと答える彼だった。

「本当に」

「だからだ。長くなるんだ」

「楽しみで。そのことで頭が一杯になるからですか」

「そうだ。それでだ」

そのせいでだ。長く感じるようになるというのだ。

「わかったな。それが」

「わかったというのには」

「無理があるか」
「どうも」
義智は今は困惑する顔でだ。長兄に答えた。
「楽しい気持ちはありますが」
「それがどうかとはまだわからないか」
「はい」
まさにだ。その通りだというのである。
「そうなのですか。長くなりますか」
「そうだ。まあすぐにわかる」
それがわかるのはだ。すぐだというのだ。
「御前もな。わかる」
「では。それを確かめさせてもらいます」
「そうするといい。それでだが」
ここまで話してである。義愛はだ。
義正に顔を向けてだ。こう問うたのである。
「それでだが」
「私ですか」
「そうだ、御前だ」
他ならぬだ。彼だというのだ。
「御前はどうなのだ」
「相手は」
「まだいないか」
「それは」
「いや、答えなくていい」
彼が口ごもるのを見てだ。気を使ってこう言ったのである。気を使ったのだがそれでもだ。真実には気付いていない行動だった。
「しかしだ」
「しかしですか」
「相手は見つけるべきだ」
前とだ。同じ話になった。

「それはな。わかるな」
「はい、それは」
「だといい。御前ならな」
「私ならですか」
「必ずいい相手を見つけることができる」
微笑んでだ。弟に話すのだった。
「必ずな。できる」
「できますか」
「その心ならできる」
彼の心を見ての言葉であった。
「絶対にだ」
「では。そうさせてもらいます」
「結婚をして伴侶を得ることはだ」
長兄はそれが何なのかも話した。

第八話　進むだけその二

「それがよい相手ならば永遠の幸福となる」
「ソクラテスの言葉ですね」
「そうだ。ただしだ」
義愛はここで悪戯っぽい笑顔になった。そうしてだ。
あらためてだ。義正だけでなく義智にもだ。こう話した。
「悪い相手なら哲学者になるかというとだ」
「そうではない」
「違うのですか」
「それもまた幸せとなる」
そうなるというのである。そしてであった。
それが何故かをだ。彼は話したのだった。
「幸せを見つけようとするからだ」
「その悪い相手に対してですか」
「そうなると」
「人は誰でも幸せを求める」
義智の言葉だ。
「誰でもだ」
「それは当然のことですね」
「他人に迷惑をかけない限りはだ」
そうしていいとだ。義智は話すのである。
「そうしていいのだ」
「むしろですね」
「そうしなければならない」
絶対にだとだ。次兄は末弟に話す。
「人間ならだ」
「人間なら幸せにならなければならない」
「最近言われてきた話ではあるがな」

所謂西洋からの考えだ。自由主義や民主主義という考えだ。
「そうするべきだな」
「わかりました。それでは」
「義正は真面目だからな」
義愛がだ。また笑ってみせて彼に言ってきた。
「こう話すとな」
「どうしてもそのことに集中してしまいますね」
「しかも一直線にな」
「それはよくないことでしょうか」
「いや、それでいい」
義愛は末弟のその考えや行動を否定しなかった。
そしてだ。こうも話したのだった。
「若いうちはな」
「一直線でいいのですか」
「人生の経験は。とはいっても私もまだ若いが」
軽い苦笑いも少し入れて話す。
「それでもだ。人生の経験は嫌でも学んでいく」
「だから今はですか」
「そうだ。一直線でいい」
また話す義愛だった。
「今の義正はな」
「わかりました。それでは」
「幸せを一直線に追い求めることだ」
「はい」
「そしてその幸せを手に入れる」
追い求めるならだ。そうあるべきだというのだ。
「わかったな」
「わかりました。それでは」
こんな話をしたのであった。そしてだ。
その日曜にだった。真理と共にその砂浜に行くことにしたのであ

った。

真理もだ。笑顔でだ。喜久子と麻実子にこう話すのだった。

「源氏物語ですけれど」

「紫式部のですか」

「あの古典ですね」

「そうです。あのお話です」

須磨のことを考えながらだ。二人に話す。

今彼女達は図書館のロビーにいる。そこのイギリス風の椅子とテーブルに座り本を広げながらだ。二人に話をしているのである。

彼女はだ。こうも話した。

「あの源氏物語で源氏の君が流されて」

「この神戸のですね」

「須磨にですね」

「はい、そのことです」

そのだ。須磨の話をするのだった。

第八話　進むだけその三

「須磨のことですが」
「そこに行かれるのですか？」
「そうされるのですか？」
「そう考えています」
実際にそうだとだ。義正のことを隠して二人に話すのである。
隠していても彼のことを考えながらだ。そのうえでまた話した。
「そこに行こうかと」
「いいと思います」
「私もです」
喜久子と麻実子は笑顔で真理に答えた。
「では。楽しんで行かれることを」
「そうして下さい」
「有り難うございます。それでなのですが」
ここでまた話す真理だった。
「須磨の砂浜ですが」
「いい場所ですよ」
笑顔で話す喜久子だった。
「あそこは」
「そうですか。白くて奇麗な砂浜と聞いていますが」
「そして海が青いです」
喜久子はこのことも話した。
「とても澄んでいて」
「海もですね」
「特に今の季節はです」
いいというのである。
「ですから是非共」
「そうします。楽しんできます」

真理はにこりと笑ってその喜久子に答えた。
「須磨を」
「そうですね。須磨は」
今度はだ。麻実子が話した。
「私も一度言ってみたいですね」
「麻実子さんもですね」
「はい、今の季節に」
行きたいとだ。こう話すのだ。
「そうしたいです」
「あの場所に源氏の君がいたのですね」
真理は今度は源氏物語の主人公を連想した。
そしてその主人公をだ。現実の世界に当てはめてまた言うのだった。
「あの場所を歩いていたのですね」
「そうなりますね」
「あの場所にですね」
二人もそうだと話す。
「源氏の君がいて時を待っていた」
「また都に戻る時を」
「そしてですね」
真理もだ。自然に微笑んで話すのだった。
「そこで新しい恋を見つけた」
「あの主人公はそれが仕事ですが」
「恋こそが」
「ですね。恋多き人です」
多過ぎると言ってもいい。とかく源氏の君は女性に彩られている。
「非常に」
「殿方としては魅力的ですが」
「ですが」
ここでだ。二人の言葉は少し曇った。

そしてだ。源氏の君についてこんなことを言うのだった。
「ああした。派手な女性遍歴は」
「少しどうかと思いますが」
「そうですね。確かに」
真理もだ。その通りだというのだった。
「それは少し」
「いえ、少しでは」
「少しではないかと」
二人も苦笑いで源氏の君について話す。
「女性遍歴があまりにもです」
「奔放に過ぎます」
「そうですね。あの方は」
「人格も立派な方ですが」
「それでもです」
「しかも御本人はです」
その源氏の君はどうかというのだ。そのことについてどう思っているかをだ。

第八話　進むだけその四

真理はだ。考えながら話すのだった。
「自覚されていませんね」
「そうですね。全くです」
「それはありません」
「何一つとして」
そのことも話していくのだった。
「それがまた凄いことですが」
「何故。自覚されないのでしょう」
「それをどうしても」
「不思議ではありますね」
「思えば」
そんな話をしていきだった。やがてだ。
その源氏の君がだ。現実にいればどうなるかとも話をしていくのだった。
真理がだ。困った顔で話すのだった。
「幾ら何でも幼い方や義理の母君には」
「あれはありませんね」
「本当にですね」
喜久子と麻実子もそれはないと言う。
「とにかく御本人は自覚されていませんが」
「そうしたことを」
「あの時代の貴族の社会では普通だったのでしょうか」
真理は首を傾げさせながら述べた。
「それを」
「いや、普通ではないかと」
「それは」
喜久子も麻実子もだ。それはないと真理に返した。

「ですから物語になっているのでは」
「あの様な」
「そうですか。なかったですか」
「あそこまで独特な方はおられないかと」
「流石に」
二人もそれは流石にだというのだ。
「現実には」
「あの時代においても」
「ですか」
「はい、誰からもあそこまで愛される方というのは」
「やはりいないかと」
そうしたことからも。二人は話すのだった。
「ですから。とてもです」
「こうして今お話にもしていますし」
「そうですね。それにしても」
真理は今度は苦笑いになった。そうして話すのだった。
「私はああした方にはです」
「御付き合いできませんか」
「それはですか」
「はい、無理があります」
こう二人に話すのだった。
「あそこまで女性を次々と愛される方は」
「確かに。同時に何人も愛されていますし」
「普通に侍女に手をつけられることもありますし」
これも普通にするのが源氏の君なのだ。ここでも自覚がないのだ。
「私もそうした方は」
「とても無理ですね」
「そう思います」
真理は困った笑顔になって述べた。
「やはり」

「一人の女性を愛される方がいいですね」
「そうですね」
二人もそちらの考えに至ったのだった。
「現実には」
「御付き合いするのなら」
「はい、私もです」
真理もにこりと笑って話すのだった。
「そういうのはです」
「はい、その通りだと思います」
「そうした方が理想ですね」
そうした話をしたのだった。そのうえでだ。

第八話　進むだけその五

真理はその日はだ。白い優しい生地のワンピースに同じ色の鍔の広い帽子を身に着けてだ。そのうえで須磨の砂浜に向かった。
そうして待ち合わせ場所の駅前に来た。するとそれと同時にだった。
義正もそこに来た。彼の今の姿は。
赤いベレー帽にだ。黒いネクタイにえんじ色のベスト、そして白いシャツに黒いズボンと靴という英吉利を思わせる姿であった。
その服も丁寧にアイロンがかけられ端整な感じだ。その姿でそこに来たのだ。
その彼を見てだ。思わずだ。
真理はだ。こう言ったのだった。
「何か」
「何かとは？」
「源氏の君みたいですね」
喜久子と麻実子の話を思い出してだった。
「その服は」
「源氏物語ですか」
「はい、何か」
「まさか。私はその様な」
義正は苦笑いでだ。こう真理に返すのだった。
「ああした見事な人物ではありません」
「いえ、それは」
「それにです」
義正は真理の傍に来ながらだ。こうも言うのだった。
「今の私の服は洋服ですから」
「それも違うというのですね」
「はい、源氏の君は平安時代の方です」

それならばというのだ。
「今は大正ですから」
「確かに時代は違いますね」
「はい、ですから」
「けれどです」
しかしだった。ここでだ。
真理は一呼吸置いてからだ。こうその義正に話すのだたｔ。
「義正さんはです。その人格や品格がです」
「そういったものがだと仰るのですか」
「そうです。源氏の君の様です」
こう言ってからだ。こんな風にも言い加えたのだった。
「あの方から派手な女性遍歴を消した様な」
「そういえばあの方は」
「それがあまりにも目についてしまいますね」
「そうした作品なのですが」
それでもだというのだ。
「あの人間性は見事なのですが」
「確かに。人間性は」
「実にいいです」
源氏の君の人間性についてはだった。
二人も批判めいたことは言わなかった。特にだ。
真理はだ。こう言うのだった。
「ああした人が現実にいれば」
「世の中は素晴らしいものになりますね」
「高貴で。清々しく」
少なくともその人間性はけなされる人物ではないのだ。確かに女性遍歴は派手でもそれが嫌味に見えないのが源氏の君なのだ。
「こうした場にいても本当に」
「映えますね」
「そうですね」

そうした人物だというのである。
「とてもですね」
「男の側から見ても理想の一つです」
「理想のですか」
「男は。武だけではありませんから」
それだけではないとだ。義正は言うのだった。
「文もまたです」
「必要なのですね」
「源氏の君に武の色はありません」
「そうですね。あの方に武はありませんね」
「文です」
当時の貴族達は武を嗜まなかった。あくまで文に生きていたのだ。
だからだ。その中で生まれた源氏の君もだ。武とはかけ離れたものなのだ。

第八話　進むだけその六

そのことについてだ。義正は話すのだった。
「文もまた必要です」
「武だけでなくですね」
「軍人の方もです」
そのだ。帝国陸海軍の軍人達もだというのだ。
「武だけではありませんし」
「そうですね。どの方も非常に立派な教養を持たれているとか」
「正直驚きました」
義正は実際にそうだとも話した。
「古典に通じ他国の文学にも通じています」
「そして音楽にも」
「はい、通じています」
そうだというのだ。
「無論漢籍もです」
「漢詩を書ける方も多いのですか」
「多いです。非常に見事な漢詩を書かれます」
あの山県有朋にしてもだ。詩においても非常に優れたものと残しているのだ。彼はこの頃でもとかく評判の悪い人物ではあったがだ・
「そのことにも驚きました」
「軍人の方でも」
「武ですね。あの方は」
「はい、私もそう思います」
「ですが武だけではないのです」
「文もですか」
「そしてその中にある優美や雅も解されます」
そこが凄かったのである。当時の軍人達は武のみではなかったのだ。それと共にだ。非常に深い教養も身に着けていたのである。

義正は彼らと交流する機会もあった。それで知ったのである。そのことをだ。

「ああした方々になりたいものです」

「そうですね。非常に立派な方に」

「それでなのです」

義正は真理に顔を向けてだ。言葉を変えてきた。

そうしてだ。こんなことも言うのだった。

「私も本を読みます」

「文学のものを」

「偏っていますがね」

少し自嘲めかした笑みをだ。見せもするのだった。

「どうしても」

「そうなのですか？」

「私は文学やそうした己の興味のあるものにしか目を通しません」

そうだというのだ。彼自身でだ。

「理系にはです」

「そちらはですか」

「はい、どうも」

興味がなくてだ。それでだというのだ。

「文学や音楽、それに哲学には興味がありますが」

「哲学もですか」

「最近ではショーペンハウアーを読みました」

「ショーペンハウアーといいますと」

「独逸の哲学者です」

十九世紀の独逸哲学における巨人の一人だ。所謂厭世哲学で知られている。森鴎外も彼の書を読み影響を受けたことで知られている。

「その彼の書を読みました」

「独逸の書を」

「独逸は確かに敗れました」

第一次世界大戦だ。それが終わって日本は多くのものを得た。し

かし独逸はだ。敗れそのうえで多くのものを失ってしまっていたのだ。

「ですがその文学や哲学は残っています」

「そうしたものは」

「そうです、残っています」

こう話すのである。

「独逸の心はです」

「それは健在なのですね」

「それを読みました」

義正はまた話した。

「その書を読んでいるとです」

「どうなのでしょうか」

「不思議と。森の中にいるように思えました」

「森の中に」

「そうです。とはいっても我が国の森とは違います」

真理の知っているだ。その森ではないというのだ。

第八話　進むだけその七

ではどういった森なのか。そのことも話された。
「独逸の森です」
「独逸のですか」
「そうです。独逸の深い森です」
義正は話していく。その森のことも。
「妖精や魔物がいて。人を寄せ付けないそうした森をです」
「そのショーペンハウアーの書を呼んで」
「思い浮かべてしまいました」
「不思議な話ですね」
それを聞いてだ。
真理もだ。首を傾げさせながら言うのだった。
「哲学書から森とは」
「独逸は森の国と言われていますが」
「森のですか」
「グリム童話がありますね」
話はそこに至った。これも森鴎外が関わっている。彼が翻訳して日本に紹介したのだ。少なくとも文学者としての彼の功績は大きい。
「あれですが」
「そういえばあの童話にも森が多いですね」
「非常によく出ますね」
「はい、森です」
また森を話に出す義正だった。
「独逸は森の国なのです」
「そうだったのですか。独逸といえば」
「どういったイメージがあったのですか？」
「奇麗な西洋のお城があり」
「そして美しい街並みが並びですね」

「そうしたイメージがありました」
そうだったというのである。
「それが違ったのですね」
「確かに城や街も独逸です」
それはまさにだ。その通りだというのだ。
しかしそれと共にだ。義正は言うのだった。
「ですが森もです」
「それもなのですね」
「はい、独逸なのです」
つまりだ。独逸は一つではないというのだ。
「その独逸の森を連想したのです」
「日本の森とはまた違うのですね」
「はい、違います」
「ではどういった森でしょうか」
「先程も申し上げましたが」
こう前置きしてだ。義正は真理に話す。
「妖精や魔物や狼がいて」
「恐ろしい場所なのでしょうか」
「恐ろしくはないです」
それは違うというのだ。恐ろしい場所ではないというのだ。
それはどうしてかもだ。彼は話した。
「深く」
「深いですか」
「はい、深いです」
そうだというのである。独逸の森はだ。
「深く。そこに入るとそこから出られないようなものがあります」
「そこまで深いのですか」
「そして人はその中に入り」
どうかというのだ。
「多くのものを見る。それが独逸の森なのです」

「独逸の森とは不思議なものなのですね」
「それを感じたのです。ショーペンハウアーを読んで」
そしてだ。義正はこうも言った。
「厭世哲学です」
「そうなのですか」
「そうです。そしてです」
「そして？」
「独逸の森と日本の森は全く違います」
今度はだ。この話になるのだった。日本と独逸の違いだ。
「日本の森はそうしたものはありませんね」
「魔物がいるという感じはありますね」
「妖怪ですね」
「山姥等ですね」
それである。正確に言えば山だ。しかし日本は山が多いせいでだ。森と山は一つのものになっている面があるからだ。それで山姥だった。
「ああしたものがいるのですね」
「そうした感じがしますね」
「そうですね。何か」
「森ですか」
義正は歩きながらだ。そちらに考えを向けた。

第八話　進むだけその八

そのうえで白い砂浜と青い海を見てだ。こう真理に話した。
「一つ思いついたのですが」
「何でしょうか」
「次は森に行きませんか」
「森にですか」
「街には行きましたね」
「はい」
最初のだ。マジックに行った時のことだった。
「あの喫茶店に」
「そして今はこうして砂浜を歩いています」
「海辺を」
「それならです」
この二つの場所を踏まえてだ。それもあってだというのだ。
「森に行きますか」
「日本の森に」
「流石に独逸の森は無理ですが」
それはだ。苦笑いで言うのだった。
「ですが日本の森ならです」
「行けますね」
「だからです。どうでしょうか」
微笑んでだ。真理に尋ねるのだった。
「次は」
「そうですね。ですが」
「ですが？」
「それは最後に決めたいと思います」
「最後にですか」
「はい、今はこうして砂浜を歩いています」

二人の足元に波が来る。その音を音楽としてだ。歩いているのだ。
「この砂浜を楽しんでから」
「そうしてですね」
「決めて宜しいでしょうか」
義正に顔を向けてだ。そのうえでの言葉だった。
「そうして」
「わかりました」
義正は笑顔でだ。真理のその言葉に頷いた。そうしてだ。
彼もその波の静かで一定のだ。整った曲を聴きながら述べるのだった。
「それではその時に」
「はい、今の最後に」
「お話しましょう」
「そういうことで。それにしても」
真理は今度は海を見た。その海は。
青く何処までも澄んでいる。そして空の青とだ。果てで一つになっている感じだった。二つの世界がだ。果てで一つになっている感じであった。
濃い青と淡い青だ。だがどちらも青だ。その二つの青がなのだ。
どちらも静かにそこにある。その二つを見て彼女は言うのであった。
「こうした場所を」
「この須磨を」
「見られるのは幸せですね」
優雅で優しい微笑みでの言葉だった。
「本当にそう思います」
「ええ、確かにそれは」
「海がこれ程まで奇麗だとは思いませんでした」
「そうだったのですか」
「宝石を。溶かした様で」
そこまでだ。美しいというのだ。

「空もあって」
「海だけではなく」
「しかもそれが一つになっていて」
「そうですね。果てで一つになっていますね」
「二つの青が一つの青になっていますね」
こう言うのだった。
「それがいいですね」
「そうですね。一つの青に」
また話す真理だった。
「こうした景色は。今までは」
「御覧になられたことはなかったですか？」
「あります。ただ」
「ただ？」
「ここまで意識したことはないです」
そうだというのだ。
「この空と海が一つになっている景色をここまで意識したことは」
「ないのですか」
「はい、ないです」
また話す彼だった。

第八話　進むだけその九

「なかったです」
「なかったですか」
「ですが意識して見てみると」
どうかというのだ。真理の目はまだその空と海の結ばれるところにある。
その果ての一つの青は白をも思わせる清らかさがある。その清らかなものを見ながらだ。真理は義正に対してこうも話したのだった。
「あの、よかったら」
「よければですか」
「また来たいのですが」
こう話すのだった。
「宜しいでしょうか」
「そうですね。私もです」
「八条さんもですか」
「また来たいです」
笑顔でだ。真理の言葉に応えたのだ。
「この空と海の二つの青が一つになった青を」
「また見たいと思われるのですね」
「私もそう思うようになりました」
義正はこの言葉をだ。今度も出したのだった。
そして微笑んでだ。真理に顔を向けて述べた。
「では次は森で」
「そしてその次にまたですね」
「ここにしますか。須磨の砂浜に」
「はい。青を見ましょう」
「青だけではないですし」
義正はふとだ。足元が目に入ってだった。こう言ったのだ。

「白もありますから」
「砂浜ですね」
「この砂浜も奇麗ですね」
「そうですね」
真理はこのことにも笑顔であった。砂浜にもだ。
「青だけではないですか」
「おそらく森もです」
「森も？」
「緑だけではないです」
森といえば緑だ。しかしだ。そこは緑だけではないというのだ。
それは何故か。義正は真理にこのことも話した。
「一つだけの世界では。世界は成り立たないですから」
「一つだけではですか」
「複数の世界が同時にあって」
「それでなのですね」
「はい、その世界は成り立ちます」
そうだというのだ。義正は真理にこうした話もした。
「一人では生きられないのと同じです」
「一人ではですか」
「はい、生きられません」
義正はこう考えていた。一人だけでの世界は成り立たない。それはだ。幼い頃から多くの人と接して生きていたからわかることだった。
「とてもです」
「だから。森もなのですね」
「緑の世界だけではなく」
「他のものも」
「海は青と白です」
その海の青だけでなくだ。砂浜の白もだというのだ。
「ですから森もです」

「しかし森にある他のものとは」
「それも見ましょう」
まだわからないがだ。それでもだというのだ。
「森に行ってそれで」
「そうしてわかるのですね」
「海もそうですね」
義正は今彼等がいるだ。海の話をしたのだった。
「最初は海だけだと思っていましたね」
「はい。砂浜はあると思っていても」
「あまり意識してはいなかった」
「海が主だと思っていました」
そしてだ。砂浜は従だとだ。そう思っていたのだ。
しかし実際はというとだ。それが違っていたのだ。
「海も砂浜も同じだったのですね」
「そして空も」
「三つのものが一つになって」
「それで海となるものだったのです」
「そして砂浜も空も」
言い換えればだ。その二つもであった。御互いになのだ。

第八話　進むだけその十

「一緒なのですね」
「はい、それだけで成り立つものではないのです」
「世界にはならない」
「森もまた。それに」
「それに？」
「人もそうだと思います」
彼等もだ。そうだというのだ。
「私は私だけで私にはならないです」
「八条さんには」
「他の多くの方々がおられてこその私なのです」
真理を見て。その目を見ての言葉だった。
「私が私になるのはです」
「御一人によってではなく」
「はい、多くの方の世界と共にあり」
「八条さんの世界ができているのですか」
「それは白杜さんも同じではないでしょうか」
「そうですね」
真理はだ。義正のその言葉に頷いた。これまでの話でだ。すぐに頷くことができるようになっていた。そうして実際に頷いたのである。
「私もまた」
「そういうことなのでしょう。何もかもがです」
「一つでは成り立たない」
「多くのものが同時にあってこそです」
「その一つの世界が成り立つ」
こう話してであった。
「そういうものだと思います」

「そうですね」
「はい、そうです」
また話す義正だった。
「私はそう考えるようになったのです」
「なったといいますと」
「最初は違うと思っていました」
そうだったとだ。義正はさらに話す。
「ただ」
「ただ？」
「それが変わったのです」
義正はこう静かに話すのだった。真理に対してだ。
「変わったのです」
「変わられたのですか」
「多くの人と交わり。そうしているうちに」
「そうですか」
「はい、変わりました」
笑顔で話す義正だった。それをだ。
そうしてだ。ここでまた海を見る。そのうえでの言葉だった。
「多くの人、素晴らしい人達と出会い」
「御自身だけではないとわかられたのですね」
「そうでした」
こう真理に話していく。
「私一人だけでは生きていないのです」
「では私も」
「そうだと思います」
義正は真理にもこう話した。
「貴女もまた。御一人だけではありません」
「そうですね。私もまた」
「一人ではなくです」
「多くの方と共にですね」

「そうです。そしてです」
「そして？」
「そのはじまりはです」
はじまりはどうか。話はそこにも至った。
「一ではなくです」
「一ではないのですか」
「二です」
それがはじまりだというのだ。
「人は一人ではないのですから」
「二人からはじまるのですね」
「そう考えます。はじまりは二なのです」
義正は己の考えを言葉にしてだ。真理に告げていく。
「一ではなくです」
「一人ではないからこそ」
「そう思います。人は二人からはじまるのです」
「それではですけれど」
「それでは？」
「それは」
真理は義正の顔を見ていた。義正も海から彼女にその顔を移していた。そうして見合いながらだ。そのうえでお互いに話すのだった。

第八話　進むだけその十一

「私達もですね」
「そうですね。それは」
「そう思われますか？」
「思うようになりました」
ここでもだ。義正はなってきたというのだ。
それは何故か。彼はこのことも話した。
「なったのです」
「最初はそうではなかったのですか」
「御会いしていませんでした」
それがなかったというのだ。それはだ。
「ですが御会いしてそうして」
「変わられたのですか」
「そうです。変わりました」
笑顔になっていた。お互いにだ。
それでだ。義正はまた話すのだった。
「私もはじまったのです」
「二人になったからですね」
「そうです。二人になったからこそ」
「では私もまた」
真理もだ。ここで言うのであった。
「はじまったのですね」
「そうですね。二人になったから」
「はじまりは二人から」
「一人ではないからこそ」
「はじまったのです」
こうだ。二人で言っていくのだった。
そう話してだった。彼等はだ。

そのはじまりを感じていた。そのはじまりを見てなのだった。
そのことからだ。二人はだ。ふとだ。
空が変わったのを見た。色が変わってきたのだ。
「赤くかけてますね」
「そうですね」
二人でだ。その色を見ての話だった。
「では。もう」
「帰りますか」
「そうですね。遅くなってはです」
「よく思われませんから」
健全な交際故にだ。それでの言葉だった。
そう話してだ。二人は。
砂浜から駅に向かう。そうしてそこから。
それぞれの家に帰るのだった。真理の方から先に下りた。
その彼女にだ。義正は列車の中から声をかけた。
「あの」
「はい？」
「駅の出口までお送りして宜しいでしょうか」
こう彼女に言うのだった。おずおずとした態度で。
「そうして宜しいでしょうか」
「ですが」
「時間が遅れることですか」
「はい、それはいいのですか？」
「構いません」
微笑んでだ。それはいいという義正だった。
「それ位はです」
「構いませんか」
「そうなのですか」
「はい、構いません」
また言う義正だった。

「それは構いません」
「そうですか。では次の列車に乗られるのですね」
「そうすればいいだけです」
それでいいというのだった。
「ですから」
「そうですか。では」
「それではです」
こうしてだった。義正はだ。
一旦列車から降りてだった。真理を見送るのだった。
それが終わってからだ。彼は次の列車に乗った。これが今の別れだった。
その別れの後真理は自分の屋敷に向かう。その時にだ。
ふとだ。咳を出してしまった。何度かした。
「また」
その咳を出してから言うのだった。最近出るその咳にだ。どうも困ったものを感じていた。
しかしそれをすぐに忘れてだ。彼女は自分の家に帰るのだった。

第八話　完

２０１１・４・１７

第九話　知られたものその一

第九話　知られたもの

義正は今は仕事を終えてだ。己の部屋の中でだ。
物思いに耽ってソファーに座ってだ。その中で佐藤に言うのだった。
「僕もそろそろ」
「そろそろといいますと？」
「一人でいる時は終わるのか」
「そうですね。終わるべきですね」
「君もそう思うか」
「はい、旦那様もです」
その彼の傍に立ってだ。佐藤は言うのだった。
「御一人でいられる時は終わりました」
「では。二人だな」
「ご結婚のことですね」
「それをだな」
「本気で考えられていますね」
「考えている」
真理のことをだ。想いつつの言葉だった。
「そのことをな」
「そうですね。それでなのですけれど」
「それで？」
「はい、お見合いですが」
この話がだ。佐藤の口から出された。
「そのことですが」
「お見合い？」
「はい、そのことは考えておられますか？」
「いや、全く」

真理のことを考えているからだ。そうしたことは全くだった。
それでだ。少し戸惑いながら話すのだった。
「そういうことは」
「考えていませんか」
「うん、そういえば前に」
「はい、高柳様のご令嬢ですが」
「ええと、確か」
「はい、喜久子様です」
彼女のことをだ。佐藤は話に出すのだった。
「覚えておられますね」
「そうだね。あの方と」
「それでどうされますか？」
佐藤は主に問う。
「あの方と。また合われますか？」
「いや、それは」
いいとだ。答える彼だった。
「どうもね」
「宜しいのですか」
「いい人だね」
それはわかるというのだ。義正にもだ。
「とてもね。心の奇麗な人だね」
「はい、それで評判の方であります」
「けれど。それでも」
「御考えにはなられませんか」
「うん、どうしてもね」
乗らないというのだ。義正は眉を曇らせて話す。
「そういうことにはね」
「左様ですか」
「悪いね」
「いえ、悪くはないです」

それはないとだ。佐藤は言うのだった。
「ではそういうことで」
「済まないね」
「いえ。ただ」
「ただ？」
ここでだ。話の色が変わった。二人もお互いそのことはわかっている。
そうしてだ。佐藤から言うのであった。
「旦那様がお断りになられるということはです」
「そのことがなんだ」
「はい、何かがおありですね」
こう主に言うのだった。
「そうですね」
「それは」
「御相手が見つかったのでしょうか」
己の主に笑顔を向けてだ。そのうえでの問いだった。

第九話　知られたものその二

「それでなのでしょうか」
「いや、それは」
「あっ、いいです」
言いにくいと見てだった。
彼はだ。自分から話したのである。
「それは申し上げてくださらなくともです」
「いいんだね」
「はい。あえてということで」
微笑んでだ。義正に話すのだった。
「今は」
「今はなんだ」
「はい、旦那様がそれを申し上げられる時にでも」
「悪いね。けれど」
「私が察しているのかということですね」
「察しているんだね」
話の核心をだ。自分からあえて言ってみせた義正だった。
そしてだ。義正はそれを今ここで話すのだった。
「そのことを」
「今わかりました」
「その。僕が断ったところで」
「普通に断るだけでは普通ですが」
「けれどそれが違う」
「はい、微妙に空気が違いました」
それでだ。わかったというのである。
「失礼ながら」
「いいよ。そう、いるよ」
それをだ。自分から言った義正だった。

「そうした人がね」
「ではその方と」
「うん。ただ言うべき時はね」
その時はだ。どうかという話にもなった。それについてはだ。
「まだだね」
「わかりました。それでは」
「僕自身心の準備が欲しい」
顔を俯けさせてだ。そうしての今の言葉だった。
「それに」
「それに？」
「言えることはある」
それはあると言ってからだった。彼はまた言うのだった。
「けれど。言えないことも」
「そうですか」
「今は言えないんだ」
残念な笑顔でだ。こう言う彼だった。
「言える時期が来ることを願うよ」
「ではそうした時はです」
「どうすればいいというのかな」
「そうした時期が来るようにされることです」
「自分でだね」
「そうです。自ら動いてです」
佐藤の頭の中ではだ。またあの西洋の悲しい二人のことが浮かんだ。その二人こそは。
「ロミオとジュリエットは。それができずにです」
「悲劇になってしまった」
「しがらみは。不要です」
佐藤は強い言葉で話した。
「そうしたものは。何があってもです」
「それが道ならぬものでない限りはだね」

「そうです。そうした束縛の鎖は断ち切らなければならないのです」
その強い言葉でだ。義正に話していく。
「私はそう思います」
「それじゃあ」
「時には一直線に進むのもいいでしょう」
突進案であった。まさにそれだった。
「どうされるかは旦那様次第ですが」
「僕次第だね」
「そうです。全ては旦那様次第です」
他ならぬだ。義正次第だというのである。

第九話　知られたものその三

「どうされるかはですが」
「では僕は」
「よくお考えになられて。それで宜しければ」
「宜しければ？」
「私でよければです」
今度は微笑んでだ。己の主に話す佐藤だった。
「お話下さい」
「相談に乗ってくれるんだね」
「はい、他言はしません」
それは絶対だった。佐藤はそうしたことを言う様な男ではない。
信義というものをだ。誰よりも何よりも堅く守る男なのだ。それが彼なのだ。
「ですから」
「有り難う。じゃあその時にはね」
「そうして頂けると何よりです」
「それではね」
「はい、それでは」
こうした話をしてであった。
彼は微笑んでだ。佐藤に対して頷いてみせた。それからだった。
こんな話もだ。佐藤にしたのだった。
「この前だけれど」
「新しい書を読まれたのですか」
「トリスタンとイゾルデという話だけれどね」
「トリスタンですか」
「うん、それとイゾルデね」
その話をだ。読んだというのだ。
「その二人の話だよ」

「トリスタンとイゾルデですか」
「知ってるかな」
「いえ、はじめて聞きました」
佐藤はいぶかしむ顔で義正に答えた。
「どうした話でしょうか」
「英吉利、いや愛蘭になるかな」
「愛蘭ですか。確か」
「そう、英吉利本土の西にある島だね」
「今は英吉利から独立するそうだね」
「あの大英帝国からですか」
まだ英吉利が強かった頃だ。もっとも先の世界大戦を境にして斜陽になっていた。だがこの頃はまだそれが顕著になってはいなかった。
「独立したのですか」
「いや、まだしていなかったかな」
この辺りの情報はだ。二人はよく把握していなかった。彼等にとっては遠い国の話であるからだ。
「あの国は」
「ですが独立はですか」
「もう決まっていたと思うけれど」
「そうですか」
「そう、その国の話だったね」
その愛蘭の話がだ。為されてからだった。
話がまた戻った。その愛蘭のことだと話されてだ。
「その国の姫がウェールズの王に嫁ぐ」
「そこも確か」
「そう、英吉利だよ」
「英吉利といっても色々なのですね」
「英吉利は一国じゃないんだ」
義正は佐藤にその国の事情も話した。

「英蘭があり」
「英蘭ですか」
「そして蘇格蘭」
次はこの国だった。英蘭の北の国だ。
「それでさっき言った」
「愛蘭ですか」
「そう、そしてウェールズなんだ」
「その四つの国により成っているのですか」
「連合王国なんだ」
一人の君主が四つの国の王を兼ねていると言ってもよい状況というのだ。
「それがあの国なんだ」
「ううむ、中々複雑なのですね」
「どの国にもそれぞれ事情があるんだね」
義正はこう佐藤に話す。

第九話　知られたものその四

「英吉利には英吉利のね」
「四つの国があるというですね」
「日本は六十以上の国に分かれていたけれど」
「そして幕府と三百以上の藩に」
「英吉利は大きく分けて四つの国だったんだ」
「その国々の間の話ですか」
佐藤は頭の中でそれぞれの国を当てはめて考えていきながら主に話した。
「そうなのですか」
「これでわかったかな」
「はい、そしてイゾルデという姫がなのですね」
「ウェールズの王妃になりトリスタンはそのウェールズの騎士だった」
そうだったというのだ。
「けれど二人はそれよりも前に。イゾルデがウェールズの王妃となる前から」
「愛し合っていた」
「そう。しかしその頃は二人は共に近寄らなかった」
「しかし近寄れなくなってから」
「己を偽れなくなった。その辺りはそれぞれの書で経緯は違うけれどね」
トリスタンとイゾルデの話は複数存在しているのだ。アーサー王の物語の一つであるものもあればだ。ワーグナーが楽劇にしたものもあるのだ。ただしワーグナーは楽劇という言葉を好まなかった。
「そうしてなんだ」
「二人の世界に入ったのですね」
「そうなったんだ。そして」

「二人は死んだのですね」
「それはわかるね」
「何となくですが」
わかったと話す佐藤だった。
「そうした話の常として」
「そうだね。こうした話はどうしても」
「なってしまいます」
佐藤は困った笑顔で話すのだった。
「それが物語ですから」
「愛は死ぬことなのかな」
「いえ、死ぬことではないと思います」
「実際にはそうではないのかな」
「そうした愛もあるでしょう」
ロミオとジュリエットもだ。完全に物語ではないというのである。
当然トリスタンとイゾルデもだ。現実のものもあるというのである。
「ですが。実際に愛を育むとすればです」
「幸せにならなくてはならない」
「悲恋は確かに美しいです」
それはいいというのだ。美はだ。
「ですがそれでもです」
「実際には」
「そうです。幸せな結末にならなければあまりにもです」
これが佐藤の考えだった。そうした話をしてだ。
義正はだ。こうも話した。
「ではトリスタンとイゾルデも」
「道ならぬ恋ですが」
それでもだというのだ。
「しかしそれでもです」
「道ならぬ恋になる前にだね」
「はい、成就されるべきでした」

「道ならぬものになる前に」
「そうあるべきだったのですが」
こう話していく。そしてであった。
佐藤は悲しい顔になってだ。こうしたことも述べた。
「そうなってしまったのはです」
「悲しいことだね」
「やはり愛、恋と言ってもいいですが」
「幸せになるべきですか」
「旦那様もそう思われますか？」
佐藤は己の考えを述べてからだ。あらためてだ。
義正に対してだ。こう話すのだった。
「恋愛は幸せになるべきものです」
「幸せな結末がだね」
「どうでしょうか、それで」
「君は前からそう言っているね」
義正は笑顔になってだ。佐藤のその言葉に応えて話した。

第九話　知られたものその五

「恋愛は幸せになってこそだと」
「道ならぬ恋でなければです」
「では。ロミオとジュリエットは」
彼等はどうかとだ。義正は彼等の話もするのだった。
「幸せになるべきだったんだね」
「その通りです。両家の対立なぞです」
「そんなものはというのだね」」
「はい、無視すればよかったのです」
そうだったというのだ。彼はだ。
「むしろ二人が結ばれれば」
「両家の対立は消えていたかな」
「下らない対立でした」
ロミオの家とジュリエットの家の対立はだ。佐藤にとってみればそうだというのだ。
無論佐藤もだ。物語の事情はわかっていた。それについても話した。
「皇帝派と教皇派ですね」
「当時のイタリアはそれぞれ別れていたんだったね」
「神聖ローマ皇帝とローマ教皇の双方に」
「欧州の歴史は複雑だからね」
義正はこのことも学んでいた。欧州のその歴史のこともだ。
「実にね」
「はい、全くです」
「その皇帝と教皇の話も」
「確かに政治的対立はありました」
それは間違いなかった。だがそれだけではないこともだ。佐藤は見抜いていた。物語を読んでいてそのことも悟ったのである。

「ですがそれでもです」
「意地かな、あったのは」
「そちらの方が大きかったです。両家共です」
「多分に意固地になっていたね」
「それが為に厄介なことになっていました」
そうなっていたと話すのである。
「そんなものは無意味です」
「そんなものは無視をすればよかった」
「よかったのですが」
「しかしそれができるのはです」
どうかと話す彼等だった。
「勇気がいります」
「勇気がだね」
「はい、勇気がいりました」
そうだったというのである。佐藤はそのことも話した。
「ですが逆に言えばです」
「二人は勇気があれば」
「最後の場面は慎重にあるべきですが」
「その前はだね」
「はい、勇気が必要でした」
佐藤は話すうちに悲しい顔になっていた。そのうえでの言葉だった。
「ですがそれができなく」
「悲劇になったね」
「悲しいことにです」
「勇気。恋愛にも必要だね」
「何ごとにも必要ですが」
「恋愛についても」
「勇気といいますと何か武張ったものがありますが」
それでもだというのだ。佐藤は言葉を変えていくのだった。

「それは決して武ではありません」
「孔子だったかな。それは」
「そうです。勇は何に対しても重要ですから」
こんな話をしてだった。義正は考えを巡らせていくのだった。
そうした中でだ。彼はこう佐藤に話した。
「わかったよ。それではね」
「それでは？」
「僕も勇気を身に着けないとね」
こう言ったのである。
「何ごとに対しても」
「そうされますか」
「うん、そうするよ」
笑顔での言葉だった。

第九話　知られたものその六

「それじゃあだけれど。何時か」
「その時が来られたなら」
「勇気を出さないとね」
「これも私の考えなのですが」
佐藤はここでも前置きしてから話す。慎重な彼の性格が出ていた。
「勇気とはです」
「勇気とは？」
「常に出す必要はないものなのです」
そうだとだ。己の主に話す佐藤だった。
「そういうものではないと思います」
「常に出すものではない」
「見せるものでもありません」
見せるという言葉を出してだ。すぐに笑顔でこんな風にも話した。
「目にはっきりと見えるものではありませんが」
「感じるものだね」
「はい、ですが」
「見ると感じることは同じなら」
「そうなるものです」
「そうだね。話を聞くと」
義正からだ。そのことを話した。佐藤の話を聞いて実際に思ったことをありのままその佐藤に対して返す形で話してみせたのである。
「勇気というのは刀だね」
「刀ですか」
「武士が腰に持っている刀だね」
まさにだ。それだというのだ。
「今なら銃か」
「刀ではなく」

「今の軍人の人達は刀を銃に持ち換えているから」
これは当時の考えである。日本軍は誰もが武士になれるという四民平等の考えがあるのだ。だとすれば刀はどうなったかというのだ。
「そういうことになるね」
「そうですね。では銃にしてみるとです」
「そうして考えると」
「やはり答えが出ますね」
佐藤は微笑んで義正に話す。
「銃はいつも撃つものではありませんね」
「そうだね。持っていても」
「勇気とはそういうものです」
「常に持ってはいるけれど」
「見せるべき時に見せるものなのです」
それがだ。勇気だというのだ。
「大事なのは勇気を持たれ。それを出すべき時に出されることです」
「そういうものだね」
「そうです。そして」
「そして？」
「旦那様にはそれがあります」
義正をそれまで以上に見てだ。そのうえでの今の言葉だった。
「勇気がです」
「僕に。あるかな」
「あります。御安心下さい」
また笑顔で義正に告げる佐藤だった。
「旦那様ならばです」
「それができるんだね」
「勇気。しかも知のある勇気です」
義正の勇気はだ。それだというのだ。
「それがありますから」
「知のある勇気」

「知勇と申しましょうか」
勇気と言っても色々あるがだ。義正の勇気はそれだというのだ。
「そして愛に最も適した勇気はです」
「知勇だね」
「そうです。それが旦那様の勇気です」
「蛮勇でも武勇でもない」
「旦那様は向こう見ずではなくそして剣を持たれる方でもありませんから」
「知勇だね」
それでだ。彼の持つ勇気はそれになるというのだ。
「それだというんだね、僕の勇気は」
「知勇のままに進まれて下さい」
笑顔はそのままだ。そのうえでの彼への言葉だった。

第九話　知られたものその七

「そして掴まれて下さい」
「愛をだね」
「確かな。幸せを」
こうした話をする二人だった。そうしてだ。
真理もだ。今喜久子と共にだ。麻実子から話を聞くのだった。
「私どうやら」
「どうやら？」
「どうやらといいますと？」
「お見合いの話なのですが」
そのことをだ。真理と喜久子に話す彼女だった。今彼女達は図書館の前の喫茶店の外の席に三人で座ってだ。そのうえで茶を飲みながら話すのだった。
「そのことですが」
「そのことですか」
「お見合いの」
「はい、お見合いです」
まさにだ。そのお見合いのことの話だった。麻実子は首を少し捻ってからだ。真理と喜久子に対してこんなことを話すのだった。
「最初お話に出ていた方と違うお相手になるようです」
「そうなのですか」
「お相手がですか」
「お父様がそう話されています」
その話を進めるだ。彼がだというのだ。
「それを御聞きしますと」
「そのお相手は誰だったのですか？」
喜久子はつい気になってだ。彼女に尋ねた。
「それで」

「そのお相手ですか」
「どなただったのですか？」
こう彼女に問うのである。茶には手をつけず己の前に置いたままで。
「宜しければ。お答え願えますか？」
「お父様はそこまでは仰ってはいませんでした」
はっきりとした相手はだ。わからないというのだ。
「ですが」
「ですが？」
「私が以前お会いした殿方の様です」
そうだとだ。麻実子は喜久子に話した。
「その方とのことです」
「その方がなのですね」
「はい、最初私のお見合いのお相手と考えられていたそうです」
見合いをする、それは即ちだった。
「生涯の伴侶を」
「生涯の伴侶。つまりは」
そこまで話を聞いてだ。喜久子は静かに述べた。
「御主人ですね」
「そのお相手をと」
「そうですね。そうなりますね」
喜久子もここまで聞いたうえで頷いた。
「自然と」
「お見合いですか」
真理はそのことについてだ。温かい笑顔になって言うのだった。
「それもまた運命の出会いなのですね」
「そうですね。運命になりますね」
麻実子もだ。真理のその言葉に笑顔で頷くのだった。
そのうえでだ。彼女はこんなことを言った。
「お見合いというと何か決められたものの様に思えますけれど」

「ですがそれもまた」
「運命になりますね」
また言う麻実子だった。
「では私はその運命にです」
「向かわれますね」
「はい、そうさせてもらいます」
麻実子は笑顔で言った。
「そうした考えになりました」
「左様ですか。それでは」
「お見合いを楽しみにさせてもらいます」
麻実子の考えはそこに至った。そうしてだ。
今度は喜久子がだ。こう言うのだった。
「私はですが」
「はい、喜久子さんは」
「どうされているのでしょうか」
「実は幼い頃からです」
その頃からだ。話は遡るのだった。
そしてそのうえでだ。喜久子は二人に話していく。

第九話　知られたものその八

「御相手がいまして」
「許婚ですか」
「その方がおられるのですか」
「これまでお話していなくて申し訳ありません」
喜久子はこのことは素直に謝った。
「お話する機会が見当たらなくて」
「いえ、そのことはです」
「御気になさらずに」
それはいいと答える二人だった。そうしたことにいちいち怒ったり咎めたり不機嫌に思う程だ。二人は器の小さい娘達ではないのだ。むしろ優しい笑顔でだ。彼女の話を聞くのだった。
「それでなのですが」
「許婚の方とですか」
「将来はですね」
「結ばれるのですね」
「そしてです」
さらにだと話す喜久子だった。彼女も今は笑顔になっている。
そしてだ。こう二人に話すのだった。
「もう挙式の日も決まっていまして」
「早いですね」
「そのこともなのですか」
「はい、決まりました」
それもだ。既にだというのだ。
「決まりました」
「そうですか。それなのですが」
「どういったものになるでしょうか」
二人はここでだ。その挙式のあり方について喜久子に尋ねた。

それが一体どういったものかだ。そこに関心を向けたのである。
「やはり神前で、でしょうか」
「式を挙げられるのでしょうか」
「日本のもので」
「そうされるのでしょうか」
まずはそれではないかと考えられた。そしてだ。
次にはだ。この時代になって入っただ。それについても言及された。
「それとも。あの」
「欧州のあれでしょうか」
「純白のドレスに身を包んで」
「基督教の教会での式になるでしょうか」
「どちらもです」
喜久子はだ。幸せそのものの笑顔で答えた。
「どちらもすることになりました」
「神前も教会もですか」
「どちらもなのですか」
「はい、両方でなのです」
喜久子はその笑顔のまま二人に話していく。
「それが決まりました」
「凄いですね。両方とは」
「それで行うとは」
「ですがそれは」
「かなり手間取ったものになるのでは？」
二人は憧れからだ。現実に戻った。むしろ現実に憧れていたがだ。
現実のもう一つの一面にその考えを移したと言うべきであろうか。
「神前から教会に移るのもその逆も」
「場所が離れているでしょうし」
「服も着替えないといけませんし」
「それは」

「そのことはです」
「それですが」
そのことについてもだった。喜久子は笑顔で二人に話した。
「実は神前でも教会でもないのです」
「式を行い場所はですか」
「違うのですか」
「はい、式場で行います」
そこでだというのだ。
「結婚式場において」
「そういえば最近そうしたものもできていますね」
「ですね。式を挙げる場所も」
できてきていたのだ。明治になって大正になりだ。結婚式というものもだ。そうした場所で挙げるものになってきていたのである。

第九話　知られたものその九

二人はそのことを思いだしてだ。それで喜久子の話を聞くのだった。

「そうですか。式場でなのですか」

「式を挙げられますか」

「その場所も決まっています」

それもだというのだ。

「もう。ですから」

「後はその日になるだけ」

「そうなのですね」

「そうです。本当に楽しみで」

結婚式のことを話していってだ。さらにだ。

喜久子はだ。その相手のことも話すのだった。

「許婚のその方ですが」

「御主人になられる方ですね」

「その方ですね」

「はい、幼い頃からよく御会いしていました」

つまりだ。幼馴染みだというのだ。そうした意味でもだ。喜久子にとっては非常に素晴しい相手で結ばれることが嬉しいというのである。

「私より一つ年上の方で」

「お兄様の様な方なのですね」

「本当に」

その通りだと答える。真理に対して。

「はい、そうなのです」

「左様ですか」

「そうした方とですね」

「お兄様であり」

喜久子はだ。満面の穏やかな笑顔で二人に話していくのだった。
「そして伴侶となられる方なのです」
「一つではないのですね」
「そうなのです」
喜久子は真理にまた話した。そうしてだ。
真理もだ。二人の話を聞き終えてだ。そのうえで己のことを話すのだった。
「あの」
「はい、真理さん」
「何かおありですか？」
「実は私もです」
勇気を出してだ。そのうえでの言葉だった。
「御相手がいまして」
「そうなのですか。真理さんもですか」
「おられるのですね。そうした方が」
「すいません」
まずは謝罪の言葉を述べる真理だった。
「今まで隠していて」
「いえ、それは御気になさらずに」
「そのことはです」
いいとだ。麻実子も喜久子もだ。穏やかな笑顔で真理に話した。
そうしてだ。再び彼女に言うのであった。
「どなたにも申し上げにくいことがありますから」
「ですから」
「そうなのですか」
「はい、ですから」
「御気になさらずに」
また話す二人だった。
「それでなのですが」
「真理さんのその方とは」

「一体どなたなのでしょうか」
「その方は」
「神戸におられる方でして」
まずはそのいる場所からの話だった。彼女達のいるこの神戸のだ。
「ある華族の家の方です」
「華族のですか」
「では。私達と同じですね」
「そうなりますね」
実は彼女達は皆華族の家である。ただし爵位自体はそれぞれだ。しかし爵位についてはだ。彼女達は殆んど意識せずに交流しているのだ。
その彼女達はだ。さらに話していくのだった。
「では確かな方なのですね」
「その方は」
「そうです。素晴しい方です」
そのことも話す真理だった。
「とても」
「よい方に会われてですね」
「御付き合いされていますか」
「そうなのです。ただ」
ここでだ。真理はだ。
それまで晴れやかだった顔を曇らせてだった。こんなことを言った。

第九話　知られたものその十

「ただ」
「ただ？」
「ただといいますと？」
「御名前は申し上げられません」
それはだ。どうしてもというのだ。
「それはです」
「申し上げられない方」
「そうした方ですか」
「御名前を申し上げますと」
それを言えばどうなるか。真理はよくわかっていた。
白杜家と八条家の間柄はだ。神戸においては特に知られていることだった。
それを話すことはできない。そういうことだった。
だから彼の名前は出さなかった。しかしだ。
真理はだ。微笑んでこう言うのだった。
「それでもです」
「素晴しい方ですか」
「そうした方ですか」
「そうです。とても素晴しい方でして」
それは確かだとだ。彼女は言うのだった。
「一緒にいられるその時がとても幸せです」
「とても素晴しいことです」
「そうですよね。想い人と一緒にいられるのは」
「それがわかってきました」
そうだと話す真理だった。
「私もです」
「では。私達はこれから」

「想う方と共にいて」
「そうしてですね」
「幸せになるべきなのですね」
二人も話していく。そうしてなのだった。
真理は彼女達と共にいてもだ。義正のことを感じるようになった。
そうしてその中にだ。幸せをはっきりと感じ取っていたのである。
その真理はだ。再びだった。
義正と会う。その場所は。
「やはりここですか」
「はい、ここにしました」
義正が微笑みで真理に話す。そこはというと。
森だった。周りに木々が並びだ。足元にも碧がある。緑と幹の茶の二色の世界の中でだ。二人はお互いに微笑みを浮かべてそこにいるのだった。
木々の間から白い光が差し込む。その光を見てだ。
真理はだ。こう義正に話すのだった。
「この光も」
「御気に召されましたか？」
「いいですね」
微笑みが笑顔になった。
「とても」
「森林浴といいまして」
「森林浴？」
「欧州ではよく行われているそうです」
ここでまた欧州を話に出す義正だった。
そのうえでだ。真理にその森林浴のことを話すのである。
「こうして森の中に入りです」
「木々の間にその身を置くのですか」
「そうです。そして木の空気や差し込む日の光を浴びるのです」
「それが森林浴ですか」

「心が落ち着きますね」
実際にだ。落ち着いた微笑みを彼女に見せる義正だった。
「こうしていますと」
「そうですね。それもかなり」
「これが森林浴です」
「日本にはなかったものですね」
真理はその森の中を見回しながら言うのだった。「こうしたものは」
「確かに。そうですね」
「森は日本にはよくありますが」
「はい、日本の森は山と共にありますね」
「普通に入ることができますが」
「どうでしょうか。意識して入られると」
そのことをだ。真理に尋ねるのだった。
「やはり違いますか」
「そうですね。何かが違います」
実際にそうだと答える真理だった。やはり森の中を見回している。
そしてそのうえでだ。彼女はまた言うのだった。
「森の中というのは」
「どうですか？それで」
「ずっといたいです」
こう義正に言うのだった。

第九話　知られたものその十一

「そうしたいです」
「ずっとですか」
「流石にそれは無理ですよね」
真理は言ってからだ。すぐに苦笑いになった。
そしてそのうえでだ。すぐにこうも言うのだった。
「森の中にずっといるのは」
「森の中に家を設ければできますが」
「家をですか」
「別荘になりますが」
この時代からだ。資産があればそうしたものを持つようにもなってきていた。かつての公卿や大名の別邸とはだ。また違うものである。
「それですが」
「そちらですか」
「はい、別荘を建てればです」
森の中にずっといることもできる。義正はこう話すのである。
「それもできるようになります」
「それもいいでしょうか」
「そうですね。今の森もいいですが」
「季節それぞれの森がありますね」
「春夏秋冬の」
義正はそれぞれの季節を話した。さらにだった。
「十二月それぞれのです」
「森がありますね」
「そのそれぞれの森がありますから」
こう話すのだった。
「その中でこうしているのもです」

「いいものですね」
「実はです」
義正は考える顔になり己の右の拳を唇に当てた。その姿で話すのだった。
「私は今だけを考えていました」
「今だけをですか」
「はい、今の森をです」
そこで森林浴をする。そのことだけを考えていたというのだ。
だがそれはどうか。そのことを真理に話すのだった。
「それだけを考えていましたが」
「変わられましたか」
「他の季節の、月の森もまた見るものですね」
「はい、そうですね」
「そう思うようになりました」
またこうしたことを言う義正だった。
「そしてそれは海も同じですね」
「前に行ったあの須磨の」
「そこも同じですね」
微笑みになった。そうしてだ。
真理に顔を向けてだ。それで話すのだった。
「海もまた十二月ありますね」
「大きく分けて春夏秋冬に」
「季節がありますね」
「そしてですね」
さらにあるというのだ。二人で話していく。
「街もですね」
「自然だけでなく」
「いえ、街と自然は対立するものではないでしょう」
「違いますか」
「西洋ではそういう考えの様ですが」

義正は違うと考えていた。確かにだ。
そしてそのうえでだ。真理にさらに話すのだった。
「私はそれは違うと思います」
「そうなのですか」
「はい、そう思います」
また言うのだった。
「自然とは地球から生まれたものという意味での言葉ですね」
「そうなりますか」
「はい、それならです」
「人間もですね」
「自然になります」
人間もだ。そうなるというのだ。

第九話　知られたものその十二

それを話してだ。さらに言う義正だった。
「その人間が作ったもののもまた」
「ではあらゆるものがですか」
「この考えは東洋的ですね」
自分で話してそのことにも気付く。違う意味で自然にだ。
「そう思いますが」
「東洋的ですが」
「はい、なりますね」
「そうですね。では自然はあらゆるものがそれに入りますね」
真理は言った。静かにだ。
そうした話をしてだ。そのうえでだった。
義正はだ。周囲を見回してだ。また話すのだった。
「街には木々はないでしょうか」
「いえ、あります」
「そうですね。ありますね」
そのことを話すのだった。
「それもかなり」
「多いですね」
「そういうことですか」
「自然はあらゆるものがそれになります」
森羅万象がだ。自然だというのだ。
義正はその考えを真理に話しながらだ。言っていくのだった。
そしてそのうえでだ。真理に顔を向けてだ。あらためてだった。
「では」
「では？」
「他の場所に行かれますか」
「森とは別の場所にか」

「はい、行かれますか」
また言う義正だった。
「そうされますか」
「そうしましょう。では」
「どちらに行くかですね」
「何処に行かれますか？」
「川辺はどうでしょうか」
「川辺ですか」
「はい、そちらに行かれますか？」
微笑みでだ。真理に話す。
「どうされますか？」
「では」
一言でだ。真理は答えた。
「そうさせてもらいます」
「それではそちらに」
「街に海に森に川」
真理は義正と共にいる場所をだ。話していくのであった。ここでだ。
「最初は舞踏の場でしたね」
「そうですね。あそこで御会いして」
「それから。こうして二人で」
「様々な場所を巡っていますね」
「不思議です」
そうして巡ること自体がだ。そうだという真理だった。
「そのこと自体が」
「そうですね。私達は本来はです」
「はい、お互いの家が」
「だというのにこうして共にいるのですから」
「そのこと自体が奇跡ですね」
「奇跡ですが現実です」

それだと言う義正だった。現実だとだ。
「確かにです」
「現実なのですね」
「そうです。では夢だと思われますか？」
川辺に案内しながらだ。そのうえで真理を見つつだ。彼女に問うのだった。
「今が。完全な夢だと」
「いえ、そうは思いません」
「現実ですね」
「はい、現実です」
まさにそうだとだ。義正は話すのだった。
「こうして二人は一緒にいるのです」
「そうですね。それでなのですが」
「川辺ですね」
「やはり。森にあるような」
真理は頭の中で想像した。山の中によくある川辺だ。白い小石の岸辺にだ。清らかな小川が流れている。そうした川辺をである。
そしてその川辺をだ。義正に話すとだった。彼もこう話すのだった。
「そうです。そうした川辺です」
「そうなのですね」
「その川辺で宜しいでしょうか」
「御願いします」
これが真理の今の返答だった。

第九話　知られたものその十三

「そうさせて下さい」
「それでは」
こんな話をしてだ。二人は川辺にも向かいそこを見るのだった。
その後でだ。
二人は森を後にした。そうしてだ。
また列車に乗りだ。二人でいられる最後の時間を楽しむのだった。
その列車の中で二人向かい合って立ってだ。話すのだった。
「またですね」
「はい、また御会いしましょう」
義正は真理の顔を見ながら話す。時間はもう夕刻になっている。
列車の中も外も赤くなっている。その中でだ。
彼はだ。真理のその赤い世界でだ。話をするのだった。
「今度はですね」
「何時にされますか？」
「また日曜にされますか？」
次の週にだというのだ。
「日はそこで」
「はい、そして場所は」
「映画館はどうでしょうか」
「映画館ですか」
「そうです。そこはどうでしょうか」
また真理に話すのだった。
「映画館は」
「私、実はです」
真理は少し気恥ずかしそうに俯いてからだ。こう義正に話した。
「映画も好きでして」
「そうなのですか」

「はい、それではです」
「映画館にですね」
「御願いします」
こう話してだ。そうしてだった。
二人でだ。笑顔で頷き合ってだ。そのうえだった。
二人は次に会う日とその場所を決めた。そんな話をしてだ。
真理を駅を出るまで見送った。そこから帰る時にだ。
振り返るとだった。そこにはだ。
佐藤がいてだ。普段の執事の姿とは違う砕けたラフな格好でいる彼がである。難しい顔をしてそこに立っていたのだ。彼を見てだ。
「後をついてきた筈がないね」
「それはないとおわかりですね」
「君はそうした人間じゃない」
それはよくわかっていた。実にだ。
それがわかってだ。彼に言っているのだ。
「そうだね」
「実はです」
佐藤は主のその言葉を受けてだ。話すのだった。
「本屋に行っていました」
「そこにだったんだね」
「それで帰るところだったのですが」
「そこに僕がいた」
「そういうことです」
「そして見てしまったんだね」
そのことを察した。そこまでだ。
「そういうことだね」
「申し訳ありません」
佐藤は頭を下げて述べた。
「旦那様に」
「いいよ。仕方ないさ」

彼はいいと返した。言ってもどうにもならないことがわかっていたからだ。だから余計にだ。今の彼はやるせない気持ちになっていた。

その気持ちでだ。彼は言うしかなかった。

「考えてみれば。隠せば隠す程」

「そうであればあるだけだというのですか」

「わかってしまうものなのだろうね」

諦念してだ。そのうえでの言葉だった。

「そうだろうね」

「そうなのですか」

「仕方ないよ。それでね」

義正は佐藤に話した。

第九話　知られたものその十四

「帰ろうか」
「あの、旦那様」
気遣う顔でだ。佐藤は彼に言った。
「このことは」
「このことは？」
「言いませんので」
そうしたことはだ。何があってもだというのだ。
「ですからそれは」
「済まないね」
「言うべきこととそうでないことがあります」
佐藤の言葉は冷静だった。
「ですから」
「いや、だからこそね」
「だからこそですか」6
「うん、有り難いね」
そうだと話す義正だった。
「君でよかったよ。見たのが」
「そう仰いますか」
「正直他言してもらうと困るからね」
「それはいいのですが」
「いいとは？」
「隠していなければならないもの」
佐藤がここで話すのはだ。このことだった。
「それを永遠に隠すことはです」
「よくないんだね」
「秘密の恋もいいでしょう」
佐藤はそれもいいとした。だが、だ。

彼は同時にだ。こんなことも主に話した。
「ですがその最後にあるものは」
「幸せがあるかどうか。それは」
「幸せになりたいですね」
こう主に対して問いもするのだった。
「そうなりたいと思いますが」
「うん、なりたいよ」
その通りだとだ。義正も話す。二人は今は喫茶店に入っていた。
そしてそこでだ。二人だけの話をだ。紅茶を飲みながら話していくのだった。
「是非共ね」
「それはわかります。ですが」
「秘密にしたままだと」
「そうはなれないのです」
幸せにはだ。そうだというのである。
「決してです」
「秘密は秘密のままだから」
「旦那様はあの方とどうなりたいのでしょうか」
「結婚したいよ」
義正は真剣な顔で答えた。
「今はじめて言うけれどね」
「結婚ですね」
「うん、そうして二人一緒にずっと」
「だとするとです。このままではいけません」
「それじゃあ僕は」
「はい。公にすべきなのですが」
佐藤の言葉は曇る。そしてだ。
彼はだ。また話すのだった。
「ですがあの方は」
「そのこともわかったんだね」

「私もまた代々八条家に仕えています」
だからこそだ。それでわかるというのである。
「八条家の。敵といえば」
「白杜家だね」
「あの家のお嬢様との愛は。やはり」
「許されない」
「そう思います」
まさにだ。それでだというのである。
それを話してだった。佐藤は暗い顔をするのだった。
そうした話をしていってだ。二人はだ。

第九話　知られたものその十五

あらためてだ。佐藤の方から話すのだった。
「あの家とだけはです」
「そうだね。今の僕達は」
「ロミオとジュリエットです」
義正がこれまで話してきた、である。あの二人だというのだ。
彼等が実在人物かどうかは今は本題ではなかった。本題は何かというとだ。彼等が辿った運命だ。佐藤はそれを頭に入れて話すのである。
「それではです」
「幸せにはなれない」
「そう思いますが」
「いや」
しかしだ。ここでだった。
義正は不意にだ。意を決した顔になってだ。
自分の向かい側にいる佐藤にだ。こう言うのだった。
「僕は前に言ったね」
「前にですか」
「うん、前にね」
こうだ。己の以前のことを話すのだった。
「ロミオとジュリエットは幸せになれたって」
「はい、確かに」
「それなら。僕達も」
こう言うのである。
「幸せになれるんだ」
「では何か御考えが」
「前に出るよ」
そうするというのである。

「僕はね」
「前にですか」
「うん、出るよ」
また言うのである。
「ここはね。前に出るよ」
「それはいいと思います」
主の今の言葉と考えをだ。佐藤はいいとした。
しかしだ。それだけではなくだ。怪訝な顔でだ。
彼はこう義正に問うのだった。
「ですがどうされてでしょうか」
「前に出るかどうかだね」
「一体どうされるのでしょうか」
「少し考えがあるんだ」
義正は強い目で話した。
「そうだったんだ。隠しているから駄目だったんだ」
「では。ここは」
「前に出れば弾丸も当たらない」
かえってだ。そうだというのだ。
「それなら」
「はい、それなら」
「前に出る。突撃するよ」
「また思い切られましたね」
「そう思うかな」
「今急にですから」
余計にだ。そう思えるというのだ。
「思います」
「そうだね。確かにね」
「ですがそれならです」
「それなら?」
「前に進まれるべきです」

佐藤の言葉は普遍なものになっていた。
「旦那様はそうされるべきです」
「ロミオとは違い」
「はい、ロミオではなくです」
別のだ。それは誰かというとだ。
「旦那様にならられるべきです」
「僕自身になるべき」
「そう、そうなるべきです」
義正の目を見て話す。彼の澄んだその目をだ。
「八条義正様。その方にならられるべきなのです」
「じゃあ僕は」
「前に進まれたいですね」
このことも再び彼に問うた。
「そうされたいですね」
「幸せになりたい」
義正はそのことをだ。こう表現してみせた。
「是非共ね」
「それならばです。旦那様になって下さい」
「じゃあここは」
「突き進まれるべきですが」
「ですが？それでもだね」
「旦那様は蛮勇ではありませんね」
義正の特徴とも言えることだった。彼は慎重で理知的な人物だ。
それが彼を彼たらしめていた。紳士的で礼儀正しいその彼にである。

第九話　知られたものその十六

「そうですね」
「蛮勇は少し」
「なら。少しずつです」
「少しずつ？」
「幸せになれる状況を築かれるべきです」
そうするべきだとだ。佐藤は義正にアドバイスをした。
「私は旦那様の味方になります」
「君が」
「はい、何があろうとも」
強い声でだ。彼に誓うのである。
「そうならさせて頂きます」
「有り難う。それなら」
「何なりとお話下さい」
微笑み、純粋でそれでいて強さのある微笑みになってである。彼は義正に話すのだった。その目はだ。義正の目を確かに見続けている。
「御力になります」
「そうなってくれるね」
「そうさせてもらいます。そしてなのですが」
「まずはだね」
「御相手にお話されてはどうでしょうか」
まずはだ。そこからだというのだ。
「その白杜家の」
「真理さんに」
「確か三番目の御令嬢でしたね」
「うん、そうだよ」
まさにだ。その彼女だというのだ。

「その人なんだよ」
「その方と相談されるべきです」
「まずはそこからなんだ」
「そうです。お二人のことですから」
「余計にそうだね」
「はい、そうされるといいです」
義正に対して話すのだった。
「まずはそこからはじめられるべきです」
「これからどうするかを」
「愛というものは一人ではありませんから」
だからだというのである。佐藤は真剣に話す。
「二人で進まれるべきですから」
「だからこそ余計に」
「そうです。進まれて下さい」
佐藤はこのことも話すのだった。一人で進むものではないとだ。
「御二人で」
「幸せは二人で手に入れるもの」
「愛、一人で幸せになる愛なぞないのですから」
佐藤は理想論であった。しかしその理想はだ。
純粋でしかもだ。真理である理想だった。
その理想を話してだった。彼はそれを義正への言葉とするのだった。
そしてそれを聞いてだ。義正もだった。
確かな顔でだ。こう答えるのだった。
「それならね」
「お話されますね」
「まずは彼女とね」
「そうして下さい。そして必ず」
「必ずだね」
「幸せになって下さい」

このことはだ。絶対にだというのだ。
「御二人で」
「幸せに、だね」
「また言わせてもらいますが誰もが幸せになるべきですから」
「だから僕達も」
「そうなって下さい」
佐藤もだ。こう言ってであった。
「何があっても」
「わかったよ。じゃあ」
「はい、それでは」
「飲もうかな」
話が整ったところでだ。そこでだった。
義正は微笑んでだ。こう佐藤に話した。
「珈琲をね」
「そうですね。喫茶店にいますから」
「珈琲も飲まないとね」
「はい、それでは」
「この店は。とりあえず入ったけれど」
「それでも。珈琲の味は」
「いいね」
実際に飲みながらだ。こう話す義正だった。
「確かな味がするね」
「神戸には美味しい珈琲の店が多いようですね」
「多くなったと言うべきかな」
「どうしてでしょうか、それは」
「海のせいかな」
海があるかだとだ。義正はこう話すのだった。
「そのせいかな」
「海があるとですか」
「横須賀でもそうらしいね」

言わずと知れた軍港である。帝国海軍最大の基地の一つがそこにある。そこもまた大きな港でありだ。珈琲が有名な街なのだ。
「珈琲がよく飲まれるそうだね」
「そういえば呉や舞鶴も」
こちらも軍港である。
「よく飲まれるとか」
「海には珈琲が合うのだろうね」
「海にはですか」
「そう思う。海には珈琲だろうね」
また言う義正だった。
「とてもね。海軍も珈琲らしいし」
「そうですね。海軍は珈琲らしいですね」
「海軍からはじまったのかな」
義正は考えながら話していく。
「それでかな」
「海軍だからですか」
「そうじゃないかな。海軍の人とも時々お話するけれど」
「どの方も素晴しい方ですね」
「はい、とても」
こう話をしながらだった。義正はだ。
真理とのことを考えるのだった。まず彼女に話してだ。それからのことを考えるのだった。

第九話　完

２０１１・４・２７

第十話　映画館の中でその一

第十話　映画館の中で

真理もだ。婆やとだった。

二人で話をしてだ。そうして言うのだった。

「婆やは爺やとはお見合いではなく」

「はい、互いにです」

婆やは微笑みを以てだ。真理に話すのだった。

「愛し合いそうしてです」

「結ばれたのですね」

「五十年程前でしょうか」

それだけだ。昔のことだというのだ。

「あの頃の主人は人力車を引いていまして」

「人力車。あの車ですね」

「はい、それを引いていました」

「それで爺やとですか」

「私は大阪で金物屋の娘でした」

婆やは自然とだ。このことも話すのだった。

「ただ」

「ただ？」

「私は店の跡取り娘でして」

「では相手には」

「主人ではなく。別の金物屋の次男さんが来ることになっていました」

こうした事情がだ。あったというのである。

「私はその方と結婚することになっていましたが」

「ではどうして爺やと」

「反対を押し切ってです」

老婆は微笑みのまま真理に話した。

「そうしてそのうえで、です」
「結婚したのですか」
「どうしても。主人と一緒になりたくて」
「では。それでは」
「駆け落ちをしました」
この言葉が出るのだった。婆やのその口からだ。
「神戸まで」
「えっ、神戸までですか」
「主人は言いました」
「爺やがですか」
「はい、あの人が神戸でも人力車は動かすことができると」
これはその通りだった。人力車は大阪だけではなく神戸にもある。
それはこの大正時代でも同じだ。神戸の至るところを駆けている。
その人力車にありき日のことを思い出しながらだ。婆やは真理に話すのだった。
「そう言ってくれて」
「そうだったのですか」
「そうして二人でこの神戸に来て」
「それでなのです」
「それでなのですか」
「はい、それでこの神戸に来まして」
それからだというのだ。
「先代の旦那様に御会いして」
「そしてこの屋敷に」
「そういう次第です」
こうだ。老婆は真理に話していくのである。
「お嬢様とも御会いできました」
「婆やにもそうした歴史があったのですね」
「歴史でしょうか」
「そうだと思います」

真理は婆やに微笑んで話していく。
「人それぞれの歴史がありますから」
「私なぞにはそんな」
「そうではないと思います」
「では」
「それが婆やと爺やのです」
「歴史ですか」
「はい、二人の歴史です」
こう話してからだ。さらにだった。
真理はだ。あらためてだ。こんなことも告げた。
「それにしても婆やもそうしたことがあったのですね」
「駆け落ちのことですね」
「驚きました。まさかそこまでするとは」
「それだけ主人を愛していますので」
今もだとだ。言葉は現在形だった。

第十話　映画館の中でその二

「ですから」
「だからですか」
「はい、だからこそです」
駆け落ちをしたというのだ。その半世紀前にだ。
「そのことには今も後悔をしていません」
「では。誰が反対をしても」
「結局は本人達なのです」
婆やのその声が微笑みになった。
「本人達のことなのです」
「そうなるんですね」
「そう思います」
婆やの真理への言葉は変わらない。
「過激だとは思いますが」
「確かに。それは」
半世紀前、明治の頃ならばだ。余計にであった。
だが婆やは後悔していないというのだ。あくまでだ。
そして自分の口でだ。真理にこうも言うのだった。
「それで家ですが」
「その実家ですね」
「金物屋は妹が継ぎました」
そうなったというのである。
「そして妹が。その方を迎えられて」
「そうしてですか」
「今も大阪でお店をしています」
「妹さんはお元気なのですか？」
「駆け落ちから。十年程して」
歳月がだ。それだけ経ってからだというのだ。

「そうして妹が中に入ってくれてです」
「実家のご両親とですね」
「仲直りできました」
そうだと真理に話すのである。
「時と妹のお陰で」
「そうしてですか」
「私達は和解できました」
そうなったというのである。
「非常によいことでした」
「そうだったのですね」
「そうした。しがらみと言いましょうか」
「家のことがですか」
「そうしたことはその当人達には絶対のことなのでしょうが」
「そこから離れて考えればですね」
「大したことではないのだと思います」
自分のことを振り返ってだ。老婆は話すのである。
「そうしたものですから」
「そうですか。それでは」
「それでは？」
「私もです」
真理もだ。意を決した顔で言うのだった。
「私もそういう時になればです」
「あの、お嬢様それは」
「駆け落ちですか？」
「それはおよし下さい」
絶対にだとだ。婆やは真剣な顔で話した。
「本当にです。それはです」
「あっ、それは」
「御考えになっていませんね」
「そうしたことはです」

内心戸惑いながらだ。真理は話した。実はある程度考えてはいたのだ。あくまで最後の手段としてだ。それを考えていたのは事実だった。

しかしそれを話してだ。真理はだ。

表情をあらためてだ。こう婆やに話した。

「しかしです」

「しかし？」

「決めた相手にはですね」

「はい、決めた相手にはですね」

「何があってもですね」

「時代は違います」

婆やは今のだ。大正から話すのだった。

「そんな。家と家のしがらみはです」

「乗り越えるべきですか」

「若し対立している家同士があってもです」

婆やもだ。強い声で話す。彼女自身の考えに他ならない。

第十話　映画館の中でその三

「それでもです」
「二人が結ばれれば」
「その家同士の対立もなくなりますし」
「いいのですね」
「いいでしょう。喧嘩をしても何にもなりません」
老婆はこのことも話した。
「むしろ。親しくなる方がずっといいです」
「それでは」
「若しお嬢様が相応しい方を見つけられて」
義正のことを知らないまま話していく。
「そしてその方と結ばれたいのなら」
「何があってもですね」
「くじけないで下さい」
真理を見ての。見据えての言葉だった。
「それを御願いします」
「ではそれでは」
「はい、それで」
そんな話をだ。彼女もしたのだ。そしてであった。
真理はまた義正と会った。そして行く場所はだ。
映画館だった。暗い観客席である。前に映る映画の光だけである。
そこに映っているのは口髭の男だ。彼が何かというとである。
司会の男がだ。こう観客達に話すのだった。
「さて、このチャップリンは」
「チャップリン？」
「喜劇役者です」
義正が横にいる真理に話した。
「亜米利加のです」

「あの国のですか」
「そこの聖林で活躍している役者でして」
「それが今映っている」
「はい、チャップリンです」
口髭の男だというのだ。
「その彼です」
「そうなのですか」
「そうです。私は一度彼の映画を観たことがあります」
「今は二度目ですね」
「そうです。二度目です」
こうだ。真理に話すのである。
「最初のものもかなりよかったですが」
「今回はどうでしょうか」
「いいですね」
微笑んでだ。真理に話すのだった。真理は暗がりの中でだ。彼の微笑んだその横顔を見た。その表情の横顔は彫刻の様であった。
「とても」
「とてもですか」
「はい、ただの喜劇ではなく」
「それだけではなく」
「そこに人間の悲しさも含まれていますから」
「笑いの中の悲しみですか」
「チャップリンはそれを表しています」
それこそがだ。チャップリンの喜劇だというのだ。
「彼は演技の中にそれを含ませてそれで演じています」
「そうした深いものなのですね」
「そう思います」
「そうですか」
「そう思われますか？」
今度はだ。真理に問う義正だった。

「貴女は」
「よくはわかりませんが」
こう前置きしてからだ。真理は義正のその言葉に答えた。
「ですが。そうですね」
「感じられますか？」
「はい、感じます」
感性での話になっていた。芸術を感じ取るだ。
「そう思えますね」
「そうですか。それは何よりです」
「不思議な演技ですね」
白黒の無声の映像の中でコミカルに動くチャップリンを見てだ。
そうして真理は話すのだった。

第十話　映画館の中でその四

「笑えるのですがその中に」
「悲しみを感じて」
「こうしたこともあるのですね」
「私も最初観て不思議な感じになりました」
「そう思われるのですね」
「はい、どうも」
そうだと話す真理だった。
「こうしたものを観るのははじめてですし」
「喜劇をですか？」
「喜劇はあります」
それはだ。観たことがあるというんどあ。
「ですがこうした種類の喜劇はです」
「チャップリンの様なものはですね」
「本当にはじめてです」
真理はその映画を観ながら義正に話していく。そこでは滑稽な、それでいて何処か人間の悲しさを無表情な中で見せるチャップリンがいた。
その彼を見ながらだ。彼女は話すのである。
「そうですか。これもまた」
「喜劇になります」
「これまで私は悲劇だけを観てきました」
「映画はでしょうか」
「映画だけではなくです」
それだけではなくだとだ。全体の話をする彼女だった。
「それ以外のものについても」
「舞台もですね」
「シェークスピアがそうでしょうか」

「ロミオとジュリエットですね」
「ハムレットも。それも」
どちらも悲劇である。シェークスピアの代表作の中でも有名な、だ。
「悲劇ですね」
「はい、確かに」
「そうしたものばかりを観てきて喜劇自体あまり観てはいませんでした」
「実際に御覧になられてどうでしょうか」
「先程も申し上げましたが」
「いいですか」
「はい、とても」
微笑みながらだった。義正に話したのだ。やはり映画を観続けながら。
「滑稽な中に悲しみも入れている」
「それがチャップリンなのです」
「そうなのですね」
「はい、そしてです」
「そして？」
「純粋な喜劇はどうでしょうか」
チャップリンから少し離れた話をだった。義正は真理にするのだった。
「そちらは」
「純粋な喜劇ですか」
「先程シェークスピアをお話に出されましたね」
「そうしましたが」
「そのシェークスピアです」
彼はそのシェークスピアの中からだ。話すのである。
「彼にも喜劇があります」
「はい、ヴェニスの商人や真夏の夜の夢ですね」

「御気に召すままもあります」
悲劇だけではないのがシェークスピアだ。彼は喜劇も多く残しているのだ。もっとも書いている人間は実は違うのではないかという説もある。
「そうした作品ではです」
「愛は成就するのですか？」
「はい、しています」
それがシェークスピアの喜劇の特徴の一つだ。必ずハッピーエンド、しかも見事な大団円になるのが彼の喜劇の結末なのだ。

第十話　映画館の中でその五

「そうなるのです」
「恋愛は悲しい結末だけでなく」
「幸せな結末もあるのです」
「では、です」
「はい、それでは」
「私達もでしょうか」
真理はこう義正に尋ねた。
「私達もそうなるでしょうか」
「喜劇になりたいでしょうか」
義正は真理に尋ねた。
「そうなりたいでしょうか」
「結末は」
真理はその問いにだ。
少し考えてからだ。こう答えたのである。
「そうなりたいです」
「喜劇の結末にですね」
「やはり。幸せになりたいです」
そうなりたいとだ。真理は答えた。
「是非と言ってもいい位にです」
「それではですね」
「はい、では喜劇に」
「喜劇の結末を」
こうした話をしてだ。そうしてであった。
義正はだ。意を決した顔になってだ。そのうえで。
真理にだ。こう提案したのである。
「この映画の後で、です」
「この後で、ですか」

「詳しくお話をしたいのですが」
そうしたいとだ。真理に話すのである。
「宜しいでしょうか」
「あのことで、ですね」
「はい、あのことです」
それが何かはだ。もう二人の間では言うまでもなかった。
そしてだった。義正はさらに話すのだった。
「場所を換えて。そのうえで」
「お話をして」
「決めたいのですか」
「はい」
真理は義正のその言葉に頷いた。これで決まったのだ。
二人はまた映画に集中した。確かに滑稽な喜劇だがそこに人間や文明の悲しみを表現したチャップリンを観てからだ。二人はだ。
喫茶店に入った。あのマジックである。そこでこの日はピアノの曲を聴くのだった。
真理はだ。まずはだった。
今の曲は誰の曲かをだ。義正に尋ねるのだった。二人は今二人用のテーブルに着いてだ。そのうえで彼に対してそれを尋ねたのである。
「この曲は」
「今かかっている曲ですね」
「はい、これは誰の曲でしょうか」
こう義正に尋ねるのである。
「ピアノの曲なのはわかりますが」
「モーツァルトです」
「モーツァルトですか」
「はい、彼です」
「そうだったのですか」
「モーツァルトは多くの作品を残していまして」

義正はそのモーツァルトについてここから話した。
「その中にはです」
「ピアノのものもあるのですか」
「はい、そうです」
「まさかピアノもあるとは」
「彼は天才でした」
そのモーツァルトについて話す。
「あらゆる音楽を作曲できたのです」
「あらゆるなのですね」
「しかもどの音楽も素晴しいものです」
モーツァルトに駄作はない。歌劇においては端役もない。それが彼なのだ。
「それが彼なのです」
「モーツァルトですね」
「はい、彼です」
また話す義正だった。

第十話　映画館の中でその六

「それが彼なのです」
「そうですか。その曲をなのですね」
「お聴きになられますか？」
「はい」
笑顔で頷く真理だった。
「そうさせてもらいます」
「わかりました。それではです」
「この音楽を聴きながらのお話になりますね」
「音楽と共にならです」
それならばだとだ。義正は珈琲が入っているカップを片手にだ。
真理に話すのだった。そのモーツァルトの音楽を聴きながらだ。
「心が落ち着き。沈んだものもなくなりますので」
「だからこそいいのですね」
「いいと思います。それでなのですが」
「そのお話のことですね」
「はい、私は思うのですが」
こう前置きしてからだ。義正は話す。その話すことは。
「私達は誰にも私達のことを話してきませんでした」
「そうですね。本当に誰にも」
「しかしです」
義正はここで一旦言葉を止めた。そしてだ。
一呼吸置いてからだ。そのうえでだ。
真理にだ。あのことを話したのである。
「この前の森の帰りですが」
「あの時のですか」
「はい、あの時のことです」
そのだ。二人で森に行った時に何があったのか。それを真理に話

すのだった。
「家の者に見つかってしまいました」
「左様ですか」
「はい、そうです」
また話す彼だった。
「偶然ですが」
「偶然ですが、ですか」
「そうです。それで考えたのですが」
そのうえでだとだ。話を続けていく。
「私達のこの関係は秘密にしておいてはならないのではないでしょうか」
「では公にするのですか？」
「そうしてはどうでしょうか」
真理に対して話す。
「そうしようと思うのですが」
「では。お父様にも」
「はい、私の両親にもです」
この場合公にするとはだ。そういうことだった。
そうしてはどうかとだ。真理に提案するのだった。
話したうえで真理の顔を見る。するとだ。
そこには強張りだ。今にも割れてしまいそうな彼女の顔があった。
悩みそのうえで逡巡しているだ。その顔があった。そしてであった。
彼女はだ。ここでこう言うのだった。
「そうですね」
「どうされますか？」
「少なくともこのままではです」
「どうにもなりませんね」
「はい、このままた誰かに見つかりです」
「同じことの繰り返しですね」
「その家の者ですが」

佐藤のことだ。彼のこともここで話すのだった。
「幸いにして私のよく知る者で話してわかってくれましたが」
「それでもですか」
「やはりこのままでは袋小路です」
そうなるとだ。義正は言った。
「幸せにもなれないでしょう」
「そうですね。私達はこのままでは」
「だからどうするかです」
義正は真理の顔を見ながら問うた。
「これからは」
「若し私達のことを私達の両親にお話すれば」
「間違いなくです」
「はい、確実にですね」
「反対されるでしょう」
そうなることは目に見えていた。二人の家は根深い対立関係にある。そのお互いの家にいる彼等の仲を話せばどうなるか。火を見るより明らかだった。

第十話　映画館の中でその七

それを話してだった。
「間違いなく」
「そうですね。そうなりますね」
「そして大きな騒ぎになります」
また言う彼だった。
「御互いの家全体での」
「大変なことになりますね」
「はい、しかしです」
「しかし？」
「このままではどうにもなりません」
義正は話を本題に進めた。
「ですから。ここはです」
「公にすべきですか」
「少なくとも今のままでは同じです」
誰にも言えない、秘密の関係ならというのだ。
「それではです」
「公にするしかないですか」
「前に出ましょう」
彼は言った。
「そしてそのうえで、です」
「そのうえで、ですか」
「幸せを手に入れましょう」
そうするとだ。彼は真理に言った。
「是非です。そうしましょう」
「しかしそれは」
真理は義正に対してだ。逡巡を見せた。
その逡巡を顔に見せながらだ。こう言うのだった。

「一歩間違えれば」
「はい、私達の仲が大変なことになります」
「そうなりませんか？」
「下手をすればなります」
義正もそのリスクはわかっていた。認識していた。
しかしだ。それでもだとだ。彼は言うのである。
「ですが。その危険はです」
「その危険は」
「私が打ち破ります」
真理に対して言ったのだった。
「それが目の前に来たらです」
「そうしてなのですね」
「二人で向かいましょう」
真理への言葉を続けていく。
「それでは駄目でしょうか」
「いえ」
真理はだ。少し間を置いてだ。
そのうえでだ。微笑んでだ。義正に話したのだった。
「八条さん。いえ」
「いえ？」
「義正さんがそう仰るのでしたら」
彼の名前を呼んでの言葉だった。
「私もです」
「共に来て頂けるのですね」
「義正さんが打ち破られるのなら」
そのだ。危険をだというのだ。
そしてその義正に対してだとだ。真理は彼に話すのだ。
顔はこれまで以上に真剣なものになっている。そのうえでの言葉であった。
「私はです」

「貴女は。いえ」
義正もだ。ここでだった。
己の言葉を一旦引っ込めだ。こう言ってみせたのである。
「真理さんは」
「その義正さんを支えたいです」
彼女はだ。そうしたいというのである。
「義正さんが前を進まれ危険を打ち破られ」
「そして真理さんはですね」
「その義正さんを支えたいと思います」
「そうして頂けるのです」
「その後ろから」
義正が前で真理は後ろだった。二人は補完になっていた。
「そうして頂けるのですか」
「それでは駄目でしょうか」
「駄目な筈がありません」
こうした否定の言葉をだ。義正は今出したのだった。

第十話　映画館の中でその八

「これ程有り難い言葉は今まで受けたことはありません」
「そう言って頂けるのですね」
「言葉だけではありません」
「それ以外にもですか」
「心で」
まずは一言で言ってみせた。ここでは。
「私の心で。それは」
「受け取り、感じて頂けましたか」
「はい。二人ですね」
「そうですね。二人ですね」
「私達は完全に二人です」
そうなったとだ。義正はわかったのだ。
そして真理もだ。二人はわかったのだ。それだけではなくだった。
義正はだ。こんなことも話したのだった。
「二人で。一つになりました」
「一つにですか」
「愛は一人で成り立つものではありません」
「二人があってこそですか」
「そのうえではじめて成り立つものです」
片方だけでは絶対に成り立たないもの、それが愛だとだ。
義正は真理に話してだ。そうしてだった。
「だからこそです」
「私達はこうして」
「共に進みましょう」
確かな声で真理に告げた。
「私達二人で。そして二人なら」
「私達が二人なら」

「何も怖れるものはありません」
全くないというのだ。二人ならだ。
こうした話をしてだ。義正はだ。
あらためてだ。真理に現実に何をするのかを話すのだった。
「ですから。私達の両親にです」
「言うのですね」
「そこから全てがはじまります」
義正は真理にまた話した。
「私達の幸せがです」
「幸せはもうはじまっていても」
「それが誰もから祝福される幸せになるのです」
「誰からもですか」
「最高の幸せではないでしょうか」
そうした幸せこそがだと。義正の言葉は熱さをさらに強くさせていた。
「そうではないでしょうか」
「ですね」
真理は静かにだ。義正の今の言葉に頷いた。
そのうえでだ。義正のその澄んだ目をだ。同じ目で見ながら自分の心を出すのだった。
「隠していてもこのままですから」
「それが本当のです」
「なりますね。それではです」
「幸せになりましょう」
今はこう言う義正だった。
「そうなりましょう」
「はい、是非共」
真理もだ。頷いた。二人は今決意した。
そのうえでだ。真理はだ。
義正にだ。今度はこのことを尋ねるのだった。

「それでなのですが」
「それでとは」
「どういった風にしましょうか」
その公にする仕方の話だった。
「どうして。私の両親に」
「そして私の両親に」
「言いましょうか。そして言えば」
「確実に反対されますね」
「絶対にそうなります」
そのことはだ。火を見るよりもだった。
「ですから。そこから幸せを手に入れる為にはどうすれば」
「考えがあります」
ここでもそれがあるとだ。話す彼だった。
「ただ言うだけでは誰も認めてくれません」
「両親もですね」
「そうなります」
彼女のその両親も。そして義正の両親もだった。

第十話　映画館の中でその九

「ですから。普通に言えば」
「はい、私達の親達にそのまま言うだけではです」
「間違いなくそうなりますね」
「ですが」
「ですが？」
「狭い場所で言うのではなく」
そうではないというのだ。
「広い場所で言えばです」
「広い場所で？」
「そうです、広い場所です」
義正はそこでだと話すのだった。
「そこで言えばです」
「その広い場所とは」
「それはです」
義正はそこは何処かとだ。真理に話した。彼の話を聞き終えてだ。
真理は張り詰めた顔になってだ。義正に言うのであった。
「まさか。その様なことを」
「思い切ったと思われますか？」
「はい。そして」
「そして？」
「破廉恥にさえ思えます」
言いながらその顔を赤くさせた彼女だった。
「その様なことは」
「破廉恥ですか」
「幾ら何でも。それは」
「確かに。我が国の感覚で言えば」
日本ではどうかというのだった。

「そうなりますね」
「やはり破廉恥ですね」
「それは否定できません。ですが」
「ですが？」
「それは確かに日本での常識でのことではそうなります」
破廉恥になるとだ。義正も認める。
しかしそのうえでだ。彼は真理にこうも話した。
「しかしそれはこれまでの常識のことです」
「古いというのですか」
「今もまだそうでしょうが」
「これからは違いますか」
「違うようになります」
こう真理に話すのだった。
「今からです」
「そうなりますか」
「欧州ではこうしたことがありました」
「欧州では？」
「墺太利の話ですが」
今話すのはその国だった。欧州の古い国だ。
「丁度今かけられているモーツァルトの国ですね」
「そうですね。モーツァルトは」
「はい、墺太利の音楽家です」
ザルツブルグで生まれた神童だ。まさに墺太利が生んだ音楽の寵児なのだ。
「その彼の国のことですが」
「その墺太利の」
「女帝、丁度彼の生きた時代のことです」
「モーツァルトの生きた時代の」
「マリア＝テレジアという女帝がいました」
墺太利、そしてハプルブルク家中興の祖と言われている名君であ

る。十六人の子の母でもありだ。墺太利の国母とまで謳われた。
「その女帝の息子に子が生まれた時にです」
「御自身のお孫さんですね」
「はい、その孫が生まれた時にです」
どうしたかというのである。
「歌劇場の舞台に出てです」
「そこに観客達がいましたね」
「はい、自身の民達がです」
その彼等にだというのだ。
「その彼等に。孫が生まれたことを大きな声で告げたのです」
「そうしたことがあったのですか」
「これは日本では考えられませんね」
「陛下がとは」
大正帝である。その方を脳裏に思い浮かべた真理だった。

第十話　映画館の中でその十

「それはとても」
「ですが墺太利ではありました。それにです」
「さらにですね」
「亜米利加では私のお話したことはです」
「普通ですか」
「我が国でもこれからはそうなります」
義正は強い声でこう真理に話した。
「ですから。ここはです」
「義正さんの言われる様に」
「そうされますか？」
真理のその目を見て問う言葉だった。
「真理さんも」
「確かに恥ずかしいです」
真理はまたこうしたことを言った。
「そして勇気が必要ですね」
「その通りです」
「ですが」
それでもだとだ。真理は言った。
「それがこれから我が国でも普通になり」
「はい」
まずはそこから話す。勇気を出す為にだ。
「それに。それによってです」
「私達の愛が成就するなら」
「そうさせてもらいます」
意を決した顔になって。真理は言った。
「義正さんと共に」
「そうしてくれますか」

「はい、決めました」
決意をだ。述べるのだった。
「そうさせてもらおうと」
「わかりました。それではです」
「はい。ただ義正さんも」
「私も？」
「やはり。勇気がいりますね」
こうだ。義正に対して問うたのである。
「このことをされるには」
「ないといえば嘘になります」
これが義正の返答だった。見れば彼もだ。
決断している顔になっている。その顔が全てを物語っていた。
「それはそうなります」
「やはり。そうですね」
「自分で言っていても」
「それでもだったのですか」
「半分は自分に言い聞かせている言葉でした」
真理に言っているだけではなかったのだ。自分に対してもだったのだ。
「それで。納得させて」
「そのうえでだったのですね」
「自分に勇気を出させていました」
「前に出る為に」
「はい、そうです」
まさにだ。前にだというのだ。
「その為にもです」
「勇気を出して。そのうえで」
「幸せを手に入れるにはここまでしないとならないと思いまして」
真理に対して言うのである。
「それでなのです」

「では」
「はい、私も決めました」
真理に決断を促すだけではなかったのだ。彼自身に対してもだった。
そこまで話してだった。義正はだ。
真理の目を見て。こう告げた。
「では。その場を設けて」
「そうしましょう。それではです」
「二人で」
「前に」
こう話してだった。彼等はだ。
意を決した。もう前には退かないと決めたのだ。
それを決めた時にだった。丁度その時にだ。
レコードが終わった。その曲がだ。
「終わりましたね」
「はい、モーツァルトが」
義正は真理のその言葉に応えて話した。
「今終わりましたね」
「それならですね」
「珈琲を飲んでから」
義正は己のカップを見た。まだ僅かに残っている。

第十話　映画館の中でその十一

それを見てからだ。彼女に話したのである。
「去りますか」
「そうしましょう。飲み終えてから」
「残すのは好きではないです」
「はい、私もです」
二人共同じだった。食べ物や飲み物を残すのは好きではないのだ。
そのことがわかってだ。義正はだ。
微笑んでだ。今度はこんなことを話した。
「食べ物は大事にしないといけないですね」
「はい、それはとても」
「私が聞いた話ですが」
「聞いたお話ですか」
「欧州での貴族はです」
彼等はどうなのか。そうした話だった。
「宴の場で満腹になり終わりではないのです」
「それで終わりではないのですか？」
真理は義正の今の言葉にはきょとんとした顔になった。そのうえでだ。
彼女はだ。こう義正に問い返した。
「満腹になれば」
「日本ではそうですね」
「はい、そうなればもう満足です」
その日本人の感覚でだ。話す彼女だった。
話しながら珈琲を飲む。それが終わってからだ。
彼女はだ。また義正に尋ねた。
「それで終わりでないとは」
「下品な話ですが」

義正はこう断ってだった。それからだった。
珈琲を飲み終えてだ。あらためて彼女に話した。
「出してから食べるのです」
「食べたものをですか」
「出してそのうえでまた食べるのです」
「それは」
その話を聞いてだ。真理はだ。
顔を曇らせてだ。そのうえで己の考えを話した。
「あまりにもです」
「はい、あまりにもですね」
「品がありません」
こう言うのだった。
「そして無駄です」
「満腹で終わりではないのですから」
「はい、無駄です」
真理にしてみればだ。そうとしか思えないことだった。
それでだ。顔を曇らせてだ。彼女は話すのだった。
「満腹になればそれで満足すべきです」
「全く以てそうですね」
「それをしないのは誤っています」
どうしても受け入れられないのだった。そうした考えはだ。
「欧州も。美しいものばかりではないのですね」
「何事も美醜があります」
「その二つが」
「光があれば影もあります」
今度はそういった風に例えるのだった。
「その影がです」
「その吐いてから食べるという」
「そうです。あまりにも無駄な贅沢ですね」
「堕落にさえ思えます」

真理から見ればだ。まさにそうしたものだった。
「そうして食べ続けるというのは」
「古代希臘や羅馬がそうであり」
「それだけ過去からなのですか」
「そしてバロックやロココの時代もですね」
「仏蘭西ですか」
「はい、あの国での宴でした」
「あの仏蘭西でその様なことが」
真理がその話に引くものを感じているとだ。義正もだ。
真面目な顔でだ。こう述べるのだった。
「満ち足りれば。それだけで充分ですね」
「そう思います」
「何事もそうです」
また話す彼だった。

第十話　映画館の中でその十二

「満ち足りればそれでいいではないでしょうか」
「本当ですね。確かに」
そうした話もする彼等だった。そうしてであった。
彼等はマジックを後にした。そのうえでだ。
二人で共に帰りそのうえで別れだ。それぞれの屋敷に戻るのだった。
そしてその次の日だ。義正はだ。佐藤にこう話すのだった。
「今度だけれど」
「今度とは？」
「伊上先生に御会いしたいんだけれどね」
こう言うのであった。
「あの人とね」
「伊上克先生にですか」
「そう、あの人とね」
政界の実力者だ。長州出身であり陸軍や官界に大きな影響力を持っている。山縣有朋の腹心でありだ。今は隠居して関西に拠点を置いているのだ。
その彼にだ。義正は会いたいというのだ。
「いいかな」
「はい、それはです」
すぐに答える義正だった。
「先生に連絡をですね」
「そうしてもらえるかな」
「ではそれは私が」
「いや、やはり」
「やはり？」
「私が直接お話したい」

こう言うのだった。考える顔でだ。
「先生とはな」
「そうされますか」
「うん。考えたんだけれど」
「考えたとは？」
「あの方は信用できる方だ」
そのだ。伊上についてのことだ。
「人間的に確かな方だから」
「だからこそですね」
「私から直接お話したい」
「そうしてそのうえで」
「考えがあるんだ」
実際に考える顔で話す彼だった。
「僕にね。それに」
「それに？」
「僕達が一緒になれば」
ここからだ。読みがあった。それは企業の経営に加わっている、そして政治の世界も知っている、まさにそれが為の読みであった。
「そう、八条家と白杜家は結ばれるね」
「縁籍関係になりますね」
「いいことだよね、それは」
こうだ。佐藤に尋ねるのだ。
「そう思わないかい？」
「では、です」
佐藤は一呼吸置いた。それからだった。
義正に対してだ。こう言うのである。
「私の考えを述べさせてもらって宜しいでしょうか」
「むしろ聞きたいね」
義正はこう彼に返した。
「君のその考えをね」

「わかりました。それではです」
「うん、それで君の考えは？」
「両家の対立には何の意味もありません」
彼は言った。
「そのせいでお互いにかなり損をしています」
「そうだね。かなりね」
「競り合いで無意味な労力を使っています」
こう話すのである。
「それを憂いている方もおられます」
「そしてその方は多いね」
「はい、そしてそれはです」
「それは？」
「伊上先生もです」
そのだ。彼もだというのだ。

第十話　映画館の中でその十三

「あの方もそのことを憂いておられます」
「そうだったんだ」
「そのことは御存知なかったのですか」
「はじめて聞いたね」
思慮の中にだ。気付いたものも見せている顔だった。
その顔になってだ。義正は話すのである。
「そうだったんだ」
「ですから。旦那様がこのことを伊上先生に話されることはです」
「いいことだね」
「必ずやお力になってくれます」
そうだというのである。
「ですからそれは是非共されるべきです」
「わかったよ。それじゃあね」
「いい御判断です」
微笑んでだ。主のその考えを褒めるのだった。
「そうされるべきです」
「では」
こう話してだった。義正はだ。
顔を晴れやかにさせた。そうしてであった。
彼はだ。あらためて話すのだった。
「喧嘩ばかりしていても何もならないね」
「特に我々はです」
「じゃあそうしよう」
「伊上先生と直接お話されるのですね」
義正への確認だった。
「旦那様が御自身で」
「うん、そうするよ」

「本当によいことです。そしてそのことがです」
「僕と彼女を幸せにするだけでなくて」
「両家や。その周りの人達もです」
「幸せになるんだね」
「はい」
佐藤は笑顔で義正の言葉に頷いた。そうしてだ。
義正にだ。こんなことも話した。
「一つの幸福はその幸福だけでは終わらないのです」
「一つの幸福だけじゃない」
「そうです。幸福は幸福を呼び」
「幸福が幸福を」
「そしてさらに幸福を作り出していくのです」
そうだというのである。
「それが幸福なのです」
「じゃあ僕が幸福になれば」
「他の多くの方も幸福になります」
「では僕は」
「幸せになって下さい」
佐藤は主に話した。
「是非共」
「うん、それじゃあ」
こうした話をした。そうしてだった。
義正は次にどう動くのかを決めたのだ。そしてだ。
そのことをだ。真理に話すのだった。
二人で密かにだ。あのマジックで会ってだった。向かい合って話すのだった。
その場には珈琲がある。そして今日の音楽はだ。
ベートーベンだった。その曲は。
「この重厚な感じの曲は」
「運命です」

その曲だというのだ。義正が真理に話す。
「一度聴いたら忘れらない。そんな曲ですね」
「ですね。この曲は」
「ベートーベンはこうした作曲家なのです」
「印象的な曲を作曲する」
「そうした人です」
「こうした曲ははじめて聴きました」
真理はそのだ。運命を聴きながら話すのだった。
そしてそのうえでだ。彼女は義正に話した。
「強い曲ですね」
「そうですね。忘れられないまでに強く」
「はい、とても」
「それでこの曲を聴きながらですが」
義正は言葉を出していく。その言葉はだ。

第十話　映画館の中でその十四

今かけられている曲に重ねられる。自然に。そして話すのだった。
「それではです」
「それでは？」
「私は決めたのですが」
「決めたとは」
「伊上克先生は御存知でしょうか」
彼の名前をだ。真理にも話したのだ。
「あの方は」
「はい、知っています」
その通りだとだ。真理はすぐに答えた。
「今神戸に隠棲しておられる」
「そうです、あの方です」
「その方とですね」
「はい、私達はです」
会うというのである。
「そうします」
「わかりました。それでは」
真理はだ。義正のその言葉に頷いた。そうしてだった。
義正に対してだ。また話した。
「では私達は伊上先生とお話して」
「そのうえで、ですね」
「私達の道を開きましょう」
そのことを決めたのだった。この話の後でだ。
義正は手紙を書いた。その送り先は。
神戸のある洋館だ。そこは大きくしかも気品のある場所だ。そこにいる見事な和服を着た男のところにだ。その手紙が来たのである。
白い髪を油で丁寧に撫でつけ同じ色の口髭を固めている。痩せた

顔をしており背は中背だ。その彼が手紙を受け取ったのだ。
そのうえでだ。長年彼に仕えている年老いた従者に話すのだった。
「これは珍しいな」
「珍しいといいますと？」
「八条家の若君からだ」
顔は厳しいがそれでもだった。強い光を放つ目まで頬笑まさせてだ。そうしてだった。
その従者にだ。また話したのである。
「三男殿からだ」
「八条家の三男殿といいますと」
「義正君だ」
微笑んでだ。その名を話したのである。
「あの彼からだ」
「義正さんからですか」
「そうだ。彼がこうして手紙を書いてきてくれるとはな」
「はじめてではないでしょうか」
「記憶にある限りはじめてだ」
こう話す口髭の男だった。
そのうえでだ。彼はこんなことを話した。
「わしに来る手紙は多いがな」
「今でも日に何通も来ますね」
「伊上克にな」
彼こそがだ。その伊上克だった。明治の頃より辣腕を振るい日本を創り上げた政治家、官僚の一人である。まさにその彼がなのである。
今は神戸に隠棲している彼がだ。手紙を手にして話すのだった。
「だが。彼からの手紙はだ」
「はじめてですね」
「そうだ。一体何の用か」
「何の御用件なのか気になりますね」

「別に白杜家の誰かと決闘するとかそうした話ではないだろう」
笑ってだ。それはないだろうというのだ。
「幾ら何でもな」
「そうですね。それはないですね」
「あの若旦那はそうした御仁ではない」
無意味な決闘をする様なだ。そうした者ではないというのだ。
「だからな」
「八条家と白杜家は」
「どうにかならないものかと思っている」
伊上は首を傾げさせて述べた。
「あの二つの家はな」
「そうですね。あの両家は」
「最初は些細な揉め事からはじまった」
両家の対立のことをだ。従者に話すのだった。
「そのことは覚えているな」
「はい、よく」
従者もだ。そうだというのである。

第十話　映画館の中でその十五

「中々忘れられません」
「全く。些細な揉め事からだ」
「それからことあるごとに衝突して」
「今に至る」
苦い顔でだ。伊上は両家のそのことを話すのだった。
「明治から大正になるまで」
「今に至るまでも」
「そうだ、困ったことだ」
そしてだ。こんなことも言うのだった。
「山縣公爵も何とかしたいと思われている」
「あの方もですか」
「他の元老の方々もだ。思われていたがだ」
「どなたもどうすることもできず」
「今に至る」
そうなっているというのである。そしてだ。
伊上はだ。まだ封を切っていないその手紙を己の顔の高さに持って来た。安楽椅子に座りその落ち着いた中でそこまでやったのだ。
そのうえでだ。己の傍らに立つその従者にまた話した。
「あれだな。結び目だ」
「結び目ですか」
「希臘の話だったな」
そのだ。欧州の一国の話を引き合いに出すのだった。
「あの国の話だが」
「希臘の結び目ですか」
「ゴルディアスの結び目だったか」
話すのはだ。それのことだった。
「あれの様になってしまっているな」

「それは一体何でしょうか」
従者はそのゴルディアスの結び目が一体何なのか。それを己の主に尋ねた。
「そのゴルディアスの結び目とは」
「車輪に結び付けられている複雑な結び目でだ」
「複雑なですか」
「それは誰がどうしても解けなかった。しかしだ」
「しかし？」
「若しその結び目を解けるならば」
どうなるかというのである。そうした話だった。
「解いた者は英雄となる。そうした伝説だ」
「そうした話があったのですか」
「それと同じになっている」
伊上は本来そうであると思われる厳しい顔になっていた。その顔でだ。
こうだ。従者に話すのだった。
「まさにな。若しあの両家の対立を解消できれば」
「それは」
「それができた人間はまさに大物だ」
そうだというのだ。
「そう思う」
「確かに。両家の対立は」
「今ではどうしようもないな」
「元老の方々でもどうにもなりませんでしたし」
「根深くそして無意味だ」
二つの負のものに満ちている、そうした対立だというのだ。
「まさにな。ゴルディアスの結び目は解かれたが」
「解かれたのですか」
「剣で断ち切られた」
そうなったというのである。それで解かれたというのだ。

「アレクサンドロス大王によってだ」
「アレクサンドロス大王とは」
「その希臘の英雄だ」
そうした人物だというのだ。
「希臘から波斯、印度まで攻め入ったな」
「随分と広いのですね」
「世紀の英雄だろうな」
その英雄の話になったのだった。
「まさにな」
「それがその大王ですか」
「アレクサンドロス大王だ」
「では。両家の対立は」
「剣が必要だ」
その結び目を断ち切る剣がだというのだ。
「それが必要だな」
「ですがその剣は」
「誰も持っていない」
これが現実だった。だから今まで誰もどうしようもなかったのだ。
そのことについてだ。伊上は憂いの顔で話す。
「どうすればいいのかもだ」
「わかりませんね」
「わからない。当然わしもだ」
伊上自身もだというのだ。その憂いの顔での言葉だ。

第十話　映画館の中でその十六

「一体何をするべきかな」
「困った話ですね」
「さて、それでだ」
ここまで話してだった。彼はだ。
それまで手にしていた手紙の封に手をつけてだ。それでだった。
「手紙を読むか」
「はい、それでは」
こうしてだった。その義正からの手紙を読む。まずは普通の顔だった。
しかしだ。少しずつ読んでいきだ。その顔がだ。
強張りだ。それから明るい顔になり。それからだった。
老従者にだ。こう話すのだった。
「今その剣が見つかった」
「剣がですか」
「結び目を断ち切る剣が見つかった」
こう話すのである。
「今ここでだ」
「といいますと？」
「わしに会いたいそうだ」
こう話すのだ。
「是非共な」
「あの八条家の三男の方がですか」
「そうだ。あの若旦那がな」
「そのこと自体は普通だと思いますが」
「そうだな。はじめてのことにしてもだ」
「しかしそれ以上のものがあるのですか」
「だから言うのだ」

厳しい顔が明るくなっていた。そのうえでの言葉だった。
「今こうしてな」
「ううむ、一体何でしょうか」
「ペンを用意してくれ」
これが伊上の従者への返答だった。
「わしも手紙を書く。いいな」
「旦那様もですか」
「そうだ、書く」
まさにだ。そうするというのだ。
「それも二つだ」
「一通ではないのですか」
「すぐにわかる。いいことだ」
自然にだ。こんなことも言うのだった。
「話がこれで変わる」
「変わりますか」
「何ごとも。争うよりはだ」
「それよりも？」
「親しむ方がいい。その方がいい」
こう話してだった。彼は従者からペンを受け取りだ。そのうえで手紙を書きはじめるのだった。
そうしてその二通の手紙をそれぞれ送る。賽が再び放たれたのだった。

第十話　完

２０１１・５・６

第十一話　断ち切る剣その一

第十一話　断ち切る剣

義正のところに一通の手紙が来た。それは。
伊上からのものだった。それを見てだった。
手紙をポストから持って来た佐藤がだ。彼に話すのだった。
「来ました」
「伊上先生からだね」
「はい、旦那様にです」
「早速だね」
「先生にとっても思うところがおありなのでしょうか」
「だからだね」
手紙がだ。すぐに来たというのだ。
「そうだね。あの人にとっても」
「前から八条家と白杜家の対立について憂いておられましたが」
「それを知っていたから」
義正は言う。
「あの方に手紙を送ったんだからね」
「そうですね。そのことは」
「うん。それじゃあだけれど」
「はい。お手紙をですね」
「読ませてもらえるかな」
「はい」
佐藤はその手紙を義正に差し出した。そうしてだった。
すぐに封が切られてだ。それからだった。
義正は手紙を読む。そして読み終えてからだ。
会心の笑みでだ。佐藤に話すのだった。
「お話させてもらうことになったよ」
「伊上先生にですね」

「うん。あちらからも是非にと仰っているよ」
手紙にだ。そう書かれているというのだ。
「御会いしたいとね」
「旦那様とですね」
「そう、彼女ともね」
もう一人のだ。彼女ともというのだ。
「二人で。来て欲しいと書いてあるよ」
「あの人のお屋敷で、ですか」
「そう、そこでね」
「伊上先生のお屋敷といいますと」
そこがそうした場所かというとだ。佐藤もよく知っていた。彼の屋敷は神戸において知らぬ者はない程有名な場所なのである。
「あの洋館ですね」
「そう、そこでね」
「左様ですか。あそこで、ですか」
「会うことになったよ」
笑顔で話す彼だった。
「先生から是非にとね」
「よいことです」
佐藤もここまで話を聞いてだった。
笑顔になりだ。己の主に話した。
「これで話が一歩前に進みましたね」
「それも確かな一歩だね」
「そうです。実りのある一歩です」
そうした一歩だというのである。
「では。このまま」
「それで日はね」
具体的にだ。何時かという話にもなった。
「一週間後だよ」
「一週間後ですか」

「その日に来てくれとね」
「先生が仰っていますか」
「うん」
そうだというのだ。
「そうなったよ」
「わかりました」
佐藤は笑顔で義正の言葉に応えた。
「そうですか。一週間後に」
「全てお話させてもらうよ」
義正は確かな声で話す。
「僕達のことをね。全てね」
「真実はです」
佐藤は義正に対してだ。己のその考えを述べた。

第十一話　断ち切る剣その二

「恋愛に関しては。特にこの場合は」
「全て話すべきだね」
「隠さずにです」
是非だ。そうするべきだというのだ。
「その様に」
「そうだね。真実は何よりも強いね」
「はい、最も強いものです」
誠実な佐藤らしい言葉だった。
「何よりもです」
「わかった。じゃあ」
「はい、そうされるべきです」
「誠実は力だね」
「誠、何よりも奇麗な言葉です」
佐藤は話してくる。
「そして強い言葉です」
「言が成る」
そうした言葉だというのだ。確かにその二つが重なってだ。
誠という言葉になる。それでだというのだ。
「それが最も強いか」
「その通りです。では」
「では？」
「決められたお祝いにです」
笑顔での言葉だった。
「どうされますか」
「どうするか？」
「はい、ワインはどうでしょうか」
それをだ。勧めてきたのである。

「ワインをです。飲まれますか」
「ワインをかい」
「若しくは他のお酒は」
「ブランデーがいいかな」
義正は少し考える顔になってからだった。
そのうえでだ。こう佐藤に答えたのだ。
「その方がいいかな」
「ブランデーですか」
「今日はじっくりと飲みたいね」
答えながらだ。微笑むのだった。
「だからそれをね」
「ブランデーをじっくりとですか」
「うん。それでいいかな」
「はい」
佐藤も明るい笑顔で義正に応える。
「では早速それを」
「いい酒だね、ブランデーは」
義正は穏やかな笑みになってまた佐藤に話した。
「何か。飲んでいるとね」
「落ち着かれますね」
「落ち着くね」
実際にそうだというのだ。
「とてもね」
「そうですね。ブランデーは何処か大人の香りがします」
「大人の味というか」
「独特の雰囲気が、ワインとはまた違ったものが」
「あるね」
「だからいいのです」
そのだ。ブランデーがいいというのだ。
そう話してだ。佐藤が持って来たブランデーを見る。それは彼が

座るテーブルの上に置かれた。そしてそのボトルとグラスを見ながらだ。

今度はだ。そのボトルの緑色の丸い姿を見てだ。話すのだった。

「この形もいいんだよ」

「ボトルのですか」

「色もいい」

その緑色のガラスもだというのだ。

「とてもね。いいね」

「日本のものとは離れた」

「西洋風のね。ただ」

「ただ？」

「西洋は確かにいいよ」

そのだ。西洋を肯定してからだ。

そのうえでだ。彼はこうも話すのだった。

「けれどここは日本だよ」

「はい、確かに日本です」

「それが余計にいいんだ」

「いいのですか」

「日本の。この文化や風土の中で西洋のものが楽しめる」

それがいいというのだ。

第十一話　断ち切る剣その三

「それは凄く素晴しいことだね」
「確かに。江戸時代ではありませんでした」
「有り得ませんでした。鎖国していましたから」
「けれど今は違うね」
「はい、確かに」
「こうして様々なものが味わえるようになって」
そうしてだというのだ。
「楽しめるようになった」
「いいことですね」
「うん。時代は変わったんだ」
笑顔で話す義正だった。
「様々なものが楽しめて」
「そして。古いしがらみも断ち切ることができるようになりました」
「そうした時代になったんだね」
「そういうことですね。だからこそ」
「一週間後。行って来るから」
話が戻った。そちらにだ。
「それじゃあね」
「はい、それではその様に」
「それでね」
義正はまた話を変えた。今度の話は。
「君も飲むかい」
「ブランデーをですか」
「うん、どうかな」
佐藤に笑顔で勧めるのだった。
「このお酒はね」
「では」

そしてだ。佐藤はというと。
微笑みを浮かべてだ。こう答えたのだった。
「御言葉に甘えまして」
「そうしてくれるね」
「お酒は好きです」
甘いものだけではなかった。彼はそちらも好きなのだった。
「それに旦那様の御誘いとあれば」
「乗ってくれるんだね」
「そうさせてもらいます」
これが彼の返答だった。
「では。今から」
「一人で飲むより二人で飲む方が美味しいからね」
「お酒もですね」
「そう、二人の方がね」
いいとだ。義正は微笑んで佐藤に話すのだった。
「何でもいいね」
「人生もまた」
「そういうことだね。じゃあ」
「はい、それでは」
「二人で飲もう」
こうしてであった。義正は佐藤と二人でそのブランデーを飲むのだった。
そうして話をしてだ。その一週間後だ。
伊上の屋敷に向かう。当然一人ではない。傍らには彼女がいる。
真理だ。真理は白いドレスを着ている。義正も白だ。彼は白いフロックコートにズボン、それとスーツにネクタイだ。その姿でだった。
真理に顔を向けてだ。こう話すのだった。
「白ですね」
「こうした時はですね」

「そうですね。白がいいですね」
二人共だ。こう思ってのことだった。
そしてそのうえでだ。彼は真理に話すのだった。
「大事なことを決める時には」
「白は決意の色ですか」
「決意、そうですね」
その決意という真理の言葉にもだ。義正は応えて話した。
「これはそうなりますね」
「そうですね。決意ですね」
「はい、決意です」
その通りだとだ。義正も述べた。
「私達のことを伊上先生にお話するのですから」
「その決意の色がですね」
「白です」
まさにだ。その白という色がだ。決意の象徴だというのだ。
「そしてその白で」
「向かうのは」
「戦場に赴く様です」
義正はこんなことも口にした。

第十一話　断ち切る剣その四

「死装束ではありませんが」
「死装束ですか」
「それではないですか」
「生きる為に、私達二人で生きる為ですから」
だからだ。死ぬのとは全く違うというのだ。
「生きる為のことですから」
「死装束ではありませんね」
「はい、生きる為に戦場に赴く」
それならばだ。どうかというのだ。
「今はそうなりますね」
「生きる為に戦場にですか」
「日露戦争です」
先にあった戦いだ。日本の運命を決めた戦いだ。
「あの戦争で私達の父や兄達は何の為に戦ったのか」
「我が国が生きる為ですね」
「そうです。その為に戦ってくれました」
そして日本は生き残った。まさにそうした戦争だったのだ。
「ですから。私達も今はです」
「生きる為にですね」
「戦いに向かいましょう」
こう言うのだった。
「そうしましょう」
「そうですね。そして」
「そして？」
「その為の白ですね」
真理からの言葉だ。
「私達は無意識のうちに選んだのですね」

「はい、そうなりますね」
「白は不思議な色ですね」
「色は心を表すのでしょう」
義正はこうも話したのだった。色はまさにそうしたものだとだ。
「ですから」
「私達の今の心は白いのですか」
「一点の曇りもないまでに」
そうだとだ。義正も言う。
そしてその白は何かとも話すのだった。
「清らかなものなのでしょう」
「その清らかは誠実なのでしょうか」
「そうなのでしょう。こう言えば自画自賛ですが」」
「それでも。そうなるのですね」
「私達は今全てを見せる為にです」
「伊上先生のところに向かう」
「なら。そこにあるのは誠実となるでしょう」
それが服に出たというのだ。その彼等が今着ている服にだ。
「私達のものです」
「では私達はそれを以てですね」
「誠意はこの世で最も強いものと言われています」
義正は澄み切った目でだ。真理に話すのであった。
「それが私達にあると」
「心強いですね」
「はい、非常に」
義正は笑顔になっていた。自然にだ。
「心強いです」
「ではその心強いものと共にあるなら」
「怯むことはないでしょう」
それもだ。ないというのだ。
「むしろ怯むものなぞない筈です」

「やましいものがないからこそ」
「そうなることはないのです」
あくまでだ。真っ直ぐな言葉であった。
「ではそのうえで」
「行きましょう」
「そうしましょう」
こうしてだった。二人はその洋館に向かった。
洋館は白い壁に焦茶色の鋭角の屋根を持っている。煉瓦の煙突まである。
その洋館の門は鉄のだ。薔薇が絡み合った柵だった。それは壁も同じだ。
その薔薇の壁と門を潜ると左右対称の緑と白の庭園がある。そこを通ってだ。
二人は洋館の門の前に来た。そして鐘を鳴らすとだ。

第十一話　断ち切る剣その五

すぐにだった。彼自身が出て来たのだった。
「待っていたよ」
「えっ、先生」
「先生がですか」
「私が出迎えて不都合があるのかい？」
伊上はその厳しい顔に気さくなものを見せて二人に言う。
「そうした決まりはない筈だが」
「それはありませんが」
義正はこう伊上に返した。
「ですが」
「ですが。何だね」
「まさか先生御自身が来られるとは思っていませんでした」
出迎えにだ。それはとてもだというのだ。
「それで」
「驚いているのだね」
「はい」
まさにだ。その通りだというのだった。
「そうです」
「そうだろうな。実は」
「実は？」
「家の門で待っていようと思っていた」
そうするつもりだったというのだ。
「それで家の門に向かおうとしていたが」
「その時に私達がですか」
「そうだよ。来たんだよ」
そうなったというのだ。
「いや、こちらの動きが少し遅れたね」

「いえ、それは」
「いいのだね」
「そんな。先生自ら家の門になぞ」
「何、それが礼儀だよ」
「礼儀ですか」
「家の主は客人を出迎えるのは礼儀じゃないか」
それでだというのだ。伊上は不遜な人物という噂もある。義正もそれは知っていた。しかしそれでもだった。彼は今そうしてきたのだ。
その彼がだ。また言うのだった。
「それでだよ」
「それでだったのですか」
「そうだよ。それでね」
「はい、それで」
「鐘が鳴ったその時に家の者達が向かおうとしたが」
それをなのだった。伊上はそのことについて細かく話していく。
「呼び止めてね」
「それで先生が」
「そうだよ。それで今ここにいるんだ」
他ならぬだ。彼等の目の前にだというのだ。
「そうした事情だったんだよ」
「成程、そうでしたか」
「うん。それでは」
それでだというのであった。伊上の方から話す。
「中に入ってくれるか」
「わかりました。それでは」
「宜しく御願いします」
義正だけでなくだ。真理も応える。
そしてそのうえでだ。二人はだ。
伊上に案内されて洋館の中に入った。吹き抜けで館の左右に部屋

が立ち並んでいる。部屋の扉は黒く重厚な木だ。床にはビロードの絨毯が敷かれている。それは階段も同じだった。

壁は白く手すりはよく磨かれた真鍮のものだ。その洋館の中をだ。

二人は伊上に案内されてた。居間に通された。そこも洋風だ。

その居間の中の豪奢な紅いソファーに腰を下ろす。伊上はその向かい側に座ってきた。背筋が伸びだ。義正に比べて小柄な筈だが彼に匹敵するまでに大きく見えている。

その姿勢でだ。こう彼に言うのであった。

「さて、それではだ」

「はい、手紙のことですね」

義正はすぐにだった。伊上のその言葉に応えて述べた。

「そのことですね」

「それだ。いいことだ」

彼は単刀直入に述べた。

第十一話　断ち切る剣その六

「非常にだ。いいことだ」
「そう仰って下さいますか」
「まず結婚すること」
最初にだ。そのことを話したのだった。
「それがいい」
「結婚自体がですか」
「浪漫な表現だが愛し合う二人が結ばれることはだ」
「そのこと自体がですね」
「そうだ。非常にいい」
微笑んでだ。義正と彼の横に座る真理に話してくる。
「是非そうするべきだ」
「有り難うございます」
「そしてだ」
しかもだというのだった。二人に対して。
「わしのところに話を持って来たこともいいことだ」
「先生ならと思いましたので」
今度は義正がだ。単刀直入に述べた。
「それでなのです」
「そうだな。わしならばな」
「力になって頂けますね」
「そうさせてもらいたい」
こう答える彼だった。
「わしからもだ」
「そう言って頂けますか」
「そう、是非な」
こうまで言うのであった。
「そうさせてくれるな」

「御願いします」
義正は真剣な顔で伊上のその顔を見詰めて話した。
「是非共」
「うむ、それではな」
「はい、それでは」
「そしてだ」
伊上から話を続けてきた。
「八条家と白杜家の対立は解決しなければならない」
「どうしてもですね」
「そうだ。無意味な対立だな」
「はい」
「そうだ。そうした対立はだ」
どうかというのだった。そのことも話すのだった。
「何時かは解決しなければならなかったのだ」
「ならなかった、ですか」
義正は伊上のその言葉がだ。過去形になっていることに気付いた。
そしてそのうえでだ。彼に問い返すのだった。
「そうなのですね」
「その時が遂に来たな」
伊上は微笑みでだ。義正に話した。
そしてそのうえでだ。真理にも言うのだった。
「白杜の家はじゃ」
「私の家ですね」
「そう、とてもいい家じゃ」
こうだ。彼女に話すのである。
「貴女の父君のことは昔から知っているが」
「はい、父も仰っています」
「あの人は素晴しい人だ」
「有り難うございます」
「白杜家の棟梁としてだけではない」

それだけではないというのだ。
「財閥の総帥としても。人としても」
「どの場合でもなのですね」
「見事な御仁だ」
こうだ。その娘に対して話すのだ。
こう話してだ。そのうえで今度はだ。義正に顔を戻して話すのだった。
「それは八条家も同じだ」
「私の家もですか」
「君のお父上も立派な御仁だ」
真理に対するのと同じことを話すのだった。
「まことにな」
「そう言って頂けるのですね」
「やはち八条家の棟梁としても財閥の総帥としても人としても」
見事だというのである。まずは二人の父からだった。

第十一話　断ち切る剣その七

そしてだ。あらためてだった。
二人に顔を向けた。二人にである。
「君達はそれぞれ見事な父上を持っておられる」
「はい、確かに」
「そう思います」
「素晴しい親は素晴しい子を育てる」
話をだ。次第にだった。
義正と真理に移してだ。そうして話を進めていくのだった。
「その君達もまた実に素晴しい」
「いえ、私達は」
「その様な」
二人は伊上の言葉に謙遜で返そうとする。しかしだった。
その二人にだ。伊上は言うのだった。
「そこだ」
「そこだと」
「そこだというのですか」
「そうして謙遜するところがよいのだ」
「謙遜ですか」
「それがですか」
「謙遜は過ぎると目につく」
伊上はそのことを付け加えるのも忘れない。
しかしそのうえでだ。こうも話した。
「しかし君達の謙遜は違う」
「違うのですか」
「私達の謙遜は」
「過ぎてもなく軽くもない」
つまりだ。適度だというのだ。

そしてそれだけではなくともだとだ。伊上はさらに話した。
「そのうえで心がある」
「心がですか」
「私達にはありますか」
「そうした意味でまことの謙遜だ」
確かな顔で二人を見てだ。そのうえで話すのだ。
「それができるというのはやはりだ」
「私達の親がですか」
「よいからですか」
「卑屈も尊大もよくはない」
伊上は長い人生の経験、しかも政界や財界、官界といった世界で生きていってだ。そのことを知ったのである。人生からの言葉であるのだ。
「中庸が大事なのだ」
「中庸がですか」
「それは中々身に着けられるものではない」
義正に応えての言葉だ。
「そしてそれを自身の子に身に着けさせられるのは」
「それだけの親だからこそですか」
「父君だけではない」
さらにだった。
「母君もだ」
もう一方の親もだというのだ。素晴しいのはだ。
「やはりそれだけの方だからこそだ」
「今の私達がある」
「そうだというのですね」
「左様。君達の親御さん達は実に素晴しい」
四人共だというのだ。
「それで今の君達があるのだ」
「そうなのですね」

真理が伊上の言葉に応えて述べた。
「今の私達が」
「人はただ一人では存在しないものだ」
そしてだ。伊上はこうも話した。
「そのご両親もあってこそだ」
「私が今あるのも」
「そう。しかしだ」
ここまで話したうえで、だった。
伊上は一呼吸置いてからだ。また二人に話すのだった。

第十一話　断ち切る剣その八

「完璧な人間というものもおらぬ」
「完璧な人はですか」
「いませんか」
「おらぬ。君達のご両親、そしてそれぞれの家はだ」
どうなのかをだ。伊上はさらに話した。
「激しく嫌い合いいがみ合っている」
「そのことがですか」
「完璧ではないことなのですね」
こう話す二人だった。
「私達の家の対立が」
「そのことが」
「人を嫌うことはよくない」
その前提を話すのだった。
「それはあらゆる憎しみの元となる」
「だからですか」
「それはなのですか」
「人を嫌うのは人として当然の感情でもある」
伊上はその人生洞察のうえからこうも述べた。
「わしも禅僧ではない。人を嫌いもするが」
「やはりよくはありませんか」
「よくないのう」
実際にそうだと答える伊上だった。
「どうしてもな」
「そうですか。やはり」
「嫌うのはよくないのですね」
「不公平につながるしのう」
これは政治家としての観点に基く言葉だった。

「不公平はよくない」
「ですね。そういえば陸軍は」
義正は伊上が関わってきたその軍のことを話に出した。長州出身の彼は陸軍の重鎮の一人でもあったのだ。階級は大将にまでなっている。
「公平さを重んじますね」
「うむ、重んじている」
その通りだと答える伊上だった。
「しかし実は完璧ではない」
「そうなのですか？」
「今我が国は台湾と朝鮮半島も領有しておるな」
「はい」
それはその通りだ。その新たな領地の経営に心血を注いでもいたのだ。
「陸軍がかなり頑張っているとか」
「とりわけ朝鮮半島でな」
「その様ですね」
「それで今現在朝鮮半島出身の者も士官学校に入学させている」
これはその通りだ。そこから中将にまで昇進した者も出て来る。只の植民地の人間が将官になれるかというとだ。否なのである。
「試験に合格すれば誰でもな」
「正しいことだと思います」
「そう、正しい」
それはまさにその通りだとだ。伊上も述べる。
しかしそれと共にだ。彼はこうも言うのだった。
「だが。台湾出身の者はじゃ」
「違うのですか」
「一人も入学させておらん」
これもまた事実であった。陸軍は色々な理由を述べて台湾出身者を士官学校や各種学校に入学させなかった。そして台湾では徴兵制

も行われていない。
「全くじゃ」
「そうだったのですか」
「そこが問題なのじゃ」
伊上は憂いのある顔で述べる。
「例えば朝鮮半島では徴兵制の対象外じゃが」
「それでも日本にいれば兵隊さんにもなれますね」
「なれる。検査に通ればなれる」
確かにかなり厳しい検査であった。日本の徴兵制は実質的にはかなり厳格な選抜徴兵制だったのである。
「しかし台湾出身者は検査に通ってもじゃ」
「中々なれないのですか」
「わしの知る限りおらん」
兵士もなのだった。

第十一話　断ち切る剣その九

「どうしてもじゃ」
「そうなのですか。半島出身者と台湾出身者でそこまで」
「半島も台湾も差別してはならんが」
それでもだとだ。伊上は現実を話すのだった。
「これが現実なのじゃ」
「何とかしないといけませんね」
「わしもそう考えて動いておるが」
それでもなのだった。陸軍、海軍も含めてその台湾出身者への冷遇は第二次世界大戦がはじまるまで変わらなかった。それで大戦の時に応募してみてだ。その応募に応えた者の数とその質にだ。驚いたのだ。
「しかしどうもじゃ」
「話は進んでいませんか」
「残念なことにな」
「左様ですか」
「台湾出身者も優秀な筈じゃ」
このことがわかるのはまさに次の大戦の時であった。
「それを冷遇するのは疎んでいるからじゃ」
「偏見からですか」
「うむ、偏見じゃ」
「そしてその偏見は」
「君達のご両親にもある」
そうだとだ。二人に話すのだった。
「残念なことにじゃ」
「御互いの家への偏見」
「それですね」
「商売敵なのはわかる」

このことは重要だ。だがそれ以上にだというのだ。
「しかし両家は商売以上に感情的になってしまっておる」
「だからこそですか」
「それをなのですね」
「解消しなければならん」
伊上は着ているその見事な和服の袖の下で腕を組みながら述べた。
「ここでじゃ」
「断ち切るべきなのですね」
「そう常に思っておった」
伊上はまた言った。
「そしてそこに君達が来てくれた」
「それならばですか」
「私達に」
「わしでよければじゃ」
まさにだ。そうだというのだった。
「力を貸しさせてくれ」
「有り難うございます。それでは」
「御願いします」
「うむ、それではじゃ」
話が決まった。そのうえでだった。
伊上はさらにだ。次の話にその話を進めるのだった。
「義正君よ」
「はい」
「君はどうするのじゃ」
こうだ。義正に対して問うのだった。
「何を考えておる」
「はい、ただそれぞれの両親に話してもです」
「それでは駄目じゃな」
「私もそう思っています」
「反対するに決まっておる」

伊上は難しい顔でそのことに答えた。
「話はこじれるだけじゃ」
「そうです。必ずそうなってしまいます」
「わかっておるな。見事じゃ」
義正のその先見を讃える。しかし今はそれを讃えてもそれだけだった。
それもわかっているからだ。伊上は話すのだった。
「しかしそれだけでなくじゃ」
「私の考えですが」
「どうするのじゃ？」
「公にしようと考えています」
このことをだ。伊上にも話すのだった。

第十一話　断ち切る剣その十

「そう考えています」
「公にか」
「はい、公にです」
まさにそうだというのだ。
「発表しようと思っています」
「それはまた」
伊上はだ。彼のその話を聞いてだ。
顔を強張らせてだ。こう言うのだった。
「思い切ったな」
「そうでもしないと、と思いまして」
「それで公にするのか」
「はい、同時にです」
「君達の両親にも知らせる」
「それを以て」
「やはり思い切っておるな」
また言う伊上だった。
「そうするとはのう」
「思われませんでしたか」
「うむ、予想外だ」
そしてだ。さらにどうかというのだった。
「予想以上だ」
「以上とは」
「君はわしが思っていた以上の人物の様じゃ」
こうだ。義正を見て話すのだった。
「そこまで思い切った大胆なことをするとはのう」
「だからですか」
「そうじゃ。確かに君達の両親に言うのではじゃ」

「話は上手くいきません」
「間違いなく反対され」
そしてだとだ。伊上は話していく。
「そして両家の対立になってしまう」
「それではどうしようもありませんね」
「だから駄目じゃ。どうしようもなくなる」
「家と家の問題にするのではなく」
「公に知らしめてじゃな」
「そう思いました」
それでだとだ。義正は伊上に話すのであった。
そしてだ。今度はだ。
その公にするやり方もだ。彼は話した。
「それでその場ですが」
「わしに提供して欲しいのじゃな」
「舞踏会を御願いできますか」
伊上のその目を見ながらの言葉だった。
「それを」
「舞踏会か」
「それもかなり大掛かりな」
「それではじゃ」
話を聞いてだ。伊上はだ。
そうしてだ。このことを話に出すのだった。
「あれか。鹿鳴館の様なじゃな」
「そこまでは
「しかし大掛かりにじゃな」
「その場を提供して頂ければ」
「うむ、場所はある」
伊上は強い表情で頷いてであった。
そのうえでだ、義正に言葉を返した。
「そこにしようか」

「はい、それでは」
「その様に」
これで話がまとまった。舞踏会においてだ。義正は真理とのことを公にするとだ。伊上に話その理解も得たのであった。
これは大きかった。彼はだ。
その伊上にだ。こうしたことも述べた。
「有り難うございます」
「礼はいいのじゃがな」
「いえ、これで私達は」
「何度も言うがこれはじゃ」
「これはですか」
「わしの長年の願いでもあった」
だからこそだとだ。彼は話すのである。
「だから礼はよいのじゃ」
「そうなのですか」
「そうじゃ。八条家と白杜家の対立が幕を下ろす」
その厳しい顔を綻ばせてであった。彼は義正と真理に話した。

第十一話　断ち切る剣その十一

「君達が結ばれることによってじゃ」
「だからなのですね」
「そうじゃ、非常によいことじゃ」
伊上は顔を綻ばせて話す。
「無論君達二人が結ばれることもじゃ」
「それもですか」
「よいことじゃ」
そのことについてもだ。彼はいいとした。
そして真理の顔を見てだ。こんなことも言った。
「白杜家のご令嬢も」
「はい」
「実によい顔をしておる」
真理のだ。整った顔を見ての言葉だった。
「肌は紙の様に白い」
「どうも近頃」
「近頃？」
「顔色が白くなりました」
そうだとだ。真理は伊上に話すのだった。
「以前はこうではなかったのですが」
「顔が白くなったのか」
「化粧はしていません」
だがそれでもだ。今の真理の顔は。
確かに白い。まるで白粉を塗ったかの様に。そうした白さであった。
「ですが近頃」
「ふむ。そうなのか」
「ですから」

「しかしよいことじゃ」
伊上はその白いことはだ。そのままよしとした。
そうしてだ。こう言うのであった。
「色が白いのはじゃ」
「それはなのですか」
「奇麗なものを際立たせる」
つまりだ。真理のその美貌をだというのだ。
「だからよいのじゃ」
「左様ですか」
「うむ、よい」
微笑んでだ。実際に真理に話した。
「まさに美男美女の二人じゃな」
「あの、それは」
「少し」
「よいのじゃ。事実じゃからな」
二人には今はあえて言わせなかった。先手を取った。
そして先手を取ってだ。さらに話す彼だった。
「幸せは手に入れるものじゃ」
「手にですか」
「自分達の手で」
「そうじゃ、そうするものじゃ」
微笑みでだ。話すのだった。
「ではそうしてくれ」
「わかりました」
二人は同時に頷いた。そうしてだった。
二人は伊上の協力も約束してもらえた。そして伊上もだ。
笑顔になっていた。その笑顔での言葉だった。
「よいことだ」
「いいことですか」
「そうだ、これはとてもいいことだ」

こう言うのであった。
「長年の無益な争いが幸せに終わるのだからな」
「それでなのですか」
「それで、ですか」
「そう、終わるのなら幸せにだ」
見ればだ。伊上の顔が綻んでいた。
そしてその綻びでだ。彼は言うのである。
「そして幸せにはじめるべきなのだ」
「幸せに終わり幸せにはじめる」
「そうあるべきなのですか」
「そう。結ばれて和解して終わりではない」
それで終わりではないとだ。彼は話すのだった。

第十一話　断ち切る剣その十二

「そこからはじまるのだ」
「そこからはじまる」
「はじまるのですか」
「そう、舞台なら結ばれて終わりだ」
伊上もこれまで多くの舞台を観てきている。そのうえでの言葉だった。
「しかし現実は違う」
「そこからまたはじまるのですね」
「別の話が」
「そういうことだ。現実はそうだ」
これが伊上の二人への言葉だった。
「現実はそうなのだ」
「そうですか。私達の話がですか」
「遂に」
「そう、はじまる」
また話す。伊上はだ。
「そしてその話を幸せにはじめてだ」
「幸せに進めていく」
「そうしていけというのですね」
「そうだ。今度はその話をはじめてだ」
二人が結ばれてからだ。その話をなのだ。
「幸せに進めていってくれ」
「はい、わかりました」
「そうさせて頂きます」
二人もだ。同時に答えた。
その答えを述べてからだった。義正も真理もだ。
確かな、そして晴れきった顔になってだ。話すのだった。

「それでは今から」
「私達は二人で幸せに生きていきます」
「そうしてくれ」
伊上もだ。晴れきった、彼がこれまで滅多に見せたことのない笑顔でだった。二人に述べた。
そしてその笑顔でだ。二人に告げたのだった。
そうした話をしてだ。二人はだ。
笑顔で洋館を後にした。そして帰り道でだ。
二人並び歩きながらだ。こう話すのだった。
「よかったですね」
「はい」
真理はだ。義正の言葉に頷いた。
「とても」
「実は不安でした」
二人になったところでだ。義正は話した。
「伊上先生は信じていましたが」
「それでもだったのですね」
「はい、不安でした」
そうだったとだ。真理に話すのだった。
「果たして。本当に先生が賛成してくれるか」
「信じていてもですか」
「先生ならば必ず」
伊上自身はだ。信じていたというのだ。
しかし彼は不安を抱いていた。その不安の原因も話した。
「しかし。それでも。果たしてと思いまして」
「私もです」
そしてだ。真理もだった。
俯いた顔になってだ。それで述べるのである。
「先生が私達を認めて下さるかどうか」
「不思議ですね。先生を信じていても」

「それでもですから」
「人は信じられても」
それでもなのだった。
「恋というものは」
「どうしても不安になってしまうものなのですね」
「そうですね」
二人で話すのだった。
「恋は。そうさせるもの」
「人を不安にさせるもの」
「そうなるとわかっていても不安にさせるもの」
「不思議ですね」
二人で話していく。
「そのことは」
「ですがそれでも」
今はというとだった。
「嬉しいですね」
「そうですね」
義正も真理も言った。

第十一話　断ち切る剣その十三

「その不安の中でも」
「それでも。嬉しいですね」
「先生は約束してくれました」
その信じていたことが実ってなのだった。
「そのことがとても」
「私達はこのまま進んでいけるのですね」
真理はこうしたことも話した。
「そうなのですね」
「幸せに終わらせて幸せにはじめられて」
義正はそのだ。伊上の言葉をそのまま出してみせた。
そしてそのうえでだ。真理に話すのだった。
「幸せに進められます」
「そうですね」
「そのこと自体が幸せです」
義正はこうも話した。
「とても。幸せなことです」
「何もかもが幸せにできることが」
「それ自体がです」
「そうなりますね」
真理もだった。義正のその言葉にだった。
頷いた。それでだった。
義正にだ。あらためて話した。
「私は二人でいられて」
「はい、そうして幸せにです」
「なれるのですね」
「幸せには一人でもなれます」
ここでこうも言う義正だった。

「ですが一人よりも二人の方がより」
「幸せになれますね」
「そう思います。ですから」
「だからこそ私達は」
「賽は投げられました」
古典的だがだ。この場合はその通りだと言える言葉だった。
「そして私達はその賽に従うだけです」
「そうしてですね」
「行きましょう」
真理に顔を向けてだ。微笑んでの言葉だった。
「是非共」
「そうですね。それでは」
真理も頷いてだった。こうして二人はその賽に従うのだった。
伊上はその二人を見守ってからだ。彼の従者、その老従者に話すのだった。
「いいことだ」
「あの御二人のことですね」
「そうだ。とてもいいことだ」
満足した顔で安楽椅子に座りだ。傍らに立つ従者に話した。
「これで二つの家の対立が終わりだ」
「そうしてですね」
「幸せな一組の夫婦が生まれる」
そのだ。彼等がだというのだ。
「それはとてもいいことだ」
「そうですか。だからですね」
「この時が来るとはな」
目が微笑んでいた。そのうえでの言葉だった。
「来ると信じていたがだ」
「それでもですか」
「そうだ。それが何時になるか」

そのだ。時が来ることについての話もするのだった。
「それは全くわからなかった」
「二つの家の対立が終わるその時がですね」
「人は終わらせる為に努力をする」
この場合についてのだ。具体的な話だった。
「しかしその努力が実るのが何時かはだ」
「それはわかりませんか」
「容易にはわからない」
また話す彼だった。
「人は限りがあるのだ」
「ありますか」
「その能力にはな。人は神ではないからだ」
「神の様に全てのものが見える訳ではないのですね」
「だから人だ」
それでだとも話すのだった。

第十一話　断ち切る剣その十四

「人は限りがあるものだ。その力にもだ」
「それでその努力が実る日もわからない」
「その通りだ。時が来るのはわかるのは神だけだ」
この場合の神は一柱ではない。複数の、それこそ数えきれないだけの神がある。伊上は基督教徒ではない。それで一神とは考えないのだった。
「しかしそれでもだ」
「それでも？」
「その時が来ればだ」
その場合はだ。どうするかというのだった。
「動く。そして必ず成功までこぎつける」
「それが人のすることですね」
「そうなのだ。そしてわしは二人の言葉を受けた」
「そして協力されると」
「いいことだ。対立が終わり融和がはじまる」
その二つをだ。相反するものとして話すのだった。
「後はその融和を維持する努力を続けよう」
「そしてそれが実るのは」
「それがわかるのは最後の最後だ」
伊上はこう従者に話した。
「最後なのだ」
「最後といいますと」
「その二人での幸せが終わった時だ」
その時が何時かもだ。伊上は話した。
「その時なのだ」
「幸せが終わった時だ」
「つまりそれはだ。どちらかが亡くなった時だ」

かなりだ。具体的な話になった。
「その時だ」
「二人のその生活が終わる時ですか」
「そうだ。その時に終わる」
伊上は遠くを見て話すのだった。
「その時にだ」
「つまりそれまではわからないのですね」
「対立が終わるのはすぐにわかるが幸せが終わるのは中々わからない」
「そういうものですか」
「それが終わった時は後になってわかる」
遥か先、そこだというのだ。
「その時にだ」
「幸せはそういうものですか」
「そう思う。実際にだ」
「実際にですか」
「明治維新のあの苦しかった時だ」
諸外国の脅威に怯えこれから何を為すべきか迷い四苦八苦していた時代だ。大正ではもう遥かなだ。過去の話になってしまっていた。
その時代のことをだ。話しながらなのだった。思い出しての言葉だった。
「あの時代は確かに苦しかった」
「それでもですか」
「幸せだった」
伊上は懐かしむ目で話した。
「日本はただひたすら前を見ていればよかったのだから」
「今とはまた違った幸せの中にあったのですね」
「ただがむしゃらに動いて働いていた」
そうしていたというのだ。
「幸せになる為に。生きる為にな」

「それが幸せだったのですか」
「そう。それ自体が幸せだったのだ」
伊上は語った。
「それが今になってわかる」
「そうですね。思えば」
従者もだ。その時のことを思い出してだ。そうして言うのだった。
「あの頃は日本も幸せでした」
「私達もまた」
「まことに幸せでした」
二人で話していく。そのかつての頃のことをだ。
「今にして思えば」
「そういうことだ。幸せは後になってわかる」
また言うのだった。

第十一話　断ち切る剣その十五

「そういうものなのだ」
「後になってですね。本当に」
「その時は必死でわからない時がある」
それがだ。維新の頃だったというのだ。具体的には。
「周りも見えていなくな」
「そうでしたね。まことに」
「あの二人はどうか」
そしてだった。話が義正と真理のことになった。
「今は幸せを感じているのだろうか」
「おそらくは」
従者はだ。すぐに彼に話した。
「そうだと思います」
「そうか。それならいいが」
伊上もだ。その話を聞いてだった。
顔を綻ばさせて言った。そのうえでだった。
「では。その幸せがだ」
「これからも続くことをですね」
「幸せを築くことは難しい」
まずはだ。そのことを話したのだった。
「しかも築いてそれで終わりではない」
「それからもありますね」
「その通りだ。幸せを維持していく」
次にはだ。それがあるというのである。
「それもまた同じだけ難しいのだ」
「創業と守成ですね」
「その通りだ」
従者の言葉に微笑んで返す。

「国家でもそうだがな」
「何かを築き上げてそれを守っていくことは同じですね」
「同じだけ困難だ」
また話すのだった。そのことを話しながらだ。
伊上は己の頭の中であることを考えていた。それは。
「支那の過去の国でだ」
「過去のですか」
「そう、唐だ」
支那の歴史上において黄金時代とされる時代の一つだ。この王朝の頃にはシルクロードが栄え都長安は繁栄を極めた。多くの詩人も生まれた時代なのだ。
「あの王朝の皇帝で太宗という皇帝がいた」
「太宗ですか」
「名前を李世民という」
「それがその皇帝の名ですね」
「唐の第二代の皇帝だ」
名君として知られている。唐の基礎を築きそれを磐石にし民を安んじたというまさに教科書にあるが如き名君であったのだ。軍略も優れていた。
「あの皇帝の話であったのだ」
「その創業と守成の話がですね」
「それがあったのだ」
「そのどちらがということですか」
「最初は創業の方が困難とされた」
即ちだ。幸せを築くことがだ。
「しかし家臣達と話をしてそうではないとなったのだ」
「守成もですか」
「それもまた困難だとわかったのだ」
そのことには重臣の魏徴の影響が大きかった。太宗を諫めることにより彼の鏡ともなった人物である。稀代の名臣の一人である。

「維持することがどれだけ難しいかということでだ」
「確かに。今もですね」
「我々は明治維新で多くのものを築き上げた」
それがだ。まさに創業だった。
「しかしそれだけでなくだ」
「それに加えてですね」
「そうだ。今もこうしてそれを守っている」
維新でだ。築き上げたものをだというのだ。
「戦争もあったな」
「日清、そして日露ですね」
「とりわけ日露だった」
先の大戦のことよりもだ。そちらなのだった。
「日露戦争では。全てを賭けて戦ったが」
「あれも守成になるのですね」
「我々は日本を守る為に戦った」
その強大な露西亜とだ。そうしたのがその戦争だったのだ。

第十一話　断ち切る剣その十六

このことはだ。彼等の中では記憶に残って離れないことだった。まさにだ。

「あの戦争もまたなのだ」

「守成なのですね」

「そうなる。守成だ」

こう話すのだった。日露戦争のことも。

「幸せもまた然りだ」

「時には戦うこともあるのですね」

「ある」

その通りだというのだ。あるというのだ。

「時と場合によるがな」

「恋もまたですか」

「あの二人はその戦いに向かおうとしている」

二人のことを公にすること、それ自体がそうだというのだ。

「運命の戦いにな」

「この場合は幸せを築く為の戦いですね」

侍従はそれだと伊上に話した。

「そうなりますね」

「そうだな。そうなるな」

「そうですね」

「そういうことだ」

伊上もだ。その通りだというのだ。

「しかしそれだけではなくだ」

「その幸せを維持する為に」

「戦うことになるかも知れない」

「剣や銃を持たない戦いですね」

「それだけが戦いではない」

武力を用いた戦いだけではない。そうだというのだ。
「その他にもだ」
「心の戦いですね」
「この場合はそれだ」
「そうですね。旦那様もこれまで多くの戦いを経て来られましたね」
「刀で斬り合ったこともあれば銃弾の中を潜り抜けた」
幕末と維新だ。その頃は実に多くのことがあった。彼はその数多くの修羅場も潜り抜けてきたのだ。これは元老達の多くも同じである。
「戊辰戦争や西南戦争でもな」
「あの頃は何時死んでもおかしくなかったですね」
「しかし生き残った」
そうなったというのだ。
「しかし戦いはそれだけではなかった」
「政治でもですね」
「舌も使えば頭も使った」
そうしたものを全て使ってだ。戦ってきたというのだ。１０６
「心もだ」
「あのお二人は愛という幸せの為に」
「心で戦うのだ」
まさにだ。それだというのだ。
「二人はな」
「そして旦那様はそのお二人に」
「力を貸させてもらう」
「旦那様のお力を」
「その二人の戦いに」
幸せになりだ。それを維持する戦いにだというのだ。
「そうさせてもらおう」
「いいことです」
「私はこれまで多くのものを見てきた」

人だけではないというのだ。
「そしてそういった中でもだ。あの二人はだ」
「素晴しい方々ですね」
「実にだ。素晴しい」
「だからこそ幸せになってもらいたい」
「両家の対立も終わるのだからな」
こんな話をしてだ。伊上もだ。
二人に対してだ。温かい心を向けていた。そしてその温かい心でだ。二人の為に動くのだった。彼もそうした意味で戦いを選んだのだ。

第十一話　完

２０１１・５・１７

第十二話　公の場でその一

第十二話　公の場で

舞踏会の準備が進められていた。

伊上はだ。己が用意したその場でだ。周りの者に話をしていた。

場は今用意されている最中だ。その場において彼は周りに話すのだった。

「場は華やかにだ」

「華やかにですね」

「飾るのですね」

「色は白だ」

その飾る色についても話した。

「白で統一してくれ」

「白ですか」

「色はそれですか」

「テーブルかけもカーテンも他のものもだ」

「あらゆるものをですか」

「場全体をですか」

「そうだ。白で飾ってくれ」

こうだ。伊上は話していく。話をしながら周囲を見回してだ。場の点検を怠らない。実に細部までだ。目をやって話をするのだった。

「全体的な雰囲気としてはだ」

「雰囲気としてはですか」

「どういったものに」

「結婚式だな」

それだというのだ。

「結婚式の会場の様にするのだ」

「結婚式場ですか」

「そうした感じにされるのですか」

「舞踏会よりもそれだ」
また話す彼だった。
「結婚式場、それも西洋のもので頼む」
「わかりました。それでは」
「その様に」
周りも彼の言葉に応える。それでいいとしてだ。
あらためてだ。伊上は周りにこうも話した。
「それとだが」
「はい、次は音楽ですね」
「それはどうされますか」
「華やかな音楽がいい」
音楽はそれだというのだ。
「そうだな。それもだ」
「結婚式の感じですか」
「そうした感じですか」
「実際に婚礼を祝う音楽を中心に頼む」
具体的にだ。そうしたものでとも周りに話す。
「舞踏の音楽よりもそれだ」
「何かそれですと」
「最早舞踏会ではないですが」
「それでもですか」
「そうされるのですか」
「それで頼む」
強い声でだ。周囲に話す。
「本当にな」
「わかりました。それではです」
「今回の舞台はそうさせてもらいます」
「旦那様のお話通り」
こう応える周囲だった。そうしてだ。
そのうえでだ。伊上はだ。

これまでよりも真剣な顔になってだ。話したのだった。
「招待するのはだ」
「はい、招待する方々は」
「どういった方々でしょうか」
周りもだ。伊上のその言葉に問う。舞台は器だ。そこに入るものが何かも大事だ。それでだ。彼等は尋ねずにはいられなかった。
「その方々は」
「まずは八条家だ」
この家だとだ。伊上は言った。
「八条家とその縁者をだ」
「御呼びしますか」
「そうされますか」
「そしてだ」
さらにだとだ。伊上は続けた。

第十二話　公の場でその二

そのもう一方もだ。彼はあえて言った。
「白杜家とその縁者もだ」
「白杜家ですか？」
「あの家ですか」
「あの、白杜家ですか」
周りは白杜家と聞いて、八条家の名前を聞いたうえでのことだ。驚きを隠せなかった。それで唖然としてだ。伊上に対して問うのだった。
「まさか。あの両家を同時にですか」
「同じ場所に御呼びするのですか」
「そうされるのですか」
「そうだ。そうする」
伊上は驚く彼等にだ。確かな声で述べた。
「そうするのだ」
「あの、しかしそれは」
「幾ら何でも無謀では」
「私もそう思います」
「騒動を引き起こす様なものです」
「少なくともです」
舞踏会がどうなってしまうのか。周囲は必死の顔で伊上に話す。
「場はかなり険悪なものになります」
「完全に二つに分かれてしまいます」
「宴を楽しむどころではありません」
「とてもです」
「普通で考えればそうだ」
常識で考えればだとだ。伊上も言った。
「確かに場はそうなる」

「それを御存知で何故ですか」
「その様なことをされるのですか」
「そうだ。それでもだ」
伊上は言うのだった。
「双方を呼ぶ」
「八条家も白杜家も」
「御互いをですか」
「あの両家を」
「見ているといい」
伊上は自信に満ちた声で述べた。
「これは上手くいく」
「成功するのですか」
「この宴は」
「そうだ、成功する」
その声での言葉だった。
「確実にだ」
「左様ですか。そこまで仰るのなら」
「我々もそれに従わさせてもらいます」
「そうしてそのうえで」
「この度の舞踏会はです」
「準備を進めさせてもらいます」
「そうしてくれ」
伊上の今度の言葉は簡潔だった。
「結婚式会場の様にするのだ」
「西洋のそれに」
「あの感じで」
「舞踏会ならばそれだ」
まさにだ。西洋だというのだ。だからその模すのも西洋の結婚式だというのだ。
「それにする」

「畏まりました。それではです」
「これからもその様に進めさせてもらいます」
「西洋の結婚式のイメージで」
「それで飾り音楽を選ばさせてもらいます」
「音楽ではいい曲があるな」
ここでこうも話す伊上だった。
「あのワーグナーのだ」
「独逸のあの音楽家ですか」
「ロマン派の」
欧州のロマン派と日本の浪漫派は違う。ただ文字が違うだけではないのだ。そこにあるものもだ。全く違っているのだ。ロマンと浪漫はだ。
「その音楽家の音楽ですか」
「それを選ばれるのですか」
「そのこともまた」
「そうだ。そのワーグナーのだ」
どの曲なのかもだ。彼は話した。
「ローエングリンだ」
「あの白銀の騎士ですか」
働いている者の一人が言った。

第十二話　公の場でその三

「あのオペラからといいますと」
「第三幕のあの結婚の音楽だ」
まさにだ。それだというのだ。
「あの曲も頼む」
「あの曲を入れられるべきとは」
それを聞いてだ。彼等はこう話すのだった。
「また冒険ですね」
「冒険なのか」
「はい、そう思います」
まさにそれだとだ。周りも話す。
「ワーグナーはまだ我が国に定着していません」
「しかしあえてワーグナー氏を選ばれるとは」
「まさに冒険です」
「そうとしか言い様がありません」
「そうだな。こうした場では考えられんな」
それはだ。伊上自身も認めた。
「ワーグナーはな」
「しかしそれでもですか」
「あえてワーグナーを」
「そしてその音楽を」
「奏でてもらう。食事はだ」
次にはだ。この話だった。
「それだが」
「はい、食事は」
「どうされますか」
「そちらは」
「それもだ」

食事もだというのだった。
「結婚式を祝う様なものをだ」
「そうした御馳走を用意するのですね」
「この度の舞踏会では」
「そうしたもので」
「やはり西洋だ」
ここでもだ。それだというのだ。西洋だとだ。
「その感じでいく」
「では酒は葡萄酒ですね」
「それですね」
「赤も白も用意しておいてもらう」
その葡萄酒についてもだ。彼は話した。
「そうしてもらう」
「畏まりました」
「では」
周りも彼のその言葉に応える。そうしてだった。
彼は準備を進めていたのだった。そのうえでだ。
招待状も用意する。それは己の屋敷で行った。使用人達がその彼に言う。
「あの、それで」
「双方に出すが」
「双方の家にですね」
「そうだ。出す」
そうするというのだ。
「前に言った通りな」
「賭けですね」
「確実に勝つ賭けだ」
それだともだ。彼は話した。
「間違いなくだ」
「勝ちますか」

「成功する」
今度はこう言った。
「成功することだ」
「成功しますね」
「そうだ。前に言った通りだ」
そうだというのだ。
「だからだ」
「左様ですか。では」
「楽しみだ」
また言う伊上だった。
「実にな」
「ううむ、そうなのですか」
「楽しみですか」
「そう仰るのですか」
「その時になればわかる」
思わせぶりな言葉をだ。それも話すのだった。
「君達もな」
「私達もですか」
「その時になればわかるのですか」
「ではです」
伊上のその確かな言葉を聞いてだ。彼等も頷いた。

第十二話　公の場でその四

そしてそのうえでだ。こう言うのであった。
「その御言葉見させてもらいます」
「どうなっていくのか」
「それもまた」
「そうさせてもらいます」
「その様にな。ではこのまま場を整えてくれ」
あらためて命じてだ。伊上は細かい場所まで見ていった。
それをしていってであった。彼も彼の果たすべきことをしていくのであった。
そうして舞台を整えていくのであった。これが彼が今することだった。
真理はだ。自宅において招待状を受け取りだ。
ベランダでそれを見てだ。まずは穏やかな微笑みを見せた。その彼女を見てだ。
喜久子と麻実子はだ。こんなことを言った。
「あの招待状ですね」
「それですね」
「御二人のところにも届いていたのですか」
「はい、今朝です」
「届きました」
そうだとだ。二人も真理に答えた。
「伊上さんから直々に来ました」
「招待状がです」
「そうなのですか」
真理もそれを聞いてだ。あらためて言った。
「御二人もまた」
「ただの招待状でしょうか」

「何か違うような気もします」
二人はここでだ。こんなことを言った。
「普通の招待状にしては紙の質がいいですし」
「伊神先生の直筆ですし」
彼はだ。この話ではそこまでしていたのだ。
そういったものを見てだ。二人は今話すのだった。
「そこまでの舞踏会なのでしょうか」
「普通の舞踏会ではないのでしょうか」
「私はそれは」
それはだ。あえてだった。
真理は隠してだ。今はこう言うのであった。
「わかりませんが」
「真理さんもですか」
「おわかりにはなられませんか」
「はい。ただ」
しかしだ。真理はこうは言いはした。
「先生にも確かなお考えがあります」
「それで見事な紙を使われ」
「直筆だというのですね」
「そう思います。招待状はです」
その招待状はどうなのか。真理はそのことも話した。
「私以外にもです」
「私以外といいますと」
「どうなのでしょうか」
「お父様にお母様」
彼女の両親、その白杜家の総帥と妻にもだというのだ。
「御二人にも送られていますし」
「やはり直筆で」
「それでなのですね」
「そうです。お兄様やお姉様達にも」

真理には兄と姉がいるのだ。一番上に兄がいてそれから姉二人だ。
真理は四人兄妹の末っ子になるのだ。末娘というわけなのだ。
「直筆で送られています」
「左様ですか。白杜家の方々にはですか」
「個別に書かれているのですか」
二人は真理の言葉からそのことを知った。
「それはまたかなり丁寧ですね」
「白杜家の方々が主な招待客の様な」
「そうですね。そうした感じですね」
ここでも真実を隠して答える真理だった。
「これは」
「ううむ、妙ですね」
「そうですね」
真理の話を聞いてだ。喜久子と麻実子は。
それぞれ顔を見合わせてだ。こう話すのだった。
「白杜家に何かあるのでしょうか」
「そうなのでしょうか」
「私もそれはわかりません」
また隠して話す真理だった。

第十二話　公の場でその五

「ですが。先生に何かお考えがあることはです」
「それは確かですね」
「伊上先生に」
「そうだと思います。それでなのですが」
ここまで話してだった。真理はだ。
まずは喜久子にだ。あらためてこう話した。
「喜久子さんは」
「はい？」
「お見合いをされたそうですね」
「あっ、はい」
喜久子はだ。真理のその話に応えてだ。そうして言うのだった。
「先週に。海軍の方と」
「海軍のですか」
「海軍中尉の方です」
この当時海軍将校はまさにだ。良家に相応しい相手だと考えられていた。それだけの地位と名誉のある立場にあったのである。
「その方とです」
「そうなのですね」
「とても素敵な方でした」
喜久子は頬を赤らめさせて述べた。
「私には勿体無いまでの」
こうまで言う喜久子だった。
「とても立派な方です」
「まさに海軍に相応しい方なのですね」
「そうですね。そこまでの方です」
そのだ。海軍にだというのだ。
「御人柄も素晴しくて」

「海軍の方も陸軍の方もそうですね」
ここでだ。麻実子は陸軍のことも話した。
「軍の方はどなたも」
「そうですね。どなたも立派です」
喜久子もだ。軍人達については笑顔でこう述べた。
「立派で。優秀な方ばかりです」
「そうした方でなければですね」
真理もここで軍人について話した。
「軍人になれませんし」
「その方もそうです」
麻実子は微笑んで話す。その伴侶となる相手のことをだ。
「何もかもが本当に立派な方で」
「麻実子さんはその方と幸せになられるのですね」
真理は微笑んで彼女にこう話した。
「そうなられますね」
「そうなるようにしたいです」
努力をする、これが麻実子の返答だった。
「是非共」
「そうですね。そうして」
「はい、幸せになることを目指します」
これが真理の言葉だった。
「二人で」
「そうですよね。二人ですね」
真理はだ。麻実子のその言葉にまた述べた。
「人は一人では幸せになるのには限りはありますね」
「あっ、そうですね」
「言われてみれば」
麻実子だけでなく喜久子もだ。真理の今の言葉に応える。
ただその顔は少しきょとんとした顔になっていた。その顔での応えだった。

「一人で何かをしても限りがありますね」
「けれど二人ならですね」
「はい、二人なら」
真理は二人にさらに話していく。気付かないうえで。
「その幸せは何処までも深く多く強いものになります」
「そうなるというのですね」
「真理さんは」
「はい」
にこやかに二人に述べた。
「私はそう思います」
「だからこそ恋をするのはいい」
「結ばれるのはいいことなのですね」
「そうです。結ばれてもそれからも」
それで終わらない。真理もさらに話す。

第十二話　公の場でその六

「恋というものは続くのだと思います」
「結婚して夫婦になってもですか」
喜久子は真理の話を聞いたうえで彼女に問うた。
「それでも恋は続くのですか」
「私はそう思います。何故ならです」
「何故なら？」
「結婚しても男女ですね」
そのだ。男女ならばだというのだ。
「男女ならです。恋はあるものですから」
「例え夫婦だとしても」
「夫婦は男女です」
夫婦というものをその関係において話す真理だった。そして彼女のその言葉を喜久子は聞くのだった。当然麻実子もである。
「ですから恋愛はです」
「結婚してからも続きますね」
「絆ができてそれはさらに」
「さらに？」
「深くなるものだと思います」
それがだ。夫婦の恋愛だというのだ。
「生涯を共に過ごすだけのです」
「そうなのですか」
ここまで聞いてだ。喜久子はだ。
深い思慮を宿らせた顔になってだ。真理に答えたのだった。
「では私はこれからあの方と」
「私もですね」
見合いをした喜久子だけでなくだ。海軍中尉と結ばれる麻実子も言った。

「生涯に笑って恋愛をしていきますか」
「そうなっていくのですか」
「そうなると思います。そして」
話をしているうちに心が上気してだ。ついだった。
真理はだ。こんなことを言ってしまった。
「私も」
「私も？」
「私もですか」
「はい、私もです」
真理はそのまま言っていく。やはり気付いていない。
「結ばれそうなります」
「幸せになられますか」
「真理さんの配慮となられる方と」
「そうなります」
義正のことをだ。頭の中に思い浮かべながらの言葉だ。
「私もまた」
「そうなるといいすね」
「真理さんもまた」
人生経験がまだ少ないせいだろうか。喜久子と麻実子は真理にとって幸いなことに彼女の言葉にあるものに気付きはしなかった。
そうして純粋にだ。彼女の言葉を受けて話すのだった。
「相応しい方と共に」
「幸せを育んでいかれると」
「そうなりたいです」
笑顔で話すのであった。真理はさらに。
「もうすぐ」
「私達もその年齢ですし」
「それならばですね」
気付かないまま応える二人だった。
「三人で幸せになりましょう」

「そうなりましょう」
「はい。そうなりたいです」
友人達の言葉を受けて真理は微笑んだ。その微笑みの中でだ。
ふとだった。咳き込んだ。それは何度か続いた。喜久子と麻実子はその彼女の咳を見てだ。少しいぶかしんだ顔になって尋ねた。
「風邪ですか？」
「どうされたのですか？」
「少し。胸がむせたような」
真理はだ。こう二人に答えた。
「それでつい」
「そうですか。風邪ではないのですね」
「むせられただけですね」
「はい、それだけです」
こう答えるのであった。このことに嘘はない。

第十二話　公の場でその七

しかしその咳について殆んど考えずにだ。真理はこんなことを話した。

「どうも最近時々です」

「むせられるのですか」

「それも急に」

「はい、時々ですが」

そうだというのだ。

「そうなります」

「何かよくわかりませんが」

「御大事に」

こう言う二人だった。

「まずは健康あってですしね」

「本当に何ごとも」

「そうですね」

真理は二人の親切に頷いた。

「それでは」

「風邪はです」

「万病の元です」

二人は今度はこの言葉を告げた。

「ですから今のうちにです」

「御養生を」

「そうですね。それではです」

それを受けてだ。真理は話した。

「今日はよく休むことにします」

「はい、そうすることです」

「それがいいです」

こう話すのだった。こうだ。

「では御身体をです」
「くれぐれも」
こんな話をしたのだった。これが二人だった。
そしてだ。その話をしてからだ。
真理はだ。二人が帰ってから婆やにだ。こう話すのだった。
「あの、婆や」
「はい？」
「若しもね」
こう前置きしてからだ。婆やに話すのである。
「私が結婚するとしたら」
「それはいいことですね」
真理の結婚と聞いてだ。婆やは笑顔で応えた。
「是非共です」
「結婚するべきですね」
「結婚は人生のはじまりです」
こうだ。そのにこやかな笑顔で話すのだ。
「新しい人生のはじまりです」
「新しいですか」
「私も最近本を読むようになったのですが」
「本を？」
「はい、本をです」
読むようになったというのだ。
「読むようになりました」
「そうですか」
「はい、そうです」
それでだというのだ。真理はだ。
「まあ小説ですが」
「小説ですね」
「その本を読んでいて。武者小路実篤ですが」
「あっ、あの人ですか」

「この歳でと思いますが」
己の年齢も話しはした。
「それでも。読んでみると面白いもので」
「それでなのですね」
「はい、あの作家の恋愛はいいものですね」
武者小路の書く恋愛小説がだ。婆やのお気に入りになったというのだ。
「その中で。人は恋愛によってです」
「それによってですか」
「人は変わるものだということに気付きました」
「そうなのですね」
「はい、恋愛によってです」
それによってだというのだ。

第十二話　公の場でその八

「思えば私も主人と正式に結婚してからです」
「そこから変わったのですね」
「はい、変わりました」
まさにそうだというのだ。
「そのことがわかりました」
「そうですね。恋愛、そして結婚は」
「人を新しくさせます」
こう真理に話す。
「お嬢様もそうなられたいのですね」
「できれば。それでなのですが」
「それで？」
「婆やは。その武者小路実篤の小説にある様な」
その彼の小説にあるようなだというのだ。
「ああした恋愛についてはどう思われるでしょうか」
「二人の人が一人の異性を愛しそのうえで動く小説でしょうか」
「いえ、そういったものではなく」
「ではどういう小説ですか？」
「例えばです」
また前置きしてだ。真理は婆やに話した。
「カップルがです」
「カップルがですか」
「御互いに敵対する関係にある両家のです」
その二つの家のだというのだ。
「男女が互いに愛し合う様になって」
「それは武者小路というよりは」
それよりもだというのだ。
「シェークスピアですね」

「あの作家になりますか」
「私は英吉利や仏蘭西の本には疎いですが」
それでもだとだ。婆やは話すのだ。
「それで聞いたことはありますので」
「シェークスピアになりますか」
「そう思いますが」
「そうですね」
婆やに言われてだ。真理もそう考えた。
そのうえでだ。こう返すのだった。
「そうなりますね」
「そうですよね。確かに」
「はい、確かに」
二人で言い合う。
「お互いにですね」
「そうなりますね」
こんな話をした。そしてだ。
真理は婆やの話を受けてからだ。こう言うのだった。
「ではです。あらためて」
「そのシェークスピアですね」
「はい、その互いに対立する両家の者同士の恋愛は」
「それもまたいいと思います」
「いいのね」
「はい」
婆やはにこりと笑って真理の言葉に頷いてみせた。
「私はそう」
「思います」
「そうなのですね。婆やも」
「はい、そうしたことで不幸になることなぞ間違っています」
実際にこう話す婆やだった。
「あの。ロミオとジュリエットですね」

「そうです。ロミオとジュリエットです」
それだった。その話は。
「それは」
「あのお話は私も知っていますが」
「どう考えているの？」
「間違っています」
ぴしゃりとしてだ。婆やは言った。
そしてそのうえでだ。この話を出すのであった。
「歌舞伎ですが」
「歌舞伎の？」
「本朝廿考です」
歌舞伎の名作の一つだ。主人公の八重垣姫で人気の題目だ。
「あの作品では二人は結ばれますね」
「そうですね。そうなりますね」
「あれが正しいのです」
婆やは真理に対して言い切った。そうしてみせたのだ。
「ロミオとジュリエットは間違っています」
「幸せになるべきですか」
「二人が愛し合うのなら」
それならばだ。どうかというのだ。

第十二話　公の場でその九

「その二人が結ばれなくてどうしますか」
「それがあるべき姿なのですね」
「そう思います。少なくとも我が国ではです」
「昔からそう考えられていましたか」
「障害があれば乗り越える」
強い言葉であった。
「そして結ばれるべきなのです」
「ですか。それでは」
「お嬢様もロミオとジュリエットよりもです」
「それよりもですね」
「はい、本朝です」
そちらだというのだ。
「歌舞伎であるべきなのです」
「毅然として前を向いてですか」
「そのうえで幸せを掴まれるべきなのです」
「そうあるべきですか」
「はい、そうあるべきです」
まさにその通りだとだ。婆やの口調は変わらない。
その話をしてだ。彼は話した。
「では」
「それでは」
「私もそうします」
真理は言い切った。確かにだ。
それを話してだ。彼女はだ。
立ち上がった。心はだ。
その立ち上がった心でだ。婆やを見てであった。
「八重垣姫になります」

「お嬢様」
婆やはこう言ってみせた真理にだ。優しい笑顔で話してきた。
「婆やはいつもお嬢様と一緒でしたね」
「そうですね。私が物心ついた時から」
「その時から。そして今も」
「今もですね」
「お嬢様の味方です」
こう言うのである。
「それは変わりませんから」
「そう言ってくれるのですね」
「言葉だけではありませんよ」
優しい声でだ。真理に言うのである。
「それはもう」
「そうですね。婆やは」
真理自身これまでの婆やとのことを思い出した。それは彼女が幼い頃からの記憶である。そのことを思い出して言うのであった。
「私に。何かあれば」
「私にとってお嬢様はです」
「私は？」
「こう申し上げては不遜でしょうが」
それでもだとだ。婆やはだ。真理にあえて話すのだった。
「私にとっては孫娘も同じです」
「孫ですか」
「私にも孫は多くいます」
子供にも恵まれだ。孫にもだというのだ。
「しかしそれだけではなくです」
「私もですか」
「お嬢様もおられます」
まさにだ。彼女もだというのだ。
「お嬢様は私にとってそれだけの方です」

「そうですか。私は」
「こう申し上げては僭越でしょうか」
「いえ」
そうではないとだ。真理は笑顔で婆やの言葉を否定して。
そのうえでだ。その言葉を受け入れたのだった。
「私にとっても婆やはです」
「私は」
「もう一人のお婆様です」
そうだというのだ。彼女にとってはそこまでの相手だというのだ。

第十二話　公の場でその十

「私にはお婆様が三人いるということになりますね」
「そうなりますか」
「はい、同じですね」
こう婆やに話す。
「私達は」
「そうですね。血はつながっていなくとも」
「心で。祖母と孫になっていますね」
「そうしたことがあってもいいのですね」
「いいと。そう思います」
真理は話してだった。その話の中でだった。
二人はお互いの絆も確かめ合うのだった。それが今の真理だった。
絆を確めてだ。彼女はだ。
「では。今度の舞踏会ですが」
「あの伊上先生の開かれるですね」
「その舞踏会に出たいと思います」
舞踏会の話になった。その婆やのだ。
「是非共です」
「参加されるべきですね」
「そう思いますか？」
「詳しいことはわかりませんが」
それでもだとだ。真理はまたしても前置きしてから話した。
「それでも今度の舞踏会はお嬢様にとって大事なものですね」
「はい、そうです」
まさにだ。その通りだと答える真理だった。
「そうなります」
「それではです」
「八重垣姫になって」

「そのうえで向かわれて下さい」
真理のだ。その背中を押しての言葉だった。
「そうして下さい」
「有り難う、婆や」
真理は背中を押してくれたその婆やに礼を述べた。
そのうえだった。彼女は今ジュリエットにはなるまいと思った。
そのうえでだ。このことをだった。喫茶店、あのマジックにおいてだ。
義正に話す。その歌舞伎のことをだ。話を聞いた義正はすぐにこう言った。
「では私はです」
「はい、貴方は」
「真理さんが八重垣姫ならばです」
「御相手のあのですね」
「はい、勝頼になります」
彼になるというのだ。
「武田勝頼になります」
「そうなられますか？」
「なります」
頬笑み真理のその整った顔を見たうえでの断言だった。
「そうなります」
「ロミオではありませんね」
「はい、ロミオにはなりません」
それは決してだとだ。彼も言うのだった。
「何があろうともです」
「そうですね。そうなられますね」
「最早賽は投げられていますし」
「舞踏会のその場で」
「私達が私達自身のことを話し」
「そのうえでなるのですね」

何になるのか。ロミオとジュリエットではないならばだ。
「武田勝頼と八重垣姫に」
「そうなりましょう。二人で」
「そうですね。敵対する者同士であっても」
それでもなのだった。
「幸せになれるのですね」
「その例えは身近にありましたね」
二人もようやく気付いたことなのだった。
そのことを話してだった。二人は同じものをその心に宿したのだった。
そのうえでだ。義正が言った。
「どうやら私達は遠くを見過ぎてもいたようですね」
「遠くをですか」
「はい、シェークスピアを」
具体的にはこの英吉利の戯曲家の作品だった。

第十二話　公の場でその十一

「彼や近頃の文学ばかりを観て」
「身近なものを観ていませんでしたか」
「歌舞伎をです」
それがだ。身近なものだというのだ。
「私達の傍に古くからあるそれを」
「観ていませんでしたか」
「気付かなかった、いや忘れていたと言うべきか」
「何につけてもその身近なものを観ていなかった」
「すぐ傍にあったというのに」
日本にいる二人だ。まさにすぐ傍にだった。
その幸せになる答えがあったのだ。それがわかったのだ。
義正も真理も気付いてだ。二人一緒にだ。
自然と微笑み。また話すのだった。
「二人は前に出て幸せになっていますね」
「はい、なっています」
「私達もそうしてですね」
「幸せになりましょう」
「ではやはりです」
「舞踏会で何としても」
二人にとって前に進む、それは即ちそういうことだった。八重垣姫が兜にある狐に従いそうしたのと同じくだ。舞踏会においてそうするつもりだったのだ。
そのことを話した。するとだ。
ふと話を一旦収めた二人の耳にだ。あるものが入って来た。その曲は。
「これは」
「日本の曲ですね」

「はい、間違いありません」
義正は言った。そのソプラノの曲を聴いてだ。
歌は清らかで伸びる感じだ。その曲を聴いて彼は言った。
「隅田川ですね」
「春のうららのですか」
「東京の川ですね」
義正はまた言う。
「東京のことは詳しくないですが」
「それでも。何か」
「歌を聴いているだけで」
「はい、清らかな歌ですね」
「日本の歌です。近代の歌ですね」
そのソプラノからわかった。しかしだ。
義正はだ。真理にこんなことを話したのだった。
「しかしそれでもですね」
「それでも？」
「歌っているその隅田川は江戸に昔からあるものです」
江戸の象徴とも言える川だ。それは江戸という町ができてからだ。
そうなっているのだ。
その川についてもだ。義正は話すのだった。
「この川においてもですね」
「日本があるのですね」
「昔の日本が。これは近代の歌ですが」
「歌われているのは日本ですか」
「日本です」
この場合は近代も西洋のものも関係なかった。日本、その勝頼と八重垣姫のいる日本だというのだ。それであるというのである。
「西洋や近代は確かにいいですが」
「日本もまたですね」
「ここで私達に答えを教えてくれたものです」

その日本なのだった。
「それなのですね」
「この曲ですが」
「隅田川はですね」
「これまではただ何となく聴いていました」
知ってはいたがだ。それだけだったという真理だった。
「特に思うことはなかったです」
「では今は」
「それが変わりました」
そうなったというのだ。
「日本がある歌ですか」
「そうです。日本です」
「この曲ですが」
義正はまた話を変えてきた。隅田川を聴きながら。

第十二話　公の場でその十二

「滝廉太郎の曲です」
「そうですね。あの音楽家の」
「素晴しい音楽家です。しかしです」
「はい、夭折していますね」
「残念なことに」
滝廉太郎は労咳で死んでいる。これを話すとだ。
義正はだ。残念さを浮かべる顔で真理に述べた。
「あの病によってどれだけの人が死んだことか」
「脚気と同じくですね」
「脚気も。労咳も」
その二つの病は共にだというのだ。
「忌むべきものですね」
「全くですね」
「陸軍ではです」
ここで義正はだ。陸軍の話をするのだった。
「脚気がかなり流行ったそうですね」
「そうなのですか」
「はい、先の二つの戦争ですが」
「日清と日露ですね」
「その二つの戦争では脚気で随分と困ったそうです」
「脚気よりもですか」
「そうです。どうやら食生活にあったようで」
義正は話した。その陸軍の脚気のことをだ。
「白米ばかり食べているとそうなるようです」
「脚気になるのですか」
「はい、どうやら」
こう話すのだった。真理にだ。

「白米ばかりもよくないようです」
「白米ばかりだと脚気になるのですか」
「海軍の方に御聞きしました」
今度は海軍の話が出た。陸軍と共に日本を護る両輪の彼等もだ。
「白米ばかりだとです。かえってよくないそうで」
「不思議ですね。脚気が食べ物によってなるとは」
「私も最初信じられませんでした」
そのだ。脚気が食事からなるものだということがだ。
「しかし実際にです」
「陸軍では白米ですか」
「それに対して海軍は麦です」
「麦飯ですか」
「それを主に食べているそうです」
これは実際の話だ。海軍も最初は白米だったがそれを変えたのだ。その麦飯に替えるとだ。脚気がなくなったからだ。それでそうしたのだ。
「その海軍には脚気がなくです」
「陸軍にはあった」
「特に将校の方々はです」
軍には将校と下士官、兵士がある。そのだ。将校ならばだというのだ。
「最初から脚気にはなられませんでした」
「将校の方はですか」
「海軍のです」
ここにだ。何かあるのではないかとだ。海軍では考えられたのだ。
「海軍の将校の方は主に洋食を食べられています」
「洋食といえばパンですね」
「はい、パンです」
そのパンといえばだった。
「パンは麦ですね」

「それでは麦は」
「脚気にいいのは間違いないようです」
そのだ。脚気にはというのだ。
「真理さんはどうでしょうか。パンは」
「食べます」
それはだ。食べているというのだ。
「それに洋食もです」
「召し上がられていますか」
「そのせいか脚気になったことはありません」
こう義正に話すのだった。

第十二話　公の場でその十三

「そういうことなのですね」
「おそらくはそうかと」
「脚気は食事からですか」
「多くの病がそれにあるようですね」
「人は食べなければ死にますし」
「支那では医食同源という言葉がありますね」
義正は今度はこの国の話をした。この時代においてもだ。支那と日本は深い関係にあった。切れるような縁ではないというのである。
「ですから。身体によいものを食べることがです」
「大事ですね」
「そうなりますね。ではこれからは」
「身体によいものを食べていく」
「そうするべきですね」
義正は穏やかな笑みで真理に話した。
「それが身体の為になります」
「わかりました。では白米だけでなく」
「麦も食べて」
「これからは今以上にそうしていきます」
「そうされるべきです。では今は」
「今は」
「珈琲を楽しみましょう」
今はだ。それだという義正だった。
「そうされましょう」
「そうですね。珈琲ですね」
「珈琲もです」
義正は珈琲の話もだ。笑顔でするのだった。
「飲んでいると何かが違ってきますね」

「目が覚めますね」
「眠い時に飲むととりわけいいです」
それが珈琲であった。そうした意味では茶よりもいいというのだ。
その話をしてだ。彼は実際にその珈琲を飲みだ。真理に話した。
「そして飲んでいるだけ」
「それだけでなのですか」
「心がすみやかになります」
「そうですね。珈琲は不思議ですね」
「全くです」
こうした話をしながらだった。二人は珈琲を楽しみこれからのことも考えていくのだった。そして遂にその日が来たのであった。
舞踏会に行く前にだ。真理にだ。まずは父が話してきた。
「準備はできたのか？」
「はい」
すぐに答える真理だった。彼女は既にドレスに身を包んでいる。純白の一点の汚れもないドレスにだ。その身を包んでいるのだった。
そのドレス姿でだ。彼女は父に話した。
「今すぐにでも」
「そうか。ならいい」
「それにしても」
ここでだ。彼女の母も言ってきた。
「真理がこんなに早いなんて」
「早いでしょうか」
「いつも着替えるのは遅いではないですか」
娘にこのことを話すのだった。

第十二話　公の場でその十四

「それなのに今日は」
「確かに早いな」
父もそのことを言ってきた。
「普段よりもな」
「そうですか」
「うむ、早い」
「いつもよりずっとです」
「何かあるのか？」
父は末娘に問うた。
「それでは」
「あっ、それは」
察せられてると思ってだ。真理は隠した。
それを隠してからだ。彼女はこう両親に話した。
「何でもありません」
「何もないか」
「そうなのですね」
「少し。御馳走を食べたいと思いまして」
気恥ずかしそうな笑みでだ。こう話すのだった。
「それで」
「何だ、それでか」
「それでなのですね」
「意地汚いとは思いますが」
それでもだというのだ。事実を隠しての言葉だった。
「それでも」
「ははは、真理はまだ子供だな」
「そうですね」
両親はそんな真理の言葉を聞いてだ。優しい笑みで言うのだった。

「料理を楽しみにするとはな」
「音楽かと思ったのですが」
「音楽も好きですが」
それは否定しない。しかしそれでも真実を隠してだ。
そのうえでだ。両親に話すのだった。
「それでもです。私は」
「まあいい。楽しみがあるならな」
「それならそれでね」
「それでいいのですね」
「仕方ない。真理はまだ子供か」
「それならです」
両親はそんな末娘をよしとしてだ。そのうえでだった。
「では他の子達もだな」
「幸い皆屋敷にいますし」
その兄と姉達もだ。今は屋敷にいるというのだ。
そのことを述べてだ。彼等は一家でだ。
舞踏会に向かうのだった。真理は舞踏会に向かうその車の中で一人覚悟を決めていた。そしてそのうえでだ。その場に向かうのだった。

第十二話　完

２０１１・５・２５

第十三話　運命の告白その一

第十三話　運命の告白

義正はタキシードで舞踏会の場に来ていた。そこにはだ。
彼の二人の兄達も来ていた。義愛と義智もだ。二人もまたタキシードを着てそのうえで舞踏会に来ているのだ。二人はその場を見て義正に話した。
「少し変わった舞踏会の場だな」
「そう思わないか？」
「そうですね」
義正もだ。彼女のその言葉に応えて言う。
「白いですね」
「舞踏会というよりここは」
「そうですね」
二人の兄達はその場を見回しながら話していく。
「西洋の結婚式の様な」
「そうした場所ですが」
「はい。これはどうやら」
この場をこの様にしたのは誰か、そしてどうしてこうしたのかはわかっていた。それをわかってうえで兄達に対して話をするのだった。
「趣向を変えていますね」
「趣向を」
「それをか」
「ただ舞踏をするだけにしてもです」
兄達への話だ。
「いつもの様に金色で飾るみらびやかなものだけでは飽きてしまいますね」
「言われてみればそうだな」

「確かに。それは」
「はい、だからです」
それでだと話す義正だった。真実は察しているが今はそれを隠して兄達に話すのだった。
「伊上先生はこうした舞台にされたのでしょう」
「そうか。それでか」
「こうした場にしたのか」
「そうではないかと」
義正は真実を隠したままであった。
「ですがこの舞台もまた」
「そうだな。いいものだな」
「清らかだ」
兄達も末弟のその言葉に頷く。それでいいと頷いたのだった。
そしてだった。三人はだ。こんな話もした。今度は最初に義愛が言った。
「それにしても欧州は白が好きなのかな」
「白がですか」
「そんな気がした」
こう義智にも話すのである。
「今こうしてここにいるとだ」
「確かに。今の舞台は西洋のものですし」
「そうですね。そう思われますか」
「白は清純そのもの」
義愛は話す。
「欧州ではそのイメージだからこうなったのだろうか」
「ただ。白は」
「白は？」
「隠せません」
義智はここでこう言うのだった。
「隠せるものは何もありません」

「それが問題か」
「少しでも白くないもの。即ちです」
「邪心をだな」
「はい、それを抱けばです」
どうなるのか。義智が話すのはそのことだった。
「それはすぐに出ます」
「他の色なら絶対に出ないこともな」
「思えば。確かに白は清らかです」
義智もその清らかさは認めて話す。しかし彼はその清らかさにだ。
こう言い加えるのだった。
「ですが」
「その少しでも邪なものがか」
「それが加わり。やがては白でなくなる」
「そうなっていくか」
「人はそうしたものでもあるのではないでしょうか」
こう長兄に話すのだった。
「これは少し否定的な考えでしょうか」
「そうかも知れないな」
それは否定だとだ。義愛も話した。だが、だった。
彼もまただった。ここで言い加えたのだった。次弟と同じくだ。
「しかしそれはだ」
「それはですか」
「邪なものとだけは限らないのかもな」
己の言葉を変えもしてきた。否定的なものからだ。

第十三話　運命の告白その二

肯定的なものも入れてだ。それで話すのだった。
「そこに加わる色はだ」
「邪なものだけではなく」
「様々なものも加わるのではないだろうか」
今度はだ。義智だけではなく義正も見て話していた。
「いいものもな」
「いいものをですか」
「そうだ。含まれるのではないのか」
また言う彼だった。
「そうではないのか」
「では結婚はです」
そのことについてだ。義智は考えながら述べた。
「全てのはじまりなのですね」
「純白からはじまるか」
「そこからどうした色を付けていくのは」
「二人次第だ」
そのだ。二人次第だというのだった。
「結婚する二人次第だ」
「それが結婚ですか」
「そうだと考えるがな」
「ですね。言われてみれば」
義智は考える顔のままた話した。
「そうなりますね」
「義正もそう思うか」
ここまで話してだ。義愛はだ。
義正にもだ。尋ねるのだった。
「結婚はその全てのはじまりだと」

「そうですね。はじまりですね」
「そうだ。はじまりだ」
「二人の」
「人は一人では生きられないものだから」
結婚するまでは一人だ。だがそれは決して完全ではないというのだ。
「支那では陰陽だな」
「そのまま男女ですね」
「陽が男で陰が女でな」
「その二つが一つになってこそですね」
「完全だ」
義愛はこう義正に話す。
「そうなってからがはじまりなのではないか」
「そうですね。そして今はです」
「この舞踏会の場か」
「はじまりですね」
義正は言った。その舞踏会の白い世界を見ながらだ。
その白い世界には汚れはない。だがそれ以外のものもなかった。
それはこれから備わっていくものだとだ。義正は見ながら思うのだった。
そう思いながら長兄の話を聞き。そして言った。
「ではです」
「では？」
「今日からです」
無意識のうちに微笑んでだ。兄達に話していく。
「はじめます」
「？はじめる」
「はじめるとは」
はじめる話をしてもだった。今の末弟の言葉にはだ。
二人の兄達は目をしばたたかせた。そうして彼に問うのだった。

「結婚か？」
「それをなのか」
「あっ、いえ」
その失言に気付いてだ。またすぐにだった。
義正は訂正の言葉を入れた。入れずにいられなかった。
「何でもありません」
「何でもないか」
「そうなのか」
「はい、そうです」
何とかそれを繕ってからだ。彼は話すのだった。
「ただ。何でもはじまりがあって人は」
「二人で一人だ」
「それは確かだな」
「はい、そうですね」
内心胸を撫で下ろしながらの言葉だった。

第十三話　運命の告白その三

「まさに」
「そうだな。しかしな」
「今ここにいるのは」
義愛と義智は場を見回しながら眉を顰めさせもした。その白い世界にいるのはだ。
彼等だけがいるのではなかった。そこにはだった。
白杜家の面々もいた。その彼等を見て眉を顰めさせて話すのだった。
「これも伊上先生がなのだろうか」
「そうでしょうね」
義智はこう義愛に話した。
「何かを考えられて」
「いるのはいいのだが」
義愛は曇った顔のまま話していく。
「しかし我々が共にいるとな」
「はい。お互いに気まずくなってしまいます」
そのだ。両家の中の悪いさ故にだ。
「そこから厄介なことにならなければいいが」
「全くです。只でさえことあるごとに対立していますから」
「ここは無視するべきだな」
「はい、ここにいるのは私達だけです」
こう考えることにしたのだ。
「そういうことだ」
「白杜家の面々はいません」
二人で言っていく。
「御互いに無視していれば余計な対立も起こらない」
「それも手段の一つです」

こう話してだ。実際に白杜家の面々を無視することにした彼等だった。
だが義正はそんな二人を見て微妙な顔だった。そしてそれはだ。
真理も同じだった。彼女も家族を見ていた。その家族達は。
「参ったな」
「そうですね」
まず両親達がだ。こう話していた。
「我々だけではないのか」
「まさか八条家まで来ているなんて」
「しかも主だった家族が全ている」
父がこう言う。
「あの三兄弟もな」
「そうですね。八条家の三兄弟」
母はその彼等を見ていた。無論好意的な目ではない。
「外見はいいのですが」
「だが八条家だ」
「はい、あの家です」
そのこと自体が問題だというのだ。
「あの家の人間ですから」
「全く。先生も」
父もまた、だ。伊上のことを話した。
「何を考えておられるのか」
「それがわかりませんね」
「我等が和解や歩み寄りなぞ」
「考えられませんね」
「それはない」
完全な否定だった。
「絶対にな」
「それは有り得ない」
「そうですか」

話を聞いてだ。真理はだ。
残念そうな顔になった。そうなってしまった。
だが、だ。その真理にだ。今度はだ。兄と妹達が言ってきた。
「どうしたんだ、真理」
「急に顔が暗くなったけれど」
「何があったの？」
「いえ、別に」
何でもないとだ。真理もだった。
自分の心を今は隠してだ。兄と妹達に話した。
「何でもないです」
「だといいのだがな」
「最近ちょっと様子がおかしいし」
「不安になるから」
妹を気遣う顔でだ。三人は話すのだった。
「とにかくだ。八条家の面々は無視をしよう」
「こちらからもおかしな揉めごとは避けましょう」
「それがいいですわね」
「そうですね」
兄達の言葉を聞きながらだ。真理も頷いた。やはり本心は隠して。
そしてそのうえでだ。彼女は周りを見た。その白い世界をだ。
兄達もその白い舞踏会の場を見てだ。それぞれ話した。
「白い舞踏会の場か」
「何か趣向が違いますね」
「そうですね」
彼等もだ。そのことを感じているのだった。

第十三話　運命の告白その四

「華やかというよりは清らかだな」
「こうした舞踏会の場もあるのですか」
「はじめて見ました」
三人にとってもだ。はじめてのことだった。
息子達の話を聞いてだ。両親もだ。
考える顔になってだ。それで話すのだった。
「結婚式の場に似ているな」
「そうですね」
二人もこう捉えた。義正の兄達と同じことを感じていた。
しかもだ。働いている者達の服もだ。それもだった。
「全てが白か」
「タキシードではなくですか」
「いや、白いタキシードだな」
父が話した。
「それだな」
「白のですか」
「欧州ではあるのだ」
そのだ。白のタキシードもだというのだ。
「だからそれ自体はいいのだが。しかし」
「しかし？」
「白のタキシードは舞踏会の場では普通は着ない」
言うのはこのことだった。
「結婚式の場でだ」
「では今は」
「舞踏会ではないな」
こう妻に話した。
「やはり。結婚式だ」

「そうですね。ここまで白ばかりですと」
「何を考えておられるのか」
彼もだ。いぶかしむ顔になって言った。
「伊上先生のお考えがわからんな」
「あの方は生真面目な方ですが」
「生真面目というものではない」
彼と付き合いがあるからこそだ。言えてわかることだった。
「厳格とも言うべきな」
「そこまでの方ですね」
「作法があればそれを厳守される方だ」
そうした意味でだ。武士らしいと言えた。伊上は長州藩出身だ。
その時は藩士の家だったのだ。それが縁あって山縣の部下となったのである。
「しかし今回はだ」
「妙なのですね」
「やはりこうしたことはない」
彼はまた妻に言った。
「妙だな」
「そうなのですね」
「何かあるのだろうか」
いぶかしみながら話す。
「この舞踏会は」
「あるとすれば何でしょうか」
「そこまではわからないがだ」
しかしだ。それでもなのだった。
彼は明らかに察していた。この舞踏会には何かがある。そう察していたのだ。
そしてだ。当の伊上もだ。こう周りに話すのだった。
「これでいい」
「よいのですね」

「これで」
「そうだ。よくここまで舞台を整えてくれた」
微笑みさえ浮かべてだ。彼等に話す。
「これで一つの厄介な話が終わりだ」
「厄介な話がですか」
「終わりますか」
「そして幸せな話がはじまるのだ」
「幸せ！？」
「幸せといいうますと」
「これからわかる」
そのだ。幸せのことはだというのだ。

第十三話　運命の告白その五

「この場でな」
「幸せですか」
「それがですか」
「はじまるのですか」
「そうなのですか」
「厄介は話は終わらせるに限る」
伊上は言った。
「そして幸せな話はだ」
「はじめるべきですね」
「それに対して」
「そうだ。それが今なのだ」
こう言うのだった。
「そういうことだ」
「それでこうした場にされたのですか」
「白で統一されたのですか」
「そうだったのですか」
「そういうことだ。幸せをはじめるにはだ」
その色はだ。何かというのだった。
「白だ」
まさにだ。今この場の色だというのだ。
「そこからはじめてだ」
「さらにですか」
「あるのですね」
「あるからこうした」
伊上ははっきりと話した。
「なければしない」
「だからですか」

「それで今もこうして」
「ここにおられるのですね」
「そうだ。わしは見る」
彼もまただ。白で統一していた。白いタキシードを着てだ。そこにいた。
そしてそのうえでだ。彼は話すのだった。
「そのはじまりをな」
「はじまりですか」
「それをですか」
「見させてもらう。君達もじゃ」
周りにもだ。確かな声で話した。
「見てくれ。じっくりとな」
「何かはよくわかりませんが」
「それでもです」
周りの者達もだ。彼に応えてだった。
そのうえでだ。姿勢を正したうえで話すのだった。
「それを見させてもらいます」
「是非共」
「そうしてもらえるか」
伊上は周囲の言葉を受けてだ。笑顔になった。そしてそのうえでだ。今はそれぞれの家のところにいる二人を見守っているのだった。
舞踏会は華やかに行われている。その曲もだった。
「どの曲も何か」
「そうですね。これはです」
「何かが違いますね」
「全くですね」
こう話していくのだった。場にいる者達もだ。
「舞踏というよりは婚礼の」
「そうしたものを祝う曲ですね」
「そうした曲ばかりですが」

「妙な感じですね」
ワルツやそうしたものではなくだった。そうした曲だからだ。
彼等もだ。首を傾げているのだった。その中でだ。
義正もいた。そしてだった。彼は兄達に話すのだった。
「今から踊って宜しいですね」
「んっ、それは別に」
「断ることもないと思うが？」
「そうですね」
義正の話を聞いてだ。少し戸惑ってから答える二人だった。
「それ位のことはな」
「特に。そう思うが」
「それならです」
二人にも言われてだ。それでだった。
彼は舞踏の場に向かう。それを見てだ。

第十三話　運命の告白その六

真理もだ。そっとだった。両親と兄達に話すのであった。
「あの、私は今から」
「珍しいな」
「そうですね」
両親がだ。最初に娘に言った。
「真理が踊るのか」
「そんなこともあるのですね」
「少し気分が変わりまして」
それでだと話すのだった。
「それで宜しいでしょうか」
「今は舞踏会に来ているからな」
「それじゃあ別に」
いいとだ。二人は答えた。そしてだった。
そのうえでだ。また話すのだった。
「それで踊れるのか？」
「貴女は殆んど踊っていないのに」
「少し自信はないですが」
それでもだとだ。真理は話してだった。
そうしてだった。舞踏の場に向かおうとする。しかしだ。
今度はだ。兄と妹達がだ。真理に話してきた。
「まあ真理なら大丈夫だな」
「そうですね。元々ダンスはお好きですし」
「それならですね」
「はい、頑張ってきます」
また言うのだった。
「それでは」
「しかし。確かに珍しいな」

「そうですね。真理さんが自分から踊られたいとは」
「そう言われるなんて」
「気が変わりまして」
それでだとだ。また話す真理だった。兄達に対してもだった。
そのうえでだ。彼女も舞踏の場に出る。その彼女にだ。
周囲が声をかけてきた。
「あの、宜しければです」
「私と踊って頂けますか」
「できれば私と」
「御願いできますか」
「申し訳ありませんが」
にこりと微笑んでだ。真理は話すのだった。
「それはです」
「左様ですか。それでは」
「失礼しました」
「申し訳ありません」
彼等は真理からやんわりと断られるとだ。それ以上は言わなかった。そうしてそれはだ。義正についても同じだった。彼も周りからだった。
「よかったら私とです」
「御一緒に」
「踊りませんか」
「次の曲は」
「折角ですが」
彼もだ。微笑みはしたがだった。
そのうえでだ。こう彼女達に話した。
「私はもう」
「別の方がおられるのですか」
「そうなのですか」
「はい、そうです」

こう話すのだった。
「ですから」
「わかりました。それではです」
「失礼しました」
「そうさせてもらいます」
彼女達も下がった。こうしてだった。
残ったのはお互いだけになった。二人だけだった。その二人はだ。
一礼してだ。そのうえでだった。
それぞれ前に出てだ。まずはだ。
義正が一礼した。続いて真理もだ。そのうえでだった。
音楽がはじまりそれからだ。舞踏をはじめた。それを見てだ。
八条家の面々も白杜家の面々もだ。驚きを隠せなかった。それで
話すのだった。
「まさか」
「あの二人は」
「いや、確かに」
「今から」
こうだ。驚きながら言うのだった。

第十三話　運命の告白その七

「踊るのか」
「他に相手がいたのに断って」
「それでお互いに踊る」
「まさか」
信じられないといった声でだ。二人を見ながら話す。
そしてその中でだ。義愛が言った。
「ここは」
「どうされますか？」
「止めるべきか」
こうだ。怪訝な顔で義智に言うのだった。
「今の義正を」
「ですがそれは」
「そうだな。無粋だな」
「はい、止めるべきです」
義智はこう言って兄の逡巡を止めた。
そしてそのうえでだ。彼も己の考えを話すのだった。
「私にしてもです」
「御前もか」
「本音は止めるべきではないかと思っているのですが」
「それでもだな」
「はい、舞踏ははじまりました」
それがはじまってしまった。それが大きいというのだ。
「その中で止めたりすればそれは」
「無粋だな」
「作法に反しますね」
「やってはいけないことだ」
暗黙の、だが絶対のルールだった。それならばだった。

義愛も動けなかった。無論義智もだ。
それでその場においてだ。義正を見るしかできなかった。
義正と真理は舞踏に入っていた。それを見てだ。二人の兄達はまた話すのだった。
「あの二人はまさか」
「そうですね。最初から」
「ああなることを考えていた」
「あの表情」
そのだ。二人の表情を見て義愛と義智は話した。
「兄さんはどう思われますか」
「楽しそうだな」
末弟だけでなくだ。真理の顔も見てだ。義愛は言うのだった。
「恋人同士、まさにそうだな」
「そうですね。誰がどう見ても」
「その二人の舞だ」
「この場にあるべきその舞踏ですね」
「白い婚礼の場」
義愛は今度は今の舞踏会の場を再び見た。するとまさにだった。
婚礼の場にだ。主役の二人が入り踊っている、そう見えるものだった。
そしてこう感じたのは彼等だけでなくだ。白杜家の面々もだった。
父がだ。憮然としながらも妻に話した。
「忌々しい状況ではある」
「はい、確かに」
妻もだ。夫の言葉に頷いて返した。
「まさか真理が。あの家の御子息と」
「ああして踊るとはな」
「手を握っています」
母にとっては最早そのこと自体が許せなかった。
「ああして。しかも楽しげに」

「恋仲の様だな。いや」
「はい、そうですね」
「まさに恋仲だ」
二人の表情からだ。そのことを察しての言葉だった。
「あの二人はそうとしか見えない」
「では。この場は」
「先生はわかっておられたのか」
伊上のことだ。父がここで言うのは。
その父は察したのだった。断定ではないがそれでもだ。
察してだ。それで話すのだった。
「まさか。二人のことを」
「御存知だったのでしょうか」
「この場だ」
彼もだ。今の場にはたと気付いたのだ。

第十三話　運命の告白その八

そのうえで白い世界を見回しだ。己の妻に話した。
「婚礼の場。この場は誰の為に用意されたのか」
「私達全てではなかったのですか」
「主役がいたのだ」
問題はだ。その主役だった。
それは一体誰なのか、彼は考えた。そのうえで話すのだった。
「あの二人だったのだ」
「真理と。そして」
「八条家のあの三男だ」
義正に他ならない。今真理、彼等の娘と踊っている彼だ。
その端整な姿を見てだ。父は苦々しく言うのだった。
「まさか。してやられたか」
「あの三男にですか」
「いや、真理にもだ」
彼だけではなく。娘にもだというのだ。
「真理にも。してやられたか」
「そういえば今日のあの娘の服は」
「白だな」
「はい、白です」
今の舞踏会の色でもあるだ。その白だった。
その白を思い浮かべてだ。今二人は話すのだった。
「では。最初から」
「ああするつもりだったのだろうな」
「そうだったのですか」
「まさかな」
父の苦々しい言葉が続く。
「あの真理が。こうするとはな」

「予想できませんでしたね」
「全くな」
それはできなかったというのだった。
「本当にそうだ」
「このままどうなるでしょうか」
「あの二人の思うままだ」
既にだ。流れはそうなっていた。
「我々は見ていることだけしかできない」
「困ったことになりましたね」
「困った。しかしだ」
「しかし？」
「わしは前に言った」
真理を見ながらだ。そうして話すのだった。
「相手が誰でもじゃ」
「誰でもですね」
「然るべき者ならばな」
「生まれ等には関係なくですね」
「それを言った」
そのだ。真理にだというのだ。
「そして他の息子や娘達の結婚も」
「そうしてきましたね」
「しかし今は」
「真理については」
「それをよしとするには覚悟がいるのう」
唇を噛み締めてだ。こう話すのだった。
「どうもな」
「ですが御言葉は」
「人は言った言葉は守らなければならん」
それはだ。絶対だというのだ。彼もだ。そこに信念があった。
「それを破ればそれでしまいじゃ」

「では今は」
「やられたわ」
苦い言葉はここでも出た。
「しかし。こうなってはじゃ」
「認めるしかありませんね」
「相手が八条家とは思わなかった」
最早娘が踊りの後で何をするのかを。完全にわかっての言葉だった。
「しかしこうなればじゃ」
「はい、それでは」
「受ける」
父としての断言だった。
「何としてもな」
「わかりました。では私も」
母もだ。真理の母として言うのだった。

第十三話　運命の告白その八

そのうえで白い世界を見回しだ。己の妻に話した。
「婚礼の場。この場は誰の為に用意されたのか」
「私達全てではなかったのですか」
「主役がいたのだ」
問題はだ。その主役だった。
それは一体誰なのか、彼は考えた。そのうえで話すのだった。
「あの二人だったのだ」
「真理と。そして」
「八条家のあの三男だ」
義正に他ならない。今真理、彼等の娘と踊っている彼だ。
その端整な姿を見てだ。父は苦々しく言うのだった。
「まさか。してやられたか」
「あの三男にですか」
「いや、真理にもだ」
彼だけではなく。娘にもだというのだ。
「真理にも。してやられたか」
「そういえば今日のあの娘の服は」
「白だな」
「はい、白です」
今の舞踏会の色でもあるだ。その白だった。
その白を思い浮かべてだ。今二人は話すのだった。
「では。最初から」
「ああするつもりだったのだろうな」
「そうだったのですか」
「まさかな」
父の苦々しい言葉が続く。
「あの真理が。こうするとはな」

「予想できませんでしたね」
「全くな」
それはできなかったというのだった。
「本当にそうだ」
「このままどうなるでしょうか」
「あの二人の思うままだ」
既にだ。流れはそうなっていた。
「我々は見ていることだけしかできない」
「困ったことになりましたね」
「困った。しかしだ」
「しかし？」
「わしは前に言った」
真理を見ながらだ。そうして話すのだった。
「相手が誰でもじゃ」
「誰でもですね」
「然るべき者ならばな」
「生まれ等には関係なくですね」
「それを言った」
そのだ。真理にだというのだ。
「そして他の息子や娘達の結婚も」
「そうしてきましたね」
「しかし今は」
「真理については」
「それをよしとするには覚悟がいるのう」
唇を噛み締めてだ。こう話すのだった。
「どうもな」
「ですが御言葉は」
「人は言った言葉は守らなければならん」
それはだ。絶対だというのだ。彼もだ。そこに信念があった。
「それを破ればそれでしまいじゃ」

「では今は」
「やられたわ」
苦い言葉はここでも出た。
「しかし。こうなってはじゃ」
「認めるしかありませんね」
「相手が八条家とは思わなかった」
最早娘が踊りの後で何をするのかを。完全にわかっての言葉だった。
「しかしこうなればじゃ」
「はい、それでは」
「受ける」
父としての断言だった。
「何としてもな」
「わかりました。では私も」
母もだ。真理の母として言うのだった。

第十三話　運命の告白その九

「ここはです」
「受けるな」
「そうさせてもらいます」
二人もまたそうすると決めたのだった。
真理の兄と姉達もだ。戸惑いを見せていた。
義正と踊る末妹を見ながらだ。まずは姉達が兄に尋ねた。
「お兄様は宜しいのですか」
「今の真理さんは」
こうだ。怪訝な顔で尋ねるのだった。
「ああして八条家のご子息と踊っていて」
「宜しいのですね」
「止めたい」
兄はだ。本心から話した。その義正とはまた違った細い眉の整った品性のある顔を曇らせてそのうえで妹達に話をするのだった。
「真理を何としても」
「そうですね。私も」
「私もです」
妹達もここで言うのだった。
「ですが今はです」
「舞踏の最中は」
「何もできない」
自分の父達とだ。彼等は同じことを言っていた。そしてそれは義正の兄達と同じだった。彼等は気付かないままそうなっていたのだ。
「見ているだけだ」
「そうですね。今はですね」
「それしかできませんね」
「残念だがな」

兄は苦い顔で真理以外の妹達に話した。
「では。ここにいるとしよう」
「残念ですが」
「そうしましょう」
彼等も見ているだけしかできなかった。両家の関係者達はそうしていた。そうした両家を見ながらだ。伊上だけが会心の顔でいた。
その会心の顔でだ。彼は舞踏を見ながら周りにまた話した。
「では舞踏の次だ」
「今の音楽が終ってからですか」
「それからですか」
「そう、それからだ」
こう自分の後ろに控える彼等に話すのだ。
「それからまたはじまる」
「あの、それではです」
「我々は今はです」
「何をすればいいでしょうか」
「まずないとは思う」
伊上はその彼等に話した。
「だが。二人に対して何かをしようとする者が出るかも知れん」
「何かをですか」
「具体的に言えば引き離す」
その二人をだ。物理的にだというのだ。
「そうしようと軽挙に出る者が出るかも知れん」
「ではそうした方に対してですか」
「我々は」
「そうじゃ。見張ってくれ」
警護だった。
「そして動く者がいればじゃ」
「わかりました。それでは」
「そうさせてもらいます」

「今のうちに両家の周りについてくれ」
八条家と白杜家、その両家の人間の周りにだというのだ。
「これからが一番肝心じゃ」
「これからがですか」
「肝心なのですか」
「今は序曲じゃ」
西洋の歌劇に例えての話だった。
「序曲が終ってからが本番じゃからな」
「そうですか。それでは今から」
「両家の方々の周りにつきます」
「そうさせてもらいます」
「頼んだぞ」
こうしてだった。伊上は裏方として二人を護っていた。その彼の支えを受けながらだ。

第十三話　運命の告白その十

二人は舞踏を終え静まり返っている場でだ。二人寄り添ってだ。
義正がだ。こう言うのだった。
「私、八条義正はです」
「それを言うんだな」
「本当に」
義愛と義智がだ。固唾を飲んで呟いた。
「義正、御前は」
「そのことを」
「こちらにおられる白杜真理さんと」
真理を見てだ。そうしての言葉だった。
「交際しています」
「やはりな」
「そうか」
まずは義正の二人の兄達が言った。
「交際していたか」
「まさかと思ったが」
二人は末弟の言葉を聞いて呟いた。
そしてそのうえでだ。彼の話をさらに聞くのだった。彼はさらに話していた。
「そしてやがてはです」
「まさかと思うが」
「そうですね」
今度はだ。真理の両親達が言うのだった。
「真理と」
「あの人が」
「結婚したいと考えています」
こうだ。義正は正面から堂々と言った。

「そのことを考えています」
「私もです」
そしてだ。真理もだった。意を決した顔で言うのだった。
「私も八条義正さんとです」
「結ばれたい」
彼女の兄の言葉だ。
「そう言うのか」
「その八条家の方と」
「自分から言うのですね」
姉達もだ。ここで言った。彼女達の顔は蒼白になっている。
「嘘みたいな話ですけれど」
「これは真なのですね」
「そうだ、真だ」
他ならぬそれだとだ。兄は二人の妹達に話した。
「今私達は真理の今を見ているのだ」
「真理さんの今を」
「それをですか」
「あの娘は本気だ」
そのことを察してだ。そうして妹達に話すのだった。
「幸せを自分で掴もうとしているのだ」
「だからなのですね」
「今あの場所にいる」
「そうだ。私達は今あの娘の心を見ているのだ」
今度はこう話す兄だった。
「では見るよしよう」
「旦那様、頑張って下さい」
佐藤もいた。彼も主と共にこの場に来ていたのだ。
そしてそのうえでだ。主を見てだ。呟くのだった。
「そうして御自身の幸せをお掴み下さい」
「彼はやってくれる」

伊上がだ。その佐藤のところに来て言うのだった。
「ここまで来れば覚悟だ」
「覚悟ですか」
「人で何が最も大事か」
そのこともだ。彼はこれまで生きてきて政治の世界で見てきたそのことを話すのだった。その話すことはまさに人間そのものだった。
「それは覚悟なのだ」
「覚悟ですか」
「いざという時に何処まで果たせるか」
それがだ。覚悟だというのだ。
「意を決してな」
「では旦那様と真理様は今」
「その覚悟を出しているのだ」
今まさにだ。そうしているというのだ。

第十三話　運命の告白その十一

「一本気にな」
「一本気に」
「それは途中で曲がっては駄目だ」
「曲がれば終わりですね」
「少しも曲がってはならない」
そうしただ。厳しいものでもあるというのだ。
「二人は今それを我々に見せてくれているのだ」
「それでなのですが」
「それでか」
「旦那様と奥様が最後まで果たされれば」
その覚悟をだ。果たせばというのだ。
「どうなるでしょうか」
「そこからはじまるのだ」
そうなるとだ。伊上は佐藤にも話すのだった。
「二人の幸せがだ」
「御二人で歩まれることがですか」
「これまでは序曲だった」
西洋の歌劇にだ。例えての言葉だった。
「しかしこれからはだ」
「幕があがるのですね」
「その幕があがるかどうか」
伊上のその言葉に真剣なものがさらに宿っていく。
「それはここで決まるのじゃよ」
「決められるのは旦那様と奥様ですね」
「何でも決めるのはそうじゃ」
そうだともいうのだ。
「自分自身で決めることじゃ」

「それが今なのですね」
「そうじゃ。それができる時代にもなった」
「明治になり大正に移り」
「そうれならばそうあるべきじゃ。家同士のしがらみも消せる様になったのじゃ」
それならばそうするべきだというのだ。是非共だとだ。
「では。これからじゃ」
「はい、見させてもらいます」
「今の二人に手出しはさせぬ」
その手筈は既にしていた。彼の二人への助けはそれだった。
「安心して見ていればよい」
「後はお二人のお覚悟だけですか」
「それが少しも曲がらなければよいのじゃ」
それで果たせるというのだ。はじめることを。
「言葉ではそれだけじゃ」
「言葉ではですね」
「行うのは難しい」
「実際に行うことはですか」
「それは難しいのじゃ」
言葉で言うよりも実際に行うことの難しさ、伊上はそのことも話した。
「さて、果たせるかどうか」
「見させてもらいます」
佐藤も腹を括った。彼も見守ることにした。そうしてだ。
義正はだ。場でさらに話すのだった。
「私達は何があろうともです」
「二人で共にいます」
真理も言った。
「私達が別れること、それはです」
「決してありません」

「二人の命が終わるまでです」
「私達は共にいます」
「こうして二人で」
「何にも分かれさせることはできません」
二人で言うのだった。ここまで聞いてだ。
まただ。義愛と義智が話すのだった。
「言い切ったな」
「そうですね」
呆れていた。しかしその呆れたものにはだ。
感嘆も含めてだ。そして言うのだった。
「だがな。一途なものを見せてもらった」
「はい、そしてそれは」
「綺麗だ」
義正は微笑んで言った。
「見事なものだ」
「綺麗ですか」
「御前もそう思わないか？」
義愛は義智に対して問うた。今の末弟についてだ。
「あの二人を見ていて」
「そうですね。私もそう思います」
「御前もだな」
「はい、確かに」
こう話してだ。そのうえでだ。

第十三話　運命の告白その十二

彼等は義正を見て動かなかった。あえて温かく見守るようになっていた。

そしてそれは。彼等も同じだった。

真理の兄達はだ。困った顔でいた。だがそれでもだった。

「あそこまで。真理が言うなんてね」

「ありませんでしたね」

「これがはじめてです」

真理の姉達はこう兄達に話すのだった。

「けれどそれが一途で」

「あまりに純粋です」

「その一途さがあれば」

「真理さんは」

「そうだね。大丈夫だ」

兄もだ。妹達の言葉を受けながらだ。

真理、末の妹を見てだ。言うのだった。

「素晴しいことだ」

「では兄さんはですか」

「真理さんを」

「止めはしない」

心はだ。完全に決まっているのだった。

「真理は幸せになるべきだ」

「だからこそですね」

「ここは」

「私は決めた」

何を決めたのか。このことも言うまでもなかった。

「真理を見守ろう」

「わかりました。それでは」

「私達も」
二人も頷いてだ。彼女達も動かなかった。
そしてだ。真理の両親のところにはだ。
伊上が来てだ。こう話すのだった。
「どう思われますか」
「娘のことですか」
「私達の娘の」
「はい、そうです」
まさにだ。彼女のことであった。伊上が二人に問うたのは。
「御息女について。どう思われますか」
「けしからん話です」
まずは父が憮然として言った。
「よりによって八条家の者とは」
「本当に。何故なのでしょうか」
母もだ。夫に続いて述べる。
「何故あの家の御子息と」
「やはりそう思われますか」
「はい、そうです」
「その通りです」
二人は伊上にすぐに言葉を返した。
「我が家と八条家は長い間の因縁があるというのに」
「それなのに」
「因縁ですか」
因縁と聞いてだ。伊上はだ。
その因縁についてだ。こう話すのだった。
「ねじれただけの因縁ですね」
「ねじれたですか」
「それだけですか」
「はい、それだけです」
こう二人に話す伊上だった。

「ねじれただけならば」
「それだけならばですか」
「それではですか」
「そうです。なおすだけです」
そのねじれをだというのだ。
「そうしましょう。今ここで」
「今ここで」
「そのねじれをですか」
「私はそう思います」
微笑んでだ。二人に話すのだった。
「ねじれ、いがみ合っても何にもなりません」
「だからですか」
「それでなのですか」
二人は伊上の言葉ニ考える顔になった。そのうえでの言葉だった。
「つまり矛を収め」
「話し合うべきですね」
「はい、そうです」
また微笑んで話す伊上だった。

第十三話　運命の告白その十三

「そうあるべきです。そしてです」
「あの二人を」
「認めるべきですか」
「何でしたらです」
伊上はここで勝負、賭けに出た。
「今ここで、です」
「あの二人を止める」
「そうするべきだというのですね」
「私は今は止めることはしません」
これが賭けだった。二人が義正と真理を止めるかどうか、それを賭けたのである。
「どうしても許せないならばです」
「あの二人を」
「あの間に入りそして」
「そうされてはどうでしょうか」
再び二人に話す。
「どうしてもと仰るのならです。そうされては」
「それは」
まずはだ。父が苦い声で言った。
「あの二人をここで引き裂けば」
「話は終わりです」
こうも言ってみせるのだった。
「それで全てはです」
「しかしですか」
「私は止めませんぞ」
また強く言う伊上だった。
「御約束します」

「では私次第ですか」
「はい」
まさにそうだというのだ。
「その通りです」
「左様ですか。私次第ですか」
「それでどうされますか」
彼に対して問い続ける。無論彼女にもだ。
伊上はあえて義正と真理の方を見たままだ。二人に問うのだった。
「行かれますか。どうされますか」
「わかりました。それではです」
「私達はです」
二人も意を決した顔になった。そうしてだ。
伊上にだ。こう答えた。
「私達はここにいます」
「この場にです」
二人同時に言った。
「そうさせてもらいます」
「そのことを決めました」
「わかりました」
それを受けてだ。伊上は静かに頷いた。
そうしてそのうえでだ。彼は微笑んで言うのだった。
「それではここで見ていましょう」
「まさか。こうなるとは」
「本当に思いませんでした」
「ですがどう考えておられるでしょうか」
伊上はまた二人に問うた。しかし問うたことはこれまでとは違っていた。
「今は」
「不思議と落ち着いています」
「どうしてかはわかりませんが」

こう答える二人だった。
「八条家の人間が相手だというのに」
「どうしても。それは」
「それはお二人がです」
「我々がですか」
「我々がだというのですか」
「そうです。御息女を認めておられるからです」
それでだというのだ。これが伊上の今の二人への言葉だった。
「だからこそ動かれずです」
「そして落ち着いている」
「そうだというのですね」
「御息女には幸せになって欲しいですね」
今度はこのことを問う伊上だった。

第十三話　運命の告白その十四

「それは是非共ですね」
「子供の幸せを願わない親なぞ」
真理の父が言った。言葉は毅然となっている。
「いはしません」
「そうですね。それは私もです」
「先生もですか」
「私にも子供はいます」
そのことはよく知られていた。政界、官界に強い影響力を持っている彼のことは日本においてよく知られている。だからそうしたこともだった。
「そして孫もです。今度は曾孫もできました」
「曾孫さんもですか」
「そうなのですね」
「はい、その子供も孫も曾孫もです」
話はそこまで至るのだった。
「全員幸せになって欲しいと考えています」
「自分の子供達だからですね」
「それはなのですね」
「はい、そうです」
それが理由なのだった。
「是非共です」
「だからですか。今我々は」
「動かなく満足している」
「だからですね」
「それでなのですね」
「そうです。そしてです」
さらにあるというのだ。二人が動かず満足している理由はだ。

「御息女を幸せにすると誓う彼ですが」
「その八条家の三男」
「あの若者ですか」
「彼はどうなのか」
義正はどうなのか。伊上はそのことも問うのだった。
「今ここで彼を見てどう思われますか」
「八条家の者です」
真理の母がこう答えた。
「それが事実です」
「否定できませんね、そのことは」
「はい、どうしても」
ここでは忌々しげに言うのであった。
「ですが」
「ですが、ですか」
「それでも。ここでの言葉と行動を見ますと」
「動けず。満足されましたね」
「私とて白杜家の棟梁の妻です」
自負ではなかった。これまでの経験について言う言葉だった。
「多くの方を見てきました」
「そうしておわかりになられたのですね」
「その人がどういう人なのか」
わかるようになったというのだ。
「ですから」
「今ここにおられる」
「後で。日をあらためて」
真理の、彼女の母としての言葉だった。
「あの方には御会いしたいです」
「わしもです」
そしてだ。父も言うのだった。
「そうしたいと思っています」

「わかりました。それではです」
そこまで聞いてだ。伊上はようやく満足した顔を二人にはじめて見せた。
その満足した顔でだ。その二人に話した。
「その時のことを楽しみにしておいて下さい」
「これで最後の荷が下りました」
真理の父は微笑んで。それで伊上に放した。
「最後の娘によき伴侶が見つかったのですから」
「そうですね。これで」
母も言う。夫に続いて。
「あの娘も」
「これでいい」
父としてだ。また言うのだった。
「全てはこれでいいのだ」
「わかりました」
妻は夫のその言葉に頷いた。
「では私もまた」
「真理を認めるか」
「そうします」
こう答えたのだった。

第十三話　運命の告白その十五

「あの方もです」
「八条家か」
彼は今度は白杜家の総帥として言った。
「思えばこれまではな」
「そうですね。長い間いがみ合ってきましたが」
「意味のないものだった」
そうだったというのだ。今そのことにも気付いたのだ。
「しかしそれはだ」
「今終わるのですね」
「終わらせるべきだったのだ」
こう言うのだった。
「もっと早くな」
「そうですね。本当に」
「二人はそのことを教えてくれた」
今度も話すのだった。そのわかったことをだ。
そしてだった。真理の兄達、彼等の子達もだ。それぞれ言っていた。
「こうなってはね」
「はい、お祝いするしかありませんね」
「真理さんを」
困った顔であったがそれでも笑顔だった。
その笑顔でだ。やがてだ。
八条家の上の兄弟。義愛と義智のところに来てだ。こう声をかけるのだった。
「あの」
「貴方達は」
義愛がだ。真理の兄である真人に応えた。

「はい、こうして御会いするのははじめてですね」
「そうですね」
義愛は真人のその言葉に頷いた。
「思えば」
「会う時はいつもいがみ合ってばかりで」
「そうでしたね。本当に」
「しかし。今はです」
その今はどうなのか。真人は言った。
「そのことは間違っているとわかりました」
「本当にですね。いがみ合っていてもです」
義愛も話す。
「何の意味もありませんでした」
「私達はそのことに気付きませんでした」
「愚かにもですね」
「はい、本当に愚かでした」
真人はその声にだ。苦いものを含ませた。そうしてだった。
そのうえでだ。また義愛に述べた。
「ですが愚かと気付けばです」
「それをあらためるべきですね」
「私達は妹に教えてもらいました」
こう言うのだった。
「そのことを」
「私達もです」
義愛も述べた。そうだとだ。
「私達は無意味ないがみ合いを続けてきました」
「それによって生み出されたものはです」
「何もありません」
そのことがよくわかったのだった。実にだ。
そしてだ。今それをなのだった。
「ですがこれから生み出すべきですね」

「そうですね」
真人と義愛は二人で言った。
「あの二人と共に」
「そうしましょう」
言い合いだ。二人同時にだった。
手を出し合いだ。握手、西洋のそれをするのだった。
そうしてだ。義智もだった。真理の二人の姉、真美と真子と話していた。二人は落ち着いた笑顔で彼に対してこう話すのだった。
「これまでの愚かさをあらためて」
「親睦を深めるべきですね」
「そう思います」
義智もだった。こう彼女達に返すのだった。
「是非共。それでなのですが」
「それでなのですか」
「といいますと」
「実は私達には妹もいるのです」
こうだ。二人に話すのだった。

第十三話　運命の告白その十六

「末っ子です」
「妹さんがおられたのですか」
「そうだったのですか」
「今は両親と共にいて」
八条兄弟の両親、即ち八条家の総帥である。
「それでこの舞踏会にはいませんが」
「しかし。妹さんがおられるとは」
「初耳でした」
「両親が可愛がっていまして」
義智もだ。微笑んで話すのだった。
「いつも手元に置いていまして。秘書の様なものをしております」
「秘書ですか」
「西洋のあれですね」
「それを真似ています」
そうしているというのだ。
「父は女性の社会進出の話を聞いて少し思うところがあったらしく」
「またそれは先進的ですね」
「そうしたことまで考えられているのですか」
「変わり者でして」
父についてだ。義智は少し気恥ずかしそうに話した。
「それそうしたこともです」
「いえ、それはかなりです」
「凄いことだと思います」
真美も真子もだ。驚いて言うのであった。
そしてそのうえでだ。二人で義智に言うのであった。
「あの、宜しければですが」
「今度機会があれば妹さんに」

「はい、共に御会いしましょう」
交流を深める為にもとだ。義智も微笑んで応えた。
「そうしましょう」
「真理さんの妹さんにもなられるのでしたら」
「私達の妹にもなりますね」
ここでこんなことも言う二人であった。
「それなら是非です」
「御会いしたいです」
「そうですね。貴女達にとってもですね」
「ではその時は」
「御願いします」
彼等もだ。その中は急激によいものになっていっていた。
それは舞踏会の場全体にも拡がりだ。全てが和やかになっていっていた。
伊上はそうしたもの全てを見てから白杜家の方から離れてだ。そしてだった。
こうだ。また佐藤に話した。
「全てはここからはじまるな」
「終わりではなくですね」
「はじまりだ」
微笑みそして話すのだった。
「幸せなはじまりだ」
「はじまりですね。御二人の」
「さて。はじまりの話は終わった」
それからだった。
「後はだ」
「後はですね」
「その通り。後は歩いていくのだ」
はじまりだからだ。そうだと話す伊上だった。
その話をして彼は微笑んでいた。その微笑みでだ。

また佐藤に話す。そのことは。
「全てにはじまりがあり終わりがある」
「その二つがですね」
「そう、あるのじゃ」
その通りだというのだ。
「ただ。何かが終わっても全ては終わりではない」
「そこからですね」
「また新たな話がはじまる」
そうだというのだ。その深い人生経験からの言葉だった。
そうした話をしながらだ。再びだった。
音楽がはじまる。今度の曲もまただった。
舞踏会の曲とは少し違う、婚礼を祝福する様な曲だった。その曲を聴きながらだ。
伊上はだ。この話をした。
「ただ。一つ気になるな」
「気になる？」
「真理さんだが」
話すのはだ。彼女のことだった。
「顔が白い」
「お顔がですか」
「妙に白い気がする」
義正と二人で踊る彼女の顔を見てだ。こんなことを話すのだった。

第十三話　運命の告白その十七

「そんな気がするが」
「そうでしょうか」
「前から。義正君と二人でわしのところに来た時からだ」
「思われていましたか」
「異様に白い」
真理のその白い顔がだ。気になって仕方がないというのだ。
「あの白さは」
「元からでは？」
「だといいのだがな」
こう言いはしたがだ。
その不安を消せずにだ。また佐藤に話した。
「色が白いのは七難を隠すというが」
「いいことばかりではないというのですね」
「異様に白いのは気になる」
その異様な白さがだ。気になると話すのだ。
「それが気になるな」
「御化粧のせいでしょう」
佐藤はそう考えだ。己の考えを話すのだった。
「そのせいでしょう」
「化粧のせいか」
「そうではないでしょうか」
また話す彼だった。
「きっとそのせいです」
「そうか」
そしてだ。伊上もだ。
納得する顔になってだ。佐藤に対して頷いてみせた。
「ではだ」

「それではですね」
「わしはこのまま二人の幸せを見守ろう」
彼もまた決意していた。その決意を述べたのだ。
「君もそうするな」
「そうさせてもらいます」
佐藤もしっかりとした態度で答えて話した。
「これからも。ずっと」
「ずっとだな」
「御二人のその幸せの果てまで」
最後の最後までと話して。それからだった。
「そしてそれからはじまるものもです」
「見ていこうか」
「そうしましょう」
こんな話をしてだった。二人を見ているのだった。
一つの物語が終わり新たな物語がはじまった。それは幸せの物語だった。義正と真理ははじまった。しかしだ。それはだ。幸せばかりではなくだ。あるものも含んでいた。だがそのことには誰も気付いていなかった。気付きかけた者も考えを打ち消してだ。今葉幸せだけを見ていたのだった。

第十三話　完

２０１１・６・４

第十四話　忍び寄るもの一

第十四話　忍び寄るもの

義正と真理の話をだ。八条家の総帥、即ち義正達の父が話を聞いたのは。東京から帰ってからだった。

その話を聞いた彼とその妻はだ。まずはこう言ったのだった。

義愛によく似た顔立ちのだ。恰幅のいい初老の男だ。見事な地味な色の和服を着ていてそれがよく似合う。その彼がだ。妻を横に置き静かに言うのだった。

「信じられんな」

「全くです」

彼の隣にいる義智に何処かにた感じの穏やかな赤の系統の着物の女性も言う。黒髪を綺麗にあげて纏めている。あまり歳を感じさせない気品のある女性だ。

見れば二人を合わせた感じにだ。義正はなっている。その二人がだ。義愛と義智の話を受けてだ。そうしてそのうえで言うのだった。

「白杜家の末娘とか」

「結婚したいというのですか」

「はい、そうです」

「その通りです」

二人はだ。自分達の両親に話した。場は八条家の屋敷だ。そこで話すのだった。

「既にそのことはです」

「公に言っています」

「そうか」

ここまで聞いてだ。父は静かに言った。重みのある確かな声だ。

「しかもこのことはか」

「はい、伊上先生もです」

「認めて下さっています」

「姑息と言えば姑息だな」
父はまずはこう言って息子の行動を批判した。
「あの方の御力をお借りするとはな」
「あの方からです」
「申し出られたのです」
「そうなったか」
その話を聞いてだ。父はだ。
表情を少し変えた。そうしてこんなことを言った。
「考えたものだ」
「これは策でしょうか」
「策だな」
そうだとだ。妻にも話す。
「まさにそれだ」
「あまりよくはありませんか」
「いや、この場合は妥当だ」
「妥当ですか」
「むしろよくやった」
義正をだ。褒め称える言葉さえ出して評するのだった。
「ここはそうするのが一番だった」
「伊上先生の御力をお借りすることがですか」
「一人や二人ではどうにもならない場合があるな」
「はい」
そのことは母もわかｔっていた。世の中というものはそうしたものだ。一人、そして二人ではだ。思うようにならないことも多いのだ。
その話になりだ。彼女も頷いて己の夫に話すのだった。
「そしてその場合はです」
「他から力を借りる」
「我が国もそうでしたし」
「何故我が国が露西亜に勝てたか」

話は日露戦争のものになった。二人の中ではあの戦争のことはまだ記憶に新しい。日本にとって運命の、その存亡を賭けた戦いだったからだ。

その戦いに何故勝てたか。彼は話すのだった。

「英吉利の力があってこそだ」

「あの英吉利の」

「英吉利が我が国と同盟を結び力を貸してくれた」

露西亜には戦争をしていなくともだ。それでもなのだ。

日本に力を貸し様々な方法で露西亜を妨害してきた。情報も逐一知らせてくれた。その英吉利の力もあってだ。日本は勝てたのだ。

このことにだ。父はこう話すのだった。

「これは恥ではないのだ」

「そうではないのですね」

「英吉利の力を得る為には多くのものが必要だった」

そうだったというのだ。

「まず英吉利の信頼を得」

「信頼ですか」

「信頼がなければ何にもならない」

つまりだ。信なくば立たずだ。そういうことだった。

第十四話　忍び寄るもの二

「英吉利に信頼されるだけのものがだ。我が国にはあったのだ」
「あの大英帝国からの信頼だ」
「それがまずあってですか」
「第一だ。英吉利は我が国を信頼してくれた」
その要因の一つとして義和団事件があった。この事件において日本軍の将兵達は完璧な軍規軍律と精強さを見せた。それを見てだ。英吉利の外交官達は日本を信頼できる国と考えたのだ。
それからだとだ。この彼も話していくのだった。
「その信頼があったのだ」
「では義正も」
「あの娘もな」
同時にだ。真理のことも話した。
「伊上先生が信頼されるだけの人物なのだ」
「伊上先生は人を見られることについてもかなりの方ですが」
「その伊上先生に信頼されていたのだ」
「凄いことですね」
「あの若さでな。いや」
己の言葉を訂正してだ。妻に話すのだった。
「若さ故か」
「それ故ですか」
「その一途さも見られたのだ」
そうなったというのだ。伊上は二人のそうしたところも見たというのだ。
「先生はな」
「そしてなのですね」
「二人のその人物、とりわけ一途さを見られて二人に力を貸したのだ」

「だからこそですか」
「それであそこまでされたのだ」
二人をだ。全面的に助けたというのだ。
「そういうことだ」
「そうだったのですか」
「信頼に足る人物にこそ力を貸す」
そうした人物は何かというとだ。
父はだ。考える、深い人生経験に基く考えから話すのだった。
「それが君子だ」
「君子。儒学の」
「それだ。二人は君子だ」
「義正はそうなのですね」
「面白いことだと思わないか」
彼は笑みにさえなってだ。妻に話す。
「我が子がそこまでの人物になっているとはな」
「ついこの前まで。甘えん坊の子供だったというのに」
「大きくなったな」
「はい、成長しました」
母としてだ。微笑んでの言葉だった。
「気付かない間に」
「義愛も義智もだがな」
「そうですね。思えばあの子達も」
「気付かないうちに。立派な人物になっている」
「そして義正もまた」
「わし等はだ。その義正をだ」
どうするのか。そうした話にもなっていた。
「温かく見守ろう」
「親としてですね」
「それが親の務めだ」
まさにだ。それこそがだというのだ。

「だからそうしよう」
「では義正が私達の前に来たら」
「よしと言う」
それだけだと。言い切ったのだった。
「来ればな」
「絶対に来ますね」
「来ない筈がない」
そうだというのだ。
「親の前にな」
「こうした話だからこそですね」
「そして来ない義正でもない」
こうも妻に話す。

第十四話　忍び寄るもの三

「わし等はそれを待とう」
「焦ってはいけませんね」
「焦っては負けだ」
「負けですか」
「勝ち負けの話ではないが」
だからだ。この場合に負ける相手はというとだ。親としての自分自身、それだというのだ。
その話をして。また妻に話した。
「ここは親らしく落ち着いて待とう」
「それが一番ですね」
「うむ。子を待とう」
こんな話をしてだ。二人が義正が自分達の前に来るのを待つのだった。
その義正もだ。今だ。佐藤とそのことを話すのだった。
彼はだ。砂浜にいた。そこから見える海を見ながら彼に話す。
白い砂浜から見える海は何処までも青く澄んでいる。その青い海を見て。
彼はだ。自分の横にいる佐藤に話すのだ。
「賽は投げてだ」
「そしてですね」
「私達は交際するところまでいった」
「はい、確かに」
それはその通りだとだ。佐藤も話す。
そして彼はだ。あらためて主にこう話した。
「ですが次はです」
「そうだね。父上と母上に」
「お話をしなければなりません」

「わかっているよ」
それはだとだ。彼も答えた。
「それはね」
「それでは」
「うん。ただ」
「ただ？」
「僕一人で行くべきではない」
こうだ。彼は砂浜を見ながら述べた。
「ここは。やはり」
「あの方もですね」
「真理さんもだね」
彼女の名前をだ。ここで出すのだった。
「彼女と一緒に」
「はい。旦那様御一人のことではありませんから」
「彼女とのことだからね」
「それで御一人で行かれてはどうにもなりません」
そうだとだ。佐藤は己の主に話すのである。
「ですから大旦那様と奥様にはです」
「僕と彼女で向かうべきだね」
「是非共です」
「勇気がいるね」
二人で行くのにはだ。それが必要だというのだ。
それがどうしてなのかもだ。義正は話した。
「一人でなら気楽だけれど」
「ですがこの度は」
「二人でないといけない。一人とは何と気楽なのだろうね」
「一人は気楽ですか」
「うん、気楽だよ」
まさにそうだというのだ。一人ならばだ。
「何かをされるのも言われるのも僕一人だからね」

「それでだね」
「そうだよ。一人だととても楽だよ」
砂浜から海を、白い波も時折見える海を見続けて。彼は話していく。
「本当にね。ただね」
「ただ？」
「一人は。寂しいね」
こうも言うのだった。ここで。
「とてもね。寂しいね」
「寂しいですか。一人は」
「気楽だけれど寂しいよ」
一人ならばそうだとだ。義正は話すのだった。
「そして何かを得るにしてもね
「そうしてもやはりですね」
「気楽だけれど寂しいよ」
「寂しさはどうしても付き纏いますか」
「一人はね。だからね」
「だからですか」
「僕は。一人ではもういたくない」
寂しさを感じるからだと。それでだというのだ。
「二人でいられる悦びを知ったら。一人でいる寂しさにはもう耐えられないよ」
「では大旦那様と奥様の御前にも」
「二人で行くよ」
そうするとだ。彼は佐藤に話した。
「そうして二人で生きていくよ」
「御二人で、ですね」
「二人で幸せになるよ」
こうも話すのだった。

第十四話　忍び寄るもの四

「幸せにね」
「それではその為にも」
「行くよ。真理さんをこの屋敷に御呼びするよ」
「白杜家の方をこの屋敷に」
「そして僕もあちらにお邪魔することになるね」
白杜家の屋敷にだというのだ。真理と同じくだ。
「そうなるよ」
「この場合も二人で、ですね」
「そう、二人でね」
まさにそうだと話すのだった。その話をしてだ。
ここでようやく佐藤に顔を向けてだ。彼に問うのだった。
「それで、いいよね」
「はい」
佐藤はその義正にだ。静かに答えたのだった。
そのうえでだ。彼はこう述べたのだった。
「そうあるべきです」
「あるべきなんだね」
「旦那様はそれが正しいと思われていますね」
「一人でいるよりはね」
やはりだ。二人だというのである。
「だからね。そうありたいよ」
「では答えはもう出ています」
「僕の今の考えは間違ってはいないね」
「何が正しく何が間違っているか」
佐藤はこんな風にも話した。
「それは常に変わるものですが」
「変わる。常に」

「善悪も変わります。その都度」
これはその通りだった。この世のあらゆるもので普遍なものなぞない、それは善悪とて同じでだ。正義も邪悪も位置を常に変えるものなのだ。
そのことをわかっている佐藤だった。それで今こう主に話すのだった。
「そして旦那様のお考えもです」
「今は正しいね」
「はい、今はです」
やはりだ。正しいというのである。
「そのまま安心されてです」
「前に進めばいいね」
「そうされて下さい」
また主に述べた。
「是非共」
「わかったよ」
義正は彼のその言葉に微笑んで頷いて述べた。
「それじゃあね」
「そういうことで」
「そうさせてもらうよ。しかし」
「しかし？」
「善悪は流転するだね」
真理とのことをどうするか話してだ。それからだった。
「そうだね」
「はい、そうです」
「では今の僕達は」
「今の時代では正しいです」
「今の時代ではだね」
「かつては。許されないこともあったでしょう」
「ロミオとジュリエットだね」

またこの話になった。あの劇の話だ。
「あの時代の伊太利亜だと」
「許されませんでした」
「けれど今の日本では」
「許されます」
そうだとだ。佐藤は話した。
「もっと言えばあの頃の伊太利亜でもです」
「許されたのかな」
「おそらくは」
そうだったというのである。

第十四話　忍び寄るもの五

「そうでした」
「そうだったんだね」
「あの二人は残念なことにです」
「死を選んでしまったね」
「運命の行き違いにより」
そうなってしまった。この場でも話されるのだった。
そしてだ。あらためてだった。こんな話も為された。
「ですが我が国ではです」
「歌舞伎ではかな」
「はい、八重垣姫がそれです」
ここでまただった。この題目が話に出たのだった。
「八重垣姫は武田勝頼と結ばれます」
「我が国ではそうなった」
「敵味方であっても」
「けれど僕達のことは時と場合によっては許されないんだね」
「若しもですが」
佐藤は自分を見ている義正に話す。
「若し旦那様に恋人か奥様がおられればです」
「真理さんとの恋は許されなかったね」
「その場合はです」
そうだとだ。彼は義正に話した。
「愛は一途でなければなりませんから」
「すると」
義正は佐藤の話からだ。思ったのだった。
そしてその思ったことをだ。彼は述べた。
「よくお妾さんがいる人がいるけれど」
「おられますね」

「我が八条家や白杜家にはいないけれどね」
「それが正しいと思います」
あくまで今の基準ではというのだ。佐藤は相対的に考え話していく。
「やはり。愛は一人にだけ向けられるものなのです」
「真理さんに」
「考えを変えてみましょう」
佐藤の視点が動いた。
「若しも真理様がです」
「真理さんに恋人がいて僕を愛したならば」
「その場合はどうでしょうか」
「考えるだけでも虫唾が走る」
義正はここでは忌々しげに言った。
「そんなことはね」
「そうですね。ですから」
「愛は一人に向けるべきもの」
「そうでなければなりません」
こう義正に話すのだった。
「そう思います」
「わかったよ。相手の立場で考えればね」
「男性も女性も同じですから」
「今の考えは」
義正は佐藤の今の言葉にも述べた。
「あれだったね。平塚らいてうさんの」
「近頃女性の権利についても言われていますが」
「その考えも正しいんだね」
「私はそう思います」
ここでもこう述べる佐藤だった。
「男性も女性も等しく人間なのですから」
「だからだね。そういえば最近天理教という宗教を聞くけれど」

「奈良のあの宗教ですね」
「知っているんだね」
「あの宗教の教会がこの神戸にもあります」
佐藤はこのことも話した。
「それで知ったのですが」
「天理教の教会だね」
「そうです。あるのです」
「そうだったんだ。それでね」
「その天理教のことですね」
「あの宗教の教祖は」
義正は身体も佐藤に向けた。そのうえで彼と話す。それまで身体を向けていた青い海は背中に受けてだ。そうして話すのだった。

第十四話　忍び寄るもの六

「女性だったね」
「そうですね。女性が教祖の宗教です」
「そして女性の力が凄く強いそうだけれど」
「それもまたいいと思います」
佐藤は義正にはっきりと話した。
「平塚先生のお話ですと女性は太陽ですから」
「天照大神だね」
我が国特有の考えである。女性が太陽神というのはだ。
「ではまさに」
「世界の半分は女性ですから」
「その女性を尊重しなくてはならないね」
「あくまで私の考えです」
「いや、それでいいと思うよ」
義正は佐藤の考えをよしとした。そのうえでの言葉だった。
「正しいよ」
「正しいですか」
「うん、今の日本だと正しいね」
「有り難うございます」
「御礼はいいよ。じゃあ」
ここまで話してからだ。また言う義正だった。
「今の日本だと」
「御二人で行かれるべきです」
そうだというのだった。
「是非共です」
「そうだね。父上と母上の前に」
こう話す義正だった。
「行かせてもらうよ」

「はい、それでは」
「では真理さんと話をしよう」
二人で話していく。
「今は」
「そうして決められますね」
「自分だけで決めるものじゃない」
二人でのことだからだ。それでだというのだ。
「だからね」
「そうあるべきです。それで」
「それで？」
「こうして今私にも相談してくれましたね」
あらためて言うのはこのことだった。
「そのことはまことに有り難いです」
「君は。僕とずっと一緒にいてくれているから」
「だからですか」
「うん、いつも頼りにしているよ」
こうだ。佐藤に微笑んで話すのだった。
「君がいてくれたから。僕は真理さんとの交際にも勇気を持てたし」
「今は。自由な恋愛が育てられると」
「その言葉に勇気付けられたんだよ」
「そうだったのですか」
「その君がいてくれるから」
それでだとだ。義正は佐藤に微笑んで話すのだった。
「僕は勇気を持てたんだよ」
「そうだったのですか」
「それでね」
義正は彼の佐藤への話を続ける。
「僕は真理さんと共にね」
「はい、そうしてですね」
「二人で進むよ」

このことをだ。ここでも話すのだった。
「そうするよ」
「はい、それでは」
「では今は」
話を一段落終えてだ。そしてだった。
彼はだ。こんなことも話した。
「じゃあ何か食べに行こうか」
「食べにですか」
「お腹が空いたよ。何か食べよう」
「そうですね。それでは」
佐藤も主の言葉に応える。ここでだ。

第十四話　忍び寄るもの七

彼はだ。義正にこの食べ物を勧めたのだった。
「アイスクリームはどうでしょうか」
「あの白く冷たいお菓子だね」
「はい、西洋のです」
この時代にだ。アイスクリームも定着してきていたのだ。
「それは如何でしょうか」
「いいね」
話を聞いてだ。義正も笑顔で話した。
「それじゃあアイスクリームを食べようか」
「丁度いい具合にそこに店があります」
砂浜の入り口にだ。それがあるというのだ。
「そこに入りましょう」
「あれは出店だね」
見ればだ。あまり大きくはない。そこには三十位の男が明るい顔でだ。それで店に来る者に笑顔で商品を売っているのだった。
それを見てだ。義正は話した。
「あそこに入るんだね」
「立ったですが宜しいでしょうか」
「うん、いいよ」
それもいいとだ。義正は微笑んで佐藤に答えた。
「それじゃあね」
「ではあちらに」
こうしてだった。二人はだ。
その出店に向かいだ。アイスクリームを買うのだった。一人一つずつだ。買ってそのうえでだ。二人はその場でだ。それを食べはじめた。
買ったアイスを食べてだ。まずは義正が言った。

「いいね」
「はい、美味しいですね」
「そうだね。アイスクリームはね」
「お好きでしたか」
「お菓子は好きだから」
だからだとだ。義正は言うのだった。
「だからね」
「そういえば旦那様は」
「甘いものは好きだよ」
そうだというのである。
「それは知っているね」
「子供の頃からですね」
「確かにお酒も飲むけれど」
「日本酒も。ワインも」
「今はワインの方がいいかな」
こう話すのだった。
「そちらの方がね」
「ワインがお好みですか」
「飲みやすいしそれに」
「それに？」
「日本酒の後や前だと甘いものは駄目だからね」
だからこそ日本では酒を飲む人間は甘いものが駄目な人間が多いのだ。ただ明治帝の様にどちらもいけるという人物もいる。
「けれどワインはそうではないから」
「だからですか」
「うん、だからだよ」
それでだと話す義正だった。
「最近はワインがいいね」
「それだと海のものが駄目ではありませんか？」
佐藤もワインについては知っている。そうして話すのだった。

「あれはどうも海のものには」
「それは赤だね」
「赤ワインですか」
「海のものには白いワインがいいんだよ」
そうだというのである。
「白ワインもあるから」
「では魚介類等には白ワインですか」
「そうだよ。白だよ」
またそれだと話す義正だった。
「肉類や伊太利亜のパスタには赤でね」
「成程、赤と白で分けられるのですね」
「例えばこのアイスクリームには」
そのだ。アイスクリームを食べながら話す義正だった。冷たい、子オチに近い冷たさとそれに甘さがだ。義正の口の中を支配していく。

第十四話　忍び寄るもの八

それを味わいながらだ。彼は佐藤に話すのだった。
「赤がいいだろうね」
「菓子に酒ですか」
「ワインだったらいけるよ」
「左様ですか。ワインならですか」
「それでどうかな」
「面白いと思います」
ワインと菓子、その組み合わせについてだ。佐藤も答えた。
「それもまた」
「そうだね。じゃあ今度ね」
「そうして召し上がられますね」
「そうしてみるよ。アイスクリームはいいね」
アイスを食べ続けながらの言葉だ。
そして食べながらだ。こんなことも話した。
「それじゃあもう一個貰おうかな」
「もう一つですか」
「うん、それはいいかな」
「一個だけなら宜しいかと」
佐藤は真面目な顔で主に述べた。
「甘いものは過ぎるとよくありませんが」
「それでもだね」
「一個ならばいいです。それにです」
それにだと話すのだった。話ながら店の者を見る。見ればだ。そちらはそちらで二人を見ながらだ。しきりに売りたそうな顔をしていた。
彼のその顔を見てだ。佐藤は義正に話すのだった。
「甘いものはです」

「適度ならだね」
「非常にいいものです」
こう彼に微笑んで話すのだった。
「ですから」
「そうだね。それじゃあね」
「私もそうさせてもらいます」
「君も食べるんだ」
「はい、実は私も」
彼自身もだというのだ。
「この店のアイスは気に入りました」
「そうなったんだね」
「美味です」
やはりだ。それ故にであった。
「これだけの味のアイスはそうはないと思います」
「そうだね。僕もちょっとここまでのアイスは」
「召し上がられたことはありませんか」
「あまりないね。だから余計にね」
「召し上がられますね」
「そうさせてもらうよ」
こうした話をしてだ。二人はだ。
その二つ目のアイスを食べてだ。その味と冷たさを楽しむのだった。
それからだった。義正はだ。
場所は同じだった。だが日を違えてだ。彼は真理にだ。アイスを御馳走した。
立ったままでラフな、ネクタイはしているが比較的楽な格好でだ。
彼は白いブラウスの真理に対してだ。まずはアイスの話をするのだった。
「如何でしょうか」
「アイスですね」

「この味はどうでしょうか」
「はい」
微笑んでからだった。真理はだ。
笑顔でだ、こうしたことを言うのだった。
「この味は」
「御気に召されましたね」
「こんな美味しいアイスはです」
「召し上がられたことはありませんか」
「宴の場でも」
どうかとだ。義正に話すのだった。
「そしてレストランでもです」
「ありませんでしたか」
「実はアイス自体がです」
真理はそのアイスを食べながら話すのだった。
「あまり食べたことはなかったです」
「そうだったのですね」
「はい。ですから」
「御気に召されて何よりです」
「では」
真理はだ。食べながらだった。

第十四話　忍び寄るもの九

礼儀正しい態度でだ。義正に話してきた。
「もう一つ宜しいでしょうか」
「アイスをですね」
「はい、宜しいでしょうか」
こうだ。義正に言うのだった。
「もう一つ」
「私もです」
義正もだとだ。彼は笑顔で応えた。
「そうさせてもらうつもりです」
「そうですか。義正さんも」
「二人で食べましょう」
義正は優しい声でだ。真理にこう話した。
「二つのアイスを」
「二つのアイスをですか」
「はい、二人で」
そうして食べようというのだ。これが二人の考えだった。
「そうしましょう」
「わかりました。それでは」
「はい、二人で二つのアイスを」
こうした話をしてだ。二人はアイスをまた頼んでそのうえで食べるのだった。
その二つ目、彼にとっては今回もだ。そのアイスを食べながらだ。
義正は真理に対してだ。彼が考えていることを話したのだった。
「それでなのですが」
「あのことですね」
「はい、あのことです」
まさにだ。そのことをだというのだ。

「あのことについてですが」
「義正さんのご両親とですね」
「既にその日は考えています」
日時はだ。既にだというのだ。
「その日はです」
「その日は」
「今から十日後で宜しいでしょうか」
日はだ。義正からだった。
「その日で」
「はい、それでは」
反論することも断ることもなくだ。真理はだ。
義正のその提案にだ。意を決した顔で頷いた。
そしてそれからだ。彼女はこう言うのであった。
「八条家のお屋敷に」
「参りましょう」
「そうして義正さんのご両親とですね」
「既に父上も母上もです」
「御存知なのですね」
「はい」
それはだ。もうだというのだ。
「御耳にです」
「入っておられるのですね」
「その通りです。それではですね」
「御互いに知っていてですか」
「あと必要なものは」
それはだ。何かというとだった。
「勇気です」
「勇気ですか」
「私達に今必要なことはそれです」
「勇気を出して。あの時の様に」

「こうしてわかったのですが」
二人でいて。そして舞踏会の場においてだ。どうかというとだった。
「愛にも勇気が必要です」
「そうですね。それは」
真理もだ。その言葉に頷くのだった。
「それがなくてはです」
「愛は貫けませんね」
「そして最後まで辿れません」
それもだ。勇気がなくてはだというのだ。
「とてもです」
「勇気は戦う為のものだけではなくですね」
「はい、愛についても」
「必要だからこそ」
「勇気です」
また言う義正だった。

第十四話　忍び寄るもの十

「それを持ってです」
「そのうえで」
「まずは私の両親のところに」
そしてだ。次にだというのだ。
「それからですね」
「私の両親のところに」
真理もここでこう話した。
「向かい。そして会うのですね」
「会い。私達のことを話すのです」
既に知っている相手にだ。儀式として話すというのだ。
「そうしましょう」
「はい、それでは」
「そうしましょう」
こうした話をだ。アイスクリームを食べながら話すのだった。
その話をしてからだった。義正はだった。
真理と二人でだ。彼の両親の前に向かうのだった。そこは義正の屋敷だ。
八条家の屋敷の門、その壮麗な門の前でだ。真理は出迎えに来た義正に話した。
「はじめてです」
「この家に来られたのはですね」
「おそらく。白杜家の者で」
「貴女がはじめてですね」
「はい、はじめてです」
こうだ。はじめてだというのだ。
「ですから余計に」
「勇気です」

緊張に強張る真理にだ。義正は微笑んでこの言葉を告げた。
「ここは勇気です」
「勇気を出してですね」
「そのうえで向かいましょう」
微笑みはそのままでの言葉だった。
「今から」
「そうですね。勇気を出して」
「そうさせてもらいます」
真理も微笑んだ。それと共にその微笑みにはだ。
意を決したものもあった。その言葉を受けてだ。
義正は真理の服を見た。その服は。
緋色の振袖だった。そこに白い大輪の花もある。
帯は桃色で艶やかなものがある。その姿の彼女を見てだ。
義正はだ。こう彼女に話すのだった。
「既に覚悟されていたのですね」
「それがおわかりなのですか？」
「その服は」
赤に白を配した。その服を見て言うのだった。
「赤ですが」
「赤ですか」
「赤は情熱の色です」
言うのはその色のことだった。
「ですから。その情熱をです」
「覚悟としてと言われるのでしょうか」
「表されていますね」
「特に、意識はしていなかったのですが」
「意識しなくても出るものがあります」
服にだというのである。
「服にもです」
「赤い。その服に」

「私もです」
見ればだ。彼もだった。
白い服だ。何もかもが白いスーツだ。その服について。自分の口で真理に話すのだった。
「この服は。気付かないうちに着ていました」
「御自身でも気付かれないうちに」
「それから気付いたのです」
着てからだ。そのことにだというのだ。
「私もまた覚悟していました」
「その白に出ていたのですね」
「白は純粋です」
「純粋ですか」
「純粋に覚悟を決めてです」
そのうえでだ。真理と共にだというのだ。

第十四話　忍び寄るもの十一

「貴女と二人で」
「御父上と御母上にですね」
「会うことを決意していました」
「純粋。そして情熱ですか」
「私達はそのそれぞれの心にあるものを持ってです」
そしてだ。さらにだった。
これもだ。あるというのだった。
「勇気もまた」
「それもですね」
「私達は純粋と情熱にです」
「勇気も併せ持って」
「そのうえで向かうのです」
「そうなのですね」
義正の言葉を聞いてだ。真理は。
静かに頷きそのうえで。足を一歩前に出した。
その真理を義正は迎え自分で門を開けた。そうしてであった。
屋敷の中に導いた。まずは森だった。
欧風の庭園である。左右対称でそこには薔薇を中心として様々な花が咲き誇っている。そうした花を見ながらだ。真理はこう義正に話した。
「不思議なのは」
「不思議といいますと」
「私のこの服にです」
そのだ。緋色の服にだというのだ。
「出ているものですが」
「情熱ですね」
「自分では。情熱というものはです」

どうかというのだ。自分の口でだ。
「少ないと思っていましたが」
「それが違っていたというのですね」
「そうなりますね」
こう義正に話すのだった。緑の中に紅や蒼、それに白が咲き誇る庭の中を進みつつ。左右対称のその庭はその緑が幾何学に描かれだ。それも美を見せている。
「自分では気付いていませんでした」
「情熱といってもです」
「一つではありませんか」
「様々な形の情熱があるのでしょう」
これが義正の今の真理への言葉だった。
「静かな情熱、高貴な情熱もあります」
「高貴なですか」
「緋色。普通の赤よりも高貴です」
「そういえば以前は帝が着られていましたね」
「はい、そうした色でした」
平安からの慣わしである。日本では帝は緋色の衣を着られていたのだ。支那の皇帝の黄色とだ。大体同じ様な色になっていたのだ。
「ですから。緋色はです」
「高貴の色」
「はい、高貴な情熱です」
それだというのである。
「そうなります」
「高貴な情熱ですか」
「それが真理さんの情熱です」
微笑んで話す義正だった。
「それが服に出ているのです」
「そうですか。私は」
真理は義正の言葉に戸惑いながらも頷いた。そうしてだ。

そのうえでだ。今度は彼女からだ。義正に言うのであった。
「義正さんも」
「私もですか」
「白は純粋でしたね」
「はい」
その通りだとだ。義正は頷いて答えた。
「その通りです」
「では。義正さんの純粋は」
「私のそれは」
「洋服ですから」
彼の服からだ。真理は話すのだった。

第十四話　忍び寄るもの十二

「新しい服ですね」
「そうですね。かなり定着しましたが」
「新しい白です」
それだという真理だった。
「新しい純潔です」
「それが私のですか」
「純潔にも。様々なものがあると思います」
真理は義正の言葉をそのまま返す形になっていた。二人はここでも同じ心になっていた。その同じ心での言葉をだ。話すのだった。
「だからです」
「新しい純粋ですか」
「新生でしょうか」
この言葉が出された。
「義正さんは」
「新しい純潔。新生ですか」
「はい、そう思います」
「では。私達は」
「高貴な情熱と」
「新しい純潔と。そして」
「勇気」
言葉になってだ。彼等が持っているものが紡ぎ出されていく。
「それを手にして今から」
「向かいましょう」
こうしてだった。二人はだ。
手を取り合いそのうえでだ。二人の前に向かうのだった。そうしてだった。
彼等はだ。遂にだった。

義正の両親の前に来た。そこは応接間だった。その場でだ。
義正の両親は二人の前に座っていた。その彼等にだ。
まずはだ。義正が言ったのだった。
「父さん、母さん」
「うむ」
父がだ。鷹揚に我が子に応えた。
「そちらの方がだな」
「はい」
静かにだ。父の言葉に応えるのだった。
「白杜真理さんです」
「そうだな。あの」
「はい、白杜家の末娘の方です」
「話は聞いていた」
父は腕を組みソファーに深々と座りだ。微動だにしない。
その顔でだ。こう我が子に言うのである。
「舞踏会でのことはだ」
「そうだったのですか」
「それでいいのだな」
父は鷹揚な言葉のまま我が子に問うた。
「御前はそれで」
「そのつもりです」
毅然としてだ。彼は父に述べた。
「だからこそここに」
「その娘さんを連れて来たか」
「はい、そうです」
また答える彼だった。
「なりませんか」
「若しもだ」
こう言ってであった。再び我が子に言う。
「ここで駄目と言えばどうする」

「父さんと母さんが」
「そう言えばどうする」
「それでもです」
迷うことなくだ。こう返す義正だった。
「僕はこの方と」
「共に生きたいというのか」
「はい、どうしても」
そうだとだ。また話す彼だった。
「私はこの方と二人で生きます」
「そうするのか」
「若しも」
今度はだ。母が彼に言うのだった。

第十四話　忍び寄るもの十三

「私達が義正さんに勘当を言ったらどうするの？」
「勘当ですか」
「義絶もあるわ」
一族としての縁を切る、そのことを言うのだった。
「それでもいいのかしら」
「それでもです」
まただ。こう言う彼だった。
「私はこの人と一緒に」
「私もです」
真理もだった。必死の声で言うのだった。
「私も。絶対に」
「そうなのか」
「貴女もなのですね」
「そうです。何があってもです」
義正と同じく毅然としてだ。真理は返すのである。
「私は。この方と」
「共にか」
「生きるというのですね」
「二人なら」
目の光も強い。そこには一点の曇りもない。
その目は義正も同じだった。その目を見てだ。
二人はだ。一旦言葉を止めた。そうして沈黙に入った。
沈黙の時間は短かった。だが義正と真理にとっては永遠とも思える長さだった。その気の遠くなる様な沈黙の後でだった。
まず父がだ。こう言うのだった。
「わかった」
「わかった？」

「そうだ、わかった」
こう義正、我が子と真理に言うのだった。
「その心はだ」
「そうですか」
「ならそのまま二人で生きるのだ」
強い、確かな声で二人に告げた。
「いいな」
「二人で、ですか」
「私達で」
「そうだ。そうしろ」
また二人に告げた父だった。
「そしてだ。義正」
「はい」
「安心していい。勘当やそうしたことはしない」
このこともだ。保障するのだった。
「絶対にだ」
「絶対にですか」
「御前は悪いことをしていない」
だからだ。それはないというのである。
「それでどうして御前を勘当したりするのだ」
「お父様・・・・・」
「御前はこのまま我が家の為に働いてもらう」
このことも話すのだった。
「そうしてくれ。いいな」
「わかりました」
義正は父のその言葉に頷く。そうしてだ。
二人は許されたのだった。その交際を。そしてであった。
真理の両親のところにも行く。そこでもだった。二人は許されたのだった。
彼等に許されてからだ。二人はだ。互いにマジックで話すのだっ

た。
今日もクラシックの音楽が流れている。その店の中でだ。義正は真理に話した。
「これで、です」
「そうですね。私達は」
「晴れて結ばれます」
こうだ。義正から言うのだった。
「結婚です」
「結婚ですね」
「二人で。添い遂げましょう」
「はい、二人で」
「最早私達を阻むものはありません」
少なくともだ。結ばれることについてはだった。
「それでは」
「その日時や場所は」
「それはこれからです」
「これからですか」
「正式な日時や場所はこれから決めることです」
「他に決まっていることは」
「私達が結ばれることです」
そのことはだ。既にだというのだ。

第十四話　忍び寄るもの十四

義正はそのことを決まっているとしてだ。そのうえでだった。
真理にだ。このことを告げた。
「後は。それを式として挙げるだけです」
「では私達は既に」
「はい、結婚しています」
心と心がだ。そうなっているというのだ。
「後はそれをです」
「式として昇華させるのですね」
「そうなります」
珈琲を飲みつつだ。真理に話した。
「それでは」
「はい、それでは」
「宜しく御願いします」
義正からだ。先に真理に話した。
「これからも」
「私も」
そしてだ。次は真理だった。彼女もまた義正に言うのであった。
「宜しく御願いします」
「はい、それではですね」
「御互いに」
まさしくだ。二人共であった。
そうなると話してからだ。義正は今店の中でかけられているその音楽について話すのだった。
「今かけられているのはフィデリオですね」
「フィデリオとは？」
「ベートーベンの唯一の歌劇です」
ベートーベンはその生涯で一作だけ歌劇を遺した。それがフィデ

リオという作品だ。この作品に対してベートーベンはかなりの労力を費やしてもいる。
「それの序曲です」
「それがこの曲ですか」
「そうです。妻が囚われの夫を救う話です」
「妻が夫をですか」
「普通は逆ですね」
ここで義正は微笑んでこうも言った。
「そうなりますね」
「はい。普通は夫が妻を」
「しかしフィデリオでは違います」
そのだ。ベートーベン唯一の歌劇においてはというのだ。
「助け出されるのは夫の方です」
「それが風変わりに思えますが」
「しかし風変わりではないのです」
「違うのですか？」
「想う相手、愛する相手を救いたいという気持ち」
このことをだ。直接言うのだった。
「それは誰にもあるものですから」
「だからなのですね」
「はい、だから自然なのです」
そうした一見逆に思える話もだ。そうだというのだ。
「私はそう思います」
「そうですか」
「私は真理さんに何かあれば」
話を彼等に投影してきた。他ならぬ彼等にだ。
「そうします」
「私を助け出して下さいますか」
「そのつもりです」
覚悟をしている顔でだ。真理に話した。

「そうさせてもらいます」
「それでは私も」
真理もだ。その義正に応えてだ。珈琲のカップを置いたうえでだ。
義正に話した。
「そうさせてもらいます」
「私に何かあればその時は」
「決して逃げません」
毅然として。そのうえでの言葉だった。
「何があろうとも」
「そうですか。では私達は」
「私はその。フィデリオの主人公になりたいです」
願望だが。確かな願望を話すのだった。
「彼女に」
「では私は」
「義正さんは」
「真理さんに何かあれば助け出す」
それはだ。何かというところから話すのだった。

第十四話　忍び寄るもの十五

「西洋で言う騎士になりましょう」
「騎士ですか」
「武士は女性の為に戦う存在とは少し違いますから」
「だから騎士なのですね」
「そうです」
こう真理に話す。
「そうなります」
「騎士ですか」
「それは駄目でしょうか」
真理を見ながら。そうしての言葉だった。
「私が貴女の騎士となることは」
「いえ」
微笑んでだ。真理は義正に答えた。
「御願いします」
「そう言って頂けますか」
「是非。私の騎士になって下さい」
これが真理の言葉だった。
「そして常に私の傍に」
「いて欲しいと」
「そうして下さい」
また義正に言うのであった。
「そして私は義正さんの」
「私の」
「全てを癒す存在になりたいです」
「私の全てをですか」
「これも西洋の考えだと思いますが」
こう断ってからの言葉だった。その新たに入ってきている西洋の

考えをだ。二人は受け入れてそのうえでだ。静かに話していくのである。
「人の心は癒せますね」
「そう言われていますね」
「それができるのは人だと」
「だからですか」
「はい、御願いします」
切実な顔になってだ。真理は再び義正に話した。
「是非共」
「わかりました。では」
「義正さんが私を護って頂き」
「真理さんが私を癒して頂き」
「そうなりますね」
「これからは」
こう二人で話してだ。そのことを確かめ合うのだった。
そしてだ。そのうえでだ。義正はこうも話した。
「既に私達の心は一つになっています」
「しかし式を挙げることによって」
「一つの通過儀礼です」
結婚式はだ。そうだというのだ。
「その通過儀礼を通ってです」
「そうしてですね」
「私達は。絆をお互いに授け合うのです」
「指輪によって」
「これも西洋の慣わしです」
ここでも西洋だった。何処までもだった。
「その慣わしになります」
「それではですね」
「共に参りましょう」
「結婚式にも」

こう二人で話してだ。そうしてだった。
真理は義正に送られ自分の屋敷まで戻った。そうして屋敷に入った。
その時に婆やに出迎えを受けた。その婆やが彼女に言ってきた。
「御二人だったのですね」
「はい」
その通りだとだ。微笑んで婆やに答えたのだ。
「そうさせてもらいました」
「わかりました。ただ」
「ただ？」
「思いも寄らぬことでした」
婆やもだ。こう言うのだった。
「まさか。あの八条家の方と」
「交際していることがですね」
「そしてです」
「婚約ですね」
「それはもう済まされていますね」
こうだ。婆やは真理に問うのだった。

第十四話　忍び寄るもの十六

「そうなのですね」
「先日。それは」
「左様ですか」
婆やは真理の言葉を受けて納得した顔で頷いた。
「では間も無く」
「式はまだですが」
「しかし必ずですね」
それが行われるのは間違いない、婆やが今言うのはこのことだった。
「あの方と」
「そうなります」
「そのことです」
まさにそのことだとだ。婆やは真理に言うのである。
「お嬢様が。遂に」
「結婚することが」
「夢の様です」
まるでだ。実の娘に言う様な言葉だった。
「その日が来るとは」
「あの、婆や」
「すいません。しかしです」
「しかしですか」
「婆やは嬉しいのです」
実際にだ。温かい笑みになっての言葉だった。
「心からです」
「そこまでなのですか」
「お嬢様が幼い頃から一緒で」
言うならばだ。真理にとってもう一人の母と言っていい存在なの

だ。そのことは真理が最も自覚してそのうえで接しているのである。
「ですから。余計にです」
「それでなのですね」
「はい、そのお嬢様が幸せになられる」
屋敷の中を進みながら。婆やは真理に話していく。二人で進むいつもの廊下は二人だけの喜びに包まれている。その中での話だった。
「何と言っていいのか」
「では婆や」
「はい」
「私は幸せになって」
そしてだというのだ。
「そのうえでずっと幸せになりたいと思います」
「ずっとですね」
「この命が終わるまで」
それは遥かな先だと。そう思いながらの言葉だ。
「そうしたいと思います」
「左様ですか」
「それでいいですね」
婆やにだ。問うたのだった。
「私達は」
「そうでなければいけません」
婆やは真理にだ。少し厳しい口調で告げた。
「お嬢様」
「そうでなければといいますが」
「はい、幸せは御自身で手に入れられるもので」
「そして二人で」
「はい、それは決して手放してはならないものです」
「それが幸せなのですね」
「婆やはそう思います」
笑顔だ。だがその声も言葉も確かなものだった。

「幸せは自分で手に入れて。それから」
「手放さないように努力するもの」
「そういうものだと思います」
「手に入れるだけではないのですね」
真理はそのことにだ。今思いを巡らす。
そのうえでさらに考えてだ。自分の部屋に向かいながら述べるのだった。
「それも一人のみではなく」
「あの方との幸せですね」
「はい、義正さんと」
「ならばです」
彼と共にいる。だからこそだというのだ。
「それは決してです」
「御互いに。二人が」
「手放してはならないものです」
「私だけでも難しいものですね」
幸せを手に入れ手放さない、そのことがだというのだ。
しかしここでだ。さらにだった。

第十四話　忍び寄るもの十七

「そこに二人でとなると」
「その。二人での幸せを手放さない為には」
その為には。婆やは自分の人生経験から話していく。婆やは今これまでそれなりに長く生きてきたことを感謝した。真理に話せるからだ。
「その為にはです」
「その為にはですね」
「はい、その為には信じることです」
信頼、その言葉が出された。
「義正様をです」
「あの方を」
「そうです。信じられることです」
また話す婆やだった。
「何処までも」
「それが。幸わせを手放さない為の」
「最初の一歩です」
そうであると。婆やはその人生経験から話していく。さらにだった。
「それからです」
「人を。あの方を信じること」
「二人でいるならばまずそれからです」
「信頼から」
「ですから。決してです」
「疑ってはならないのです」
信じることは即ちそれだとだ。婆やは言葉をいささか変えて述べた。
「宜しいでしょうか」

「何処までも。信じる」
「お嬢様はそれができますね」
「幸せにヒビを入れてはならない」
疑い、それはそのままそれになる。真理はそのこともわかった。
「そうですね」
「それはできますね」
「できるようになります」
これが今の彼女の言葉だった。
「何があろうとも」
「その御心です」
婆やは真理の今の、できるようになるという言葉に応えて笑顔で頷いた。その優しい笑顔で。
「そうであればです」
「私は幸せを手放さなくて済むのですね」
「そうです。ではお嬢様」
「はい」
「何処までも信じられて下さい」
優しい笑顔のままで。真理に話していく。
「そうされて下さい」
「わかりました」
真理も笑顔になって頷く。しかしだった。
部屋の前に来た。そこでだった。
不意に咳き込む。何度かだ。それを見てだ。婆やは彼女を心配して声をかけた。
「あの」
「大丈夫です」
こう婆やに返すのだった。
「何もありません」
「最近妙に咳が多いですが」
「それは私も気付いていますが」

「風邪でしょうか」
怪訝な顔でだ。真理に問うた。
「これは」
「風邪、ですか」
「風邪は万病の元です」
昔から言われていることをだ。婆やも言葉に出した。
「くれぐれも御気をつけを」
「そうですね。それでは」
「今はお休み下さい」
そうしろとだ。真理によく話す。
「御部屋に戻られましたし」
「では。部屋に入れば」
「ベッドの中に」
具体的にだ。そうするべきだというのだ。
「本当に」
「はい」
真理も頷いてだ。そのうえでだった。
己の部屋に戻ると婆やに手伝われベッドの中に入り休んだ。真理はまどろみに入りながら休息に入った。静かに瞼を閉じそのうえで眠るのだった。

第十四話　完

２０１１・６・１５

第十五話　婚礼その一

第十五話　婚礼

その日が近付く中で。義正は兄達に話していた。
「夢の様です」
「今の状況がか」
「そうなのだな」
「はい、まさに」
その通りだとだ。何処か浮世離れした顔で答えるのだった。三人で向かい合ってそれぞれ席に座りだ。そのうえで話をしている。
「婚礼の日が近付くのが」
「そしてその日になるのが」
「信じられないか」
「本当に。夢の様です」
彼もまただ。こう言うのだった。
「私も。生涯の伴侶を得るのですね」
「誰もそうだ」
「そうなるのだ」
兄達はその彼に優しい笑みでこう話す。結婚式を前にしてそれが現実のものとは思えず夢に思えるのはだ。彼だけではないというのだ。
「幸せが近付くとな」
「自然にな」
「そうですか」
義正は兄達の話を聞きながらだ。そのことも信じられないといった顔で話した。
「そういうものですか」
「それはまだわからないか」
「そうしたことも」

「はい」
その通りだとだ。義正はやはりわからないといった顔で話す。
「そうしたことがなかったですから」
「だがこれからわかる」
「今からな」
兄達は優しい笑顔で弟に対して言う。
「その幸せが現実のものになりだ」
「それからだ」
「そうですか。これからですか」
「さらにだ。結婚式の後でだ」
「もう一つある」
義愛と義智は義正にさらに話す。
「それは子供ができた時だ」
「そう言われている」
「子供ですか」
子供と聞いてだ。義正の目が動いた。そうしてだ。
心も動かしてだ。彼は話していく。
「それもまた」
「やはり想像できないな」
「子供のことになると余計に」
「兄さん達も」
兄達もだ。どうかと話すのだった。
「それは」
「いや、妊娠した」
「私もだ」
妻達がだ。そうなったというのだ。
「今四ヶ月だ」
「私の妻は三ヶ月だ」
「そうでしたか」
兄達は結婚したのだ。そして遂にそうなったというのだ。今度は

だ。
「兄さん達は」
「やはり信じられない」
「現在進行形でだ」
「ですか。しかし子供もまた」
義正は子供についても考えていく。だが、だった。
そのことは式以上にだ。想像できなかった。それでだった。
首を捻り眉を少し顰めさせてだ。理解できないものを考える顔になって言うのだった。
「想像できません」
「そうだな。式もまだなのだから」
「どうしてもそうだな」
「二人からさらにですか」
義正は言うのだった。

第十五話　婚礼その二

「三人になりさらに」
「子供は一人だけとは限らない」
「私達がそうである様にな」
「はい、私達は四人兄妹ですから」
「それと同じだ」
「一人とは限らないのだ」
兄達はまた義正に話した。
「家族は増えていくのだ」
「幸せはな」
「幸せは増えていくもの」
義正は兄達の話を聞いて呟いた。そのこともまだ信じられなかった。
「二人だけではなく」
「実際に父上と母上がそうではないのか？」
義愛は弟に対して述べた。
「御二人は。実際にだ」
「結婚し二人になり」
「そうだ。私達を産みだ」
「より幸せになったのですね」
「子供はその存在自体が幸せなのだから」
父親になるからこそ。だからこそ言える言葉だった。
「だからこそだ」
「左様ですか」
「そう。幸せは増えるもの」
今度は義智が言う。このことはだ。
「限りがあるものではないのだ」
「限りなく増えていくもの」

「それが幸せだ」
義智はこう義正に話す。
「そうしたものなのだ」
「二人だけでなく。限りがあるものでもなく」
「その無限の幸せがだ」
「今からはじまる」
兄達は温かい目になり。弟に話していく。
「現実のものとしてな」
「そうなっていくのだから」
「今はそれが次第にわかってくる時なのだ」
「だから。今はだ」
「今はそれを実感する時ですね」
このこともわかった。兄達と話して。
「私自身が」
「だから。しっかりとな」
「そうしてくれ」
「わかりました」
このことはわかったのだった。現実になるかどうかはまだだが。
そうした話もするのだった。そして義正は兄達にこんなことも話した。
「それでなのですが」
「うむ、何だ」
「何かあるのか？」
「現実のものだとわかる幸せについてです」
そのことだとだ。彼は笑顔で兄達に話す。
「それを味わって欲しいのですが」
「味わう」
「というとそれは」
「ワインです」
微笑んでだ。それだというのだ。

「それは如何でしょうか」
「ワインか」
「どの国のワインなのだ？」
「我が国です」
つまりだ。日本のワインだというのだ。
「甲府でとれた葡萄からのワインですが」
「あれか。我が家も売っている」
「あのワインか」
「飲んでみましたが美味です」
この時代ワインといえば舶来のものだった。北原白秋も詩に残していることからもわかる。だが義正はだ。あえて我が国のワインだというのである。
「それは如何でしょうか」
「そうだな。我が家のものを確める為にも」
「ここは」
「飲みましょう」
笑顔でまた言う義正だった。

第十五話　婚礼その三

「三人で」
「そうするか」
「いえ、ここは」
義愛は頷いたが義智はこう言うのだった。
「三人だけではなくです」
「三人だけではなくというと」
「一体？」
「四人ではどうでしょうか」
微笑んでだ。こう兄弟に提案してきたのである。
「あの娘も入れて」
「義美もか」
「あの娘も」
「はい、今この屋敷にいますね」
その所在も尋ねるのだった。
「ですから」
「いや、残念だが」
すぐにだった。義愛が次弟に答えた。
「あの娘は今家にはいない」
「そうなのですか」
「父上と母上のお供でだ」
「外に出ていますか」
「そうだ。いつも通りな」
三人の妹である義美は両親、即ち八条家の総帥である二人の秘書の様なことをしているのだ。だからその行動を共にしているのだ。
それで今はいないというのだ。それを聞いてだ。
義智は残念な顔になってだ。それで言うのだった。
「なら。仕方ないですね」

「三人で飲むか」
「そうしましょう」
こう兄にも答えるのだった。
「それなら」
「そうしましょう。ではです」
「ワインを飲みましょうか」
義正が答えてだ。そのうえでだ。
三人はワインを飲んだ。その甲州ワインをだ。その味は。
「いいものだな」
「はい」
義智は兄の言葉に満足している顔で答える。テーブルの上にはそのボトルがある。三人のそれぞれの手にはグラス、そしてその中のワインを飲んでいるのだ。
それを飲みながらだ。義正も言う。
「日本のワインもです」
「欧州のワインの様にか」
「美味いのだな」
「何もかも欧州が第一かというとそうでもないでしょう」
義正はその欧州崇拝も否定していた。
「こうして日本のものもです」
「充分にいい」
「そういうものだな」
「仏蘭西では料理もワインも何かと評価をつけるそうです」
所謂星だ。その話も出すのだった。
「しかしそれは権威でありです」
「本当の味やよさがわかっているかどうか」
「それとは別か」
「音楽や文学も同じです」
そうしたものもだ。同じだというのだ。
「何でも欧州が第一とは限らないでしょう」

「欧州が欧州の基準で決めているならだ」
義愛もわかっていた。そうした権威付けは欧州基準で行われていることにだ。
「どうしても欧州が第一になるな」
「はい、主観によってです」
「権威は主観によって決められるか」
「ですから案外あてにならないものです」
「ではこのワインも」
「欧州から見れば取るに足らないワインでしょう」
彼等の基準、即ち欧州の主観から見ればそうだというのだ。
しかしそれに対してだと。義正はあえて言うのだった。
「しかし。こうして飲むとです」
「欧州のそれにもな」
「決して負けてはいない」
「そう思います。要は他人がどう言うかではなく」
「自分がどう思うか」
「それが大事なのだな」
兄達もそのことがわかったのだった。今飲んでいる甲州ワインを飲んでだ。

第十五話　婚礼その四

そしてだ。そのワインをさらに飲みだった。二人は末弟に問うた。
「もう一本あるか」
「できればもう少し飲みたいのだが」
「はい、あります」
微笑んでだ。義正は兄達の言葉に答えた。
「ではもう一本、いえ二本出しましょうか」
「それで三人で一本ずつだな」
「そうなるな」
「若し義美がいればです」
そのだ。三人の妹達がいればというのだ。
「さらにもう一本出していました」
「それで四本だな」
「四人で一本ずつなだ」
「そう考えていましたが」
笑顔で兄達に話す。
「今は三本で」
「そうするか。ワインも飲み過ぎては駄目だからな」
義愛は飲み続けながら笑顔で述べた。
「だからここはな」
「そうですね。一本ずつでよしとしましょう」
義智も兄に応えて話す。
「ここは」
「では」
義愛も言いだ。そうしてだ。
三人は一本ずつ飲みだ。甲州ワインの味を楽しむのだった。
義正が甲州ワインを楽しんでいる頃だ。真理は。
麻実子、そして喜久子達と共に抹茶を飲んでいた。茶室で菓子を

食べながらそうしている。狭い茶室に三人でそうしているのだ。
真ん中の茶器等を見ながらだ。まずは喜久子が言う。
「驚きました」
「あのことですか」
「はい、とても」
静かな口調でだ。真理に話すのである。三人の手にはそれぞれ見事な碗がありその中に茶がある。茶は奇麗な緑である。
その緑も見ながらだ。喜久子は真理に話すのである。
「まさか真理さんがあそこまで大胆だとは」
「破廉恥だったでしょうか」
「いえ、破廉恥ではありません」
それではないことははっきりとさせるのだった。
「大胆です」
「そちらですか」
「そして。見事です」
こうも話す喜久子だった。
「あそこまで為されるとは」
「そうなのですか」
「人は。女性も」
女であっても。この時代の考えを喜久子も持っているのだった。
その彼女がだ。こう真理に話す。
「勇気を持つべきです」
「勇気をですね」
「そう思います」
微笑んでだ。真理に話すのだった。
「私もまた。ですが」
「ですが？」
「それを行動に移すことはです」
それはだ。どうかというのだ。
「難しいことだと思います」

「そうですね」
麻実子もだ。喜久子のその言葉に頷いて述べた。
「そうしたことは。実際に行動に移すのは」
「しかし真理さんはです」
「私は、ですか」
「それを果たされました」
微笑んでだ。真理本人に話すのである。
そしてだ。真理にこうも告げた。
「御立派です」
「そんな、私は」
「いえ、勇気を以てそれを成し遂げることはです」
「それはですか」
「はい、立派です」
まさにだ。そうだというのだ。

第十五話　婚礼その五

「真理さんは非常に素晴しい方です」
「そうですね」
麻実子もだ。ここでも喜久子のその言葉に同意して頷いた。
「だからこそ幸せになられるのですね」
「いえ、その幸せはです」
幸せについてだ。真理は二人に話すのだった。
「一人ではできないものです」
「そうなのですか？」
「一人ではですか」
「はい、できません」
そうだとだ。また二人に話すのだった。
「とても。できません」
「そうなのですか」
「一人では」
「幸せは一人では手に入れられない時があります」
「真理さんの様に」
「そうなのですね」
「はい」
まさにそうだというのだ。今の真理がそうだというのだ。
そしてだ。その真理がさらに話すのだった。
「私は。義正さんがおられるからこそ」
「あの方がおられるから」
「幸せになれる」
「一人での幸せは大きなものではありません」
真理はこうも話した。
「しかし二人ではです」
「大きな幸せ」

「そしてそれを手に入れることは」
「非常に大きいです」
真理は笑顔で話す。
「私はそう思います」
「あの方と共にいるからこそ」
「大きな幸せを手に入れられますか」
「そのことが何となくですが」
前置きはした。しかしそれでもだというのだ。
「私もわかってきたと思います」
「大きな幸せは一人では手に入れられない」
「二人いてこそ」
「そもそもその勇気もです」
喜久子が言うだ。その勇気についても話すのだった。
「あの方がおられてこそでした」
「二人いるからこその勇気」
「そうした勇気ですか」
「勇気も。一人の勇気は小さいです」
幸せを手に入れるだ。その勇気もだというのだ。
「しかしその勇気もです」
「二人の勇気ならばですね」
「大きな勇気なのですね」
「そうです。二人の勇気が合わさると」
そうするとだ。真理は話を続ける。
「それではです」
「では。真理さんはその御二人の勇気と幸せを手に」
「これから生きられるのですね」
「そうします。是非」
二人に話す。そしてだった。
真理は二人にだ。あらためて話した。
「それでなのですが」

「はい、それで」
「それでとは」
「お茶を飲みましょう」
こう言うのだった。三人が今飲んでいるその抹茶をだ。
「そうしましょう」
「そうですね。折角のお茶ですし」
「それなら」
「お茶はいいものですね」
真理は微笑みと共にその茶について話す。

第十五話　婚礼その六

「飲んでいると心が落ち着きます」
「はい、紅茶や珈琲もいいものですが」
「日本のお茶もいいものですね」
「日本ですね」
茶からだ。日本の話にもなった。
「このお茶は日本のものですね」
「その日本を飲む」
「私達は今そうしているのですね」
「清らかで。とても落ち着いて」
両手に持っているそれを口に近付けてだ。茶を飲みつつの言葉だ。
「飲んだ後で心がほっとします」
「水とはまた違って」
「とてもいいものですね」
「私は味も好きです」
その抹茶のだ。味もだというのだ。
「この味も」
「私もです」
「私もまた」
二人もだ。同じだというのだ。茶の味も好きだというのだ。
「西洋のばかりではどうも心が落ち着きません」
「やはり日本もまた」
「そうですね。日本に生まれて日本に住んでいるから」
「どうしても日本のものに親しみますね」
「落ち着きを感じます」
「西洋は確かに素晴しいです」
だがそれでもだとだ。真理は言うのだった。
「しかしです」

「しかしですね」
「それでも」
「はい、日本人ですから」
「日本のものが最もですね」
「よいというのですね」
「私はそう思います」
真理は二人に静かに話すのである。
「ですから今もです」
「抹茶をですね」
「飲まれているのですね」
「おかわりもされますね」
真理は微笑み。二人に尋ねた。
「そうされますね」
「御願いします」
「飲み終えたら」
どうかとだ。二人も答える。
こうしてだ。話は決まったのだった。
三人は茶を飲んでいく。それと共に和菓子も食べる。それは赤や白の奇麗な砂糖菓子だ。真理はその菓子も手に取り話をするのだった。
「こうしたお菓子にしてもです」
「やはり日本のものは違いますね」
「落ち着いています」
「そうです。とても」
菓子についてもだ。微笑みと共に話す真理だった。
「気品があり落ち着いています」
「甘さも。上品な甘さで」
「とてもいいですね」
「西洋や支那のお菓子は」
そうした国々の菓子はどうかという話にもなる。

「美味ですが落ち着きませんね」
「こうした和菓子の様には」
「どうも」
「西洋人や支那人が食べれば違うと思います」
彼等ならばだというのだ。その国ならばだ。
「何故なら彼等がそうした菓子を作ったのですから」
「この和菓子は日本人が作った」
「私達の祖先の方々が」
麻実子と喜久子はその菓子を見て話していく。まだ口の中には入れていない。

第十五話　婚礼その七

その菓子を見つつだ。話すのだった。
「日本人に合う様にですか」
「作ったものだからこそ」
「日本の風土の中で」
「風土と先人の力」
二つのことがだ。合わせて話される。
「その二つがあってこそです」
「そうですね。その場所がありそこに住んでおられる人達がおられて」
「そうして作られていくものですね」
「お茶やお菓子は」
「他のものもでしょう」
茶を手にしたままで。真理は茶や菓子だけではないともいうのだった。
「おそらくです」
「では文化も」
「そうしたものもですか」
「はい、それは文化全体に言えることでしょう」
またこう話す真理であった。
「あらゆることがです」
「そうですか。この茶器も」
「こうしたものも」
「岡倉天心だったでしょうか」
日本文化の素晴しさを再確認させた人物だ。多くの文化品や芸術品を収集し集めたことでも有名だ。日本文化史上の偉人の一人だ。
その彼のこともだ。話されるのだった。
「あの方もです」

「そのことに気付いておられてですか」
「日本文化を保護された」
「そうだと思います。それでは」
ここまで話してだった。真理はその茶を飲んだ。それからだ。
満足した笑みでだ。二人に述べる。
「ではまた一杯」
「はい、それでは」
「おかわりを」
二人も笑顔で頷く。そしてだ。
喜久子がだ。ここでまた話してきた。
茶を待ちながらだ。彼女は話すのだった。
「そういえばですが」
「そういえばとは？」
「私以前に」
どうかというのだ。真理が淹れる茶を見ている。
「八条さんと御会いしたことがあります」
「そうだったのですか」
「あの方と」
「少しお話をしただけでした」
これといってだ。話をしていないというのだ。喜久子にとってはそうしたものだった。そうしたもので終わってしまったことなのである。
「それだけでした」
「そういうことがあったのですね」
真理は彼女の言葉を聞いてこう述べた。
「そうでしたか」
「はい、本当に少しだけで」
尚且つだ。どうだったかというのだ。
「一度だけでした」
「お話されたのは」

「そして今はです」
喜久子は今の彼女のことも話した。
「あの方とお付き合いをさせてもらっています」
「喜久子さんの婚約者の方と」
「あの方と」
「そうしています」
こうだ。笑顔で彼女自身の今を話すのである。
「幸せです」
「喜久子さんですか」
「幸せになられているのですか」
「とても。幸せです」
こんなことも話すのであった。
「このまま幸せに。二人で進んでいきたいです」
「真理さんの様にですね」
麻実子が笑顔でその喜久子に話した。

第十五話　婚礼その八

「そうなられますね」
「そう願っています」
「左様ですか。いいことですね」
「そしてそれは」
喜久子は幸せの中にあるその笑顔でだ。その麻実子に返した。
「麻実子さんもですね」
「はい、私も」
彼女もだ。自分で認めるのだった。自分自身のその幸せのことを。
「今幸せになろうとしています」
「婚約が決まったとか」
「決まりました」
「そうなのですか。貴女も」
「はい」
幸せに満ちた顔で頷いての言葉だった。
「そうです。いよいよ」
「誰もがそうなるのですね」
真理は麻実子のことも聞いてだ。至福の顔で言った。
「幸せに」
「そうですね。誰もが」
「そうなっていきますね」
「幸せは人それぞれですが」
幸せと一口に言っても様々な幸せがある。真理はそのこともわかってきていた。
わかったうえでだ。そのうえで言うのであった。
「それが邪な幸せでない限りは」
「実現されるべき」
「そうだというのですね」

「そう思います。幸せは手に入れるものですが」
それでもだというのだ。
「他の方を害したり奪ったりするものではありません」
「そうした幸せは幸せではない」
「では何でしょうか」
「それこそ不幸です」
普通とは違った使い方だがこう言うのだった。
「それは不幸です」
「不幸ですか。それは」
「そうした幸せは」
「本当の幸せではないのですから」
だからだとだ。これが真理の言いたいことなのだ。
「そう思います」
「幸せは手に入れ育むべきで」
「奪ったり害したりするものではないですか」
「そうですね。お話を聞きますと」
「私達もそう思えます」
「そうですね。では」
ここまで話してだった。真理は。
また茶を淹れた。そのうえで二人にその茶を勧める。
「では。もう一杯」
「はい、御願いします」
「宜しく御願いします」
喜久子と麻実子もだ。幸せになろうとしていた。義正と真理を中心にしてだ。幸せが拡がり育まれようとしているかに見えていた。
そのことは伊上も見ていた。そのうえでだ。
屋敷に来た古い知人にだ。こんなことを話すのだった。
海が見える緑の庭にいてだ。その言うことは。
「こうして幸せになっていくのは」
「いいことですね」

「はい、とてもいいことです」
笑顔で知人に話すのである。
「これ以上いいことはありません」
「しかも八条家と白杜家の対立が消えました」
「この度の婚礼で」
「私も。両家の対立については」
知人も話すのだった。青い海と白い雲を見ながら。緑豊かな庭からその二つが見える。洋館の庭からだ。その絵画の如き世界が見えている。
それを見つつだ。伊上に話すのである。
「どうにかならないかと思っていました」
「しかし。それが遂にです」
「収まったのですね」
「それも見事な形で」
「八重垣姫ですね」
知人が出す名前はこれだった。
「まさにそれですね」
「八重垣姫ですか」
「武田と上杉もまた争っていました」
その両家の対立がそのまま歌舞伎になったのだ。戦国時代において繰り広げられた対立がそのまま歌舞伎となり恋愛模様となったのだ。

第十五話　婚礼その九

「しかしそれもまた」
「愛により結ばれましたね」
「それと同じですね」
「確かに。ロミオとジュリエットにはなりませんでした」
伊上もその雲と海を見ながら話す。雲のある空も青く海が辿り着く砂浜は白い。そこにも青と白がある。彼もまたそれを見ているのだ。
それを見つつだ。彼はさらに話す。
「悲劇にはです」
「幸せな結末になりますか」
「いえ、結末ではありません」
結末かどうかについてはだ。伊上は否定で述べた。
「結ばれて結末と言われるのですね」
「はい」
その通りだとだ。知人も答える。
「結ばれ。そして」
「結ばれることは事実ですがしかしです」
「結末ではないのですか」
「はじまりです」
むしろ逆でだ。そちらだというのだ。
「それははじまりになるのです」
「結ばれて終わりではなくはじまりですか」
「幸せが成就されます」
それからだとだ。伊上は話していく。
「そして次はその幸せをです」
「その幸せを」
「守っていくのです」

「守るのですか」
「そして育んでいくのです」
守るだけではなくだ。それもあるというのだ。
「そういうものなのです」
「そうなのですか」
「そうした考えには」
「至りませんでした」
そうだったとだ。知人は不覚を感じた様にして話す。
「それはとても」
「そうでしたか」
「しかし。そうなのですね」
不覚からだ。知った顔になってだ。伊上に言うのだった。
「結ばれて。そこからなのですね」
「何かを成し遂げて終わりならです」
それならばだとだ。伊上はこのことを引き合いに出した。
「明治維新もです」
「あれも。確かに」
「維新がなって終わりではなく」
「そこからでしたね」
「いや、大変でした」
彼等はどちらも維新に関わっている。とりわけ伊上は長州出身で山縣と親しかった。だからこそ余計にそのことを実感できるのだ。
実感したうえでだ。そのうえでだった。
「何度も倒れましたね」
「そうでしたね。先が見えませんでしたし」
「しかしです」
それでもだとだ。伊上は笑顔で話した。
「それでも今はです」
「日露戦争に勝ち先の戦争にも勝ち」
「何とか生きています」

日本がだ。そうなっているというのだ。
「そうなっていますから」
「今も続いていますね」
「そういうことです。維新で終わりではなく」
「戦争に勝っても終わりではなかった」
「あらゆることがそうです」
伊上はまだ海や空を見ている。そうしての言葉だった。
「終わりは。はじまりでもあるのです」
「一つのことが終われればそこからあらたなことがはじまる」
「そうです。そして彼等も」
「その八条家と白杜家の若いお二人も」
「幸せになりそうして」
「さらに幸せを目指す」
「そうなるのです。いいことだと思います」
伊上の言葉が微笑んでいた。その微笑む言葉と共にだ。

第十五話　婚礼その十

客人に顔を向けた。そのうえで今度は。
彼、その客人にこんなことを述べたのだ。
「私はこれまでです」
「これまでとは」
「公では言えないこともしてきてもいます」
「そうですね。それは」
「政治の世界にいて。いえ維新の頃は」
「あの頃は京都にいて」
「斬って斬られてでしたから」
幕末の風雲の時代に彼等は都にいたのだ。当時の都は佐幕派と攘夷派に分かれて血生臭い戦いを繰り広げていたのである。
伊上は長州の者としてそこにいてだ。その血煙の中を生きてきたのだ。
そのことについてだ。彼は客人に述べた。
「私も何人か斬っています」
「私もです」
「斬られもしましたし傷もあります」
これは山縣も同じだったという。彼にしろ当事京都にいた者達は無数の傷を負っているのが普通だった。何しろ命を賭けていたのだから。
そのことも話してだった。
「幾人も斬ってきました」
「そして維新になってからは」
「陰謀の世界にもいましたし戦場にも出ました」
「貴方は戦場を駆け巡りもされましたから」
「戊辰戦争に西南戦争」
そうした戦争にだ。参戦していたのだ。

「日清戦争にも出ました」
「日露でもでしたね」
「はい、加わりました」
とにかくだ。日本の重要な戦いには何時でも参戦していたのだ。
その過去を思い出してだ。そのうえでの言葉は。
「そこでも多くの死を見てもきましたし」
「しかしそれでもですか」
「幸せを信じています」
そうだというのだ。
「人は幸せになれるということを」
「左様ですか」
「はい、ですから二人には是非共です」
「わかりました。ではそうお願いされて下さい」
「そうします。間も無くですし」
微笑みだ。こんなことも話したのだった。
「二人の婚礼は」
「終わりでありはじまりは」
「そのことも見させてもらいます」
こう言うのだった。
「是非共」
「そうですか」
「この話はこれで終わりです」
伊上は話を終わらせた。そのうえでだ。
客人にだ。こんなことを提案した。
「ではこれからですか」
「これから?」
「何か召し上がられますか?」
客人にだ。食事を勧めたのである。その食事は。
「ステーキでもどうでしょうか」
「ステーキですか」

「はい、それはどうでしょうか」
「いいですね。実は私ステーキは」
「お好きですか」
「大好物の一つです」
客人は期待している笑顔で述べる。
「それではです」
「はい、では共に」
「そうさせてもらいます」
「そしてです」
ステーキだけでなくだ。さらにあるというのだ。

第十五話　婚礼その十一

「酒ですが」
「ステーキと共に飲む酒といいますと」
「おわかりですね」
「ワインですね」
客人はその期待している笑顔のままそれだと答えた。
「それになりますね」
「そうです。伊太利亜からのワインです」
「伊太利亜ですか」
「ワインは仏蘭西のものだけではないのです」
「それは聞いていますが」
「伊太利亜のワインは飲まれたことはないですか」
「はい、実は」
そうだとだ。客人はいささか戸惑った顔になって答えた。
「ないです」
「そうだったのですか。伊太利亜のワインは」
「もっぱら独逸のものを」
飲んでいるというのだ。ワインは独逸のものも知られている。モーゼルワインのことは日本においても知っている者は讃えていたのだ。
その酒のことをだ。客人はここで話すのだった。
「それを飲んでいます」
「そうですか。だからなのですね」
「はい、伊太利亜ははじめてです」
「左様ですか。では余計に」
「飲ませてもらいます」
こう話をしてだった。二人はそのステーキと伊太利亜のワインを楽しむのだった。そうして二人の幸せの終わりとはじまりを待って

いた。そして。
遂にだ。その日が来たのだった。
義正は既に白い礼服に着替えていた。その服こそがだった。
「西洋ではその服でだな」
「婚礼に向かうのですね」
「はい」
その通りだとだ。彼は自分の前にいる両親達に答えた。
「その通りです。この服で」
「あの十字架の前で」
「式を挙げるのですね」
「実際に見られたことは」
「実ははじめてだ」
そうだとだ。父が答えた。
「今までなかったことだ」
「そうだったのですか」
「縁がなくてな」
こうした場に同席するのも縁だ。そうだというのだ。
「だからだ。なかった」
「左様でしたか」
「しかし。はじめて見るのがな」
「そうですね」
母もだ。今の我が子の姿を見て笑顔で言うのだった。
「義正で何よりだ」
「本当にそう思います」
「有り難うございます。それでは」
彼は式に向かうことになった。今彼等は結婚式場の控え室にいるのだ。無論同じ建物の中に真理もいる。まさに今二人は主役だった。
その主役の一人に対してだ。義正の両親と共にいる小柄な少女が言ってきた。顔立ちは母を若返らせた様な感じだ。その彼女がだ。
義正を見てだ。こう言うのだった。

「今のお兄様は」
「どうしたんだい、義美」
「普段以上にです」
どうかというと。
「御見事に見えます」
「いつもよりもかい？」
「はい。何か輝いて見えます」
そうだというのである。
「いつものお兄様とは違う様です」
「同じだけれどね」
義正は妹のその言葉に少し笑って述べた。
「僕はいつもと変わらないよ」
「そうでしょうか」
「そうだよ。変わらないよ」
また笑顔で話すのだった。
「いつもとね」
「ですが私には」
「そうは見えないんだね」
「やはり立派に見えます」
そうだというのだ。彼女から見れば。

第十五話　婚礼その十二

「凛々しく。そして」
「そして？」
「奇麗です」
「そうだな。そうした感じだな」
「今の義正はそうですね」
両親もだ。末娘の言葉にだ。満足した顔で述べるのだった。
「晴れの場に向かうせいか」
「そう見えます」
「そうなのですか」
言われた本人はあまり自覚することなくだ。こう返した。
「今の私はそうですか」
「そうだ、いい感じだ」
「場に飲まれることもないでしょう」
「場にですか」
つまり己の式の場にだ。飲まれることもないというのだ。
義正は両親のその言葉を聞いて考える顔になった。そのうえでだ。
どうもわからないといった様子になり。彼等に問い返した。
「そうしたこともあるのですか」
「そうだ。ある」
「場は魔物でもあります」
「魔物ですか」
「場に飲み込まれて己を見失うな」
「そういうことです」
具体的にはだ。そうだというのだ。
「いいな。今の御前は場に向かうことができる」
「自分がしっかりとありますから」
「場に飲まれず。そのうえで」

「式を最後まで無事に果たせ」
「そうして幸せをはじめるのです」
「幸せを」
この言葉でおおよそがわかりだ。義正もだ。
しっかりとした顔に戻ってだ。そのうえでだった。
その次に微笑みになり。両親に答えた。
「わかりました。それでは」
「御前が先に式場にいてだ」
「そうしてあちらの方がですね」
「はい、来られます」
話は式のそれに移った。西洋式のそれにだ。
「新婦のお父上がエスコートされて」
「白杜家の彼がか」
「そうですね。あの方が」
両親も今はその名を口にしても何も思わない。むしろ親しみさえ感じていた。
そのことに気付いてだ。二人は顔を見合わせて笑ってだった。
「不思議だな」
「そうですね」
「これまでは名前を口にするのも憚れた」
「思うことさえ」
「しかし今ではこうして」
「自然に思えます」
「そうですね。本当に」
義美もだ。微笑みつつだった。両親と兄に話す。
「これまではなかったことです」
「しかし本来はそうあるべきだった」
父は笑顔で話した。
「無意味な対立だったのだからな」
「その通りですね。だからこそ」

「ではだ」
母に応えて。そしてだった。
父は立ち上がった。母も続く。
立ち上がってから再びだ。義正に対して尋ねた。
「そして義愛と義智だが」
「もうここに来ていますね」
「はい」
来ているというのだ。二人もだ。
「既に来られています」
「そうか。それではだ」
「二人もここに」
両親は義正からその話を聞いてすぐにこう言った。
「呼んでくれるか」
「それでは」
「はい、それでは」
佐藤が応えてだ。そのうえでだった。

第十五話　婚礼その十三

義愛と義智も来た。二人も西洋の礼服姿だ。しかもそれだけではなくだ。

それぞれの妻達も連れていく。彼女達もやはり礼服だ。

そのそれぞれ着飾った姿でだ。八条家の面々が揃っていた。

その中においてだ。父は笑顔で話した。

「さて、それではだ」

「今からですね」

「義正の晴れ舞台に家族で向かうのですね」

「そうしよう」

笑顔でだ。父は話した。

「一家の幸せのはじまりだからな」

「一家のですか」

「幸せのはじまりですか」

「そうだ。この結婚は二人だけの幸せではないのだ」

そうだとだ。父は子供達に話す。

「一家全員のことだ」

「八条家ですか」

「白杜家の長い対立は終わり」

それも終わり。さらにだった。

「両家の融和と友好がはじまるからな」

「そうですね。それでは」

「今から幸せを」

「それをはじめましょう」

こう話して。彼等は全員で式場に向かうのだった。彼等はそうした。

そして白杜家の控え室では。真理が。

白いウェディングドレスでだ。笑顔でいた。その彼女にだ。

まずはだ。兄が彼女に声をかけた。
「奇麗だな」
「奇麗ですか」
「ああ。今までよりもずっとだ」
「そうですか。今の私は」
「純白で汚れがなく」
そのドレスの姿はだ。まさにそれを現しているというのだ。
「こんな奇麗なものはない」
「私はそんな」
「いえ、謙遜しなくても」
「その通りでしてよ」
しかしだ。今度は姉達がこう真理に笑顔で言うのだった。
このうえなく優しい笑顔で。そうして言う言葉だ。
「今の真理さんは天使の様です」
「基督教のあの」
「天使ですか」
「そう、天使だ」
まさにそれだとだ。兄も話す。
「今の御前は。汚れのない天使だ」
「そしてその天使を手に入れられるのが」
「八条家のあの方ですね」
「はい、あの方です」
真理もそのことには微笑んで答える。そのウェディングドレスの
彼女を囲む家族達に対して。
「八条家の」
「そうだな。彼はだ」
真理の父がここで言った。
「天使を手に入れるのだ」
「そうしてですね」
兄はだ。今度は己の父の言葉に微笑みで応えて話す。

「幸せをはじめるのですね」
「そうなる。彼の、そして」
「そして？」
「そしてといいますと」
「両家の幸せは天使と彼の結婚によりはじまるのだ」
彼もだ。あちらの家の主と同じことを言うのだった。
「そうなるのだ」
「天使とですか」
「あの方との結婚により」
「全てが」
「わしは御前達の伴侶についてはだ」
真理の兄と姉達を見て。そうしての言葉だった。
「どれもいいと思っている」
「有り難うございます」
「そう言って頂けるのですね」
「主人のことを」
「彼等もわしの娘であり息子達だ」
我が子の伴侶ならばだ。そうなるというのだ。

第十五話　婚礼その十四

「その彼等が素晴しいことはいいことだ」
「その中でもあの方は」
「そうだと仰るのですか」
「いや、この場合において人は比べない」
それはしないというのだ。これは我が子達への配慮と共にだ。もう一つの理由があった。
「伴侶とは不思議なものだ」
「不思議ですか」
「そうなのですか」
「そうだ。相性というものがある」
彼がここで話すのはこのことだった。
「どれだけ素晴しい者同士でも相性が悪ければだ」
「その婚礼は悪いものとなる」
「そうなるのですか」
「真理にとって彼は」
「あの八条家の方は」
「相性がいいのですね」
「素晴しいまでにな」
西洋風の椅子に座ったうえで。満足している笑みを浮かべての言葉だ。
「いいのだ」
「では。真理は」
「その方と結ばれるのですね」
「真理さんにとって最も素晴らしい伴侶と」
「そうなる」
まさにそうだというのだ。
「これだけ素晴しい相手はいないだろう。真理にとって」

「そうですか。あの方は」
真理もだった。
「私にとっての」
「そう、最高の伴侶だ」
娘に対しても笑みを向けての言葉だった。
「だからだ。御前はだ」
「幸せにですね」
「なる。絶対にだ」
こう言うのであった。
「二人でな」
「幸せにでるね」
「それをはじめられる」
娘にだ。確かな言葉で告げる。
「安心していい」
「はい、それでは」
「では行こう」
その真理に告げた言葉である。
「今からな」
「お父様と二人で」
「因果なものだな」
ここでだ。父は苦笑いも見せた。
「西洋の結婚式というものは」
「因果ですか？」
「それはまたどうして」
「結婚は娘を。最愛の娘をだ」
その娘をだ。どうするかというのだ。
「他の相手に手渡すのだからな。それも実際にだ」
「そうですね、それは」
真理の兄がだ。父のその言葉に頷いた。
「確かに因果であります」

「それがわかってくれるか」
「私はまだ子供はいませんが」
それでもだというのだ。家庭を持ちそれでわかったというのだ。
「ですがそれでも。娘ができてそうなるとなると」
「想像して。わかるな」
「辛いものでもありますね」
「そうだ。辛い」
その気持ちをだ。彼は言葉にも出すのだった。
「とても辛い。ただだ」
「ただ？」
「それと共に嬉しくもある」
今度は純粋な笑みになってだ。家族に話したのである。
「同時にな」
「そうですね。それは確かに」
母がだ。笑顔でまさにそうだと頷くのだった。

第十五話　婚礼その十五

「娘の。真理が嫁ぎ幸せをはじめることは」
「そのことはとても嬉しい」
他の相手に与える、そのことはとても辛くともだ。
娘が幸せをはじめると思うとだ。嬉しいというのだ。
「複雑な気持ちだな」
「とてもですね」
「だが総じては嬉しい」
そちらの感情の方が勝っているというのだ」
「真理、ではな」
「ではお父様」
「今から行こう」
「御願いします」
こうしてだ。真理は自分の父のエスコートを受けてそのうえでだ。
結婚式のその場に向かうのだった。そしてその場においてであった。
義正と手を取り合いだ。そうしてだ。
式場の前にいる神父の言葉に誓いを立てるのだった。
こうして二人は婚礼を迎えた。はじまりを迎えたのだ。
そのうえで二人になってからだった。
二人はもう礼装ではない。お互いにスーツとブラウスになってそのうえで左右に緑がある道を並んで歩き。その中で、であった。
義正がだ。真理に言ってきた。
「はじまりましたね」
「そうですね。やっと」
「私達ははじまったのです」
真理にだ。笑顔で言ったのである。
「全てはこれからです」
「これからはじまり。そして」

「幸せになりましょう」
「では。私達は」
「二人です」
一人ではだ。なくなったというのだ。
「二人になったのです」
「そうですね。二人で」
「それでなのですが」
話は変わった。また義正からだった。
「今から何処に行かれますか」
「そうですね。今は」
「真理さんが望まれる場所に」
彼も行くというのだ。その二人で。
「一緒に行きましょう」
「では」
「はい、それでは」
「マジックに」
微笑みだ。その店に行きたいと答える真理だった。
「マジックに行きましょう」
「あの店にですね」
「二人の思い出の場所の一つですから」
だからだ。その店にだというのだ。
「そこで珈琲を飲んでそれと」
「音楽ですね」
「それも楽しみたいです」
「二人で、ですね」
「そうです。二人で」
まさにだ。その二人でだというのだ。
「二人であのお店に行きましょう」
「そうしましょう。では」
義正も応えてだ。こうしてだった。

二人はマジックに向かいだ。そして二人でだ。
珈琲を飲み音楽を楽しむ。その中でだ。
真理はだ。今かけられている音楽を聴いてこう義正に問うた。
「あの、今の音楽は」
「ワーグナーですね」
「これがワーグナーですか」
「ローエングリンです」
真理にその題名も話す。

第十五話　婚礼その十六

「ローエングリン第三幕の婚礼の合唱です」
「前に聴いた様な気がしますが」
「そうだったでしょうか」
その辺りの記憶は曖昧だ。だがそれでも二人はこう話すのだった。
「ですがそれでも今は」
「そうですね。はじめて聴く様ですね」
「とても新鮮に聴こえます」
こう二人で話すのである。
「清らかな音楽ですね」
真理はその第三幕の婚礼の合唱を聴いて述べた。
「とても」
「そうですね。聴いているだけで」
「音楽はです」
真理は珈琲を飲みながら微笑み話す。
「その時によって聴いていて感じるものが違うのですね」
「同じ音楽であっても」
「はい。そうも思います」
こう義正に話すのだった。
「それが今わかった様に思えます」６
「この音楽はです」
そのだ。ローエングリン第三幕の婚礼の合唱がどうかというのだ。
この曲はローエングリンとエルザの婚礼の場で歌われる曲なのだ。
その曲を聴いてだ。真理はエルザに感情移入して話す。
「エルザ姫ですが」
「そのローエングリンのヒロインですね」
「そうなる人なのでしょうか」
「そうなるとは」

「はい、確かローエングリンに名を問うなと言われましたね」
「そうです。しかし問うてしまったのです」
これがローエングリンの物語の主題なのだ。それに問うて彼の名を知ってしまい別れになる。悲しみで幕を下ろす作品なのである。
しかし今の音楽はあくまで美しい。その音楽こそがなのだった。
「この曲を聴いていると」
「幸せにですね」
「永遠に幸せになりたいと思います」
「そう思わせる音楽」
義正も言う。地獄の様に熱く天使の様に甘い珈琲を飲みながら。
「それがこの音楽ですね」
「そうですね。二人で聴くと尚更思えますね」
「私は一人で聴いていました」
そのだ。ローエングリンをだというのだ。
「そうしていました」
「しかしそれではですか」
「こうは感じられませんでした」
「二人で。永遠に聴いていたい」
「ローエングリンもそう思った筈です」
エルザと別れざるを得なかっただ。そのローエングリンもだというのだ。
「実際にワーグナーも思ったのです」
「幸せな結末ですか」
「はい、結末です」
「それでは。その結末は」
「幸せに終わらせようかとです」
つまりだ。ローエングリンとエルザが結ばれる結末だ。それを考えたというのだ。
「しかし迷った末にです」
「ああした結末ですか」

「そうしたのです」
このことは様々なことがワーグナーの周囲でも話されていたのだ。ワーグナー自身も熟考した。しかしそれでもなのだった。
結果としてワーグナーは結末を悲しいものにした。幸せは一つにするしかなかったのだ。だが二人はその悲しい結末になる筈の音楽にだった。
今は幸せを見るのだった。二人の幸せを。それでだ。
真理は珈琲を飲み終え。そのうえで義正に話した。
「ところで」
「ところで？」
「もう一杯飲まれますか？」
珈琲をというのだ。その飲み終えた珈琲のお代わりだった。
「どうされますか」
「そうですね。では私も」
「飲まれますか」
「そうさせてもらいます」
義正も笑顔で応え。そうしてだった。
二人で珈琲をもう一杯飲むのだった。そのうえでだ。

第十五話　婚礼その十七

義正は今もかけられているそのワーグナーを聴きつつ真理に話した。
「悲しい結末になる作品の音楽でも」
「それでもですね」
「聴く者の如何によってです」
「それが変わりますね」
「はい、変わります」
そうだというのだ。
「心の持ち方によってです」
「私達二人の心の持ち方によって」
「そうです。変わります」
「そうですね。変わりますね」
真理もだ。彼のその言葉に頷いてだった。
笑顔で応えた。二人の問題だとわかったのだ。
それがわかるともうその音楽もだ。自然とだ。
「祝福を願う祈りの音楽ですね」
「舞台においてそのまま歌われる」
「ワーグナーは素晴しい音楽を創り出したのですね」
「はい。そして」
「そして？」
「もう一つの音楽は如何でしょうか」
義正は真理にこんなことも話した。
「もう一曲。如何でしょうか」
「もう一曲ですか」
「フィガロの結婚です」
次はそれだった。天才とまで謳われた音楽史の巨人の作品だ。その巨人は僅か三十五歳で夭折したがそれを全く感じさせない豊かな

才能に基く多くの作品を残している人物だ。
「それの序曲です」
「その曲も確か以前に」
「聴かれていたでしょうか」
「そう思うのですが」
「では止めますか？」
「いいえ」
止めることはしない。それはだと答える真理だった。
「今度はその曲を」
「聴かれますか」
「そうしたいです」
義正に対して微笑んで答えたのだった。
「確かモーツァルトですね」
「そうです。モーツァルトです」
「母が好きでして」
「御義母様がですか」
「ええ。よく聴いておられます」
「そうだったのですか。あの方はモーツァルトが」
「聴いているととても落ち着くとのことです」
そうなるというのだ。モーツァルトを聴いていると。
「それで」
「そうですね。モーツァルトを聴いていると」
「何か心が変わってきますね」
「清らかになり心が弾み」
まさにモーツァルトの音楽の魔力である。それによってなのだ。
「沈んだものも上向いていきます」
「音楽の持つ力を」
「モーツァルトは最大限まで引き出してくれます」
「まさにそうしてくれるのですね」
「そうです。それがモーツァルトです」

「ワーグナーとはまた違った力」
モーツァルトの音楽の力についても話されていく。
「それがあるのですね」
「私はそう思います」
「では。これからは」
「モーツァルトも聴かれますか」
「そうしたいです」
こう義正にも答える。
「二人で」
「そうですね。二人でなければ」
「そうでなければ何もなりませんから」
「ええ。それでは」
こうした話をしてだった。二人はそのモーツァルトの音楽を聴くのだった。その中でだ。真理は珈琲を飲みながら不意にであった。
少し咳こむ。義正はそれを見て言った。
「風邪ですか？」
「いえ、最近どうも」
「咳が出るのですか」
「はい、それだけです」
実際に他におかしなところは感じない。だからこその返事だった。
「大丈夫です」
「そうですか。風邪でなければです」
「そうではありませんから」
「咳には飴がいいですね」
「飴ですか」
「後で買います」
真理の為にだ。買うというのだ。
そうした話をしてマジックでは終わった。そのうえで二人は二人の生活を本格的にはじめるのだった。二人の幸せ、それをだ。

第十五話　完

2011・6・26

第十六話　不穏なことその一

第十六話　不穏なこと

義正と真理の生活がはじまった。二人は八条町の海の方の洋館に移った。義正の家である八条家の別邸の一つに入ったのだ。

そこで新しい生活をはじめながら。義正は自分の仕事場で書類の整理をしながら佐藤に尋ねた。彼はこれまで通り義正に仕えているのだ。

サインをしながらだ。彼にこう尋ねたのである。

「何か変わったところはあるかな」

「仕事のことでしょうか」

「うん。百貨店の方は」

「順調です」

「大阪の方への進出も」

「はい、それも順調です」

そうだというのだ。

「土地も確保していますね」

「入れる店舗は」

「本屋ですが」

「それはどうなのかな」

「かなりの規模の店になりました」

そうなったというのだ。本屋の大きさもだ。

「百貨店の中では随一の規模になるかと」

「本屋、そして」

「レコード店もですね」

「そっちはどうなのかな」

「そちらもかなりです。楽器も販売されます」

「えっ、楽器も？」

楽器も売られることになると聞いて義正は思わず声をあげた。彼

にとっては楽器まで話に出るとは思えなかったのだ。そこまではだ。
「じゃあバイオリンやそうしたものも」
「ピアノもです」
「それも売られるんだ」
「そうです。今度の百貨店は文化面に力を入れますので」
「それでなんだ」
「ピアノの様なものまで」
義正はピアノまで売られると聞いて言う。こんなことも言ったのだ。
「それじゃあだけれど」
「はい、それでは」
「店の中でピアノの演奏もできるね」
「そうですね。それも可能ですね」
「店の中全体でそうした楽器の演奏ができる」
時代の先端をいっているだけでなく華やかでしかも文化的である。義正にとってそのことはまるで夢を見ているような話だった。
しかし彼はだ。それを現実として考え佐藤に話すのだった。
「いいね。話題になるね」
「お客様が大勢来られますね」
「それも何度も」
「大勢のお客様が多く来られてこそ」
「百貨店は成り立つから」
これはどの商売でも同じだ。やはり大勢の客が何度も通ってこそ商売というものは成り立つのだ。そうでなければ成り立たないのである。
だからだ。義正は言うのだった。
「いいね」
「そうですね。それでは」
「いいと思うよ」
義正は微笑んでそれをよしとしたのである。

「新しい百貨店だね」
「無論衣服やそういったものもです」
「充実させるんだね」
「文化的で豊かな百貨店です」
それがだ。今度進出する大阪の百貨店になるというのだ。
「そうなります」
「日本も変わってきたね」
ひいては日本のことも考えて言う義正だった。
「そういう百貨店ができるなんて」
「欧州だけではなくですね」
「何時かね」
義正はこんなことも言った。
「欧州のどの国よりもね」
「日本はですか」
「豊かな国になりたいね」
その望みをだ。今言うのだった。
「あの英吉利や仏蘭西よりも」
「ああした国々よりも」
「夢みたいな話だけれど」
この時の日本にとってはだ。まさにそうしたことだった。
「それでも何時かは」
「なれるでしょうか。そこまで」
「なりたいし」
そのうえでだと。義正は言葉を続ける。

第十六話　不穏なことその二

「なれるよ」
「なれますか」
「きっとね。明治維新から日露戦争までいけたんだ」
まさに坂の上の遥かな雲をその手に掴んだのである。露西亜と戦いそれに勝つことなぞだ。日本の誰もが想像できなかったのだ。
だがそれを果たせたからこそだと。義正は希望を見て言うのだった。
「だから。諦めずにやっていけば」
「我が国は必ず」
「なれるよ」
「なれますか」
「そう。なろうと思えばね」
そのうえで努力していけばというのだ。
「なれるから。確かに難しいけれど」
「我が国が英吉利や仏蘭西以上の国にですか」
「確かにまだ夢みたいな話だけれど」
それでもだというのである。
「何時か必ずね」
「ですか。そうなんですね」
「この百貨店にしても」
身近な話にもなった。彼等の話だ。
「その一つだよ」
「そうなのですか。百貨店も」
「世界一の百貨店を作ろう」
義正もまた見ていたのだ。坂の上の雲を。
そしてその雲に向かいながらだ。佐藤に話すのだった。
「そうしよう」

「そうですね。それでは」
「日本をもっといい国にする為に」
「そう思うのが自然ですね」
佐藤は義正の話を聞きながらふとだ。そんなことを思い実際に言葉に出したのだった。
「日本人なら」
「そう、祖国を愛してよりよくしようというのがね」
「どうも近頃そう考えない輩もいるようですが」
「ええと、確か」
佐藤の話を聞いてだ。義正はだ。
ふと考える顔になってだ。こう彼に話した。
「あれだね。共産主義だね」
「ソ連という国がありますね」
「かつて露西亜と呼ばれた国の場所にできた」
その国もこの頃にできたのだ。今はまだ混乱が続いているがそれでもだ。共産主義の国ができたのは紛れもない事実であるのだ。
「あの国です」
「あの国はまずいね」
「まずいですか」
「うん、まずい」
真剣な顔になって言う義正だった。
「それもかなりね」
「あの共産主義というのは」
「人間は誰もが平等で個人の財産を否定する」
「そして誰もが平和に暮らす社会ですね」
「理想郷だよ。だけれど」
「しかしですか」
「彼等がしていることを聞くと」
その露西亜革命の話をだ。聞いての言葉である。
「とてもそうじゃないね」

「平等でも平和でもないですか」
「あのソ連という国は恐ろしい国だよ」
こう言うのである。
「血を欲し。革命の名の下に多くの人を殺していく」
「そうした国ですか」
「どうやらロマノフ皇室も殺されたし」
「そうなのですか！？」
「欧州からの情報だよ」
そこからの情報だというのだ。ただこの時代、恐ろしいことにそのソ連の崩壊までだ。ソ連にとって都合の悪い話は何故か日本のマスコミには中々載らなかった。
「その内戦でもね」
「多くの人を殺しているのですか」
「彼等は階級を否定しているから」
「その否定されている階級にいる人間は」
「皆殺される。その階級にいるというだけで」
個人を見ずにだ。階級を見てそうするというのだ。
「皇室だけでなく貴族や資本家、地主が」
「そういった存在がですか」
「殺されていく。ひいては」
そのうえだ。そうした階級にある者達だけではなくというのだ。

第十六話　不穏なことその三

「革命に反対すると見なされた人もね」
「殺されますか」
「革命とはそういうものだろうね」
苦い顔で言う義正だった。
「聞こえがいいわ実際は」
「他の存在を認めず消していくのですか」
「ギロチンはただあるだけじゃないからね」
仏蘭西革命の象徴であるその処刑台のことも話される。
「それは粛清の為だよ」
「罪人を処罰する為のものではなく」
「いや、罪人を処罰するものだよ」
「しかし。粛清とは」
「革命に逆らうこと自体が罪だから」
それでだ。罪人を処刑するということになるというのだ。
「そう、疑われただけでもね」
「そうして粛清されますか」
「それが革命だよ。そして」
「ソ連という国ですか」
「共産主義についてもよく考えるべきだ」
義正の顔が強張る。共産主義そのものに対する警戒も見せていた。
「あの思想は福音なんかじゃない」
「基督教のあの様な」
「宗教も。他のあらゆる思想を否定する考えだから」
「危険ですね」
「そう、あの思想には気をつけないといけない」
また言う義正だった。
「迂闊に盲信すると恐ろしいことになる」

「では知識人で最近」
「若い知識人の間に。流行ってるそうだね」
「大学生の間でも」
「よくないことにならなければいいけれどね」
ここではこう言う義正だった。
「本当にね」
「よくないことにですか」
「彼等にとっても日本にとって」
双方を危惧してだ。話す義正だった。
「本当にそう思うよ」
「左様ですか」
「この世に完璧なものはないんだ」
義正はこの真実を話した。
「それは主義思想にも言えるから」
「では共産主義は」
「完璧である筈がない」
そのマルクス主義者達が言うようなだ。そうしたことは有り得ないというのだ。
「絶対にね」
「確かに。我が国には様々な宗教が存在しますが」
神道にしろ仏教にしろだ。宗派も考慮しての言葉だ。
「しかしです」
「それでもですね」
「その一つ一つが完璧ではないのだから」
それでだと話すのだ。
「それで完璧な思想というものは」
「ありませんね」
「その完璧なものを否定する」
さらにだった。
「そうした人間はどうなるか」

「やはり粛清ですね」
「そうなる。そんな社会は御免だ」
義正は心から言うのだった。そのこともだ。
「私はそう思う」
「左様ですか。共産主義は」
「君はどう思っている」
佐藤にもだ。問うたのだった。
「共産主義については」
「私は既に信じているものがあります」
確かな言葉でだ。佐藤は主に話した。
「それはです」
「それは？」
「八条町に教会ができていまして」
「教会？基督教の？」
「いえ、天理教です」
そちらの宗教だというのだ。天理教もそうした寺や神社にあたるものを教会と呼ぶのだ。基督教のそれとはまた違ったものである。

第十六話　不穏なことその四

それだとだ。主にも話すのだった。
「その宗教を信仰していますので」
「では共産主義は」
「少なくとも彼等とは主義主張が違いますね」
「そうだな。確かにな」
義正もその言葉を聞いて頷く。
そしてだ。こんなことも言うのであった。
「しかし。天理教の教会か」
「旦那様も御存知だったのでは？」
「前に話をしたことがあったか」
「そうだったと思いますが」
「済まない、忘れていた」
そうだったとだ。佐藤に対して謝罪の言葉も述べた。
「そうしたこともだ」
「そうでしたか」
「天理教か。その宗教は」
「落ち着いた平和な宗教です」
「暴れたりする宗教ではないか」
「むしろその逆です」
かつての基督教の様にだ。ああしたことはないというのだ。かつての基督教はそれこそだ。軍やその他の組織で多くの血を流させてきたのだ。
佐藤もそのことを知っている。それで話すのだった。
「あの様なことはありません」
「そうか。平和か」
「その八条町の教会に時々通っていますので」
「私も行った記憶があるが」

「ではそれを思い出させる為にも」
「少し行ってみるか」
こんな話もするのだった。義正にしてみても興味のある話だった。
何はともあれ彼は幸せだった。そしてだ。
その幸せは真理と共にいるからだ。屋敷に帰りだ。
すぐにだ。真理の笑顔での出迎えを受けるのだった。
「御帰りなさいませ」
「はい、只今帰りました」
笑顔で応える彼だった。
「留守の間何か」
「音楽を聴いていました」
笑顔でだ。こう彼に話すのだった。
「蓄音機で」
「あれでなのですか」
「はい、それで聴いていました」
そうしていたというのだ。
「モーツァルトの音楽を」
「あの作曲家のですか」
「三十五歳で死んだと聴いていますが」
「それでもその音楽は多いですね」
「はい、とても」
没した年齢と比較してその音楽は多い。モーツァルトはかなりの多作家でもあった。何しろ楽譜が見えていてそれを書くだけだと言っていた程なのだ。
そのモーツァルトをだ。真理は聴いていたというのだ。
「あのフィガロの結婚だけでなく」
「他の音楽もですね」
「素晴しいものですね」
笑顔で話す真理だった。
「聴いていると心が」

「清らかにですね」
「なります。それに」
「それに？」
「その心が楽しくもなってきます」７８
聴いていてだ。そうもなるというのだ。
「ですから。今日は」
「それを聴かれてですか」
「あとお菓子を作っていました」
それもしていたというのだ。
「西洋のお菓子を」
「お菓子もですか」
「クッキーをです」
そのだ。クッキーをだというのだ。
「それを作っていました」
「作られたのですね。お菓子を」
「実は。昔から趣味でした」
少し気恥ずかしそうにだ。真理は夫に話す。

第十六話　不穏なことその五

義正は今着替えている。妻がそれを手伝っている。箪笥の前でだ。
二人は夫婦として話しているのだ。
「それで今日は」
「クッキーをですね」
「それを召し上がられますか？」
「そうですね。ではそのクッキーを」
笑顔でだ。義正は答えた。
「御願いします」
「はい、それでは」
「クッキーと。飲み物は」
「それは何にされますか？」
「紅茶がいいですね」
微笑んでだ。それだというのだ。
「それにしたいのですが」
「わかりました。紅茶ですね」
「はい、それを」
また答える義正だった。そう言った時にだ。
着替え終えていた。スーツとネクタイから身軽な普段着になっている。その服で二人の部屋から出てだ。そのうえで真理に話すのだった。
「二人で楽しみましょう」
「それでは」
こうした話をしてだった。二人は。
ベランダに出てそこで白いテーブルに座ってだ。紅茶とクッキーを口にしはじめる。時間はもう夕刻の遅くになろうとしている。
赤くなっている日を見ながらだ。義正は真理に言った。
「夕陽は」

「はい、夕陽は」
「やはり。海のものが一番いいですね」
微笑んでだ。海まで赤くしている夕陽を見ての言葉だ。
「何もかもを赤くさせて」
「あの青い海を」
「はい、赤い海もいいものですね」
「そこに銀の波もあり」
海にはそれもあった。その銀の輝きが赤くなっている海をさらに際立たせている。その銀色も見てだ。二人は話をしていくのであった。
「その二つが合わさって」
「奇麗になっていますね」
「そうですね。空も」
真理は空を見た。そこも赤くなっている。
「終わりに近付いていますね」
「本来は青いものが赤くなっている」
「不思議ですね。終わりに近付くと」
「ええ。特に」
今度はこんなことを言う義正だった。
「道ですが」
「道とは」
「アスファルトの道です」
この時代になり舗装されてきているだ。その道はどうかというと。
赤ではなかった。かといって青でもない。その色は。
「より不思議な色になっていますね」
「紫ですか」
「これまでの青と。今出ている赤が合わさり」
そうなっていた。アスファルトの道は紫だった。
その紫の道も見てだ。義正は真理に話すのだった。
「不思議な色になっていますね」

「紫の道とは」
「本来は有り得ないものです」
「しかしこの時間だけは」
「はい、あります」
こうだ。真理にあると話すのだ。
「この時間だけの紫の場所です」
「この時間だけしかないのですね」
「そうです。それを考えると」
「余計に奇麗ですね」
真理も自然と笑顔になってだ。それで義正に応える。
「何か別の世界を見ているようです」
「これまでの青い世界が赤い世界になり」
「そしてその中間にある場所が」
「紫になるのです。ほんの一瞬ですが」
「一瞬の。それだけの」
「特別な色です」
それが今二人が見ている道路だというのだ。
「この紫はです」
「それに。アスファルトですね」
真理はその紫になっている場所が何なのかも話した。

第十六話　不穏なことその六

「あの紫の場所は」
「そうです。アスファルトです」
「なら余計にですね」
「ええ。これまでは見られなかったものです」
この時代になるまではだ。見られなかったというのだ。その紫は。
「何しろアスファルト自体がなかったのですから」
「そうですね。ですから」
「この時代になりそして」
そうしてだというのだ。その紫が見られるようになったのは。
「そう思うと余計にですね」
「この紫を見られることは幸せですね」
「そう思われますね。この紫は」
「とても特別な紫ですね」
「文明はこうした美も見せてくれます」
その特別な紫をもだ。この時代になりこの時間にだけ見られる。
そうした特別な紫なのだ。
その紫を見てだ。真理は紅茶を口にした。そのうえでの言葉は。
「この紅茶は赤いですね」
「はい、赤ですね」
「赤いお茶。思えば」
「この赤い夕暮れの世界をそのまま」
「飲んでいるのですね」
「そうなりますね。今この時間を」
「時間を飲んでいるのですね」
真理は微笑んでだ。それだというのだった。
「私達は」
「そうですね。時間ですね」

義正も真理のその言葉でだ。気付いたのだった。
そのうえでその紅茶をあらためて飲むと。その味は。
「この味は」
「時間の味ですね」
「そうですね。時間ですね」
それだとだ。二人で話すのだった。
「私達は今時間を飲んでいるのですね」
「これまではただ美味しいとだけ思い飲んでいた紅茶も」
「そう思うと」
「特別な味がしますね」
「どうにも」
「美味しいです」
そしてこの言葉も自然に出た。
「普通に飲むよりも」
「おそらくは」
義正は夕暮れを溶かしたその紅茶を飲みつつ真理に話した。
「私達はただ美味しいものを食べるだけではないのです」
「それと共に時間をですね」
「食べるものだと思います」
「時間もまた」
「例えば朝食です」
朝のはじまりのだ。それから話すのだった。
「起きて最初の食事というだけではなく」
「それだけではなくですね」
「朝を食べるものでもあるのです」
そうだというのである。
「それが朝食だと思います」
「朝の。心地よいはじまりを」
「私達は食べるのです」
朝食ではだ。そうだというのだ。

「朝もまた」
「そして昼には」
「昼を」
「夜もですね」
「そうです」
全ての時間をだ。味わっているともいうのだ。
「そう思うと食事というものはです」
「味わいがありますね」
「はい、味は料理の味だけではなく」
「時の味もまた」
そうした話をするのだった。そしてだ。

第十六話　不穏なことその七

紅茶を飲み終えたところでだ。真理は義正にこう言ってきた。
「それでは」
「はい、これからですね」
「夜を召し上がりに行きましょう」
笑顔で義正に話すのだった。
「そうしましょう」
「そうですね。今から」
「夕食はです」
その夜の食事は何か。真理はこのことも話した、
「シチューです」
「シチューですか」
「ビーフシチュー。それにサラダと」
「そしてですね」
「はい。鶏肉のソテーです」
メインはそれだというのだ。
「デザートは果物です」
「それに加えてですね」
「夜です」
時はだ。それだというのだ。
「では今から」
「はい、召し上がりましょう」
こうした話をしてであった。二人は夕食のテーブルに向かう。そしてそこでだ。夜も食べるのだった。その味も楽しむのだった。
二人は幸せな時を過ごしていた。それは長く続くと思われた。
だが不意にだ。真理は。
急に熱が出て寝込むのだった。その枕元で。
義正は心配する顔でだ。彼女に話した。

「風邪ですか」
「どうやら」
白いベッドの中でだ。真理は夫に答えた。
「そうみたいです」
「風邪ですか。よくありませんね」
「全くです。ですが」
「ですが？」
「暫く寝ていれば」
それでいいというのだ。
「風邪は。休めば治りますから」
「そうですね。風邪は」
「はい、何ともありません」
こうも言う彼女だった。
「ですから。心配されないで下さい」
「そうですか」
「今日は寝ています」
また言う真理だった。
「では安心して」
「行って参ります」
仕事に行くというのだった。こうしてだ。
義正は佐藤の運転する車で仕事場に向かった。真理は婆やと二人になった。その中でだ。
婆やがだ。ベッドの中の真理にだ。心配する顔でこう言ってきたのだ。
「今日はくれぐれもです」
「静かにですね」
「はい、よく休まれて下さい」
こう彼女に言うのである。
「くれぐれも。無理はされないで下さい」
「そんなに辛くはないですが」

「いえ」
「いえ？」
「風邪はそう思っては駄目なのです」
心から心配する顔で彼女に言う。
「そこから悪くなるのです」
「油断したらですか」
「はい、そして」
「そして？」
「風邪は万病の元です」
よく言われていることをだ。婆やも言うのだった。
「そこからあらゆる病気がはじまります」
「体力が落ちているからですね」
「そうです。それに近頃」
婆やはさらに言う。真理のことを。

第十六話　不穏なことその八

「お嬢様、いえ奥様は」
「私は」
「咳が出ておられました」
言うのはこのことだった。彼女の咳のことだった。
「思えばあれがです」
「風邪のひきはじめだったのですね」
「そう思います」
実際にそうだとだ。婆やは話すのだった。
「ですからくれぐれもです」
「今は静かにですか」
「できるだけベッドから出られず」
それで、であった。
「休まれて下さい」
「御食事は」
「婆やが持って参ります」
強い声で真理に告げた。
「ですから。まことにです」
「今日はこのまま静かに」
「されて下さい。退屈でしたら」
「その時は」
「婆やが本を持って来ます」
読書が好きな真理への言葉だ。
「そうしますので」
「すいません」
「これが婆やの務めです」
だからだ。礼はいいというのだ。
「御気に召されずに」

「そうですか」
「あと。音楽も」
これも忘れていなかった。
「かけますから」
「そうですか。それではですね」
「まずは何を聴かれますか？」
「シューベルトを御願いします」
「シューベルトですか」
「はい」
その作曲家のレコードをだとだ。婆やに話す。
「それを御願いします」
「シューベルトというと」
「野ばらがありますね」
シューベルトの代表作の一つだ。独逸のリートの代表的な曲でもある。
「あれを」
「レコードに書いてますか、字が」
「書かれています」
「では話が早いですね」
婆やは微笑んで述べた。
「では今すぐに」
「御願いしますね」
「思えば病気で寝ている時は」
どうなのか。婆やはこんなことも話した。
「退屈ですから」
「時間を長く感じてしまいますね」
「それがよくありません」
そうだというのだ。
「ですから余計にです」
「心をですか」

「弾ませるべきです」
それは何故なのかも話す婆やだった。
「病は気からですかな」
「そう言われていますね」
「病気の時に余計に気が滅入れば」
どうなるか。婆やは真理に話していく。
「そこからさらに悪くなります」
「病気が」
「ですから楽しい気持ちになりましょう」
「はい、それでは」
こう話してだった。婆やはそのシューベルトのレコードを取り出して蓄音機にかけてだ。そのうえで音楽をはじめさせたのだ。

第十六話　不穏なことその九

シューベルトの優しく奇麗な音楽の中でだ。婆やはさらに。
真理にだ。あるものを出したのだった。それは。
「これも」
「本ですね」
「はい、志賀直哉がありました」
「あの人の本ですか」
「実は私も」
「志賀直哉は読まれているのですか？」
「最近小説を読むようになりまして」
それは真理の影響からだ。婆やも彼女の影響を受けてきているんどあ。
「それでこの人と同じ流れの」
「白樺派ですね」
「その武者小路実篤の本を読んでいます」
ここまで話してだ。婆やは頬を赤らめさせた。
そしてそのうえでだ。こう話すのだった。
「恥ずかしいことに」
「何故恥ずかしいのですか？」
「この歳で武者小路実篤は」
「あの人の本を読むことはですか」
「恋愛小説ですね」
「はい」
真理もそうだと答える。武者小路実篤といえばやはり恋愛小説だ。
その中での人の心を書いていくのが彼の小説なのである。
それを読んでいるからだと。婆やは恥ずかしそうに言うのだった。
「ですから」
「いえ、それは」

「それは？」
「恥ずかしいことでないと思います」
そうだとだ。真理は婆やに話すのだった。
「よい小説は幾つになってもです」
「読んでもですか」
「いいものだと思います。それにです」
どうかとだ。真理は言葉を続けていく。
「婆やも女の方ですから」
「私が女だから」
「だからいいと思います」
こう真理に話すのである。
「ですから」
「ですが。十代の娘の様に」
「いいではないですか。幾つになっても女の方ですから」
「だからいいと」
「そう思いますが」
「左様ですか」
そう言われてだ。婆やは。
少し戸惑いながらも納得する顔になってだ。それで言うのだった。
「では。それでは」
「これからもですね」
「読みたいと思います」
そのだ。武者小路実篤の小説をというのだ。
「是非共」
「そうですね。それで」
「はい、それで」
「志賀直哉の作品ですが」
今読んでいるだ。彼の作品についての話になった。
真理はベッドの中で半身を起こして読みながらだ。婆やに話すのだった。

「実は。殆んどの作品は好きですが」
「好きではない作品もありますが」
「あの長い作品。題は忘れましたが」
志賀直哉は基本的に短編作家だ。この辺りは芥川と同じだ。
「ですが。その作品は」
「お好きではありませんか」
「読んでいません」
それもしていないというのだ。
「実は」
「それは何故ですか？」
「最後まで読めないと思い」
それでだ。読んでいないというのだ。
「ですから」
「長い作品は。そうですね」
「終わるかどうかもわかりませんし」
その終わるのが何時になるかさえだった。

第十六話　不穏なことその十

「ですから」
「だから読まれていないのですね」
「はい」
ベッドの中からこくりと頷いて答えたのだった。
「そうです」
「志賀直哉にも長編があるのですか」
婆やはこのことから言った。
「そうだったのですか」
「知らなかったのですか」
「はい、実は」
そうだったと。真理にも素直に話す。
「申し訳ありませんが」
「申し訳なくはないですが」
「しかし。あの人の長編」
「どういったものなのでしょうか」
「多分。これは予感ですが」
婆やのだ。それだというのだ。
「私の好きそうな作品ではないでしょうね」
「左様ですか」
「そしてお嬢様も」
真理も見てだ。そのうえでまた話した。
「そうだと思います」
「私もまた」
「ですから」
それでだというのだ。
「読まれない方がいいです」
「そうですね。それでは」

こうした話をしてだった。真理はそのことを決めた。
それでだ。彼女はまた言った。
「では志賀直哉の作品は」
「今ある作品をですね」
「短編を中心に」
読んでいくというのだ。
「そうしていきます」
「わかりました。それでは」
こうした話をしてだった。真理は読書に音楽で身体を癒すことにした。その中でだ。婆やは彼女にあるものを出してきた。それは。
紅茶だ。白と青の西洋のティーカップのそれに入った紅茶にはだ。他にも入れられていた。それの香りも嗅いで。真理は言った。
「生姜ですね」
「はい、風邪をひいておられるので」
それでだというのだ。
「入れさせてもらいました」
「そうですね。風邪にはですね」
「はい、生姜です」
「すいません」
幸せな微笑みでだ。真理は婆やに言った。
「こんなことまでしてもらって」
「いえ、これもまた」
「婆やにとっては」
「当然ですから」
だからだ。いいというのだ。
「御気になさらずに」
「そう言って下さいますか」
「そうです。お嬢様の婆やへの御礼は」
「それは」
「お嬢様が元気になられることです」

それだというのだ。それこそがだとだ。
「ですから。これも飲まれて」
「そうですね。元気になります」
「そうされて下さい」
こんな話をしてだった。真理は婆やが淹れたその生姜入りの紅茶を飲んだ。そしてそのうえでだ。二日程経ってベッドから出られたのだった。
その真理にだ。義正も婆やもだ。彼女に笑顔でこう言った。
「よかったですね」
「本当に。治られて」
「あまり酷くない風邪でしたから」
だからだ。真理もすぐに起きられたというのだ。

第十六話　不穏なことその十一

「御心配をおかけしました」
「はい、それではです」
「それでは？」
「今は風邪あけなので止めておきますが」
それでもだとだ。彼女に話すのだった。
「暫くしてです」
「暫くして」
「山に行かれますか」
「山ですか」
「はい、六甲の山に」
そこにだ。二人で行こうかというのだ。
「そこに行かれますか」
「そうですね。六甲の山に」
「あそこから見るものは非常に素晴しいですから」
「海に街に森に」
これまで義正と共に楽しんできた場所についてもだ。真理は話した。
「そして今度はですね」
「山にです」
「いいですね。それでは」
「はい、暫く経ってから」
「後は」
それでだと。真理はさらに話した。
「川は」
「川ですか」
「そう、川もよかったですね」
「そうですね」

二人でだ。川のことも話したのだった。
「二人でいる場所は何処でも」
「よかったです」
「とても」
「後は」
後はだと。二人で話した。
「山ですね」
「今度は山で」
「山を二人で楽しみましょう」
次に行く場所も決まったのだった。二人は病の後でも幸せだった。
その幸せは周囲もだ。見て幸せに感じた。義正の両親、八条家の総帥である彼等はだ。自分達の部屋で仲良く話をするのだった。
「義正と真理さんも」
「そうですね。幸せですね」
「幸せに過ごしている。いいことだ」
微笑んでだ。父は妻である母に話した。
「そうなるとわかっていてもだ」
「それが実際のものになると」
「やはりいい」
素直にだ。二人の幸せを感じての言葉だった。
そしてそれをだ。祝福もしていた。
「このうえなくな」
「そうですね。後は」
「後はですね」
「子供だな」
それだというのだ。
「二人だけでなく。他に家族ができれば」
「さらに幸せになりますね」
「だから。子供だ」
そのだ。子供が授かればいいというのだ。

「子供ができればな」
「ええ。ただ」
「そう、こればかりはな」
「望んでも得られるものではありません」
それが子供というものだった。子供は得られる者は得られる、しかしそれでも得たいと思っていても得られない者もいる。そして望んでいなくとも得る者がいる。この辺りは運命、そして神の裁量なのである。
その神の裁量の話だからだ。どうしてもというのだ。
「まさに天の配剤ですね」
「その通りだ」
「では。待つしかありませんか」
「わし等がどうこう言ってもな」
それでもだと。こうした話にもなる。
「そればかりはな」
「そうでしたね。それは」
「わし等はだ」
自分達の話もだ。彼は笑顔で話す。
「幸いにして四人の子宝に恵まれた」
「しかもその四人が全てですね」
「あの歳になるまで育っている」
「それだけでも果報者ですね」
「そうだな」
この時代はまだ乳幼児の死亡率が高かった。それが改善されるのは戦後になり医学が画期的に進歩してからだ。それからのことなのだ。

第十六話　不穏なことその十二

「まことにな」
「そうですね。では私達は」
「願おう」
それだけだというのだ。
「そしてだが」
「そして？」
「今度は上海に行く」
今度は仕事の話だった。
「来てくれるな」
「では」
「義美もな」
義正の妹のだ。彼女もだというのだ。
「連れて行こう」
「最近はどうもあの娘がいないと」
「仕事にならないか」
「頼りになります」
そうした娘になっているというのだ。
「穏やかですがとてもよく気がついて」
「そうだな。あれは見事な娘になった」
「そうですね。本当に」
「後は」
その立派になっただけでなくだ。さらにというのだ。
「あの娘にもだ」
「然るべき伴侶をですね」
「得たいものだな」
「ええ。あの娘にも」
二人の願いは。末娘にもかけられていた。

彼女についてはだ。こうであった。
「相応しい婿を見つけて欲しいな」
「そして幸せに」
「誰だろうか」
父はその相手のことを期待半分、不安半分に考えていた。
「果たしてな」
「あの娘もまた」
「あれに相応しい相手を選ぶか」
「人を見る目は確かです」
実は義美は兄弟達の中でそうしたことが最も秀でているのだ。兄達よりも出来物であると。親達も内心では認めている程なのだ。
その彼女だからこそだと。こう話すのである。
「では。今度も」
「楽しみにしていればいいかと」
「ではそうするか」
「はい、その様に」
妻は微笑み夫に応える。
「そうしましょう」
「是非共な」
「では。今は」
妻は話が終わったと見て話を変えてきた。その話は。
「今宵はどうされますか」
「今夜か」
「何処かに行かれますか？何かご予定は」
「今夜はない」
それはないとだ。誰かに会う約束も宴の話もないというのだ。
「静かなものだ」
「左様ですか」
「昨日料亭でだ」
そこでだというのだ。

「大阪府の知事閣下とお話をしてだ」
「百貨店のことがですね」
「さらにいい話になった」
微笑んでだ。このことを話すのだった。
「既に府庁ともだ」
「お話はできていますか」
「後はいい百貨店を建てるだけだ」
「計画通りにですね」
「今回は計画を先走りにさせた」
知事と話をする前からだ。どうした百貨店にするか計画していたというのだ。性急といえば性急な、だがあえてそうしたというのである。
「だがそれでもだ」
「それがよくなりましたね」
「よかった。かえってな」
「百貨店の計画を知事閣下にお話されたのですね」
「すると興味を持って来られてだ」
それでだというのだ。

第十六話　不穏なことその十三

「話は順調に進んだ」
「まことにいいことに」
「まことにな。そう思う」
実際にだ。そうだというのだ。
「これからは鉄道も軸となり」
「そしてそこからですね」
「百貨店や。遊園地も」
「遊園地もですか」
「劇場もだ。不動産もそうしたものも」
「鉄道からはじまりますか」
「それが軸になり進む」
あらゆる産業がだ。人を運ぶ鉄道が軸になっていくというのだ。
「鉄道の力は凄い。それとだ」
「それと？」
「車だ」
車のこともだ。話す彼だった。
「あれもいいものだ」
「鉄道だけでなくそれも」
「車も軸になる」
鉄道だけでなくだ。それもだと話すのである。
「あれもだ」
「車は」
「いや、なる」
鉄道に関するのとは違い懐疑的になる妻にだ。彼は確かな声で話した。
「あれも産業の軸にだ」
「そうであればいいのですが」

「亜米利加にフォードという企業がある」
「フォード？その企業が」
「車を大量生産して安く売っているのだ」
それが為されてきていた。亜米利加も大きく変わってきていた時代だったのだ。
「それまでは金持ちの道楽だった車が」
「それが」
「日本もな」
「そのフォードができますか」
「我が家がなる」
そのだ。八条家がだというのだ。
「我が家がな」
「では車も」
「亜米利加に人をやってだ」
早速といった話だった。
「それで進めている」
「早速ですか」
「少し早いか」
語りながらだ。その顔をいぶかしむものにもさせる。
「それは」
「いえ、この場合はそれでよかったかと」
だが妻はだ。夫のその早い行動をよしとしたのだった。
「人を送られたのですね」
「そのフォードに。研修にな」
「それはいいと思います」
「何故いいのだ？」
「それは勉強だからです」
「後々の為のだな」
「はい、ですから」
勉強だからいいというのだ。ここで妻はその勉強について話した。

「学問とも言うべきでしょうか」
「学問でもあるのか」
「車に関して。そして産業に関して」
「そうしたことも学問になるのか」
「全て。学問です」
彼女独自の考えだ。それを夫に話したのである。
「この世のあらゆることはです」
「では産業もまた」
「はい、学問です」
また夫に対して話す。

第十六話　不穏なことその十四

「学問は大学等で学ぶだけではなく」
「産業からもか」
「ですから。勉強であると共に」
「学問だな」
話を聞いてそれから考えてであった。
彼はだ。あらためて妻にこう話した。
「そうだな。そうなるな」
「あなたもそう思われるのですね」
「そう思うようになった」
他ならぬだ。妻のその言葉を聞いてだというのだ。
「成程な。そうだな」
「この世のあらゆるものが」
「かつて。我が国の元勲達も」
時代は遡る。明治維新まで。
「西洋に赴きそのうえで学んだ」
「西洋のその素晴しいものをですね」
「全てな」
まさにだ。西洋の全てを学んだのが彼等だった。
そしてそのうえでだ。彼等は自分達にとって必要なものを身に着けそうして国家を発展させたのだ。そうした学問であったのだ。
それもわかってだ。彼は頷いて話すのだった。
「そうだな。それと同じだな」
「そして学ぶとなれば」
「必要なものを全て取り入れる」
彼は言った。
「そうするのだな」
「左様ですね。それではです」

「いいことか」
「早急であってもです」
それでもだというのだ。それも含めて。
「いいことでした」
「そうか。そう言ってもらい何よりだ」
「しかし。車ですね」
「それはわからないか」
「本当にそうなるのでしょうか」
いぶかしみながらだ。夫に問う彼女だった。
「我が国に車が普通にですか」
「そうだ。走っている様になる」
「車の様な高価なものが」
「為せば成るだ」
こんなことも妻に話す。
「そう思えばだ」
「できますか」
「少なくとも不可能ではない」
言い切った。確かにだ。

第十六話　不穏なことその十五

「それもだ」
「夢の様な話に思えますが」
「何、鉄道も最初はな」
「夢だったというのですね」
「夢は現実になる。文学だけではない」
産業といった。これ以上はないまでに現実のものもだというのだ。
「だから。車も」
「きっとですね」
「我が国で普通に走る様になる」
そこにだ。希望を見て。妻にこんなことも話した。
「東京の道だが」
「あの広い道ですね」
当時としては途方もないまでに広い道だった。その広い道の話だった。
「あれは確か山縣公が決められたのですね」
「あの広い道でも狭くなるかも知れない」
「まさか。それは」
「車が増えれば」
ひいてはだ。日本が豊かになればだ。
「あの道も狭くなるだろう」
「では線路も」
「八条鉄道は複数線を標準にしている」
線路は一本ではないのだ。常に二本用意しているのだ。
「あれは正解だったな」
「はい。一本では行き来できません」
「シベリア鉄道もそれが問題になった」
日露戦争の時の話だ。露西亜は補給はその鉄道に頼っていたのだ。

その路線は一本だった。これでは行き来ができない。このことが懸念材料になったのだ。露西亜側から見ればそうなることなのだ。
「だからだ。あえてだ」
「二本にした」
「最初からな。それと同じだ」
「最初は一本でもいいのではという意見もありましたが」
「鉄道に乗る人間は増える」
それはだ。間違いなくそうなると見て。そして実際にそうなったことだ。
「それでは一本ではだ」
「足りなくなるからこそ」
「最初から二本で考えていた」
「先見ですね」
まさにそれだった。
「あれは」
「自分でもよくやれたと思う」
「やれた、ですか」
「やったのではない」
そうではなくだ。やれたというのだ。
「本当にな」
「何故そう仰るのですか？やれたと」
「勇気のいる決断だった」
だからだ。やれたというのである。
「確かに確信していたが」
「それを実際の行動に移すのはですね」
「勇気がいた」
「実際の行動にはそうですね」
「そうだな。どうしてもな」
「ええ。しかし決断されて実行に移されて」
「本当によかった」

彼の言葉はしみじみとしたものになっていた。
「だから今があるのだからな。八条鉄道の」
「そうですね。後は」
「線路の統一だな」
今度はそれだった。具体的には線路の広さやそういったものだ。
「車両の車輪もそれに合わせてな」
「全てですね」
「線路は統一してこそだ」
「全路線で」
「そうしなければ合理的に動かせない」
この辺りもだ。重要なことだった。日本は朝鮮半島や台湾の統治において線路の規格を統一しておりそれが合理的な経営につながっている。
「だから最初に決めてだ」
「そうしてですね」
「本当によかった。そして今度は」
「車ですね」
「それに力を入れていきたい」
こんな話をする彼等だった。大正時代の産業はだ。確かに未来に進んでいたのだった。

第十六話　完

２０１１・７・５

第十七話　山でその一

真理の風邪は回復した。それを受けてだ。
義正はすぐにだ。彼女にこう言った。
「では。少ししましたら」
「山にですね」
「はい、六甲に行きましょう」
このことだ。彼女に言うのである。
「二人で」
「そうですね。二人で」
「まずは体力を回復されて」
それからだというのだ。山に行くのは。
「それから」
「では今は」
「何か美味しいものでも召し上がられて」
それで体力を回復するべきだというのだ。
「そうされて下さい」
「そうですね。それでは」
真理も彼のその言葉に頷く。その彼女にだ。
すぐに婆やがだ。こう言ってきた。
「それではです」
「婆や、今度もですね」
「この婆やが面白いお粥を作ります」
「面白いお粥？」
「中華街に出入りしている方に御聞きしたのですが」
その人から聞いてのことだというのだ。
「支那には色々なお粥がありまして」
「あの国はお粥の数も多いのですか」

「はい、その中に及第粥というものがあります」
「及第粥？」
「豚の内臓を入れたお粥です」
そうしたお粥があるというのだ。これは実際にあるお粥だ。
「大層力がつくお粥とのことです」
「豚の内臓を入れているからですね」
「それは中華街で手に入ります」
他ならぬ支那人達の街だからだ。それは当然だというのだ。
「そこで豚の内臓にダシになるトリガラを買って」
「そこから作ってくれるのですか」
「実は材料はもう買ってあります」
どうやら既に真理に食べさせたかったらしい。実に用意周到である。
「後はそれをです」
「私が食べれば」
「どうされますか？」
あらためて真理に尋ねる婆やだった。
「豚の内臓ですから癖が強いですか」
「いえ、それでもです」
真理は婆やの心を受け取ってだ。こう答えたのだった。
「御願いします」
「その及第粥を召し上がられるのですね」
「そうさせて下さい」
これが真理の返答だった。
「是非共」
「わかりました。それでは」
「ではその及第粥を」
こうして真理が食べるお粥が決まった。その話を横で聞いてだ。
義正はだ。少し考える顔になって婆やに言った。その言葉は。
「及第粥というのですか」

「あちらの国でお役人になる試験があるそうですね」
「ええ、清の頃までありました」
　このことは義正も知っていた。支那は昔から官僚機構が発達しておりその登用の方法もかなり確立されていたのだ。それが試験だったのだ。
「科挙といいまして」
「科挙というのですか。その試験は」
「それに受かることを及第といいました」
　つまりだ。その粥は。
「受験して及第する為に力をつけるものとして」
「食べられていたお粥ですね」
「はい、そうなりますね」
　こう婆やに話す義正だった。
「そのお粥をこれから真理さんにですね」
「召し上がって頂きます」
「あの科挙は相当な難関でした」
　何千人も受けて合格者は僅かだ。しかも四書五経を全て暗記することが最低条件だったのだ。そこまで困難な試験だったのである。

第十七話　山でその二

「それに合格する為ですから」
「相当な体力がつきますね」
「だから内蔵なのですね」
内臓は精がつくものである、このことは昔から漢方医学で知られていることだ。
「はい、そうです」
義正だけでなく真理にも話す。
「ではお嬢様」
「はい、では」
こうしてだった。婆やはその及第粥を作って真理の前に出す。彼女はそれを食べてからだ。静かな声でこう婆やに対して話した。
「我が国のお粥と違いますね」
「気付かれましたか」
「はい、これが支那のお粥ですか」
「味付けが最初から違いまして」
「だしが」
真理は元の味付けに気付いたのだ。それにだ。
「いえ、支那ではスープですね」
「それがそもそもありまして」
「トリガラでしょうか」
味わいながらだ。真理は話した。
「それですね」
「はい、これはトリガラです」
まさにそれだというのだ。
「そしてそれで元の味を取って」
「それからなのですね」
「豚の内臓も入れます」

そのだ。肝心の豚の内臓もだというのだ。
「そうして作ったものです」
「本当に我が国のお粥とは違いますね」
「そうです。それでなのですが」
「味ですね」
「如何でしょうか」
その味も尋ねる。すると。
真理はだ。にこりと笑って婆やに話した。
「美味しいです」
「美味しいですか」
「美味しいだけではないですね」
「支那料理は医食同源と言われていますので」
「だからこそ。体力もなのですね」
「はい」
まさにそうだというのだ。支那料理はそこにあった。
味だけでなくそういうものも身体の中に入れてだ。真理は婆やに微笑んで話した。
「婆やが作ってくれるものは昔から」
「昔からですね」
「身体にとてもいいものを作ってくれますね」
「私は料理の専門家ではありませんが」
それでもだというのだ。
「ですが」
「それでもですね」
「お嬢様の為に」
そのだ。真理の為だというのだ。
「いつも考えています」
「お料理もですね」
「そうなのです。実は家でも」
「家でもですか」

「それを心掛けています」
「食べ物も健康的にですか」
「例えは」
婆やはここでだ。ある話を出した。その話は。
「白米だけでは駄目です」
「あれですね」
義正がすぐにだ。婆やのその話に応えた。

第十七話　山でその三

「脚気ですね」
「そうです。海軍では今は麦ですね」
「麦飯を食べていますね」
「それで脚気をなくしていますね」
これは事実だ。海軍は脚気に悩まされていた。陸軍もそうであったし日本という国全体がこの脚気に悩まされていた。それに対してだ。
麦飯を導入してみてそれからだった。脚気がなくなったのだ。婆やはそのことをだ。真理だけでなく義正に対して話をするのだった。
「白米は確かに素晴しいですが」
「それだけではなくですね」
「他の食べ物も」
「そうです。おかずも食べて」
それに加えてだった。
「麦飯も時々作っています」
「家ではそうなのですか」
「それとパンも」
同じ麦のだ。それもだというのだ。
「食べています」
「パンもなのですね」
「白米だけでは駄目だと思いまして」
何につけても脚気に対してだ。それを考えてだった。この時代の日本はとかく脚気という病にまだ悩まされていたのである。それもかなりだ。
「それでなのです」
「白米だけでは駄目ですか」
「偏食になります」

白米でもだ。そうなると真理に話すのだ。
「ですからお嬢様にもですね」
「子供の頃からパンも食べていますが」
「脚気を避けてのことです」
「だから私は子供の頃から」
「脚気の兆候はありませんでしたね」
「ええ、確かに」
まさにだ。その通りだった。
「婆やのお陰だったのですね」
「シェフが作ってくれたのです」
婆やに言われてだ。そうした料理を作っていたのである。彼女がいつも作っているわけではないのだ。やはり料理の専門はシェフなのだ。
その辺りははっきりしている。婆やもわかっている。だが時々こうしてだ。真理の為に作っているのだ。
これを食べてだ。真理はまた言った。
「では。このお粥を」
「はい、及第粥を」
「婆やも。そして」
義正にも顔を向けてだ。そうして言ったのだった。
「あなたも」
「私もですね」
「はい、召し上がって下さい」
「そうですね。そうさせて下さい」
義正も微笑んでだ。それで応えた。
「美味しそうですし」
「豚の内臓はです」
婆やがそのだ。豚の内臓について話した。
「我が国では馴染みはありませんが」
「確か西洋でも食べていますね」

「そう聞いています。確かパイにしているとか」
ギドニーパイだ。実際に豚の臓物を使ったパイである。義正はそれはまだ食べたことはないがそれでも名前は知っているのである。
それでだ。彼女は話すのだった。
「それがありますから」
「欧州では内臓も食べます」
義正はまた話した。
「動物の肉は食べる場所が色々とあります」
「しかし日本ではまだ」
「内臓は食べませんね」
「そうですね。殆んど」
「思えば勿体無いことです」
義正はいささか残念な顔で述べた。
「内臓も食べる場所が多いのですから」
「しかし支那料理ではありますし」
「中華街に行けば食べられますね」
「美味しくて精のつくものが」
内臓だからといって偏見を持ってはいけないというのだ。

第十七話　山でその四

そしてだ。婆やはこんなことも話した。
「思えば鰻の肝も」
「同じですね」
「結局は偏見なのですね」
「そうですね。内臓だからといって」
それで食べないのもまた偏見だというのだ。
こう話してだ。あらためて及第粥を見てだった。
真理にだ。笑顔で話した。
「真理さんはそうした偏見は」
「はい、ありません」
ないというのだ。
「美味しいものは何でもです」
「召し上がられますか」
「そうしています。毒がなければ」
「実はお嬢様は」
婆やもだ。ここで話すのだった。
「昔から好き嫌いのない方でして」
「そうだったのですか」
「それはとてもいいことだと思っています」
その婆やの言葉だ。
「食べるものにそうしたことがないというのは」
「その通りですね」
義正も笑顔でそのことは認めて頷く。
「それだけ美味しいものが食べられるのですから」
「その通りですね。では義正様」
「はい」
「これからもです」

「真理さんにですね」
「美味しいものを食べさせて下さい」
まるで娘のことを話す様な、そうした言葉だった。
「それを御願いします」
「わかりました」
義正は婆やのその言葉に笑顔で応えた。
「それでは。是非共」
「御願いしますね」
こうした話をだ。真理の前でしたのだった。その婆やの心遣いもあってか。真理は風邪から回復した。そのうえで二人で六甲に向かうのだった。
六甲の山の上からだ。町に海を見下ろしてだ。義正は真理に話した。
「いいものですね」
「あれが神戸の町で」
「はい、海です」
見るのはその二つとだ。空だった。
「こうして見ると神戸の街は狭いですね」
「そうですね。海と山に挟まれて」
縦の面積は狭いのだ。神戸は横に広い町なのだ。
「とても狭いですね」
「そうですね。それに」
真理はこんなことも言った。
「この山から風が来て」
「それが神戸の町を涼しくしてくれますね」
「冬は。かなり」
ここで苦笑いにもなる真理だった。
「寒いのが困りものですけれど」
「はい。それでも」
「神戸は過ごしやすい町ですね」

「いい町です」
そうだというのだ。神戸は。
山の頂上から見える町はさながら模型の様だ。その模型の様な町も見てだ。義正は真理に対してだ。こんなことを言うのだった。
「ここから見た神戸は」
「狭いだけではありませんね」
「小さいですね」
「中にいればとても広く感じますけれど」
「ここから見れば」
実にだ。狭く小さいというのだ。

第十七話　山でその五

「ほら、あそこに」
「鉄道ですね」
「八条鉄道のものです」
まさに模型の如くだ。それが走っていた。
その鉄道も見てだ。真理に話すのだ。
「私達が心血を注いで造って走らせているものも」
「ここから見ればですね」
「本当に模型です」
そうしたものにしか見えなかった。まさにだ。
「動く模型です」
「動くですか」
「そういえば何時かは」
ここでこんなことも話す義正だった。
「模型も動く様になるかも知れません」
「模型が動きますか」
「はい、動く模型を造られるようになるかも」
「何か。それは」
「夢みたいな話ですね」
「けれど夢はできると思えば」
どうなるか。それを話す真理だった。
「実現できますね」
「はい、ですから」
「何時かはですか」
真理はその小さく見える線路の上を走る鉄道を見て言った。それはもう豆粒の如き大きさだ。しかし間違いなく動いていた。二人は見ていた。
そうしてだ。真理はまた言った。

「けれど。模型もですか」
「八条財閥では取り扱っています」
「実に様々なことをですね」
「そうです。扱っています」
鉄道や百貨店だけでなくだ。その他のこともだった。
「ですから」
「それも夢なのですね」
「はい。模型にもです」
「夢がですか」
「所謂おもちゃですが」
模型はその定義に入る。それで話すのだ。
「それもまた夢です」
「そこには夢がありますか」
「子供達はそのおもちゃを買って遊びますね」
「はい」
幼い頃なら誰でもだ。そうするというのだ。
このことは真理も経験がある。子供の頃の楽しい思い出だ。
そしてそのことにだ。真理は言うのだった。
「そこには確かにですね」
「夢がありますね」
「そこに夢を見ていました」
子供の頃の自分を思い出しての言葉だ。
「そういうことですか」
「そうです。ですから」
「子供達に夢を」
「模型は木か鉄のものですが」
この時代の技術ではそうだ。まだブリキのおもちゃというものも出てはいない。もっともブリキのそれもやがては伝統用品の様になってしまうのだが。
「しかしやがては」

「やがては？」
「新しい技術によって」
そのだ。技術によってだった。
「さらに素晴しい模型ができるかも知れません」
「さらにですか」
「はい、何かのです」
義正は知ることができなかった。やがてプラスチックという画期的な技術が世に出ることをだ。それは模型も大きく変えていくのだ。
だが今はその木と鉄からだ。彼は話すのだった。

第十七話　山でその六

「そしてそれで」
「それで」
「鉄道も」
「鉄道の模型もですね」
「造れればいいと思っています」
その八条鉄道の車両と線路を見て。彼は話す。
「この町を再現した様な」
「町の中を電車が走っているその状況をですか」
「しかもです。電車が動き」
義正はまさにだ。その夢を話した。
「町も夜になると灯りが点きます」
「そこまで忠実にですか」
「はい、再現できれば」
そうなればというのだ。まさにだ。
「素晴しいことですね」
「そうですね。それを子供達が見て」
「夢を見ます」
模型からだ。それを見るというのだ。
「そうしたことも考えていきたいです」
「模型にそこまでの夢があるとは」
「思いませんでしたか？」
「はい」
その通りだとだ。真理はこくりと頷いて答えた。
そうしてだ。義正にこうも話した。
「ただ」
「ただ？」
「お話を聞くと」

するとだ。どうなるかというのだ。
「それは素晴しい夢ですね」
「そう思ってくれますか」
「夢は。玩具にもあるのですか」
「子供の夢がそこに」
「では。義正さんは」
「そこにも夢を見ます」
そうだというのだ。まさにそこにだった。
「私は」
「では。頑張って下さい」
微笑みになりだ。義正に言った。
「そちらも」
「そうさせてもらいます」
「夢は。限りないのですね」
真理は今度は海と空が一つに合わさる場所を見て言った。青と青が一つになるその場所は白くなっていた。光と光が重なった様に。
「あらゆるものにあって」
「そしてその夢がです」
「世の中を先に進めていくのですね」
「そう思います。まず夢です」
義正はまた言った。
「夢がありです」
「そこからですか」
「人は前に出て」
そうしてだと。義正は話を続けていく。
「素晴しいものをその手に掴むのです」
「現実にある素晴らしいものを」
「夢は。そうした意味で」
どうかというのだ。夢というものは。
「現実のものなのです」

「完全に架空のものではないのですね」
「完全な架空ですか」
真理の言葉でだ。義正は考えを向ける対象を変えた。
今度はだ。その架空というものについて考えだ。そして言うのだった。
「完全な架空はありません」
「それはですか」
「架空は人が創ったものです」
以前にも言ったと思いながらだ。真理にさらに話すのである。
「その人が現実にあるのなら」
「その人が創った架空も」
「完全に架空ではありません」
「現実のものでもありますか」
「ある程度は」
それは確かに弱くとも。それでもだというのだ。

第十七話　山でその七

「現実のものです」
「現実だからこそ実現できるのですね」
「そう思います。夢は」
夢は完全なだ。架空ではないというのだ。
「実現できるものです」
「全ての夢がですね」
「そう思います。まず夢があってそれを見て」
それからだった。
「それを目指しです」
「実現させるものですね」
「それが例え途方もないものにしても」
「それでもですか」
「はい、実現させます」
言葉は可能のものではなく。断言だった。
「そうします」
「そうですね。それでは」
「それでは？」
「私もまた」
笑顔でだ。真理は言うのだった。
「私達の幸せを実現させることを」
「それをですね」
「夢見ます」
「そしてその夢を」
「実現させます」
夢をだ。そうするというのだ。
「是非共」
「そうですね。私達の夢も」

「夢は幾つも持っていいものですね」
「欲張りではありますが」
それでもだと。上城は己の言葉を続ける。
「それもまた」
「いいですね」
「夢には制限がありません」
「だからこそ」
「はい、幾つも持っていいものです」
そうだというのだ。これが義正の考えだった。
「その夢が他の人を害するものでない限りは」
「そのうえで幸せを目指す夢なら」
「いいのです」
こう真理に話すのである。穏やかで、そして前を見ている顔で。
「では。今はこの山から」
「景色を見てですね」
「幸せになりましょう」
今はだ。そうするのが幸せだというのだ。
「そうなりましょう」
「はい、それでは」
真理もだ。優しい笑みでだった。
彼のその言葉にこくりと頷いてだ。そうして言うのだった。
「二人で」
「幸せに」
こうしてだった。二人は六甲の山からだ。神戸の町と海、それに空を見るのだった。空と海の青い果てには。白い光が見えていた。
その光を見てから山を下りて。屋敷に帰った。そこでだ。
佐藤にだ。こう話すのだった。
「身近な山だったけれどね」
「とても奇麗でした」
「山もいいものですか」

「うん。この神戸はあらゆるものが」
「とても奇麗です」
こうだ。彼に笑顔で話すのである。
「行ってよかったよ」
「またいいものを見させてもらいました」
「神戸の山もなのですね」
佐藤は二人の話からだ。それで話したのだった。
「いいものですか。それなら」
「そう。それなら是非共」
「佐藤さんも山に登られるべきです」
「そうさせてもらいます」
にこやかに笑ってだ。佐藤は二人に答えた。

第十七話　山でその八

「今度の機会に」
「そうするといいよ」
「是非共です」
「はい。それでなのですが」
ここまで話してだ。佐藤は。
話を変えてだ。二人にこんなことを言ってきた。
「その山ですが」
「六甲のだね」
「私達が登っていたあの山のことですね」
「そうです。白杜家の方で」
真理の実家だ。そちらの話だった。
「公園を造ろうという話が出ています」
「公園を？」
「それをなのですか」
「はい、その話を聞きました」
それでだというのだ。
「先程ですが」
「公園というと」
「どうした公園でしょうか」
「自然公園とのことです」
公園といっても色々ある。そしてだ。ここでの公園はというとだった。
「自然を保護して見る為の」
「自然の保護」
そのことについてはだ。義正は。
いささか目を丸くさせてだ。こう話すのだった。
「そんな発想があるのかな」

「はい、どうも西洋で」
ここでも西洋だった。この時代の日本への影響はやはり大きい。
「そうした考えが出ていまして」
「それでそれをなんだね」
「はい、最近出た考えの様ですが」
「西洋のどの国だい？」
「独逸です」
欧州の中で日本に最も強い影響を与えた国の一つだ。もっともこの時代は戦争に敗れ貧窮と荒廃の底にまで落ちてしまっていた。
その独逸でだ。出て来た考えだというのだ。
「何でもバイエルンという国の」
「独逸の中にあった国だね」
「御存知でしたか」
「うたかたの恋の」
森鴎外の作品だ。そのバイエルンを舞台としている。
「あのルートヴィヒ二世の国だったね」
「はい、そのバイエルン王の考えで」
「自然を保護する」
「あの王は自然を愛されていました」
それでだ。その王の考えを取り入れてだというのだ。
「それで、ということです」
「バイエルン王。話に聞くところによると」
「よいお話は聞いておられませんか」
「音楽を愛していたそうだね」
義正はバイエルン王についてここから話した。
「確か」
「はい、とりわけワーグナーをでしたね」
「音楽を愛し城を愛していた」
それが高じて建築に走りだ。ノイシュヴァンシュタイン城やヘーレンキムゼー城といった壮麗かつ芸術的な城を築いていくのだ。

「そうした方だったね」
「はい、そうした方でした」
「独逸は今は」
義正はそのドイツのことを話した。
「帝国じゃないね」
「独逸皇帝は退位しました」
「そしてバイエルンも今では」
「国ではありません」
ドイツ帝国の中にだ。国として国王がいたのだ。独逸帝国は連合王国だったのだ。だがその帝国も一次大戦の時に倒れているのだ。その国にいた王だ。死してそれ程経っていないが最早伝説となっている。
その王の影響を受けてだ。そうしていると聞いてだ。
義正は感銘を受けながらこう言うのだった。
「よいことだ」
「旦那様もそう思われますね」
「あの王は生前は奇人と言われていたが」
「その考えは決して」
「間違っていなかった」
そうだったというのだ。
「むしろ」
「正しかったと」
「そう思う。様々な奇行も」
伝えられているだ。それもどうかというのだ。

第十七話　山でその九

「その殆んどが根拠のないものだった」
「偽りだったとのことです」
「そうだ。殆んど全てが嘘だった」
「あの王を貶める、若しくは彼等を正当化したい」
そのだ。王を退位させ幽閉しようとした一派のだというのだ。
「創作でした」
「悪質な創作だな」
「そう思います」
「あの方はそれにより貶められてきた」
「ですが今では真実はわかっています」
「狂王ではなかった」
このことがだ。わかったというのだ。
「決して」
「生前はあそこまで言われていましたが」
「今の我々から見ると」
どうかというのだ。バイエルン王は。
「彼は繊細に過ぎた」
「その繊細さ故にですか」
「人を避ける様になったのだ」
「そして誰から理解されず」
「ああなってしまった」
話はそこに至った。王は理解されなかったというのだ。
「これは悲劇だ」
「あのバイエルン王にとっての」
「そして彼を知る者にとっても」
「双方にとっての悲劇でしたか」
「そう思う。だが今ではだ」

「あの王は理解されていますね」
「そうした人が出て来た」
そうなっているというのだ。そしてそれは。
「白杜家の方々の様に」
「はい、実は」
ここでだ。真理が義正達に話してきた。
「お父様もお母様もです」
「自然を愛されている」
「そしてあのバイエルン王を理解されていますか」
「バイエルン王のお話ははじめて聞きました」
その王のことについてはこう言うのだった。
「ですが」
「それでもか」
「あるのですね」
「そうです。お二人は芸術も愛されています」
このことからだというのだ。二人がバイエルン王を知っている理由は。
「ですから。そうしたこともです」
「されるのだね」
「そうなのですね」
「はい、そうです」
その通りだというのだ。
「そうなります」
「僕は長い間あの方々を誤解していた」
「私もです」
義正も佐藤もだ。二人が同時に言った。
「芸術などとは全く無縁だと思っていた」
「しかしそれは違っていたのですね」
「それは御聞きしていなかったのですか」
「うん。そんな話は全く」

「悪い話ばかり聞いていました」
八条家ではそうだったのだ。白杜家のことはそうした話、多分に事実なのか怪しい話を聞いていたのだ。そしてそれはだった。
「同じなのですね」
「同じというと」
「白杜家もまた」
「はい、八条家は」
彼女の実家でもだ。それは同じだったというのだ。

第十七話　山でその十

「芸術や文化なぞ全く解さないと」
「そう思われていた」
「そうした意味で同じだったのですか」
「そうでした」
まさにだ。その通りだというのだ。
「実は」
「どちらもどちらだった」
「そうだったのですか」
「滑稽ですね」
ここまで話してだ。真理はつい笑って言った。
「御互いに何も知らないままこう言い合っていたなんて」
「うん。確かに」
義正が真理のその言葉に頷く。
「これ程滑稽なことはないね」
「本当に。しかもそれが偏見に基くものですから」
佐藤はそれも理由とする。
「余計にですね」
「偏見は。何もかも歪めてしまいますね」
真理はそのことがわかったのだった。今ここで。
「そしてわからなくしてしまいますね」
「愚かな話だよ」
義正は自嘲気味に笑って述べた。
そのうえでだ。この哲学者の名前を出したのである。
「ベーコンの言うことだね」
「あの英吉利の哲学者ですか」
「そう、彼は偏見を戒めていた」
それが何もかもを歪めるとだ。彼は既に言っていたのだ。

「そういうことだな」
「そうですね。偏見があっては」
「見えるものも見えない」
義正は言った。
「いがみ合いはそうしたものを生み出すな」
「はい、全くです」
「それがわかった」
義正は話す。
「後は」
「後は？」
「後はといいますと」
「あれだな」
義正の言葉がここで変わりだ。佐藤だけでなく真理も尋ねたのだ。
そしてその問いにだ。彼はこう答えた。
「御互いによりよくだ」
「御互いにですか」
「といいますと」
「理解し合うことだな」
そうすべきだというのだ。偏見が消えた後は。
それでだ。彼は今度はこんなことを話した。
「では今度。白杜家に行こう」
「白杜家にですか」
「私の実家に」
「娘婿が言ってもいいだろう」
それもだ。いいというのだ。
「自然だと思うが」
「そうですね」
佐藤もだ。微笑んでだ。それはいいと答えた。
しかし真理はだ。ここでこんなことを言うのだった。
「ただ」

「ただ？」
「ただといいいますと」
「私もそうしたいのですが」
彼女もだ。そうしたいというのだ。
そして具体的に何をしたいのか。義正達にこのことも話した。
「八条家にお邪魔したいのですが」
「本家の屋敷にですか」
「そこに」
「はい、そこに」
入りたいと。真理はまた話した。
「そう考えています」
「そうですね。お互いにですからね」
義正も笑顔でこのことがわかったのだった。
「それは」
「はい、ですから」
「御互いに訪問し合って理解を深める」
「それが大事ですよね」
「はい、とても」
笑顔で話す二人だった。そうしてだった。
二人はお互いへの理解を深めていくのだった。そうしていったのである。

第十七話　完

２０１１・７・１２

第十八話　相互訪問その一

第十八話　相互訪問

二人の姿を見てだ。義愛と義智は。
少し驚いてだ。こう義正に言った。
「まさかとは思ったが」
「そうしたとはね」
「驚かれましたか？」
「ああ。少しな」
「実際にそうなっているよ」
こうだ。末弟に答える二人だった。
そのうえで真理を見てだ。こうも言うのだった。
「まさか。真理さんまで来られるとは」
「本家の屋敷に」
「はい、思うところがありまして」
それでだ。真理は話すのだった。
「それでなのです」
「成程。それでは」
「御互いを知る為にも」
既にそうしたことがわかっていてだ。応える二人だった。
「ここは喜んでね」
「迎えさせてもらうよ」
「有り難うございます」
真理は二人の言葉を受けてだ。そうしてだった。
笑顔で迎えられ。彼女も笑顔になるのだった。
その迎えられた彼女は義正に屋敷の中を案内される。その中は。
洋館だった。広い英吉利風の洋館だ。その中を歩いてだ。
彼女はこう義正に話すのだった。
「ここは」

「如何でしょうか」
「独特の匂いがしますね」
「独特の？」
「はい、樫の木の匂いがします」
その匂いだというのだ。
「その匂いが」
「はい、実は」
「屋敷の素材に使っているのでしょうか」
「そうです」
まさにその通りだとだ。義正も答える。
「西洋では樫の木をよく使うと聞いて」
「それであえてですか」
「そうしたのです。ただ」
「ただ？」
「匂いはそこまで強いでしょうか」
義正が妻に問うのはこのことだった。
「屋敷の中で樫の匂いは」
「そう思います」
「そうですか」
「檜には檜の匂いがありますし」
その匂いもあるというのだ。
「樫には樫のです」
「その匂いがある」
「それを感じます」
「ううむ、私にはわかりません」
自分が生まれ育ったその洋館の中を歩きながらだった。また話す彼だった。
「木の匂いですか」
「はい。ただ」
「ただ？」

「私の家では感じません」
真理のだ。実家、白杜家ではだというのだ。
「そうした匂いは」
「貴女の家では」
「感じないです」
少し俯いてだ。彼女は話す。
「私の家でだけは」
「しかしご実家でも」
「勿論木を使っています」
こう答えるのだった。
「ですがこうした匂いは」
「しませんか」
「不思議ですね」
微笑んでだ。真理はこうも言うのだった。

第十八話　相互訪問その二

「こうした木の匂いがするのは」
「不思議ですか」
「そう思います」
彼女の考えをだ。義正に話すのである。
「ただ。それでも」
「それでも？」
「落ち着きますね」
「この木の匂いの中にいるとですね」
「はい、落ち着きます」
そうだというのだ。
「とても」
「木は」
義正はだ。その木について話した。
「森に行かれた時と同じで」
「あの時と同じですか」
「そうです。人の心を癒してくれるものですから」
「だからですね」
「それで落ち着くのだと思います」
こう真理に話すのだ。そしてだ。
さらにだ。彼女にこんなことも話した。
「あとですが」
「あと？」
「私の実家は落ち着きますか」
今度話すのはこのことだった。彼のこの実家のことだった。
「そうですか」
「はい。木の匂いのことだけでなく」
「全体の雰囲気がですね」

「落ち着きます」
そうだとだ。、真理はまた義正に話した。
「ここにいますと」
「左様ですか。それは何よりです」
真理のその話を受けてだ。義正は微笑んでいた。
そしてそのうえでだ。彼女をある場所に案内したのだった。
「ではです」
「それでは？」
「庭に出ますか？」
案内する場所はそこだった。屋敷の庭である。
「そこも見られますか？」
「お庭をですか」
「花をいつも飾っていまして」
「花ですか」
「薔薇やそうしたものを」
そうした花達を飾っている庭だというのだ。
「如何でしょうか。そちらは」
「はい」
まずはだ。一言で答えてからだった。
真理は微笑みだ。義正に述べた。
「ではそちらに御願いします」
「はい、それでは」
「薔薇ですか」
その薔薇についてだ。真理はまた微笑んでいた。
そしてそのうえでだ。こうも言うのだった。
「薔薇はいいものですね」
「前からお好きでしたね」
「花はどれも好きです」
そしてだ。その中でもだというのだ。
「薔薇はとりわけ」

「お好きでしたね」
「古来より我が国にもありましたね」
「そう聞いています」
「しかし。西洋の趣を感じますね」
薔薇が流行したのも文明開化からだ。だからそう感じるというのだ。
「それの象徴の様に感じます」
「西洋を代表する花と思われますか」
「確か英吉利の象徴でしたし」
「はい、あの国の国花です」
「そうでもありましたね」
「あの国ではかつてです」
義正は薔薇と英国のことについてさらに話す。妻を庭に案内しながら。

第十八話　相互訪問その三

「薔薇戦争というものがありました」
「薔薇戦争ですか」
「はい、そうした戦争がありました」
かつて英国であった王位を争う戦いのことだ。互いに赤薔薇、白薔薇を象徴として争った為この名前になった戦争である。
「そしてその戦争からです」
「どうなったのでしょうか」
「あの国では薔薇は一つになりました」
「薔薇が一つにとは」
「それまでは赤薔薇と白薔薇」
その二つにだというのだ。
「別れていたのですが」
「それが一つになったのですね」
「今ではあの国の薔薇は赤と白、二つが一つになっているのです」
「贅沢ですね。それは」
二色の薔薇が一つになっていると聞いてだ。真理はこう返した。
「とても」
「そう思われますか」
「はい、とても」
実際にそうだとも答えるのだった。
「私はどちらかを選べと言われると」
「困りますか」
「どちらの薔薇も非常に素晴しいので」
赤薔薇も白薔薇もだというのだ。
「ですから。そう言われると」
「そうですね。薔薇はですね」
「罪な花ですね。あまりにも奇麗で」

「選べませんね」
「とても」
それはだ。できないというのだ。
「ですから。とても」
「実はそれはです」
義正は真理のその話を受けてこう話した。
「我が家も同じでした」
「八条家もですか」
「赤薔薇と白薔薇どちらか」
それを選ぶとなるとどうなったかというのだ。
「選べずに」
「それでどうなったのでしょうか」
「両方でした」
「両方!?」
「はい、両方です」
「では赤と白と」
真理もその話を聞いて述べた。
「その両方の薔薇がですか」
「はい、庭に咲かせました」
「そうだったのですか」
「優柔不断でしょうか」
義正は少し苦笑いになってこう述べた。
「これは。それとも」
「それとも?」
「贅沢でしょうか」
こちらも話に出すのだった。
「両方の薔薇を咲かせたのは」
「そうですね。この場合は」
「どう思われますか?」
「贅沢ですね」

にこりと笑ってだ。そちらだと答える真理だった。
「それもかなり」
「そう思われますか」
「薔薇は。赤だけでも白だけでも」
「贅沢なものですね」
「花はそれだけで贅沢です」
花の美しさ、それ自体がだというのだ。
「そしてその中でも薔薇は」
「とりわけ贅沢な花ですね」
「あの奇麗さと豪奢さ」
その二つを併せ持った花、それが薔薇だというのだ。

第十八話　相互訪問その四

「香りもまた」
「そう。薔薇は姿だけではありませんから」
「あの香りは最高の香りです」
語りながらだ。真理は恍惚とさえなっている。
「その香りの薔薇はです」
「一色だけでも最高の贅沢であるというのに」
「両方があるとは」
「だから贅沢ですね」
「最高どころではありません」
真理は一旦こう言った。そしてだった。
そのうえでだ。義正にこう話した。
「最高の上にあるものです」
「最も高い場所にあるもののさらに」
「上となると」
「言葉が難しいですね」
少し苦笑いになってだ。真理に話す彼だった。
「そうなると」
「英語ではこの場合は」
「最上級より上の言葉はありませんから」
「止まりますね」
「ですが日本語では」
「それはありますか？」
「何と言うべきでしょうか」
義正も少し困っていた。しかしだった。
言葉を少し考えながらだ。こう真理に述べた。
「そうですね。この場合は」
「はい、この場合は」

「至上、いえ至高」
至るという言葉がまず述べられた。
「少し違いますね」
「最高と同じだけのものでしょうか」
「まだそうですね」
そうした言葉ではだ。まだ最高を超えていないというのだ。
ではどうかと。義正は真理と共に言葉を考える。その言葉を考えながらだ。彼は真理を庭に案内している。その薔薇の庭にだ。
「となると」
「他に相応しい言葉は」
「この言葉でしょうか」
「その言葉は？」
「究極。そして」
「そして？」
「純粋」
究極をだ。突き詰めればそれはどうなるかと考えての言葉だった。
「完全な純粋でしょうか」
「純粋ですか」
「薔薇の美しさもまた純粋ですから」
花言葉ではない。薔薇そのものを見ての言葉だった。
「ですからこの場合はです」
「純粋になるというのですね」
「そうなるのではないでしょうか」
真理に再び話すのだった。
「そう思いますが」
「そうですね。確かに」
「真理さんもそう思われますか？」
「義正さんのお話でそう思いました」
「私の話からですか」
「はい、思いました」

まさにだ。それによってだというのだ。
「その様にです」
「左様ですか」
「そうですか。最高の上位にあるのは」
「純粋です」
また言う義正だった。
「それではないかと。今思いました」
「では今からその純粋を」
「薔薇という名を純粋を」
「見させて下さい」
義正にだ。頼んでの言葉になっていた。

第十八話　相互訪問その五

「是非共」
「いえ、私が見させるものではなく」
「それが違いますか」
「二人で見るものですから」
「二人で」
「いつもそうお話していますね」
こう真理に告げた。
「そうですね」
「はい、そうですね」
「ですから。今もです」
「見させてもらうのではなく」
「二人で見るものです」
そうなるというのだ。二人でだというのだ。
「ですから。今から」
「それでは」
「庭に行きそして」
「はい、赤薔薇と白薔薇の二つを」
「見ましょう」
「そうしましょう」
ここでだった。その庭にだった。
二人で出て薔薇達を見る。その薔薇達は。
二人から見て右手に赤、左手に白の薔薇がある。どの薔薇も緑の中に見事に咲き誇っている。その花達を見ながら真理は言った。
ほう、とした声になってだ。そのうえで義正に言うのである。
「見事ですね」
「御気に召されましたか」
「はい」

そうだとだ。義正に確かな言葉を返した。
「これ程度までとは」
「思われませんでしたか」
「凄い数で」
そのだ。薔薇の数がだというのだ。
「それに薔薇の一つ一つが」
「見事だというのですね」
「素晴しいです」
言葉は恍惚としたものになっていた。そうしてまた言うのである。
「見ていて飽きません」
「本当に御気に召されたのですね」
「はい。とても」
実際にそうだとだ。真理は答えた。
「ずっとここにいたい位です」
「ははは、そこまでなのですか」
「二人で」
ここでもだ。こう言う真理だった。
「二人で。ずっといたいです」
「二人で、ですね」
「二人でなければ」
そうでなければと。こんなことも言うのだった。
「見ていても。喜びは半分ですから」
「けれどこうして一緒にいれば」
「違いますね」
「二人なら喜びは倍になりますから」
「その通りですね。それでなのですが」
「それで？」
「薔薇だけではありません」
その他にもあるとだ。義正は真理にその気品のある笑みで話した。
「この庭にあるのは」

「薔薇だけではないのですか」
「西洋だけではありません」
薔薇、即ち西洋だけではないというのだ。では何があるかというと。
「我が国もあります」
「日本も」
「はい、あります」
静かに微笑んでだ。こう真理に話すのである。
「この庭には池もありまして」
「そこに日本があるのですね」
「西洋の中に日本を置きました」
それであるというのだ。日本がだ。
「その庭のところにです」
「では」
「行かれますね」
「そうさせて下さい」
微笑んでだ。また義正に話すのだった。

第十八話　相互訪問その六

二人はその池のところに来た。そこには。
清らかな池がある。そこには装飾はない。緑の草木の中に池がある。そしてその池の中にあるもの、それはというと。
蓮だった。その蓮達もあった。その蓮達を見てだ。
真理は蓮達から目を離さずにだ。義正に言うのだった。
「これが日本ですね」
「そうです。日本です」
まさにこの蓮達こそが日本だとだ。義正も話した。
「そういうことです」
「そうですね。奇麗ですね」
「そう言って下さいますね」
「日本もまた」
そしてだ。真理はその日本についても話した。
「このお屋敷の中にあるのですね」
「そうです。あえて置いたのです」
「西洋ばかりではよくないと思われてのことですね」
「はい、そうです」
まさにだ。それでだというのだ。
「この屋敷を建てた祖父がです」
「御爺様がそう思われて」
「それでこうしたものになりました」
そうだったとだ。真理に話す義正だった。
「池は。この様に」
「そうさせてもらいます。それでは」
「はい、それでは」
こうしてだった。今度はだ。

「何かこうしたお池を見ていると」
「あの時のことをですね」
「あの時は確か」
真理は二人がはじめて出会った時のことを思い出していた。そのうえでの言葉だった。
「百合でしたね」
「そうでしたね。真理さんが見ておられたのは」
「はい、百合でした」
その花だったと。二人は話していく。
「百合は西洋的ですが東洋的でもありますね」
「そのどちらにあっても不思議ではない花ですね」
「そうしたお花もありますね」
「花も色々だということですね」
「ですね。花もまた」
「一つではありません」
このことをだ。二人で話してだ。
そうしてだった。真理はさらにだった。
蓮を見続けてだ。こんなことも言った。
「思うのですが」
「蓮についてですか」
「蓮を見ているといつも」
いつも。どうかというと。
「その上を歩いてみたくなります」
「蓮から蓮にですね」
「そうしたくなります」
「ですね。若し蓮の上を歩けたら」
「そしてお池をそこから見られたら」
「それもまた奇麗ですね」
「できることではないですが」
だからこそ余計にだった。真理はそうしたいというのだ。

蓮達を見続け。さらにだった。
「蓮は。仏教にもよく出ますが」
「だからこそ。東洋的ですね」
「日本の香りが強いですね」
「そうですね。蓮は仏教の花です」
「そして水の花でもありますね」
「そうですね。蓮は」
義正も言う。
「水があってこそですから」
「その水ですが」
「水もでしょうか」
「奇麗ですね」
こう言うのだった。その池の水面を見ながら。
「まるで鏡です」
「水鏡ですね」
「そう見えます」
微笑だ。水面に映る自分と義正を見てだ。そのうえで話すのである。

第十八話　相互訪問その七

「とても奇麗な鏡に」
「鏡。この庭には鏡もあると」
「花と空を映し出す。そうした鏡ですね」
「確かに。言われてみれば」
そうだとだ。義正もここで頷いたのだった。
「そうした感じですね」
「はい。ですから」
「だからですね」
「こんな鏡もあるのですね」
真理はまだ自分と義正を見て話をする。
「自然が生み出した鏡ですね」
「自然は。この世で最も美しいものをです」
「生み出しますね」
「人の手によらずに」
そうするというのだ。自然は。
「それは自然だけができることですね」
「そうですね。それができるのは」
「自然だけですね」
「人は芸術を生み出すことができます」
「そして自然は」
「その自然の中に。美を生み出します」
それができるのがだ。自然だというのだ。
「こんなことは人にはできませんね」
「人の力には限界がありますね」
「人もまた」
義正が言った。
「自然の中にありますから」

「人ともですか」
「自然の中にあります」
義正も鏡を見ていた。そこに映る自分と真理の姿をだ。
その二人の姿を見ながらだ。また話すである。
「私達もです」
「自然と人は」
「西洋では対立するものとみなしていますね」
「そうした考えにあるようですね」
「そうした考えもあります」
義正はここではその考えは否定しなかった。だがだ。
それと共にだ。彼はこの考えをまた話した。
「ですが。私は」
「人は自然の中にあると考えられるのですね」
「人と自然が対立するという考えは」
「その西洋の考えは」
「おそらく基督教からです」
今の欧州を欧州たらしめているだ。その教えからだというのだ。
「ですがそれ以前の希臘や北欧の神話では」
「それは違いますか」
「自然の中にあり」
そしてその中でだというのだ。
「生きています」
「かつての神話の中ではですか」
「ですから。私はです」
「人は自然の中にあると考えられるのですか」
「そもそもです」
義正は話をさらに掘り込んでみせた。
「我が国でもそうですね」
「我が国の神話ですね」
「人は神々と自然の中にありますね」

「あの数多くの神々の中に」
「自然のそれぞれを司る神々の中にです」
人が生きている、それが日本神話なのだ。
「ですから」
「それでなのですね」
「私は自然の中に人がいると思います」
ここでだ。自然が完全に主となった。
「その様にです」
「成程。そうなのですね」
「人もまた自然ですから」
そしてさらに言うことは。

第十八話　相互訪問その八

「美しいのです」
「自然が生み出したものだからですね」
「そう思います」
「ですね。私達もですね」
「自然の中の一つなのです」
あまりにも壮大なだ。その中の一つだというのだ。
「思えば小さな存在です。しかし」
「しかし？」
「その小さな存在がです」
どうかというのだ。その小さな人間がだ。
「やはり美しいのです」
「私達がですか」
「醜い部分もあります」
それは否定できなかった。人には確かにそうした部分もある。
だがその醜も頭の中に入れてだ。話すのだった。
「ですが。それと同じだけです」
「美もありますか」
「そう思います。近頃は特に」
「近頃は」
「貴女と共にいるようになり」
それからだ。さらに思うようになったというのだ。
「そうなりました」
「そうでしたか。私と」
「美しいのは外見のことではなく」
「中ですね」
「はい、心です」
美しいのはだ。それだというのだ。

「人のその心がです」
「美しいのですか」
「だからこそ私達はです」
「こうして二人で、ですね」
「幸せに導いてもらいました」
他の人達のだ。美しい心によってだというのだ。
「そうしてもらいましたから」
「他の方々の清らかな心が」
「そうしてくれました」
こう真理に話すのである。
「素晴しいことに」
「そうですね。私達だけではとても」
「今こうしてここにいることは」
「できませんでした」
二人でだ。このことを確かめ合うのである。
「ではやはり」
「人の心には清らかなものがあります」
そのことだった。確かめ合うものだ。
その話をしてだ。さらにだった。
二人でだった。その蓮達を見てだ。次は。
真理がだ。こう義正に言ってきたのだ。
「あの」
「はい、次はですね」
「私のお家に」
招待するというのだ。真理の実家にだ。
「二人で」
「そうですね。お互いにですから」
「そうして頂きますね」
「そうさせて下さい」
穏やかな言葉でだ。義正は答えた。

「二人で」
「有り難うございます。それでは」
「今度は」
「中に入りますか」
屋敷の中にだ。戻ろうかというのだ。
「そうしますか。それでお茶でも飲みましょう」
「お茶をですね」
「それか食事でも」
それにもだ。真理を誘うのだった。
「そうされますか」
「御食事ですか」
「もういい時間です」
義正は懐から懐中時計を出して時間を見た。見ればその時間は。
「十二時です」
「もうそんな時間ですか」
「はい。ですから」
どうかというのだ。食事をだ。
「如何でしょうか」
「御食事は」
「遠慮することはないです」
真理がそれを見せたのでだ。事前にだった。

第十八話　相互訪問その九

真理に対してだ。こう言ったのである。
「真理さんもまた。この家の娘ですから」
「義正さんと共にいるから」
「だからです」
微笑みだ。真理に話す。
「遠慮されずに」
「義正さんと共にですね」
「食事にしましょう」
微笑みをそのままにして。真理に話す。
「シェフに言えばです」
「私達で」
「そして場所は」
義正は自分のペースで話を進めた。ここはだ。
「面白い場所がありまして」
「面白いとは？」
「この屋敷は基本的に洋館です」
しかしだ。その中でもだというのだ。
「ですが和室もありまして」
「和室もですか」
「そうです。そこで二人で」
「御昼をですね」
「和室で。和食を」
その組み合わせだった。和室で和食をというのだ。
「そうされますか。そこでも」
「そこでも？」
「面白い趣向がありますから」
だからだとだ。真理を誘うというのだ。

「そうされますか」
「御誘いでしたら」
愛する夫の誘いならばと。真理も応えた。
そしてその返答は。こうしたものだった。
「そうさせてもらいます」
「有り難うございます。それでは」
「その部屋で」
「食事にしましょう」
こうしてだった。次は。
二人で和室に入り卓、黒檀のその見事な卓と畳、それに座布団の上に向かい合って座りだ。食事を待つ。その中でだった。
真理は周囲を見る。そこは。
周りがよく見えた。入り口から入って三方がだ。硝子張りだった。
それで周りがよく見えた。その周りは。
「お庭ですよね」
「はい。ここもまた」
そうだとだ。義正は答える。
「我が家の庭です」
「ここでは薔薇ではないのですね」
「そうです。紫陽花等です」
それにだった。他にあるものは。
「それに皐です」
「日本ですね」
「庭で。ここはです」
「和風にされたのですか」
「ここは父が考えたものです」
義正の父、即ち八条家の今の主がだ。考えたものだというのだ。
「洋風もいいが。和風もと考え」
「そうしてこうした場所にされたのですか」
「そうです。洋風だけに留まらず」

そのうえでだというのだ。
「和風もです」
「設けられたのでしょうか」
「如何でしょうか」
義正は真理にあらためて尋ねた。
「ここは」
「はい。日本は」
彼女達の祖国。そこはだというのだ。
「落ち着きます」
「そうですね。和風は」
「はい、とても」
また言う彼女だった。
「ここにこうしているだけで」
「だからです」
「文化ですね」
「文化？」
「はい、文化です」
義正はここでこう真理に話した。

第十八話　相互訪問その十

「それは文化ですね」
「文化といいますと」
「やはり一番落ち着くのは」
それが何かというとだった。
「日本ですね」
「はい、どうしても」
「それです」
「それ？」
「はい、文化です」
また真理に話したのだった。
「それこそがです」
「日本の中に落ち着き。それだからこそ」
「日本文化ですか」
「そうです。日本人はやはり」
「文化の中に落ち着くのですね」
「その通りです」
真理に対して微笑んで話した。
「そういうものだと思います」
「左様ですか」
「そしてです」
ここでまただった。義正は。
真理の顔を見てだ。こうも話した。
「食事もまた文化です」
「だからですね」
「そうです。やはり食べるものもまた」
「日本のものが」
「最も馴染みます」

そうなるというのだ。
「そういうものではないでしょうか」
「日本人には日本文化」
「おそらく西洋人も同じです」
「日本文化は馴染みませんか」
「だからこそです。父は」
義正は部屋の中だけでなく窓の向こうの庭も見回してだ。そのうえでだ。
真理も見て。それで話した。
「こうしてです」
「洋館の中に和室を造られたのですね」
「祖父も。和室こそ造りませんでしたが」
「それでもですか」
「着ていたのは和服でした」
それだったというのだ。
「常に」
「そうでしたか。和服だったのですね」
「飲む酒は日本酒で」
酒はそれで、だった。
「菊を愛していました」
「菊ですか」
「他には桜も」
日本を象徴するだ。その花もだというのだ。
「愛し。和食を好んでいました」
「洋館の中の日本ですね」
「洋館に住んでいても愛していたのは日本でした」
豪奢な、文明開化の象徴の中でだ。日本を愛していたというのだ。
「洋服を着ていてもです」
「それでも和服ですか」
「はい、和服です」

その方が多かったというのだ。
「そうでなければ落ち着かないとも言っていました」
「成程。それでは」
「白杜家はどうでしょうか」
義正はここで真理の家はどうかを訪ねた。
「やはり西洋でしょうか」
「私の家も洋館ですし」
「それでもですね」
「父も母も」
どうかというのだ。真理のその両親は。
「いつも和服です」
「日本ですね」
「御風呂もです」
次は風呂場の話だった。

第十八話　相互訪問その十一

「そこも和風です」
「御風呂もですか」
「そしてベッドもありますが」
それでもだというのだ。
「御布団もあります」
「では畳の部屋も」
「茶室もありまして」
日本そのものと言っていいだ。それだった。
「そこでよく茶を飲みました」
「いいものですね。それは」
「そして母が好きな華道の」
「そのお花もですね」
「よく飾られていました」
「洋館の中に華道の花ですか」
「そうした日本がありました」
この話を聞いてだ。義正は。
微笑みだ。そうしてこう言った。
「私の屋敷にも」
「完全な洋風というのはです」
「馴染めませんか」
「日本人には」
そうだというのだ。
「どうしても」
「そうなりますね。やはり」
「日本人は日本に生まれ育っているからこそ」
「日本人だからですね」
「やはり。日本のものに最も馴染みます」

そうなるというのだ。どうしても。
「私もそうですね」
「そして私も」
「確かに洋館は好きです」
このことは義正自身も認めた。
「そして洋服もです」
「洋食もですね」
「全て嫌いではありません」
そうだというのだ。
「ですが」
「それでもですね」
「やはり。落ち着くのは」
「日本ですね」
「そうです。日本です」
またそれだと話す二人だった。
「日本のものがそこにあれば」
「それだけで」
「落ち着きます」
「だから食事もまた」
「そうです。ただ」
「ただ？」
「洋食にしてもですが」
そのだ。西洋から入ってきたそれもだというのだ。
「そして洋服も洋館も」
「そうしたもの全てがですか」
「西洋から入ってはいますが」
それでもだというのだ。
「その西洋の方から見ればです」
「違うというのですか」
「日本が。それも強く」

「入っているというのですね」
「江田島ですが」
義正はここでまた一つの例えをその話に出してきた。
「海軍兵学校がありますが」
「赤煉瓦のあの場所ですね」
「あの煉瓦は英吉利から直接輸入して」
そして築いたものなのだ。そうした意味では本格的な西洋建築である。
しかしそれもだ。どうかというと。
「やはり。その英吉利の方が見れば」
「日本のものですか」
「その様です」
「完全に西洋のものを築いても」
「そこに日本があるとのことです」
「我が国のそれが」
「はい、あるようです」
そう言われたとだ。真理に話すのだった。

第十八話　相互訪問その十二

「私達の気付かないうちにです」
「そうした日本が入っているのですね」
「正直私も驚きました」
「日本が入っていることに」
「誰も。完全にです」
「西洋を再現したと思っていたのに」
「そこに入ってしまっているようです」
そうなっているというのだ。
「そうした意味で私達がいるこの屋敷も」
「日本ですか」
「そうなるのでしょうか」
今は断定する言葉ではなかった。だがこう言ったのだった。
「やはり」
「そうですか」
「思えばその日本文化も」
「それもですね」
「支那文化の影響が強いです」
このことは言うまでもなかった。既にだ。
「唐代からの」
「そうですね。今も中華街等がありますし」
「支那そばもありますね」
この食べ物の話も為された。
「あれも。やはり」
「支那のものですね」
「支那の影響は昔から強く受けています」
「そしてその中で日本文化が育まれていった」
「ですから。やはり」

「我が国の文化は各国の文化の影響が強いのですね」
「支那なり西洋なり」
どちらの影響も受けているというのだ。
「そして我が国の文化がです」
「育まれていき今に至る」
「そうなっていったと思います」
「その日本文化は」
「今ここにもあります」
そしてだった。さらにだった。
「食べもします」
「これからですね」
「はい、間も無くそれが来ますが」
「楽しませて。そして」
さらにだと。真理は義正に対して微笑んでこう答えた。
「落ち着かせてもらいます」
「食べてそのうえで、ですね」
「そうさせてもらいます」
こう述べたのだった。
「今から」
「それでは」
ここでだ。遂にその和食が来た。それは。
懐石料理だった。所謂それを目の前にしてだ。
真理はだ。静かにこう言った。
「やはり。いいですね」
「我が家の料理人は京都で働いていました」
「京都で、ですか」
「そうです。老舗の料亭にいまして」
その者をだというのだ。
「雇っているのです」
「では味は」

「はい、京風です」
それだというのだ。
「あっさりとしています」
「そして素材の味を活かしてですね」
「この鱧にしても」
まずは鱧を見る。鱧を胡瓜とあえているものだった。
「京都のもので」
「鱧はそうですね」
「大阪と京都です」
鱧といえばだ。やはりこの二つの町だった。
「その鱧をこうしてです」
「使ったのですね」
「それと」
まだあった。卓には。

第十八話　相互訪問その十三

「これもです」
「これは確か」
白と黄色の中間色の薄い和紙の様なものが小皿にある。それは。
「あれですね」
「はい、湯葉です」
「これもでしたね」
「京都のものです」
まさにそれだった。この湯葉もまた。
「如何でしょうか」
「それに鶏肉に鮎にお吸い物に」
「どれも日本ですね」
「このお吸い物は」
「それも鱧です」
これもだった。
「鱧のだしです」
「鱧尽くしですね」
「鱧の季節ですから」
だからだ。その鱧だというのだ。
そしてその他にはだった。蛸もあればほうれん草もあり人参もある。そういったものを上品な感じで調理しているそれが今の食卓だった。
それを全て見てだ。真理はまた述べた。
「夏の」
「最高の組み合わせですね」
「そうですね。まさに関西ならではの」
「京風です」
そのだ。京都の料理だった。

「それを意識したものです」
「京都の料理は違いますね」
「そうですね。大阪や神戸のそれとは」
「奈良ともまた」
とにかくだ。全く違っているのだ。京都の料理は同じ関西といえど他の地域とはだ。それは外観にも実によく出ていて真理に見せていた。
そして真理は。その馳走が置かれている皿も見た。
どの皿もだった。見事だ。白地に青く奇麗に塗られていた。
「この食器もいいですね」
「父が特別に」
「造って頂いたものですか」
「はい、職人に」
直々に頼んで。そうしてだというのだ。
「そうしてもらったものです」
「成程、それでは」
「かなり値が張ったそうです。しかしです」
「それだけの価値はありますね」
「父の自慢の品です」
義正は微笑んでそうだと話した。
「それだけに」
「そうですね。この食器もまた」
見事だと。真理も認めた。
そしてだった。さらに。
箸を手に取る。その黒い箸を。
そして食べるとだ。その味は。
やはり素材を活かしている。味付けは薄い。
だが風味が次第に効いてきてだ。真理を楽しませた。
その風味を味わいながら。彼女は義正に話したのだった。
「これはまさに」

「京都ですね」
「はい、京都です」
真理にもだ。このことがよくわかったのだった。
「素晴しいです」
「京都はよく日本そのものだと言われますが」
「この懐石料理はそうですね」
「見事な和食ですね」
「はい」
今度は鯉の刺身を食べる。山葵を乗せて丸めて醤油に漬けて。そうして食べると。
やはり後になってより深く味わえる。その風味までもだ。
それを味わいながら。また言った真理だった。
「和食はこうして」
「繊細なまでに風味までも」
「活かしていますね」
「生かしているとも言えましょうか」
言葉は少し交差した。

第十八話　相互訪問その十四

「そうとも言えますね」
「ですね。そうとも」
「これこそが」
「日本の味」
このことを味わいながらわかったのだ。
「今我が国にあるものですね」
「思えば贅沢ですね」
「贅沢。こうしたものが食べられることがですか」
「この和食だけではないのですから」
真理は今食べている日本だけかと考えた。しかし義正はだ。
それだけではないと。こう言うのだった。
「他にも」
「西洋や支那のものも」
「味わい、見聞きして」
そうしてだった。さらに。
「楽しめるのですから」
「そうですね。他の国のものも」
「それを考えるとやはり」
「贅沢ですね」
「いい時代です」
義正も懐石料理を味わいながら。こう言うのだった。
「恋愛。心からお互いに愛し合うのなら」
「それができて」
「そうして愛し合いながら」
そのうえで、であった。さらに。
「様々な文化を楽しめるのですから」
「それが今の日本ですね」

「これからどうなるかわかりません」
だがそれでもだった。今は。
「江戸の頃よりも明治の頃よりも」
「過去よりさらに」
「幸せになっています」
「これからも」
「幸せになりましょう」
真理を見て。微笑んで述べた。
「そうしましょう」
「そうですね。やがては」
「やがては？」
「今私達は二人で楽しんでいます」
真理からだ。こう言ったのだった。
「ですがそれをです」
「そうですね。二人だけではなく」
「子供達もです」
既にだ。そのことを考えている真理だった。
そしてだ。そのことを考えながら義正に話した。
「そうして家族で」
「楽しむべきですね」
「幸せは増えるものですから」
「増やせるものですね」
「ですから」
家族をだ。もうけたいというのだ。
「これからは」
「そうですね。幸せは大きくできて」
「増やせるものですね」
「はい」
義正は真理の言葉にこくりと頷いた。
「だからこそ是非」

「大きくして増やしていきましょう」
二人は笑顔で話していくのだった。
「幸せを」
「そうですね。日本もさらに幸せになっていっています」
「ですから私達も」
「そうなりましょう」
二人でそのことを話すのだった。今の彼等は。
幸せに満ちていると思っていた。全てが。しかしだった。
不幸というものは突如として来るものということはだ。まだ知らないのだった。
その二人は食事の後でだった。
屋敷の応接間でだ。義正の妹、その義美と話していた。
洋服、紅のドレスの彼女はだ。にこやかに笑って兄とその妻に言うのだった。

第十八話　相互訪問その十五

「お兄様、お久し振りです」
「そうだな。久し振りだな」
「そしてお義姉様ですね」
真理はこう呼んでだった。そのうえで。
頭を深く下げて。こう言うのだった。
「はじめまして」
「義正さんの妹さんでしたね」
「はい」
その通りだとだ。義美もにこりと笑って答える。
「義美といいます」
「はじめまして」
今度は真理が頭を下げた。
「真理といいます」
「お話には聞いていました」
今度はこう言った義美だった。
「ですが」
「思っていた以上です」
「ですが？」
にこりと笑っての言葉だった。
「お奇麗で落ち着いた方ですね」
「そんな、私は」
「お兄様に相応しい方です」
真理にこうも言ったのだった。
「そしてお兄様も」
「僕もなんだね」
「はい、この方に相応しい方です」
そうだというのだ。彼もまた。

「神様がそれぞれ」
「引き合わせてくれた」
「そうしてくれたと」
「そう思います」
これが義美が二人に言うことだった。
「では。これから宜しく御願いします」
「こちらこそ」
女同士での挨拶だった。それを見ながらだ。
義正は笑顔でだ。真理にこんなことを話した。
「実はこの娘はです」
「義美さんは？」
「今でこそこうして落ち着いた雰囲気ですが」
「それは違ったのですか？」
「子供の頃はお転婆で」
よくある。そうした話をするのだった。
「木に登ったり草原を駆け回ったり虫を捕まえたり」
「そうしたことをですか」
「いつもしていました。姿もです」
今のそのおしとやかな。お嬢様そのものの姿もどうかというのだ。
「まるで男の子の様でした」
「そうだったのですか？」
「そうです。いや、袴を穿いていてもそれがズボンの様で」
「嫌ですわ、お兄様」
義美は兄のそうした話にだ。顔を赤らめさせてだ。
そのうえでだ。こう兄に言った。
「その話はもう」
「ああ、駄目だったか」
「私も今は」
違う。だからだというのだ。
「止めて下さい」

「わかったよ。それじゃあね」
「すいません、兄が下らないことを言って」
真理にだ。打消しの話をするのだった。
「確かに子供の頃はそうでした」
「ですか」
「けれど今はこうして」
務めて。そうした感じだった。
「やはり淑女でなければなりませんね」
「撫子ですね」
真理も言った。
「そうですね」
「はい、我が国の女性はそうあるべきです」
義美は姿勢を正して真理に話した。
「お義姉様はおわかりなのですね」
「実際にできているかはどうかですが」
「いえ、そうあるべきですから」
「ですか」
「では。これからも」
「はい、これからも」
「御願いします」
「こちらからも」
こうした話をしてだった。二人はお互いにはじめて顔を見合わせたのだった。これも大きな出会いになっていくのを二人は微かに感じていた。

第十八話　完

２０１１・７・２１

第十九話　喀血その一

今度はだ。真理の家の屋敷にだった。
二人で向かう。その車の中でだ。
義正は真理にだ。こんな話をした。
「この車ですが」
「これですね」
「父は最近こう言っています」
ここからだ。話を切り出してだった。
「やがて車を」
「車を」
「日本に何百万台もあるようにしたいと」
「何百万台ですか」
「そう、何百台万台です」
そこまで多くしたいというのだ。
「誰もが車を持っていて乗れる様な国にです」
「それは」
真理はそこまで聞いてだ。
顔を驚かさせてだ。義正、自分の隣の席にいる彼に問い返した。
「御言葉ですが」
「信じられませんか」
「夢の様です」
そこまでの話だというのだ。
「車を誰もですか」
「はい、そう言っています」
「そんなことができるのでしょうか」
真理はそのことについてはだ。疑問を抱かずにはいられなかった。
それでだ。首を傾げさせて義正に尋ねたのだった。

「車が。我が国を」
「はい、覆わんばかりにです」
「何百万台も走るとは」
「信じられませんよね」
義正もだ。こう真理に言った。
「そうしたことができるとは」
「今の日本では」
「亜米利加ではですが」
前置きになった。この国ではどうかというのだ。
「既に普通に車が走り回っているそうです」
「何百万台もですね」
「それはさらに増えていっているとか」
「それは亜米利加だからですね」
あの国だからだと。真理は考え答えた。
「あの国は我が国よりも遥かに大きく豊かですから」
「だからそうしたことができるというのですね」
「違うでしょうか」
「いえ、その通りです」
亜米利加だからできる。まさにその通りだった。
亜米利加の国力は圧倒的だった。特に第一次世界大戦が終わったこの時点ではだ。まさに世界の半分程の力があった。その国だからこそだった。
「やはり。あの国はです」
「日本とは全く違いますね」
「日本も確かに豊かになりました」
義正は今度はこの事実を話した。
「維新から産業を興し」
「そうしてきてですね」
「戦争に勝ち危機を乗り切り」
そしてさらにだった。

「国際的な地位をあげてです」
「そうして今に至りますね」
「維新の頃とは比べ物になりません」
そこまで豊かになった。これは事実だ。
だがそれでもだった。車を何百万台もというとだ。
「それはとてもです」
「できないことですね」
「今は無理です」
また事実を話す義正だった。

第十九話　喀血その二

「とても無理です」
「その通りですね」
「今はです」
だが、だ。義正はだ。
今の時点ではと限定してみせた。そうしてさらに話すのだった。
「ですがこれからはです」
「違いますか」
「維新の頃。ここまでなると誰も想像しなかったでしょう」
「そのことは聞いています」
その頃のことを知る人からだ。
「とても。露西亜に勝つことも」
「しかし。それをできました」
「では。何時の日かですね」
「そうなる可能性は零ではありません」
義正はその声に熱いものを宿らせて話す。
「すぐにはできなくともです」
「やろうと思い努力をしていけば」
「必ずできます」
「これまでの様にですね」
「そうです。必ずできます」
また話す義正だった。
「ですから。父の考えは否定しません」
「むしろ肯定されますね」
「はい」
その通りだとだ。義正ははっきりと答えた。
「そうしています」
「そうですか。鉄道だけでなく」

「車もです」
「今我が国は船も作っていますが」
大々的にだ。それもできるようになっていたのだ。
しかもだ。さらにだった。
「近頃では空についても言われていますが」
「飛行機ですね」
「我が国も空を飛べるのでしょうか」
「軍でそれを懸命に学んでいるところです」
「懸命にですね」
「そうです。空も必ずです」
飛べるようになる。そうなるというのだ。
「我が国は空でも大きくなれるかも知れません」
「夢の様ですね」
自然とだ。笑みになってだ。真理はこの言葉を出したのだった。
「何か。車に空にと」
「夢です。しかし夢は」
「その夢は」
「実現できるものです」
義正は確信していた。このことを。
「私達が今こうしていられるようになったのと同じで」
「それと同じですね」
「文化も技術も」
「どちらにおいても」
「果たせます。必ず」
「文化もですね」
「そうです。西洋に追いつくのです」
ずっと目指していることだった。維新からだ。
「残念ですがまだ追いついていませんが」
「それでも。目指せば」
「なれますから。少なくとも近付いてはいるでしょう」

主観的に見ているがだ。そうだというのだ。
「次第に」
「次第にですね」
「そうなっていますから」
「音楽も絵画も」
「建築も」
「我が国は。彼等に追いついていっていますか」
真理にとってはこのことも夢の様だった。彼女が幼い頃に聞いた欧州はまさに夢そのものだったからだ。その夢に追いつこうとしていること、それ自体が夢だった。
その夢を感じながら。それでなのだった。
半ば恍惚としてだ。今の日本を想うのだった。
その想う言葉はだ。自然として出てきた。

第十九話　喀血その三

「信じられないです」
「しかしそれでも」
「過去や現在信じられないことでも」
「未来はわからないのです」
「未来には信じられる様になる」
「そうです。我が国がここまでなれたのも」
「最初は」
どうかというとだった。まさに。
「そうですね。確かに」
「幕末の頃でしたね」
義正は話をそこまで遡らせた。そのうえでの話だった。
「あの頃はとても」
「ここまでなるとはですね」
「皆列強に怯えていました」
「何時。どう攻められるかと考えただけで」
「震え上がっていました。日本の存続は」
それ自体がなのだった。まさに。
「風前のともし火の如きものでした」
「それが今は」
「こうして。豊かにもなり」
そしてだ。さらにだった。
「安全も保障され」
「陸軍と海軍があり」
そのだ。二つの戦争で奮戦した頼もしい軍がだ。
「それにですね」
「はい、地位も確かです」
国際連盟の重鎮にもなっている。このことも大きかった。

「そこまで辿り着きました」
「まるで。それは」
「それは？」
「天に昇った様ですね」
真理はうっとりとした目になってそうだと話すのだった。
「まさに」
「そうですね。そうなりますね」
義正もだ。真理のその言葉に頷いて答えた。
「我が国は」
「まるで龍が河の底から天界に昇る様に」
「そうしたものですね」
「そしてさらにですね」
「そう、さらにです」
天に昇っただけで終わりではない、そうだというのだ。
「私達はさらにです」
「上に昇っていく」
「天の先にあるのは」
「宇宙ですね」
「星の大海がそこにあります」
そこにだ。昇っていくというのだ。
「無限のその世界に」
「天に満足せずに」
「ですから。車もまた」
「それもやがては」
「我が国に満ちます」
そうなるというのだ。義正はそこに輝かしい未来を見ていた。
そしてその未来をだ。熱く語ってだった。
真理にだ。また言ったのだった。
「では」
「ではですか」

「今からその車に乗られますか」
こう彼女に言ったのである。
「そうされますか」
「車にですか」
「はい、そうです」
こう笑顔で提案するとだ。真理も。
微笑みだ。こう答えたのだった。
「わかりました」
「では。今日はこれから」
「そういえば義正さんはご自身では」
「実は運転できます」
それはできるというのだ。

第十九話　喀血その四

「そうなのです」
「そうだったのですか」
「意外でしょうか」
「いえ、意外には思いませんが」
しかしだと。こう言ってだった。
「そうしたこともできられるのだと」
「そのことがですね」
「はい、知りませんでした」
意外には思っておらずだ。知ったというのだ。
「そうだったのですか」
「そうでした。それではですね」
「私が運転してですね」
「そうされるのですね」
「そのつもりです」
そのだ。彼の運転でだというのだ。
「行きましょう」
「何か。車に乗って行くというのも」
「いいものですね」
「鉄道に乗るのもいいですが」
それとは別にだというのだ。車は、
「これもいいものですね」
「そうでしょう。車には車のいいものがあります」
「鉄道には鉄道の」
「それぞれいいものがあります」
そうだというのだ。義正は。
その話をしてだ。それでだった。
二人は屋敷を出て義正が動かす車に乗ろうとする。しかしだった。

その二人に佐藤と婆やがだ。一緒に声をかけてきた。
「待って下さい、どちらに」
「行かれるのですか？」
「少し車で二人でね」
「散策をと思いまして」
「ドライブですか」
二人の話を聞いてだ。こう言った佐藤だった。
「それをされにですか」
「ああ、ドライブだったね」
義正は彼のその言葉を聞いてだった。思い出したように応えたのだった。
「英吉利とかでは車でそうして旅をするのを」
「そう言います」
「うん、それだよ」
そのドライブという言葉にだ。応えてまた言うのだった。
「それに行くんだよ」
「それでしたらです」
佐藤は自分から名乗り出て話した。
「私がです。運転を」
「いや、いいよ」
「旦那様がですか？」
「二人で行きたいんだ」
だからだというのだ。
「今はね」
「しかしそれは」
「まあたまには」
いいだろうと。義正は言った。
だが、だ。その彼にだ。
婆やがだ。咎める顔で反論してきた。
「それは無謀です」

「車を運転することがかい？私が」
「そうです。車は危険なものです」
こう言うのである。
「義正様はいつも運転されてはいませんね」
「そう言われると」
「そうした方が安易に運転されると」
「事故の元だというんだね」
「その通りです」
まさにそうだというのだ。
「ですから。それはです」
「慎むべきだと」
「その通りです。お止め下さい」
またこう言う婆やだった。

第十九話　喀血その五

「それはです」
「いや、事故といってもだよ」
「事故といっても？」
「私はそこまで遠くに出るつもりはないし」
「遠くにはですか」
「神戸をドライブするだけで」
本当にだ。それだけで終わらせるつもりだった。それでだ。
彼は穏やかにだ。ばあやを説得する様にして話すのだった。
「そんな。危うい道は」
「通らないと」
「だから大丈夫だよ」
「そうはいってもです」
まだ言う婆やだった。彼女にしてもここは引けなかった。
それでだ。今度はこう言うのだった。
「ご注意が必要です」
「じゃあやっぱり」
「はい、慎んで下さい」
こう言って引かない。婆やも。
「楽しまれることはどんなことでもできますから」
「しかしだね」
「あの、婆や」
義正と交代する形でだ。今度は。
真理が言ってだ。それでだった。
「私達はです」
「お嬢様、ですが」
「私達はそんなに危険な場所には行きません」
「私もそれはわかっているつもりだから」

真理の助けを得た形でだ。また言う義正だった。
「速度も出さないしね」
「だからだと仰るのですね」
「別にいいんじゃないかな」
義正はここでは少しおずおずとした態度になって婆やに言った。
「それは」
「ですがそれは」
「私もです」
まただ。真理は言った。
「一度義正様の運転される車で、です」
「ドライブを楽しまれたいのですね」
「そうです。ですからどうか」
「しかしです」
婆やは真理に言われても動こうとしない。しかしだった。
ここでだ。佐藤がだった。
考えを軟化させたのか、それでだ。
婆やにだ。こう言ったのである。
「旦那様がそう言われるのならです」
「いいのではというのですね」
「旦那様も真理様もです」
義正だけでなくだ。真理もだった。
「子供ではありませんし」
「しかしです」
「今回ばかりはいいではないでしょうか」
佐藤はまた婆やに言った。
「それは」
「佐藤様はそう言われるのですね」
「最初は違いましたが」
それでもだというのだ。今は。
「やはり」

「ううむ。どうしたものでしょうか」
「御願いします」
「どうか」
また頼む二人だった。
「私達も」
「決して危険なことはしませんし」
それは確かだというのだ。彼等にしても。
「だからここは」
「何とか」
「そうですね」
あまりにも強く頼まれ。そうしてだった。
婆やもだ。仕方ないといった顔になりだ。

第十九話　喀血その六

そのうえでだ。こう二人に言ったのだった。
「今回だけです」
「では」
「いいんですね」
「はい」
また二人に言った。
そのうえでだ。義正にふと言った。
「あと義正様」
「私に」
「お嬢様、いえ真理様の御主人ですから」
それでだというのだ。彼に。
「もう私に他人行儀はいいです」
「では」
「私もまた。佐藤様と同じく」
「ごく普通に」
「お話して頂ければと思います」
これが婆やの彼への言葉だった。
「それを御願いします」
「そうですか。それでは」
「はい、それでは」
「では婆や」
あらためてだ。義正は婆やに話した。
「今回だけはね」
「わかりました」
婆やは今度はにこりと笑ってだった。二人をドライブに送るのだった。
こうして二人は義正の運転でだ。それで神戸の町を巡った。そう

して最後に来たのは。
海辺だった。須磨の海だ。またここに来たのだ・
そしてそこでだ。義正が言った。
「最後はですね」
「ここで、ですね」
「海で」
こう真理に言うのである。
「最後は過ごしたいと思いまして」
「海を見てですね」
「神戸には素晴しいものが多くあります」
義正はその海を見ながら話していく。
「その中で特にです」
「海はですね」
「私は一番好きです」
「そうですか。それは」
「真理さんもですね」
「はい」
その通りだと。真理は微笑んで答えた。
「海は好きです」
「そうですね。これだけ奇麗な海は他にはありません」
「こうして近くから見る海もいいですが」
そのだ。青い傍にある海がだというのだ。
そのえうでだ。真理は義正にこんなことも話した。
「離れた場所から見る海もです」
「お好きですか」
「白い砂浜から見る近くの海と同じだけ」
それとだ。同じだけだと言ってだ。
「離れた場所から。緑と花々に囲まれです」
「そして見る青い海喪ですね」
「好きです」

その海は頭の中で思い浮かべながら。義正に話した。
「どちらも同じだけです」
「そうですか。では今度は」
「その海をですね」
「一緒に見ましょう」
これが今の義正の言葉だった。
「確かに。離れた場所で見る海は」
「はい、その海は」
「まるで。サファイアを溶かした様に」
「何処までも濃い青で」
「それで輝いていますから」
だからだというのだ。
「見るだけで心が清らかになりますね」
「そうした美しさです」
それがそこから見る海だというのだ。
「ですから是非です」
「今度はですね」
「神戸は本当に幸せな町です
また神戸について話してだった。義正は今度は。
自分達の後ろを振り返る。そこにあるのは。
山だった。山は緑、そして白だ。その緑と白の海を見てだ。

第十九話　喀血その七

彼はだ。こんなことを言った。
「ああした。見事な山達まであるのですから」
「山と海」
「本来は相反するものです」
低い場所と高い場所。その対峙だった。
だがそれがだ。共にあると話してだった。
その相反する二つがだというのだ。
「ですが共にあり同時に見られますから」
「そうした意味で、ですね」
「幸せです。そしてそれが見られる私達も」
「神戸と同じく」
「幸せです」
その美しいものを見られるだけでだ。そうだというのだ。
そうした話をしながらまた海を見る。その海は。
何処までも続いていて水平線はだ。青から白くなっていく空と一つになっていた。
青い海には銀色の輝きも起こる。その銀も見てだ。
義正は目を細めさせて。また言った。
「青だけではありませんね」
「海にあるのはですね」
「はい。銀もあります」
「溶かされた宝玉にさらに」
「もう一つ宝があります」
それがだ。海だというのだ。
「それを考えますと本当に」
「贅沢ですね、海は」
「そう思います。これだけ贅沢なものはそうはありません」

「自然の中にあるものは」
「それだけで最高の芸術である場合があります」
そうだというのだ。その自然そのものがだ。
その話をしつつだ。さらにだった。
義正はだ。海の果てを見つつだ。真理に話した。
「我が国はこの贅沢な海に囲まれていますから」
「はい、全て」
「宝石と銀に囲まれているということになりますね」
「そうですね。海がサファイア、そして波が銀なら」
そうなるとだ。真理も頷いて言った。
「なりますね」
「はい。それに」
「それに？」
「海の中にはです」
さらにだ。その中にはというと。
「多くの恵みがあります」
「そしてその恵みが」
「人を生かしてくれます」
このこともだ。義正は言うのだった。
「無限の恩恵がありますね」
「それが海ですね」
「その海を見ていると」
それだけでなのだった。
「心が豊かになると共に」
「清らかになる気分です」
「そうなります」
「豊かですか」
真理はだ。その言葉に心を向けた。
そうしてだ。こう言うのだった。
「私は今までそうは」

「思われなかったですか」
「今義正さんのお話を聞いて」
それでだというのだ。
「はじめて思いました。ですが」
「それでもですね」
「そうですね。見ているとですね」
「豊かになりますね」
「そうです。奇麗なものを見ていると」
それによってだというのだ。心が。
「自然とそうなります」
「そうですか。豊かにも」
「自然とは限りませんが」
その他のもの、これもだった。

第十九話　喀血その八

「芸術品もです」
「ああしたものを見ても」
「やはり心が豊かになります」
「美しいものを見れば」
「そうなります」
また言う義正だった。
「ですから。これからもです」
「こうして機会があればですね」
「見ましょう」
義正は笑顔で真理に話した。
「そうしましょう」
「はい。是非」
真理も笑顔で頷きだ。今はその青い海を見ていく。
そうしてからだ。二人で家に帰ったのだった。
家に帰るとだ。すぐにだ。
婆やが二人を迎えに来てだ。心配する顔で話した。
「何もありませんでしたか」
「うん、別にね」
「ありませんでした」
そうだとだ。二人は微笑んで婆やに答えた。
「事故もなかったし」
「ドライブをして海を見てきました」
「そうですか。それは何よりです」
ここまで聞いてだ。婆やは胸を撫で下ろしてだ、
そうしてだ。また二人に話してきた。
「そのことが心配で心配で」
「何もそこまで」

「しなくていいのでは」
「それはわかっていますが」
それでもだとだ。婆やは言うのだ。
「それでもです」
「婆やは心配性に過ぎるよ」
少し苦笑いになってだ。義正はその婆やに答えた。
「僕達ももう子供じゃないから」
「それはそうですが」
「わかっているならそこまで心配しなくても」
「そうですよ、婆や」
真理もだ。彼女は微笑みその顔で婆やに言った。
「私達も子供ではないですから」
「だからですね」
「そこまで心配することはないです」
「そうですか」
「見守ってくれれば」
それでだというのだ。
「それで有り難いです」
「そうなのですか御二人を」
「そうしてくれれば嬉しいです」
「お嬢様がそう仰るのなら」
婆やだ。ここで頷いた。
そうしてだ。二人に対して穏やかな笑顔になって告げた。
「ではこれからは」
「はい、そうして貰えれば」
嬉しいと。真理も返してだった。この場は終わった。
それからだ。二人が屋敷に入るのを見届けてからだ。
婆やは佐藤にだ。こう話したのだった。
「私はどうやら」
「わかっていなかったというのですね」

「はい。お嬢様のことが」
そしてだ。ひいては。
「義正様のことが」
「御二人のことがですね」
「わかっていませんでした」
こうだ。自省と共に言うのだった。
「今そのことがわかりました」
「そうですか。実はです」
「佐藤様もですか」
「はい、私も」
自分もだとだ。彼は少し俯いて話した。
「最近になってです」
「おわかりになられましたか」
「義正様も真理様も」
二人共だ。どうかというと。

第十九話　喀血その九

「心が清らかで」
「それはですね」
「最初からわかっていました」
「私もです」
「しかしそれだけではなく」
それに加えてだった。
「御二人はです」
「非常に心豊かな方々ですね」
「大人。そうした言葉では言い表せないです」
佐藤は義正と真理を、今は目の前にいない二人を見つつだ。それで話した。
「立派な方です」
「私が心配する様な方々ではありませんね」
「私もです。それでは」
「見守ることですね」
真理の言葉をだ。そのまま言ったのだった。
「やはり」
「そうだと思います。それがです」
「正しいですね」
婆やは今このことを言った。
「そうですね」
「そう思います。では」
「これからは」
「そうしていきましょう」
こうだ。二人は夕暮れの中で話すのだった。
屋敷の外は急に赤くなりそこから夜の帳を迎えようとしていた。
黄昏の時だった。

その黄昏から夜になりだ。再び太陽が戻って来た。
心地よい朝だった。その朝にだ。
義正は朝食を終え身だしなみを整えてからだ。真理に笑顔で挨拶をした。
「では今から」
「はい、今から」
「行って来ます」
こうだ。出勤の挨拶をしたのだ。そうしてだ。
義正は出勤し真理が家に残った。佐藤は彼と共に行く。
そうして婆やと二人になるとだ。
すぐにだ。婆やはこう彼女に言ってきた。
「それではですね」
「はい、今日は」
「まだあの本は読まれているでしょうか」
こう真理に尋ねてきたのだった。
「それはどうでしょうか」
「小説のことですか」
「確か今読まれていたのは」
「小説も読んでいますが今は」
「今は？」
「詩を読んでいまして」
今主に読んでいるのはだ。それだというのだ。
「そうしているのですが」
「詩をですか」
「藤村を」
まずはその下の名前から話す真理だった。
「昔の詩集ですが」
「あの、お嬢様」
彼の、島崎藤村の名前を聞いてすぐにだった。
婆やは顔を顰めさせてだ。こんなことを真理に話した。

「その方ですが」
「何かあるのでしょうか」
「どうも。女性に対してです」
「ふしだらだというのですか」
「そうしたところがあるようです」
実際にだ。彼は後に姪との恋愛沙汰が発覚している。それが騒動にもなっている。
「ですからあまり」
「読むのはですか」
「はい、お勧めできません」
作者のだ。品性からの話だった。
「そう思います」
「そうですか」
「そうです。ですから」
婆やは真理にさらに話していく。

第十九話　喀血その十

「彼の作品はあまり」
「読まない方がいいのですね」
「そう思います」
こう言うのである。
「ですからその詩集はです」
「今からでも遅くはないからですね」
「読むのを止められるべきです」
「そういえばですが」
婆やのそうした話からだ。
真理はだ。別の作家の話を出してきた。その作家はというと。
「あの。お医者様でもある」
「お医者様といいますと」
「森鴎外ですが」
「はい。あの方もまた」
「そうですね。いい話は聞きませんね」
森鴎外の人間性についてもだ。婆やは話した。
「かなり頑固というか頑迷というか」
「そうした方なのですね」
「プライドも高いそうで」
このことはだ。エリート故とも言えた。森鴎外は医者としては独逸留学を経たまさにエリート中のエリートだったのである。
「何かと出世欲も強く」
「作品からはそうは思えませんが」
「それはその島崎藤村も同じでしょう」
「あの方とも」
「作品はよくても」
それでもだ。それを創り上げる人間はというと。

「その人間性はです」
「別なのですね」
「残念ですが」
婆やは苦い顔になって真理に述べる。
「そうなのでしょう」
「それではです」
「それでは？」
「作品と作者の人間性はまた別ですね」
このことをだ。真理も言ってだ。
そのうえでだった。婆やにこう話した。
「では作品の美しさを見てです」
「作者の人間性はですか」
「それは見ないで集中してはどうでしょうか」
「そうするべきだというのですか」
「そう思うのですが」
「どうでしょうか、それは」
その考えについてはだった。婆やは。
また難しい顔になってだ。真理に話すのだった。
「難しいのではないでしょうか。いえ」
「いえといいますと」
「そうはいかないです」
こう真理に言うのである。
「やはり。作品には創り出す人間のその持っているものが出ますから」
「だから。作品もまた」
「醜く。穢れたものになります」
婆やは眉を顰めさせて述べた。
「どうしてもです」
「そうなのですか」
「醜いものは必ず出ます」

婆やは言い切った。
「ですから。どうしてもです」
「読まない方がいいですか」
「醜いものは人に悪影響を与えます」
「そして穢れたものもですね」
「そうです。同じです」
どちらもだ。人に対してだというのだ。その作品を読む。
「私はそう思います」
「その考えだと」
だが真理はだった。婆やのその言葉からだ。
逆説的に考えてだ。こう言うのだった。
「こうも考えられませんか？」
「今度は一体」
「美しいものがあれば。作者の心に」
「それが作品にも出てですね」
「はい、読む人によい影響を与えます」
婆やの否定の言葉をだ。そのままひっくり返しての言葉だった。

第十九話　喀血その十一

「ですから。奇麗な作品にはです」
「その作者の奇麗なものが出ているというのですね」
「どの人にもありませんか？」
ひるがえってだった。真理は。
「そうしたものは」
「誰もがですか」
「奇麗なものも醜いものも」
「そのどちらも」
「持っているのではないでしょうか」
こう婆やに尋ねるのである。
「そう思いますが」
「そうですか」
「はい。それで」
それでだと。真理はその話をさらに続ける。
「その藤村や森鴎外にしてもです」
「彼等はどちらも」
「奇麗なものも持っていれば醜いものを持っていて」
「それで詩集にはですね」
藤村のことだ。それに他ならない。
「あの人の持っている奇麗なものが出ていると」
「それを読めばいいのではないでしょうか」
「そうお考えなのですね」
「はい」
その通りだとだ。真理は婆やに答えた。
「そう思います」
「左様ですか」
「確かに藤村は女性にだらしないでしょう」

このことはだ。真理に否定しなかった。
そしてさらにだ。森鴎外もだった。
「森鴎外にしても意固地で」
「はい、しかも権力志向が強く」
とにかくだ。問題の多い人物だったのだ。
「脚気のことも」
「あの病ですね」
「海軍では脚気はなくなりました」
このことは婆やも聞いて知っていた。彼女もだ。
それでだ。ここで言うのだった。
「しかしです」
「それでもですか」
「陸軍では脚気は猛威を振るい続けていました」
日清、日露の戦争の時もだ。それは極めて深刻な被害だった。
脚気は江戸時代の頃から日本を悩ませていた。それが維新からさらに顕著になっていたのだ。
何故脚気になるのか。それの究明が至上命題だった。この問題に対してだ。
「森鴎外、いえ」
「いえ？」
「陸軍軍医総監森林太郎氏はです」
これが彼の本名でありだ。軍の官職だった。直任官であり中将待遇だ。即ち天皇陛下自ら任命されたということになっている役職である。しかも中将待遇だからだ。宮廷に出入りもできたのだ。
その彼がだ。脚気に対してしたことは。
「あくまで脚気菌を探してです」
「それにこだわってですね」
「海軍の主張を全て否定していました」
そしてだった。婆やはだ。
海軍のこともだ。ここで話すのだった。

「海軍では何とかわかったのです」
「脚気のことをですね」
「はい。脚気は食べ物からなるものです」
「確かそれは」
「白米だけを食べていますとなります」
だから日本では脚気が問題になっていたのだ。日本人は白米が主食だ。その白米ばかりを食べていれば栄養の問題から脚気になるのだ。
それでだ。海軍ではだ。
「ですから麦飯や玄米を食べてです」
「脚気をなくしたのですね」
「そうしました。我が家では洋食も食べますが」
「パンもですね」
実際にだ。真理はパンもよく食べている。
「ああしたものを食べていれば」
「脚気にはなりません」
まさにそこにあると。婆やは指摘した。
「そのことがわかったのです」
「海軍ではですね」
「実際に海軍将校の方に教えて頂きました」
そのだ。海軍のだというのだ。

第十九話　喀血その十二

「そうして頂いてです」
「わかったことですね」
「そうです。しかしです」
「陸軍では」
「森林太郎氏がそうして主張されていたので」
それでなのだった。結局。
「陸軍では脚気が残っていたのです」
「それは全てですね」
「あの方の意固地さ故です」
それ故にだ。陸軍では脚気が残りだ。多くの者が倒れたというのだ。
「そうしたことがありました」
「それを見るとですね」
「あの方は責任を認めてはおられません」
そのだ。森鴎外はだというのだ。
「これではです」
「あの方に醜いところはですね」
「あります」
どうしてもだ。このことは否定できなかった。
しあkしだ。同時にだった。婆やも言った。
「しかし。それと共に」
「はい、奇麗なものも」
「あの方は持っておられますか」
森鴎外もまただ。そうだというのだ。
「そうなりますね」
「そうです。それが作品にも出ているのなら」
どうかとだ。婆やは真理に言った。

「お嬢様が読まれてもです」
「いいのですね」
「思えば。夏目漱石も」
この作家の名前も出す婆やだった。
「あの方も何かとでしたね」
「せっかちで癇癪持ちで、ですね」
「そうです。被害妄想なところもありました」
漱石は漱石でだ。不安定な感情の持ち主だったのだ。後世で想像されているような泰然自若とした人物ではなかったのである。
「しかし作品は」
「余裕があり考えさせられる作品ですね」
「はい、とても」
婆やは漱石の作品についても言う。
「坊ちゃんにしても」
「あれはいい作品ですね」
「こころもです」
漱石の代表作が挙げられていく。
「いい作品だと思います」
「そうですね。やはりそこには」
「夏目漱石自身がいます」
「こころではそうですね」
婆やはこころについて話した。
「あの人の明治帝への想いもまた」
「ありますね」
「明治ですか」
明治という時代そのものに対してだ。
婆やは想いを巡らし。そうして真理に話した。
「婆やの頃はあっという間ですか」
「短かったのですか」
「四十五年もありました」

その四十五年がだ。短かったというのだ。
「あの明治維新からです」
「そこからはじまって」
「何もかもがあっという間に変わって」
そしてだった。
「清や露西亜との戦争があり」
「そうしたことが続いていて」
「気付けばです」
まさにだというのだ。その四十五年は。
「あっという間ですか」
「そうですか。婆やにとっては」
「婆やが生まれた頃はですね」
真理にその頃の話もした。
「まだ幕府がありまして」
「あの志士の方々の時代ですね」
「あの頃は婆やはもう主人と一緒にいました」
「そうだったのですか」
「はい、あの頃京都が荒れていた頃は」
既にだ。婆やも成人していてだというのだ。

第十九話　喀血その十三

「子供はまだでしたが」
「大人として見ていたのですね」
「そうです。あの頃はどうなっていくのかわからず」
「日本が」
「異国もあってあちこちで殺し合いがあり」
そうした時代だった。まさに幕末の動乱の頃だった。
「そして戦があり」
「京都では特にでしたね」
「そうです。新撰組ですね」
幕末を彩った彼等の話も出る。
「あの方々を見たこともありますよ」
「まあ、新撰組もですか」
「ほら、あの局長の」
「近藤勇ですね」
「まことにお口が大きく」
覚えているその顔立ちを手で輪郭をなぞりながら。真理に彼のことを話す。この時代で既に半ば伝説となっている彼のことを。
「いえ、拳でも何でもです」
「入りそうだったのですか」
「そこまでお口の大きい方でした」
「あの人はそうだったのですね」
「それと副長のです」
今度は彼の話になった。
「土方歳三ですね」
「あの方はどういった方だったのですか？」
「確かにお顔はよかったです」
「写真にある様にですね」

「いえいえ、あのお写真よりも」
どうかとだ。婆やは笑って話す。
「遥かにです」
「立派な顔立ちの方でしたか」
「冷たい感じはしました」
婆やはこのことは否定しなかった。土方は新撰組副長として辣腕を振るい志士達を斬り拷問し隊内の粛清にあたっていた。新撰組で最も血生臭い話が多いのだ。
そうした彼だからだ。冷たいというのだ。
「ですが本当にです」
「お顔立ちがですね」
「見事な方でした」
「左様でしたか」
「そも他の方々もです」
近藤と土方以外のだ。新撰組の面々もだというのだ。
「見たことがあります」
「婆やにとってはいい思い出なのですね」
「あの頃はとても恐ろしかったです」
婆や自身もそのことは否定しない。
「ですがそれでも」
「そうですか」
「今思うとよい思い出です」
「左様ですか」
「あの頃のこともです」
今思うとだとだ。遠い目になり話すのだ。
「今では思い出です」
「思い出として婆やの中にあるのですね」
「そうなりますね」
にこりと笑ってだ。真理のその言葉にも頷く。
「言われてみれば」

「そうですか」
「はい。本当に幕末も明治も」
そうした時代はだった。
「あっという間でした」
「そして大正は」
「今度はゆっくりと過ごしたいです」
婆やはここでもにこりと笑って真理に話す。
「今度は」
「ゆっくりですか」
「はい、ゆっくりと」
また言う婆やだった。

第十九話　喀血その十四

「そう思っています」
「では今から少し」
「いえいえ、婆やがそう思っていましても」
それでもだとだ。後にこうした言葉が言葉としてでなくとも続く。
「実際はそうはいかないでしょう」
「やはりそうですか」
「はい、そうです」
婆やはこうは言ってもだった。
そのうえでだ。こうも言うのだった。
「大正も急激に変わっていますから」
「だからですか」
「そうです。ですから」
望み通りにはいかないという婆やだった。
「いい意味でも悪い意味でも」
「どちらの意味でもですか」
「はい、そうです」
まさにそうだと。真理に話すのである。
「期待もしていますが」
「不安もまた」
「あります」
それは否定しないのだった。
「どうしても。ただ」
「それでもですね」
「期待の方が大きいです」
婆やはこのことも微笑んで話す。
「今もです」
「明治の頃も今も」

「流石に日露戦争の頃は不安でした」
「あの頃はですか」
「確かに。婆やも戦争はすべきと考えていました」
日露戦争に関しては当時の臣民のほぼ全員が開戦を支持していた。最早露西亜との戦いが避けられないことがわかっていたのだ。
そしてだ。露西亜を倒さなければ日本が倒される、そのこともわかっていたからだ。誰もが開戦しなくてはならないと言っていたのである。
そしてそれはだった。婆やもだったのだ。
しかしだ。それと共にだったのだ。
「果たして。勝てるかどうか」
「それはだったのですね」
「露西亜、今はソビエトでしたか」
「どちらにしろですね」
「同じです。あの国はやはり露西亜です」
ソ連についてはこう考えている婆やだった。共産主義への幻想はなかった。
「あの国はあまりにも大きいので」
「戦い勝つことは」
「難しいと思っていました」
「そうですね。誰が戦いを決意していても」
「はい、そうでした」
日露戦争で勝てると思っている国はなのだった。
「とてもです」
「勝てるかどうかはわからなかった」
「その時は流石にだったのですね」
「不安で仕方なかったです」
それはだ。どうしてもなのだった。
「しかしそれでも」
「勝てましたね」

「奇跡に思えました」
日露戦争に関してはそうだというのだ。
「勝てたのですから」
「軍人の方々も頑張ってくれて」
「それでようやくでした」
奉天、そして日本海においてだ。勝ったからなのだ。
それでなのだった。あの戦争は。
「あの時は。子供達が生まれた時の様に」
「嬉しかったのですね」
「あの時の喜びは今も忘れていません」
実際にだ。婆やの今の顔は微笑んでいた。
その暖かい微笑みでだ。さらに言うのだった。
「まさに奇跡でした」
「そしてその奇跡があって」
「今があります」
「そうですね。あの戦争で勝ったことは」
「我が国の輝かしい」
まさにだ。それだと話す婆やだった。

第十九話　喀血その十五

「慶事です」
「さもなければ私達は今は」
「露西亜になっていました」
ただし国力はかなり消耗してしまった。間違ってもこの戦争に勝ったことにより戦争が儲かるものは考えもしなかったのである。
財閥にしろ戦争が起これば仕事ができなくなる。貿易がだ。それがわかっていないのがそのソ連から入った共産主義なのだ。
だが婆やは共産主義のことについては知らないし言いもしない。
ただここでこの詩人のことをその話に出して真理に言うのだった。
「与謝野晶子ですが」
「あの君死にたもうことなかれのですね」
「あの人もです」
「そうですね。他の詩ではですね」
「あの戦争を支持していました」
実はだ。彼女にしてもそうだったのだ。
「さもなければまことにです」
「我が国が危うかったからこそ」
「そのことは後の世ではどう思われるかｗかありませんが」
「しかし事実ですね」
「事実は嘘を吐きません」
それを捻じ曲げる輩はいてもなのだ。
「ですから」
「そうですね。私もそう思います」
「あの戦争は不安に満ちていましたがすべき戦争でした」
これが婆やのあの戦争への結論だった。
「そして勝つしかなかったのです」
「奇跡が起こり勝てて」

「色々と不思議な話もありますが」
「これは聞いたことですが」
ふとだ。真理が言った。
「今の皇太后様の枕元にです」
「あの人が出たそうですね」
「坂本竜馬が」
この伝説がだ。実際に残っているのだ。
「出て来てそのうえであの海戦の勝利を告げたとか」
「日本海のあの」
「他にも出航前の船に鳥達が止まったり」
そうしたこともあったのだ。
「白い軍勢が現れて助けてくれたとも」
「奇怪な話ですね」
「やはり。我が国は勝てたのは」
どうかと。婆やはまた言った。
「奇跡だったのです」
「それだったのですね」
「八百万の神々も力になってくれたのです」
「我が国を勝たせる為に」
「勝つのは運命だったのかも知れませんが」
それ以上ものがあったというのだ。あの戦争には。
「本当に不思議な奇跡です」
「まことに。そうですね」
「婆やはそのことを嬉しく思います」
そのだ。奇跡のことをだというのだ。
「心からです」
「あの戦争に勝てて今の日本もあるからこそ」
「あります。そして」
「そして、ですか」
「誇りを守れました」

「我が国の誇りが」
「はい、守れました」
そうだとだ。婆やは安堵している顔で真理に話すのである。
「まことによかったです」
「誇りですね」
「人は誇りを忘れれば終わりです」
このことはだ。毅然として話す婆やだった。
「国家もです」
「どんなものも誇りを忘れれば」
「それでなのですが」
「はい、それでなのですね」
「こうした言葉があります」
婆やはだ。あらためて真理にこんな言葉を紹介した。

第十九話　喀血その十六

「恥を恥と思わなくなった時にです」
「その時にですね」
「最も恐ろしい腐敗がはじまるのです」
「腐敗がですか」
「それも最も恐ろしい」
そしてだ。さらにだった。
「花には蝶が集りますし」
「腐ったものにはですね」
「それに相応しいものが集ります」
「では人は」
「誇りを忘れてはならないのです」
それはだ。絶対にだというのだ。
「そのことは忘れないでおいて下さい」
「最後まで、ですね」
「そうです。最後の最後まで」
そうして欲しいとだ。真理に話すのである。
「御願いします」
「わかりました。それでは」
「それとです」
さらにだ。真理に話すのだった。
「御主人様と一緒に」
「それを一人でなくですね」
「そうです。二人でなのです」
義正とだ。二人でだというのだ。
「そうして下さい」
「わかりました。それは」
「くれぐれもです。では」

「それでは」
こうした話をしてだった。真理は婆やと別れてだ。自分の部屋に入った。
そこで椅子に座り本を開いた。その本は。
島崎藤村のその本だ。その本を見ようとだ。
開いた。しかしそこでだった。
不意に咳込んでしまった。咳は何度か出た。
そしてさらに出てだ。最後に。
「!?」
咳に違和感を感じた。そしてだ。
口を抑えていた手を見る。するとそこに。
赤いものが付いていた。それが何か。もう言うまでもなかった。
「そんな・・・・・・」
それは赤い。しかしだった。
真理の顔は蒼白になりだ。そうしてだ。
その赤いものをどうしても見てしまう。見たくはなく否定したかったのにだ。
そうして見ているうちにだ。部屋の扉から。
ノックする音が聞こえてきた。そうしてだった。
「お嬢様」
「あっ、はい」
婆やの声だった。その声に反応してだ。
すぐにその赤いものをだ。傍にあった紙で拭き取りだ。それからだ。
婆やにだ。こう応えたのだった。
「何か」
「お茶を淹れました」
それをだというのだ。
「紅茶ですが」
「それをですね」

「はい、それにシェフが」
今度はだ。家のシェフがだというのだ。
「ケーキを焼きました」
「ケーキといいますと」
「ホットケーキです」
「ホットケーキ。あれですね」
ホットケーキと聞いてだ。真理はすぐにわかった。

第十九話　喀血その十七

「あの丸くそして」
「シロップをかけてバターも乗せたです」
「そのケーキをですね」
「二枚です」
それだけだ。焼いたというのだ。
「それを召し上がられますか」
「はい」
すぐに答える真理だった。
「では御願いします」
「扉を開けますね」
「はい、それでは」
こうしてだった。婆やはだった。
その扉を開けてだ。そのうえでだ。
紅茶の盆とパンケーキの盆をそれぞれ片手に持って入って来たのだった。
その婆やを見てだ。真理はだ。
目を丸くさせてだ。こう尋ね返した。
「あの」
「はい、何か」
「今両手は」
「どちらも塞がっているというのですね」
「それでどうして扉を」
「確かに私一人ならです」
婆や一人だと。それならばだというのだ。
「この扉を開けることはできませんでした」
「では」
「はい、私達がです」

「御手伝いさせて頂きました」
こう言ってだ。二人の若いメイドがそれぞれ婆やの左右から出て来てだ。
そのうえでだ。真理に対して言ってきたのである。
「婆や様の代わりにです」
「この扉を開けさせてもらいました」
「だからですね」
ここまで聞いてだ。真理も納得して頷く。
そのうえでだ。二人のメイド達に言うのだった。
「有り難うございます、婆やを助けてくれて」
「いえ、これが私達の仕事ですから」
「だからです」
「そうですか。それでは」
「はい、ではお嬢様」
「紅茶とケーキを召し上がられて」
それでだ。そのうえでだと言う二人のメイドだった。
「御身体をより健やかに」
「そうして下さい」
「はい」
真理はだ。健やかにという言葉にはだ。
顔を曇らせ青くさせた。だがそのことには誰も気付かずにだ。今は楽しく過ごしていたのだった。彼女以外は。

第十九話　完

２０１１・８・１

第二十話　誰にも言えないその一

第二十話　誰にも言えない

真理の吐血のことは誰も気付かなかった。そしてだ。

吐血もその時だけだった。何もなかった。

咳すら出ずだ。彼女はまずは安心した。しかしだ。

こっそりと医者、知り合いの信頼できる医者に吐血の話を聞いた。

自分のこととは言わずにだ。

するとだ。その医者はこう言ったのだった。

「ああ、それはですね」

「危ういですか」

「はい、危ういです」

これが真理への言葉だった。

「やはりかなりの確率で」

「労咳ですか」

「まずはそう思っていいです」

労咳は死の病だ。真理もそのことはよく知っていた。

もっと言えば吐血が労咳の病状の特徴であることも知っていた。

つまり彼女は今自分の死について無理にでも突きつけられていたのだ。

だからこそ医者に話を聞いた。そうしてだった。

そこでだ。この絶望の言葉を告げられたのである。

そしてだ。医者は真理にさらに話した。

「労咳でない場合でもです」

「危ういのですね」

「御身体をかなり壊されている何よりの証です」

「左様ですか」

「ですがやはり第一に考えられるのは」

「労咳ですね」

「それを置いて他にはありません」
こう真理に話すのだった。
「そして労咳になればです」
「最早それだけで」
「死に至ります」
最早どうしようもない、医者でもだというのだ。
「後はせめて療養されるしかありません」
「そうですね。私もそう聞いています」
「若しお知り合いが吐血されたなら」
まさか真理がそうだとは思わずにだ。医者は彼女に話す。
「その時はです」
「どうすればよいでしょうか」
「せめて」
最早だ。死ぬことを前提としての言葉だった。
「余生を静かにです」
「過ごすと」
「それしかありません」
真理にとってだ。最も聞きたくないことが告げられた。そうした形になった。
「あの病は誰にも治せませんから」
「そうですね。本当に」
「人はやがて死にます。しかし」
「労咳は」
「あの病はそれをさらに確実なものにしてしまいます」
結核からは逃れられない。そうだというのだ。
「真に難儀な病です」
「そうですね。あの病は」
「脚気は何とかなりました」
食事療法によってできることがわかったからだ。しかしこの時代はまだだった。

労咳はどうにもならず。医者は言った。
「医者として無念です」
「労咳がどうにもならずに」
「はい、だからです」
それでだと真理に話す。
「どうにかできればどれだけの人が助かるか」
「そうですね。本当に多くの人が亡くなっています」
自分もそうかも知れないとだ。真理は言えなかった。
それは心に留めてだ。医者の話を聞くのだった。
医者はだ。真理にさらに話した。
労咳について。忌々しげにだ。
「やがては人はです」
「労咳をですね」
「克服できるでしょうが。ですが」
「ですがですね」
「今はどうにもなりません」
やはりだ。無念の口調で話すのだった。

第二十話　誰にも言えないその二

「我々は見守ることしかです」
「左様ですか」
「そうです。ではこれで宜しいでしょうか」
「はい」
労咳の話をここで終えてだった。
医者は今度はだ。真理に尋ねた。
「ここに来られた理由は」
「はい、婆やと共にです」
今婆やは席を外している。二人で来たが今は別室で茶を飲んでいるのだ。
その彼女のことを話に出してだった。真理は医者にあらためて話した。
「お菓子も持ってきました」
「そうですか。お菓子も」
「はい、葛饅頭を」
「おお、それはいい」
医者は葛饅頭と聞いてそれまで強張っていたその顔を微笑ませる。どうやらだ。彼は甘党らしい。それが窺える反応だった。
「では早速です」
「召し上がられますね」
「そうさせて下さい。それでは」
こうしてだった。最後は甘いものの話で終わった。しかしだ。
真理は労咳の話を聞いてだ。さらにだった。
顔を暗くさせて屋敷に帰りだ。そこで、だった。
屋敷の中でだ。こう婆やに漏らした。
「人は」
「人は？」

「一歩先もわからないものなのですね」
何処か虚ろな目になってだ。こう言ったのだ。
「本当に」
「人はですか」
「はい、人はです」
こう話すのだった。
「それまで幸せだったとしても」
「どうされたのですか？」
婆やは真理のその表情と話を見て聞いてだ。
異様なものを感じてだ。彼女に問うたのだった。
「一体」
「いえ」
しかしだとだ。真理はだ。
自分の言葉を打ち消してだ。そのうえで婆やに話した。
「何でもありません。それでは」
「それではですか」
「帰りましょう」
真実を言わないままだ。婆やにこう告げた。
「お屋敷に」
「わかりました。ですが」
「ですが？」
「その前にです」
婆やは真理が暗い気持ちでいるのはわかった。それでだった。
彼女の気持ちを落ち着かせる為にだ。こう提案したのだった。
「今はです」
「今は？」
「珈琲でもどうでしょうか」
それを飲みにだ。彼女に勧めたのである。
「そうしましょうか」
「いえ、いいです」

いいとだ。真理はその申し出を断ったのだった。
「今は」
「そうですか。珈琲は」
「はい、いいです」
また言う真理だった。
「ですから。もうすぐに」
「家に帰りましょう」
こうしてだった。真理はだ。
医者のいる病院から逃げる様にだ。屋敷に戻ったのだった。
そしてだ。戻るとだった。
自分の部屋に篭もってしまった。そんな彼女を見てだ。

第二十話　誰にも言えないその三

婆やはだ。曇った顔でメイド達に話した。
「お嬢様だけれど」
「何かおかしいですね」
「塞ぎ込んでおられますが」
「何かあったのかしら」
曇った顔でだ。こう彼女達に話すのである。
「やはり」
「何かなければああなられない筈がないですし」
「それを考えますとやはり」
「何かあったのでしょう」
「それが何かはわからないですが」
「そうね。あったのね」
婆やもそれは察したのだった。
しかしだ。それでもだった。
その何かがわからずにだ。困った顔で言うのだった。
「問題はそれが何かだけれど」
「そうですね。あったことは間違いないですが」
「それがどういったものか」
「それが問題なのですけれど」
それがどうしてもわからずだ。彼女達は。
真理のことをだ。考えるのだった。
「旦那様と喧嘩された訳ではないでしょうし」
「旦那様はそうした方ではありませんね」
「はい、確かに」
「あの方も奥様も」
「そうしたことは」
しないとだ。彼女達は真理のことだけでなくだ。義正のこともわ

かっていた。
それでだ。この可能性はないとした。
そしてだ。さらにだった。
では何故真理が暗い気持ちになっているのかを考えていくのだった。
「御身体が悪いのでしょうか」
「やはり」
「そうなのでしょうか」
「何処か」
「そうでしょうか」
これは間違っていなかった。しかしだ。
どうした病なのかはだ。それは。
婆やがだ。こう言ったのだった。
「風邪かしら」
「風邪でしょうか」
「それでしょうか」
「ええ、風邪ではないかしら」
こう言ったのである。メイド達に。
「顔色も悪いし」
「この前風邪をひかれましたし」
「ぶりかえしたのでしょうか」
「そうではないでしょうか」
「だとすれば」
婆やは風邪を深刻に考えていた。それでだ。
彼女はだ。こう言ったのだった。
「お薬だけでなく」
「それだけではなくですね」
「さらにですね」
「美味しくて身体のいいものをシェフに頼みましょう」
こうメイド達に提案するのだった。

「それはどうかしら」
「はい、それでいいかと」
「そう思いますが」
「私もです」
「それでは」
こうしてだ。婆やはだ。
また薬を用意しただけでなくだ。シェフ達に美味しく身体のいいものを作ってもらいだ。そうしたのである。
すぐにだ。真理にだった。シェフが腕によりをかけたメニューが出されたのだった。
それは鶏肉だった。鶏肉をソテーにして大蒜を利かせたものだ。それに玉葱と人参のスープ、ボイルドベジタブル、デザートは無花果だ。こうした洋風の料理だった。

第二十話　誰にも言えないその四

それを前にしてだ。真理は婆やに尋ねた。
「あの、これは」
「どうもお召し上がり下さい」
「何か身体によさそうですね」
「そう思いまして」
シェフに用意してもらったとだ。こう答える婆やだった。
「では暖かいうちにです」
「はい、そういえば」
パンも見た。そのパンは。
黒い。そのパンを見てまた言う真理だった。
「黒パンですか」
「黒糖は身体にいいそうなので」
「それでパンもですか」
「バターもどうぞ」
それに加えてだった。
「ヨーグルトもありますし」
「何か今日は違いますね」
「まずは食べることからですから」
こう真理に言うのである。
「ですから」
「そうですね。何につけてもですね」
「美味しくて栄養のあるものです」
婆やはこのことをあえて強調して話した。
「それがいいのです」
「では。今は」
「召し上がって下さい」
婆やはだ。さらに言った。

そしてその言うことはだ。彼女は意識せずともだった。
真理にとってはだ。心に突き刺さる言葉だった。それをだ。
今言ってしまったのだった。
「全ての病は美味しくて栄養のあるもので癒せます」
「そうであればいいのですが」
聞いてからだ。こう言った真理だった。
「本当に」
「とにかくです」
婆やは彼女にしては珍しく、しかし致命的な失態を犯しながらだ。
真理に話した。
「召し上がって下さい」
「わかりました。それでは」
真理は婆やのその何気ない言葉にだ。心を沈ませてしまった。今の彼女にはそうした普通なら何でもない言葉もだ。突き刺さるものだった。
そしてその突き刺さったものをそのままにしてだ。真理はその馳走を食べた。だがその顔は余計に青くなり白くなっている程だった。
その顔でだ。彼女は食べ終えてだった。
婆やにだ。こう言ったのである。
「御馳走様」
「味はどうでしたか？」
「見事でした。シェフにそうお伝え下さい」
「わかりました。それでは」
婆やも真理のその言葉に頷く。そしてだ。
そのうえでだ。彼女にこうも話した。
「ただ。今日は」
「旦那様でしょうか」
「旦那様のお帰りは何時になるでしょうか」
「今日は遅くなるそうです」
真理は婆やにこう話した。

「ですから今日は今から」
「音楽でも聴かれますか？」
「はい、そうします」
こう答えるのだった。
「今は」
「左様ですか。では音楽は何にされますか」
「日本のものがいいですが」
「日本のもの。それなら」
「お勧めはありますか？」
「滝廉太郎はどうでしょうか」
婆やが勧めるのはこの音楽家だった。近代日本における天才と言われている。
その彼はだ。どうかというのだ。
「隅田川等は」
「滝廉太郎ですか」
「どうされますか？」
「そうですね。それでは」
婆やの話を聞いてだ。真理は。
少し考えてからだ。こう答えたのだった。
「そうさせてもらいます」
「滝廉太郎は素晴しい音楽家です」
婆やはこのことを保障する様にして真理に話す。

第二十話　誰にも言えないその五

「私も聴いていて何度素晴しいと思ったか」
「わからないというのですね」
「そうです。ただ」
「ただ？」
「残念なことにです」
ここからは顔を曇らせてだ。そして言ったのだった。
「若くしてこの世を去っています」
「それは聞いたことがありますが」
「労咳でした」
まただ。真理のことに気付かないまま言ってしまったのだった。
「それで、です」
「労咳・・・・・・」
「労咳にかかってしまえばどうしようもありません」
婆やの話は続く。
「まことに」
「そうなのですね」
「私の知り合いにもいました」
そのだ。労咳にかかった者がだというのだ。
そのことをだ。真理のこととは思わないうちにだ。婆やは話していくのだった。
「その誰もがです」
「お亡くなりになられたのですね」
「中には若くしてかかってしまった人もいました」
悲しい顔でだ。真理に話す。
そしてその表情がだ。真理をさらに悲嘆に入れた。
しかしだった。婆やは話をさらに続けるのだった。
「その人もです」

「そうなのですね」
「はい、そうです」
婆やの顔もだ。沈みきっていた。
そうしてだ。こうも言ったのだった。
「あの様な病があることが恨めしいです」
「しかしあるのですね」
「病はこの世から消えはしません」
「それは決してですね」
「はい。運命と言っても受け入れられるものではありません」
婆やにとってもだ。それはだった。
「あれ以上忌まわしいものはありません」
「本当にそうですね」
「だからこそです」
ここでも気付いていないまま話す婆やだった。
「お嬢様は美味しく栄養のあるものをです」
「食べればいいのですね」
「そうして下さい。宜しいですね」
「はい」
真理も今は頷いた。しかしだ。
表情は暗くなったままだった。そうしてだ。
夜になりだ。義正を出迎えた。義正は真理の顔を見てだ。
すぐにだ。こう尋ねたのだった。
「何かあったのですか？」
「何かとは？」
「お顔が暗いです」
そのことを見抜いての言葉だった。
「どうされたのですか？」
「別に何も」
真理はこう返しただけだった。
「ありません」

「ならいいのですが」
「お嬢様は今日はです」
婆やがだ。義正に真理のことを話した。
「お医者様のところに行かれてです」
「お医者さんのですか」
「そうです。脚気についてお伺いしました」
真理は嘘を吐いた。脚気ではなく労咳のことだ。だがそれはあえてこう言ったのだ。
「年老いたお医者様にです」
「そうだったのですか。脚気のことを」
「はい、そうです」
婆やは何も知らないまま答える。
「お嬢様も気にされているそうで」
「脚気は確かに恐ろしい病です」
義正もだ。このことはよく知っていた。何しろ国民病だったからだ。

第二十話　誰にも言えないその六

しかしそれと共にだ。落ち着いた笑顔になって真理にこう離したのだった。
「ですが今はです」
「心配はいりませんか」
「あれはです」
こうだ。その脚気について妻に話すのである。
「食事でどうにでもなります」
「そうでしたね。脚気は」
「前にも何度かお話していますね」
「お医者様にも言われました」
そういうことにしてだ。真理は言うのだった。
「ですから。心配には及ばないと」
「大事なことは何を食べるかです」
「それですね」
「白米は確かに素晴しいです」
その素晴しさは義正も否定しない。
「食べているとそれだけで幸せにさせてくれるものですが」
「しかしそれだけではですね」
「成り立ちません」
身体がだ。そうだというのだ。
「心は満たされてもです」
「身体はそうはいかない」
「ですから。おかずも食べ」
「そして時にはと。お医者様に言われました」
「パンです」
西洋から入った。それだった。海軍では麦飯だがここはあえてだ。
義正はパンを出してだ。そのうえで真理に対して話すのだった。

「パンを食べることもです」
「大事ですね」
「無論白米とパンに優劣はないです」
尚後世になって先進国は皆パンを食べている、といった宣伝をしていた大学教授がいた。尚その主張に科学的根拠はなかった。噂ではこの教授は何処からか金を貰っていたらしい。大学教授の中にもそうした輩がいるのだ。
だが義正にはそうした考えはなくだ。こう言ったのである。
「しかし栄養のバランスが違います」
「白米には白米の栄養があり」
「パンにはパンの栄養があります」
「だから脚気にはパンですね」
「そうです。麦がいいのです」
「その通りですね」
婆やもだ。パンのことには微笑んで話した。
「実は今日もお嬢様にです」
「パンを出してくれたのですね」
「シェフにお話してそうしてもらいました」
「それはいいことです」
「黒パンです」
日本において主流となっているだ。白パンではなかった。長い間日本ではパンといえば白パンだった。黒パンは知られていなかった。
だが義正はだ。黒パンと聞いてこう言ったのである。
「独逸や露西亜の様ですね」
「そちらの国々ですか」
「あちらの国々のパンは主として黒なのです」
「そうだったのですか」
「黒いパンもいいものですね」
微笑みだ。婆やにこうも話したのだった。
「白パンばかりでは飽きるでしょうし」

「時には黒パンもですね」
「いいと思います」
義正は実際にこう答えた。
「私も何時か食べたいと思っています」
「わかりました。それでは」
「焼いてくれますか」
「シェフにお話しておきます」
そうするとだ。婆やは義正に話した。
「旦那様が黒パンを召し上がりたいと仰っていると」
「そうしていただければ何よりです」
義正は婆やに言葉に笑みで返した。そうしてだ。
真理に顔を向けてだ。あらためて話した。

第二十話　誰にも言えないその七

「では今度は」
「二人で、ですね」
「黒パンを食べましょう」
「黒いパンも」
どうなのか。真理はここでは夫の話に合わせた。
そのうえでだ。こう言ったのだった。
「美味しいものですね」
「そうですね。白いパンに慣れていますが」
「黒いパンもまた」
「パンも一つではないですから」
日本人、それも当時の日本人があまり知らないことをだ。彼は話した。
「様々なパンがあります」
「そうしてその様々なパンをですね」
「これから二人で食べていきましょう」
「はい、それでは」
こうした話をしたのだった。それからだ。
真理は暫く咳をすることも吐血もしなかった。しかしだ。
不安に覆われてだ。時折だった。
婆やにだ。こんなことを尋ねたりしたのである。
「噂で聞いたのですが」
「何でしょうか」
「樋口一葉ですが」
明治中頃の女流作家だ。たけくらべやにごりえが有名である。
「あの人は若くして亡くなっていますね」
「惜しいことに。あの人も」
「確か」

「労咳です」
またしてもだ。この病のことだった。どうしても気になり話に出してしまうのだ。
「その病で」
「そうでしたね。あの人も」
「まだ二十七でした」
婆やは無念そうに話す。
「若いのに」
「二十七ですか」
「はい、本当に若くして」
世を去ったというのだ。労咳によって。
「残念で仕方ありません」
「労咳になれば」
「助かるものではありません」
首を横に振りそのうえで真理に話す。
「それだけ恐ろしい病なのです」
「そうなのですか」
「あの、それにしても」
ここまで話してだ。ふとだ。
婆やは真理のあることに気付いてだ。こう問うた。
「近頃労咳のお話が多いですね」
「えっ・・・・・・」
そう言われてだ。真理はぎくりとした顔になった。
その彼女にだ。婆やはさらに尋ねた。
「またどうしてでしょうか」
「それは」
「労咳で死んだ小説家が多いからでしょうか」
今はただこう考えた婆やだった。
「だからでしょうか」
「はい、実は」

事実を隠してだ。真理は答えた。
「それで」
「そうですね。その樋口一葉にしても」
「その他にも。音楽家の」
前に話した滝廉太郎のことだった。
「実に多いですから」
「脚気と労咳は我が国の敵です」
まさに国民病だった。それこそ露西亜に匹敵する敵だったのだ。
「ですから」
「亡くなられた方も多いのですね」
「そうです」
他に国民病と言っていいものとして瘡病、つまり梅毒があった。
これでも命を落とした者は多い。しかし婆やは真理にも義正にも縁のない病とわかっていたのでこの病は話には出さなかった。
その婆やがだ。また話した。
「何時かは消えて欲しいものですね」
「そうですね。本当に」
「今は無理でも」
最後に言った言葉もだ。真理の心に突き刺さった。
助からない、若し労咳ならばだ。真理はこのことが心から離れなくなりだ。血を吐いたことを常に考えるようになってしまった。
そして労咳に怯えその中でだ。気持ちを沈ませるばかりになっていた。

第二十話　誰にも言えないその八

実家に戻った時もだ。それは同じだった。
両親に対しても暗い顔でいた。彼等もそれに気付いてだ。
「真理、何があったのだ」
「そんなに暗い顔をして」
「いえ、別に」
言葉ではだ。打ち消す彼女だった。
「何もありません」
「義正君とは何もないのだな」
「特に」
「はい、幸せです」
だがその顔は幸せな中にいる顔ではなかった。
暗く青い顔でだ。その顔での言葉だった。
その顔でだ。真理は言うのである。
「満ち足りています」
「そうは見えないが」
「その顔は」
両親は心から気遣う顔で娘に対して言う。
「本当に何があった」
「大丈夫なの、本当に」
「何でしたら御聞き下さい」
誰に聞くか。それは。
「婆やに」
「そうか。婆やにか」
「聞いてもいいのね」
「はい」
夫婦仲については絶対の自信があった。それは確かに何の問題もない。もっと言えば経済的にもだ。そうしたことに不安も不満もな

かった。
だが己の身体のこと、それだった。それについてはだった。
言えずにだ。暗い言葉を出すだけだった。
「ですから」
「そこまで言うのならいいが」
「婆やが一番知っているでしょうし」
「はい、どうしてもというのなら」
どうかとだ。真理も半ば見得の如く話す。
「そうして下さい」
「わかった。大丈夫だな」
「義正さんとのことは」
二人もこのことは確信できた。そのことはだ。
だがそれでもだ。娘の暗く青い顔を見てだ。
どうしても不安を拭えずにだ。こう言ったのだった。
「何かあればな」
「その時はね」
「わし等に何でも言ってくれ」
「そうしてね」
「そうさせてもらいます」
暗い顔のままだ。真理は両親に答えた。
しかしだ。暗い顔はそのままでだ。彼女は実家でもいるのだった。
義正もそんな彼女に気付いていた。それでだ。
兄達にだ。こう相談したのだった。
「妻ですが」
「何かあったのか？」
「一体」
「近頃。どうも暗いのです」
こうだ。兄達に話したのである。
「何かに困り悩んでいる様な感じです」
「あの真理さんがか」

「そうなっているのか」
「はい」
そうだとだ。義正はまた話した。
「どうしてなのかはわかりません」
「何かおかしなことがあったのだろうか」
「それでは？」
兄達はだ。いぶかしみながらまずはこう答えた。
「夫婦仲は問題ないのだな？」
「そして真理さんには」
「トラブルめいたものはなかったとのことです」
義正は不貞やそうしたことはなかったというのだ。
「妻はそうした人間ではありませんし」
「そうだな。真理さんはな」
「非常に真面目な方だ」
「それにあの婆やさんが常に傍にいる」
「それならだ」
二人もだ。そうしたことはないと見た。

第二十話　誰にも言えないその九

「有り得ないな」
「ではどうしてだ？」
「何故そうなっているのか」
「ううむ。どうも」
「わからないな」
「そういえばです」
ここでだ。義正はふと言った。
「妻は前に病院に行ったそうです」
「病院にか」
「そこにか」
「はい、その婆やさんと共にです」
このことを思い出してだ。兄達に話すのだった。
「それで脚気について尋ねたとか」
「脚気！？」
「あの病気にか」
「そうです。脚気についてです」
このことを兄達に話す。するとだ。
二人はだ。怪訝な顔になりこう弟に話した。
「おかしいな」
「そうだ、おかしい」
「おかしいといいますと」
「もう脚気のことはわかっている」
「自明の理の筈だ」
こう話すのだった。義正に対して。
「脚気は栄養の問題でなるものだ」
「そんなことは既によく知られている」
「事実は日露戦争ではっきりした」

「麦に豚肉を食べればいいことだ」
そうしたことで治ることはだ。もうこの時代には知られていた。
それでだ。二人も話すのだった。
「だから特にだ」
「聞くまでもないのではないのか」
「確かに」
兄達の話を聞いてだ。義正もそのことに気付いた。
「前にもう脚気の話を妻としたことがあります」
「それなら余計にだ」
「何故脚気のことをわざわざ聞きにいくのか」
「それがわからない」
「確めるにしても妙だ」
「そうですね。ではどうしてでしょうか」
義正は余計にいぶかしむ顔になってだった。
そのうえでだ。再び兄達に問うたのである。
「これは一体」
「おそらくはです」
ここでだった。これまで黙っていた義美がだ。兄に言ってきた。
彼女も兄弟の話し合いに加わってだ。そのうえで話を聞いていたのだ。
そして話が一段落したところでなのだ。義正に言ってきたのだ。
「病のことをお伺いしたことはです」
「それは間違いない？」
「人は理由もなく病院に行ったりはしません」
義美はこのことから考えて話すのだった。
「だからです」
「病気について聞きに行ったのは間違いない」
「はい、それは確かでしょう」
そのことは間違いないというのだ。
そのことを確かとしてからだ。義美はさらに話す。

「そして問題はです」
「どの病気なのか」
「はい、そのことです」
まさにだ。それがだというのだ。
「どうした病なのかです。そして」
「そして？」
「真理義姉様は」
彼女から見て真理はそうなる。その彼女がどうかというと。
「その病にかかっておられるかどうか」
「そのことを気にしていて」
「悩み暗くなっているのでしょう」
こう読んでだ。兄に話をするのだった。
「そうだと思います」
「そうだったのか。病に」
「そしてその病は」
自分で言いながらだ。義美は。

第二十話　誰にも言えないその十

暗い顔になってだ。こう述べたのだった。
「かかっては危険な病でしょう」
「死に至る病」
「かかっておられるかどうかはまだわかりません」
だが、だ。それでもだというのだ。
「しかしその病を御気にされていることは間違いありません」
「そうなのか」
「御気をつけ下さい」
真剣な顔でだ。兄に忠告をした。
「そして義姉様をです」
「支えるんだね」
「それは兄様にしかできないことです」
「だからこそ」
「はい、そうされて下さい」
「妻がどうなっても」
例えだ。そうなってもだというのだ。
「僕はやることはもう決めているよ」
「左様ですか」
「うん。彼女を愛するようになってから」
「その時からもう」
「決めているから」
微笑んでだ。義正は妹に話した。
「最初からね」
「それは変わらないですね」
「知っているんじゃないかい？」
微笑んでだ。彼は妹にこう返した。
「僕は一度決めたらね」

「決してですね」
「そう。考えは変えないよ」
そうだというのだ。
「絶対にね」
「そうですね。とりわけそれが義やそうしたことになるなら」
「そう、変えない」
それはだ。絶対にだというのだ。
「だからね」
「そうですね。ではお兄様は」
「そうするよ。絶対に妻を愛するよ」
そうするというのである。
「絶対にね」
「わかりました。確かにそうでした」
真理もだ。このことを思い出して頷く。
そのうえでだ。兄に対して微笑みだ。そうして言ったのだった。
「では。お兄様は」
「僕は」
「そのままお進み下さい」
こう兄に告げる。
「お兄様の信じる道を」
「ではこのまま」
「それが信じる道ならば」
そうするべきだと。義美は話す。
「そうして下さい」
「わかったよ」
義正は妹のその言葉に微笑んで頷いた。
そのうえでだ。こうも言うのだった。
「信じる道を歩めばいいね」
「後は導く方を大勢出て来られます」
「これまでがそうだったように」

「道は一つではありません」
義美は微笑みだ。兄にこのことも話した。
「一人の道は一つでも」
「その他の無数も道が重なり合って」
「そうして世界になっている」
義正もわかってきた。このことが。
「そういうことだね」
「はい、そうです」
「では。一人じゃないことも頭の中に入れておいて」
「少なくともお兄様は既に二人です」
「妻と」
「その。義姉さんとです」
一緒だというのだ。そうした話をしてだ。

第二十話　誰にも言えないその十一

その話をしてだった。義愛がだ。
話が一段落したと見てだ。弟や妹達にこう話した。
「さて、折角久し振りに兄弟が揃ったし」
「それならですか」
「そう。何か楽しいことをしよう」
こうだ。義智に対しても話すのだった。
「兄弟で」
「それでしたら」
すぐにだ。義智は兄にこう提案した。その提案したことは。
「お茶にしましょう」
「お茶。茶道かな」
「今の義美の服を見て思いました」
見ればだ。彼等は今は洋室にいる。しかし義美だけは和服である。
赤と桃の二色の着物、それに紅の帯だ。その姿でいるのだ。
その和服を見てだ。義智は言うのだった。
「和室に入り茶道を楽しみましょう」
「茶道か。いいな」
茶道と聞いてだ。義愛はすぐにこう返した。
そのうえでだ。あらためて兄弟達に話した。
「では茶室に入るか」
「はい」
「そうしましょう」
義正と義美が応える。義智についてはもう言うまでもなかった。
こうしてだ。兄弟四人でその茶室の中に入った。狭い入り口を潜りそのうえで狭い茶室に入る。その中に入ってだった。
義愛が茶を淹れ弟や妹達に勧める。彼等もそれを飲む。
一杯飲んでからだ。義智が言った。

「洋服で茶を飲むというのもです」
「いいものに思うか」
「はい。近頃思うのですが」
微笑みながらだ。兄に話す彼だった。
「ただ洋風、和風のみに捉われるのではなく」
「どちらも共に楽しむか」
「それもまたいいのではないでしょうか」
実際に洋服で正座をしながらだ。義智はさらに話す。
「それは支那風についても同じです」
「そうだな。洋風も和風もいいのならな」
「支那も同じですね」
「言われてみればそうだ」
微笑みだ。義智も次弟の言葉に頷く。
「そうなるな」
「洋服で茶を飲むのも」
どうかというのだ。それは。
「非常にいいですね」
「確かに。私も今こうして茶を飲んだが」
「どうでしょうか」
「またいいものだ」
微笑みだ。義愛は次弟に答える。
「実際にな」
「一つにこだわっても生まれるものは限られています」
「様々なものを取り入れてこそ」
「新しいものが生まれるな」
「はい。それにです」
さらにだとだ。話す義智だった。
「洋服とはいっても茶の味は変わりませんね」
「同じだけ美味だな」
「こだわる必要がないならば」

その場合はだ。どうかというと。
「取り入れればいいのです」
「そういうことだな」
「では」
さらにだ。義愛はまた茶を淹れた。
そうして再び弟達と妹に振る舞い自らも飲みだ。話すのだった。
「やはり美味い」
「確かに」
「いい味です」
ここでだ。言ったのは義正だった。
彼もまた洋服だ。その洋服姿で正座して茶を飲みだ。彼も言った。
「味は変わりませんね」
「同じだな。美味だな」
「はい」
義正は微笑み長兄に答えた。

第二十話　誰にも言えないその十二

「茶の味は変わりません」
「取り入れるべきだな」
「そうですね。茶の味は変わらない」
「そういえばだ」
義愛もだ。洋服で茶を飲みながらだ。
その中でだ。彼自身も気付いたのだった。
「前に仕事の打ち合わせで支那料理の店に入った」
「その時に気付かれたのですか」
「あの時私は洋服だった」
そのだ。洋服でだというのだ。
「洋服で支那料理を楽しんだ」
「味はどうでしたか？」
「変わらない。美味だった」
義愛もまた微笑みだ。末弟の言葉ニ応える。１０８
「今と同じだ」
「左様ですか」
「同じですか」
「そうだな。だからだ」
微笑みながらだ。彼は弟達と妹達にまた話す。
「こだわることもないな」
「日本だけ、西洋だけに」
「そして支那だけに」
「文化はこだわるものだが」
しかしだ。それでもだというのだ。
「捉われるものでもない」
「だからですね」
「今こうして洋服で茶を楽しむのも」

「いいことなのですね」
「そう思う。ではだ」
茶を飲みだ。次はだ。
菓子だった。それは葛饅頭だ。葛の透明な中に抹茶の餡子が見える。それを見てだ。義智は微笑みつつこんなことを言ったのだった。
「見事な和風ですね」
「そうだな。しかしだ」
「しかし？」
「饅頭は最初から日本にあった訳ではない」
このことを言うのだった。
「支那のものだ。元々は」
「しかし日本に入り」
「そうしてこうなったのですね」
「支那の饅頭は肉の饅頭だ」
主にだ。菓子の饅頭もあるが支那の饅頭は主流は肉の饅頭なのだ。彼等は中華街に客として出入りしてだ。このことを知ったのである。
「こうした饅頭ではないな」
「しかし日本人はですね」
「こうした風に作り変えた」
義愛は微笑み青い陶器の皿の上の葛饅頭を見ながら微笑んで話す。
「換骨奪胎。西洋の言葉ではアレンジというのか」
「日本人に合う感じにですね」
「菓子にしたのですね」
「饅頭は支那ではパンになる」
他には包や餅という食べ物もある。どちらも小麦を練って作ったものだ。ただし包は蒸し餅は焼く。そうした違いはあるにしてもそこは同じなのだ。
「中に肉やそうしたものを入れてだ」
「それで食べていますね」
「支那では」

「しかし日本では」
「小麦を使うものもある」
そしてだ。他にもだった。
まさにだ。その葛饅頭を見てだ。義愛は話していく。
「こうした饅頭もある」
「葛を使った饅頭ですか」
「こうしたものもある」
「そうですね」
「そうだ。これはおそらく支那にはない」
こうしただ。小麦ではなく葛を使った饅頭はだというのだ。
「日本で出来たものだ」
「そうですね。支那から入った饅頭をですね」
「我々の職人達が作り変えた」
「それがこの葛饅頭ですね」
「そういうことだな」
あらためて言う義愛だった。
「文化は」
「はい、それではですね」
「今から」
「この葛饅頭もまた」
「文化を食べよう」
こう話してだった。彼等はその葛饅頭も楽しむのだった。支那で生まれた饅頭はだ。ここでは日本の味と文化をたたえていたのだった。

第二十話　完

２０１１・８・８

第二十一話　忌まわしい咳その一

第二十一話　忌まわしい咳

真理は暗い顔のままだった。その彼女を見てだ。
婆やはだ。いよいよ心配になってだ。
彼女にだ。切実な顔で訴えたのだった。
「あの、一度です」
「一度？」
「お医者様のところに行かれて下さい」
そうして欲しいというのだ。
「どうか。そうして」
「診てもらうのですね」
「どう見ても今のお嬢様は」
真理はだ。どうかというと。
「病にかかっておられます」
「だからですか」
「はい、ですからどうか」
また訴える婆やだった。実に切実な顔だ。
「ここはです」
「いえ、私は」
「お嬢様は？」
「何ともありません」
振り切る様にしてだ。真理は婆やのその訴えを振り切った。
「ですから」
「行かれないというのですから」
「お医者様のところは」
そこに行くのは。どうかというと。
「何かあった時ですから」
「ではあの時は」

前に病院に行き脚気、婆やが思っているそれのことを尋ねに行ったのはどうしてかとだ。婆やは食い下がる様にして真理に問い返した。

「行かれたのですか？」

「それは」

「一度行かれて下さい」

婆やの訴えは続く。

「どうかここは」

「しかし」

「どうしてもだというのですか」

「待って下さい」

逃げにくいと判断してだ。真理は時間稼ぎに移った。

「どうか今は」

「待てばいいというのですか」

「はい、今は」

また言う真理だった。

「そうして下さい」

「それならいいのですが」

婆やは真理がやがて行くと捉えて、好意的にそう判断してだ。今は納得した。

そのうえでだ。また彼女に告げた。

「必ずですよ」

「わかっています」

「はい、それではです」

どうしてもだとだ。まだ言うのだった。

「御身体のことは」

「自分で、ですね」

「結局は御自身のことですから」

真理自身のことだというのだ。

「くれぐれもです」

「それはわかっていますので」
「どうか。お時間を見つけて」
そうしたことを話したのだった。しかしだった。
真理は今は暗い顔をしているだけだった。そうして動かないのだった。
しかしだ。その中でもだった。彼女は義正と共にいた。常にだ。
義正は今は沈黙を続けていた。しかしだった。
時折だ。真理に言うのだった。
「今度ですが」
「今度とは？」
「また何処かに行きませんか」
こう言ってだ。真理に気晴らしを勧めるのだった。
「そうされませんか」
「いえ、今は」
しかしだった。今の真理はだ。
曇った顔のままでだ。その誘いを断るばかりだった。

第二十一話　忌まわしい咳その二

言葉数も次第に少なくなっていた。その中でだ。
暗くなるばかりだった。その彼女を見てだ。
義正は婆やに尋ねたのだった。
「本当に何かあったのでしょうか」
「それは私にもです」
「わかりませんか」
「申し訳ありません」
俯いた顔でだ。婆やも義正に話す。
「こんなことははじめてです」
「はじめてとは」
「はい、お嬢様はとても素直な方で」
「そうですね。嘘を言われることはありません」
「ですからいつも正直に話してくれました」
そうだというのだ。今までの真理は。
だからこそだ。余計にだというのだ。
「こんなことははじめてです」
「幼い頃より共にいる貴女にもそうした態度とは」
「やはり何かあるのでしょうか」
「なければです」
それならばだ。どうかというのだ。
「ああはなられません。それにです」
「それに？」
「真理さんは非常に素直な方ですね」
「はい」
このことは婆やが最もよく知っていた。彼女が幼い頃より共にいたからだ。
「その通りです」

「私もそれはよく知っています」
「そうですね。旦那様も」
「そう、あの方は非常に素直な方です」
このことをまた言う義正だった。
「ですから。今も出ています」
「今もですか」
「はい、出ています」
そうだとだ。義正は話すのだった。
「既にです」
「どういった風にでしょうか」
「お顔に」
真理のだ。その顔にだというのだ。
「出ていますから」
「ではお嬢様は」
「やはり何かを隠しています」
このことを婆やに話した。
「しかしです。今は」
「今は？」
「様子見ですね」
それをすべきだというのだ。
「鳴くまで待とうです」
「そうあるべきですか」
「今は」
徳川家康になるというのだ。それが義正の選択だった。
「そうさせてもらいます」
「そうされますか」
「落ち着いて待っていれば」
「やがてはですね」
「見えるものが出てきます」
こう話してだった。義正は今はだ。

真理が言うのを待っていた。そうしてだった。
真理を見ていた。何も言わない真理を。
真理は何も言わない。だが表情は暗くなっていくばかりだった。
その彼女にだ。
義正は常に傍にいるようにした。そしてだった。
真理に茶を淹れ共に飲む。そうしたことを続けていた。その中でだ。
真理は時々咳込むことに気付いた。それを見てだ。
義正はだ。こう言ったのだった。
「まさか」
「まさかとは？」
「あれはあの病だろうか」
こう佐藤にも言ったのである。

第二十一話　忌まわしい咳その三

「だとしたら危うい」
「あの病といいますと」
「咳をしておられるのだ」
「咳といいますと」
「いや、決め付けは避けよう」
自分の言葉を打ち消してだ。義正はだ。
そのうえでだ。こう言ったのだった。
「今の言葉は打ち消す」
「そうされますか」
「そうしたい」
佐藤にだ。唇を少し噛み締めて話した。
「それでだが」
「それで？」
「神戸にいるのは幸いだった」
こんなことをだ。佐藤に話したのである。
「そう思う」
「神戸にいることがですか」
「幸いだった。この町は気候がいい」
「そうですね。確かに冬は風に悩まされますが」
「しかし海があり山もある」
今も見えるその両方を見回してだ。義正は佐藤に述べた。
「どちらも。素晴らしい空気を約束してくれる」
「冬の風は防ぐこともできますし」
「それだけいい気候だな」
「そう思います。それでなのですか」
「神戸でよかった」
またこう言うのだった。

「まことにそう思う」
「そうなのですか」
「身体を癒してくれる」
「神戸の気候がですか」
「神戸自体がだ」
街そのものがだ。そうしてくれるというのだ。
「有り難いことにだ」
「そうなのですか」
「また言うが神戸にいてよかった」
しみじみとだ。義正は話す。
「それではだが」
「それでは」
「それではか」
「はい、奥様と共にですが」
「何処か奇麗な場所に行けばか」
「そうです。神戸でもとりわけそうした場所に」
行けばいいというのだ。
「如何でしょうか」
「そうだな。それにだ」
「それに加えてですね」
「美味で身体にいいものを食べればな」
「さらにいいですね」
「伊太利亜の料理だが」
ここで義正が話に出したのはこの国の料理だった。
「スパゲティというものがある」
「あの麺ですか」
「それだ。神戸にもそれを出してくれる店が増えた」
「あれは変わった麺ですね」
「うどんやそばとはまた違ってな」
「支那そばとも違いますし」

「麺は元々は支那からはじまった」
このことは既に知られていた。歴史にも料理書にもはっきりと書かれていることだ。
「しかしそれが西にも伝わってだ」
「西。即ち欧州にですね」
「伊太利亜にだ」
そのだ。伊太利亜にだというのだ。
「そうしてできたのだ」
「それがあのスパゲティだというのですね」
「そうだ。あれはあれで美味い」
義正は既にスパゲティを知っていた。それでなのだった。

第二十一話　忌まわしい咳その四

あらためてだ。佐藤に話す。
「それを食べるのもいいか」
「いいと思います。それではですね」
「次の休みの時にな」
「行かれますね」
「そうしよう」
こう話してだった。義正は決めたのだった。
早速真理にだ。こう話したのだった。
「今度の日曜ですが」
「日曜にですね」
「面白い店を知っていますので」
「そのお店にですね」
「御一緒にどうでしょうか」
こう言ってだ。真理をそこに誘うのだった。
「そこは海に面した店で」
「海ですか」
「はい、そうです」
そこにある店だというのだ。
「海を見た後で、そして見ながらです」
「そのお店で、ですね」
「食べましょう」
こう真理に提案するのだった。
「そうしましょう」
「そうですね」
真理はだ。義正の言葉にだ。
憂いのある顔でだ。こう答えたのだった。
「それでは」

「一緒に来て頂けるでしょうか」
「そうさせてもらいます」
真理は義正の言葉を断らなかった。そうしたつもりはなかった。
それでだ。また言うのだった。
「では」
「それでは。日曜に」
「はい、日曜に」
「その店に行きましょう」
こうしてだった。真理を海辺、そしてその店に連れて行くのだった。こうしてだった。
海辺に着くとだ。真理は。
白い砂浜と雲、それに青い空と海がある。その二色が絶妙のコントラストを生み出し真理の前に一つの絵画を見せていた。
無論義正もその絵画を見ている。そうしてだ。
真理にだ。こう話したのだった。
「如何でしょうか」
「何か。ここにいると」
「いると」
「気持ちが落ち着きます」
そうなるとだ。真理は義正に話した。
「そして空気がいいですね」
「そうですね。潮の匂いがして」
「風も爽やかで」
そうした中にいてだ。彼女は話すのだった。
「ここにいれば何か」
「何か？」
「ずっといたいとさえ思えます」
「そこまで御気に召されたのですね」
「はい」
そうだとだ。静かに答える真理だった。

「いい場所ですね。ただ海もいいですが」
「森もですね」
「神戸はいい場所ばかりですね」
「海に山もあり」
そのどちらもだというのだ。
「非常にいいですね」
「そう思われますね」
「はい、ただ」
「ただ」
「何時までもいられませんね」
沈んだ顔になりだ。真理はこう義正に話すのだった。

第二十一話　忌まわしい咳その五

「ここには」
「はい、残念ですが」
「何処にも永遠にはいられませんね」
「形あるものは何時かは壊れますから」
「この海も永遠ではありませんね」
「そうです」
これはその通りだとだ。義正は真理に答える。
「全ては変わるものですし」
「それに終わるものですね」
終わるとだ。真理はこうも言った。
「何時かは」
「それはそうですが」
真理の言葉に不吉なものを感じた。しかしだ。
義正はそれは隠してだ。彼女にあらためて話した。
「それでもです」
「それでも？」
「人は今を生きるものですから」
だからだとだ。その不吉なものを打ち消す為に言うのだった。
「そうしたことは頭の中に入れてもです」
「それでもですか」
「考えることは今、そして私達が見える未来です」
「そうしたことを考えてですか」
「この海や空を見ていればいいでしょう」
「今ここにある美しいものを」
「そう考えます」
義正は微笑みになり真理に話した。
「それではどうでしょうか」

「そうですね」
俯いたまま考える顔になってだ。真理は答えた。
「確かに。その方がです」
「いいですね」
「言われてみれば」
その通りだと答えはする。しかしだった。
真理はまだ俯いたままでだ。こう義正に答えたのだった。
「ですがそれでも」
「御気持ちは晴れませんか」
「今は」
そうだとだ。俯いたままでの返答だった。
「しかしこうしてあなたと一緒にいて」
「私と共にいるなら」
「それだけで気持ちがかなり晴れます」
「ならいいのですが」
「はい。それではこの後は」
「伊太利亜料理はどうでしょうか」
義正は微笑みと共に真理に話した。
「あの国の料理を食べませんか」
「伊太利亜ですか」
「そうです。仏蘭西や独逸ではなくです」
「今は伊太利亜なのですね」
「伊太利亜もまた美食の国でして」
このことを真理に話してだ。誘うのだった。
「如何でしょうか。美味しくしかも身体にいいのです」
「それが伊太利亜料理ですね」
「そうです。如何でしょうか」
「場所は」
何処で食べるのか。真理はそのことも尋ねた。
「一体」

「あの店です」
義正が指し示した先にだ。その店があった。
白い外観で木造の洒落たテラスが突き出ていてそこにも席が幾つも置かれている。その店を指し示して真理に話をするのである。
「あの店で、です」
「近いのですね」
「海を見てすぐにと思いまして」
「御食事に」
「そうです。スパゲティを食べましょう」
「スパゲティといいますと」
どういったものか。そのことは真理も知っていた。

第二十一話　忌まわしい咳その六

それでだ。佐藤と似た様なことを言ったのだった。
「あれですね。西洋の麺類でしたね」
「言うならばそうです」
「それを今からですか」
「二人で食べましょう」
そうしようというのだ。
「あの店で」
「わかりました」
やはり笑みはないがそれでもだ。真理は答えた。
そうしてだ。二人でその店に向かってだ。
海がよく見えるテラスの席に座りだ。そのうえでだった。
義正と真理の前にスパゲティが来た。それは。
トマトをふんだんに使いガーリックに茄子が入っている。そのスパゲティが来た。白の皿の上のそれを見てだ。真理はこう義正に尋ねた。
「あの。このスパゲティは」
「何か」
「油が違うのでしょうか」
スパゲティとソースに見られる緑っぽい色の透明の油を見ての言葉だ。
「そう見えるのですが」
「オリーブです」
「オリーブといいますと」
「西洋の油の一つでして」
こうだ。真理に説明するのだった。
「オリーブという実から採れます」
「それを使っているのですか」

「我が国ではないかなり貴重な油です」
それがこのオリーブ油だというのだ。
「この店はわざわざ伊太利亜から取り寄せて使っているのです」
「そこまでしてなのですね」
「本場の味を出しています」
「凝っていますね」
「凝っているだけに」
それだけにだとだ。義正は微笑み話していく。
「味はかなりいいです」
「それにトマトや大蒜もふんだんに使われていますね」
「それだけに身体にもいいですから」
「ではこれを食べて」
「はい、御気を明るくさせて下さい」
微笑みをそのままにして真理にまた話した。
「是非共」
「わかりました。それでは」
真理は義正の言葉に応えフォークを手にしてだ。
そのスパゲティを食べてみる。そうしてだ。
義正のだ。問いに答えたのだった。
「如何でしょうか」
「何かこれまでの」
「これまでのといいますと」
「食べてきたスパゲティがです」
「違うものに思えますね」
「はい、とても」
その通りだというのだ。
「これがオリーブの力なのですね」
「不思議な油ですよね」
「そうですね。特別な味に思えます」
「私は今このオリーブに凝っていまして」

「そうなのですか」
「家の料理にも使って欲しいと考えています」
真理にこう話すのだった。
「ただ。かなり高いですが」
「お金はかかるのですね」
「日本にはないので」
それで高いというのだ。
「どうしても。ですが」
「ですが？」
「このことについても考えています」
義正はまた真理にこう話した。
「何時かは。オリーブをです」
「普通に誰もが食べられるようにですね」
「したいと考えています」
こうしたこともだ。考えているというのだ。

第二十一話　忌まわしい咳その七

「色々なものが食べられるということは幸せなことですね」
「そうですね。それだけで」
「今はこのオリーブやメロン」
「メロンもですか」
「そうしたものは非常に高価です」
まだそうだった時代なのだ。それにバナナもだ。
「しかしやがては。誰もが自由に食べられる様な」
「そうした日本にですね」
「したいですね」
「そうした日本になれば」
どうなのか。真理は漏らす様にして応えた。
「どんな病でも治せるでしょうか」
「そうでしょうね。今も病で死ぬ人は多いですが」
「はい」
「そうした人もかなり」
減ると。義正は話す。
「人は必ず死ぬものですが」
「ですがそれでもですね」
「はい。人は長く生きられるようになり」
そしてだった。
「幸せに過ごせる様になるでしょうね」
「そうした国になればですね」
「我が国は確かに豊かになりました」
維新の頃から考えればだ。確かにそうだった。
「ですがそれでもです」
「まだまだですか」
「何時か。こうしたものが誰でもふんだんに食べられて」

そのオリーブを使った本格的なスパゲティと。その他の様々なものがだ。
「車が日本中を多く走る」
「そうした日本にですか」
「したいですね」
微笑みだ。真理に話すのだった。
「私が携わっている鉄道や百貨店も」
「その二つもですか」
「線路をより広く。列車は速く中はくつろげ」
そして。その次に言うのは。
「百貨店はより多く建ち中も賑やかになり」
「豪華にですね」
「なっていくべきです」
こう話すのだった。
「そうしたいです」
「何か。日本はこれから」
「素晴らしくなります」
断言だった。よくなるというのだ。
「必ずです」
「そうですね。きっと」
「そうなります」
義正は明るく確かな言葉で話す。
「必ずです」
「これまでもそうでしたし」
「これからも」
彼は希望を見ていた。真理と違って。
そのうえでだ。今度はだ。
二人がパスタを食べ終えワインも飲んだ後でだ。彼女に問うたのだった。
「さて、それでは」

「次はですか」
「デザートですが」
「このお店には何がありますか」
「伊太利亜のお菓子。それに」
「それに？」
「新鮮な果物があります」
それもあるというのだ。果物もだ。
真理はだ。ここではその果物に心を向けた。それでだった。
具体的にだ。どうした果物があるかだ。義正に尋ねたのだった。
「どういった果物が、ですか」
「はい。何があるでしょうか」
「店の人を呼びますか」
「そうして聞いてですね」
「はい、確めましょう」
こう話してだ。義正は店の者、白いブラウスに黒いズボンとベストの洒落た格好の若い男の彼に対してだ。声をかけてだ。

第二十一話　忌まわしい咳その八

今店にどうした果物があるのか。尋ねたのだった。
するとだ。その若い店員はこう答えたのだった。
「無花果にオレンジがありますが」
「オレンジもですか」
「はい、それもあります」
「他には何がありますか？」
「パイナップルもあります」
それもあるというのだ。
「どれにされますか？」
「ではその三つをですね」
一つに絞らずにだ。義正は店員に話した。
「盛り合わせにしてくれますか」
「三つをですか」
「はい、そうして下さい」
また店員に話す。
「御願いできますか」
「わかりました」
店員もだ。すぐに答えた。そうしてだった。
頼んだその盛り合わせが来た。それを見てだ。
真理はだ。義正に話した。
「ただ。果物があるだけではないのですね」
「はい、私もそうは思いませんでした」
「この白いものは」
牛乳に似ているが遥かに濃い感じだ。悪く言うとどろりとしている。
それを見てだ。真理は義正に問うたのだ。
「何でしょうか」

「ヨーグルトですね」
「ヨーグルトですか」
「そうです。これはヨーグルトです」
こう真理に説明した。そのヨーグルトが盛り合わされた果物にかけられている。切られたその三つの果物全てにだ。かけられている。
それがそれぞれの色の果物達を白く染めている。そしてだ。
さらにだった。果物の色も対比させていた。
無花果の赤紫にオレンジの橙、パイナップルの黄をだ。白が対比させていた。
その色合いを見てだ。真理はまた言った。
「これも伊太利亜ですか」
「伊太利亜ではありませんが」
それでもだと。義正は真理に話す。
「あの国でも食べられているものです」
「そうなのですか」
「伊太利亜は果物も豊富で」
「それでこうした食べものもあるのですね」
「はい」
その通りだとだ。義正は微笑んで真理にまた話す。
「そうなのです」
「左様ですか」
「それではですね」
「はい。喜んで」
こう言ってもだった。真理の顔は。
やはり笑顔でない。その笑顔でない顔を見てだ。
義正は不安を感じ続ける。しかしだった。
今はそのことを言わずにだ。デザートも食べたのだった。
そうしてからだった。彼等は。
店を出て再び海辺に出た。その海辺は。
夕暮れに近くなろうとしていた。しかしまだ日差しは強い。

その日差しも浴びながらだ。義正はまた真理に話した。
「今日はどうだったでしょうか」
「あのスパゲティと果物ですね」
「伊太利亜はどうでしょうか」
「これまでは仏蘭西や独逸のものでしたが」
当時の日本人が食べる洋食はだ。多くはこの国のものが主流だったのだ。
「ですが伊太利亜もまた」
「いいものですね」
「はい、美味しいです」
微笑まずにだ。真理は答えた。
「欧州には他にも食べものが美味しい国があったのですね」
「そうですね。伊太利亜もですし」
「そして伊太利亜の料理は」
どうなのか。真理はこんなことも話した。
「海に合いますね」
「そう感じられますか」
「はい、感じます」
実際にそうだというのだ。真理は。

第二十一話　忌まわしい咳その九

「何故かわかりませんが」
「伊太利亜は三方を海に囲まれた長靴の国です」
「長靴？」
「伊太利亜の形がそうなのです」
もっと言えばシチリア島はその長靴が蹴ろうとしている小石である。それを考えると伊太利亜の形は非常に面白いものである。
その伊太利亜がだ。どうかというとだ。
「あの国はそれで長靴とも言われます」
「そうなのですか。伊太利亜は」
「はい、海に囲まれた」
このことが重要だった。ここでは。
「そうした国なのです」
「だから海辺が合うのでしょうか」
「そう思います。魚介類を使ったスパゲティもありますし」
「そういうものもありますか」
「伊太利亜の食事は我が国にも負けないだけ海の幸を使います」
やはりだ。海に囲まれているからだ。
「ですから。今度は」
「またこのお店に来れば」
「その時はそのスパゲティを食べましょう」
こう言ってだ。真理に再びここに来ることを誘うのだった。
「そうしましょう」
「そうですね。それでは」
「はい、その時にまた」
こうした話をしてだ。真理を少しでも明るくさせようと務める彼だった。
だがここでだ。不意にだ。

真理は咳込んだ。それもわりかし強くだ。
何度か咳込みだ。そしてだった。
彼女にとって不運なことにだ。ここで。
また出てしまった。それが。
あまり多くはなかった。だがそれで手の裏を汚してしまった。それをだ。
義正は見てしまった。そのうえでだ。
顔を驚かせてだ。真理に問うた。
「今のは」
「あの、これは」
「吐血ですね」
すぐにだ。そのことがわかってしまった。
「それですね」
「・・・・・・・・・」
「まさかそのことで」
それを見てだ。すぐにだった。
義正も察した。彼女が何故吐いたのかを。
それでだ。顔を曇らせて言ったのだった。
「これまでずっと」
「前に一度こうしたことがありました」
もう隠せない。こう考えてだ。真理は義正に顔を背けてだ。真実を話しはじめた。
「咳込みそうして」
「そのうえで、ですね」
「はい、血を」
吐いてしまったというのだ。咳と共に。
そしてだった。咳と共の血が何かを。二人はわかっていた。
義正は戸惑いながらだ。それが何かを言った。
「労咳でしょうか」
「かも知れませんね」

顔を背けさせたまま真理は言葉を返した。
「咳、そして血ですから」
「だから病院に行かれたのですね」
「労咳のことを聞きました」
実際にそうしたと。真理は答える。
「実は」
「やはりそうだったのですか」
「隠していたかったのですが。ここで」
そしてだった。真理は。
涙をその目に溜めてだ。義正にこう言った。
「すいません、隠しごとをして」
「いえ、それは」
「構わないのですか」
「こうしたことは。人は隠してしまうものです」
病、それも命に関わる様なものは。そうだというのだ。

第二十一話　忌まわしい咳その十

「ですから」
「仕方ないと言って頂けますか」
「はい」
その通りだとだ。義正は答えた。
「私もそうしたでしょう」
「そうなのですか」
「ですが。これは」
「はい、わかりました」
言わずもがなだった。そこから先は。
「病院に行きます」
「私も共に」
「来て頂けるのですね」
「そうさせてもらいます」
こう答えるのだった。
「是非共」
「そうしてくれるのですか」
「いつも一緒ですから」
これが義正の返答だった。
「ですから」
「そうですか。だからこそ」
「はい。それにです」
「それに？」
「若し私が血を吐いたなら」
彼がだ。そうしたらならというのだ。
真理はどうするか。尋ねたのはこのことだった。
「あなたはどうされますか
「私ですか」

「はい、どうされますか」
「その場合は」
真理はだ。その問いにすぐに答えた。
「同じことをしたでしょう」
「そう仰いますね」
「はい、やはり」
こうだ。真理は答えた。
「いつも一緒ですから」
「だからです」
それでだとだ。義正はまた微笑んで真理に話した。
「共に行きましょう」
「だからですね」
「そうさせてもらいます。それでなのですが」
「それで？」
「はい。もうすぐしたらです」
どうなるか。それは。
「子供ができるでしょうか」
「私達の子供が」
「はい、できるでしょうか」
こう真理に尋ねたのだ。
「その子は」
「近いと思います」
真理はだ。微笑んでだ。
義正にだ。こう答えたのだった。
「その時もです」
「近いですか」
「はい、確かなものは感じませんが」
子供を宿している。その実感はないというのだ。
だがそれでもだ。落ち着いた顔でこう話した。
「感覚としてです」

「それを感じるのですね」
「はい、感じます」
そうだというのだ。
「ですから」
「ではその時を待ちましょう」
「二人で、ですね」
「はい、二人で」
まさにだ。その二人でだ。
待とうとだ。義正は微笑み話したのだった。
それを話してだ。義正は。
真理にだ。こんなことも話した。
「その幸せの時を」
「私達の世界が増えるその時」
「それを待ちましょう」
「わかりました」
微笑みだ。真理も答えたのだった。
「ではその時を」
「楽しみに」
待とうとだ。話をしてだった。
やがて海辺から離れ彼等の屋敷に戻った。そうしたのだった。

第二十一話　完

２０１１・８・１５

第二十二話　消える希望と灯る希望その一

義正の言葉にだ。真理は何とか希望を見出せた。
それでだ。あらためてだった。
義正にだ。こう言ったのだった。
「ではですね」
「今からですね」
「はい、行きましょう」
微笑みだ。自分から言ったのである。
「病院に。ですが」
「恐ろしいですか」
「はい」
微笑は消えた。そしてその顔でだ。
彼女はだ。こうも言うのだった。
「ですから」
「だからですか」
「どうしても。逃げたくなります」
そうしたいというのだ。
「今も本当に」
「ですがそれでもですね」
「行かせてもらいます」
そうするというのだ。
「あなたが一緒ですから」
「だからですね」
「はい、ですから」
それで行けるというのだ。二人で。
それを言ってだ。実際に彼女から行こうとする。
そこれでだ。さらにだった。

真理はだ。また話したのだった。
「若し子供が授かれば」
「その時はですね」
「二人で心ゆくまでお祝いしましょう」
こう言うのである。
「そうしましょう」
「そうですね。その時は」
「是非共」
そうした話をしてだった。二人は。
病院に向かおうとする。しかしだ。
その二人にだ。婆やが尋ねた。
「あの、どちらに」
「それは」
どうかとだ。真理はだ。
呼び止められ困った顔になってだ。婆やに話すのだった。
「少し」
「旦那様とお二人で行かれるのですね」
「はい」
このことはだ。素直に答えられた。
しかしだ。それでも何処に行くかは戸惑っていた。だがだ。
義正と共だからだ。婆やは落ち着いてこう言ったのだった。
「ではお二人で、です」
「二人で」
「楽しんで下さい」
そうしてくれというのである。
「そうされて下さい」
「はい。それでは」
「どういったものかはわかりませんが」
それでもだというのだ。婆やはだ。
「行かれて下さい」

「わかりました」
真理もだ。静かに答えた。
そのうえでだ。二人で病院に赴くのだった。
白い病院の建物を見る。それを見てだ。
義正がだ。言ったのだった。
「行きましょう」
「はい」
真理も頷きだ。そうして。
二人で病院に入り診察を受ける。それから数日後。
医師に呼ばれてだ。診察の結果を告げられた。それは。
「残念ですが」
「残念・・・・・・」
「といいますと」
「労咳です」
こうだ。医師は二人に告げたのだった。
「奥様ですね」
「は、はい」
真理は青ざめた顔で医師の問いに答えた。

第二十二話　消える希望と灯る希望その二

「そうですが」
「残念ですが奥様は」
「労咳ですか」
「それにかかっておられます」
そうなっているというのだ。
「今のところは症状はそれ程重くはありませんが」
「しかしですか」
「はい、労咳です」
それは変わらないというのだ。
「まことに残念なことに」
「わかりました」
真理はここまで聞いてだ。
その青ざめた顔で頷きだ。そうしてだった。
そのうえでだ。医師の話を聞くのだった。
「後はです」
「はい、後は」
「養生されて下さい」
労咳が不治の病だということを前提にしての言葉だった。
「ゆっくりと」
「そうするべきですね」
「御大事にとしか」
医師もだ。暗い顔で真理に話す。
「そうされて下さい」
「わかりました」
「御主人でしたね」
医師は今度は義正に顔を向けて声をかけた。
「あの、残念ですが」

「はい、お話は聞いています」
「それではです」
「後は」
義正もだ。医師の話を聞いていた。
その医師はだ。彼にもこう話したのだった。
「奥様の御養生のです」
「助けをですね」
「そうされて下さい」
こうだ。切実に話すのだった。
「それだけです」
「わかりました」
義正もだ。静かに頷いた。
ここまで話してだ。医師は。
今度は二人にだ。こう告げたのだった。
「まだ時間は多くありますので」
「だからですね」
「今は」
「はい。幸せにお過ごし下さい」
これが二人への言葉だった。
「そうされて下さい」
「わかりました」
二人は同時に答えた。頷く動きも同じだった。
「そうします」
「一応お薬もありますので」
不治の病だがだ。それもあるのだ。
高麗人参やそうしたものだ。それもあると話してだ。
医師の話は終わった。それからだった。
二人はだ。病院を出て義正の運転する車の中でだ。こう話をしていた。
まずは義正がだ。真理に話した。

「あの」
「はい」
助手席にいる真理がだ。彼の言葉に応える。
「この結果ですが」
「労咳ですね」
「どう思われていますか」
顔を前にしてだ。妻に尋ねたのである。
「あの、私は」
「義正さんは」
「力を尽くします」
そうするというのだ。彼は。
「あなたの為に」
「そうして下さいますか」
「はい、そうしていいでしょうか」
真理にだ。問うたのである。
「私の。できるだけのことを」
「すいません」
真理はだ。その義正に対してだ。
静かにだ。こう言ったのである。
そしてだ。さらにだった。義正に言うのだった。

第二十二話　消える希望と灯る希望その三

「その御心に添えられません」
「添えられない」
「私は。もう」
もうとだ。義正に話すのである。
「義正さんとずっと一緒にいられません」
「一緒に」
「はい、一緒にはもう」
いられないと言ってだ。そうしてだった。
笑顔だった。だがその笑顔は。
今にも壊れそうな顔になっていた。そして。
その瞳から。黒い瞳から涙を流しだ。頬を伝わせ。
その涙を流しながら。真理は言ったのだった。
「いられません」
「真理さん・・・・・・」
「すいません」
また謝罪の言葉を出す真理だった。
「本当にすいません」
「・・・・・・・・」
義正も言葉がなかった。そうしてだ。
二人は無言で屋敷に帰った。その彼等をだ。
佐藤と婆やが迎える。その二人を見て。
二人はだ。こう言ったのだった。
「あの、お二人共」
「何があったのですか？」
佐藤も婆やもだ。顔を強張らせてだ。
「一体」
「お顔が真っ青ですが」

「いえ、何も」
「ありません」
二人で答える。
「ですから今は」
「御夕食は」
「はい、それでしたら」
「今にもできますので」
佐藤も婆やもだった。二人の言葉にこれといって言わず。
そのうえでだ。こう話したのだった。
「ではです」
「暫くお待ち下さい」
「わかりました」
「では暫くの間」
「音楽でもどうでしょうか」
佐藤は二人にそれを勧めた。
「それを聴かれながら」
「待てばいい」
「そう仰るのですね」
「はい、そうです」
にこやかに笑ってだ。二人に答えたのである。
その二人の言葉を聞いてだ。義正がだ。
最初にだ。微笑みを作って応えた。
「それでは」
「何を聴かれますか？」
「レコードを幾つか置いておいて下さい」
「御自身で選ばれますか」
「そうさせてもらいます」
これが義正の返答だった。
「それで宜しいでしょうか」
「はい」

佐藤はだ。ここでもだった。
二人のことには気付かずだ。自分の主に対してにこやかに答えたのだった。
「では蓄音機の側に何枚か置いておきますので」
「うん、じゃあね」
佐藤には砕けて返した。そうしたやり取りからだ。
二人は部屋に入りそこでだ。音楽を聴くことにした。その中でだ。
義正は真理に顔を向けてだ。まずはこう言った。
「ではおかけ下さい」
「席にですね」
「休まれて下さい」
彼女を気遣ってだ。それでの言葉だ。

第二十二話　消える希望と灯る希望その四

「そうされて下さい」
「有り難うございます。それでは」
「音楽は何がいいでしょうか」
「そうですね。今は」
「はい、今は」
「どうした曲があるでしょうか」
曲からだ。義正に尋ねたのだった。
「それをお聴きしたいのですが」
「色々ありますが」
「具体的には何が」
「これは」
ここでだ。義正は。
レコード、その蓄音機の側に置かれている数枚のレコードのうちの一枚を見てだ。顔を曇らせた。そのうえで困った声を出したのである。
「いけませんね」
「何があったのですか？」
「葬送行進曲です」
そうした名前の曲があったというのだ。
「これはいけません」
「葬送行進曲ですか」
「ワーグナーの曲です」
二人が時折話して聴くだ。独逸の音楽家のものだというのだ。
「その彼の曲ですが」
「それがその葬送行進曲ですか」
「はい」
義正は曇った顔で答える。

「いい曲ですが今は止めておきましょう」
「聴くことをですね」
「聴くべきではありません」
実際にそうするべきだと。義正は言った。
「もっと明るい曲にすべきです」
「ですか」
「はい、そうすべきです」
真理の身体、そして気持ちのことを気遣いだ。こう言ったのである。
「今は」
「ではどうした曲を」
「そうですね。それでしたら」
「他にどんな曲がありますか？」
「ベートーベンがあります」
またしても独逸の音楽家だ。国は同じだ。
「その運命という曲ですね」
「運命ですか」
「はい、運命です」
それがあるというのだ。
「かなり派手な曲ですが」
「そこまで派手なのですか」
「聴かれたことはありませんか」
「ベートーベンはあまり」
二つ並んで置かれている椅子の左手に座っている。その真理が答える。
「聴いたことがないので」
「そうですか」
「では」
真理はだ。少し考えてからだ。
そのうえでだ。こう義正に答えた。

「その曲で御願いします」
「運命でいいのですね」
「はい」
こくりと頷いてだ。そのうえで答えたのだ。
「それを聴かせて下さい」
「わかりました。それでは」
義正も頷きだ。そしてだ。
レコードを蓄音機にかけだ。そうしてだった。
二人で聴きはじめる。その中でだ。
彼も空いている席に座った。そうして二人並んでからだ。
義正にだ。こう言う真理だった。
「この曲ですが」
「派手ですね」
「ただ派手ではありませんね」
その重厚な響きの音楽を聴きながらだ。
そのうえでだ。真理は話すのだった。
「その中にえも言われる強さがありますね」
「それも感じられますか」
「感じます」
そうだとだ。真理は聴きながら話す。

第二十二話　消える希望と灯る希望その五

「運命ですね」
「それがこの曲の名前です」
「そうですか。運命ですか」
曲の名前を再び聞きだ。そうしてだった。
少し考える顔になりだ。真理は話した。
「運命。私の運命は」
「それは」
「死です」
それはもう逃れられない。言うのはこのことだった。
そのことを思わずにはいられなかった。しかしだ。
ここでだ。真理はこうも言ったのだった。
「しかしですね」
「しかしとは」
「人は必ず死にます」
この考えをだ。ここで義正に言ったのである。
「生きているならば必ずですね」
「はい。人は」
真理のその言葉にだ。義正もだった。
あらためてだ。こう述べたのだった。
「それから逃れることはできません」
「どの様な方でも必ず」
「死にます」
義正はあえて言った。このことを。
「それはどうしようもありません」
「ではです」
「それでは」
「労咳であろうとも」

今だ。真理は吹っ切れたのだった。
その吹っ切れたものでは。言うのだった。
「人は必ず死にますから」
「だからですか」
「私は落ち込むべきではないですね」
こう言ったのである。
「何があろうとも」
「そう思われるのですか」
「思っただけです」
そうだというのだ。
「それだけです」
「ですか」
「はい。ですがそれでも」
真理は話していく。言葉を少しずつ出しながら。
「私は前を向いて進むべきですね」
「それが今思われていることですか」
「難しいです」
特にだ。今の気落ちしている彼女にとってはだ。
そうだとだ。今話したのだった。
だがそれでもだとだ。顔を少しだけあげて。
そうして。義正に話した。
「ですが。私はそれでも」
「前にですか」
「進みたいです。そして」
義正も見た。隣に座っている夫を。そのうえでの言葉だった。
「あなたと共に」
「二人で、ですね」
「これまでお話した様に」
はじめて会い紆余曲折があり結ばれて。今に至ることを思い出し。
真理はだ。今義正に話したのだった。

「私は義正さんと共にいたいです」
「私もです」
彼も同じだ。しかしだ。
それができなくなったこともわかっているからだ。彼も気持ちを沈ませていた。
だがだった。それでもだった。
真理はだ。言ったのだった。
「ですから。この命が終わるまで、です」
「私と共に」
「いたいです。そう思います」
「そしてそれが」
「私の運命です」
それでもあるというのだ。その運命を聴きながらの言葉だった。

第二十二話　消える希望と灯る希望その六

「ですから」
「そうですね。人は必ず死にます」
前にも話したことを思い出しながら。義正も述べた。
「では」
「はい、それでは」
「私もです」
「私と、ですね」
「共にいたいです」
こうだ。その真理に話したのである。
「そうして宜しいでしょうか」
「はい」
真理はだ。少しだけ微笑んでだ。
それでだ。こう答えたのだった。
「御願いします」
「有り難うございます。私もです」
「義正さんもですか」
「運命ですね」
義正もだベートーベンのその曲を聴きながら言ったのだ。
「それですね」
「義正さんの運命ではありますか」
「運命は一つではないのでしょう」
義正はこんなことも話した。
「互いに絡み合い影響し合うものです」
「そして運命は運命となりますか」
「そうだと思います」
義正は真理の考えからだ。そこに至ったのだ。
だからこそだ。その彼女に話したのである。

「では」
「はい、それでは」
「私も共にいます」
そうするというのである。
「そうさせてもらいます」
「有り難うございます。では」
「それでは」
二人で微笑み合いだ。それから。
そのうえで。今は。
運命を聴いた。そのベートーベンの曲をだ。
聴きながらだ。それで話すのだった。
「この曲は」
「ベートーベンの代表作と聴いていますが」
「そうです」
微笑みだ。義正は真理に話す。
「彼の代表作です」
「こうした重厚といいますか」
「低く、それでいて激しい曲ですね」
「そうです。何故こうした曲になったのか」
「それはどうしてなのですか？」
「彼は耳が悪かったのです」
後世あまりにも有名になることだ。
「聴こえなくなっていったのです」
「耳がですか」
一説には梅毒のせいだと言われている。この病もまたこの時代においても不治の病だった。あまりにも無残な最期を遂げた者も多い。
その病のせいでだ。彼の耳は駄目になったとも言われているのだ。
しかし義正もそのことは知らない。それでだ。
真理にだ。こう言うのだった。
「原因は謎ですが」

「それでも耳がですか」
「はい、最後には聴こえなくなりました」
全くだ。そうなってしまったのだ。
「音楽家だというのにです」
「それで音楽家をしていくのは」
「普通に考えてできません」
音楽は耳で聴くものだ。しかしその耳が駄目になってはだ。音楽を創り出す音楽家をできる筈がない。普通はそう考えるものだ。

第二十二話　消える希望と灯る希望その七

だがだ。ベートーベンはそれでもだったのだ。
「しかし彼はです」
「それでもですか」
「こうした曲を作曲していったのです」
「この運命もまた」
「一時は死を考えたそうです」
自殺をだ。しかしだったのだ。
「ですが思い止まりです」
「こうした名曲を生み出していったのですか」
「そうしました」
「そうですか。それがベートーベンの」
「運命でした」
必然的にだ。話はそこに至った。ここでだった。
運命が終わった。それを受けてだ。
義正は席を立ち蓄音機の方に向かった。そこでだ。
新しいレコードを選ぼうとする。そこで目に入ったのは。
「これは」
「何かいい曲があるのですか？」
「ウェーバーがあります」
「ウェーバーですか」
「はい、独逸の音楽家です」
またしてもだ。独逸だった。素晴らしい音楽家を数多く輩出しているのがこの国なのだ。この時代の日本でもその為に独逸を崇拝する者は多かった。
「彼の曲ですが」
「今度はそれをですね」
「どうされますか？」

真理に顔を向けてだ。彼女に問うた。
「ウェーバーにされますか？」
「曲は何でしょうか」
「魔弾の射手です」
まずはこう答えた義正だった。
「それの序曲と。それに」
「それに？」
「同じく魔弾の射手からです」
そこからだ。もう一曲あるというのだ。
「狩人の合唱です」
「その二曲がですか」
「レコードに入っていますがどうされますか？」
「では」
少し考えてからだ。真理は。
こうだ。義正に答えたのだった。
「そのレコードにさせてもらいます」
「左様ですか」
「はい、それでは」
「今からかけますね」
「御願いします」
こうした軽いやり取りからだった。そのレコードが蓄音機にかけられる。レコードの針が伝いながらだ。音楽を出していくのだった。
その序曲は。聴いていると。
森の中にいる様な感じになった。それを感じだ。
真理はだ。こう義正に話した。
「今度は不思議な曲ですね」
「これは歌劇の序曲でして」
「歌劇のですか」
「はい。そのウェーバーの作曲した歌劇の作品です」
その歌劇がだ。魔弾の射手だというのだ。

「それなのです」
「そうなのですね」
「そうです。そして」
「そして？」
「彼もです」
こうだ。真理に対して話すのだった。
「彼もまた真理さんと同じでした」
「私と同じということは」
「労咳でした」
そうだったというのだ。ウェーバーもまただ。真理と同じ病だったというのだ。義正はこのことをだ。彼女に対してだ。あえて話したのである。
「ですがそれでもです」
「この曲を作曲したのですね」
「そうです。気力を振り絞って」
そうしたと。真理に話した。

第二十二話　消える希望と灯る希望その八

「最後の最後まで」
「では」
「そうされるのですね」
「決めています」
運命の時にだ。それはもうしていたというのだ。
そのうえでだ。真理は再び義正に話した。
「ですから」
「わかりました。では」
「二人で」
「はい、二人で一生いましょう」
こうしてだった。二人はだった。
その魔弾の射手の曲を聴き続ける。その中でだ。
序曲が終わりだ。次の曲だった。
合唱だった。勇ましく雄々しい曲だ。その曲を聴いてだ。
真理はだ。また言ったのだった。
「元気が出る曲ですね」
「そうでしょう。この曲は」
「何か。聴いているだけで」
「心が弾みますね」
「そうなります」
まさにそうだとだ。真理は義正に答えた。
「心から」
「私もです」
そしてそれはだ。彼も同じだというのだ。
「そうなります」
「左様ですか。義正さんも」
「はい」

こくりと頷いてだ。義正は答えた。
「そうした曲はワーグナーにも多いのですが」
「このウェーバーにもですね」
「こうした曲が多いのです」」
「そうですか」
「残念ですが彼はワーグナーより長くは生きられませんでした」
四十でだ。その労咳の為になのだ。
「ですがそれでもです」
「残してくれたのですか」
「その通りです」
「そうなのですか」
「しかしそれでもです」
「これだけの音楽を残してくれた」
労咳で死んでもだ。そうした。ウェーバーはそうしたとだ。
真理は知ってだ。そして義正に話した。
「では私も」
「同じことをされますか」
「そうしたいと思います」
これが彼女の決めたことだった。
「そうさせてもらいます」
「では」
「はい、それでは」
「明るくなることはまだ難しいですが」
それでもだというのだ。
「前に進まさせてもらいます」
「そうされますね」
「はい、そうします」
その決めたことをまた話すのだった。
「では今は」
「音楽が終われればどうされますか」

「御風呂の時間でしょうか」
部屋の中の時計を見た。独逸製の黒い樫の木の時計だ。
その時計のだ。古典的な西洋の数字を見てだ。義正に話すのだった。
「そこで今日の疲れを取って」
「それからですね」
「休まさせてもらいます」
そうするというのだ。
「今日は」
「それもいいですね」
「お風呂はいいものですね」
「心が落ち着き」
さらにだと。義正は話す。
「そして疲れが取れます」
「非常にいいものですね」
「入浴は西洋でもありますが」
「何処にでもあるものではないのですか？」
「あるにはありますが」
「しかしなのですか」
「かつては滅多に入るものではありませんでした」
西洋のそうした事情をだ。義正は真理に話したのだった。

第二十二話　消える希望と灯る希望その九

「それこそです」
「どれだけ入らなかったのでしょうか」
「何年もです」
実際にそうだったことをだ。真理に話したのだった。
「何年も入らなかったことが普通だったのです」
「それはまことですか？」
「はい、事実です」
「それで我慢できるのでしょうか」
顔を曇らせてだ。真理は言った。
「我が国ではそうした人はあまり」
「いないと思います」
「そうですね。とても」
「我が国では毎日にでも入る人もいますから」
真理もそうである。女としてだ。身だしなみに気をつけてのことだ。
「ですから」
「しかし西洋ではそうではなかったのです」
「何か事情があったのでしょうか」
「水が我が国に比べて貴重で」
「そのせいでしょうか」
「水の質も違ったのです」
それも違ったというのである。水の質もだ。
「西洋の水は硬水といいまして」
「硬水？」
「はい、硬水です」
そうした水だというのである。西洋の水は。
「それは身体に浴びたり浸るには不向きなのです」

「水といっても色々なのですね」
「ですから」
「だからなのですね」
「西洋では入浴は滅多にしないことだったのです」
「それにしても何年とは」
「英吉利の女王だったエリザベス女王ですが」
この頃はこの名前の女王は一人しかいなかった。もう一人のエリザベスが現われるのは後世になってからだ。それで一世になったのである。
「その女王も年に四回入るだけで」
「それでも非常に少ないのでは？」
「しかしそれで極めて入浴好きで清潔だと思われていたのです」
「国の主ですらですか」
「そこは日本とは違うのですね」
「全く違います」
まさにだ。そうだったというのだ。
「西洋の文明は確かに華麗ではありますが」
「そうした私達からは信じられない一面もあるのですね」
「どの文明でもそうしたものはありますね」
「確かに。言われてみれば」
「しかし我が国は入浴はです」
義正はここではその入浴に絞って話した。
「毎日の様にできますね」
「はい、有り難いことに」
「それは素晴らしいことだと思います」
義正は笑顔で述べた。
「では今から」
「入ってきます。有り難いことに」
「有り難いことにとは」
「この屋敷の御風呂は和風にされたのですね」

洋館だがだ。風呂はそうしているのだ。
「やはり御風呂はですか」
「はい、和風がいいと思いましたので」
そうしたとだ。義正は微笑んで真理に話した。
「そうしたのです」
「成程。それでなのですね」
「私個人の好みですが」
こう前置きしてからだ。義正はこのこともだ。真理に話した。
「御風呂はやはり」
「和風ですか」
「それが一番落ち着き癒されます」
それでだ。和風にしたというのだ。
「ですから」
「そうですね。それは」
「それはですか」
「私もです」
真理もだ。こう答えたのだった。

第二十二話　消える希望と灯る希望その十

微笑みだ。そのうえでの言葉だった。
「やはり御風呂はです」
「和風ですか」
「あの檜の御風呂が」
そうなっているのだ。この屋敷の風呂は。
「とてもいいです」
「ではその檜の御風呂で」
「身体を癒してきます」
真理は答えた。
「心も」
「そうですね」
義正もだ。真理のその言葉をよしとした。
そうしてだ。彼女にまた話したのだった。その話すこととは。
「時間があれば」
「時間があれば？」
「それが零ではない限り」
哲学者を思わせる顔になってだ。そうして語る言葉だった。
「人はその時間が終わるまでです」
「それまで、ですか」
「何かをするべきです」
「では私達も」
「その時が終わるまでです」
こうだ。真理に話した。
「共にいましょう」
「そうですね。それでは」
「時間はまだあります」
二人にとってもだ。零ではなかった。義正は言うのだ。

「ではその時間がある限り」
「それまでの間」
「共にいましょう」
「はい。それでは」
「時間は。辛く過ごすものではなく」
さらにだった。義正は述べた。
「楽しく過ごすものですね」
「そうですね。それは決して」
「辛く過ごすものではありません」
今度言ったのはこのことだった。
そのことを言ってだ。義正は。
明るい笑顔になり、作ってだ。真理に顔を向けたまま。
その顔で。また言ったのだった。
「では私も後で」
「入られますか」
「そうさせてもらいます」
風呂にだ。そうするというのだ。
そうした話をしてだ。真理は。
気をそれなりに楽にさせて。そうして。
風呂に入りだ。湯舟に浸かる。その温かい湯の中で。
微笑みだ。こう呟いたのだった。
「私は一人ではない。何と有り難いことでしょうか」
義正のことを呟き。それでだった。
身体を清め心を癒してだ。風呂を楽しんだのだった。
それが終わってからだ。服を着てだ。
義正にだ。その微笑みで義正に告げた。
「次は」
「はい、それでは」
「そういえばお風呂は最初は殿方が入られるものですが」
「そうですね。そうした場合もありますね」

「それはいいのでしょうか」
「私はこだわらないです」
そうした考えはないというのだ。義正にはだ。
「特に」
「それはどうしてでしょうか」
「誰が入ろうがお風呂はお風呂だからです」
そうした考えだからだというのだ。
「ですから。誰が先に入ろうともです」
「変わりはないからですね」
「ですから」
「左様ですか」
「だからです」
義正はそれでだと話してだ。

第二十二話　消える希望と灯る希望その十一

席から立ちだ。そうして。
彼も風呂に入りに行く。その途中でだ。
真理に顔を向け。笑顔でこう告げた。
「では。お風呂の後で」
「その後で」
「少し飲んでから」
「お酒を飲まれてから」
「あのベッドで眠りましょう」
「幾ら何でもそれは」
労咳は感染する。伝染病であることは古来から知られている。それが為にだ。古来は労咳にかかり座敷牢に閉じ込められたものだ。
それでだ。真理はだ。
流石にそれはだと。義正に顔を曇らせて言った。
「無理です」
「無理だと言われますか」
「義正さんに迷惑がかかります」
「いえ、それを言えばです」
「言えば？」
「誰もが同じです」
こう言ったのだ。誰もがだとだ。
「我が国には不幸にして数多くの労咳の患者がいますね」
「それはその通りですが」
「その人達と側にいるだけで労咳になるのなら」
「誰もがですか」
「我が国は全て労咳に覆われてしまいます」
いささか強引だと思っていてもだ。それでもだ。
義正はだ。ここではこう言うのだった。

「ですから。夜共にいてもです」
「いいのですか」
「はい。ですから」
「わかりました。では」
「これまで通りです」
夫婦としてだ。そこはだというのだ。
「夜も共にいましょう」
「そうさせてもらいます」
こうしてだった。二人はだ。
夜も共にいることにしたのだった。実際に同じベッドで眠るのだった。
その翌朝もだ。二人でだ。
白い日の光がこれまた白いカーテンを照らしている部屋の中でだ。テーブルに向かい合って座りだ。その席においてこんな話をするのだった。
「朝も同じですね」
「これまで通りですね」
「そうして過ごせばいいのです」
それだけだというのだ。
「それで今朝の食事ですが」
「この洋食ですね」
「英吉利風の食卓です」
目玉焼きに焼いたベーコン、ボイルドベジタブル、それにトーストに紅茶だ。そのメニューを見てだ。ナイフとフォークを手にしながら。
義正はだ。そのイギリス風の食卓について話した。
「あの国は欧州では食事は悪いと言われていますが」
「それでもですか」
「朝食はいいと言われています」
このことは後に誰もが言うことであった。

「それでこうも言われています」
「こうとは？」
「英吉利では三回の食事は全て朝食でいい」
こう言われているというのだ。
「朝食だけが美味しいから」
「何か随分な言われ方ですね」
その話を聞いてだ。真理は。
思わず苦笑いになってだ。それで言ったのだった。
「朝食だけとは」
「ただ。面白いことにです」
「面白いこととは？」
「ビーフシチューですが」
義正は今度はこの料理の話をした。
「あれは英吉利の料理です」
「あれは美味しいと思いますが」
「カレーもあの国から伝わりました」
印度を植民地にしているだ。英吉利からだというのだ。
「あの料理もです」
「カレーもなのですか」
「そうしたことを見ると英吉利も料理がいいと思えますね」
「はい、確かに」
「けれど違うのですか」
「そう言われています」
「おかしな話ですね」
真理は義正のその英吉利料理の話を聞いてだ。

第二十二話　消える希望と灯る希望その十二

それでだ。首を傾げさせてだ。
パンを食べつつだ。こう呟く様にして言った。
「そうしたものがあって。他には」
「他にはですね」
「ビーフソテーやステーキも英吉利だったのでは」
「はい、そうです」
「しかし料理は美味しくない国なのですか」
「そう欧州各国から言われています」
とりわけ仏蘭西からだ。英吉利のことは常に悪く言う国だ。しかし料理のことはだ。事実であるというのはだ否定できないことだった。
しかし何故そうした料理が日本で好評なのか。それは。
「それは海軍だからです」
「海軍だから」
「そう。英吉利海軍はです」
そのだ。英吉利海軍ならばだというのだ。
「料理がいいのです」
「海軍といえば船ですね」
真理はすぐにそのことを察して述べた。
「船の中だと」
「外には出られず入浴もままなりません」
とかくだ。ストレスの溜まるのが船の中である。航海にはそうした苦労も伴うのだ。
だがその中にいればだ。どうなるかというのだ。
「ですから食べることに楽しみを求めますので」
「それでお料理がよくなったのですか」
「はい」

そうだとだ。義正は微笑んで答えた。
「そうなるのです」
「それでなのですか」
「ビーフシチューにカレー、そういったものは海軍から入りました」
帝国海軍からだ。臣民の口に入るようになったのだ。
「帝国海軍は英吉利海軍に教わったので」
料理もだ。そのロイヤルネービーから学んだというのだ。
「そうなのです」
「成程。海軍はですか」
「料理がいいのです」
「では海軍では朝食だけではないのですね」
「どの食事もいいのです」
昼食も夕食もだ。いいというのだ。
「しかも食事中には音楽も奏でられました」
「それはまた豪勢ですね」
「そうですね。食事に音楽が加わるとなると」
「それが英吉利海軍ですか」
真理はそこにだ。憧れを見た。
そのうえでだ。今度はボイルドベジタブルを食べた。そうしてだ。
その野菜にもだ。こう言ったのだった。
「では。今は」
「今はですね」
「海を見たくなりました」
そのだ。海軍の海をだというのだ。
「また機会があれば海に行きたいですね」
「そうですね。確かに」
「山にも」
海だけでなくだ。山にもだった。
考えを及ばせてだ。そして言ったのだった。
「行きたいですね」

「何処にもですね」
「二人で」
このことは外せなかった。どうしてもだ。
そうした話をしてだった。二人はだ。
英吉利の食事を楽しんだのだった。楽しみをだ。真理は次第に思い出してきていた。

第二十二話　完

２０１１・８・２２

第二十三話　告白その一

真理は明るさを取り戻した。その彼女を見てだ。
婆やはまずは微笑みだ。彼女に言うのだった。
「御気持ちを取り戻されたのですね」
「はい」
真理自身もだ。微笑んでだ。
そのうえでだ。婆やにこう答えた。
「お蔭で」
「それは何よりです」
「二人でいますので」
義正とだ。そうするというのだ。
「これからも」
「そうですね。そうされて下さい」
「いられる限りは」
不意にだ。真理は。
こんなことも言った。その言葉にだ。
婆やは少し気付いてだ。こう彼女に問い返した。
「今何と仰いましたか？」
「何かとは？」
「いられる限りとは」
その言葉についてだ。問い返したのだ。
「それはどういう意味でしょうか」
「それは」
真理はここで失言に気付いた。それでだ。
戸惑いながらだ。こう婆やに答えた。
「ずっと。いたいと思いまして」
「そうした意味ですか」

「はい」
こういうことにしたのだった。咄嗟に。
「ですから」
「そうですか。そうなのですね」
「そうです。それで」
「それで？」
「今日ですが」
話を誤魔化す為にだ。また咄嗟にだ。別のことを話したのだった。
「旦那様は」
「今日は遅くなられるそうです」
「そうなのですか」
「御仕事で。大阪の政界の方々と会われるとのことで」
「だからですね」
「そうしたことも御仕事ですので」
ただ計画を立てたりそれを実行に移すだけが仕事でないというのだ。
「それで料亭に行かれるとのことです」
「神戸のですね」
「はい、八条家所縁のお店です」
その店で彼等と会ってだというのだ。
「お話をされるとのことで」
「わかりました。では今夜は」
「どうされますか？」
「待たせてもらいます」
微笑んでだ。真理は話した。
「そうします」
「ご夕食をですか」
「それで宜しいでしょうか」
「遅くなると思いますが」
婆やはこのことをだ。真理に注意して話した。

「それでも宜しいのですか？」
「はい、そうさせてもらいます」
やはりだ。そうするという真理だった。
「待たせてもらいます」
「左様ですか」
「そうします。では」
こうしてだった。真理はこの日は待つことにした。どんな状況でも義正と共の時間を過ごしたい、そう心から思ってのことだった。
そして義正は。この日の夜だ。
奥座敷にいた。そこで品のいい顔立ちの二人の老人と会っていた。
畳に掛け軸、そして見事な陶器に奇麗な花も飾られている。
その部屋でだ。彼はだ。
絹の見事な和服を着た二人の老人達にだ。こう言われていた。
「この店は確か」
「あの人も来たそうだね」
「幕末の志士のですね」
義正もだ。二人の言葉にだ。すぐに返した。

第二十三話　告白その二

「清河八郎ですね」
「京で活動をする傍らで」
「この神戸にも来てだったらしいね」
「そして同志達と会っていた」
「そう聞いたが」
「はい、あの頃はです」
その通りだと認めてからだ。八条は彼等に話した。
「我が家も事業をはじめたばかりで」
「初代が幕末に事情をはじめられ」
「料亭を開かれた」
「商売の一つとして」
「そうしたと聞いているけれど」
「そうです。初代は幾つか事業をはじめましたが」
それだけの資産がだ。最初からありはしたというのだ。八条家は江戸期においてもだ。幾分かそうした資産を持っていたのである。
それでだ。幕末になり時代が動いた時にだ。事業をはじめたというのだ。
それを話してだ。彼は言うのだった。
「この店を神戸に開いたのです」
「港のこの町に」
「中々面白い識見だね」
「そう言って頂けますか」
「しかも料理人は京都から呼んで」
「そうして京料理を神戸にもたらした」
「初代は京料理が好きでした」
京料理は江戸期から評価が高い。その素材を生かした上品な味をだ。

神戸にもたらした。初代はそうしたというのだ。
「それでなのです」
「京料理ね。実は私達もね」
「時々食べているよ」
二人もだ。そうしているというのだ。
「京都に行くことも多いからね」
「その時はいつもだよ」
「左様ですか。それではですね」
「うん、この店の味もね」
「聞いてはいるけれど実際にはどうなのか」
「それが楽しみでね」
「ここまで来させてもらったよ」
「ではお楽しみ下さい」
自信のある笑みでだ。義正も応えた。そうしてだった。
豆腐や野菜、それに明石から仕入れた魚や鴨を使った懐石料理が出されてきた。そうしたものを箸に取り口の中に入れてだ。
湯葉を食べてだ。老人の一人が言った。
「ふむ。これは」
「如何でしょうか」
「いいね。まさにだよ」
どうかというのだ。その湯葉は。
「京都の味だよ。しかもね」
「しかも？」
「神戸の素材だね」
素材が何処かもだ。老人は食べて見抜いたのだ。
そのうえでだ。こう言うのだった。
「京料理だけれど神戸の素材は殺していないね」
「左様ですか」
「確かに。これは」
もう一人の老人も言ってきた。彼はというと。

鱧の吸い物を飲んでいる。それを飲みながら言うのだ。
「この鱧も見事です」
「明石の鱧です」
「そうだね。京都でも食べられるが」
京都は昔から魚はそこから手に入れるのだ。
「けれど新鮮で」
「さらにいいですね」
「いいね。柚子も聞いていて」
それもだ。いいというのだ。
「見事だよ」
「有り難うございます。料理人も喜びます」
「京料理を神戸に持って来ただけではない」
「そこにだね」
まだあるというのだ。

第二十三話　告白その三

「神戸の味も採り入れた」
「素材から」
「そうです」
その通りだとだ。こう答える義正だった。
そうした話をしてからだ。彼はだ。
二人の老人達にだ。こう話したのだった。
「それで今日のことですが」
「そう、君達八条財閥が大阪に建てる百貨店」
「それに路線を増やすそうだね」
「はい、そのことです」
そのことについての話だった。
「そのことですが」
「こちらとしてもその話はいい話だよ」
「両方共ね」
百貨店も鉄道もだというのだ。
そしてだ。あらためてだ。二人はこんなことも話した。
「国鉄はねえ。融通が利かなくて」
「駅とその周辺の開発がしにくいんだよ」
そこが難点だというのだ。国鉄は。
「国策としての鉄道は絶対に必要だとしてもね」
「ただ。国策として敷くだけだから」
「駅とその周辺の開発はね」
「どうもしにくくて」
「その点は仕方ないですね」
このことはだ。義正も知っていた。
国鉄は国策として線路を敷き物資、それに人を運ぶ。全ては産業の発展を支える為だ。それが国家を動かすからだ。敷かれるのであ

る。
しかしだ。国鉄はそこで終わる一面が強い。それが問題なのだ。
それに対してだ。私鉄はだった。
二人の老人がだ。こう話すのだった。
「その点私鉄はね」
「採算は重視するがそれでもね」
「駅とその周辺に百貨店も置けるし」
「それに他のものもね」
「開発できるからね」
「そこがいいんだよ」
「はい、その通りです」
まさにそうだとだ。義正は会心の声で答えた。
そしてだ。さらにだった。
彼はだ。こうも話すのだった。今度話すことは。
「百貨店のことですが」
「あれはいいね」
「一つあれば違うよ」
唸る様にだ。二人の老人は話す。
「あれだよ。町が一つそのまま一つのビルにあるような」
「そんな感じだからね」
「だから実にいい」
「あればそれだけで随分違うよ」
「巴里にかなりの百貨店があると聞いています」
義正は仏蘭西、日本から見れば夢の様にみらびやかなその国の首都を話に出した。
「何時かは巴里のそれに匹敵するです」
「そうした百貨店をだね」
「我が国に置きたいというのだね」
「そう思っています。それもです」
そしてだ。さらにだというのだ。

「この関西に置きたいです」
「東京ではなくか」
「この関西に」
「はい。そう思っています」
また答える彼だった。
「大阪、京都」
「そして神戸に」
「三つの都に」
「できれば奈良にもです」
もう一つの都の名前も出て来た。関西の四都だ。
「全てに置きたいと考えています」
「つまり四つの都全てに八条鉄道の路線を敷く」
「それが君の考えなのか」
「八条財閥の考えです」
彼の考えでなくだ。財閥全体の考えだというのだ。

第二十三話　告白その四

「そしてその心臓をです」
「大阪にしたい」
「そう言うのか」
「はい」
二人にだ。彼ははっきりと頷いて答えてみせた。
「そう考えています」
「では聞きたいのだが」
二人のうちの一人がその答えに尋ね返してきた。
「その理由は何かね」
「心臓を大阪に置く理由ですか」
「君達八条財閥の本拠地は神戸にある」
ここからだ。その老人は尋ねたのだ。
「本来なら鉄道の中心は大阪ではなく神戸に置くものではないかね」
「確かにそうですな」
もう一人の老人もその老人の言葉に応えて頷く。
「八条財閥の心臓はそこにあるのですから」
「しかしその神戸ではなく大阪に置くという」
老人は再び義正に尋ねる。
「それは何故なのだろうか」
「そのことですね」
「そのことを聞きたい」
「そしておそらくだ」
もう一人の老人もだ。彼に尋ねてきた。
「そのことがこの会合を設けた理由なのだろう」
「その通りです」
その老人の問いにだ。義正はその通りだと答えた。
「それが為にです。御二人には今日ここに来て頂きました」

「成程。やはりな」
「それでか」
「そうです。それで鉄道の中心を大阪に置きたい理由ですね」
今度は自分からだ。言ってきたのだった。
「そのことですね」
「答えてもらえるだろうか」
その老人はがんもどきを食べながら問うた。
「君の、八条財閥の答えを」
「大阪が最もよいからです」
まずはだ。こう答えた彼だった。
「だからです」
「大阪が最もいい」
「はい、いいです」
まさにだ。そうだというのだ。
「だからこそです」
「大阪がいいのか」
「まずは交通の便です」
鉄道の最大のポイントだ。
「大阪は関西の中心にありそして」
「そしてか」
「そうです。そしてです」
「そしてか」
「さらにあると」
「大阪は栄えています」
それも理由だというのだ。
「関西で最も」
「そう、大阪は関西第一の街だよ」
「何につけてもね」
大阪人としてだ。彼等もだ。
満面に笑みを浮かべてだ。こう言うのだった。

「東京にもやがては」
「追いつき追い越す」
「ここは天下の台所」
「そうなっていくからな」
「はい、ですから」
だからこそだとだ。義正も笑顔で話す。
「鉄道は大阪に拠点を置きたいのです」
「だからこそ君達の拠点である神戸ではなく」
「あえて大阪をと」
「そうです。大阪です」
また答える彼だった。
「そうしたいのです」
「交通の要衝で人も多い」
「産業も栄えている」
「その大阪を選んだ」
「理由は全てわかった」
彼等もだ。義正の話にだ。

第二十三話　告白その五

納得した顔になりだ。頷いた。
そうしてだ。二人でこう義正に言ってきたのだった。
「それならだ。大阪のな」
「食べ物も広めてくれるだろうか」
「大阪のですね」
「大阪は昔から美味しい食べ物が多い」
「まさに天下一品のだ」
この頃から大阪は食の都と言われていたのだ。これが江戸時代からでだ。豊かな食材を使ってだ。様々な料理が発展してきたのだ。
その料理については二人は義正に話すのだ。
「それを関西全てに広めて欲しい」
「こちらとしてはそうして欲しい」
これが彼等の願いだった。
「大阪に拠点を置いてくれるのなら」
「そこから」
「勿論です。ただ」
「ただ？」
「ただというと」
「大阪のものだけにしたくはありません」
義正は微笑みだ。二人の老人に述べた。
「関西の全ての食べ物をです」
「広めたい」
「そう考えているのか」
「この京料理にしてもです」
彼等が今食べているだ。その京料理にしてもだというのだ。
「今神戸で食べていますね」
「それと同じようにかい」

「関西全土の料理をあらゆる町で食べられる様にしたい」
「それが君の考えなのか」
「大阪だけではなく」
「鉄道はあらゆるものをつなぎます」
ただ地域と地域をつなげ人を移動させるだけではないというのだ。
「ですから。神戸に京都、奈良に滋賀に和歌山」
「まさに関西全域か」
「八条財閥が目指すのは」
「そして三重も入れます」
この頃からだ。三重も次第に関西に入れられていっていた。基本は東海だがそれでもだ。関西にも含まれるようになっていたのだ。
その三重についてもだ。義正は話した。
「二府五県をです」
「つなげてか」
「あらゆる食べ物を」
「食べ物だけでなく」
義正の語るものはだ。さらに大きくなった。
「他の文化もです」
「一つにする」
「鉄道により」
「そして百貨店でもです」
百貨店もだ。それに使うというのだ。
「そうして関西の全ての文化をそれぞれの場所で広めたいのです」
「大きいな、わし等が考えていた以上だ」
「そこまで考えていたのか」
「はい」
その通りだとだ。義正は微笑んで答えた。
「如何でしょうか」
「見事だ」
「そう言うしかない」

これが彼等の返答だった。
「どうやら君も八条財閥もだ」
「わし等が思っていた以上に遥かに大きいな」
「そうか、関西全土をか」
「一つにか」
「今はまだ計画だけです」
机上のことに過ぎないというのだ。今の時点では。
「しかし。線路を敷きです」
「計画は進めていくのか」
「順調に」
「その為に線路の広さも統一しています」
もうだ。それもしているというのだ。

第二十三話　告白その六

「土地の買い取りも進めています」
「関西全土のか」
「それも」
「そうです。線路の場所も駅の場所も」
その双方をだというのだ。
「進めています」
「では資金は」
「それは」
「用意しています。必ずです」
だからだというのだ。全ての準備ができているからこそ。
「八条財閥はやり遂げます」
「よし、ならばだ」
「我々もだ」
老人達もだ。その声がだ。
若返ったかの様にうわずっている。その声でだ。
義正にだ。言ったのだった。
「君達に協力しよう」
「喜んでだ」
こうしてだった。会合はだ。
義正にとって満足いくものになった。それが終わってからだ。
彼は屋敷に帰った。そこにはだ。
真理が待っていてだ。微笑んでこう声をかけてきた。
「御帰りなさいませ」
「うん、只今」
「御待ちしていました」
笑顔でだ。真理は言ってだった。
そのうえでだ。彼女はこう義正に話してきた。

「御夕食は」
「それは」
「召し上がられてきましたね」
「実は」
隠さなかった。真理に対して。
「悪いですが」
「左様ですか」
「けれど。少し小腹が空いたよ」
微笑んでだ。そういうことにした彼だった。
そのうえでだ。真理に笑顔で話した。
「だから何か食べましょう」
「はい、それでは」
「僕はお茶漬けを」
それを食べたいというのだった。食べやすいものをだ。
「けれど真理さんは」
「私は」
「何を食べるのでしょうか」
微笑んでだ。こう彼女に尋ねた。
「真理さんは真理さんの食べたいものを」
「召し上がって宜しいのですか」
「人はその財政が許せば」
それならばだというのだ。
「何を食べてもいいですから」
「だからですね」
「そう。そうなったから」
時代がだ。そうさせたというのだ。
「だから」
「では私は」
「真理さんは？」
「お茶漬けを」

微笑んでだ。それをだというのだ。
「それを頂きます」
「いや、それだと」
「同じですね」
「それでいいのでしょうか」
少し戸惑いながらだ。義正は真理に尋ね返した。
「僕はかなり食べてきましたが」
「私は、ですか」
「お茶漬けだとあまり」
食べられないのではないかというのだ。
「それでもいいのでしょうか」
「おかわりをすればいいですから」
微笑んでだった。真理は。
その笑顔でだ。こう義正に答えたのだった。

第二十三話　告白その七

「ですから」
「だからですか」
「はい、ですから」
また答える真理だった。
「一緒のものを」
「召し上がられたいのですね」
「そうです。では」
「はい、それでは」
二人で言葉を交えてだった。そのうえで。
真理は義正と共にお茶漬けを食べた。そのお茶漬けは。
梅を使ったものだった。それを食べてだ。
真理はだ。微笑んで義正に話した。
「美味しいですね」
「そうですね」
義正もだ。その微笑みで真理に応えた。
「とても」
「お茶漬けはいいものですね」
「あっさりとしていて食べやすく」
「はい、食欲がなくても食べられます」
それがだ。いいというのだ。
「とてもです」
「そうですね。それにです」
「それに？」
「お茶が」
お茶がだとだ。義正は今はそのお茶について話した。
「とてもいいです」
「お茶がですか」

「このお茶漬けにあるお茶は特に」
そのお茶についての話もするのだった。
「美味しいですね」
「このお茶は確か」
「確か？」
「静岡のお茶です」
「あの県のお茶ですか」
「普段は京都のお茶なのですが」
八条家のお茶は京都のものが多い。昔から京都の名産である。
「しかしこれはです」
「静岡ですか」
「たまたま京都のお茶を切らしていまして」
「これがあったのですね」
「ですからこのお茶を使いました」
「成程、だからですか」
「これまでは京都のお茶ばかりでしたが」
それでもだ。静岡のお茶もだというのだ。
「いいものですね」
「はい、また違う味で」
「このお茶もいけます」
こう話してだ。二人でだ。
その梅茶漬けを食べたのだった。真理はおかわりをした。それを見てだ。
義正はだ。こう彼女に話した。
「あの病にはです」
「労咳にはですか」
「食べることが一番です」
「そうして体力をつけることがですね」
「一番なのです」
こう話したのである。そしてだ。

「特に梅やお茶は」
「いいのですか」
「そう思います。どちらも身体にいいですから」
「ですから労咳にも」
「悪くないと思います」
そうだというのだ。
「ですから今もです」
「こうして食べていればですね」
「まずは食べることだと」
義正は微笑み真理に話す。
「労咳には言われていますから」
「栄養ですね」
「はい、食べてです」
「そうして養生をしてですか」
「していけばいいのです」
こう真理に話すのである。

第二十三話　告白その八

「ですから今もです」
「こうして梅とお茶を口に入れて」
「養生しましょう。後は」
「後は？」
「空気もいいそうです」
今度話すのはこのことだった。
「奇麗で澄んだ空気の中にいれば」
「それもまた養生になるのですか」
「そう聞いています。ですから」
「これからは。今まで以上に」
「幸い神戸は海と山に囲まれています」
神戸の特徴だ。その為空気もいいのだ。
そのことを頭に入れてだ。彼は今話すのだった。
「ですから。その中にいて」
「心からもですね」
「そうですね。心もですね」
このことはだ。真理に言われて気付いた義正だった。
そして1気付いてからだ。また述べたのだった。
「そうなりますね」
「では。この町で」
「養生されますか」
「そうさせてもらいます」
微笑みながら話した真理だった。そうしてだ。
お茶漬けをだ。義正と共に楽しむのだった。この日は。
幸せなまま過ごせた。そうして一月程過ごした。しかしだ。
やがて真理はだ。義正にこう話したのだった。
「今は私の病のことは」

「知っているのは」
「あのお医者様の他は」
そのだ。真理を診察した医師だ。彼は知っていて当然だ。
だがそれ以外にだ。このことを知っているのは。
「私達だけですね」
「はい」
その通りだとだ。義正も答えたのだった。
「そうです」
「そうですか」
「はい、そうです」
こう答えるのだった。
「知っているのは私達だけです」
「それでいいのでしょうか」
真理はだ。目を伏せて考える顔になってだ。
そのうえでだ。こう義正に言った。
「果たして何時までも」
「何時までも、ですか」
「この病はやがては倒れてしまうものです」
治りはしない。重くなることはあっても。
だからだ。真理は考えてだ。そして言ったのだった。
「そうして倒れればその時は」
「その時は」
「誰もが知ってしまいます」
労咳、彼女の病のことをだというのだ。
それを話してだった。彼女は。
あらためてだ。義正に話したのだった。
「ですから」
「だからですか」
「このことをお話すべきではないでしょうか」
「私だけでなくですか」

「はい、八条家と白杜家」
義正の家、そして真理の家だ。
「その両家において」
「それは」
義正にしては珍しくだった。
顔を曇らせてだ。こう返したのだった。
「あまり仰らない方が」
「黙っておくべきだというのですか」
「労咳はよく思われていません」
伝染する、そのことからだ。そして死に至るからだ。
それでよく思う者なぞいない。それこそ罹ればだ。
座敷牢に押し込められ一生出られずだ。咳と喀血の中で苦しみ抜き弱って死んでいく。孤独の中で。それが労咳に罹った者の運命だった。

第二十三話　告白その九

それを知っているからだ。義正も今はこう言うのだった。
「私は賛成できません」
「このことを公にすることには」
「はい、できません」
こう言うのだった。
「とても」
「左様ですか」
「私は誰にも言いません」
強い声でだ。義正は言った。
そのうえで席を立ちだ。窓を見た。
白い壁にある白い窓からは淡い黄金の光が差し込めている。それは白いカーテンを照らしそのうえで義正も照らしていた。
その光に包まれた外の青い海を見ながらだ。真理に話すのだった。
「若し言えば」
「その時は」
「もうこうしたものは見られません」
こう言うのであった。
「決してです」
「外には出られなくなりですね」
「はい、そうなります」
また言う義正だった。
「ですからそうしたことはです」
「言わないでおくべきですか」
「決して」
「そうですか」
「若し私の他の者にお話すれば」
その時こそだ。まさにだというのだ。

「貴方はここからいられなくなります」
「私は」
「はい、今は座敷牢はありません」
それはなかった。流石に時代が違う。
だがだ。今でもだった。
「療養所に入りそこで」
「サナトリウムですね」
「そこに入りです」
「出られない」
「そうなりますので」
決してだ。言わないようにというのだ。
「ですがそれは」
「それはですか」
「私は貴女にそこに行って欲しくはありません」
そうだとだ。義正は己の考えを真理に述べた。
「ここで養生してもらい」
「そうしてですね」
「ずっと二人で」
そしてこの言葉を出したのだった。
「いたいのです」
「そうですね。私も」
そしてだ。真理もだった。
義正に対してだ。こう述べたのだった。
「ここで。義正さんと」
「私と」
「いたいです」
切実な顔になってだ。真理は答えた。
「是非共」
「そうですね。ではこの屋敷にいて」
「そうしてですね」

「幸いこの屋敷は落ち着いていて空気もいいですから」
「養生になりますね」
「労咳には空気です」
よい空気が養生になるのは知られていた。既にだ。
それでだ。義正はさらにだった。
真理にだ。述べたのだった。
「二人でいましょう」
「最後の最後まで」
「そうしましょう」
こう言ってだった。真理のその白い手を取ってだ。
それで彼女のその白い両手を自分の両手で握ってだ。
そしてだ。こう言ったのだった。
「では、です」
「それではですね」
「二人でずっと」
微笑み合っていた。自然に。
その微笑みをそのままにして。二人でだった。

第二十三話　告白その十

この屋敷でいることにしたのだった。その中でだ。
義正は幸せを感じながら仕事も進めていた。そうしてだ。
その中でだ。兄達にもだ。
仕事の合間に会いだ。彼女のことを笑顔で話すのだった。
「これが幸せなのですね」
「夫婦で共にいること」
「それがだな」
「はい、幸せです」
兄達に話してだった。それでだった。
兄達もだ。こう義正に述べた。
「それではその幸せをな」
「手放さないことだ」
「放さないですか」
「そうだ、絶対に放してはいけない」
「例え何があっても」
そうしろとだ。彼に言うのである。
今は三人でレストランで洋食を食べている。レタスからはじまりコーンポタージュ、それからメインでハンバーグだ。そうしたものを食べながらだ。
そのうえでだ。三人で同じテーブルにつき話しているのだ。
そのステーキを食べながらだった。義愛は義正に話した。
「幸せは手放せばそれで戻らなくなる」
「手放せばですか」
「そうだ。向こうから去っていくものだ」
それがだ。幸せだというのだ。
「人の絆の幸せはそういうものだ」
「左様ですか」

「そうだ。だからだ」
「妻とは」
「何があっても手放さないことだ」
義愛は確かな声で義正に話す。
「真理さんともだ」
「はい、そうですね」
その通りだとだ。義正もだ。
長兄の言葉に頷きだった。
そうしてだ。静かに述べたのだった。
彼はパンを食べている。丸いよく焼けたパンをだ。それと手で千切って自分の口の中に入れながらだ。そうして兄達と話をしていた。
そしてだ。今度はだ。
次兄の義智もだ。義正に話してきた。
「兄さんの言う通りだな」
「幸せはですか」
「手放したら終わりだ。しかしだ」
「しかしですか」
「持っていればそれは増えるものだ」
幸せはだ。そうしたものだというのだ。
「やがてな」
「増えますか」
「それもまた楽しみなのだ」
義智は微笑み肉を切りつつ弟に述べる。
「幸せのだ」
「幸せのですか」
「幸せは増える」
義智はまた言った。
「そういうものだということを覚えておいてくれ」
「では私達は」
「そうだな。これからは」

「幸せを増やすことだ」
兄達は共に弟に述べた。
「二人でな」
「そうするといい」
「そうですね」
義正は優しい笑みになってだ。そうしてだ。
兄達の言葉に頷きだ。彼もまた述べたのだった。
「幸せは手放すことなく増やしていくものですね」
「人は何時か絶対に死ぬ」
意識はしていないがそれでもだ。義愛は今の末弟の心に残る言葉を言った。
「だがそれでもだ」
「それでもですね」
「その限られた命の中で育んでいくものだ」
「だから義正」
またしてもだ。義智が話す。
「真理さんと楽しくな」
「そうします」
義正は兄達にも言われだ。

第二十三話　告白その十一

真理との生活にだ。決意をあらたにさせた。
そうして日々をだ。真理と過ごす中でだ。
真理からだ。こう告げられたのだった。
「実は」
「実は？」
「できた様です」
こう言ってからだった。
「私の中に」
「まさか」
「はい、子供が」
それができたとだ。義正に話してきたのだ。
「私達の子供が」
「それはいいことです」
子供ができたとわかってだ。義正はだ。
瞬時に顔を綻ばせてだ。こう真理に言った。
「有り難うございます、私達はこれで」
「ですが」
しかしだった。真理はだ。
暗い顔でだ。こう義正に話した。
「そんなことはありません」
「？まさか」
「私の病は」
労咳のことをだ。真理は言うのだった。
「子供にも」
「だからですか」
「産めばその子も」
「労咳にですか」

「かかってしまうのではないでしょうか」
「それはなりません」
義正はだ。すぐにだった。こう真理に述べた。
そしてだ。こうも言うのだった。
「確かに労咳はうつりますが」
「お腹の中の子供にはですか」
「うつりません」
そうだというのである。
「決してです」
「では」
「はい、安心してです」
微笑みだ。真理に告げたのだった。
「私達の子供を産んで下さい」
「そうさせてもらいます」
「このことにも根拠があります」
労咳が子供にはうつらない、そのことにもあるというのだ。
「労咳は母体から。うつらないと西洋の医師が言っているのです」
「西洋のですか」
「はい、西洋のです」
そしてだ。その国は何処かとも言うのだ。
「独逸のです」
「独逸のですか」
「独逸のある医師が言っていたのです。労咳は細菌だと」
「細菌なのですか」
「まだ治療方法は。完全なものは見つかっていませんが」
それでもだ。細菌であると義正は言った。
独逸は細菌医学では最先端だった。コッホ等がその代表だ。そしてそのコッホに学んだのが森林太郎、森鴎外なのだ。彼は作家としてはともかく医師としては問題があると言っていい。だがコッホに学んだのは彼が、そして独逸が近代医学、細菌医学の最先端だった

からに他ならない。
その最先端の医学を話に出してだ。義正は述べたのだった。
「それでもです」
「母体から子供にはですか」
「うつりません」
そうだというのだ。
「ですから」
「左様ですか。それでは」
「はい、では」
「三人ですね」
真理は義正の言葉に安心してだった。
微笑んだ顔になってだ。述べることができた。
そのうえでだ。真理はだ。

第二十三話　告白その十二

あらためてだ。こうも言ったのだった。
「しかし」
「しかし？」
「この病のことは何時までも隠せるものでしょうか」
「隠せないというのですか」
「そういうものではないでしょうか」
こう言ったのである。
「どうしても」
「どうしてもですね」
「はい、隠せるものではないのでしょうか」
また言う真理だった。
「最近考えているのですが」
「そうですね。病はゆっくりでも」
「進行していきますね」
「いきます」
このことはだ。どうしてもだった。
例えゆっくりであっても労咳という病は進行していくのだ。そうした病なのだ。
それでだ。彼は言ったのだった。
「では、ですね」
「前にもお話したと思いますが」
「病のことを」
「公にしましょうか」
「勇気は」
そのだ。告白する為のそれはだというのだ。
「それは」
「あります」

毅然としてだ。真理も答えた。
顔もそうなっていた。そしてその顔でだった。
答えてだ。そのうえでの言葉だった。
「私のこのお腹の中の子供のことも」
「含めてですか」
「それで」
言えるというのだった。公に。
そこまで聞いてだった。義正もだった。
意を決した顔になってだ。そしてだった。
確かな顔でだ。言ったのだった。
「私も。一緒に」
「その時もですか」
「当然です」
義正のその言葉には迷いがなかった。そうしてだ。
その迷いのない顔でだ。彼は答えた。
「夫婦ですから」
「だからですね」
「はい。ですから」
「絆があるからこそ」
それでなのだった。彼もだった。
そうしてだった。真理もその言葉を聞いてだ。
自然とだ。温かい笑顔になってだった。義正に言ったのだった。
「有り難うございます」
「御礼はいいです」
「そうですか」
「当然のことですから」
義正のこの考えは変わっていなかった。全く。
「ですから」
「はい、それでは」
「二人で」

言葉を交えさせてだった。
「そうしましょう」
「子供を産み育て」
「病のことを告白しましょう」
こう話したのだった。そしてだった。
今の話を終えてだ。義正は。
何か肩の荷が下りた顔になりだ。それでだった。
真理にだ。今度はこう言ったのだった。
「ではです」
「それでは？」
「お茶を飲みますか」
静かな微笑みを彼女に向けての言葉だった。
「落ち着いて」
「お茶をですか」
「抹茶を」
今言うのはその茶だった。
「それを飲みますか」
「日本のお茶をですか」
「栄養学的にはです」
真理を安心させる為にもだ。抹茶についてここから話したのだった。栄養学も明治からだ。日本に定着してきた学問であった。
「抹茶は素晴らしいものとのことです」
「確かお茶には」
「ビタミンというものが多くあるのです」
「ビタミンですか」
「身体を健康にするものです」
簡単にだ。義正はビタミンについてこう説明した。
「それが抹茶には多くあるのです」
「だからですね」
「はい、ですから」

「二人で飲んで」
「身体を労わりましょう」
その為にもだ。抹茶を飲もうというのだ。
それを話してだった。義正は。
真理のその白い手を取った。そしてであった。
真理も受けてだ。立ち上がった。そのまま。
「洋室ですが宜しいですね」
「御願いします」
お互いにだ。笑みで言葉と心を交えさせて。
茶、その日本の茶を淹れてだ。二人で飲んだのだった。それは西洋の中でもだ。確かな日本の味がそこにはあった。それが真理の心を和やかにもさせた。

第二十三話　完

２０１１・８・３０

第二十四話　告げる真実その一

第二十四話　告げる真実

義正と真理はだ。二人のそれぞれの家族に真実を告げる前にだ。
今回も伊上の屋敷に行きだ。そこでだ。
伊上にだ。その告げるべき二つの真実のことを話した。
屋敷の欧風の応接まで話を聞いてだ。伊上は。
まずは瞑目した。それからだ。
静かに口を開いてだ。こう二人に述べた。
「幸せはあるが」
「それでもですか」
「悲しいな」
目を開けた。ここで。
そして真理を見てだ。無念の顔で言った。
「まだ若いのに。二人になったばかりなのに」
「それでもだというのですね」
「そうだ。残念だ」
真理に応えてだ。今言った。
「その病になるとは」
「労咳ですか」
「労咳はこれまで多く見てきた」
伊上も長く生きてきた訳ではない。それだけ多くのものを見てきたということなのだ。
それでだ。その労咳についてもだ。彼は言うのだった。
「私が長州出身なのは知っているな」
「はい」
その言葉にはだ。義正が応えた。
「そうでしたね。それでは」
「高杉さんだ」

高杉晋作だ。幕末の志士の一人であり奇兵隊を組織したことで知られている。

その彼のことをだ。伊上は和服の下で腕を組んで二人に話した。

「あの方もそうだった」

「そうして労咳で」

「咳をされ血を吐かれ」

労咳の症状そのものだ。

「そして痩せ細っていかれ」

「そのうえで、ですか」

「亡くなられた。わしはあの方のお側にもいた」

だからだ。余計にだというのだ。

「残念だった。生きておられればと今でも思う」

「労咳でなければ」

「労咳は死ぬ」

今は一言だった。

「忌まわしい病だ」

「ですか」

「その病に貴女が罹ってしまうとは」

また無念の顔になりだ。真理を見てだ。

「因果な話だ。だが」

「だが？」

「生きられるのですな」

真理を見続けている。そのうえでの問いだった。

「貴女は」

「決めました」

真理の顔は白い。まるで雪の様だ。

何故白くなっているのかは言うまでもなかった。だがその白い顔にだ。

毅然としたものを宿らせてだ。彼女は今言うのだった。

「義正さんと共に」

「生きられるのですな」
「はい」
まさにだ。そうだと答える真理だった。
「そしてこの子を産んで」
己の腹をだ。いとしげに擦った。
そうしてだ。また言うのであった。
「この病のことも」
「家族の方に言われますか」
「そうします」
それもだ。決めたというのだ。
「そのことまで決めました」
「私もです」
そしてだ。義正もだった。

第二十四話　告げる真実その二

確かな声でだ。伊上に述べた。
「それは」
「そうか。二人でか」
「どう思われるでしょうか」
「辛いぞ」
ここから話す伊上だった。
「真実を言うのは」
「それはですか」
「辛いですか」
「わかるな。辛いことがな」
それはだと。伊上は二人に話していく。
「君達もわかっているだろう」
「決断をするのに勇気がいりました」
「非常に」
そうだとだ。二人も話す。
「それがですか」
「辛いと」
「現に君達も今の顔も」
その表情からも話した。
「そうなっている。強張っている」
「強張っていますか」
「今の私達は」
「そう、強張っている」
実際に二人の顔を見ながら。そうしての言葉だった。
「勇気を振り絞って決めたな」
「それが辛いと」
「そうだというのですね」

「覚悟を決めることは辛いことだ」
伊上は言い切った。和服の袖の下で腕を組んでだ。彼の顔も強張っていた。
その顔でだ。述べたのだった。
「そして真実を言ってもだ」
「受け入れられるとは限らない」
「そのこともですね」
「わかっているな」
二人に問うた。このこともまた。
「君達は」
「確かに。不安ではあります」
義正がまた答えた。
「家族にどう思われるか」
「家族は信じているな」
「はい」
それは確かだ。家族を信じられる、幸せなことだ。
その幸せは義正にも真理にもある。しかしだ。
それでもだとだ。彼は言うのである。
「信じてはいますが」
「それでもだな」
「果たして。どうなるか」
家族に真理の病を受け入れてもらえるか、子供のことは許されるか、そして二人でいられるか、全てが不安で仕方なかったのだ。
そのことをだ。今二人は言った。
「若し受け入れられないと」
「どうなるか考えるだけで」
「それだけで苦しくなります」
「どうしても」
「そうだな。わかる」
伊上は短い言葉で述べた。

「だが。決めたのだな」
「やがてはわかることですから」
真理が答えた。今度は。
「ですから」
「そうだな。隠せるものではない」
死に至る病はだ。とりわけ労咳はだった。
「血を吐けばそれで終わりだ」
「それでわかってしまいますね」
「あの病は無慈悲だ」
死に至る病の中でだ。とりわけだというのだ。
「血は出してはいけない時に出てしまうものだ」
「それが労咳ですか」
「高杉さんがそうだった」
またここで彼の名前が出された。伊上にとって憧れの一人がだ。
「あの人もまた。動かねばならないというのに」
「血をですか」
「吐かれ。苦しまれた」
そうしてなのだった。高杉は。

第二十四話　告げる真実その三

「苦しみもがかれたのだ」
「あの人はそうして生きられたのですが」
「だが」
「だが？」
「果たされた」
伊上の言葉がここで変わった。
「あの方は御自身の果たされるべきことを果たされた」
「そうされたのですか」
「あの人は」
「松陰先生の名前をあげられた」
奇兵隊を率いだ。戦ってだ。
「そうされたのだ」
「では僕達も」
「必ず」
「果たせる」
伊上はここでだ。この話の中で最も強い言葉を出した。
そしてだ。こうも述べたのだった。
「必ずだ」
「わかりました。それなら」
「私達も」
二人の顔があがった。こうしてだった。
二人の顔が変わった。明るくなった。その顔でだ。
伊上にだ。こう言った。
「じゃあ今から」
「真実を言ってそうして」
「二人で、何があっても」
「最後の最後まで言います」

「家族のことは気にすることはない」
伊上はこうも言った。
「信じているのだな」
「はい、それは」
「お父様もお母様も」
「兄上達もです」
「そうしたことは絶対にありません」
「人は信じていても。心から信じていても」
どうかというのだ。そうしていてもだ。
「不安になるものなのだ」
「その様ですね。どうやら」
「心の何処かで」
二人があらたにわかったことだった。これは。
「不思議なことですが」
「信頼の中でも」
「それが人間だ」
そういうものでもあるというのだ。伊上はこうしたことも話した。
「信頼と不安は隣り合わせなのだ」
「常にあるもの」
「そうですか」
「そうだ。だが信頼することは大事だ」
これはだというのだ。
「不安に打ち勝ちだ」
「それが人間というものですね」
「あくまで信頼できる相手に限るがな」
もう一つだ。人生論が出た。
「信頼できない相手もいる」
「それはどうしてもですね」
「それを見極めるのも大事だ」
「では私達の家族は」

「言うまでもない」
伊上の二人への言葉は。ここでさらに強くなった。
「二人共信じていい」
「そうですね。私達の家族には誰もそうした者はいません」
「一人も」
「わかっているがそれでも不安になる」
今度はこんなことを言う伊上だった。
「人間とは弱いものだからな」
「しかしその弱いものを知ってこそなのですね」
「人というものは強くなれますね」
「そして優しくもなれる」
二人の言葉にだ。伊上は付け加えた。

第二十四話　告げる真実その四

「弱さは決して悪いことではない」
「それを認め克服できるからこそ」
「だからこそ」
「そうだ。いいのだ」
伊上は言っていく。
「では。やがてか」
「はい、すぐにその場を設けて」
「私達は真実を言います」
「あの時と同じだな」
伊上は二人の話を聞いてだ。言ったのだった。
義正と真理がその関係を公にしたその時とだ。同じであるとだ。
そのことを言いだ。そしてであった。
今度もだ。二人に言ったのだった。
「では私はだ」
「先生は」
「一体何をされるのですか？」
「その場を提供しよう」
今度もだ。そうするというのだ。
「私のこの屋敷に両家の方々を御呼びしてだ」
「そうしてですか。私達が真実を言う場所をですか」
「提供してくれるのですか」
「今回は両家の内輪だけの宴でいいな」
気を利かしてだ。伊上はそうするというのだ。
「下手に多くの者に知られていいものではない」
「だからですか」
「あくまで両家の内輪だけで」
「そう、そうしよう」

この考えをだ。今二人に話した。
「それでどうか」
「御願いします」
義正が答えた。
「それで」
「よし、ではな」
「信頼できる者は最後まで信頼して動く」
先程の伊上の言葉をだ。義正はそのまま繰り返した。
そしてだ。今言うのだった。
「だからこそですね」
「そうだ。まずは信頼できる者に真実を話す」
それこそがだ。二人のそれぞれの家族達なのだ。
二人は伊上に言われてだ。実際にだ。
家族全ての顔をその頭の中に思い浮かべてだ。それで彼の話を聞いていた。そうしていたのである。
そしてだ。その中でだ。伊上の話をさらに聞くのだった。
彼はだ。また話した。
「では。日はこちらで決めてな」
「ではその時に」
「私達は」
「勇気には心で報いる」
伊上は微笑みになりだ。今度はこう言った。
「それが人のあるべき姿だからな」
「だからですか」
「私達にこうして頂けるのですか」
「人はその相応しい人と交わる」
伊上はまた言った。またしてもその長く深い人生から学んだことである。それをだ。まだ若い義正と真理にだ。心から告げるのである。
その理由はだ。はっきりしていた。

「君達もそうなるからな」
「だからこそ」
「教えて頂けますか」
「では。勇気を持ってまた来てくれ」
「この屋敷に」
「その時に」
「そうしてくれ」
こうした話をしてだった。二人は。
伊上に別れを告げて自分達の屋敷に戻る。その車の中、義正が運転するそれの中でだ。二人だけでその話をするのであった。

第二十四話　告げる真実その五

神戸のだ。海が見える山道を進みながら。義正は助手席にいる真理に話した。
「有り難いですね」
「はい、伊上先生は」
「私達を見て。認めてくれて」
「そのうえで」
「御力を貸してくれます」
このことがだ。二人にとっては非常に有り難かった。
それでだ。義正は笑みを浮かべてだ。真理に話した。
「そしてそれがです」
「私達がそうであるからと」
「言ってくれてそうしてくれるのが」
「何よりも嬉しいですね」
「最後までいきましょう」
今度はこんなことを言う義正だった。
「二人で」
「そうですね。二人で」
「ドライブをしましょう」
「ドライブを？」
「はい、人生のドライブを」
車を運転して。そうしての言葉だった。
「それをしていきましょう」
「今こうしている様にですか」
「そうです。こうしてです」
「二人で進んでいって」
「そうして最後までいきましょう」
「はい」

そしてだ。真理もであった。
義正の言葉にだ。笑顔で頷いて。
「途中で下りることなく」
「扉を開かずに」
「行きましょう」
こう話してだった。二人はだ。
屋敷に着いた。しかし今はだ。
決意のことは言わずにだ。それでだった。
佐藤と婆やにだ。こんなことを言った。
「今夜だけれど」
「何でしょうか」
夕食のことをだ。尋ねたのである。
「洋食かな。それとも」
「和食でしょうか」
「支那になります」
それだとだ。婆やが二人に話してきた。
「それに」
「支那というと」
「支那そばでしょうか」
「それだけではありません」
こうも答える婆やだった。
「他にもあちらの餃子や点心、それに炒飯もです」
「色々とですか」
「あるのですね」
「はい、シェフが今日は支那だと言って」
それでだというのだ。
「今腕によりをかけて作っています」
「今からですか」
「作ってくれているのですか」
「ですから楽しみにして下さい」

微笑んでだ。二人に話す姿やだった。
そしてだ。二人にこんなことも話してきた。
「支那料理は医食同源です」
「そう言われていますね」
義正が彼女のその言葉に応えて述べた。
「あの国の料理は」
「ですから。その料理を食べてです」
「身体をよくする」
「そうすればですね」
「はい、その為にです」
支那料理にしているというのだ。その話を受けてだ。
二人は料理を待つことにした。その間だ。
彼等はだ。どうしたかというと。
落ち着きだ。レコードを聴くことにした。そのレコードの曲は。
胡弓の曲だった。それを聴きながらだ。

第二十四話　告げる真実その六

二人で左右に並んだ席に座りだ。義正は真理に話した。
「この楽器が支那の楽器です」
「よく本にも出て来るですね」
「それです。こうした楽器の曲もです」
「聴ける様になりましたか」
「支那の音楽もいいものですね」
義正は微笑みこんなことも言った。
「落ち着いていて」
「そうですね。日本や西洋のものばかりではなく」
「やはり支那の音楽もいいです」
そうだとだ。義正は話すのである。
「そして料理もですね」
「私達がこれから食べる」
「それに文化自体も」
「支那はいいのですね」
「そのことは否定できないです」
かつて干戈を交えそして今は動乱の中にあるだ。それでもだというのだ。
「今は確かに動乱の中にある国ですが」
「それが長引いている様ですね」
「そうです。ただ」
「ただ？」
「広州に面白い人物が出ています」
義正の話は支那事情に関するものに移ってきた。支那文化から。
その広州と聞いてだ。真理は夫に問うた。
「広州というのは」
「支那の南でして」

「南ですか」
「上海よりさらに南の海岸の地域です」
「そこが広州ですか」
「はい、そしてその広州にです」
どうかというのだ。その広州にだ。
「蒋介石という人物が出てきました」
「蒋介石というのですか」
「あの革命を起こした孫文の部下になります」
真理にわかりやすい様にだ。義正は彼について簡潔に話す。
「その人物は中々の人物だそうで」
「ではその蒋介石という人が」
「何かをするかも知れません」
既にだ。義正はそうした話を聞いていた。
「あの国も何時までも動乱が続くとは思えませんから」
「また統一されるのですね」
「はい、やがては」
そしてだ。その統一するのがだというのだ。
「若しかすると蒋介石によってです」
「為されますか」
「そうかも知れません」
「そうですか。支那も動いているのですね」
「この世で動かないものなぞありません」
国や人ばかりでなくだ。あらゆるものがだというのだ。
「ですから」
「そうですか。では」
「私達もですね」
「そうですね」
今度はだ。二人の話になった。
「決めたのですから」
「その時になれば」

「言いましょう」
毅然とした顔になり。真理は言った。
「二つのことを」
「私達の子供と」
「私の病のことを」
「そして」
その二つと共にだ。さらにだった。
義正がだ。そのことについて言った。
「最後の最後まで共にいることも」
「言いましょう」
「労咳だからといって座敷牢に閉じ込められることはもうあってはなりません」
義正はそれは否定した。
「何があろうとも」
「最早それはですね」
「あってはならないことです」
そうだというのだ。

第二十四話　告げる真実その七

「ですから」
「そうですね。では私達は」
「一緒です」
一緒だというのだ。そしてだ。
二人でだ。いようとだ。義正は言う。
そうしてであった。真理もだ。こう言うのだった。
「では。その時までは」
「どうされるのですか」
「静かにいていたいのですが」
「その時まで、ですね」
「英気を養うというのでしょうか」
真理はこんなことも言った。
「それは」
「そうですね。確かに」
「そう言いますね」
「そうなります」
義正もだ。その通りだと答える。
そしてだ。あらためてだった。真理に言うのだった。
「では。今はゆっくりと」
「その時に備えて」
「常に気を張っていても何にもなりません」
このこともだ。次第になのだ。
義正もわかってきていてだ。それでだ。
そのうえでだ。彼は言ったのだった。
そのうえでだ。静かにだ。
彼等は二人でだ。静かな共の時を過ごした。そんな二人を見ながらだ。

伊上はだ。周りにこう話した。
「これでいいのだ」
「いいといいますと」
「八条家と白杜家のことでしょうか」
「そうだ。これでいいのだ」
真理の労咳のことは隠してだ。そうしてだった。
周りの、彼に仕えている者達にだ。静かに話すのだった。
「隠すべきない秘密もあるのだ」
「隠すべき秘密と共にですね」
「それがあるというのですね」
「そうだ。あるのだ」
そうだと話す彼だった。
和服を着て英吉利から取り寄せた見事な椅子に座り同じくイギリス製のテーブルの上に盃を置いている。そこにあるのは日本酒だ。
その酒にだ。魚の干物を口にしつつだ。彼は言うのである。
「政治やそうしたことは隠すべきだ」
「手のうちは見せないのが政治」
「だからですね」
「そうだ。だからそれはいいのだ」
政治ならば当然のことだ。全てを見せては何もできない。彼はこれまで政界にいて多くのことを果たしてきたからだ。それが言えた。
しかしだ。二人のことはだ。こう言うのだった。
「例えばだが」
この前置きのうえで話すことだった。
「病を得ている」
「病をですか」
「それならばですか」
「それは公にしなくともやがてはわかるものだ」
このこともだ。彼はその長い人生経験でわかっていた。
「どうしてもだ。それなら」

「それならですか」
「公にすべき」
「そうだというのですね」
「その通りだ。そして」
さらにだった。彼は酒を飲みつつ言った。
「そこから全てがはじまるものだ」
「全てがですか」
「はじまると」
「高杉さんも」
彼のことをだ。ここでもだ。
瞼の奥に思い出しつつ。その周りに話した。
「労咳からだったな」
「あの方はそれにより若くしてお亡くなりになっていますね」
「確か二十八の頃に」
「残念なことだった」
これは否定しなかった。実際にそう思っているからだ。

第二十四話　告げる真実その八

だがそれでもだ。伊上は言うのだった。
「しかしあの方はそこからだった」
「労咳になられてから」
「そうだというのですか」
「そうだ、それからだった」
また言う。そしてだ。
そのはじまったこともだ。周りに話した。
「命を燃やされ果たすべきことを果たされたのだ」
「もう少し生きていればと思うのですが」
一人がだ。ここでこう彼に言った。
「僭越ですが」
「僭越ではない」
これはいいとした。だが。
それと共にだ。伊上は彼に、他の者達にもこのkとおを強調して言った。
「だが、だ。あの方は果たされたのだ」
「御自身の為されるべきことをですか」
「それを果たされたのだ」
まさにそうだというのだ。
「あの方は。そしてそれはだ」
「他の方々もですか」
「長州の」
「長州だけではなく薩摩も土佐もだ」
ひいてはだった。彼はその言葉を続ける。
「幕府においても。全ての方々がな」
「されるべきことを果たされたのですか」
「高杉さんだけでなく」

「そうなのだ。人の運命は決まっているのだろう」
ここでは運命論も出る。
「松陰先生にしてもな」
「ですがあの方は」
「残念ですが」
「確かに。処刑された」
安政の大獄においてだ。吉田松陰は無惨にも刑死している。井伊直弼はこの大獄においてこれまでの幕府の慣習を破り評定での裁決よりもさらに重い刑罰を乱発したのだ。
江戸幕府の刑罰は評定よりも軽いものにして幕府の仁政を示すのが慣習だった。だが井伊はそれを拡大解釈し多くの者を死罪にしたのだ。
その結果だろうか。それとも伊上の言う運命なのだろうか。井伊は桜田門外の変で乗っている籠に刀を突きつけられそのうえで引き摺り出され首を刎ねられた。三十五万石の大名、大老としてはあまりにも無惨な結末であった。
だがこの頃よりこの時代に至るまでこのことに同情する者は稀である。因果応報、自業自得、多くの者が当然の様に言うだけだ。
その井伊に殺されたダ。松陰についてもだ。伊上は言うのだった。
「無念だが。それでもだ」
「果たされるべきことを果たされたのですか」
「松陰先生も」
「そう思う」
こうだ。彼は言い切った。
「あの時はとてもそう思えなかったがな」
「御言葉ですが私は今もです」
「私もです」
「お話を聞く限りでは」
周囲はだ。怪訝な顔になり彼に話す。
「松陰先生はまだ二十八でした」

「三十にもなっていませんでした」
「それで刑死とは」
あまりにも若い死にだ。彼等は思えた。それが刑死なら尚更だ。
しかしだ。それでもだった。伊上はだ。
こうだ。彼等に話した。
「松陰先生はその生涯の殆んどを不眠不休で生きられたのだ」
「獄中においてもですか」
「そうされていたのですか」
「我々に対しても真摯に接してくれた」
このこともだ。彼は話した。
「まだ子供の私にもな」
「公平な方だったそうですね」
「それでいて純真な」
「その誠実さ故にだ」
どうだったかというのだ。吉田松陰という人物は。

第二十四話　告げる真実その九

「三十にもいかないが。他の者の何倍ものことを果たされたのだ」
「そのことを果たされてですか」
「松陰先生は旅立たれた」
「その運命を全て果たされて」
「そうだ。そうされたのだ」
まさにそうだとだ。松陰のことを話すのだった。
「あの方はだ」
「では刑死されるのも運命」
「そうなのですか」
「刑死まではわからないが」
伊上個人としてもだ。松陰の刑死自体はだ。
どうにも納得しきれなかった。それはあまりにも無惨だったからだ。
それでだ。このことについてはだった。言葉を濁すのだった。
それでだ。言うことは。
「切腹でもなかったしな」
「井伊はそこまで情けを知らなかったのですね」
「何処までも」
「そういう輩だった」
軽蔑を込めてだ。伊上は述べた。
「先生は刑死されることはなかった。本来はな」
「井伊はあえて死罪と書き換えたのでしたね」
「橋本左内や頼三樹三郎と共に」
「そうしたのだ」
評定の判決を重く書き換える。江戸幕府においては決してしてはならないことをあえてしてだ。その松陰達を処刑していったというのだ。

「あの男は。今もこの手で成敗したい」
「成敗されてもですか」
「そうされたいですか」
「日の本の害だった」
伊上から見ればだ。彼はまさにそうなのだ。
それを話してだった。彼は。
あらためてだ。松陰に対しても言うのだった。
「刑死は無念だ。だが松陰先生の運命はだ」
「そこで終わっていたのですか」
「果たされるべきことを果たされたからこそ」
「その通りだ。人は果たすべきことをするものだ」
生きているその時にだというのだ。
「そうしてそれを果たし終えてからだ」
「人は旅立つ」
「そういうものですね」
「そう思う。誰もが」
ここまで言ってだった。伊上は。
一旦酒を置いてだ。そのうえでだ。
周りにいる彼等にだ。こう話した。
「ではだ」
「では？」
「ではといいますと」
「酒は一人で飲むものではない」
酒を置いてそのうえでの言葉だった。
「多くで飲んでこそだ」
「だからですか」
「では我々も」
「そうしていいのですか」
「共に飲もう」
笑ってだ。こう彼等に言ったのである。

「若い頃はよくこうして酒をだ。千敗の方々と飲んだものだ」
「山縣先生や井上先生とですか」
「そして伊藤先生と」
「伊藤さんはあれで気さくな方でだ」
陽気でだ。打ち解けやすい人物だったと言われている。それでだ。
八方美人とも言われている。その彼ともよく飲んだというのである。
「飲んでいて楽しかった」
「そうですか。伊藤先生はですか」
「そうした方だったのですか」
「あの方もやるべきことを果たされた」
伊藤についてもそうだというのだ。
「あの併合については最後の最後まで反対されていたが」
「それは先生もでは？」
「あまり乗り気ではなかったですね」
「台湾はわかる」
そこについてはいいというのだ。台湾については。

第二十四話　告げる真実その十

「だが半島はだ」
「違いますか」
「そうではないと」
「支出が多過ぎる」
まずはそれが問題だというのだ。
「今も毎年莫大な予算を注ぎ込んで発展にあたっているがだ」
「それでもですか」
「軌道に乗っていないと」
「財政的にも内政的にも大きな足枷になっているのではないのか」
曇る顔でだ。半島経営について話すのだった。
「ひいては外交でも軍事でも」
「そういえば二個師団増設もでしたね」
「かなりの議論になりましたね」
「併合してから気付いた」
半島防衛の為に二個師団が必要であるということにだ。そうなってからようやく気付いたのだ。恐ろしいことにこれが歴史的事実なのだ。
「それで日露戦争での疲弊からようやく立ち直り内政に予算を入れようとしたが」
「二個師団増設ですね」
「半島防衛の為の」
「国は護るものだ」
例えそれがその半島であってもだ。そうしなければならないのだ。
「だからこそだ」
「その為の二個師団」
「それは必要ですね」
「護りを固めることが第一だ」

何につけてもそれからだというのだ。
「そしてそれからだ」
「内政も経済もですね」
「あらゆることが」
「そうだ。だからあの二個師団は絶対に置かなくてはならなかった」
「世論は大変でしたが」
「それでも」
実際に西園寺内閣はその話が出て一気に崩壊した。何と元老であり陸軍を仕切っていた山縣ですら陸軍が言ってから気付いた程なのだ。
内角が倒れ慌てふためいた山縣はここで切り札を出したのだ。
ニコポンことだ。桂太郎を総理に据えたのだ。彼は元老の一人であり山縣と共に陸軍の領袖であった。その彼ならこの問題を解決できると見てだ。
しかし桂は既に二度と首相にならないと議会に約束していた。それでこの申し出を断ろうとした。しかしそれはできはしなかった。
桂は首相になった。しかしだ。
それが議会の反発を受けだ。世論も巻き込んだ糾弾になった。最早二個師団増設の話どころか国政もままならない状況に陥った。
それで桂は無念のうちに首相を辞した。その時の心労で癌が悪化し間も無く死んでしまった。日韓併合は暗殺された伊藤も含めて元老を二人も葬ってしまった。
そうした騒動を経てだ。陸軍がその存亡をかけて押し通した二個師団増設についてだ。伊上は仕方ないといった顔で述べた。
「必要だったのだ」
「あれだけの騒ぎを経てもですね」
「それでも」
「国防なき国は国ではない」
こうも言う彼だった。
「だからだ」

「半島防衛の二個師団はですか」
「半島が日本である限りは」
「必要であったしこれからもだ」
「あの半島に軍を置かなくてはならないですね」
「これからも」
「そうだ。日本だからだ」
日本領を見捨てる訳にはいかないというのだ。
「絶対にな」
「そして内政もですね」
「あの半島の内政も」
「欠かせない」
やはりだ。日本領であるからだった。
「台湾もそうだったがあの半島でもな。だが」
「だが？」
「だがといいますと」
「あの半島には何もないのだ」
和服の袖の中で腕を組み難しい顔をしての言葉だった。

第二十四話　告げる真実その十一

「本当に何もないのだ」
「何も、ですか」
「ないのですか」
「そうだ、何もない」
そしてだ。何がないかというと。
「木すらない」
「木もですか」
「それもないのですか」
「あの半島にあるのは禿山だけだ」
それが事実だった。森林資源という時点でない半島だったのだ。
「寺内さんが総督になられ最初に大規模な植林をされた」
「そこからはじめる場所ですか、あそこは」
「それはまた」
「当然植林だけではない」
あらゆるものを生み出す木がなくてはだ。他のものも当然ながらないのだ。つまりだ。半島には本当に何もかもがないのである。
そうした場所に進出してもだった。
「無益に思える」
「あそこは台湾と違いますか」
「木も何もかもがない」
「そうした場所でしたか」
「実際に莫大な予算を消費し続けている」
それこそだ。国家予算のかなりの額を毎年注ぎ込んでもなのだ。赤字のままなのだ。
だからだ。彼は言うのだった。
「そうした場所を何時まで併合しているのか」
「ですが新渡戸先生はです」

「見事な経営プランを立てておられましたし」
「それに添って動いているのですよね」
「それなら」
「だからだ。台湾と違うのだ」
何についてもそこだった。
「新渡戸君は台湾経営での経験から。確かに見事な計画を立てたが」
「それでもですか」
「あの半島の経営はですか」
「まずいですか」
「果たして赤字経営だけで済むのか」
伊上は危惧も出した。
「将来に渡って禍根を残すのではないのか」
「我が国にですか」
「そこまでのものだと」
「そんな気がする」
その将来を憂う顔でだ。伊上は話す。
「あの半島統治についてはだ」
「そういえばソ連にもあの半島の者がいるそうですね」
「鮮人が」
「そうらしいな。ではだ」
ここでさらにだ。伊上は危惧を覚えて述べた。
「ソ連が彼等を工作員として使うことも考えられるな」
「それがソ連のやり方ですしね」
「連中は手段を選びません」
「ソ連は間違っても天国ではない」
今度はソ連についても言うのだった。
「労働者や農民の国と宣伝しているがだ」
「実は違うのですね」
「あの国は」
「恐ろしい国だ。かつての帝政露西亜なぞ比較にならない」

日本が長い間心底恐れていたその国、ソ連の前身である国よりもだというのである。

「魔物だ。あの共産主義に染まったら最期だ」

「日本は終わる」

「そうなりますか」

「あの思想は血を求める」

危惧をだ。さらに述べるのだった。

「革命において多くの血が流れているそうだな」

「その様ですね」

「西洋ではそれが言われていますが」

「日本には伝わっていない」

むしろソ連の宣伝ばかりが伝わっていた。そしてそれがそのまま日本に深刻な騒乱の種になろうとしていたのだ。それはこの時代にはもうはじまっていたのだ。

第二十四話　告げる真実その十二

「おかしなことにだ」
「あの国の実態が」
「そして共産主義の正体がですね」
「全く伝わっていない」
「西洋の様に」
「いや、西洋でもあまり知られてはいないフシがある」
そのだ。西洋でもだというのだ。
「知識人達が目を曇らせてしまっているからだ」
「そうしたことを伝えるべき知識人がですか」
「目が曇っている」
「そうなっているのですか」
「どうしても」
「そうだ。彼等が共産主義に魅了されているからだ」
魅了している対象を悪く言うことはない。決して。
「そうなっているが我が国は特にだ」
「それが深刻ですか」
「殊更」
「彼等は取り締まるべきだ」
伊上は言った。
「活動を許してはならない」
「どうしてもですね」
「許せばそこから。拡がっていく」
そうなることをだ。伊上は真剣に恐れている。
それでだ。彼は言うのだった。
「下手をしなくとも日本が共産化することはだ」
「危惧されますか」
「実際に」

「そうだ。油断できないのは共産主義だ」
どうしてもだ。彼はその危惧を頭から離すことができなかった。
それでだった。彼は言うのだった。
「あれはまさに魔物だ」
「そういえば彼等は君主制も否定していますね」
「つまりは」
「陛下をだ。恐れ多くも」
このことがだ。伊上だけでなく周りの者達にとってもだ。
最も恐ろしく思うことだった。それで言うのだった。
「皇室のどの方もだ」
「あのロマノフ皇室の様にですね」
「恐ろしいことに」
「間違いなくそうする」
このことをだ。伊上は言いだ。
そしてだ。こうも言うのだった。
「彼等を許せばそうなるのだ」
「陛下だけでなく他にも多くの血が流れる」
「それが共産主義の実態ですね」
「実態がわかっておらず騒いでいる者はまだ救いがある」
そうした者はというのだ。
「だがそれでもだ」
「中にはそうではない者もいるのですね」
「共産主義の実態を知っている者も」
「そうした者が問題ですか」
「確信犯だ」
伊上はそうした者についてはこう言い切った。
「そうした者もいるからだ」
「危ういというのですね」
「放置しておいては」
「早く何とかしなければならない」

伊上はまた言った。
「遅かれ早かれソ連とはまた対峙するのだから」
「それも必然ですか」
「あの国との対峙も」
それを言われてだ。周りは。
今度は少し戸惑いながらだ。こう言うのだった。
「亜米利加と怪しくなっていますが」
「海軍はそう見ている様ですが」
「いや、この場合は海軍の問題ではない」
では何処の問題であるのか。伊上はわかっていた。そしてそのわかっていることをだ。ここではっきりと彼等に対して話したのだった。
「日本の問題だ」
「日本のですか」
「我が国全体の問題ですか」
「そうなるのですか」
「そうだ」
伊上はこのこともだ。断言したのだった。

第二十四話　告げる真実その十三

「海軍だけでのことではないのだ」
「露西亜の時と同じくですか」
「我が国全体のことですか」
「ソ連は露西亜の後の国だが」
それでもだというのだ。
「あの国は露西亜以上に恐ろしい国だ」
「だからこそ日本全体で、ですか」
「ことにあたらねばなりませんか」
「そうだ。だが今はどうもだ」
難しい顔はそのままでだった。伊上はまた話す。
「我が国は。特に陸軍と海軍がだ」
「どうも近頃仲がぎくしゃくしていますね」
「前からその傾向があったにしても」
「山縣さんがおられるうちはまだいい」
よくも悪くもだ。山縣が陸軍を統率しているからだ。そのうえでの言葉だ。
「そして海軍もだ」
「山本さんがおられますね」
「あの方が」
「御二人がおられるうちはいいが」
だが、だ。それでもだというのだ。
「しかし御二人がおられなくなると」
「危ういですか」
「陸軍と海軍も」
「いや、陸軍と海軍だけではない」
ここでもだ。日本全体の話になった。
「日本全体がだ」

「といいますと」
「山縣さんや山本さんだけではなくですか」
「あの方々。元老の方々がおられなくなるその時だ」
実際にだ。この時に元老は次々といなくなっていた。人は必ず死ぬものだ。寿命というものに勝てる者はいないのだ。
それでだ。伊上は言うのである。
「日本はどうなるのか」
「舵取りがいなければ船は動きませんね」
「動かないでいるのよりも危険なことがある」
伊上は周りの中の若い青年に述べた。共に飲んでいる彼に。
「それはだ」
「それは？」
「危うい方向に船が進むことだ」
「それは余計にですか」
「動かないことよりも危うい」
このこともだ。伊上が強く懸念していることだった。
そしてだ。この国を例えに出したのだった。
「独逸だ」
「今あの惨状にあるあの国ですか」
「あの国のことですか」
「独逸は凄かった」
既にだ。言葉は過去になっていた。
「ビスマルクの頃はな」
「しかしそのビスマルクが去ってから」
「問題はそれからでしたか」
「そうだ。ヴィルヘルム二世は見誤っていた」
そうだったとだ。伊上は酒を飲みつつ話す。
「独逸は拡張するべきではなかったのだ」
「ではどうするべきだったのでしょうか」
「海軍増強と植民地の確保以外の道は」

「領土は現状維持」
まずは領土から話す伊上だった。
「そして海軍もあそこまで極端には大きくしない」
「あくまで程々ですか」
「程度を見てのですか」
「そうした海軍にすべきだったのですか」
「そうして国内の産業を充実すべきだったのだ」
より一層というのだ。独逸の産業をだ。
「外交的には調停役に徹する」
「ビスマルクの様にですね」
「そうしていくのがよかったのですか」
「独逸は」
「英吉利、露西亜と衝突するべきではなかった」
ところがこう言ったところでだった。伊上は。

第二十四話　告げる真実その十四

独逸の立場から日本の立場になって述べた。
「しかし独逸と露西亜が揉めてくれたのは好都合だった」
「それはですか」
「我が国にとってはですね」
「そうだと」
「そうだ。露西亜の目が独逸に向かう」
それがだ。即ちだった。
「日本に向けてその牙を剥けないのだからな」
「日露戦争も考えればそうですね」
「あの戦争が戦わなくてはならず勝たなくてはならない戦争でしたが」
「それでもですか」
「ああした戦争は」
「戦争はしないに越したことはない」
伊上の考えはこうであった。
「賭けの要素が強いうえに多くの人材と予算を使うからだ」
「日露戦争でも後が大変でしたし」
「今も忘れられない位に」
「戦争は儲かるものではない」
戦争を知っているからこそだ。伊上は言い切れた。
「そのことをわかる者が増えることも祈る」
「それもですか」
「そのこともまた」
「そうだ。日本はこれからも果たしていくことが多い」
その果たすことをだ。日本にも転移させた。
「これからも。永遠にだ」
「その為にも舵取りは誤ってはなりませんね」

「独逸の様にならない様に」
「運命は決まっているにしてもな」
それもだというのだった。
「運命は決まっていてもだ」
「果たすべきことを必死に続ける」
「それが人のやることですね」
「そう思う」
ここまで言ってだった。伊上は。
盃の中の酒を飲み干した。そして自分でその酒を注ぎ入れてだ。
そのうえでまた飲む。その彼にだ。周りが慌てて言ってきた。
「あの、お入れしますが」
「そんな、先生御自身がとは」
「それは」
「いいのだ」
しかしだ。彼は微笑んで周りにこう返した。
「自分の酒は自分で入れたい」
「だからですか」
「それでなのですか」
「そうだ。だからだ」
こう言ってだ。また飲む彼だった。そうしてだ。
彼は若い彼等と共に酒を飲みだ。日本のこと、そして義正と真理のことも考えていた。そうしてなのだった。彼は今は酒を楽しむのだった。

第二十四話　完

２０１１・９・７

第二十五話　強い一歩その一

第二十五話　強い一歩

伊上の屋敷にだ。八条家と白杜家の者達がそれぞれ集っていた。
それでだ。彼等はそれぞれだ。宴の場である屋敷の大広間に集まりだ。それぞれ話していた。
そこは西洋、英吉利のそれを思わせるカーテンと窓が印象てきな白い部屋だった。その中においてだ。
お互いにだ。いぶかしむ顔で話す。
「我々は和解したというのに」
「何故またこうして共にとは」
「両家の者達を集めていますが」
「これは一体？」
「どういうことでしょうか」
こう言い合いだ。首を捻るばかりだった。しかしだ。
両家の当主達はだ。それぞれ和服で宴に出てだ。それで話していた。
「今回はですな」
「そうですな」
二人は向かい合ってだ。それでお互いの考えを出していく。
「間違いなく何かありますな」
「伊上さんは何かを御考えです」
そのことはすぐにわかった。しかしだった。
それ以上のことはどうしてもわからずだ。それでだった。
八条家の総帥がだ。言ったのだった。
「おそらくはです」
「我々のことですね」
「そうです、両家に関わることで、です」
それでだ。伊上は彼等を呼んだというのだ。

「そうしたのでしょう」
「だとすると」
彼の言葉を受けてだ。白杜家の総帥もだった。
考える顔でだ。述べたのだった。
「誰に関することなのか」
「義正と」
「真理のことですか」
「そう思います」
八条家の総帥はこう察した。
そうしてだった。また述べたのだった。
「問題はそれが何かですが」
「ふむ」
白杜家の総帥はその義正と真理を見た。彼等は。
タキシードに白いドレス、髪も整えてだ。
そのうえで宴の場にいた。その二人を見てだ。
彼はだ。呟いた。その言葉は。
「見たところ、いえ」
「そうですね。表には出さないようにしていますが」
「そうですな」
「ではやはり」
「あの二人のことですな」
「では」
そのことを把握してからだ。そのうえでだ。
二人はそれぞれの息子と娘を見てだ。考える。
そしてだ。今度は白杜家の主が言った。
「では、です」
「それでは？」
「二人は夫婦ですから」
「子供が出来たのではというのですね」
「そうではないでしょうか」

彼はこうだ。八条家の主に対して話した。
「それをここで家族に話す為に」
「いえ、それですと」
しかしだ。この考えにはだ。
八条家の主はだ。いぶかしむ顔で反論したのだった。
「あまりにも大袈裟です」
「家族同士の集まりにしてもですね」
「そうです。わざわざ伊上先生のお屋敷で言うことでもないでしょう」
「確かに。それは」
「病ではないでしょうか」
八条家の主は悲観論を口にした。
「二人のうちのどちらかが」
「そしてそのことをですか」
「ここで言うつもりではないでしょうか」
こう言ったのだった。

第二十五話　強い一歩その二

「ですからここにこうして」
「病ですか」
「病は辛いものです」
八条家の主は言った。
「それは貴方も御承知ですね」
「生きていて病に罹らなかった者なぞいません」
これが彼の返答だった。
「ですから」
「はい、だからそれではないでしょうか」
「では一体どちらが」
それに罹ってしまったのかとだ。白杜家の主は考えた。
そしてだ。次にはこう言った。
「どういった病に」
「それが問題ですね」
「そうですね。確かに」
「不安になってきました」
自然にだ。二人はそう思えてきたのだった。
「この宴は幸せなものではない」
「それを知らされるやもと思うと」
どうしてもだ。二人はそうならざると得なかった。義正と真理を見てだ。二人は考えていきだ。そうして不安なものを増していっていた。
しかしだ。義正と真理はだ。
今は伊上とだ。真剣な顔で囁き合っていた。
周りから少し距離を置きだ。そのうえでだった。
義正がだ。まず言った。
「では、です」

「それではだな」
「はい、もうすぐ家族の前に出てです」
「話すか」
「そうします」
強い声でだ。彼は言った。
「是非共」
「そうか。ではだ」
その言葉を聞いてだ。伊上もだ。
強い顔で頷きだ。応えたのだった。
「勇気を出して前に出ることだ」
「前にですね」
「後ろのことは気にしなくていい」
前に出ようという若者にはだ。最も有り難い言葉をだ。伊上は今言った。
「それはいい」
「そうですか。それでは」
「そしてだ」
伊上は今度は真理を見た。彼女もまた。
蒼ざめてはいる。しかし確かな顔でだ。こう応えたのだった。
「貴女もまた」
「そうさせてもらいます」
「同じだ。後ろは気にしなくていい」
「そうしてですね」
「前に出ることだ」
義正と同じことをだ。伊上は真理にも言った。
「いいな。後は開ける」
「前に出ればそれで」
「それを信じて前に出ることだ」
「信じる、ですか」
「信じることは力だ」

そういうものであると。伊上は。
真理、そして義正に話してであった。さらに。
今度は二人に対してだ。話したのだった。
「信じられる相手を信じる。それはだ」
「そうですね。では」
「家族を信じて」
「話して来なさい」
温かい笑顔でだ。二人を送り出したのだった。
こうして宴が進んだところでだ。周りから見れば不意にだ。
義正と真理は出て来てだ。そうしてだった。

第二十五話　強い一歩その三

家族達、二つの家の家族達にだ。話したのだった。
「皆さん、宜しいでしょうか」
「少しお時間を下さい」
「やはりですな」
「はい」
二人の父親達がだ。二人を見てだ。
そうしてだ。強張った顔で頷き合ってだ。
そのうえでだ。二人を見て話すのだった。
「はじまりましたか」
「いよいよ」
「では見守りましょう」
「何を言おうとも」
二人もだ。覚悟を決めてだ。子供達を見守ることにした。
家族の視線が自分達に集中していることを感じながら。その中でだ。
義正も真理もだ。少しずつ。
口を開きだ。そして言ったのだった。まずは真理がだった。
「今私にはです」
「真理さんには」
「まさか」
彼女の姉達がだ。妹の言葉を聞き言う。
「だからここにですか」
「私達を」
「聞こう」
兄がだ。ここで彼女達に言った。
「真理の言葉を」
「そうですね。今は」

「そうするべきですね」
「そうしよう」
これが妹達に言うことだった。
そうしてだ。義正の兄達もだ。
弟を見てだ。それぞれ言っていた。
「今日の義正はな」
「はい、いつもと違いますね」
「決定的な。何かがな」
義愛はだ。こう義智に返す。
「違うな」
「そうですね。間違いなく」
「問題は何が違うかだ」
義愛は末弟を見ながら言う。
「それがわからない」
「確かに。決意はしているようですが」
「その決意が何かがな」
「どうしてもですね」
「一体何を決めて何をするのか」
「それが」
「運命ですね」
ここでだった。言ったのは。
彼等の妹である義美だった。彼女がだった。
二人の兄達にだ。こう言ってきたのである。
「義正お兄様の」
「運命をか」
「決めたというんだね」
「そうです。そしてそれをです」
どうかとだ。義美は話していくのだった。
「私達は見守るべきです」
「例えその決意がどういったものでも」

「それでもだな」
「はい、そうしましょう」
彼女の言葉は決まっていた。その心もだ。
そうしてだった。彼女は。
二人の兄にだ。また言ったのだった。
「義愛お兄様も義智お兄様もですね」
「そうだな。そうするべきだな」
「絶対にな」
「はい、そうして下さい」
こう告げたのだった。こうしてだ。
誰もがだ。二人を見守っていた。家族として。
そしてだ。いよいよだった。
義正と真理はお互いの顔を見てだ。そうしてだった。

第二十五話　強い一歩その四

無表情、そして無言で頷き合いだ。お互いに。
前に出た。家族の前に。それを見てだ。
二人の母達がだ。話した。
「それではですね」
「今から何かがはじまりますね」
母親としてだ。それぞれだ。
二人を見てだ。話すのだった。
「いよいよ何かが」
「二人がはじめますね」
「では。私達は」
「はい、見守りましょう」
二人もだ。決意を固めてだった。そのうえで子供達を見守るのだった。
その二人はだ。横に並んでだった。
まずは無言だった。だが。
やがてだ。ゆっくりとだった。
真理がだ。口を開いて言った。
「私はです」
「そうだ。それからだ」
伊上は確かな顔でここで呟いた。
「言うのだ、そのまま」
「今お腹の中に子供がいます」
こう言ったのだった。義正の横で。
「主人の子がです。います」
「私達の子供です」
ここでだ。義正も言った。
「その子が今妻の中に宿っています」

「この子を。私達は育てていきます」
切実な顔でだ。真理は言う。そして。
皆その話を聞いていた。しかしだ。
本来なら祝福されるその話をだ。彼等は沈黙して聞いていた。
そしてだ。それからのことを待っていた。これで終わりとは思えなかったのだった。
その子、そして何があるのかをだ。彼等は待っていた。二人が言うことを。
そしてだった。真理が言ったのだった。その彼女が。
「ずっと。二人で」
「そうしていきます」
また義正も言う。そしてだ。
真理はだ。ここまで話してだ。
あらためて一呼吸置いて。そうして。
遂にだ。このことを告白した。
「私は今病に罹っています」
「そうか」
真理の父が。娘の言葉を聞いて。
そしてだ。静かに頷いたのだった。それだけだった。
そうして娘の言葉をだ。さらに聞くのだった。無言で。
「労咳です」
「妻は。その病に罹っています」
義正もだ。知っていると告白した。妻のことを。
「ですがそれでも私はです」
真理がだ。さらに言う。
決意をこれまで以上に顔に見せて。言うことは。
「子供を。私達の子供を産んで育てていきます」
「私達で」
また義正も言った。
「二人で、です」

「離れることなく育てていきます」
「病があろうともそれでもです」
「決して離れません」
言い切った。ここまで。
そしてだ。二人はさらに言った。
「二人で最後まで一緒にいてです」
「生まれてくる子供を育てていきます」
ここまで言ったのだった。最後まで。
そうしてだった。二人は。
あらためてだ。家族に話した。
「どうか。このことをです」
「わかって下さい」
「病に罹っていてもそれでも」
「共にいます」
言い切った。そうしてだった。

第二十五話　強い一歩その五

場は沈黙に包まれた。誰も何も言えなくなっていた。二人もその場に立っているだけになってしまった。しかし、だった。やがて。

義正の父がだ。言った。

「わかった」

「わかった？」

「そうだ、わかった」

こうだ。我が子達に言ったのである。

「御前達のことはわかった」

「僕達のことが」

「そうだ、わかった」

こう言うのである。

「二人で生きていくのだな」

「そうしていきます」

「病と共に」

労咳のこともだ。彼は言ったのだった。

「そうして子を産み育ててか」

「そのつもりです」

今度は真理がだ。彼に答えた。

「決めました。もう」

「決めたか」

ここまで聞いてだ。まただった。

彼は言った。こう。

「それがわかった。それならだ」

「それなら」

「そのまま歩くのだ」

二人を見据えてだ。そうしてだ。

彼はだ。義正と真理に対して言ったのである。

「いいな。二人で歩いていくのだ」
「そうしていいのですね」
「御前達が決めたことだ」
それが理由だとだ。彼は言う。
「それならだ。御前達が望む様に進むのだ」
「有り難うございます」
そしてだ。次にはだった。
白杜家の総帥、真理の父もだった。二人に対して言った。
「私も同じだ」
「お父様も」
「そうだ、同じだ」
義正の父を見て。そうしての言葉だった。
「同じだ」
「左様ですか」
「そうだ。同じだ」
こうだ。真理に顔を戻して話す。
「御前達は勇気を以てその二つのことを決めたな」
「はい」
真理は今度は己の父に対して答えた。
「その通りです」
「勇気があるならだ」
それならばだというのだ。彼は二人に言うのだった。
「その勇気を失わずにだ」
「そうしてですね」
「生きていくのだ。わしが言うのはそれだけだ」
「お父様・・・・・・」
真理は泣きそうな顔になった。しかしだ。
父に言われた勇気という言葉を思い出しだ。そしてだった。
それを止めた。それからだ。
義正を見てだ。こう言ったのだった。

「あの、では」
「そうですね」
義正も応えて。そのうえで。
まただ。言ったのだった。
「これからも二人で」
「生きていきます」
今度はだ。二人の兄弟達がだ。
そのそれぞれの場にいてだ。そこからだ。
二人に温かい笑顔を向けていた。そうしたのだ。
それだけだった。しかしそれで充分だった。二人にとっては。
二人は泣きそうになるのを堪えてそこにいた。ここでだ。
伊上がだ。場を変える為にこう執事に話した。

第二十五話　強い一歩その六

「いいか」
「はい、何でしょうか」
「音楽を用意してくれ」
「音楽をですか」
「ピアノがいいな」
部屋の端にあるその黒いピアノを見て言う。特別に仏蘭西から問い寄せた最高級のピアノだ。そのピアノを見て言うのである。
「それを演奏させるのだ」
「曲は」
「ショパンがいいか」
それだというのだ。
「それをかけよう」
「ショパンですか」
「そうだ、ショパンだ」
彼はまた言う。
「それがいい」
「わかりました。では」
「彼の奇麗な音楽がこの場には合っている」
それでショパンだというのだ。
「だからこそだ」
「では」
こうしてだ。場の雰囲気を変える為にだ。ここでだった。
ピアノが演奏される。その音楽はやはりショパンだった。
それを聞いてだ。場は変わった。
自然に落ち着いた雰囲気になっていく。その中でだ。
義正の兄弟達はそっと彼のところに来てだ。言うのだった。
「よく決断したな」

「見事だ」
まずは二人の兄が彼に声をかける。笑顔で。
そうしてだ。それぞれ彼の肩をぽんぽんと叩く。
「これからもな。二人でな」
「幸せになっていくんだ」
「幸せはもう決まっています」
義美もだ。微笑んでだ。兄に話す。
「後はそれを歩まれるだけです」
「それだけか」
「はい、そうです」
彼女はこう言ったのだった。
「御二人でそのままです」
「歩いていけばいいか」
「そうされて下さい」
これが妹の言葉だった。そしてその彼等の隣では。
真理がだ。彼女の兄姉達に言われていた。
まずは二人の姉がだ。彼女に言う。
「真理さん、是非共ね」
「いい子供を産んでね」
女としてだ。このことを言うのだった。
「いいわね、絶対によ」
「そうしてね」
「はい」
微笑んでだ。真理もだ。
頷く。そうしたのだ。
そして自分からもだ。真理は言った。
「産んで。そして」
「育てるのね」
「二人で」
「そうします。何があっても」

こう話してだった。彼女は前に出ることをあらためて決意し述べたのだった。
そうしてだ。宴が終わり屋敷に帰り。
義正は共にいる真理にだ。こう言ったのだった。
「一つの。大きなことでしたね」
「そうですね。今日私達がしたことは」
「一歩です」
義正はこうも言った。
「これは大きな一歩です」
「そうなりますね」
「はい、私達は共にいて」
そしてだというのだ。
「生まれてくる子供を育てることを」
「そのこともですね」
「そうしましょう。ずっと」
義正はその真理を見て言う。
「二人で。ずっと」
「それが三人になり」
「さらにですね」
「はい、そうしましょう」
こう話してだった。二人は決意をあらたにしたのだった。

第二十五話　強い一歩その七

そうしてだ。宴が終わり屋敷に帰り。
義正は共にいる真理にだ。こう言ったのだった。
「一つの。大きなことでしたね」
「そうですね。今日私達がしたことは」
「一歩です」
義正はこうも言った。
「これは大きな一歩です」
「そうなりますね」
「はい、私達は共にいて」
そしてだというのだ。
「生まれてくる子供を育てることを」
「そのこともですね」
「そうしましょう。ずっと」
義正はその真理を見て言う。
「二人で。ずっと」
「それが三人になり」
「さらにですね」
「はい、そうしましょう」
こう話してだった。二人は決意をあらたにしたのだった。
そんな彼等をだ。扉の陰から見て。佐藤は。
一旦その扉から離れそのうえで婆やにだ。密かに囁いたのだった。
「私はです」
「佐藤さんもですね」
「御二人を誤解していました」
「はい、私もです」
婆やもだというのだ。
「御二人は私達が思っていた以上にです」

「素晴らしい方々ですね」
「まことに」
そうした意味での誤解だった。二人の誤解は。
「その通りですね」
「全くです。では私は」
「はい、私もまた」
「共にいましょう」
佐藤は婆やに言った。
「あの方々と」
「最後の最後までお仕えされるのですね」
「病。労咳なぞです」
その病、不治の病についてもだった。佐藤は言った。
「大したことはないのです」
「そのことはですね」
「はい、どうということはありません」
こう言い切った。
「大事なことはです」
「どれだけの素晴らしい時を過ごすかですね」
「御二人はわかっておられます」
そうしたことがだというのだ。
「ですから。私もです」
「そして私もまた」
「御二人を最後の最後までお世話します」
「はい。では今は」
「今は」
「お茶を淹れましょうか」
微笑みだ。婆やは言った。
「それを淹れてお二人にお出ししましょう」
「そうですね。それがいいですね」
「紅茶を」

婆やが考えている茶はこれだった。
「それに生姜も入れて」
「生姜もですか」
「生姜は身体にいいですから」
だからだとだ。真理を気遣ってのことであるのは言うまでもない。
「それではそうしましょう」
「はい、それでは」
「では今から」
紅茶を用意するというのだ。そしてだった。
佐藤もだ。微笑んで婆やに述べた。
「では私も今からです」
「御風呂ですね」
「御風呂は身体にとてもいいです」
だからだというのだ。彼もまた。
「今からそうしてきます」
「わかりました。ではお互いに」
「はじまったばかりですね」
佐藤はこんなことも口にした。
「御二人の道は」
「そうですね。実ははじまりだったのですね」
「そうですね」
佐藤は微笑んだまま話す。
「結婚がはじまりではなくです」
「今日がはじまりだったのです」
婆やもだ。微笑んでだった。

第二十五話　強い一歩その八

そうして話してだ。二人もまた。
義正と真理について話してだ。動くのだった。彼等も理解したのである。
そしてだった。彼等は。
まずは婆やがだ。二人のところにだ。
その生姜入りの紅茶を差し出してだ。言うのである。
「どうぞ」
「紅茶ですね」
「はい。お飲み下さい」
こう言って差し出したのである。その紅茶を。
「そうしてお楽しみ下さい」
「有り難うございます」
真理が笑顔で婆やに応えて言葉を返した。
「それでは」
「ごゆっくりとお楽しみ下さい」
「そしてです」
ここでだ。佐藤も来てだ。二人に言った。
「御風呂も用意してありますので」
「御風呂もですか」
「もう暫くしたら入られます」
そのだ。風呂がだというのだ。
「ですから。お茶の後で」
「はい」
真理が微笑んで応えた。そうしてだった。
その微笑みでだ。佐藤に答えた。
「ではお茶の後で」
「そうして下さい」

「身体を温めることですね」
聡美は自分からこんなことも言った。
「やはりまずは」
「御身体をですか」
「はい、病には」
労咳のことはだ。もう隠していなかった。それでだ。
立ち向かう顔になりだ。真理は言うのだった。
「それが一番ですから」
「そうですね。確かに」
真理に言われてだ。佐藤もだった。
頷いてだ。そうしてから答えたのだった。
「では。是非です」
「温めさせてもらいます」
「私もまた」
ここでだ。佐藤もだ。
深く思う顔になりだ。そのうえでだ。
共にいる義正にだ。こう言ったのである。
「あの」
「何だい？」
「私はこうまでなれるのでしょうか」
こうだ。彼に尋ねたのである。
「旦那様と奥様の様に」
「私達の様にですか」
「はい、なれるのでしょうか」
「そういえば君もまた」
「今度子供が生まれました」
彼はだ。そうなったというのだ。
「そしてその子と共に」
「生きていく」
「しかしです」

「しかし？」
「私は今は」
どうかというのだ。二人に対して話していく。
「御二人の様なことがあってもそうできるのか」
「不安なんだね」
「そうなりました」
こう話すのである。二人、とりわけ義正に対して。
「私自身か妻、子供にそうしたことがあっても」
「大丈夫だよ」
しかしだった。義正がだ。佐藤に対してこう答えたのだった。
そしてだ。あらためて告げたのだった。
「それは思うことがあれば」
「それがあればですか」
「最後まで共にいたいと思えば」
それがあればだというのだ。彼もまた。

第二十五話　強い一歩その九

「誰でもできるから」
「誰でもですか」
「うん、僕達は」
真理も見てだ。そうしてだ。
義正は穏やかに話していく。その声は澄み切っている。
その澄んだ声でだ。話していってだ。彼は言う。
「あの時にそれがわかったんだ」
「家族の皆様の前でお話されたその時にですか」
「うん、あの時に」
その通りだというのだ。あの告白の時にだ。
「僕達はわかったんだ」
「左様ですか」
「そう。そして」
さらにだった。
「見えてきたんだ」
「何がですか？御覧になられたというのは」
「うん、人は前に。前に純粋に出れば」
それでどうなるか。それが見えてきたというのだ。
「それで光のある場所にね」
「その光のある場所に」
「行けるんだ」
「では私もその時には」
「誰でもだよ」
佐藤だけに限らないというのだ。それは。
「誰でもね。純粋に思って前に出ればね」
「道が開けて」
「そう、そこに行けるんだ」

微笑みだ。彼は今二人でいる場所のことを佐藤に話していく。その語る顔こそがだ。そこにいるということの何よりの証だった。
その顔でだ。彼はさらに言うのだった。
「だからね。誰でもね」
「行けるからこそ」
「そのことについて思うことはないよ」
これが佐藤への言葉だった。
そしてだ。ここまで言ってだ。彼は。
こうだ。佐藤に言った。
「ではお風呂は」
「それですね」
「僕もね」
入るというのだ。微笑んで。
「そうさせてもらうよ」
「はい、是非」
「お風呂はいいものだよ」
義正は風呂が好きだ。それは何故かというと。
「心も癒してくれるから」
「身体だけではなく」
「だからいいんだ」
「そうも思いまして」
「心から全てがはじまるから」
「はい、あらゆることが」
「だからこそ」
入るというのだ。彼もまた。
そしてだ。彼も入るとしてだ。佐藤にも言ったのだった。
「後は僕達だけじゃなくて」
「私達もですか」
「いつもそうしているじゃないか」
この屋敷では風呂は一つだ。まずは義正達が入りそのうえで使用

人達、佐藤も含めて入ることになっている。かなり広い風呂なのだ。
「だからね」
「では。そうさせてもらいます」
「一つの幸せは一人だけが楽しんでいいものじゃないんだ」
その風呂一つ取ってもだ。そうだというのだ。
「だからね」
「他の者にも伝えておきます」
「そう、是非そうしてね」
「わかっています」
こう応えてだった。佐藤も風呂を楽しむことになった。
義正も真理も二人でだ。その一歩を歩み出したのだった。今それがはじまった。

第二十五話　完

２０１１・９・１４

第二十六話　育っていくものその一

第二十六話　育っていくもの

自らの病のことを家族に告白した真理は暫くの間平穏だった。しかし。

その腹はだ。少しずつだった。

「大きくなってきているわね」

「そうね」

彼女に顔を見せに来た姉達がだ。その腹を見て言うのだった。真理は今和服だ。しかしその上からだ。腹の膨らみが少しずつわかるようになってきていた。

それを見てだ。彼女達は言うのである。

「本当に何か」

「不思議ね」

「ええ、私達はまだだけれど」

「真理さんは少しずつね」

どうなってきているのか。二人はそのことも言った。

「お母さんになろうとしているのね」

「そうなっているのね」

「そうですね」

真理もだ。二人の言葉に応えてだった。

にこやかに微笑みだ。こう言った。

「私と義正さんの子供がこうして」

「育っていっている」

「真理さんのお腹の中で」

「そのことがとても嬉しくて」

それに加えてだった。

「不思議です」

「不思議」

「そうだともいうのですね」
「はい」
そうだとだ。真理はまた微笑んで答えた。今度は答えたのだ。
「私が。母親になるなんて」
「ですがそれはですね」
「女性なら誰でもです」
母親になる。そういうものだというのだ。
そのことを話してだ。そうして。
真理は姉達にだ。こうも言った。
「それではですけれど」
「それでは？」
「といいますと」
「お茶を」
それをだ。どうかというのだ。
「如何でしょうか」
「そうですね。珈琲は妊娠にはよくないそうですが」
「あまり。そうですね」
「ですからお茶です」
自分のことも考えてだ。茶にしたというのだ。
そしてだ。その茶が何かというと。
「抹茶を」
「我が国のお茶をですか」
「それをなのですね」
「あのお茶が一番身体にいいです」
それでその茶にするというのだ。
「ですから」
「では。真理さんの御好意に甘えて」
「私達も」
「お姉様達もですね」
姉達にその抹茶を勧めてからだ。さらにだった。

彼女はだ。その姉達にこうも話した。
「やがては」
「母親になる」
「私達も」
「女性は全てそうですね」
姉達に言われたことをそのまま返した形になった。
そうしてだ。二人に話したのだ。それを受けてだ。
姉達も微笑みだ。こう言った。
「そうですね。それではです」
「私達もやがて」
「姉妹三人で」
彼女自身も入れて。それでだというのだ。
「幸せになりましょう」
「母親になりですね」
「そのうえで」
「是非」
こう姉達に話したのである。そしてそれは。
姉の真美と真子だけでなくだ。友人である麻実子と喜久子にもだ。
話すのだった。ただ話すことは子供のことだけでだ。病のことは。
隠しそうしてだ。己の屋敷で話すのだった。
それを聞いてだ。二人は祝福の言葉を述べたのだった。
「おめでとうございます」
「真理さんも遂にですね」
「はい、いよいよです」
こう話すのである。

第二十六話　育っていくものその二

「私も母親に」
「何か夢の様ですね」
「そうですね」
喜久子がだ。麻実子の言葉に頷いていた。
「ですがそれはです」
「私達もですね」
「そうです。私も麻実子さんも」
麻実子にこう話す彼女だった。
「やがてはです」
「母親になる」
「信じられないですね」
喜久子はこんなことも言った。
「それは」
「はい、とても」
麻実子は素直に喜久子に答えた。そのうえでの言葉だった。
それでだ。彼女はこうも言った。
「夢の様な御話です」
「しかしそれは夢ではなく」
「現実なのですね」
「そうです」
まさにそうだというのだ。現実だとだ。
「私達にとっても」
「女性なら誰でも」
麻実子はまた言った。
「そうなるとしても」
「現実に。私達自身にそれが起こらない限り」
「夢に思えて仕方ありません」

実際にだ。夢を見る様な顔で麻実子は話す。
そのうえでだ。真理を見てだ。そして言うのだった。
「真理さんにとってそれは」
「いえ、私も」
真理もだ。ここで言った。
「何か。今も」
「夢みたいですか」
「そうなのですか」
「現実のものとは思えないのです」
そうだとだ。二人に話すのだった。
「夢幻の中にいるような」
「子供がお腹の中にいても」
「それは」
「はい、現実には思えないところがあります」
真理はまた麻実子と喜久子に話した。
「今もです」
「左様ですか。実際に妊娠されていても」
「そうした風に思われるのですね」
「女性が結婚して子供を産む」
真理はまた言った。このことを。
「そして育てることですが」
「人間の中で最も神秘的ですね」
「不思議なことですね」
「かえってそのことについてよく考えるようになりました」
子供ができたことによりだ。そうして。
病になったことも大きかった。だがそのことは二人には話さず。
子供のことだけを話してだ。彼女は二人に述べた。
「女性にあるその特別なことについて」
「何故でしょうか」
麻実子がまた言った。

「私達女性が子供を産めるのか」
「そうですね。男性は宿し」
男からそれが入れられ。そうしてだと。喜久子も話す。
「そして女性が産む」
「御互いがいないと果たせないことですが」
「でも。女性が産めるというのは」
「こう思うのです」
まただ。真理が話してきた。
「女性は太陽だと」
「あっ、その御言葉は確か」
「あの方の御言葉ですね」
「平塚らいてうさんでしたね」
麻実子と喜久子に続いてだ。真理も言った。そうして。

第二十六話　育っていくものその三

この人物の名を出してだ。そのうえで言ったのである。
「女性運動家の」
「その方が言っておられますね」
「女性は太陽だったと」
「はい、ですから女性はです」
真理はそこから言う。女性は太陽だという主張から。
「子供を産み育てられるのではないでしょうか」
「太陽だから」
「それでなのですか」
「そうではないでしょうか」
真理は考える、それも海の様に深く考えていた。
そしてだ。今度はこうも言ったのだ。
「国によっては女性は海ともされますね」
「ですね。我が国では山だとも言います」
「海であり山ですか」
「海も山も多くのものをその中に宿しています」
その女性だという海や山が。そうだというのだ。
「それと同じで」
「女性は産むことができる」
「中にあるからこそ」
「そして太陽は」
また太陽の話に戻った。ここで。
「その光で命を育みますね」
「それも女性のもの」
「だからですか」
「ですから女性にはそれができるのではないでしょうか」
子供を産む、それがだというのだ。

「ですから」
「その太陽が女性」
「海や山も」
「そうなるからこそですか」
「子供を産めるのですか」
「はい」
真理は述べた。また。
「そう思えてきました」
「そうかも知れませんね」
真理のそうした言葉に最初に頷いたのは喜久子だった。
彼女も深く考えた顔になりだ。そして言うのだった。
「女性がそうした存在だからこそ」
「そういえばです」
続いてだ。麻実子だった。
彼女はだ。こう言ったのだった。
「全ては。女性からはじまるという話もありましたね」
「希臘の神話だったでしょうか」
「確か」
新しく読んだ本から麻実子は話す。真理に応えながら。
「そうだったかと」
「あれは確か大地でしたね」
「大地もまた女性なのですね」
「そうなりますね。あの神話ですと」
「大地でもあるからですね」
ここまで話してだ。そうしてだった。
麻実子も頷くことが出来た。女性というものに対して。
「私達は。そうした存在だからこそですね」
「命を産めますね」
「そうなるのですね」
今度は喜久子に話した麻実子だった。その話を横で聞いてだ。

真理はだ。その二人に微笑みこう述べた。
「では私は太陽になって」
「そうしてですね」
「産まれますね」
「そうします」
こう言ったのだった。にこやかに決意を固めて。
その時は次第に近付いてきていた。しかし。
進んでいたのはそれだけではなかった。今まただった。
真理は咳込みそれを出してしまった。丁度そこには義正もいた。
屋敷の緑の中でそれを出してしまい。真理は暗い顔になった。だがその彼女に。

第二十六話　育っていくものその四

義正がだ。こう言った。
「大丈夫です」
「そうですね。まだ」
「はい、まだです」
彼も微笑みだ。言うのだった。
「労咳はそこまで早く進みません」
「だからですね」
「はい、大丈夫です」
これが義正の言葉だった。
「御安心下さい」
「そうですか」
「それまで。時間があります」
時間の話もだ。義正はしてみせた。
「何も気にやまれることはありません」
「そうですね。それでは」
「今を過ごしましょう」
これが聡美にだ。彼の言うことだった。
「そうしましょう」
「わかりました」
聡美は義正の言葉に頷き。そうしてだった。
そのうえでだ。二人でだ。
庭を歩きだ。その中でだ。
真理はあるものを見た。それは一輪の花だった。
白い百合だった。それが庭の池のほとりにある。それを見てだ。
真理はだ。義正に話した。
「あの時もでしたね」
「そうでしたね。パーティーの席で」

「花を見ましたね」
真理は微笑んで義正に話す。
「この花を」
「百合は素晴らしい花です」
義正もだ。微笑んでだ。真理に話す。
「花言葉は清純です」
「清純ですか」
「そうです。清純です」
その清純をだ。二人で見てだ。
真理はだ。また言うのだった。
「特に白い百合は」
「見てもわかりますね」
「それが百合ですか」
「そうです。思えばあの時に私達が出会った時も」
この花を見ていた。そのことをだ。
二人で思い出しながらだ。見ている。
白い花が青い池のほとりにある。その青も見てだ。
真理はだ。青についても話した。
「青もありましたね」
「はい、百合は水辺にあるものですから」
「その青のほとりにあって」
「あの時と同じで」
「白と青はどちらも」
その二つの色について。義正は緑の上にいて話す。二人は庭の草原の上に立っている。そこからその白と青を見ているのである。
そこでだ。義正はまた話した。
「清純ですね」
「私達の中にあるのは」
「人は誰しも清純なばかりではありません」
「そうですね。誰もが」

「中には汚れたものもあります」
そうした意味でもだ。人間だというのだ。
しかしだ。それでもだとだ。また言う義正だった。
「醜いものもまた」
「ええ。人は」
「ですがです」
ここでだ。義正は話をまた動かした。
「それと共に」
「清純もですね」
「人にはあります」
全く違うものがそれぞれだ。人の中にはあるというのだ。

第二十六話　育っていくものその五

「そのことを憂うこともないのでしょう」
「汚れたものや醜いものがあったとしても」
「そう思います。あの百合と池を見て奇麗だと思いますね」
「はい」
こくりと頷いて。真理は答えた。
「そう思います」
「ならそれでいいのです」
「いいのですね。それで」
「自然にそう思う。それだけで」
「では今は」
「二人で見ましょう」
見たままでの。そのうえでの言葉だった。
「この百合と池を」
「庭の中で」
「緑と白、そして青は」
全て庭の中にある。その中において。
義正は先の二つの色に加えて。この色も述べた。
その三つの色についてだ。真理は話した。
「人の心を癒してくれます」
「そうした色ですね」
「よく二人で見てきましたね」
義正はまた言った。
「空でも森でも海でも」
「神戸には。いえ私達の周りには」
「いつもこの三つの色があります」
白、青、そして緑が。
「いつも全てなくともそのうちの一つは必ずあります」

「有り難いことに」
「ではその中で生きましょう」
微笑んでだ。そうしてだった。
二人でだ。その中にいたのだった。
その中でだ。次第にだ。
真理の中にある命は成長していく。日に日に大きくなり。
かなり目立つ様になっていた。婆やはその彼女を見て。
目を細めさせ。こう言ったのだった。
「幸せですね」
「はい、今とても」
「これは人の最高の喜びの一つですから」
「人のですか」
「愛する人との命が育っていくことを感じていく」
そのことがだというのだ。
「それは最高の幸せなのです」
「だからですか」
「はい、幸せです」
これが真理への。婆やの言葉だった。
「お嬢様は今その中におられるのです」
「そうですね。私は」
「御自身でもそう思われますね」
「幸せです」
何の歪みもない、そうした笑みでの言葉だった。
「私は今本当に」
「そう言えることもまた、ですね」
「幸せです」
婆やに言った。また。
「本当に」
「では最後の最後までです」
「幸せのままでいる」

「そうして下さい」
これは婆やの言いたいことだった。
「是非」
「わかりました。それでは」
「はい、それでは」
婆やとも心を交えさせる。真理の心は確かに固められていっていた。しかしだ。
義正と二人だけにいる時にだ。こんなことを言ったのだ。
庭を窓から見てお茶を飲みながらだ。夫に対して問うた。
「あの」
「何でしょうか」
「若しもですが」
おずおずとだ。一呼吸置いてから尋ねる。
「私の病が進んで」
「そうしてですか」
「私のお腹の中にもでしょうか」
こうだ。その大きくなった腹を見て言うのだった。それは前よりも大きくなっていた。まさに日に日にだ。育ってきているのがわかるものだった。

第二十六話　育っていくものその六

その腹を見つつだ。彼女は言うのである。
「病が入るのでしょうか」
「労咳が」
「そうなるのでしょうか」
「前にもお話しましたが」
しかしだ。それでもだとだ。義正は前置きしてから妻に話した。
「それはありません」
「決してですね」
「はい、ありません」
それはないというのである。
「それはもうわかっていることです」
「病であるのは私だけですか」
「労咳は確かに伝染します」
そうした病であることもわかっている。義正はあくまで嘘は言わない。
しかしだ。それでもだというのだ。
「ですがお腹の中にまでです」
「入ることはないのですね」
「真理さんだけです」
あくまでだ。彼女だけだというのだ。
「私達の子供にはです」
「それはなく」
「そうです。ですから安心してです」
「この子を産めるのですね」
「何の心配も不安もいりません」
そうしたことは一切だと。己の妻に話した。
「御安心下さい」

「そうですか。それでは」
「後は。子供が産まれ」
「それからですね」
「生まれて終わりではありません」
やはりだ。ここでもそれからだった。
「生まれたその子を私達で」
「育てることですね」
「そうしていくものです」
これが彼の言うことでありだ。実際に言ったのである。
「ですから憂いなくです」
「育てていけばいいのですね」
「私達二人で」
一人ではなかった。あくまで二人だった。
「そうしましょう」
「はい、では」
「労咳には様々な偏見があります」
この時代においてはだ。まだそれは強かった。まだ座敷牢に入れられるということもあった。労咳に対して誰もが無知である結果だった。
だからそうなっていた。それでだったのだ。
しかしだ。義正はだった。
その偏見についてだ。こう真理に話した。
「西洋ではそれがなくなってきています」
「あの地ではですか」
「西洋でもまた労咳に悩まされています」
かつてはどの国もだ。労咳で多くの者を失っていたのだ。それは何も日本のことだけでなくだ。多くの国でも同じことだったのだ。
しかしだ。西洋ではどうかとだ。義正は話した。
「しかしそれでもです」
「人と分けられることはないのですね」

「それはなくなっています」
「伝染するというのに」
「そうです。そうした酷く伝染する病ではないのです」
「だから義正さんも私と共にいて」
「何の問題もありません」
彼もだ。そうだというのだ。
「そして私達の子供も」
「何の問題もなく」
「産まれます。そして育ちます」
「憂いなく」
「むしろ恐ろしいのは憂いです」
そのだ。それだというのだ。

第二十六話　育っていくものその七

「それですから」
「だからですか」
「はい、心配も不安もなく」
そうしたことなしにだ。彼女はだというのだ。
「貴女の果たされることをされて下さい」
「そうですね。それでは」
「御安心されて向かわれて下さい」
ここまで話してだ。義正は。
真理にだ。こんなことを提案したのだった。
「それではです」
「それでは？」
「紅茶と。それに」
「それに？」
「お菓子にしましょう」
そしてだ。さらにだった。
「後は音楽も」
「それもですか」
「音楽は。そうですね」
少し頭の中で選んだ。その音楽は。
「前に聴いたヴェーバーにしましょうか」
「あの労咳だったという」
「はい、その彼です」
彼の音楽をだ。ここでも聴こうというのだ。
「そうされますか」
「では」
真理もだ。義正のその言葉に頷き。
「その様に」

「近頃はどうも」
「ウェーバーをよく聴いてますね」
「そうですね。そしてそれは」
「私の病気のことがわかってから」
「はい、そうなっていますね」
労咳のことがわかってからだった。まさに。
「本当に」
「ウェーバーは前から好きでした」
その音楽家自体はだというのだ。
「ですが」
「それでもですね」
「今は前よりもさらにです」
「お好きなのですね」
「思い入れがあります」
そしてだ。その思い入れの理由もだ。義正は真理に話した。
「それができたのはやはり」
「私のことですね」
「はい、貴女のことがあり」
真理のだ。その身体のことからだった。
やはりそれによるとだ。義正は話してだ。
真理を見てだ。自然と優しい顔になった。
その優しい顔のままでウェーバーをかける。その音楽を聴きながら。
真理の隣に来てだ。今述べた言葉は。
「私はこの音楽をより知りました」
「私の。労咳で」
「ウェーバーは労咳の中で作品を生み出していきました」
「死に向かいながらですか」
「はい、そうしながら」
真理を見てだ。そうしての言葉だった。

その彼女を見つつだ。延べたのである。
「ですから私達もです」
「ウェーバーの様に」
「二人で。生み出していきましょう」
「そうですね。私達の子供を」
二人の関心は次第にだ。二人の間の子供のことに移っていた。
その子の出産がまた近付いた。そのことを感じながら。
真理はだ。静かに言った。
「もうすぐですね」
「はい、本当に」
「私の中に命が少しずつ育っていっているのですね」
「私達の命が」
義正もだ。そのことを実感していた。

第二十六話　育っていくものその八

妻のその膨らんだ腹を見て。そうしての言葉だった。
「今も少しずつ」
「そうです。今は」
「確か八ヶ月ですね」
「あと二ヶ月です」
見ればその腹はだ。かなり大きくなり意識せずして見ずともわかるまでになっていた。その中に命が育っていることは明らかだった。
命を見ながらだ。義正はまた言った。
「楽しみですね。そして」
「生まれればですね」
「私達で育てましょう」
「是非共」
「子供は。二人で育てることが理想ですから」
夫婦で。そうした意味での言葉だった。
「それをはじめましょう」
「そのことを思うと」
真理の顔は微笑みだ。それで。
幸せにだ。言葉を出したのだった。
「もうそのことだけで一杯になります」
「子供のことで」
「不思議ですね。労咳は今も私の中にあって」
死、即ちそれがだった。
「少しずつ私はその中に消えようとしているのに」
「新しい命のことを思うと」
「私達の愛する子供が生まれると思うと」
「自然にです」
微笑みを浮かべての言葉だった。

「そのことで一杯になります」
「私もです」
「義正さんもですか」
「私達の育む命のことを考えると」
本当にだ。それだけでだというのだ。
「そのことで全てが一杯になります」
「頭の中も心の中も」
「その全てが本当に」
「瞬く間に満たされてですね」
「そのことだけが考えられなくなります」
そしてだ。それはというと。
「幸せのことだけを」
「幸せをですね」
「はい、幸せをです」
そのことでだ。全てが満たされるとだ。真理に話すのである。
「そのことだけを」
「それは私もです」
真理もだ。微笑み言うのだった。
「不幸は幸せの前には消えてしまうのですね」
「そう思います、私も」
「義正さんもその様にですね」
「そのことがわかってきました」
実際にだ。不幸だけでなく幸福も知りだ。それでだというのだ。
「確かに」
「このまま子供が生まれれば」
「幸せはそこからもはじまります」
「生まれるまでも幸せであり生まれてからもですね」
「私達の子供を育てる幸せです」
そうしたことがわかってきていた。二人で。
二人は幸せを味わいだ。時を過ごしていた。

八ヶ月がだ。九ヶ月になりそして遂に。十ヶ月になった。
その時にだ。真理の父がだ。屋敷に来てだ。
そのうえでだ。己の娘にこう言った。
「いよいよだな」
「はい、私達の命がもうすぐです」
「生まれるのか」
「お父様にとってもですね」
「孫になるな」
そうなるとだ。彼も笑みを浮かべて言った。

第二十六話　育っていくものその九

「わしの」
「はい、私達の子供であると共に」
「わし等の孫か」
「この子がもうすぐ産まれます」
「そして育っていく」
何時しかだ。彼の顔も。
笑みを深くさせていた。そうして言うのだった。
「思い出すな」
「思い出されるとは？」
「御前達のことだ」
真理を見ての言葉だった。自身の娘を。
「御前達四人の子供達がそれぞれ生まれた時をだ」
「私達のですか」
「子供はかすがいだ」
よく言われている言葉をだ。彼も口にした。
「まさにな」
「ではそのかすがいをですね」
「御前達は授かる」
そうなるというのである。
「これからな」
「そうですね。だからこそ」
「幸せを育むのだ」
これが娘への言葉だった。
「御前は義正君と共にだ」
「そうしてですね」
「さらにだ」
まだあった。その育むべき幸せは。

「生まれてくる子供と共にだ」
「はい、この娘と共に」
「間も無くだ。本当に」
幸せがだ。生まれるのはというのだ。
「それを待っているのだ。それでだが」
「それでとは？」
「名前は決まっているのか」
娘の目を見てだ。そして問うた言葉だった。
「それはどうなのだ」
「名前ですか」
「それは決まっているのか」
また娘に問うたのだった。
「どうなのだ、それは」
「男の子ならです」
まずはその場合にはどうなのかとだ。真理は父に話す。
「義幸にしようと」
「義幸か」
「はい、義、正しいことと幸、幸せの二つを」
「その二つを名前にしてか」
「この二つを忘れないで生きて欲しいと思いまして」
それでだ。この名前にしたというのだ。
「どうでしょうか」
「いい名前だ」
父は娘からその名前を聞きだ。こう答えた。
「とてもな」
「そう思われますか」
「思う。正しいことも幸せも忘れてはならない」
このことがわかっているからだ。それでだった。
彼も満足した顔で頷きだ。こう言ったのである。
「いい名前だ。だからこそ」

「有り難うございます」
「それでだ」
娘にだ。父としてさらに尋ねた。
「娘だった場合はどうするのだ」
「女の子の場合はですね」
「その場合も決めているのか」
「福義子にしようと思っています」
「それが女の子の名前か」
「はい、生まれた場合の」
女の子の場合はだ。この名前にするというのだ。
「この場合はどうでしょうか」
「福もまただな」
父はそこから話した。その文字から。

第二十六話　育っていくものその十

「幸せだな」
「幸福の福ですから」
「そして義か」
「義は八条家の文字なので」
「わかっている。だからだな」
「正しいこと。それは外せないからと」
それでだ。義という言葉は名前に必ず入れるというのだ」
「ですから」
「幸せと正しいものを併せ持つ娘か」
「女の子であっても」
「そうあるべきなのだ」
遠い目になりだ。父は真理に話した。
「人は」
「人はですか」
「男であっても女であってもだ」
「正しく幸せであるべきなのだ」
こうだ。娘を見てだった。
「必ずだ」
「そうですね。それは本当に」
「名前はそのまま人生を築いていく」
「だからこそ余計にですね」
「それでいい。ではその子供をだ」
どう育てていくべきか。このことはもう答えとして出ていた。
「二人で育てるのだ」
「正しく、幸せに」
「そうしてくれ。いいな」
「わかりました。それでは」

「では。産むのだ」
温かい目になっていた。まさに父の目だった。
「いいな。女としての正念場だが」
「産むということは」
「わしは男だ。男は子供を産むことはできない」
これは世の摂理だ。どうしてもできるものではない。
だからだ。それについてはどうかともいうのだ。
「果たせとしか言えぬ」
「その大仕事を」
「果たせ。いいな」
実際にだ。こう言ってみせたのだった。
「わかったな」
「はい、それでは」
こうした話もだ。父とした。そのうえでだ。
それから数日後、遂にだった。
真理は破水した。すぐに助産婦、それに医師が呼ばれ。
出産に入る。その為に寝室に入った。
義正はその隣の部屋にいてだ。佐藤と婆やにだ。こんなことを言った。
「僕ができることは」
「はい、それはですね」
「今はですね」
「こうして待つことだけだ」
そうするちかないとだ。わかったうえでの言葉だった。
その部屋にソファーに身体をかがめさせてだ。それで言うのだった。
「それだけだね」
「しかしの待つことがです」
「旦那様の今されることなのです」
「待つことも。妻がそれを果たすのを待つことも」

「そうだね。待つこともね」
義正は二人の言葉にだ。まずは頷いた。
それからだった。こう言うのだった。
「では今はね」
「はい、どうされますか」
「今は」
「珈琲、いやお茶がいいかな」
そちらの方がだというのだ。
「気持ちが落ち着くのは」
「はい、ではすぐに」
「お茶を」
「それにお菓子もあるかな」
お茶とくればそれもだ。義正はそれもあるかというのだ。

第二十六話　育っていくものその十一

「何かあればいいけれど」
「ケーキがあります」
婆やが笑顔でこう答えた。
「それにクッキーも」
「クッキーもですか」
「どれにされますか」
微笑みだ。義正に対して問う婆やだった。
「ケーキかクッキーか」
「クッキーにするよ」
義正は微笑みだ。それにすると答えた。
「ではそれに」
「はい、それでは今から持って来ます」
こうしてだった。真理の出産を待っている間にだ。
彼は紅茶を飲みクッキーを食べる。そうしながら時を待つ。
その中でだ。婆やがまた彼に話した。今は義正が言いだ。三人で紅茶を飲みクッキーを食べている。その中でだ。婆あは言ったのである。
「主人が言っていました」
「御主人がですか」
「そうです」
佐藤の言葉にもだ。婆あは笑顔で応える。
「男はこうした時はもどかしくて仕方がないですが」
「それでもですね」
「楽しみにして待つことだと」
「そう言われたのですか」
「それが男の務めだと」
それがだとだ。務めだというのだ。

「楽しみにです」
「では今の僕は」
紅茶を飲みつつだ。義正が応えた。
「こうして紅茶を飲み。真理さんが出産されるその時を」
「楽しみですね」
「不安ではあります」
果たしてだ。子供が無事に生まれるかと思うとだ。
それは不安で仕方ない。しかしだというのだ。
「ですがそれでも」
「楽しみですね」
「期待ですね」
それがあるというのだ。今の彼の中には。
「それに希望ですね」
「不安よりも大きいでしょうか」
「大きくなってきました」
微笑みだ。婆やに答えた。
「貴女に言われて」
「そうですか。私の言葉で」
「そうなりました」
そうだと答えてだ。そうしてだった。
また紅茶を口に含む。そしてこうも言ったのだった。
「若しかして結婚はです」
「結婚は」
「お茶と同じかも知れませんね」
その紅茶を味わっての言葉だった。
「最初はどんな味なのか不安になりそれ以上に期待してです」
「それを見て楽しくもありですね」
「はい、それで」
さらにだというのだ。
「飲むとです」

「その味にですね」
「身を浸してしまい離れられなくなります」
そうなるというのだ。さらに。
「幸せの中に」
「そうですね。そしてずっといたくなりますね」
飲みたくなるし飲む。それをこう表現して話す姿やだった。
「そうなりますね」
「はい、それに」
「それにですね」
「子供が生まれることは」
そのこと、今のこともだ。彼は話していく。

第二十六話　育っていくものその十二

「その中でも最も楽しむことですね」
「そうです。主人もそのことがわかっているから」
「言われたのですね」
「そう思います」
婆やもだ。義正の言葉にだ。
頷きだ。そうして言うのだった。
「そして女にとってはです」
「女にとっては」
「どうなのでしょうか。出産とは」
義正だけでなくだ。佐藤もそのことを問うた。
「一体それは」
「幸せなのはわかりますが」
「とても辛いです」
まずはこう答える婆やだった。
「ですがそれでもです」
「喜びですか」
「それでもあるのですね」
「そうです。このうえない喜びです」
これが婆やの言葉だった。
「そうなのです」
「そうですか。喜びなのですか」
「辛くあっても」
「愛する人との宝を生むのです」
婆やも自然にだ。優しい微笑みになっていた。
「そして愛しい相手を」
「子供は自然に愛しくなる」
「だからですね」

「この上ない幸せを感じるものです」
それがだ。女にとっての出産だというのだ。
「ですから産めるのです」
「真理さんは今その中にいる」
義正はその考えに至った。話を聞いて。
「そうなのですね」
「そしてその幸せはです」
「私もまた共にいるのですね」
「二人の愛の結晶が生まれるのですから」
「では」
婆やの言葉に頷き。そのうえで。
義正はだ。今度はこんなことを言った。
「このことを考えたいです」
「このこととは」
「生まれてくる子供はどちらなのか」
今度は微笑みだ。佐藤に応えたのである。
「このことを考えたい」
「やはりそのことは考えてしまいますね」
「私は個人的には」
「どちらならいいでしょうか」
「やはり。男か」
そちらだというのだ。
「男の子ならいいと思う」
「では旦那様の跡継ぎをですか」
「その子が欲しい」
「そうですか。旦那様はそう思われていますか」
「男なら誰でもそう思う様だな」
男の子を望む。そうだというのだ。
「話に聞くと」
「主人もでした」

ここでまた婆やが話す。
「主人もまたです」
「男の子を望まれたのですね」
「はい、そうでした」
婆やはここでも微笑み話す。
「まずは男の子が欲しいと」
「そう思ってですね」
「そして生まれたのは」
「男の子だったのですか？」
「はい、男の子でした」
そうだったというのだ。婆やの最初の子は。

第二十六話　育っていくものその十三

そうしてだ。さらにだというのだ。
「そしてその後は」
「二人目からはですね」
「女の子ばかりでした」
笑ってだ。そうだったというのだ。
「五人生まれましたが」
「その全員がですか」
「女の子でした」
「では御子息が一人で」
「娘は五人です」
それが婆やの子供達だというのだ。
「ただ。娘のうち二人はです」
「そうですか」
このことを聞いてだ。義正は少し悲しい顔になった。まだ子供の死亡率は高い時代だったのだ。それは戦後まで変わらなかった。
「それでは今は」
「四人です」
子供はそれだけだというのだ。
「そして孫です」
「お孫さん達もおられて」
「誰もが主人と私を慕ってくれています」
「まさに子はかすがいですね」
「ひいては孫もです」
「子供から。全てがはじまり」
そしてだった。そこからだというのだ。
「ですから旦那様は今です」
「その入り口に立っているのですね」

「では期待されて下さい」
不安を抱いてもだ。それ以上にだというのだ。
「奥様がお子様を生まれるのを」
「はい、間も無くですね」
「今にもです」
こうした話を三時間程しただろうか。するとだ。
真理がいる部屋からだ。大きな泣き声が聞こえてきた。その声を聞いて。
義正達は部屋の扉に顔を向けた。そうして。
婆やがだ。満面の、優しい笑みで義正に話してきた。
「おめでとうございます」
「あの声が」
「そうです。産声です」
まさにそれだというのだ。
「お生まれになりました」
「そうですか。私達の子供が」
「お部屋に行かれますか」
婆やはまた義正に尋ねた。
「これから」
「いえ、今は」
「行かれませんか」
「少し待ちます」
そうするとだ。彼は婆やに答えた。
「そうします」
「それはどうしてでしょうか」
「真理さんは今出産されたばかりです」
だからだというのだ。
「ですから今は」
「待たれるのですか」
「医師の方から話があります」

呼ぶ話がだ。それがあるからだともいうのだ。
「ですからそれを待って」
「そのうえで、ですか」
「はい、部屋に入るのはそれからです」
こう婆やに答えるのだった。
「そうします」
「そうですか。わかりました」
婆やはにこりとして義正のその考えに頷いた。そして共にいる佐藤も。
静かに微笑みだ。その笑みで言うのだった。
「ですね。では今はここにいましょう」
「それもまた何か」
「何か？」
「楽しいね」
そうだとだ。義正は佐藤にはこう言ったのである。

第二十六話　育っていくものその十四

「生まれて。その喜びをこうして肌で味わうのは」
「それがですか」
「うん、楽しいよ」
こう答えるのだった。
「心から感じているよ」
「では今は」
「ここにいるから」
また言うのだった。
「声がかかるまでね」
「それでは」
佐藤は今はこう言うだけだった。三人はそこに留まり続けた。そうして。
やがてだ。部屋の扉が開いた。開くその動きはやけにゆっくりと感じた。
その扉が開くとだ。中からだ。
白衣の医師、中年の男が出て来てだ。そうして言うのだった。
「どうぞ」
「部屋の中に入っていいのですね」
「はい、そうです」
医師は穏やかな笑みで義正に答える。
「どうぞ」
「わかりました」
義正は医師の言葉に頷き。それからだった。
部屋の中に入る。そこは洋室でベッドが置かれている。本来は客用の部屋だ。
しかし今は真理の出産の部屋に使っている。その部屋においてだ。
彼は見た。ベッドに横たわる真理の傍らに置かれた小さなベッド

の上にだ。赤子がいるのを。
その赤子を見てだ。彼は言うのだった。
「この子が」
「はい」
ベッドの中の真理がだ。微笑みだ。
そのうえでだ。義正に言ってきた。
「そうです。この子が」
「私達の子供です」
「男の子です」
義正の後ろからだ。医師が答えてきた。
「丈夫な男の子です」
「そうですか。男の子ですか」
「もう産湯は済ませました」
医師は義正にこのことも話した。
「後はよくです」
「この子を見ていいのですね」
「是非そうされて下さい」
医師は声を微笑まさせて彼に告げた。
「奥様と共に」
「わかりました。それでは」
義正は医師の言葉に応え。そうしてだった。
その子に歩み寄る。そのうえでその顔を覗く。その顔を見てだった。
彼はだ。自然にこの言葉を出した。
「目と口、そして鼻は」
「あなたのですね」
「はい、私のものです」
こう妻にも答える。
「間違いありません」
「そして髪と顔の輪郭は」

「貴女ですね」
今度は義正が真理に言った。
「そうですね」
「この子は間違いなくです」
「私達の子供です」
「その子が今産まれました」
このことをだ。真理は今言った。
「私達の結晶が」
「愛の結晶が」
それがだ。今生まれたのである。そのことをだ。
義正は今このうえなく幸せに思っていた。真理と共に。そしてその幸せの中にだ。至上の喜びさえ見出し浸っていたのだった。

第二十六話　　完

２０１１・９・２２

第二十七話　このうえない喜びの後でその一

第二十七話　このうえない喜びの後で

義正はだ。今は仕事の関係で妹と共にいた。
百貨店の中を視察してからだ。こう義美に述べた。
「内装もよくなってきているな」
「そうですね。英吉利風で統一されていますね」
「それが豪奢で紳士的に見える」
「はい、とても」
義美も兄に対して話す。二人は今は義正の執務室にいる。そこでだ。
二人で話している。ソファーに座り紅茶を飲みつつだ。
そのうえでだ。彼女は言うのである。
「他にもエスカレーターとエレベーターもですが」
「あれもだね」
「はい、英吉利風にして正解でした」
「最初は冒険かと思ったけれど」
「お客様はそこにハイカラなものを見られるので」
「ハイカラだね」
「はい、ハイカラです」
それをだというのだ。
「ですからレストランもです」
「トンカツにスパゲティが人気らしいね」
「ハンバーグにエビフライもです」
洋食がだ。人気だというのだ。
「それもかなりです」
「あのレストランも内装を英吉利風にしているけれど」
「英吉利自体は料理は決してよくはありません」

義美はこのことはよくわかっていた。彼女自身が両親の仕事についていってその国に行ったことがあるからだ。だからこそ知っているのだ。

「貴族の食事も庶民の食事もです」

「らしいね。どうも」

「しかしです。日本人が料理すればです」

「それが大きく変わる」

「ビーフシチューやカレーライスも元々は英吉利の料理でした」

カレーは印度から英吉利に入りだ。そして日本に入ったのだ。

「それを日本人の口に合うようにしたのがです」

「僕達が食べているそのカレーだね」

「そうです。ビーフシチューも同じで」

そして他の洋食もだというのだ。

「ハンバーグは独逸のものですが」

「本場では味が違うね」

「独逸人と日本人では舌が違うます」

今度は独逸についての話だ。義美はそれを言うのである。

「例えばナポリタン、スパゲティで人気があるあれも」

「あれもというと？」

「伊太利亜にはないスパゲティです」

そうだというのだ。伊太利亜本国にはないものだというのだ。

「我が国でできたものです」

「そうだったのか」

「はい、日本人の口に合うものにされたものです」

「ううむ、そうだったのか」

「意外でしたか？」

「ずっとナポリのものだと思っていた」

彼にしてもそうだったというのだ。その名前から。

「しかし実は違っていた」

「そうです。日本人が作ったものです」

「他の料理も」
「そうです。洋食はです」
それ自体がだというのだ。洋食そのものが。
「全て日本人の舌に合う様にされています」
「西洋のものにしても」
「そうです。若しも完全に英吉利や伊太利亜、独逸のものにすると」
「かえって駄目だね」
「この百貨店にしてもです」
英吉利風のだ。この百貨店にしてもだというのだ。
「やはりです」
「そうだね。日本だね」
「完全な英吉利ではかえってお客様が落ち着きません」
そうだというのだ。完全にそうだとだ。
「やはりここは日本ですから」
「そうだね。日本だから」
「日本の味でなければなりません」
「忠実に再現し過ぎてもね」
「お客様は喜ばれません」
ひいては商売にならない。そうだというのだ。
「ですから。日本です」
「洋食でも。英吉利風でも」
「はい、日本です」
これはどうしてもだというのだ。

第二十七話　このうえない喜びの後でその二

「そのことは忘れてはいけないです」
「そうだね。ここは日本だから」
「そのことを忘れずにいきましょう」
「うん、本当に」
義正は妹の言葉に確かな顔で頷いた。しかしだ。
ここでだ。義美はだ。兄にこのことを尋ねてきた。
「それでなのですが」
「それで？」
「お兄様にも子供が産まれましたね」
微笑んでだ。話をこのことに変えてきたのである。
「そうでしたね
「うん、そうだよ」
「男の子だとのことですが」
「元気だよ、本当にね」
「それならお名前は」
「義幸にしたよ」
義正も微笑んでだ。その名前にしたというのである。
「最初から決めていた通りね」
「義幸ですか」
「うん。正しく幸せになれるようにって」
「そして正しいはですね」
「人として正しいという意味でもあるから」
「我が家の言葉ですね」
義美にもあるだ。それだというのだ。
「我が家に代々入っている」
「そう。僕にも兄さん達にも」
「そして私にも」

「人として正しくなる」
だから義だというのだ。八条家にとって義とはそれだけの意味がある言葉だということもだ。二人は含みそのうえで今話をしているのだ。
「あの子にもそうなって欲しいから」
「それと共に幸せに」
「そう思ってね」
それでだ。その名前にしたというのだ。
「妻ともよく話し合って」
「いいことです。そして」
一呼吸置いてからだ。義美は微笑みのまま兄に答えた。
「いい名前です」
「義美も気に入ってくれたね」
「私は義という言葉が好きです」
正しい、それがだというのだ。
「それもありますが何よりです」
「幸せがだね」
「好きです。その意味も言葉も」
だからだとだ。兄に話すのである。
「お兄様はまことに」
「いい名前を。子供につけたね」
「そう思います。ではこれからはですね」
「うん、妻と三人でね」
その我が子を入れてだ。三人でだというのだ。
「幸せになるよ」
「頑張って下さい。家庭のことも」
「仕事のこともね」
「我が国はこれからも発展していきます」
明治維新からそれは続いている。日露戦争の後の財政問題があったがそれでもだ。日本の成長は依然として続いているのである。

そのことを踏まえてだ。義美は兄に話すのである。
「ですから」
「義美もその為にだね」
「女の身ですが」
「いや、もうそんなことを言う時代じゃないよ」
兄は妹のその女だからという言葉は打ち消させた。そうしてだ。
このことをだ。彼女に話したのである。
「最近女性の権利を主張する人もいるしね」
「そうですね。文壇でも確かな人が出ていますし」
「与謝野晶子。あの人は凄いよ」
日露戦争からだ。この女流歌人は知られてきていた。

第二十七話　このうえない喜びの後でその三

「確かな考えを持っている人だからね」
「しかも情熱家で」
「自分の弟さんのことを思いながら我が国の勝利を願ってね」
後世勘違いされたが実は与謝野晶子は日露戦争自体は支持していた。あの戦争が日本にとってどういった戦争はわかっていたからだ。
「そうして与謝野鉄幹先生ともね」
「駆けていって結ばれた」
「ちょっとやそっとのことじゃできないよ」
義正は感嘆を込めて彼女のことを話した。
「いや、本当にね」
「そうですね。誰もがあの人の様にはなれません」
「けれどそうした人もいて」
女性全体について話していく義正だった。
「最近は違ってきているから」
「だから私もですか」
「そう。女だからといった言葉はね」
それ自体が最早というのである。
「時代にそぐわないよ」
「これからは女性もですね」
「男と同じdあけ働く社会にならないとね。そういえば」
「そういえば？」
「うん、天理教という宗教があるけれど」
不意にだ。彼はこの宗教の話もはじめた。
「あの宗教は教祖は女の人だったね」
「確か奈良のですね」
「そうだったね。女の人がはじめた宗教か」
「また随分と変わった宗教ですね」

「うん、面白そうだね」
こんなことも言う彼だった。
「一度話を聞いてみるかな」
「そうされるのですか」
「八条町にも来ているみたいだし」
「では一度ですね」
「おかしな宗教でもないらしいし」
そうしたことも踏まえてであった。
「それならね」
「ではその様にされて」
「そうするよ。じゃあお昼になったし」
「洋食を召し上がられますか」
「そうだね」
妹の祖の誘いにだ。兄はにこりと笑って応えた。
そのうえでだ。席を立ってこう言った。
「じゃあ何を食べようかな」
「カレーはどうでしょうか」
「カレーを」
「はい、それにです」
義美はカレーだけでなくだ。もう一つメニューを勧めてきた。
「ハンバーグか。若しくは」
「若しくは、か」
「カツレツはどうでしょうか」
この二つを言ってきたのだ。
「無論サラダもです」
「それもか」
「はい、どうでしょうか」
微笑んで兄に提案する。
「カレーとです」
「サラダ、そしてか」

「ハンバーグかカツを」
「どちらがいいかだな」
「どちらも人気メニューです」
そのだ。ハンバーグもカツレツもだというのだ。
「ですからここは」
「そうだな。それではだ」
「どちらにされますか？」
「ハンバーグもいいがここは」
この言葉で決まりだった。おおよそ。
「カツレツにしようか」
「それにされますか」
「そうしよう。カツだ」
「はい、それでは」
義美も頷きだ。そのうえでだ。
二人はそのレストランに向かった。そこは白いテーブルかけが目立ち窓ガラスの大きい店だった。内装は言うまでもなく洋風だ。

第二十七話　このうえない喜びの後でその四

客も多く入っている。その中に入るとだ。
すぐにだ。店のオーナーが二人を出迎えて一礼してだ。一番いい席に案内しようとする。しかしそれはだ。義正が笑って止めた・
「いえ、そこまでは」
「宜しいのですか？」
「僕達は客として来ています」
だからだというのである。
「そうでなくとも。特別扱いはです」
「いいのですか」
「そうしたことは好きではありません」
「私もです」
義正だけでなくだ。義美もそうだと言った。
「ですから」
「普通に御願いします」
「左様ですか」
「例え誰であろうとも。流石に皇族の方々はそうはいきませんが」
国家元首の方々についてはだと。ここではユーモアを交えてだった。
「しかし僕にはです」
「私もです」
「特別扱いはです」
「それはしないで下さい」
「わかりました」
二人からの言葉を受けてだ。オーナーもだ。
納得した顔になりだ。頷いてだった。
店の中に戻った。二人はそのまま空いている席に座り。そのうえでだ。

カレーとサラダ。カツレツを注文した。それからだ。
その三つのメニューを食べる。まずはサラダ、そしてカツだ。
カツを食べつつだ。義正は妹に話した。
「カツレツとカレーだけれど」
「合いますね」
「うん、ハンバーグとカレーもだけれど」
カツもだ。そうだというのだ。
「合うね。カレーのルーと」
「はい、とても」
「カレーはかなり独特なものだけれど」
外見だけでなく味もだ。そうだというのだ。
「けれど結構色々なものと合うね」
「中に入れるのも牛肉だけではなく」
「他にもあるね」
「豚肉や鶏肉にも合います」
そうした肉ともだというのだ。
「そしてソーセージともまた」
「本当に色々なものと合うね」
「他に魚介類とも合うでしょうし」
「魚介類とも」
「そうです。鍋と同じで」
カレーもまただというのである。
「色々なものと合います」
「ではカレーのメニューは」
「それも考えていくといいかも知れません。いえ」
「いえ？」
「カレーのお店も面白いかも知れませんね」
微笑んでだ。義美は兄にこんなことも言った。
「支那そばの店がある様にです」
「カレーの店も」

「どうでしょうか。そこには様々な種類のカレーがあるのです」
「こうした牛肉に人参、玉葱、そして馬鈴薯だけでなくて」
「他の肉や材料を入れたです」
そうしたカレーもだというのだ。
「それは如何でしょうか」
「考えてみると。面白いね」
義正は実際に少し考えてから笑顔で答えた。
「では一度実際にそうした色々なカレーを作ってみて」
「はい、そのうえで」
「店を出してみようか」
「そしてその店はです」
「八条財閥で経営するんだね」
「これも利益になると思います」
義美は今度は経営側の視点から話した。そしてだ。
この視点からも話すのだった。
「カレーは素晴らしい食文化でもありますし」
「素晴らしい。美味なだけではなくて」
「明治からはじまった我が国の食文化の象徴の一つです」
こうも言うのである。

第二十七話　このうえない喜びの後でその五

「ですから文化を広めるうえでも」
「カレーのお店を」
「考えたのですが」
「念入りに検討しようか」
義正はそのカレーを食べながら真剣な顔で妹に述べた。
「それならね」
「そうして頂けますか」
「面白い考えだからね。カレーは皆が好きだからね」
「支那そばと同じく嫌いな人は少ないでしょう」
「確かに。皆食べるからね」
「カレーには独特の魔力があります」
義美はこうまで言った。カレーに対して。
「癖が強いですがその癖がです」
「かえって楽しみになるね」
「はい。ハヤシライスやオムライスもいいですが」
しかしだ。それ以上にだというのだ。
「カレーにはです」
「可能性があるね」
「無限の可能性があります」
そこまでのものだというのだ。カレーは。
「日本人に馴染んでいますから」
「洋食の中で」
カレーを洋食に区分して。そのうえでの言葉だった。
「カレーが一番日本人に馴染んでいるかな」
「そうですね。ハンバーグやエビフライよりも」
「まずはカレーだね」
「はい、カレーです」

それが第一だというのだ。カレー以上にだ。
「日本人に最も馴染んでいると思います」
「海軍でも食べているしね」
義正はこのことも話した。
「だから余計にね」
「海軍の存在が大きいと思います」
「カレーについては」
「他の洋食もそうですが」
海軍士官の食事は洋食だ。そのことも大きかったのだ。
そしてカレーはだ。海軍では曜日を教える為にも一週間に一度食べられていたのだ。それ以上に栄養をかなり摂れるからだ。それでなのだ。
カレーを食べる。それが臣民の間にも広まりだったのだ。
「カレーはとりわけですね」
「それでそのカレーを軸にした店をだね」
「考えています」
「いいと思うよ。ただ」
「ただ？」
「カレーだけじゃなくて」
「それだけでなくですか」
義美は兄のその言葉に応えた。その兄が言うことは。
「珈琲も用意したらどうかな」
「珈琲もですか」
「海軍は確かにカレーだね」
このことは絶対だった。カレーはだ。
しかしそれと共にだというのである。珈琲の存在もどうかというのだ。
「けれどそれと一緒にね。海軍では珈琲も飲んでいるからね」
「カレーに珈琲ですか」
「丁度デザートだし」

カレーも食べ終えた。それならばだった。
「そのついでにね」
「珈琲を頼んで、ですか」
「飲んでみようか。珈琲を」
「それでは」
こう話してだった。実際にカレーの後で珈琲を飲んでみる。その味は。
普通に飲む珈琲とはまた違った美味しさがあった。その美味しさを味わってだ。
義美はだ。満足した笑みを浮かべてこう言った。
「いいですね」
「そう。カレーの後の珈琲はね」
「喫茶店で飲む珈琲とはまた違った味がありますね」
「どうかな、それで」
義正はあらためて妹に尋ねた。

第二十七話　このうえない喜びの後でその六

「カレーだけでもいいけれど」
「珈琲もですね」
「一緒に合わせて出すのはね」
「いいと思います」
微笑みだ。義美は答えた。
「とても」
「そう。いいんだね」
「後。デザートのこれですが」
「アイスクリームだね」
「これも西洋から入って来たものですが」
その白く丸い形のアイスに銀のスプーンを入れながらだ。義美は嬉しそうに話す。
「美味しいですね」
「西洋のお菓子もね」
「これもまたいいですね」
「八条百貨店でも取り入れているし。それに」
「それに？」
「和菓子屋で山月堂という店があるね」
神戸、とりわけ八条町では有名な店である。上品な味の和菓子で。
「そこでも近々洋菓子を作るつもりらしいね」
「山月堂でもですか」
「そう、あの店でもね」
作られようとしているというのだ。
「和菓子のお店だけれどね」
「同じお菓子だからですね」
「洋食は確実に我が国に入ってきている」
「支那料理と共に」

「そう、あの支那料理もまたそうだね」
「今我が国には様々なものが入って来て定着してきています」
西洋からだけでなく支那からも。まさにそうした時だった。
「ですからそうしたものを全て取り入れてです」
「我が国は発展していって」
「そして八条財閥も」
「はい、発展していこう」
こうした話をしてだった。彼等は。
未来を見つつだ。西洋から日本に入ったものを味わうのだった。
その後でだ。
義正は妹と別れてそれぞれの仕事に戻った。それが終わりだ。
屋敷に帰った。そこには真理と。我が子がいた。
まずは妻に会いそれから小さなベッドに寝ている子を見てだ。それでこう思ったのである。
「幸せとは」
「はい？」
言葉に出してしまっていた。それを聞いてだ。
真理がだ。彼に問うた。
「今何と」
「いえ、幸せのことですが」
「そのことですか」
「はい、今がそうなのですね」
微笑んでだ。幸せのことを話すのだった。
「今私達がいるこの状況こそが」
「幸せですか」
「そう思います」
こう妻にも話したのだ。
「確かに貴女は」
「病のことですね」
「はい、しかしそれでも」

「そうですね。人は何時か必ず死にますから」
こう言ってだった。二人は。
今度は我が子を見た。二人でだ。それからこう話すのだった。
「その幸せこそがですね」
「この子ですね」
「そうですね」
こう話すのだった。
「まさにその通りです」
「この子がいれば」
義正がまた言う。
「私達は心から幸せになれます」
「この子の名前はよかったですね」
「あの名前にしてですね」
「はい、とても」
笑顔でだ。義正はまた真理に答えた。
そしてその彼女にだ。義正はまた話す。

第二十七話　このうえない喜びの後でその七

「幸せは正しくありたいですね」
「そうですね。では最後まで」
「幸せの中で共に」
「生きていきましょう」
こうした話をしてだった。二人は。
二人の子供、義幸を見て話すのだった。その二人にだ。
佐藤が来てだ。そうしてこんなことを言ってきたのである。
「義幸様のことですが」
「うん、何かあったのかな」
「どうかしたのですか？」
「はい、そのことですが」
佐藤だけでなく婆やも来てだ。それで二人に言ってきたのである。
「奥様のお身体が弱いので」
「だからですね」
「今はこちらでお乳を差し上げています」
そうしているのだ。真理は病の為身体が弱くだ。そうしたものは出ない。それで婆やの方で乳を用意してだ。義幸にあげているのだ。
そのことについてだ。婆やは言うのである。
「これからもそうしましょうか」
「私は申し訳ありませんが」
暗い顔でだ。真理は述べた。
「そうしたことはできませんので」
「だからですね」
「はい、御願いします」
こう婆やに頼むのだった。そしてだ。
その彼女にだ。今度は佐藤が話す。
「ではこのまま西洋から取り入れた粉ミルクで宜しいですね」

「はい、それで」
「乳ならですが」
婆やもここで話す。
「私が乳母を知っているのですが」
「それも考えましたが」
どうかとだ。ここで言ったのは義正である。彼はこう佐藤と婆やに話した。
「しかし。それもどうかと思いまして」
「乳母はお嫌いですか」
「嫌いではないです。ただ」
「それでもですね」
「どうも他の方のお世話になることはです」
好きになれないというのだ。それでだ。
さらにだった。こんなことを言ったのである。
「それに」
「私の病がありますので」
真理がここで言った。
「労咳ですから」
「だからですか」
「乳母の方も来られないでしょうし」
それが為に真理も乳が出ないのだ。やはり病は彼女を確実に蝕んでいた。
しかもだ。彼女は近頃だった。
「この子を産んでからあまりです」
「御身体が優れないのですね」
「困ったことに」
「無理をしたのでしょうか」
暗い顔になりだ。義正が言った。
「やはり」
「いえ、それは」

「あまり」
佐藤と婆やがだ。義正の気持ちを察して声をかけた。
「御気になさらずに」
「そういうことは」
「そうですね」
そして彼もだ。二人の言葉を受けてだ。気を取り直した顔になりだ。
そのうえでだ。少し明るい顔になって述べた。
「ではそのことは」
「あまり御考えにならずに」
「幸せを楽しまれて下さい」
「はい」
頷いてだった。こう言ったのである。
そしてだった。あらためて二人の子供を見てだ。笑顔になったのである。
その中でだ。真理もだった。
笑顔になりだ。こう言ったのである。
「では今夜ですが」
「ご夕食のことですね」
「何でしょうか。今晩は」
「はい、支那料理になります」
それになるとだ。佐藤が答えた。
「豚肉に野菜を多く使ったです。それに」
「それに？」
「漢方薬も多く使われています」
それもだというのだ。料理に使われているというのだ。

第二十七話　このうえない喜びの後でその八

「ですからお楽しみ下さい」
「漢方薬もですか」
「シェフが考えてくれました」
これはシェフの考えによるものだというのである。
「高麗人参だけでなく他の漢方薬もふんだんに使っています」
「奥様のことを考えてくれてです」
婆やは真理を見て話す。
「シェフがそうしてくれたのです」
「有り難うございます」
「支那料理は医食同源と聞いています」
真理にだ。婆やはこうも話す。
「ですから」
「医食同源ですか」
「それが支那料理です」
「あの国には長い歴史があります」
ここで義正も言った。
「その中で漢方医学は発展していき」
「料理と一つになったのですね」
「はい」
その通りだとだ。義正は真理に話した。
「ではその料理をです」
「今宵はですね」
「召し上がりましょう。そして」
真理の身体を気遣って。そうして言う言葉だった。
「御心を安らかにされて下さい」
「わかりました」
こうした話をしてだ。そしてだ。

その夕食を楽しげに採る。その味は。
確かにだ。美味だった。その支那料理を味わいながら真理は言った。
「この豚肉も」
「違いますね」
「はい、よく煮られていて」
豚バラ肉は大きく切られそのうえで生姜等と共に何時間も煮られていた。その色は奇麗な茶色だ。その豚肉を実際に食べてみてだった。
「柔らかいですし」
「味もいいですね」
「はい、とても」
真理は顔を綻ばせて話す。
「しかもそれでいてですね」
「身体にもいいのです」
「豚肉だけではないからですね」
「中に多くの漢方薬が入っています」
「確かに。この生姜も」
生姜はかなり使われていた。しかもだった。
その豚バラ煮込みだけでなくだ。八宝菜もあった。その八宝菜もだった。
中に様々な漢方薬がある。それも食べて話すのだった。
「八宝菜も」
「漢方薬がありますね」
「はい、その宝庫です」
それが二人が食べている支那料理だというのだ。
「ですからこの料理を召し上がられて」
「それとお粥もですね」
「お粥にもです」
支那風の粥もだった。そこにもだった。

高麗人参やそうしたものが入っていた。その粥もだった。
「入っていますので」
「この味はいいですね」
「まことに」
こう話してだった。彼等はその味を楽しむ。身体への滋養だけでなくだ。
最後には果物も出た。それは林檎だった。これだけは支那風ではない。
その林檎についてだ。義正はこう真理に話した。
「林檎もです」
「林檎もですか」
「滋養にいいのです」
そうだというのだ。林檎もだ。

第二十七話　このうえない喜びの後でその九

「独逸では林檎を食べていれば医師はいらないとまで言われているそうです」
「お医者様がですか」
「はい、いらないとまでなのです」
言われているというのだ。
「ですからどうかです」
「この林檎もですね」
「召し上がって下さい」
「身体にいいものを食べていって」
「ゆっくりと過ごされて下さい」
この林檎もだった。義正、そして周囲の真理への気遣いだった。真理はその林檎も食べた。そこにも美味しさと心があった。このことはまたあったがそのことは二人は知らずそしてその時の彼等はこの時の彼等でもなくだ。この話はここで無意識の中に入り繰り返されることになる。しかし今は。
そうしたものを食べ心を受けて暫く経った。季節は冬になっていた。
神戸も銀世界になった。その雪を見て真理は共にいる婆やに話した。
「この雪も」
「雪もですか」
「いいものですね」
微笑みだ。真理は婆やに言うのである。
「一面が。白く化粧されるのも」
「そうですね。冬は厳しい季節ですが」
「それでもその中には」
「雪もあります」

その一面を化粧するそれがだというのだ。
「ただ厳しいだけではありませんね」
「はい、本当に」
こう話しながら二人は雪、庭を白く染め上げた雪を見ている。木も芝生も今は銀世界だ。その銀世界を見ながら話をするのである。
その中でだ。婆やが真理に話した。
「ただ。奥様」
「何か」
「こうして外で見ると冷えます」
二人は今その庭に出て見ているのだ。だがそれはだというのだ。
「ですから。お屋敷の中に入られて」
「そうしてですね」
「その中から見ましょう」
銀化粧の庭を。そうしようというのだ。
「それでどうでしょうか」
「そうですね。ではそうしましょう」
「お茶も用意してあります」
婆やはそれもあると話す。
「ですから」
「はい、それでは」
こう話してだ。二人は屋敷の中に戻ろうとする。しかしだった。
真理は庭に背を向けたその時にだ。不意に咳込んだ。そうしてだ。
幾度も大きな咳をした。右手で口を抑えるがそれでも出てだ。遂には。
これまでになく血を吐いた。それは口を抑えている右手からも溢れ出る。そのまま下に落ち白い雪を染め上げていく。その真理を見て。
婆やは蒼白になりながらもだった。すぐにだ。
屋敷に向かいだ。こう叫んだのだった。
「誰か。誰か来て下さい」

こう告げてすぐにだ。蹲った真理に駆け寄りだ。
その身体を抱く様にして寄り添い。こう言ったのである。
「大丈夫です。心配はいりません」
「ですが」
「大丈夫です」
強張った顔でやはり蒼白になっている真理に言ったのである。

第二十七話　このうえない喜びの後でその十

「もうすぐ人も来ます。それに」
「それに？」
「旦那様も戻られます」
義正もだ。戻って来るというのだ。
「ですから。お気を確かに」
「そうですね。まだ」
「はい、まだ大丈夫です」
婆やは切実な顔で真理に話す。
「何もお気にされることはないのです」
「では今は」
「まずはお口やお手を」
言いながらだ。手拭を真理に差し出した。
「これで」
「有り難うございます。では」
真理もだ。その手拭を受け取りだ。すぐに口と手を拭いた。
それからだ。僅かに落ち着きを取り戻してから婆やに話した。
「これからは」
「まずはお屋敷に入りましょう」
「そうしてその中で、ですね」
「お休み下さい。すぐに人が来ます」
こう真理に告げていく。
「ですから」
「はい、それでは」
「とにかく。御気を確かに」
真理に言うのであった。
「では」
「ええ・・・・・・」

こう話してだった。真理は婆やに連れられて屋敷に戻った。そうしてだ。

屋敷の者達に看病される。そのことを聞いてだ。

義正もすぐに戻って来た。そうしてベッドに横たわる真理に尋ねた。

「御気持ちは確かでしょうか」

「はい、何とか」

こうだ。真理は青い顔で話した。

「落ち着きました」

「そうですか。それは何よりです」

「ですが」

青い顔でだ。安堵した義正に話すのだった。

「お医者様に言われました」

「何とでしょうか」

「出産の後で体力が落ちているそうです」

出産はかなりの力を使う。だからだというのだ。

「それで」

「それで、ですか」

「病状も進行しているそうです」

こうだ。義正に話すのだった。

「それで私は」

「真理さんは」

「詳しい診察を受けないとはっきりとわからないそうですが」

それでもだというのだ。

「私はもう」

「長くはですか」

「そうかも知れないと言われました」

そう言われたというのだ。医師に。

「ですから後で」

「暫くしてからですね」

「病院に行かないといけません」
「そうですね。そうして」
「診察を」
その結果は薄々わかっていた。それでもだった。
二人はそれでもだ。診察を受けることも決意した。だがこれはだ。
二人の幸せの時の。その終わりのはじまりであることも感じ取っていた。

第二十七話　完

２０１１・９・２８

第二十八話　余命その一

第二十八話　余命

真理は義正と共に病院に行った。真理の身体が落ち着いてから。
そのうえで病院に行き診察を受けた。その結果は。
「残念ですが」
「そうなのですか」
「あと一年です」
真理の余命はだ。それだけだというのだ。
「奥様はあと一年です」
「そうですか。一年ですか」
「病の進行がとにかくです」
どうかというのだ。その進行が。
「予想以上に進んでいます」
「それはやはり」
義正がその医師の診察に問うた。
「出産のせいでしょうか」
「はい、それが大きいです」
実際にそうだとだ。医師も答える。
「そしてそれと共に」
「まだあるのですか」
「病の進行自体が早かったです」
真理自身のだ。それがだというのだ。
「ですから。もう」
「そうですか」
「私達はこれで」
「はい、あと一年です」
一年しかだ。二人は共にいられないというのだ。
「残念ですが。ただ」

「それでもですね」
「その一年の間。お二人で、です」
医師もだ。義正と真理に話した。
「どうかその間」
「わかりました」
「そうさせてもらいます」
二人も頷きだ。そうしてだった。
共にだ。病院を出てだった。
二人で義正が運転する車の中で話をした。真理は助手席にいる。
その中でだ。義正が言った。
「急ですね」
「本当に」
俯いてだ。真理は義正に応えた。
「思いも寄りませんでした」
「そうですね。ただ」
「ただ？」
「一年です」
義正が言うことはこのことだった。時間のだ。
「一年あります、まだ」
「その一年の間ですね」
「共にいましょう」
これが義正のだ。真理への言葉だった。
車は神戸の町の中を進んでいく。神戸の街並みはいつもと変わらない。しかしだ。
二人は今はその街並みを見ずにだ。それで話すのだった。二人で。
義正はだ。その中で真理に言った。
「一年の間」
「そうするべきですね」
「それしかないと思います」
選択肢は一つ、そうだというのだ。

「ですから」
「そうですね。一年なら一年で」
「共に過ごしましょう」
また言う義正だった。
「是非共」
「わかりました。それでは」
真理もだ。選択肢は一つしかなかった。そして二つの選択肢は同じだった。
同じ選択肢を決めてからだ。二人はだった。
屋敷に着いた。今は冬があるだけだ。雪は消えている。
その今は枯れて風に揺れている丹羽を見ながらだ。義正は話した。
「せめてですね」
「せめて？」
「一年なら」
その一年に。どうかというのだ。
「四季を全て味わいたいですね」
「二人で、ですね」
「はい、二人で」
こう言うのだった。その冬の庭の中で。

第二十八話　余命その二

「そうするのですね」
「この一年は」
「そうですね。一年の間」
ここでだ。真理はだ。
義正にだ。こんなことを言った。
「できればです」
「できれば？」
「桜を見たいです」
こう言ったのである。
「桜を。春になり」
「そしてそこからですね」
「夏、秋、そして冬も見て」
今の冬ではなくだ。次の冬もだというのだ。
「そうしてです」
「次の次の春もですか」
「義正さんと一緒に迎えたいです」
真理はこうだ。義正に話した。
「桜を見て」
「一年が過ぎてしまいますが」
「それでもです」
過ごしたいというのだ。一年をだ。
こう話してからだ。真理はだ。
少し諦めの顔になりだ。義正にこんなことも話した。
「一年を過ぎて生きるのは難しいですね」
「お医者様はそう言っていましたね」
「そうでしたね」
「ですが私は」

それでもだとだ。真理は話していく。
「その一年を過ぎてです」
「そうしてですね」
「はい、桜を見たいです」
次の次の春の。その桜をだというのだ。
「どうせならです」
「そうですね。ではです」
「それでは？」
「少しだけ頑張ってみましょうか」
真理に話したのだった。
「少しだけです」
「一年を過ぎてもですか」
「二人で」
一人だけではなかった。ここでも。
「二人で頑張ってみましょうか」
「私だけではなくですね」
「二人で。桜を見たいのですね」
「はい」
その通りだとだ。真理はこくりと頷いて答えた。
「私は。義正さんと」
「それならです。真理さんお一人のことではないです」
「二人で、ですね」
「はい、二人で見るものなら」
それならだと話してだった。そしてだ。
このこともだ。真理に話した。
「それにいつも二人だとお話しましたね」
「そうですね。それなら」
「余計にです。私達はいつも二人ですから」
だからだ。余計にだというのだ。
「ですからそうしましょう」

「わかりました。それなら」
真理もだ。義正の言葉にこくりと頷いたのだ。再び。
そうした話をしてだった。真理はだ。
桜についてだ。こんなことも言ったのだった。
「桜は確か」
「桜は？」
「はい、西行法師ですが」
かつての歌人だ。元々は武士だったが出家して僧侶になりだ。歌人としても名を馳せる様になったのだ。真理はその歌人のことを話したのである。

第二十八話　余命その三

「あの人は桜の下で死にたいと言われましたね」
「そうでしたね」
「はい、ですから」
それでだとだ。真理は話す。
「私も。できれば」
「桜の下で、ですか」
「どうせ死ぬのならそうしたいです」
この望みをだ。今話したのである。
「これは我儘でしょうか」
「そうは思いません」
「違いますか」
「はい、それはです」
「それは？」
「夢です」
それだというのである。
「夢ですから」
「我儘ではありませんか」
「夢と我儘は違います」
義正はこのことをだ。真理に話した。
「我儘は利己というものですが」
「夢はですか」
「夢であるのならそれは利己ではありません」
「では何になるのでしょうか」
「希望です」
それだとだ。真理に話したのである。
「それは希望になります」
「夢は希望ですか」

「そうです。希望ですから」
「いいのですね」
「人は夢があるから生きられます」
ひいてはだ。人そのものについての話もしたのである。
「ですから。私達はです」
「桜を。最後に見て」
「そうしましょう」
こう述べたのである。
「それでどうでしょうか」
「では。私は」
真理は考える顔になりそれからだった。
「夢を持ちます」
「はい。桜を二人で見て」
「最後にそうしたいです」
義正に言ったのだった。
「それを夢にします」
「そうしましょう」
「是非共」
「ではです」
ここまで話してだった。義正も。
一呼吸置いてからだ。真理に話してきた。
「桜ですが」
「桜は？」
「人を待つ花です」
そうした花だと話すのだった。
「そうしてくれますから」
「待ってくれるのですか」
「人は春を待ちますね」
このことからだ。彼は離した。
「ですから桜もです」

「人を待ってくれているんですか」
「そうです。ですから私達もです」
「その桜に向かってですね」
「次の次の春を目指しましょう」
これが義正が今真理に話すことだった。
「是非共」
「それではですね」
「桜を。その桜を」
どうするか。二人で話していく。
「見ましょう」
「私達を待ってくれている花を」
こう話してだった。二人は今決意し約束したのだった。

第二十八話　余命その四

その約束の中でだった。二人は。
今は屋敷の中に戻りだ。そのうえでだ。
佐藤や婆や、それに他の屋敷の者達にだ。医師に言われたことをありのまま話した。
そのことを受けてだ。まず婆やが言った。
「そうなのですか」
「はい」
静かにだ。真理は婆やの言葉に応えた。
「そうです」
「一年ですか」
「そしてその間です」
「御二人で過ごされるのですね」
「そしてその一年の後にです」
さらにだとだ。真理は婆やにだ、このことを話した。
「私達は最後にです」
「桜をですか」
「見ようと思っています」
そうだとだ。婆やに話したのである。
「そう考えています」
「わかりました」
目を閉じて暫し考えてからだ。婆やは真理に答えた。
「では私もです」
「婆やも」
「最後の最後までです」
どうするかとだ。真理に話したのである。
「共にいさせてもらいます」
「有り難うございます」

「今の冬から春になり夏になり」
「そして秋になりまた冬になりですね」
「一年が過ぎ春になり」
そしてだ。その春にだというのだ。
「二人で桜を」
「一年が過ぎても」
こう話していく。そしてだった。
真理がだ。白いながらも決意した顔でだ。婆やに話した。
「私は春を迎えたいです」
「一年、長いですね」
今の真理にはそうだと。婆やは話した。
「しかしそれでもですね」
「私はその時まで生きたいのです」
二人で桜を見る、その時までだというのだ。
「そう決めました」
「わかりました」
今度応えたのはだ。佐藤だった。
彼はその澄んだ顔に確かなものを宿らせながらだ。真理に話した。
「では及ばずながら私も」
「有り難うございます」
「そうさせてもらいますので」
こう話したのである。そしてだ。
ここでだ。義正も言った。
「人は生きようと思えば寿命もです」
「そうですね。延ばせますね」
「何とか」
「ですから」
それでだとだ。彼は言うのだった。
「私達はその一年を過ぎてもです」
「桜を見る為に」

「春のその桜を」
桜、それは即ち命の息吹だった。
その息吹を見てからだ。二人は話すのである。
「見ます」
「では私達はです」
シェフ、中年の口髭の彼がだ。優しい笑顔で述べてきた。
「その為にです」
「その為にですね」
「美味しくて身体にいいものを用意しておきますので」
そうするというのだった。彼等は。
「存分にお召し上がり下さい」
「是非です」
「たんとお召し上がり下さい」
他のシェフ達もメイド達もだ。二人に話してきた。やはり優しい笑顔で。
「残されては駄目ですよ」
「例えどんな食事でも」
「そうですね。何があろうとも」
真理もだ。笑顔で応えた。

第二十八話　余命その五

「春を迎える為に」
「まずは食べることからです」
シェフは真理に話した。
「だからです」
「ええ。ですから」
「これからは一層腕によりをかけて作ります」
味だけでなくだ。滋養もだというのだ。
「ですから御期待下さい」
「そうさせてもらいます」
「では」
義正も言いだ。屋敷の中でもだ。二人は包まれたのだった。
そしてその中でだ。実際にだった。
義正は真理と夕食を採っていた。そのメニューはだ。
よく焼かれた羊の肉にだ。大蒜や人参が添えられている。サラダにはレタスだけでなく海草やラディッシュ等もふんだんに入れられている。
そしてスープにはだ。様々な野菜が豊富にある。そうしたものを食べながらだ。
義正がだ。真理に話してきた。
「羊はどうでしょうか」
「この羊はラムですね」
「はい、子羊です」
それだというのだ。
「匂いがありませんね」
「とても食べやすいですね」
「それだけではなくです」
まだあるというのだ。

「羊は身体にいいので」
「滋養にいいのですか」
「はい、そうです」
そうだというのだ。このマトンは。
「蒙古がありますね」
「草原のあの国ですか」
「はい、あの国ではこの羊か乳製品だけしかありません」」
「そうしたものだけで生きられるのですか」
「乳製品は言うまでもありませんが」
その栄養はというのだ。
「ですがそれと共にです」
「この羊の肉もですか」
「栄養があります。ですから」
それでだとだ。義正はフォークとナイフを操りそのラムを食べながら真理に話す。
「召し上がって下さい」
「ではもう一枚ですね」
「召し上がられますか？」
「はい」
そうするとだ。真理は微笑んで答えた。
「そうさせてもらいます」
「食べることです」
何につけてもだと。義正はシェフ達と同じことを言った。
「そこから全てがはじまりますから」
「一年も」
「一年は長いです」
こんなこともだ。彼は話した。
「ですからその長い時間を過ごすにはです」
「まずは食べることですね」
「そしてそれから桜を見ましょう」

ここでもだ。やはり桜だった、
「そうしましょう」
「そうですね。まずは冬を過ごし」
「最初の春に桜を見ましょう」
一歩ずつだった。今度はこう話す義正だった。
「しかしまずはです」
「まずはですね」
「冬を楽しみましょう」
今のだ。この季節をだというのだ。
「冬には冬のよさがあります」
「そうですね。寒さだけではなく」
「雪もあり。それに」
さらにだ。冬にあるものはだというのだ。

第二十八話　余命その六

「その他のことも見ましょう」
「はい、それではこの冬を」
こう話してだった。二人はだ。
まずは食べそのうえでだ。冬を過ごすのだった。
冬にあるのは雪だけではなかった。無論それもある。だがそれ以外にもだった。
二人は年末にだ。神戸の商店街を歩いた。そこは。
「さあ安いよ安いよ」
「餅はこっちだよ」
「カズノコはどうだい？」
「おせちの材料あるよ」
こうだ。店の者達が口々に客達に言っていた。商店街はいつも以上にごった返していてだ。人の呼び声や笑顔で賑わっていた。
そういったものを見てだ。真理は笑顔で共にいる義正に話した。
「冬で寒い筈ですが」
「それでもですね」
「はい、暑いです」
その暑さをだ。笑顔で受け止め言ったのである。
「とても」
「そうですね。寒いというのにです」
「ここは暑いのですね」
「この時期のこの場所はこうなのです」
「必ずこうなるんですか」
「はい、人で一杯になって」
そしてだというのだ。さらに。
「多くの人が色々なものを買います」
「そうして年末と年始に備えるのですね」

「その通りです。その中で、です」
その中でだ。義正は言うのだった。
「皆動いているのです」
「年末や年始は忙しいものですが」
「確かに忙しいです。ですが」
「それでもですね」
「ここは楽しいですね」
「はい」
その通りだとだ。真理は笑顔で答えた。
「人は多いですがそれでも」
「正直ここに入るのはです」
義正は今の真理を見てだ。少しだが複雑な顔を見せた。
そのうえでだ。彼はこんなことを言ったのである。
「あまりよくないとも思ったのですが」
「私にとってね」
「あまりに人ごみが多くまた騒がしい場所です」
それが真理の労咳にとってよくないのは自明の理だ。しかしなのだ。
「ですがそれでも」
「それ以上にですね」
「貴女の御心によいと思いましたので」
「心が弾みますね」
ここでだ。真理も言った。笑顔で。
「ここにいるだけで」
「活気は見る人の心も活かします」
義正は言った。
「だからこそです」
「心が活かされるからこそ」
「そして冬の風物詩でもあります」
日本のだ。まさにそれだというのだ。

「そう思ってです」
「それでだったのですね」
「お楽しみ下さい。それに」
「それに？」
「私達も買いましょう」
微笑んでだ。買い物もどうかというのだった。
「実は婆やさん達に許しを得ています」
「お餅やおせちの材料を買うことを」
「私達二人の分だけですが」
「そして買った材料をですね」
「シェフが料理してくれます」
そのだ。おせち料理にだというのだ。
「ですからここはです」
「二人で買い物を」
「さて、まずはお餅にしましょう」
正月に欠かせないだ。それを最初にだというのだ。
「餅屋はあちらです」
「こちらですね」
「はい、こちらです」
案内されたのは商店街の中にあるその餅屋だ。店の前は客でごった返している。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9860r/

儚き想い、されど永遠の想い

2011年11月22日03時12分発行